
恋姫世界で二人旅

ものぐさ兄さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫世界で二人旅

【Nコード】

N5697X

【作者名】

ものぐさ兄さん

【あらすじ】

大谷 保^{おわたにたもつ}と上尾 司^{あげおつかさ}の二人が神に腐った精神を叩きなおす為過酷な異世界で修業して反省しろと。

三国志世界に行けるならラッキーとバカンス気分な二人、普段から悪ふざけだらけな二人は恋姫世界に転生したが、そこでも悪ふざけし続けるのか？

注意

作者の処女作で駄文もいいところです、あと、毎回無駄に長文です。
恋姫二次創作作品ですが、原作始まる20年以上前からスタートなので、

45話過ぎても原作キャラがほとんど出ていません。

プロローグ（前書き）

はじめましてものぐさ兄さんと申します、思い付きで
真・恋姫†無双の二次創作をはじめてしまいました。
処女作だからとはいえ、どうしようもない駄文です。
読まれる方は生温かい目で見守ってください。

プロローグ

老人『起きなさい』

グースカ寝ている二人組の男を起こそうと声をかけるいかにも仙人という恰好な老人。

男性A、B「グースカピー」

老人の呼び掛け等何処吹く風というように寝ている二人

老『起きなさい二人共』

先程より大きい声で、念のため耳元で声掛ける老人

「「ウウーン……、グースカ」

怒鳴り声の五月蠅さに一瞬魘されるがすぐに熟睡し続ける二人

『先程から何度も呼びかけているが起きないならやむを得ないな。』

ポトツ、老人が懷から取り出したスポイトで水を一人の男の耳に垂らす

「うひゃああっつ！」

寝耳に水という諺が出来る位であり驚きで簡単に目が覚める男

『やっと起きたな、それにしても大袈裟な。』

「おい、このクソジジイ、寝ている人間の耳に水垂らして人を起こしやがって！」

今にも掴みかからんとばかりに鼻息荒く怒っている男、それにたいし老人は慌てるでもなくゆっくりと話をする。

『寝起きなのに何されたかよく分かったな。』

「今までさんざんにやってきたから。」

『何でそんな強気に話すんだ恥じるべきで自慢することでないのに、まあいい、そんな駄目なお前さんを起こしたのは話があつてな。』

「俺が駄目なのは自分の事だから分かる、だが他人に言われたくないぞ、あんた誰だよ!？」

最悪な起こされ方にイラつき全身から殺気を放ちながら話をする男

『私は世間一般で言う神で、君達は今朝死んだんだよ、大谷 保君、たもつ横で寝ている上尾 司君つかさを起こして、そして教えてあげなさい。』

「はいっ・・・!？」

自称神、更に自分が死んでいるという発言に固まる大谷 保であった。

大谷が固まってから数秒が経過、とりあえず周りを見渡し、先程まで怒っていた思考に対し、
落ちつけ今どんな状態だ？と脳を動かし始めようとする。

“此処は何処だ？あとなんで司と俺はこんな所で寝ているんだ？それと誰だ俺が死んだ、とか、
神だとかいう危ないジジイは？”

周りを見渡すと真っ白な部屋、壁が見当たらず真っ白な天井と床が地の果てまで続いている、
たぶん自分がいるのはそんな部屋の真ん中であるとなんともなくわかる。

『危ないジジイとは失礼な、先程も言ったが私は神だぞ、あと此処はあの世とこの世の境とでも言えがいいかな。』

目の前のジジイに思考を読まれている、自分の理解を超えている事態に頭が混乱する、
とりあえずは横で寝ている友人の肩を激しくゆすりながら声をかける。

「司、起きろ、司、なんか変な事が起きているぞ。」

司と呼ばれる男の肩をゆすり声をかける、起こし方にコツがあるのか神が声掛けたときと違い目を覚ます。

司「むわあ、・・・おはよう」

大口を開けてあくびをしながら司が挨拶をする、自分みたいに驚かされて起きたわけでないからハッキリ目を覚ましてもらうまで時間

が少しかかるなと思い、その間考え事をする。

自分の姿を見ると、いつものダブルのスーツにネクタイ、足元には愛用のブランドのスーツケースが転がっている、息が酒臭い。

自分の恰好を見て、少しずつだがいろいろ思い出してくる。

“誕生日に出張が入り一人地方のホテルで寝泊まりは寂しいから、と、司に電話で愚痴ったら、

明日東京に帰ってきたら野郎二人と絵面は良くないが飲みに行こうと誘われた。”

“そうだ、司が人気の焼鳥屋をわざわざ抑えてくれてそこで飲んで、明日は休みだし二次会、三次会と吐くまで行くぞとなって。”

少しずつだが前日までの記憶を思い出していく、思い出すため頭をひねる自分の姿を見て、

よしよし思い出してるなどでも言いたいのかうんうんとうなずいている自称神

“ただ、そこから先が思い出せない、それで寝ていたら見知らぬ自称神という、

危ないジジイに驚かされ、しかも、俺らは死んだと言われた。”

二日酔いでガンガンする状態なのに、怒鳴ったり考え事したりと脳を必死に動かしたため、

頭痛が悪化、気分が悪くなってくる、ならばと今は考えるよりも吐くことにした。

『若造に危ないジジイ呼ばわりされるのも癪だし、二日酔いでは話

にならないし、
目の前で吐かれるのは嫌だから二日酔いを治してやる。』

ひとり言のように俺に向かって何かつぶやいた後、神の右手が俺の肩を触れた瞬間に、
溜まっていた気分の悪さとか一気に無くなる、ちょうどその時寝ば
けていた司も意識を覚ました模様。

一司一

友人であり先輩な保さんが誕生日が出張先で孤独、と電話で愚痴っていたので、

昨晚二人で飯を食いに行って何件かはしご酒してからの記憶がない。

「そして自分が保さんに起こされ目の前には仙人姿の変なじいさん、
保さんはじいさんを神様だという、わけわからん・・・???」

とりあえず保さんが自分を担ごうとしているのでは?と思う。

「保さんの悪戯でしょ、昔、自分が目を覚ましたら車のトランクに
閉じ込められていた、
なんて事がありましたし、この変な場所に自分がいるのも悪戯でし
よ。」

「司さんよお。俺はあまり面倒なことはやらないぞ、だいたいトラ
ンクの時は、
お前さんはお返しに俺を騙してアーっとな人専用のサウナに連れて
行っただろ、

危うく尻に惨劇が?と、無事だったがあの時は生きた心地がしなか

ったぞ。」

「30過ぎの保さんが怯えて泣き入っていたのは笑わせていただきましたよ、まあ本物の人に

「貴方転向したらモテるのに」と上目遣いで言われたら怯えますか普通は。」

昔の事を思い出しニヤリと笑う、「保の悪戯は洒落にならないが司のはそれどころでない」

と友人達によく言われているそうで、大袈裟な。

とりあえず保さんが言うには目の前の爺さんは神様ということらしい、

昔JR上野駅周辺にいた「俺は暗殺拳の使い手だ」と言っていたおっさんと同じタイプだ！

という結論に行きつく自分は。

とりあえず、そういうタイプの人は話を否定すると危ないから優しく話を聞いてあげよう。

一神一

『上尾 司、君もなかなかいい根性しているねえ。』

見知らぬ人間が自分の名前を知っている、それと思考を読まれた事に驚いているようだな、

ただ、まだまだわしが神だと納得はしていないようだが。

『そちらの男と違って二日酔いではないから治してやれないが、神

だと証明してやろう。』

そういつてワシは右手をパチンと鳴らした。

その瞬間、辺りは真っ暗になり彼らの目の前に立体映像が流れはじめる。

何店回ったのだろうが太陽が昇りはじめる早朝の東京、そこに酔ってフラフラな二人が歩いている。

酔っ払い二人は大通りの向かいに止まっている空車のタクシーを見つけ、

フラフラな酔っ払いのくせに妙に機敏な動きで道路に飛び出す、運悪くそこにトラックがきて、そして二人は跳ねられたあとピクリともしていない。

二人とも下を向いて肩が震えている、いくら事実とはいえ、自分が死んだ映像を見させられたら流石に落ち込むのも仕方無いかと。

「「なんでこんな中途半端な死に方なんだ！もっと面白く死ねよ俺！」」

ワシはあまりに今までのワシが知っている人間達と考えが違ふことにポカンとしてしまった。

「驚いているようだが何を驚いている、どうせ人間は死ぬのだから、ならばダーウィンアワードで表彰されるような間抜けな人の記憶に残る死に方をしないと。」

ただまあ、この映像を見て司も爺さんが神だという事には納得したようだ、とりあえず話を進める。

「俺ら二人に用があって忙しい神である貴方がわざわざ俺らの前に現れたのは何の用だ？」

偶然はないだろう地球には66億人以上いて毎日阿呆みたいに人が死んでいるのだから、
用もなければ確率的に俺らの前には現れないだろう？」

『少しはキレる頭はあるようだな、簡単な事だお前さん達に説教をしようと思ってな。』

「「説教？」」

見事にハモる二人

自分達二人の家は先祖代々問題児が多いらしく特に酷いのが現れると、

その度に神が呼び出して反省の為異世界に送り更生するように修行させると。

まあ俺も司の実家も家柄というか歴史的には大変由緒正しいのだが、家柄と反比例するかのように先祖にろくな人間がいないのが特徴で。

だが、そんなろくでもない人間が急に真人間になったという伝説が何個もあった。

母方のひい爺さんなんか、とある地方の寺全てをまとめる大物だったのだが、
生臭坊主で数え切れないほどの愛人と隠し子が日本中にいた糞坊主だった。

父方の先祖ならば水戸黄門の悪役商人のように、お偉方と結託して相当荒稼ぎした豪商とか、
とか最盛期の頃は世間的に自慢出来ないような後ろ暗い素敵な人間が大層多いのが。

司の先祖にしても、趣味が辻斬りなんて大変愉快で素敵な趣味を持つ武士がいたり、と。

たしかにろくでもない先祖、しかも、ある日を境に急に真人間になったなんて
普通ではありえない言い伝えが何個も伝えられているのだから。

神が言うには俺ら二人は歴代の先祖のように目に見えて方に触れる悪い事はしないが、
己の人生や才能の無駄遣い、悪ふざけが酷いから精神を叩き直そうと修行の旅に。

正直余計なお世話である、だいたい悪ふざけが酷いとか大袈裟である。

ハロウィーンでコスプレする際に悪魔のいけにえのレザーフェイスのコスプレを頑張ってやったら、
チェーンソー片手に持った不審者がいると近隣から通報されたりしたくらいで私ならば。

司にしても、高校時代に一学期はオール5、二学期はオール1、三学期はオール5とかやって、担任の胃に何度も穴を開けかけたりしただけである。

とりあえず、私的にはやましい事をしていないので素直に神に、

「悪い点があれば反省したい所存でございます、ただ当方としましては説教されるような謂れは一切御座いません。」

証人喚問中の国会議員のようにコメントをする。

そんな私の発言をたしなめたるつもりか司は罪を認める、ただ・・・。

「恥の多い人生を歩んできました反省したいのですが心当たりがありません、

今回は一体どの件についてでしょうか？」

どうやらこれらの発言が神に止めを刺したらしい、神の両肩がプルプルして、そして噴火。

『それら全てだっ！！！』

男塾の江田島平八ばりの大音量に気絶しかける二人。

一神一

“駄目だ、こいつ等は既に手遅れだ、だが、こちらでも神として意地

がある更生させる。”

とりあえず二人には反省の旅に出てもらえないな！

『お前ら二人は生きる事を舐めすぎている、命の無駄遣いをしてい
る、神への尊敬もない、

だから今から罰としてお前ら二人を過酷な異世界へ送りつけてやる。

』

『お前らがその世界で更生し更に偉業を成し遂げるなどといった結
果を出したなら、

お前達の死は無かった事にして世界に戻してやる、もし嫌だと言う
ならば、

あの世送りにしてやるぞ、そうなるという人間に輪廻転生出来るか
分からないぞ。』

此処まで脅せばいいだろう、神の怖さを認識したなこの二人でも、
まあ更生したら偉業は達成しなくても元の世界に蘇らせてやろう、
懐の広さを見せつけてやるか。

まだワシは二人が予想を覆す人間であることを認識出来ていなかった
のであった……。

一司一

「あの世送りにしてもらえますか特に現世に未練ないですし、あの
世はあの世で楽しそうですし。」

自分の発言に対し、保先輩も考え始め、そして口を開く

「そうだなあの世送りもいいな、落語の地獄八景であったが冷静に考えたらあの世いいかも、

好きな音楽家や落語家、司の好きな歌舞伎とか歴代の名人天才は皆いるんだから、

辛い異世界で修行するよりもあの世ライフを満喫した方が楽しいな。

」

神と言っていた爺さんが口をあんぐりと開けて固まっている。

「自分達二人が生に執着すると思っていたのだろうか？神を名乗るくせに頭が悪い。」

吐き捨てるように神に言うことにした。

神が震えだす、人間よりもはるかに偉いはずなのに、万物の主なはずなのに遂に泣きつき始めた。

『お願いだから異世界に行ってください、異世界は異世界で大変な事になっていて、

そのための手段で君達を送るつもりだったの、助けてください！！
！！』

土下座からの足に縋りつき、そして泣き落とし、神にプライドは無いのだろうか？

『お願いします、助けてください色々と力を上げたりとか優遇しますから。』

“神大丈夫なのか、そんな事をして世界のバランスは崩れないのだろうか？”

大体それでは修行にならないのではないか？”

とはいえ、さすがに宇宙で一番偉いはずの神が私たちの足元で、涙と鼻水で顔をグシャグシャにして泣きついている姿を見るのは忍びない気持ちになる。

保さんの顔を見ると仕方ないという感じの顔つきになっている、保さんも自分と同じ意見なのがわかる。

「顔をあげてください、そして泣きやんでくださいよ、そこまで頼まれましたら、

幾らふざけてばかりいる自分達とはいえわかりましたから。」

顔をあげた神が笑顔になる、二人は口をそろえて神に思いを伝える。

「「だが断る！」」

時が止まる、どうやらトドメを刺してしまったようである……。

—保—

”だが断る、効果のある一撃として使いたいと思ったがここまで威力があるとは”

神がエグエグと泣きながら体育座りで左の人差し指で地面にのの字を書いている。

“ぶっちゃけ気持ち悪い絵面だ、女の子ならまだしもいじけているジジイなど絵にならない。”

このままでは日が暮れると思う、真っ白い空間で日が昇るも暮れるもへったくれもないんだが。

「俺も司も悪ふざけや悪戯はひどいが弱い者虐めは嫌いだから、暇つぶしも兼ねて行ってやるよその異世界へ修業に。」

『嘘だ!!!!!!!!!!』

神が壊れた、まさかジジイが鉦女みたいになるとは、完全に人間不信になってる、

誰だ!?!とても偉い神様をこんな風にしたのは。

とりあえず説得をする、散々宥めすかしたらなんとか落ち着いた模様、

ヤクザの交渉術である7殴って3抱きしめる、この比率でいくやり方がまさか神にも通じるとは。

どうやら俺達が修行に行く世界は色々あるようで本来は神が勝手に行き先を決め、

神の代理として戦争の鎮圧だとかさせられるのだが、今回は俺達に選ばせてくれるとおかしな成行きに。

トロイアやら三国志、戦国時代、30年戦争とか色々ある、面白そうな戦国時代か三国志で悩んだが、

日本の戦国時代だと殺した人間が自分の先祖とかだと後の自分に影響があったら怖いので三国志に。

三国志に行けるなんて楽しみだけでもうお腹一杯という状況なのに、なんか気を良くした神が俺達に更に能力とか望む物をくれると言いだすしまつ。

最初から最強は面白くないので自分の努力次第でもしかしたら最強になるかも？という事で限界突破。

あと病気とかつまらない死に方したくないからとにかく健康、あとは三国志の時代ならば空気を読んで銃や車はやめて時代に合った武器とか馬が欲しいと。

『努力しないでも望めば最初からフリーザくらいの戦闘力にはなれますよ、

それなら異世界修行の旅もあつという間に終わりますよ。』

俺らの精神を叩きなおす修行で行かされるはずなんだが、神がおかしなことを言っている、

なんで神がこんな壊れてしまったのだろうか……。

『成長限界突破でも鍛え抜けば武なら範馬勇次郎、知ならヤン・ウエンリーを超えます、

健康はヘルシングのアンデルセン神父くらい再生すればいいか？』

『武器と馬は使える体力がついたら頃に届くようにす、武器はその時に欲しい物をオーダーで、

ロンギヌスでもなんでもいいからな、馬は原哲夫作品の馬程度でいいかな？』

名目は俺と司の修行であり、神の代理で紛争の鎮圧に行くのかなんだが、いくらなんでもアンデルセンの回復力やら聖槍とか貰うのは駄目だろ。

運が良くて俺達が神の代理ではなく神になり替わり、最悪悪魔の使いだと処刑されかねん、

だから、武器でも馬でも健康でもほどほどにしてくれと頼む。

とりあえず、なんか妙にこちらを優遇する神との打ち合わせも終わり、

神が指を鳴らすと突如どこでもドアらしき物体が現れる。

扉の前に立つと色々な思いがわき出る。

“この扉をくぐると遂に三国志か、任務達成まで戻れないどころか途中で死ぬかもしれない、

だが面白さを求めて行きますか。”

横を見ると無二の親友である司も笑顔でこちらを向いている、覚悟はできている模様、

深呼吸をして息を整え心を落ち着け扉をくぐる二人。

扉をくぐり二人がいなくなってから、肝心な事を伝え忘れていたことがあるのを思い出す、

ふざけた、毫碌したやくたたず神だったとは…………。

プロローグ（後書き）

プロローグが長くなりすぎた、そうでなくても駄文なのに、さてどうなりますかこの小説は、作者のくせに何も考えていなく不安であります、どうしましょう。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第一話、転生したはいいけれど（前書き）

とりあえずプロローグに続いて第一話を書いてみました。

どうしようもない作品ですが、もしお暇なら生温かい目で読んでみてください。

第一話、転生したはいいいけれど

―保―

「話が違う、いや、話が違うんではない、もっと考慮しろと言うべきか・・・」

いきなり何がと思われるだろうが、今の俺の心情としてはこうしか言えない。

申し遅れた、俺の名前は太谷 たもつ 保33歳、会社役員だった。

東京近郊のとあるベツトタウンで数百年前から先祖代々商売をする金持ちの息子で、まあ変わり者の両親の元で人並みではない体験をしながら元気に育った。

変わり者ではあるが優秀な両親の血を引いたのもあり努力らしい努力をすることもなく、

苦労せず良い大学に行き卒業後は父の会社に入社。

入社当初は親の七光と言われたりもしたが仕事も順調にこなし続け、後継ぎという点もあるが今や最年少取締役、次期社長として働いている。

「まあ親族からは会社を背負ってたつものだから三十過ぎて結婚していないのはいかん」

と小言を言われるのは不満ではあったが、それ以外とくに主だった不満はなかった。

不平等な世界だが私は運良く皆と違って人生イーजीモードでお気楽ライフを堪能していたと。

そんな順風満帆な生活だったはずが・・・。

無二の親友とご機嫌に飲み歩いていたはずが変な場所で目覚めて、現れた神にお前達は死んだと言われ三國志の世界に行く羽目に。

まあ、ここまではいい。

普通の人ならば「死んでるのにいいのか!？」とか言いそうだが、人生イーजीモードは面白みがない、ならば波乱万丈な方がいいと。

あつ、今さら言うのもなんだが、誰に対して説明している文章なんだって突っ込みは無しで。

転生とか喜んでいるはずなのに何で戸惑っているのかといったら、まあ切実な問題が。

過去に行ける扉をくぐったら意識を失い、目を覚ましてまず最初に視界に入ったのは、サッカー中継時の川平慈英並みにハイテンションな見知らぬ男の笑顔がドアップ。

目を覚ましたら、いきなり川平慈英はびびるぞ。

川平もとい、男のテンションの上がり方と「董家の跡取りが」「君

に似て可愛い顔立ちだ」

などの会話の内容で、この男は父親なんだなと理解した。

転生させた神に問題として言いたかったのは、何故赤ん坊からなんだ！と。

まあ前世である30歳過ぎたおっさんが異世界で修行だといって鍛えはじめても、

年齢的に脳細胞も体も衰えていく一方、ならば若い頃からやりなとした方がいいのはわかる。

だが、生まれた直後から私の自我があるのはなんとかならなかったのかと、鼻水垂らすまで説教したい。

赤ん坊ですよ、自分でトイレに行けるわけなくオムツにお漏らしをするしかない、

赤ん坊なら当たり前ですがこの前までおっさんな私としては常識でおもらしはできない。

あと母親だけでなく侍女達にオムツをかえられる羞恥プレイも精神的ダメージが。

しかも、恥ずかしいというだけでなく、オムツを人にかえられる恥辱が、

何か新しいものに目覚めてしまいそう、堕ちてしまいそうな自分が、その恐怖に耐えるのが・・・。

せめて3歳位になって自我が確立するころに前世の記憶とかが目覚めてくれればよかったのだが。

あと、もう一つ問題が、神が転生させる際に記憶や能力引き継ぎしてもらったことで。

私は赤ん坊らしく起きて寝てを繰り返す、そんな私が父親と初対面した時に事件が。

ハイテンションな父親の話し声に目を覚まし、前世での生活のように起きてしまう、

問題は私が生まれたばかりの赤ん坊であるというのが。

寝台から上半身を起こし背伸びしながら「とおしゃん、かあしゃんおはよう」と、
舌足らずながらも普通に挨拶してしまった。

自分で、あっ、と気づいた段階で手遅れでしたよ。

赤ん坊ではあり得ない姿を見て両親はわなわなと震えだしたと思ったら、

父はいきなり窓から「うちの子は神の子だー！ー！！！！！！」などど、

近隣住民から頭を疑われるような事を叫びだし、

母親はあまりの出来事にフリーズし、侍女達は俺の姿を見るなんて畏れ多いと皆ひれ伏しているのが。

これはまずい、と既に手遅れだが、そのあとは普通の赤ん坊の振りをして過ごす、

まさか転生した初日に既に普通の赤ん坊の振りする生活に気疲れするとは。

どうしてこうなったと赤ん坊ながらため息をつく生活を送るように

なるとは。

「????」

妻が妊娠したと知ってからいつ生まれるのだと毎日仕事に付かず、一日千秋の思いでいたが、ある日執務室で政務に励んでいると我が子が遂に産まれたと待ち望んでいた報告が。

仕事を投げ出し、従者を振りきろうが構わんと走って我が子に会いに行く。

出産に疲れ寝台に休んでいる妻、産婆や侍女達には悪いが我が子と喜びの対面をさせてもらう。

妻と一緒に寝台で寝ている我が子のなんと可愛い事か。

「お前に似た可愛い顔立ちだ、将来はモテるぞ」と妻に向かつて話しかけると、妻は微笑みながら「私よりも貴方に似ていますよ、賢い顔つきなところとか」と。

侍女達は「旦那様の聡明さ、奥様の美しさを兼ね備えた将来が楽しみな若様で。」

と大変嬉しい事を言ってくる。

照れ臭いのごまかすためではないが産まれたばかりの我が子に、「お前は父である私に似て賢く母に似て美しいとの事だぞ。」と語

りかける。

妻は「あらあら」と言いながら微笑んでいる、なんと幸せな光景だろうか。

まさか、寝台でスヤスヤと寝ていた我が子が目をパチリと開いたと思ったら、上半身を起こし背伸びをして「とうしゃん、かあしゃんおひやよう」と。

首が座っていないどころか数刻前に生まれたばかりなのに、起き上がって喋った・・・。

我が国の遙か西にあった国で、釈迦という王子が生まれた直後に歩いて

「天上天下唯我独尊」と傲岸不遜な言葉をしゃべった逸話があるのを聞いたことがあるが。

我が董家の跡取り息子も釈迦ではないが選ばれし子供なのだろう。

自分の息子の持つ神々しさについて興奮して窓から

「うちの子は神の子だー！ー！！！！！！！！」と叫んでしまった。

近所から生暖かい目で見られるだろうが私は気にしないぞ！！

—保—

転生してから二週間たちました、そんな故大谷 保（享年33）ですが

「・・・暇だ、とにかく暇だ」

体は赤ん坊なんだが体力や意識とかは大人ですよ、周りを驚かせないようにするため、

連日赤ん坊のふりをしている生活にかなり疲れる。

おっぱいを飲む、おむつの中に漏らす、泣く、寝るしかない。

両親や侍女の会話を盗み聞きすることで我が家がどんな家か自分の名前や現状を推測したりしたが。

とにかく暇だ。

話し相手がいればいいが話し相手がいない、まあ話をするわけにいかないんだが、

侍女に話かけたらまたパニック起こされ土下座してきそうで。

とはいえ、読書やゲーム、仕事とか暇潰しが出来ないのだから、せめて気分転換で会話がしたい。

『じゃあワシが話し相手になろう。』

聞き覚えのある老人特有のしゃがれた声が脳内に響く。

「この声は私の頭痛の原因を作った自称神、こと、クソジジイ！」

『自称ではないクソジジイでもない本物の神だ！まあ声出さないで

いいぞ思念で会話しているから。』

助かった、自分以外誰もいない部屋で喋れないはずの赤ん坊が一人で会話していたら、
そんな姿をもし侍女達に見られたら神童どころか悪魔憑き扱いだ。

悪魔憑きなんてなった日には、老いた神父と若い神父が家にやって来るよ、

私が緑色のゲロ吐いて、ブリッジしながら階段を降りたわけでもないのに、

悪魔祓いされたりしたくない。

『懐かしの映画の話はどうでもいい、どうだ転生してからの新しい人生を楽しんでいるか？』

私の転生してからのストレスを知らないのかと舌打ちしてしまう、
大体生まれて1年もたっていないのに何を楽しむんだ！と言いたい。

あと、この前散々私達にへこまされたばかりなのに、
なんで今日はまた上から目線なんだと突っ込みたい。

とりあえずはいろいろ突っ込みたい事があるので一気に突っ込む。

「三国志の時代に転生といったが此処は何なんだ！？変な世界に送り込みやがって！

両親が董君雅と池陽君だから俺が董卓の親族はわかる、なんで両親の性別がひっくり返っているんだ！！！！」

「それと董擢ってなんでこんなマニアックな武将に董卓の兄貴で早世したしか情報が無いような、

知っている俺も俺だが、普通三国志なら魏呉蜀とか王道な所に所属する武将が沢山いるのに何で非主流な。」

「一番の問題は、一緒にこっちの世界に来た司ちゃんがなんでいないんだよ、転生なら双子とかじゃないのか？」

私がまくしたてるように一気に疑問をぶつけると、神はゆっくりと答えます。

『君達が知っている三国志は正史と呼ばれるもので、今、君がいるのが外史なんだ、外史とは一言で言うならI Fの世界じゃ、もしかしたらこんな世界があるのでは？という。』

『何故、外史にしたのかは君達が戦国時代を選ばなかった理由と同じじゃ。』

「過去の正史だと正史の歴史を変えてしまう事で未来の俺達に影響する可能性が、ならばそれがない外史にしたということか？」

『そういうことじゃ、だからお前さんの認識している三国志とは性別や性格とか、色々と違う点がある世界なんじゃよ。』

「それはまあわかった。」

『董擢にしたのはたまたま空いていたからだ、先程も言ったがここは外史I Fの世界であり、外史ならば正史にいるはずの人間がいらないなんて事もある、それで

空気があつた人物だからじゃ。』

「そんな理由なのか。」

『あと、お前さんが曹操とかに転生したとして正史での曹操の行動をしっているから行動しづらいだろ、

これだけ資料がない人間ならば好き勝手やれるだろうと気を使ったんじゃないぞ……。』

……の部分に何か別の意思が隠れていそうだ、面白そうだからとか、この前の意趣返しだ、とか。

「どうも騙されている気がしてならないんだが。」

『疑り深いのも、あともう一つの質問の答えだが、お前の相方である上尾司は、

お前と同じ日に転生はしている、この外史でちょうどいい双子に空きがなくて、やむなく別々になったんだ、まあ、お前さん達ならばすぐに会えそうじゃが。』

「無事ならばよかった、あいつと俺は前世で義兄弟の杯交わしたんだから、

“生まれは別々でも死ぬ時は別々だ”と誓い合った仲間なんだから。」

『それを言うなら“生まれは別でも死ぬときは一緒だろ”じゃろ。』

「落語の粗忽長屋だ！元ネタは知らないのか神のくせに、まあ俺達と一緒に死んだが、

普通一緒に死ぬなんてないだろ義兄弟でも、何寝ぼけた事を言って

いるんだ。」

まあ、色々言っではいるが司が無事だと聞いてとりあえずは安心する、が、釘は刺しておこう。

「こっちに二人まとめて来たんだから司と会えないで、会おうと思ったら、

既にどちらかが死んでいたとかなんてなったら神だろうが許さないからな。」

『まあ平気じゃよ、そんな心配しなくてもあいつは色々と赤子生活を楽しんでいるぞ。』

「嫌な予感がするからあまり聞かない方が良さそうだが、一応聞いておくか。」

聞かない方が良さそうだが好奇心に負けてつい聞いてしまった。

『ブツダの真似して生まれた直後に三歩歩いて天上天下唯我独尊と言ったり、

侍女にオムツを変えられるたびに「はあはあ、抵抗することもできず他人にオムツをかえられ、

恥ずかしい姿を見られる自分の無力さが、背徳感が堪らない、なんで今まで赤ちゃんプレイに興味なかったんだ！」ワシに力説していたぞ。』

て、手遅れだったか………。

とりあえずまあ疑問は解消されたかと思っていたら、また話をしようといって神の声が聞こえなくなる。

赤ん坊であるおかげと最近の気疲れのせいかな？あと親友の司の無事がわかった安心感、
彼が誰になっているのか？いつ会えるかな？考えていたら俺こと董擢は眠気に襲われたのだった。

第一話、転生したはいいけれど（後書き）

読みづらい文章ですいません、感想とかありましたらよろしく願います。

皆さんのご意見ご感想お待ちください。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（前書き）

恋姫のはずなのに、時代設定が少し古いからとはいえ劉備も曹操も誰もまだ出ません、ごめんなさい。

というかもう一人の主役を出していない大丈夫なのか……。あと、今回も無駄に長くてごめんなさい。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？

一保一

どうも、この三国志の世界に転生して3年たちました姓は【董】名は【擢】字を【孟高】

そして真名は前世での名前と同じ【保】になりました、故大谷 保こと、

董卓の兄貴で早死に以外は売りがなく、三国志で劉備や曹操といったスーパースターと異なり、
刺身でいうならツマ以上に需要がない董擢です。

いきなりキンクリして三年たっているのはまあ色々とお察しく下さい。

話を本筋に戻しましょう、三国志の世界でなどと言いましたが、神の説明を受けた時に知りました、

此処は私や皆が知っている正史というものではなくI Fの世界である外史という物だそうで。

三国志では姓名以外に字があるのは常識として知っていますが、今の私ならば【保】という、姓名や字とは別に真名という物がありました。

この世界を知らない私からしたら真名があるを知ったところで最初は“面白いもんだI Fの世界は”程度の認識でしたが、そんな生易しい物ではなかった。

真名は命よりも重い扱いでたとえ相手の真名を知っていても呼ぶ事

は許されず、

当人の許諾無しで真名を勝手に呼ぶと首をはねられても仕方がない
注意が必要なものだなんて。

実際これで一度痛い目にあっておりまして、真名の価値をまだ知らない私は気楽に、

いつも身の回りの世話してくれている侍女の方達に真名を預けたんですよ。

問題は私が太守の息子で、しかも生まれたその日に「父さん、母さんおはよう」なんて、
言葉を習ってもいないのに、普通に背伸びしながら言うてしまう神童扱いの子ですから。

侍女の方々からしたら天上人から真名を許されたというような状態で驚きと感動で皆卒倒しまして。

私は何が起きたんだ？とパニックを起こしながらも侍女達を助けようと必死で呼びかけている、
そのような事態になっていると知らないで太守としての政務を終えた母上が私の部屋の扉を開ける。

「キャアアアアアアーーーーー!!!!!!」

私をいつも温かい目で見つめていて常に落ち着いている母上がこのような悲鳴を上げるとは。

ドラえもんがネズミを見つけてしまった時並みのパニックです、地球破壊爆弾を使いかねません。

まあ私は腐っても太守の息子VIPですから、部屋がそんな風になっ
ていたら事件か？

暗殺者にでも襲われたか？と思って母上がパニックになっても仕方
ないかと。

30分後、侍女達も復活、私と侍女達から事情を聴いた母上がこち
らを向いたと思ったら、

「孟高そこに座りなさい」と普段の母上の姿から想像つかない怒り
のオーラが。

これは洒落どころではすまないなど本能で察しましたが、察した段
階で既に手遅れ。

床の上に正座させられ説教ですよ、しかも、母の背中には怒りのオ
ーラが見えるが、

一番きつい怒鳴るのではなく静かに淡々と理を持って目を見据えな
がらの説教なのが。

「貴方は三歳とは思えないほど聡明であり、誰とも分け隔てなく接
する優しい自慢の息子ですが、

董家の長男として、いえ、人として真名の重みを理解していない事
に私は情けなく思います。

貴方の【保】という真名は、大陸の平和を保つ偉大な人物になって
ほしいから・・・以下略」

どれくらい時間がたったのでしょうか、青っ洩垂らしてしまうところ
ではなかったですよ、

こちらの世界では三歳ですが、精神年齢三十六歳であるおっさんな私が泣きそうになるくらいで。

家族での夕食時に父はその事件を知り「さすがの神童も形無しか真名に関しては次から気をつけろよ」

と笑って、私を慰めるため頭をクシャクシャとなでてくれました。

ただ、その父上の行動が甘やかしているように見えたようで、父上は母上の逆鱗に触れてしまったらしく。

「貴方少しお話があります」と一言、無表情ながら凄まじい怒気を漂わせた母上、

耳を引っ張られ連れだされる震えあがった父親。

連れ出される父はたぶんドナドナで売られる牛よりも悲しい顔をしていたのが・・・合掌。

母上は部屋に戻ってきたが父上が戻ってこないで部屋に行くと、

うつろな目をして部屋の隅で体育座りして涙ぐんでいる父上が。

この件があつてから私は両親だけでなく侍従達とも真名を交しなさいと母上が許可をされました。

ただ侍従の方達は真名で呼んでくる事なく「孟高様」「坊ちやま」としか呼んでくれず、

また私も皆さんにおしめを替えてもらったりしたりと育ての親でもあるので、

真名で呼ぶよりも字にさん付となってしまうてますが。

決して、真名の件での母上の説教がトラウマになってしまい、
真名の取り扱いに悩んでいるわけではないですよ・・・たぶん。

前世では怖いもの知らずと言われた私が説教くらいでトラウマなんてなるわけが・・・。

ちなみに母上の真名は【和】^{なごみ}と、私の保と同じく平和を願ってつけられたそうで、

五胡との争いで亡くなった祖父が、いずれは五胡とも手を取り合い平和を築こうとした事からだそうで。

その事を知ってから自分の【保】という真名の重みが三歳児ながらずしりと両肩にかかるのが分かりました。

父上の真名は【空】^{そら}無限の広さを持ち一面に広がる空のような広い心を持つ人になれと、

祖母に名付けられたようです、ただ父上はお酒を飲んだ際にごくたまに悪酔いするのですが、

その際「世間で私の存在が空気みたいなものだから真名が空なんだよ」とうつろな目で呟く事が。

私の精神年齢より若いはずの父上ですが、たまに妙に黄昏ているのは何か嫌な事があったんでしょう。

一和一

私の自慢の息子である保君が可愛くて可愛くて仕方がない。

保君は生まれてすぐに「父さん、母さんおはよう」なんて言っ
てもう天才児だ、
あの時あの人が窓から「うちの子は神の子だああ」と叫んで
いたがその気持ちがよくわかる。

昔馴染みの友人達が遊びに来た時にも気付くときつい何刻も息子
自慢をしている私が、
最初は皆「親馬鹿にも程がある、まあ自分の子供に対してはどう
しても親馬鹿になるがね。」と。

皆実に失礼で、保君の凄さを知らないで親馬鹿という言葉で片付け
るなんて、
彼らの愚かさが嫌になり、少しO・H A・N A・S H Iしないとい
けないと思うが、
さすがに太守とかを壊してしまうわけにはいけないので、保君と話
をさせてみる事に。

「まさに神童」「麒麟児とはこの子の事か」「天は二物も三物も与
えたか」と話をする。

私や夫の私塾時代の同級生であり私などとは身分が違うのだが分け
隔てなく接してくれ、
私達を可愛がってくれていた劉表様なんか、

「この国を支える人材を育てるための私塾をつくる予定なのだが是
非孟高君を入学させたい」

「いや、私塾の有無など関係無く、私の元で徹底的に学ばせてみた
い、是非私に預けてくれ」と言いだす程に。

大事な大事な愛しい保君と離れ離れになるなんて出来るわけがない

のに、
あまりにもしつこいので、最近愛刀が血に飢えているので愛刀の錆にしようか？と。

ふと気づいたら横にいたあの人が必死の形相で私を羽交い絞めに。

ただ、人を育てる事が好きで優秀な学者でもある劉表様に、まだまだ幼子である保君が、
ここまで惚れ込まれたのは親として嬉しくもある。

いくら褒めても褒め足りないが、保君が神がこの世に遣わした者であると何度思ったことか。

普通ならまだ立つこともおぼつかないような歳である保君に、軍師でもあるあの人が、
「生まれてすぐに喋ったくらいの天才なんだから保君には早くから勉強を教える」
と言い出した時はさすがにまだ早過ぎると思ったのだが私の予想は見事に覆された。

保君は三歳にして読み書き、四則計算が出来るなんて。

だがこれで驚くのはまだ早く、保君の勉強についてあの人の言葉を聞いて更に驚かされた、
あの人が用意した教材が論語、五経、管子、孟子、荀子、戦国策、呉子、孫子というのは。

読み書きの時ほどのあり得ない速度ではないが、とはいえ保君は少しずつだが、
噛み締めていくように少しずつだが本を読み着実に理解していった。

るとは。

軍師という物は知識がただあればいいのではなく、大事なものは実戦でいかにそれを生かすかだが、

知識だけならば保君はあと数年もすれば大陸で並ぶ者はいない偉大なる知者となるであろうと。

ただ、最近では保君を見る度に親として寂しくなってしまう自分がいる、

三歳なんて世間の子供はもっと親が恋しいはずなのに、保君は平気なのがとても悲しい。

一昨日も大好きな保君と一緒に風呂に入ろうと言ったら「母上恥ずかしいです」と断られてしまった、

たぶんこれが反抗期というものなのだろう保君の言葉に衝撃を受けた私はその晩枕を涙で濡らした。

あの人はそんな私を抱きしめの頭を撫でながら「保もお前が大好きだから平気だよ」

と慰めてくれた、大好きなあの人に撫でられ少しだけ安心したが何故だか怒りがわいてきた。

そう、私は太守の仕事で忙しく、あの人も軍師として忙しく夫婦共に忙しい、

あの人がそれでも保君の勉強のため時間を作っているのは分かる、でも

保君に勉強を教えたりと一緒にいる時間が夫婦で私より多いのが許せない。

気付いた時には「貴方なんか大っきらい」と叫んで本気の正拳突きでぶっ飛ばしていた。

一とある場内警備兵一

真夜中の城内警備していた時の出来事です。

最近の街の治安の良さ、しかも、この警備厳重な城に忍び込む不審者なんていないだろうと思い、

董君雅様に見つかったら気が緩み過ぎと大目玉でしょうが欠伸をして、

早く交代の時間にならないかと見張りをしていた時に事件が起きました。

「貴方なんか大っきらい」という董君雅様の叫び声が聞こえたと思ったら、

庭園から雷でも落ちたのかと思われるようなドカーーンという大音量が。

何事かと城内の警備兵が庭園に走ると、壁には大穴がそして庭園には謎のボロ雑巾が。

まさかボロ雑巾が筆頭軍師である池陽君様だとは。

翌日から城の機能が止まりました、全身打撲で池陽君様は絶対安静、執務室では董君雅様が

「保君が反抗期だなんて、保君に嫌われたらもう生きていけない」と涙するお姿を。

このままでは政務が進まないどころではないと侍従、家臣一同で董擢様の部屋に。

ため息をつかれ「両親が迷惑をかけてすいません」と深々と頭を下
げ執務室に向かわれる董擢様、
ため息のつき方といい謝り慣れしていることといい、この方は本当
に子供なのだろうか？と思う。

とはいえ董擢様はやはり三歳児、執務室で泣き続ける可愛らしく董
君雅様に抱きついて、

「母上大好きですから泣かないでください」と董君雅様の頬に口づ
けされました。

この後まさか冷静沈着で有名な董君雅様が飛び上がり叫ばれるとは、

「ヒャッホオオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これ
で私はあと1000年は戦える！！」

と叫んで机の上に山と積まれた竹簡をあり得ない速度で処理してい
く姿が、

更に「来年からこの記念すべき日は保君記念日として休日に」と言
い出し始めるとは。

あと董擢様が母親である董君雅様の変わりように引いていらっしや
ったのが印象的でした。

少し転職を考えてしまう一日でした。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（後書き）

主人公の両親や祖父の設定はオリジナル設定です。
それにしても董君雅何故ここまで壊れてしまった。

皆さんのご意見感想お待ちしております。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（前書き）

両親が、というか、和がどんどんおかしくなっていく、どうしてこうなった・・・。

書いている私が何故こうなってしまったんだと悩むのは既に手遅れか？

とりあえずこんな作品ですが読んで笑っていただけたなら幸いです。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた

一保一

どうも、最近の母上が怖い保です。

こちらの世界で両親が私を愛してくれているのは分かります、ただ、愛が溺愛と言いますか、ヤンでいるのが。

この前、両親共に仕事だったので、一人で鍛錬の為に城内を駆け回ったりして、

全身汗と泥まみれになって帰ってきた私を見つけた母上が、

太守の仕事で忙しいのに私とお風呂に入ろうと誘ってきましたよ。

前世でそれなりに女性経験があるわたしです、董君雅はこの世界での私の生みの親です、

とはいえ、やはり妙齢な母上にお風呂で全身洗われたりするのは恥ずかしいです。

あと私とお風呂に入るため明らかに太守の仕事を途中で放り投げているのが。

だから「母上恥ずかしいです」と断ったのだが、まさかあんな風になるとは。

羌族が攻めてきたと報告が上がり城内は騒然というような事態になっても、

常に冷静沈着、将とはかくあるべきという姿を見せつける母上が。

皆さん見た事ありますか妙齡の女性が「うわーん」と、漫画みたいな声あげて泣いてダッシュしていなくなるのが。

しかも、その日の夜中にも事件が、父上の方が私と一緒にいる時間が多いという理由で、

まさか母上が嫉妬でギャラクティカマグナムを父上に決めお空のお星様にしそうになるなんて。

危うく私はててなしごになるところでしたよ。

翌日も「保ちゃんに嫌われたらもう生きていけない」と死んだ魚のような目をして呟き続けていて、

あまりにもなので「母上好きですから泣かないでください」と頬にキスしたら復活ですよ。

ただ、

「ヒャッホオオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これで私はあと100年は戦える！！」

なんだろうこの差というか寒暖の激しさは、

これが熱帯魚の水槽だったら中にいた魚は一瞬で全滅しますよ。

しかも、この日を記念して保君記念日成立させるとか言い出すしまつ、どうすれば。

三歳児ながらまさか胃がキリキリと痛くなるとは。

将来旅に出るつもりですが、伝えたら私を座敷牢に閉じ込めるくらいはするでしょう。

例えば私が結婚するとかになったならばどうなるのでしょうか？

太守の息子ですし普通ならばお見合いとかでしょうが、嫁さん候補が現れたら・・・。

「お前にうちの息子はやらん」「お前にお義母さんと呼ばれる筋合いはない」

なんてドラマのようなセリフが出てきそうなのが。

いや母上の事だから刃傷沙汰になるか、将来一体どうすればいいのか・・・？

後に「保君のお嫁さんは私だ」と斜め上どころではない回答が飛び出すのをまだ知らない私だった・・・。

一和

「・・・ふう」

ため息が止まらない、保君と一緒にいたいのに仕事が多すぎる、

いっそ太守を辞めようかという考えが頭の中をちらつく。

こうして私が頭を悩ませながら必死で竹簡の山を片づけている間にあの人はい。

保君に勉強を教えるという大義名分は分かるが、でも保君を独占出来るなんてうらやましい。

なんとか太守として忙しい私が保君と一緒にいられないかと考えるが解決の糸口が見えないのが。

例えば保君成分を補充する為私の仕事中は保君を膝の上に置いて仕事する。

実に素晴らしい案だ！と思ったが、これは駄目だ仕事にならないのがわかる、

保君を抱き締めてクンカクンカして仕事しないで一日が終わる、そんな様子が想像出来てしまう。

どうすればいいのか頭を悩ませながら竹簡の処理をしている、とある竹簡に目にとまる。

軍に関する物で、新兵の錬度が低く訓練の相談に関する物が。

これだ！！！！！！閃きました。

君主自ら新兵の訓練をすれば、兵達も気を引き締め訓練に力が入る。

保君は体を動かすのが大好きらしく毎日自己鍛錬ですと言っては、

空いている時間城内を走り回っていたりしている。

それならば少々早いが保君を予備役軍人という事にすればいいんだ、太守である私が保君に付きっきりで訓練指導を出来る、

保君は鍛錬が出来る、一石二鳥、完璧な計画だ。

それに予備役ならば、新兵の錬度の問題はあるが現在兵数に問題がないから予備役招集はない。

よし善は急げ、今日は時間も遅いから無理だが明日から私自ら新兵訓練をしよう。

完璧な計画だったはずなのに……。

まさか計画初日にして「君雅様は擢様に付きっきりで新兵の訓練を一切見ていない」

と陳情書が来るとは、しかも「三歳の子を予備役にするなんて何考えている」と空に怒られた。

うう、保君と私を引き離そうと皆が意地悪をする…………。

一空一

最近、妻である和の暴走が怖い

保が可愛いからすこしでもいいから一緒にいたいという和の気持ちは良く分かる、

私だってこんな竹簡全て投げ捨て、和と私で保と手をつないで家族三人で出掛けたりしたい。

だからとはいえ、三歳の保を予備役軍人とするなんて非常識にも程がある、

しかも太守自らの新兵訓練と言いながら保と二人っきりでいるなんて羨まし、もとい情けない。

太守の職をなんと心得るのか、まあ和のそんなところも可愛いんだが。

和と結婚することが決まったあとなんかも「空と一緒にでないと仕事しません」

なんて泣きながら言い出して、あの時の和の泣き顔が可愛くて可愛くて。

和を抱き締めて泣きやませてあげたんだが、あまりに和が可愛くてお姫様抱っこして部屋に連れて行って、ふと気づいたら翌日になっ

ていて。

義母様と顔合わせたら「若いっていいわねえ」とニヤニヤされていて照れ臭かったのが。

うーん可愛い妻の願いも叶えてあげたい、でも、妻の泣き顔もちよっと見てみたい、

軍師として頭を悩ますばかりである。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（後書き）

もう一人の主人公である司を早く出したいのだが、今のままではいつになるのやらと頭を悩ませています。皆さんからしたら作者である私が何を言っているんだということでしょうが。

司ですらいつ出せるかならば、恋姫キャラとなった日には、不安です。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第四話、運命の出会いしちゃった？（前書き）

話の展開が強引すぎるかなと、まあ常に悪ふざけだからいいやといったちゃいました。四話目にしてやっともう一人の主役を出せたとは。

第四話、運命の出会いしちゃった？

―保―

たぶん、今世界で一番の大根役者である董擢こと皆の保君です。

いきなり大根役者って何があったのかと言いますと、

本日、母上と父上が若かりし頃に学んだ洛陽の私塾時代の仲間の李さんという親子が、

洛陽のエリート文官だったのに涼州くんだりまで仕官しにやって来たんです。

実は今この李さんの後ろに立っている息子さんが、遂にやって来ました転生仲間！

マイソウルブラザーである前世名という故上尾 司君ですよ。

3年以上ぶりの感動のご対面、かということ、意外とあっさり丸鶏塩ラーメンという感じでした。

だって、三日前に神との念波での雑談で教えられていたのです。

「三日後に司がそっちに行くから、お前さんの親の友達の子として、見た目は違うがお前さん達ならばお互いに一目で分かるよ、まして良くも悪くも董卓に馴染み深い名前じゃからのう。」

董卓に馴染み深いという言葉に一抹の不安を感じますが、遂に司ちゃんに会えるのが、離ればなれになっていた大親友に会える。

あまりの嬉しさに毎日まだかなまだかな学研のおばちゃんまだかな状態です、

まあ、学研の奴やったこと無いのでまだかななんて思ったこと前世で一度もないのですが。

前日の家族揃っての夕食の際に母上から伝えられた際も知らないふりの演技しましたが、

「明日、私達夫婦の私塾時代の友達の子が仕官しにやってくるのですが、

保君は良い子ですから平気でしょうが同い年の子供だからえばったりしないで仲良くしてあげるんですよ。」

はい、平気ですよ、生まれ変わり仲間て前世からの飲み仲間ですのて、なんて言えませんが。

で、当日

私も呼ばれて玉座の間で董家ファミリーや家臣一団と御対面ですよ。

やってきた司ちゃんのお母さんが色々突っ込みがいのある格好で。

何故この三国志の時代にタキシードがあるのでしょうか？

なんで李さんは女性なのにオールバックで光り輝く真っ黒なタキシードなんですか、

宝塚の男役なのでしょうか？今から歌いだすのですか？

あと神のヒントである董卓に馴染み深い者で李という姓に大変嫌な予感がして仕方ないです。

「この子は私の自慢の息子で、ほら自己紹介しなさい。」

前に出てきた司ちゃん

「僕は李儒文優と言います、これから母様共々宜しくお願いします。」

久しぶりの司ちゃんの声と普段と違う喋りについてニヤツとする。

まあ私も昔は「俺」司ちゃんなら「自分」と読んでいたがお互い親に強制されたなど。

それにしてもあの【李儒】ですよ、弘農王を毒殺しようとしたり三国志のいぶし銀な悪役、

神にこの大陸の戦乱をおさめろ言われたが董家に李儒、うん、弟で董卓が産まれたら司ちゃんと二人で洗脳・・・、教育するしかないか。

とりあえず司ちゃんと話がしたいので、なんとかしますか。

私専用の巨大な椅子にちょこんと座っていたが椅子から降りて、司ちゃんの前に立ち右手を差し出し、「私は董擢、君と友達になりたい。」

うん、大根役者にも程がある演技だ、まあ一応、三歳児だから平気だろう。

「はい、僕なんかで良ければ友達になって下さい。」と手を握ってくる司ちゃん

互いの親達は子供どうし仲良くなれそうで良かったという顔していたが、

私と司ちゃんの二人はお互いの演技の酷さに吹き出しそうだったな。

—司—

チャッチャチャー♪チャッチャチャー♪チャッチャチャーチャッチャチャーラー♪

BY特攻野郎Aチームのテーマ曲

「李儒文優 真名は司 陰謀の天才だ、弘農王だって毒殺してみせらあ、でも献帝だけは簡便な！」

「司ちゃんいきなりどうした？その言い方なら俺がフェイスマンか。とりあえず言ってみるか」

「いや電波を受け取って言っただけで保さんがわざわざやらないでも。」

「俺は董攢孟高、真名は保、自慢の可愛さに涼州の民はイチコロさ、ハッタリかまして
オヤツから涼州馬まで何でも揃えてみせるぜ！三国志に合わせるとこんな感じか？」

「いいと思いますよ、いや、保さんがハンニバルでしょ、なんでフ
エイスマンなの!？」

「リーダーには似合わないから董卓が生まれたらあいつ偉くなった
んだからハンニバルにするか、
問題はモンキーを誰にするか？頭がぶっ飛んでいるメカの天才だから
ら・・・。」

とりあえず特攻野郎Aチーム談義はいいや話を戻そう。

“もう一人の主人公なのに四話目にしてやっと出番が来るってふざ
けるな！作者出てこい”

と誰にだか分からないがとにかく叫びだしたいこと故上尾 司です。

話はほんの30分前、玉座の間でのご対面に戻りまして。

転生から別れて3年8ヶ月と14日ぶりに、ついに保さんと会えま
したよ、

周りから何処のノインだ！と突っ込まれそうですが気にしません。

それにしてもあの保さんが愛らしい顔していて目の前にやって来て、
「君と友達になりたい」って、どんな冗談かと思いましたよ。

前世での自分と保さんがサングラス姿で街を歩くと、渋谷や歌舞伎
町でも、

混んでいる道でも何もしていないのにモーゼみたいに人が避けてい
ったくらいなのに。

まあ向こうも前世での見た目の欠片もない可愛くなった私が、
「僕なんかで良ければ友達になって下さい。」発言に笑いそうだったのが。

懐かしい、早く保さんに突っ込みたいし積もる話もしたいがどうすればいいか。

「知りあってすぐに友達になれてよかったは、子供達だけで話したいでしょうから、

孟高、文優君を貴方の部屋に案内してあげなさい、あとで部屋にお茶と菓子を持っていかせますから。」

“おお、ナイスアシストよく分かっているぜ保さんのおばさん”

ギロツ

一瞬だが今にも射殺さんとはかりに睨まれたぞ、心を読まれたのか！？

保さんに手を引かれて玉座の間を後にし保さんの部屋へ。

「今時、劇団ひまわりでもあんな大根役者なガキはいないでしょう。あと、おばさん怖すぎ、保さんのおばさんと思ったら視線だけで殺されそうだった。」

保さんの部屋について周りに人がいないからいつもの喋りにする。

十年以上の付き合いであり笑いながら気楽な口調で喋る。

「女性に対しておばさんはあかんだろ、実際若いんだし、それにしても

自衛隊員が僕って!?” “自分は”でなくて? あとおかんは宝塚か?”」

「現役自衛官でなくあくまで元防医卒で今は医官ではなく親の跡継いだ、

単なるしがない開業医ですよ、間違えないでくださいよ。

あと宝塚言うなく! まあ、いつ歌って踊り出すんだと何度も思ったが。」

そんな私の発言に対しニヤニヤしながら保さんが口を開く

「うわー、なんて厭味、あんなでかい総合病院の後継ぎがしがない開業医って、

それ以前に今はって、死んだのもう3年以上前なんだから前世と言うべきでは。」

「保さん突っ込みが細かい。嫌味というのが金持ちなら保さんの家の方がすごいじゃないですか。」

前世トークと特攻野郎Aチームで盛り上がるが、冷静に考えたら生産性がなさすぎる。

「保さん、とりあえずお互いの知っている知識やら現状確認しませんか?

時代がいつなのか、世界がどうなっているか話をしましょう。」

つい先ほどまでケラケラと笑っていた保さんも僕の言葉に真面目な顔になり

「そうだな、まずは現状確認をしよう、だがその前にだ。」

「・・・?????」

私が頭上に巨大な?を浮かべていると。

「姓は董、名は攉、字は孟高、真名は保、涼州へようこそ、そして久しぶりだ義弟」

「姓は李、名は儒、字は文優、真名は司、今までも、そしてこれからよろしくお願いします義兄」

「ああ、前世ではありがとうな、そしてこの三国志の時代でもよろしくな、会いたかったよ。」

前世で義兄弟の杯交したが、いつも笑顔な保さんが少し涙ぐみながら抱き締めてくれた。

自分もちよっと涙ぐみながら抱き締めて「会いたかったです。」

感動的なシーンですよ、普通ならば。

私の「会いたかった」の所で侍女の方がお茶とお菓子を持って部屋に来たのが、

男の子同士で涙ぐみながら抱きしめい「会いたかった」発言。

城内の侍女間で僕と保さんの関係が間違っただけでなく、

まさか、

大陸全土で売れに売れまくった伝説の大人気801本になるとは知る由もなかった。

。そんな未来を知っていたならこのシーンをやり直せたんだが・・・。

第四話、運命の出会いしちゃった？（後書き）

とりあえずこの話の主役である保と司がそろいました。

とりあえず司とかの設定は近いうちにいろいろ公表しようかと思ひます。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（前書き）

仕事中になんでこんな物を書いているのだろうか、明らかに仕事で悩んでいるんでしょうねえ。

みうらじゅん言うところのDSどうかしてらるですよ、とりあえずそんなDSな作者によるDSなお話が始まります。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？

―保―

地獄絵図です、ただいま隴西郡の城の玉座の間が地獄絵図ですよ。

あつ、どうも、やっと親友と合流出来たはいいが嫌な予感しかなかった董擢こと保です。

玉座の間が地獄絵図とは？何があつたか説明をしますと。

原因は先日、侍女に見られた私の部屋での出来事についてですよ。

私としてはやっと会えた友人で、つい感激して抱き締め「会いたかった」と。

ただ、侍女の方々に前世での親友であり義兄弟であり一緒に転生したが、離れ離れになっていてやっと会う事が出来たなんて事を知っているわけがなく。

今日初めて会ったのに泣きながら抱き締めあい会いたかったよ発言する私達

侍女達が皆鼻血を流しながら「ここはなんて桃源郷」と遠い目をして呟く独り言に殺意が。

どうやら私と司ちゃんは4歳目前にしてシヨタBL野郎と侍女達に認定されたようで。

私としましてはこの問題を早く解決したい、あと侍女達のリストラを検討したいのですが。

私だからリストラで済みますがこれが正史の董卓だったらどうなっていたでしょう。

侍女達の解雇とか話がそれているので話を本筋に戻しましょう。

シヨタBL野郎扱いと既にこの段階でかなり死にたい要素満載ですが、

侍女達だけならまだしもお互いの親に知られてしまったのが問題で。

これが私達がもし本当にシヨタBL野郎同士なら当人達の性癖の問題であります、

あくまでも侍女達の勘違い妄想、困った事に親達はエキサイト&エスカレートで罵りあいですよ。

「純粹だったうちの保君を返せ、この呪われたクソガキめえ！」

ついには冷静沈着不動の董君雅様と世間で言われている母上が斬馬刀で司に斬りかかろうと。

“駄目えええ、勘違いで私の義兄弟を殺しちゃ、って、間に合わないー”

母上の攻撃から司を守ろうとするが明らかに間に合わない、これではと思ったら。

ガギイイイーン

凄まじい金属音が玉座の間に鳴り響く。

母上の斬馬刀が弾かれている、斬馬刀の横っ面を司の母親である李肅さんが、
右斜め下から切り上げるように振り抜いたモルゲンステルンの打撃によって。

突っ込みたい、何処から取り出したんだモルゲンステルンなんか!?

大体あれは13世紀以降のヨーロッパだろう武器として誕生したのは!?

『兄ちゃん野暮な事は言いなさんな』

神の声ではないが、なんか謎の警告が来た。

警告を無視して突っ込もうとすると。

『その突っ込みをすると貴様は苦しむぞ! 李儒の母親役で何故李肅なんだ!』と、

李肅も董卓とは縁深いが何でもありの世界でもやるならば李儒の兄弟だろ、と言われたら。』

うん、この警告は素直に聞いた方がいい、警告を無視するとこの話が破綻という惨劇が待っている。

『安心せい、既に最初から破綻している。』

うるさい！！とりあえず、この天の声の言う事は聞いておこう、変な声だが。

“言葉でなく心で理解できた！”

母親達の戦いに戻そう、うん、ほんの数行程何も無かった事にしよう。

母上の攻撃をはじいた李肅さんが吠える。

「それは私の台詞であゝ、和が私の空を奪っただけでなく、お前の息子は私の大事な司を奪おうとするなんて、この薄汚い泥棒猫親子めゝ！！！」

“何を・・・何を言っているのか分からないよ、カヲル君”

自分の理解の範疇を越える李肅さんのあまりにもな発言に何処かの14歳の霊が降りてきたよ。

こうなったら取る手段は一つ、現実逃避だ。

“母上いけー私の心が悲鳴をあげているから、とにかく母上が勝って話を無理矢理まとめてくれえ。”

「貴様が勝手にうちの旦那に色目を使っているだけだ。泥棒猫は貴様の方だ!!」

母上の斬馬刀が今度は右から左への横薙ぎ、それを李肅さんが伏せて回避する、

そして、立ち上がるのと併せて母上に向かって突進、斬馬刀の弱点である懐に飛び込もうと。

母上危うし!?!?と見たらこの動きを読んでいて、横薙ぎ中に握っていた柄から手を離す、

手から離れた斬馬刀は一直線に飛び、轟音をたて壁に突き刺さる。

問題は斬馬刀が父上の顔面ギリギリ数cm脇に突き刺さっていたのが。

泡吹いて失神する父上。

戦いに目を戻すと母上は斬馬刀を振り回した際の遠心力を使って回転し、

懐に飛び込んでからの一撃とした李肅さんの攻撃を避けるだけでなく、

最盛期のフランシスコ・フィリオ以上の鮮やかな上段回し蹴りを決めた。

見事に決まった、蹴り決まって李肅さん吹き飛んでいったし。

「やったか!？」

母上その発言はいくらなんでもフラグです。

母上の見事なK・O劇を見ていた私、ここでふと私の横にいる司を見るとニヤリと黒い笑顔を。

これはヤバい、本能が伝えているこの馬鹿場を更にかき回すつもりだ。

一司一

私が黒い笑みを浮かべた事を保さんは気づいたようで、ただ、もう遅い。

「お母さんも董君雅様もやめて下さい、僕は保お兄様のことが・・・フガモガ」

「冗談でもヤメロー!」

久しぶりに会ったんだ、少くくらは保さんを振り回してあげないといけない。

保さんが僕の口を塞ぐが時既に遅し、途中までだがバッチリと母さんの耳に届いたな。

危険な賭けではあった、実際母さんを倒した董君雅様が振り向きこ

ちらをロックオンしているし。

「排除、排除、排除、保君に近づく悪い虫は排除する」

怖いドス黒いオーラが漂っている、だが、母さんと僕の絆を舐めてもらっては困る。

「た、た、ターミネーターじゃないんだから、なんで立ち上がれるんだよおおお。」

保さんの声に震えが混じっている、董君雅様が後ろを振り返るとそこには。

ペツと血の混じった唾を吐きフラフラになりながらも立ち上がる母さんの姿が。

「なんや今のが攻撃なんか、気合いの入った社交ダンスか、涼州者に洛陽で磨きぬいたほんまもんの暴力ちゅうもんを教えちゃう」

母さんが立ち上がったのは嬉しいが、何処の地域の人間だか分からない口調になっている、

あと気になったのはこの時代の人間である母さんが社交ダンスを何故知っている、まあいい。

「母さん、たとえ上司でも負けてはいけません。」

母さんが一瞬だけだがニヤリと笑ったのが見えた。

立ち上がったばかりの母さんに対し董君雅様が間合いを一気に詰め
トドメだと、
右ストレートを母さんのボディーにねじ込んだ・・・はずだった。
母さんは右ストレートをギリギリで避けてわき腹と左腕で挟んで抑
えていた。

「捕まえた」

母さんは空いている右腕で董君雅様のうなじの辺りをつかみ避けれ
なくしてから、
いったん上半身を背中側に思いっきりそらしてから頭突きを。

渾身の一撃が相手の顔面にめり込む、さらに一撃で終わりなく、更
にもう一発、もう一発と。

何発入ったのだろうか落ちていであろう董君雅様、それにたいし
血まみれだが母さんは笑顔で

「司が応援してくれる限り母さんは無敵だ」

そう言って母さんは倒れた。

一保一

お互いの母親の戦いがダブルK・O。勝者も敗者もない今回では
一番優れた答えが出た。

普段ならこれだけでよかったのだろうが、私も決着をつけないといけない。

「司くん、此処まで問題を大きくしたんだから覚悟は出来ているよね。」

逃げられないように右肩をがっしり掴む。

「争いは何も生まない、復讐なんて達成してもむなしくなるだけだ」

久しぶりに会えたから司ちゃんもテンション上がり過ぎてしまっ
て、
ついなんだろうね。

だから私も、つい、復讐をしようと。

とりあえずこれだけは言っておかないと。

「今からブツ殺しに行くぜ、小便すませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋のスミでガタガタふるえて命乞いをする心の準備はOK？」

まあ、とりあえずは死刑宣告したし、いきますか。

「アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリ
リアリアリ
アリアリアリアリアリアリアリ、アリーヴェデルチ」

実に空しい戦いだった、そして、この後どうすればいいのだろう、父上は気絶、母上はノックダウン、司はアリーヴェデルチ、玉座の間は廃墟と化している。

仕方がないからこういときは“そのうち私は考えるのをやめた”と。

ちなみに、この司の悪ふざけからはじまった戦いは保と司のシヨタBL評価どころか、お互いの家族を混ぜた壮絶な愛憎劇と侍女達の噂話で面白おかしく脚色され、

瓦版で、本で、お芝居で千年たっても語り継がれる名作になるとはこの時の保は知る由もなかった。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（後書き）

書いていて思った、酷過ぎるそうでも酷いが、
思い付きを文章にしてはいけなさと反省するばかりであります。

まあ、笑ってくれる人が一人でもいてくれたら幸いです、
皆さんのご意見、感想お待ちしております。

第六話、鎧誕生秘話（前書き）

今回はいつもよりは少しだけ真面目要素のある回です、とはいえ相変わらずふざけた内容ですが。読んで笑ってもらえたら幸いです。

第六話、鎧誕生秘話

―司―

今現在執務室ではこの涼州を統治する最高幹部が集まって会議をしております、

口調がなんで説明口調なんだって？それは言わないお約束です。

「前に話をしていた兵募集についての件はどうなりましたか？」

まずは太守として董君雅様が、筆頭軍師である池陽君様に。

「雇用対策も兼ねての兵募集ですが予算との兼ね合いもあり、希望人員の三分の一の千名の採用が適當かと。」

「軍を率いる人間としては各部隊の希望人数を出した故の三千人だが、

兵が多くても練度の問題も、100万とかで力押しするのでないから少数採用もやむを得ない。」

「財政面としましては、千人程度で宜しいかと、たしかに理想は三千名ですが。

現在は羌族との関係も良好で、他州とのいざこざもなく兵数がさほど必要ないかと。」

「警備部は今の意見に反対です、兵の数が今は足りていても明日は？ならば明後日は？と将来は分かりません、実際州内でも治安悪化の報告が。」

警備部が募集するのは、今回の兵はただ戦争で戦うだけの兵ではなく、

街の区画整理案とあわせて治安維持での警邏要員として役割が。」

警備部責任者は一旦話を止め、一口だけ茶をすすり話を続けていく

「また兵の維持費ですが当初の負担よりかなり減るか、

試験的に運用しております軍の演習を兼ねての隊商の護衛任務ですが、

隊商には護衛の対価として兵糧の一部負担をしてもらうことで、部隊は演習出来、隊商及び軍どちらにも利益があります。」

「軍師として疑問が、今までの兵より費用をかけないですむというが、

今回がたまたま上手くいき負担をおさえられた可能性は？」

「軍師が言われたように最悪を想定していくべきなのではないかな？と。」

各々の担当する職務に誇りがあり熱い議論が続くなか、ここで和様が

「色々な意見がありますし議論無き所に発展はないですから、

とりあえず議論は別として、保ちゃん司ちゃん子供らしく話なさい。」

「和の言うとおり、貴方達は自分達の可愛さが分かっていないの？」

「母上、なにも今言わないでも、ねえ父上からも言ってください。」

「ほら保も言っ「貴方は黙って下さい!!」・・・はい。」

真面目な議論が延々と続いているなかで途中から変な発言が。

あつ、どうも挨拶が遅れました李儒文優こと司です、

この間まで3歳でしたが、少しだけキンクリして5歳になりました。

『とりあえず歳をとらせたのは今のままでは話が進まないからだ。』

変な声が聞こえてきました、前に保さんから教えていただいた天の声でしょう、

これを聞いたらその件については触れてはいけないとのことですので、話をかえましょう。

なんで5歳児である私が執務室での政務を知っているかというとはいい、私も保さんも文官として参加しているからです。

これだけでも常識的に考えたならあり得ない事態なのですが、和様が保さんを膝上に座らせ抱き締めていながらで、私が母さんの膝上に座られ抱き締められているというのが。

保さんは会議の時に「どうしてこんなことになったんだ」とよく呟いています。

まあ、原因は前回のアレがきっかけですね。

私からしたら子供の可愛らしいイタズラだったんですが。

あれ以来僕は和様に、保さんは母さんに目をつけられたと言いまし

ようか。

監視の目がつき二人つきりになるのが許されなくなりました、冗談ですよと言っても一切話が通じない事態になりました。

「保君に近づく悪い虫は」と和様に殺気発しながら言われると怖くて。

保さんとこの時代についてや未来技術の発明についてこっそり話し合えなくなりました、ならば仕方ないと当初の予定では成人してからですがカミングアウトしましたよ。

小学校にも行っていないような年齢の子供が真剣な顔で話をしても、よくて子供の作り話と一笑にふされ、悪ければ頭がおかしいと。

最悪牢屋送りなり斬首の可能性があるかもと気が気でなかったですが、

「貴方は私がお腹を痛めて産んだ子供に違いないのですから安心なさい、

今まで誰にも言えなくて辛かったでしょうね、でもお母さんに秘密を話してくれてありがとう。」

言われて母さんに抱き締められた時は母の胸でワンワン泣きましたよ、

保さんも空様、和様に抱き締められて泣いていました。

それだけならば良い話でしょうがそのあと二人に説教が待ち構えていましたよ。

「お母さんになんで話さなかったんですがそんなに信用有りませんか？」

一番辛いのは、お母さんに正直に言わず嘘をついていた罰として、こちらでは子供なのだからお母さんに甘えなさいと言われたのは。

ダメージでかいです、四捨五入すると四十になるおっさんが、可愛い子供を一生懸命にやって媚を売るような仕草をするのは。

おでんと日本酒がしつくりくる年齢のおっさんですよ、目をうるうるさせて上目遣いしたり甘えるんですよ。

どんな羞恥プレイですかまったく。

この姿をビデオカメラで撮影されて披露宴で流されたら会場で即自殺ですよ、

まあ三国志の時代でビデオカメラが存在しないので助かりましたが。

――保――

この世界に転生してから私の考えでは話すつもりがなかった秘密だが、司の悪ふざけをきっかけにまさかお互い親に話す羽目になるとは。

“母への隠し事が相当後ろめたく、いずれは話したい”と言っていたが。

司は前世で家族という感じがしない家庭に育ったから、今の生活が嬉しくて仕方無い、本当の親子になれたと笑顔で語っていたのが。

こういう話をするという話だが、やはり司には色々とお返しをしてあげないと。

羞恥プレイが、とか言っているが、それはこちらの台詞だと、だいたいアイツは性に関しての器のでかさが半端でないのだから。

羞恥プレイなんて言っているが、それで喜んでいる変態に違いない、何故ならば私は奴について神から聞いているのだから。

転生直後に司がオムツかえられる事に喜びをみいだしていたのを、オムツプレイOKな人間が子供演じる羞恥プレイくらいいくだろうと。

転生、未来の知識はお互いの家族しか知らない秘密としましたが、それにしても技術を伝えるのがこれほど難しいとは。

私達が知恵を出して政務を執り行うにはいささか若すぎるのが、おかげで、私達が仕事をする時は家族しかいない時なのですが。

未来の技術を伝えるときなんか大変ですよ。

今日まで思い付かなかったものを発明するわけですから、

鎧の時とかやりましたよ、外で私が子供演技して鎧を作るまで。

「お母さーん、お馬さんに乗れないよー。」泣きつく演技

←

「涼州の人間が恥ずかしいぞ」厳しく怒った演技

←

「お母さんごめんなさい、でもお馬さんに乗れなくて、

足かける道具があれば簡単にお馬さんに乗れるのに。」甘えた口調で

←

「仕方ないな保は甘えん坊で、仕方ない望む物を作ってあげよう」
優しい口調で

←

「お母さーん、お馬さんに乗れたよー、お母さんありがとう、大好き」抱きつきながら

←

「これは馬を取り扱うのに便利ではないか、では軍で採用だ、保偉いぞ。」

この一連の流れが必要だそうで・・・。

「鐙の詳細な図面とかだけでいいのに、昼に描くからそれを夜に渡せば」と伝えたが。

私何も間違えたことも変なことも言っていないく常識的発言ですよ。まさか母上が絵コンテまで用意し更に演技指導まであるなんて。

嫌だと言ったら泣きだし始めた、仕方ないからやると伝える。

直前になってやはり嫌になってゴネたら「鐙なんかいらぬ」と言い出した。

父上がさすがにそれとは注意しに行ったら、どこで覚えたのかマッハ突きでぶっ飛ばされていた。

頭と胃が痛い、助けてくれ……。

あと司が陰からこちらを見ていてニヤニヤしていやがった殴りたい。

—和—

保ちゃんから聞いた鐙を作る為に保と打ち合わせをする。

鐙を発明までに不自然な流れがないか、完璧にする為一連の流れを教える。

私の考えた完璧な鐙が出来るまで物語を保ちゃんは要らないと言ってきた。

「保ちゃんが反抗期だなんてお母さん生きていけない」
と泣いたふりをしたら保ちゃんが「やりますから泣かないでください」と。

本当に保ちゃんは何が不満なのだろうか、この完璧な脚本が。

保ちゃんの可愛さを皆が知って、私は厳しくも優しい母親になって、
鎧が出来て騎馬軍団は強くなるし、保ちゃんが私に“大好き”と言
ってくれる。

当日になって保ちゃんがやはりやりたくないと言い出した。

「保ちゃんがやらないならば鎧なんか要らない」と言ったら空に怒
られた。

保ちゃんに大好きと言ってもらえない辛さが空には分からないのだ
ろうか、
意地悪をする空、頭にきたから保ちゃんが名付けてくれたマッハ突
きでぶっ飛ばす。

保ちゃんは良い子だから喜んで脚本通りやってくれた。

保ちゃんに抱きつかれて「お母さん大好き」と言われて鎧も出来た。
幸せな一日だったと布団に入る。

夜寝ていたら警備兵に起こされた、錬兵場でボロボロになった空が

見つかったと、
族が侵入したのだろうか城内の警備を嚴重にするように指示する。

第六話、鑑誕生秘話（後書き）

相変わらずどうしようもない内容ですが読んで笑っていただけたら幸いです、ご意見感想お待ちしております。

それにしても、和を出す話が勝手に出来上がるのは何故だ・・・。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第七話、発明するのはいいけれど（前書き）

今回は前回に続いて発明に関する話を。

とりあえず恋姫原作キャラをそろそろ出したいんですが。

第七話、発明するのはいいけれど

—保—

とにかく司にギャフンと言わせたい、まあ今時ギャフンはないだろうが。

そういえば何故ギャフンという擬音が誕生がしたのだろうか？

ボインという単語を大橋巨泉が発見した時のように、もう、これはギャフンとしか表現出来ないような何かがあったのか？

どうも、くだらない事に必死で悩む董家長男の保君です。

まあ、なんでいきなりこんな話なのかと言いますと前回の件ですよ。

単なる未来知識保有というイカサマチートで鎧作りしましたが、鎧が出来るまでにさんざん母上に振り回され続け泣かされましたよ。

それに対し親友である司はさすが転生先が“あの李儒”ですよ、一連の流れに困惑する私を見て助けずニヤニヤするんですから。

伊達に弘農王毒殺しようとする人間ではありません。

まあ、司に嫌味を言ってもニヤリと嫌な笑顔を見せて、

「親子の触れ合いを邪魔したくなかっただけですよ」と言われておしまい。

私の鑑の時みたいにくそ恥ずかしい寸劇やって色々発明しろよ、なんて思ってたやらせても司は動じなかった、普通にこなされた。

司はこの世界で絶賛マザコンだから母親が喜ぶならば平気なんだろう、変態め。

乗馬後に馬の脚を見て「お馬さんも靴が無いと蹄が痛そう」と目をうるうるさせて親の前で心優しき子供の演技を普通にしやがって。

それにしても寸劇やって可愛らしさアピールからの発明って、訳のわからん流れ作った奴出てこい説教してやると叫びたい！

まあ、母上が出てくるだけなんだが。

説教したいがどうせ泣かれて私が悪くないが謝っておしまいと。

「理不尽だあああー！ー！」

分かっている母上の涙はテレビでの上島竜兵の技と同じで、こちらが見ていない隙に涙ぐむという、見せるならぬ魅せる技なのが。

分かつちやいるが男はやはり女の涙には弱いという生き物で。

うん、女で失敗する人間だな、こんな発言しているようだ。

「保さんは女で失敗しませんよ、だってそれ以前に。」

いつのまにか親子寸劇から戻ってきた司がいた。

「心を読むなよ。」

「こういう時のお約束、口に出ていましたよ。」

そんな馬鹿な！？、これが“そんなバカラ！！”ならば、バカラ賭博中に警察に踏み込まれて捕まった芸人だったな。

「なんか下らない事考えていますね、顔に出ていますよ。」

「そっか、まあいいや、ハマらない理由は？」

「私も保さんの家も親が息子依存症と言っているくらいの溺愛」

だろうなあ、連れていくのが才色兼備家柄性格完璧な女でも、「うちの子は渡さない」の一言でおしまいだな、しかも運が良くて。

悪ければあの斬馬刀の出番だろうな、しかも、母上のことだから、ゼンガー・ゾンボルトみたいな名乗りをして一刀両断にと。

「我が名は君雅！董君雅！！保ちゃんに近づく悪を断つ剣なり！！、こんな感じですかね？」

あり得る、普通なら絶対にあり得ないが母上なら殺りかねない。

やりかねない、ではなく“殺り”かねない、此処ポイント、次のテストに出ます。

「なんであんな悪い意味で個性的なんだ。」

「そりゃ作者の都合でしょ？」

「いや作者も気付くと母上パートが勝手に出来上がっていると。」

「はあつつつ・・・」

お互い困った母親だなど子供らしくないため息をつくのだった、とりあえずメタな発言は無かった事として。

—空—

お久しぶりです皆さん、同じ夫婦なのに全く出番が無い空です。

うん、真名の読みが空そらではなく、やはり空くうだね、

家庭の中で話の中で存在感がない空気並みの扱いと。

こんな未来を予想して今は天国の両親は真名をつけてくれたんです

ね、

なんて先見の明があったんでしょうか、未来予知にも程があります。

グスッ、泣いてなんかいません。

私の涙は置いておいて、あと、やはり泣いてたという突っ込みはなしで。

今現在の涼州の状況とか開発具合について話をしますか。

まずは軍事から、

保達に教えられた鎧で涼州馬を活かした軽装弓騎兵の強化。

例えば軽装騎兵に必要な技術として一撃離脱戦法として、騎乗しながらの後方射撃のパーティアンショットを教えられましたよ。

訓練に教わった流鏑馬、笠懸を採用、騎上射撃の練度が上がりました。

司君が言うには「この時代最強の騎馬軍団が出来た」と、軍師としては大袈裟と思ったが、保達の知る世界の歴史では、約千年後に五胡達の子孫が短期間で世界の大半を支配したと。

まさか五胡の軍団が漢だけでなく大秦近くまで支配したなんて、

だとしたら、この騎馬軍団が世界最強というのもあり得ると。

さらにこれらに関する事で、流鏑馬、笠懸といった射撃練習で、保が、

「本当は犬追物もあった方がいいが殺さないとはいえ犬好きとしてやりたくない、

必要な訓練は分かるが犬を飼っていたから愛犬でなくても抵抗が。」

こんな発言をしていました、そんな保に対して司君が、

「犬好きな女性とのフラグが今の発言でたったね」と謎な言葉を。

一方、和は保に「犬に優しい保ちゃん、なんて可愛いのに。」と、これだけならばまだしも「犬が駄目なら虎がいるじゃない！」

「「何処のマリー・アントワネットの発言だよ！」」

と口を揃え保と司君が謎な突っ込みを叫んでいました。

まあ保大好きな和にかかれれば、保の為ならなんだってと、今から騎乗練習よと、弓片手に虎を狩りに一人で行くとは。

この後、うちの騎兵は虎退治出来ないと一人前と言われない、あり得ない強さの軍団になるとは思いませんでしたよ。

まあ、飾りや服の材料として使えるからと虎の毛皮、漢方の精力剤として性器が高値で売れ経理としては助かりましたが。

あつ、軍事に関する雑談で保が言うには司君は天才との事で、私からしたら保の頭の回転の良さや知識だって恐るべきだと。

司君の凄さという点で、弓もだが女子供でも簡単に撃てる弩があった方が楽だと言い出し、

元戎という連射出来る弩を発明したことが保には驚きだったようで。

保が言うには「存在したというが構造不明な物なのに、どうやって作ったんだよ！だから本物の天才は嫌になる。」

“ごめんなさい保、お父さんは泣いていいですか・・・？”

二人には未来知識があるとはいえ凄い発明を息するようにされると。

それなのに保が卑下するとそれ以下なお父さんの立場は・・・。

—保—

なんか父上が涙ぐんでいる、何かあったのだろうか？

父上に軍師として知的好奇心が刺激されるだろうと、釣り野伏せ、車懸かりの陣、

ハンニバルなど歴史的な戦術やら武将やら教えてあげることにした。

まさか父上が「保がいれば僕は要らない子なんだー！ー！！」と泣きながら叫んで母上の元に辞表を出しにいくなんて。

まあ筆頭軍師が子供に凹まされ辞表は洒落にならないと、説得されてしまったよ、母上の肉体言語ですが。

――司――

「足りない、足りない、とにかく足りない！！！」

ついつい叫んでしまった。

保さんと私が中心となって進めている涼州最強化計画が進まない、時間が足りない、人手が足りない、予算が足りない、ナイナイ尽くし。

軍事技術とならば黒色火薬、鉄砲、大砲、方位磁石、大陸全土の詳細な地図作成、細作網を大陸中に広げたり、バリスタやら投石器といった攻城兵器。

いくら予算と時間があっても足りないのが、予算が。

保さんが進める、商工業で莫大な利益をあげているが、うん、普通ならば十分すぎるどころではない利益なんだが。

とはいえ軍事、政治、商業、工業と至る部門で出ていく額がでかいのが。

しかも、困った事に涼州は偏狭なのに他の州より治安が良く景気が良い、

商売人だけならまだしも他の州から野盗とか流入するのが。

そうでなくても忙しいのに、子供が過労死しそうなほど忙しいってどういうこと。

とりあえず捕まえた野盗は取り調べ、経済難や悪政の被害からやむを得ず盗人になったなら、

勿論殺人、強姦等の重犯罪していないが条件ですが死刑ではなく懲役刑を。

そして牢獄内で建築など技術を教え出所後の働き口の問題を無くすようにしたりと。

それでも野盗が流入してきたり治安が悪化した時は皆叫びましたね。

そして、保さんが遂に壊れました。

「こうなったら見せしめにヴラド・ツェペシュ方式だ!!!」

犯罪者は生きたまま串刺しで州境にそれを並べるんだ!!」

流入する犯罪者は減るが商売しにくる商人も減るよ・・・。

本来は私と同じくボケなんだが今この作品では貴重な突っ込み役なのに、

まして、ボケである僕が突っ込みというかストッパーになるとは。

「保さん帰ってきてくれー!!!!!!!!!!」

第七話、発明するのはいいけれど（後書き）

前書きにも書いたがそろそろ恋姫キャラを出したいなと思ったはいんです、

ただ問題は今現在黄巾党すらまだまだ先なので出てきても赤ん坊とかになるのが。

それでは駄目だな、ならばどうするかと頭を悩ますばかりです。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第八話、天水からの刺客（前書き）

やっと恋姫のキャラを出せましたよ、いや、これを出したと言っているのだろうか。

詐欺だと言われても仕方がないレベルですいません。

第八話、天水からの刺客

—保—

三国志の世界に転生したはいが涼州隴西郡から出た事がない為、狭い世界での生に慣れ過ぎて正史ではなく外史なんだという事を忘れていましたよ。

まあ、両親の性別が入れ替わっているとか、私の存在や、李肅、李儒親子とかも酷いが、でも、そんなのが当たり前の狭い世界での生活ですよ。

あつ、名乗り遅れました董家長男の保です。

前置きでうだうだ言っていたのは今東屋にいて驚かされていたもので。

涼州に被害を出す？や羌への対策の報告で母上の友達がやって来たのですが、ちっこくて凄く可愛い現代だったらアイドルに余裕でなれそうナルツクスの娘さんが。

こんな可愛らしい人があの馬騰寿成だとは。

しかも、この人が馬膽と驚いていると、いきなり

「私はとお姉様の親友だから、真名は琅ろうかん？っていうんだけど真名交換しよう」

といきなり言われたのに更に驚かされた。

会って10分もたたずにフランクに真名預けて来るとか、なんだこの自由さ。

自分のどころか娘の馬超さんの真名も預けると言いだして、母上が真名をなんだと思っっているんだと怒ったら謝っていたが。

どうやら母上と同じ年という事だが、そうなると29歳でこの見た目に喋りとかって反則だろ。

背は150cm未満？の小さな体で、栗色の長い髪をポニーテールにして、

背だけでなくちっちゃな可愛らしい顔に不釣り合いな太い眉、年齢的にはアウトだが柔らかい言い方で成長途上という感じな胸、ギロツ

“怖っ！！！！！！” この世界の人間は心が読めるのか、めっちゃ睨まれた、ちびりそう。

ちびりそうな恥ずかしい事態を無かった事にして話を元に戻しましょう。

鮮やかなスカイブルーの上着に胸元にはオレンジのスカーフ、真っ

白なショートパンツ、
そして足元はスニーカー、うん突っ込まないぞ突っ込んだら負けだ。
この中学生と言っても通じるような可愛い見た目でピョンピョン跳ねるような動き。

何、この合法ロリな生き物は！？これで三十路直前の子持ちって。

「ええい連邦のモビルスーツは化け物か！」

あまりの驚きに大佐になってしまったよ。

A Vとかで「女子校生くく」なんてタイトルの女優のセーラー服に無理なのがあるが、
うん、ガチでいけてしまうな、年齢上問題ないがビデ倫審査通るかな？

体は子供、頭脳は大人のコナン君と同じですよ、

『お前と司なんか精神は大人とおり越しておっさんだろ！』

うん？今だれかに突っ込まれた、天の声か？

そういえばコナンで思い出したが昔A Vのタイトルで「チン探偵ポ○ン」ってあったらしく、

キャッチコピーが「見た目は子供、アソコは大人！」というのが、
誉め言葉としてどうしようもないな！と笑ってしまったな。

「何か今そっちの方向でどうしようもない不快な思考を感じたよ。」

「私の方を見ながら可愛らしく言っているが殺気だだ漏れなんです、こっちは見ないで。」

「ついつい母上と見比べてしまう、琅？さんが若すぎるだけで母上は年相応ですが、」

「まあ、最近母上は太守の仕事が大変で疲れて老けて見えると愚痴っていたが。」

「保ちゃん、何か言いましたか？」

「はい、先程の琅？さんよりも濃密な殺気が飛んできましたよ、ちびっと漏れちゃったよ。」

「な、な、な、何もないです母上」

「よし！ちびったことは無かった事にしよう。」

母上は若干ウェーブのかかった薄紫色の腰まで届く長い髪に、丸い輪郭に少しつり上がったキツイ感じの目付きに細い縁無し眼鏡、琅？さんの可愛いとは対照的なクールビューティーという見た目が。

「知的眼鏡いいねえ、って、実の母親に対して何を思っているのです、ようか私は。」

「保ちゃん、あとで一緒にお風呂に入りましょうね。」

急にニコニコした母上、母上の背景が一瞬お花畑になっていたね、
とはいえ、

何を言っているんですか！？今、言う事ではないよな、あとお風呂
一緒に恥ずかしいです。

母上がシュンと落ち込んでいる。

琅？さんが何があった？と言う風に首をかしげて、父上は何となく
わかったのか苦笑している。

それにしても琅？さんなんでまた馬超を抱えているの、あの錦馬超
がまだ赤ん坊ですよ、
産まれてまだ一年たっていないよね、なんで乳飲み子を連れてきて
いるの？この人は。

うちや司の親みたいに親馬鹿ならぬ馬鹿親で子供自慢なのだろうか？

自慢したくなるのも分かるかも赤ちゃんだが琅？さんの子供らしく
凄く可愛い顔してる。

ただ琅？さんの遺伝子をしっかり継いだ為か赤ちゃんとは思えない
立派な眉毛が。

琅？さんが馬鹿親として子供自慢で来たのなら良かったんだった
がなあ……………。

—琅？—

？がまた軍団で州境の村を襲ってきたけど派手にやり返してあげたから、

当分の間は襲撃は起きないですと報告しに隴西のお城までやってきたの。

本当は普段天水にいて会う事がないから報告という形で久しぶりにとお姉様に会いに来たの。

とお姉様も私が隴西まで報告しに來ただけとは思っていないみたいだけど、

普段冷静沈着なお姉様や空お兄様が私の考えている事分かっているかなあ・・・ニシシ。

？の件の報告は名目だからと分かってくれているから城の東屋で会ったんだけど、

私が翠を連れて来ているから氣を使ってくれて玉座の間ではなく、氣楽に出来る東屋にしてくれて、お姉様優しいんだから。

東屋に着く既にとお姉様に旦那さんの空お兄様、それにお姉様の自慢の保ちゃんがいたの。

今日は保ちゃんに要があって來たきたから、会っていきなりだけど、お姉様とは親友だから保ちゃん真名を交換しようと言ったら驚いていて可愛い。

あつ、それでなんだけど、和お姉様ったら酷いの

「私と琅？は親友ですが、いくら私の子供であるとはいえ、初対面の保にいきなり真名を預けようとするなんて真名の重要性を理解していないの。」

むー、和お姉様は頭が固いの、それだけならまだしも。

「まだ孟起ちゃんが産まれて間も無いのに天水から連れて来るなんて何考えているの。」

用件を話していないから仕方ないけど、翠連れてきたのは意味があるからなのに。

「あつ、説明する前にお姉様とお姉様の家族ならば、孟起でなくて真名の翠って呼んであげて。」

ゴチーーン

痛く痛くお姉様が本気の拳骨をしてくるなんて、あまりの痛さに涙がちよっと出ちゃった。

「琅？いい加減にしなさい、いくら貴女の娘とはいえ勝手に真名を預けるなんて。」

和お姉様が凄く怒っている、こういう時は謝らないと大変な事に。

「お姉様ごめんなさーい」

お姉様が仕方無いという感じでため息ついて真名の件でのお説教は

終わって助かった。

それにしても隴西にきた目的である保ちゃんを見てみるけど面白そうな子供なの。

初対面だからとはいえ、人見知りなのかこっちを値踏みするかのように観察していたり、何か私を見ながらすぐく失礼な事を考えているみたいだったりしているようで。

でも、私が保ちゃんをじっと見つめてみると急に照れて目線そらして可愛かったり、6歳なはずなのに行動に子供っぽさが無くてやけに大人染みていたり変な子供なの。

保ちゃんは3歳までに読み書きとか学び終えていて、今は孫子とかを勉強しているなんて、孫子なんてお姉様に読みなさいと言われても面白くないから嫌になっちゃう本なのに、凄いの。

「ゴホン」

私が考え事しているから和お姉様がわざと咳払いして注意してくる。

「今日はわざわざ天水から隴西まで？の件で報告しに来たのですか、既に無事鎮圧も終わり報告の書簡も届いているのにわざわざですか

？」

とお姉様が直球で聞いてきた、私としてはもっと溜めて溜めて溜まりきったところで、

ドカーーーーンと爆発するように驚かせたかったのに。

仕方がないから今日ここまでやってきた理由を告げる。

春の日差しを浴びながらと心地よい気温の東屋が一瞬で北風吹きさぶ真冬になっちゃうなんて。

お姉様が保ちゃんを大事にしているのは聞いているが、まさかこんなだなんて。

一空

数日前仕事をしていると、天水からわざわざ琅？が？の件で報告してくる、

という報告の書簡が届いた時から猛烈に嫌な予感がしていたのだが。

見た目だと年齢は全く違うが、実際は和と同じ年であり、三カ月しか誕生日が変わらないのに、

琅？は「とお姉様」と呼ぶのが、和がお姉様と呼ばれる度に不機嫌

になるのが、

和もまだまだ若いのに歳を気にするなんて。

まあ和に言わないが、言ったら怒られるのは嫌なので、君子危うきに近寄らず。

琅？が来るといつも何かしらの騒動が起きているから、当日は朝から胃が痛くなる。

産まれたばかりの孟起ちゃんを連れて報告しにやってくるというから、

確実に？の件で来たのではないのが分かるので堅苦しい玉座の間ではなく東屋でお茶しながらと。

琅？が涼州の軍事の責任者の一人であり、責任者とはいえ琅？は知らないのもので、

軍師である私の補佐職にあたる保を立ち会わせたが、なんでそんな判断をしたのかと。

結果論にしか過ぎないんだがあの時の判断をした私の馬鹿さ加減に嫌になる。

まさかあんな問題発言があるとは……。

「とお姉様、保ちゃんと翠を将来結婚させたいの。」

ピシッ[°]と音がして東屋周辺が凍りついてしまうとは。

第八話、天水からの刺客（後書き）

馬膳さんのキャラや口調をどうすればいいか分からなかった、喋りや性格は蒲公英、戦いに関しては翠というイメージが。

分かりやすいベタな展開の話ですいませんでした。

皆さまのご意見ご感想お待ちしております。

第九話、保君頑張って考えてみる（前書き）

ギャグにもシリアスにもなりきれない中途半端な文章になってしまった。

相変わらずな駄文ですが、もしよろしければ読んでみてください。

第九話、保君頑張って考えてみる

—保—

皆さんは子供の頃夏休みとかで楽しい思い出はありましたかか？

私は夏休みとか長期休みになるのがいつも憂鬱でしたよ。

大抵、休みになった初日の夕食の際の母親にいきなり言われるんです。

「馬乗りに行く旅行に申し込んでいるから、“明日”から“三週間”行きなさい！」

事前にそんな旅行の話無し、いきなりですよ、こちらの予定関係なしですよ。

家族全員と旅行ならいいじゃない？いいえ、私一人だけで行かされるんです、

そういえば家族旅行の記憶ないですよ我が家、いつもみんなバラバラで。

ホテルや旅館に泊まって乗馬でしょ優雅なものでしょ？

自分達が世話する馬のいる厩舎の二階に毛布でくるまって寝る生活です。

当日朝集合地点に着くと日本中から私と同じく死んだ目をした子供達がいて。

着いた先は、テレビもねえラジオもねえ車もそれほど走ってねえ♪あの歌が笑えない、ほぼそんな場所なんだ、そんな牧場で生活スタート

朝5時前に起きて馬の世話して、一日中馬に乗って、飯喰って、寝るの繰り返し。

辛いのは厩舎掃除、尿と糞の臭いがね、まあ人間みたいにトイレ行けないからしかたないが。

あと馬の世話している時によく蹄で足を踏まれたがあれも痛くて辛いんだ。

人間より重たい体重で踏まれるから挟まれた足を引きぬく事が出来ない、

馬の足をどこかそうとしてもどこかしてくれない、足を持ち上げようとしても子供の力では無理。

馬は臆病だから大声出してはいけけないと注意されているから、怒鳴らないように
必死で我慢しながら馬の首筋撫でたり機嫌にとって足をどこかすようにしたりするのが。

馬にずっと乗っているから尻と太ももの皮がべろんべろんに剥けて痛いし。

落馬なんか最悪でしたよ、砂まみれになるは落馬の痛みで動けないは、

だからロデオとか見る度に馬鹿じゃないか、と思ったりしますよ。

あと痛いでないが精神的に疲れたのが、全国から集まった子供達の歳が違うから、
歳上で威張ろうとするのがいると嫌な序列が出来ていて、気疲れ。

実に苦い思い出だね、長期休みに地元の友達と遊んだ記憶が全くななし。

そういえば他にも山でテント生活二週間なんてのもやらされたりしましたよ、

今日は川で魚を捕まえられないと食料無しになるとか、

ライター、マッチ何それ？どうにかして火をつけないと生の川魚だよ、とか。

冬だとスキー、苗場とかあんなおしゃれなゲレンデではなくて、荷物背負って山岳スキー、冬の雪山を攻める一員なの子供なのに。

ただこれらのおかげで大抵の事が辛いと思えなくなりましたよ。

乗馬やらサバイバルとかさんざんやらされたせいで三国志の世界に
来てもあまり苦勞しないのが。

三国志の時代なんて不便だろうと思ったら意外と平氣と。

そう考えると偶然なんでしょうが、私の幼少期って英才教育？、
三国志の時代に送り込まれてもやっていけるようにするための。

どうも作者・・・もとい、主人公の設定である子供時代の記憶に現
実逃避していた保です。

なんでこんな現実逃避かって言わせないでくださいよ。

馬膳様が娘の馬超ちゃんを連れて城に来たと思ったら、
母上に“私を馬超の将来の婿に”と言い出して場が凍りついたから
ですよ。

馬超ちゃんはまだ1歳にもなっていないのに早すぎ、まして私は体
は6歳ですが、
転生してますから心は39歳ですよ。

もし馬超ちゃんと結婚することになったとして式あげる頃には私の
心は還暦間近ですよ、

子供が成人した頃には下手すれば、ではなく確実に心はジジイですよ。

いきなりなんでまたこんな話になったんだ。

――空――

誰か助けてください！！

保を取られるという妻の怒りの殺気が凄すぎて気絶しそうです、
今にも琅？に切りつけかねなさそうなのが。

妻の暴走も怖いが、理由もなくこんな話がくるわけではない、何故なのか考えろ私。

今回の話が来たのは何故だ？

やはり羌側からなのか？

漢王朝が異民族対策をしろと漠然とした指示してきたのを利用し、殺しあうのではなく異民族も取り込み融和しようとやってきたが。

こちらには羌族との混血である琅？がいるので交渉役になってもらい、

食料や家畜飼料の支援することで羌族とは良好な関係が築けている。

ただ、今は良好な関係を築けているとはいえ羌族も次の世代になっても融和政策が続くのか？

それに対する手段で羌の人間でもあり漢の人間でもある琅？の子供である孟起ちゃんと、

融和政策の指導者である董君雅の息子である保を結婚させようとした？

羌族と保で婚姻だと漢王朝は反意有りか？と難癖をつける可能性があるから。

実際、王朝の目の届きにくい遠方である涼州で異民族対策でと募兵し続ける、

それを好ましく思わない人間が洛陽に多いのが。

しかも、兵を集めながら異民族打倒ではなく融和なんてやっている、それで羌とうちの家族が縁組みとなると漢に対し反意有りなんて騒がれかねないのが。

ならば、これが羌にとっての次善の策として提案されたのか？

琅？の策だろうか？天水郡も琅？みたいな漢王朝寄りもいれば韓遂のような反漢王朝もいる、

表立ってはまとまっているが一皮むけば一枚岩でないという状態にある。

太守一族と縁組みすることで威光を利用して天水をまとめるつもりなのか？

うむ、提案された理由が分からない、では、この話を受けたらこちらの利益は何か考えよう。

羌族との安定した関係の維持、涼州に鹵向かう匈奴・？対策に集中出来るというのが。

精強で名高い馬膽率いる軍団を再編して取り込めるというのも大きい。

お互いに利益は大きい計画としては荒い計画だ。

琅？は羌族との混血で羌の協力者だがやはり漢の人間である、どちらか一方にたてるのか？

和や私がいなくなった後に保が涼州を継ぐ保証はない点、保が方針転換する可能性。

だが、一番の甘さは、和の保好きを甘く見すぎたなど。

和の保好き度は、いざとなったら一人で五胡全軍を相手するとか言いかねないくらいなのに。

和を見てみる相変わらず怒りで殺気が凄いが私のように何故この話がと考えているようだ。

そんな状況で肝心要の保を見ると、子供らしくないため息をついていた。

—保—

母上は今にも怒鳴りだしそうだが必死でこらえている、父上も母上もどちらもなんでこの話が出たか悩んでいるのかな？

うーん、こういう時は一旦検討するといって翌日以降持ち越しにして、

お互いの考えや今後の対策をじっくり話すべきだが、母上がその前に限界迎えそう。

私の正体を隠したいから出しゃばりたくないが早く終わらすために仕方ないやりますか。

「はあっ」

ため息をついてしまった、ため息をつくとき幸せが逃げるとよく言うが。

私のため息に両親が反応する、アイコンタクトでここは任せてと伝える。

伝わったか不安だったが、両親共に頷いてOKしてくれた。

「本命の案は羌への支援拡大ですか？」

馬膳さんが明らかに驚いた顔をしている、やはりそっちが本命か。

囿の提案である婚姻が成立すれば万々歳、だがあくまでも最初に無理難題を出して、断られていいようにして本命の対案として支援拡大案を出して了承させると。

まあ、よくある手段ですね、単純だが効果がある、囿を使う事で、答えは何個もあるはずなのにこれしかないと思えてしまうんだよねあ。

うーん、私をだしにされたのは面白くないので少し苛めてみましょう。

今までたんなる子供だと思っていた子が腹の底読んでいたなんて不気味でしょうねえ。

親達も驚いている、まあ、私の正体を隠す為黙っていると思ったら私が話し始めるんですから。

ここでまたわざと可愛らしい言い方してみますか。

「お腹がすいた羌に涼州がご飯を上げたら他の子供達は羨ましがらないのかな？」

こっちに支援拡大要請するのはいいが、五胡は一つにまとまった民族ではなく、

あくまでも漢王朝に認められなかった異民族の団体ですが、羌がこちらに近づきすぎたらどうなるか。

馬膳さんは羌出身だが今は馬膳さん個人があくまでも涼州の軍人として戦っているだけ、

だが羌がこちらに近づいてきたら他はどう思うか、涼州の前にまずは裏切り者から血祭りになんて事も。

「お腹すいたら涼州のご飯食べて遊んだら仲良し、でも今までの友達と仲良くできるの？」

あと他の民族がどう思うかではなく、羌の部族の人間が涼州と組んで他の部族と戦えるのか？

馬膳さんの表情がどんどん変わって言っている明らかに動揺している。

うちからの支援が拡大するとなるとどれだけのリスクが増えるか計算しているだろうが、

これくらいで動揺するなんて、見積もりが甘くないかなと、こちらにはまだまだ手段がある。

いざとなった時の涼州の提案は今の政策と相反するが強烈なもの。

羌が？を売る事で漢王朝に服従したとか情報を流したり、優遇すること、

こちらではなく彼ら自身潰し合わせ弱ったところを一呑みするとか。

「白い猫でも黒い猫でも鼠を捕る猫は良い猫ですよね。」

涼州に従ってくれるならば何処の部族だって、邪魔なら切れればいいだけ

無邪気な感じで言ってみる不気味に感じるだろう。

単なる子供がこんな事言う、ただその子は太守の息子、まさか太守達も同じ意見なのか？

子供が考えているのではなく太守達の本音だと普通なら思うな。

会った直後の軽い感じではなくなっている馬騰さんのまわっている空気が。

私が一方的に殴り続けているだけですが、そろそろ助け船を出しますか。

「馬騰様言葉が過ぎましたことをお詫び申し上げます。」

急に私が謝るから、どうすればいいんだと一瞬ポカンとしている。

「謀に対しては謀をと、つい、からかってしまいました、お詫び申し上げます。」

こちらの本意ではない事を伝える、まあ、こうなるとそう簡単に信用できないだろうが。

「羌への支援拡大検討させていただきます。」

一旦言葉を区切り馬膳さんの顔を見してみる、どういう腹積もりかと判断しているのか。

「馬膳殿はまだしも羌の方の中には仲間と戦うのは辛い方も多いでしょう、ですので、

対価は？など他の部族への不可侵および貿易の交渉説得、および牽制の協力をお願いしたいのですが。」

正直協力など無くても？などは食いつくでしょう。

今回も追い返され涼州には敵わないというのが分かっている所に、涼州だけでなく羌が説得に来れば、まして隷属ではなく不可侵と貿易という形ですから。

まあ協力してくれている羌の顔がたつようにしないと。

とはいえこちらは交渉の場に軍を連れていく砲艦外交をやるつもりではあるんですが、争って全滅よりかは手を取って飯を食う、の方が選び安いでしょうし。

馬膳さんが急に私の前に立ったかと思うと跪いて

「董擢殿への数々の無礼深くお詫びします、我が姓は馬、名は膳、字は寿成、

私の真名琅？を董擢殿にお預けします」

ふう、どうやら今回の騒動の解決の目処がついたようです、今後の異民族対策の方針もつきましたし。

問題は涼州の最高責任者である両親の目の前で、私が相談することなく、

勝手に異民族対策という大問題で話を進めているのが。

こんな独断専行したらどうなるかな、うん下手すりゃ、下手しなくても処刑されかねないね。

さてどうなるのかなあと思ったら、別の問題が起きた。

「異民族問題は目処付いたから良いけど、結婚しないの？董家も馬家も安泰するよ。」

「何故今日はいないはずのお前さんがいて、話に混ざろうとしているんだ司くーん」

「休日だった母親と買い物していたが面白そうな事ありそうだから

きたの、
そしたらこんな楽しい事が、ちなみに最初から見えていたから、そこの茂みから二人で。」

李肅さんまでいたよ、オイオイ大丈夫なのかこの城と思っていると怒声が。

「やはり我慢出来ない、どんな理由であろうと保ちゃんに近づく悪い虫は取り除かないと、
保ちゃんのお嫁さんは私なんだああああああ。」

うん、聞こえてはいけないような発言が聞こえたような・・・。

とりあえず、遂に母上が斬馬刀を引きぬき琅？さんに襲い掛かった、あつ、止めに入った父上が一撃の元に吹き飛ばされた。

どうするんだよこれ、とりあえずは原因である司をぶっ飛ばすか。

「司君すこしO・H A・N A・S H Iしないとね。」

いろいろあったが、今日も涼州は良くも悪くも平和です。

第九話、保君頑張って考えてみる（後書き）

うん、本当にシリアスもギャグも中途半端な話になってしまった、うん、馬膾の理由も覚悟も無しだな、ご都合主義にも程がある反省と。

ちなみに幼少期の思い出は誇張無しです、普通とは無縁だったなあ・
・・しみじみ。

みなさん今回の話もお付き合いいただきありがとうございます、皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。（前書き）

うーん、今回もギャグが少なめ、シリアスな文章を書けず、ギャグも半端なんですけど読んで楽しんでいたただけなら作者冥利につきます。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。

ザッザッザッ、砂地を速いテンポで元気良く駆け抜けていく二人の足音が響く

「まだまだ先は長いから飛ばしすぎないでね、吸って吸って吐いて吐いてだよ。」

ドタドタドタ、先程走り抜けた二人とは対照的な重たい足音が。

「おらっ、とつとと走れ走れノロマ共が！いつも馬に乗れると思っ
たか！」

「「「「はいっ！！！！」」」」

更に走り続ける

ザッザッザッ

「二人共若いんだからもっと足を上げて元気良くいくよ」

「「はいっ」」

ドタドタドタ

「遅いんだよ、早く走れ騎馬隊にケツを槍で刺されたいか！」

「「「「ヒーーーー」」」」

ザッザッザッ

「二人はあと五周だから、ここから更に飛ばしていいですよ。」

「「はい!!」」

ドタドタドタ

「二人に抜かされた奴は罰でもう五周と昼飯抜きだからな!」

「「「「「ウギャーーーー」」」」」

城壁の周りを元気良く競争するちびっこ二人、それに対し、
バテバテになりながら走る大人達、その後ろで追いたてる少女?

一司一

「第三者視点で見ると凄い絵面だな。」

「どうした司? 急に独り言なんて」

独り言が聞こえたらしく競争していた保さんが速度を緩め話しかけてくる。

「たいしたことじゃないんですが、訓練風景を端から見たら異常だなと。」

「たしかにガキが元気に大人が悲鳴、見た目少女が怒声って。」

こゝんにちは僕司君です！！

ドラ○もんっぽく名乗ってみました。

勿論ドラ○もんはのぶ代ですよ、わさびは認めません、ちなみにサ○エさんは日曜日だけでなく火曜日にもやっていましたよ。

火曜の方はお隣が浜さんでしたが、たしか浜さん家は画家でしたっけ？

周りを見ると日曜日のサ○エさんしか知らない人ばかりって僕も年老いたなど、知らない人に説明するならば火曜日が外史、日曜日が正史？

多分正史は新聞連載なんでしょうが。

サ○エさんトークは置いておいて状況説明をしましょうか。

只今琅？さんの部隊に混ぜてもらっての訓練中でございます。

もうすぐ8歳になりますが少しずつですが人外に近づいてきております、

兵隊さん達軽装にたいして子供が重装備で更に重り背負って圧勝ですから。

まあ圧勝も当然なんですが転生引き継ぎしてますから生まれた直後から大人の体力、

それに鍛えた分強くなれる成長限界突破これだけでも反則。

あと異常な健康ですよ、これがチート具合を加速させていますよ。

普通ならば運動↓筋肉痛↓二、三日間休憩して超回復↓筋肉太く

こうなるはずなのですが

激しい運動↓筋肉痛になる前に回復↓筋肉ついている。

成長限界突破ですから、このままいくとオーガどころか、

80歳とか普通ならジイサンだがフリーザ様並みになりそうで。

『久しぶりです神様です、フリーザは無理、ただし江田島は余裕』

おい、いきなり念波で語りかけないでくれ。

『たまには出番をと思ってな、そんな話は置いておいて、転生前に話をしていた武器をいい加減に取りに来い。』

どうやら私達二人の鍛練の成果が出てきたようで、神が用意する武器を取り扱えるようになったようです。

『あつ、神具はさすがに今程度ではほとんど無理だから。』

むう、ままならないものです、ならば何故呼んだと。

出番が欲しいなんていったらファリスの牡牛でこんがり焼いてやる。

『それは怖いぞ、私は死なない分永遠と焼かれるのは。』

やはり出番欲しさか、いつか殺ってやる。

とりあえず武器を手に入れるにはどうすればいいか尋ねると、城下町の武器屋、鍛冶屋が並ぶエリアに来れば分かると。

保さんに神と会話したことを伝え、午前の訓練が終わったら街に行こうと。

この後の訓練で組手となり保さんと二人一組で琅？さんに挑んだが、ボコボコにされ過ぎでしたよ、あまりにやられ過ぎて途中の記憶が

ない。

琅？さんは得意の槍を使わず無手で、私と保さんが馬上で使うのに便利だと習っている槍で。

普通は刃を潰した槍なんだが真剣ですよ、危ないと思ったが。

そんな心配まったく要らなかったですよ、かすりのかの字も無かったです。

私達の実力としては、琅？さんに毎日鍛えられている兵隊に余裕で勝てるんですよ、

小隊長クラスでも余裕で勝てますよ、いやまあ、調子にのっていたわけではないが。

でも、これだけボコボコにされるとは。

多段突きを全て紙一重で避けられ槍の柄を掴まれたと思ったたら投げられた保さん。

私は今がチャンスだと保さんを投げた瞬間を狙い背中から切り上げるが、

振り向きざまに裏拳で槍頭をぶっ叩かれはじかれ「残念」と言われ懷に飛び込まれ鳩尾に一撃。

避けられ、捌かれ、白刃取りされ、小突かれ、蹴られ、投げられ

本当にここまでやられているのにこれでオーガ以上になれるんでしょうかねえ。

ハッと気付いたところには全身ズタボロですよ、普通なら余裕で全治一ヶ月とかでしょうが、このふざけた回復力のおかげでなんとかなるのが、明日には完全回復しているでしょうし。

それにしても七歳児がここまでボロボロになりながらも向かい続けている姿に、

琅？さんに率いられていた百戦錬磨の兵達がビビってしまうとは。

うーむ、体力だけは凄くても技術がまだまだですよ、回復はするが痛い物は痛い、

手っ取り早く強くなれませんかねえ、とか無理な事を考えてしまう。

とりあえず午前の訓練が終わり、昼食を済ませて午後から街に出て武器をもらいにいきますよう。

一空一

保と司君が琅？の訓練を終えて戻ってきた、まだ小さい体なのに強くなりたいと頑張る、

親馬鹿な意見だろうが二人とも恰好いいじゃないかと思ったが、姿

を見てさすがに引いた。

食堂でご飯を食べるのは良い、せめて顔を洗い治療して着替えてから来てほしい。

顔は青あざだらけ、鼻血を流したのにふき取っていないから血が乾いてこびりついているは、服は破れ、ご飯を持ってきた侍女達があまりの姿に卒倒しているのは。

保も司君も私なんかより頭がいいのだが、常識がいささか不足しているというか。

どうしてこうなったのだろうか。

あと、今の保を和が見たらどうなるだろうか、不安で仕方がない。

噂をすれば影がさす

「保ちゃん、司君せめて顔洗って、着替えるくらいしなさい。」

「「「「えっ!?!」「」「」」」

食堂内にいる皆が驚いている、訓練だとはいえこんな姿になっているのに。

絶対に何処からか取り出した斬馬刀を片手に握りしめて、

「琅？いますぐ出て来い、保ちゃんの敵は叩っ斬る」位言うはずなのに。

「あなた・・・」

まさか私が斬られるとは・・・。

一保一

昼ご飯食べたのですが何を食べてもレアステーキを食べているのか血の味しかしないです。

あと父上が母上の斬馬刀でまさに叩き斬られていました、あれはいくらなんでも。

アンデルセン神父並みの回復力の私でもあれは無理かも、なんで父上は無事なのだろうか。

とりあえず父上への疑問は置いておこう、司連れて武器をもらいに行きましょう。

武器屋鍛冶屋が集まっている所にいけば分かると聞いたがどんな店なんでしょうか。

区画整理を行い業種毎に固めた為、この一角に来ると鉄を打つ槌の

音が至る所で聞こえる。

そんな一角に明らかに不釣り合いな建物が、

明らかに違うねえ、武器屋だよねえ、なんでコンビニっぽいの？

自動ドアだよ、何これ？

テンテンテンテンテテンテレレレレってあの曲が流れたらファミマだよ。

でも、武器屋だね什器に並ぶ物が一番くじでなくて青龍刀とか飾つてあるよ。

秋葉原にはエロのコンビニがあったが、涼州には武器のコンビニがあるとは世界は広い。

そんなくだらない事を考えていると見た事ある人間がやってくる。

『おっ、来たか』

おいっ、神、自称でなくて神なんだろ、なんでお前がいる。

『久しぶりに会いたいと思ってな』

「出番欲しいとか言ったら八つ裂きにするからな。」

明らかに司が不機嫌だ、もうすこし友好的にいかないと。

「お前なんかの出番があるのに、なぜ母さんの出番が無いんだ。」

うん、不機嫌になるね、このマザコンは。

拠点話で司親子の休日とかやりたいとか言っているが何が面白いんだとかいうくらい平凡だったし。

あまり変な話をしていると話が進まなくなるので武器を見せてくれと。

じゃあ、奥の部屋に来てくれと、どう見ても冷蔵庫裏に向かう扉だよな、ついたら真っ白な部屋だ。

俺と司が転生前に呼ばれた部屋だ、何処までもどこまでも真っ白な床と天井しか見えない部屋。

『この携帯に望む物を言えば武器が出てくるぞ』

まさかあれかなと思い、神から渡された携帯らしき物体に「武器を」と伝える。

やはり見た事ある奴だった、マトリックスで武器出て来るところだ。

端からものすごい勢いで武器満載の棚の列がやってくる、ギャグな作品だから、

その棚に吹っ飛ばされるくらいありえるのだが無事だった。

とりあえず感想としては武器の準備やり過ぎだ。

こっちは未来知識を総動員してこの時代に無い武器を作ってやろうと黒色火薬を作って、火縄銃を作れないか研究してるのに普通にXM109ペイロードやM134とかあるよ。

歴史がひっくり返るよ、まあ既に自分達がいっきひっくり返しているか。

でもM134には夢があるね、バッテリーと弾丸背負ってこれで戦う、プレデターでもターミネーター2でも使われたし、格好良かったのが。

フル装備で100kg超えて反動もあるから現実では無理なんだが、子供ですらあり得ない体力というこの世界なら使えてしまうのが。

憧れを取るか？チートをある程度抑えるか？

やはりこの時代で使えそうな武器を捜すか。

そうおもって三国志的な武器を捜していると見つけた三国志の世界ならばやはりこれか、

実際にはまだこの時代には無いはずだが、まあ演義で存在する方天画戟を手取る。

あとはこれは私の趣味だが流鏑馬やったりするので重藤弓を。

武器はこの二点でいいやと思い、暇だから部屋中の武器をしてみる、黒漆五枚胴具足、メルカバ、グルカナ이프、潜水艦やらなんだってあるよ。

ピアノ線まであるよ、本来はキャタピラ潰すくらいしか使えなさそうだが、一応もらっておこ、ピアノ線使っていざとなったらピアノでも作るか。

『ここは武器ならば何だってあるからこそ、そのコンセプトからコンビニにしたんだ。』

“絶対に嘘だ！！” 後付けの理由に違いない、目立つ為とかそんな程度の理由に違いない。

神に対し内心突っ込んでいると「これがあつたんだった！」

司の声が広大な空間に響く、少し離れた所にいた司が何かを手を持ち咥いている、

「三国志の世界ならばやはりこれか」なんか方天画戟見つけた私と同じような事言っている。

司が手に取っている本をこちらに見せてくるまさかあの“太平要術の書”とは。

「三国志でも演義でだがこれと張角の身柄をこちらが事前に抑えていたら黄巾党の乱起きるかな？」

黒い笑みを浮かべながらの発言である、だが、正直実に面白そうなたくらみではある、
こっちが黄巾党を立ち上げないようにしたら発生するのか気にはなる。

三国志のI Fの世界であるならば楽しまないともったいないなと二人で意見が一致する。

こんな風にして武器を手に入れるのだった神の『ロンギヌスや草薙の剣はいいのか？』

あまりに物騒な単語が聞こえてきたので聞こえないふりをしてコンビニを後にするのだった。

司は鉄扇と太平要術の書と二点だけ、意外と二人とも欲が少ないんだなと改めて思った、

とはいえ、伝説の物体である太平要術の書とか手に入れている段階で欲深いか。

自分達の事なんだが、はてさてこの三国志の世界をどういじれるの

かな、楽しみではある。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。（後書き）

とりあえず太平要術の書を出してみました、いくらご都合主義だとはいえ

ちよつとこれはという感じになりましたが。

この話を読んで笑っていただけたならば幸いです、ご意見ご感想お待ちしております。

第十一話 絶対に負けられない戦いがある（前書き）

とりあえず恋姫キャラを更にどんどん出していこうという事で更に話を進めてみました。

相変わらず壊れたメンバーばかりで收拾つくのかと作者ながら悩むばかりであります。

第十一話 絶対に負けられない戦いがある

一司一

こんな保さんを見たくなかった、なんでこんなことになったんだよ・
・。

保さんの色々な姿を見ていると面白いですよ。

前にも話しましたが、アーアーな人たちが集まるサウナに騙して連れて行き、

“自分の貞操の危機が!?”と怯える姿を見てついニヤニヤしてしまった事も。

普段ふざけているが急に真剣になって事業について話す姿も良いですよ、

皆でこっそり準備して誕生日祝いやった時の照れ臭そうにする保さんも良いですし。

保さんのいろんな姿を見る事が好きなんですよ、私のライフワークの一環として、
楽しいですよ、この人はいろんな面を持っていて観察していて感心してしまう。

でも、こんな姿の保さんは見たくなかったよ。

「妹がこんなに可愛いなんて、生きていてよかったー!」

どうも、李儒文優こと腹黒軍師な司です。

保さんの叫びから分かりますように保さんに妹が出来ました。

三国志史上最大の悪役、あの董卓仲穎が遂に誕生しましたよ。

悪役とは言いますが、それは敗者だからこそ悪役になっただけで、歴史の勝利者だったならば悪くは言われなかったでしょう。

実際羌族とは良好な関係を築いたり、部下に恩賞を配ったり、かなりの親分肌だったみたいですし、死んだあと惜しまれたりとかもありますし。

劉備の方が遥かに胡散臭いですよ、あんな乗っ取り屋が仁君って。

まあ、劉備だろうが曹操だろうがどんな三国志の英雄でも、我々涼州の邪魔をするならば早々にご退場していただきましょう。

大陸全土に広がっているうちの会社によってね・・・ニヤリ。

おっ、といけません、つい楽しい想像して現実逃避してしまいました。

今は保さんを現実に戻しましょう。

「保さん、保さん仲穎ちゃんが可愛いのは私もよく知っていますが、仲穎ちゃんを愛するのはとりあえず仕事終えてからにしましょうよ。

「

ギロツ

怖っ、保さんだけでなく空さんまで睨んできましたよ。

睨まれただけで人が死にかねませんよあの視線は。

メドゥーサじゃないんだから、あれは石ですけども。

ちなみに太平要術の書を手に入れたあの日から2年がたち、私達も9歳になりましたよ、キンクリしたのは許してください。

仲穎ちゃんが産まれて半年以上たっていて毎日会っているのに、いまだに毎日これなのだから兄馬鹿にも程がありますよ。

やるべき事は幾らでもあるんですよ太平要術の書を手に入れた事で。

便利な物です、便利で済ませてはいけませんね反則です、

子供達がやる草サッカーにバルセロナを送り込むくらい卑怯です。

此方が望む知識がどんな物でも幾らでも手にはいるのですから。

保さんとの意見で歴史だけは見ないようにしました、さすがにそこまで分かってしまうのは興醒めですから。

とりあえず我が国の為、色々な物の作り更に名産品が増えましたよ。
食料ならば砂糖、養蜂、麦芽糖、ビール、日本酒、ワイン、焼酎、
医療ならばペニシリン、阿片といった薬品も出来ました、
安価な紙や鉛筆の製造、活版印刷とか金になりそうな物は片っ端か
ら。

それらは三国志の中で商売人として有名な張世平蘇双と協力関係を
持ち、
商品の委託販売、または製造販売させパテント収入を得たりしてい
ます。

商売人は我々と組み利益を出す限りは裏切らないですから。

あと信用出来る部下を徐々にですが各地に散らばらせ、
涼州のアンテナショップ兼地域の情報を得るスパイの拠点としたり。
やることは幾らでもあるんです、1日が48時間になっても足りま
せん。

この大陸の外れであり疎まれてきた辺境の涼州が、
食料、衣料、医療、軍事、文化といった至る物で、
大陸をけん引しようとしているのに大丈夫なのでしょうか？

漢王朝に疎まれ厄介者扱いにされてきた涼州の怖さを漢に見せつけ
てやるんだ！

ロックフェラーや三菱のようになるんだ、奴らを手の平の上で踊らせてやるんだ！

馬鹿共はそれに気づかないでいる、その間抜けな姿を見て笑い飛ばしてやるんだ！

と言っていた、あの時の保さん帰ってきてくれえー！！！！！！！！

一保一

司がまた怒っているようだ、むう、残念で仕方ない。

仕事に熱心なのは良い事だ、いや私も仕事はきちんとやっていますよ。

何故司は私の内からあふれる月への愛を理解してくれない！？

司は前世で妹がいたから、妹に夢を見ていないんだろうが、私は前世で妹がいませんでしたが、妹に夢見るなんて無かったです
が。

“おれのいもうとがこんなに可愛いわけがない”なんて作品がありました、
あれをみて司の言った言葉がよかったなあ。

「あんな妹がいたら、とりあえずアックスボンバー食らわしているね。」

それを聞いて大笑いした後、私は

「私ならば木村健悟ばりに稲妻レッグラリアートを食らわせるが。」

そんな私の発言を聞いて大笑いする司だったな。

やはり似た者である司と私は、でも、月への愛を叫ぶと司がため息をつくのが何故だろうか。

寝台ですやすや寝ている月の寝姿だけで丼飯5杯はいけるくらい可愛いのに。

お母様に似た紫色のウェーブのかかった髪、まあるく光輝く特徴的なおでこ、
赤ちゃんだからというだけではなく小さな体を見ると私が命かけて守ってやらないと覚悟を決める。

私が三国志の世界に転生したのは月の兄になる為に違いない。

そうだそうに違いない!!

ああ、この嬉しさを、この喜びが、情熱が、体内からあふれて来る。

「妹の月が可愛過ぎて生きているのが辛い、なんでこんなに可愛いんだーーーー!!!!!!!!」

つい部屋の窓を開けて外に叫んでしまった。

ふと視線を感じたので振り返ったら、父上がサムズアップしていた。

“今日、私は父上と本当に親子になれたんだと思いました、ありがとうございます。父上。”

だがこの後、母上に「月が寝ているんだから静かにしなさい」と父上共々ぶっ飛ばされるとは。

でも、月への愛があるからそれくらい余裕で耐えられるんですが。

とはいえ、これ以上怒られないように仕事を早く終わらせますか。

とりあえず父上に相談して月誕生記念で祝日を作るかなと。

—空—

娘が産まれたがこれが実に可愛くて可愛くてしょうがない、和が言うには目元は僕そっくりだと、全体的に和そっくりだが。

お互いの良い所を全て取った可愛い自慢の娘になってくれるであろう。

息子の保だって自慢出来る息子だ、ただ、可愛らしいではなく、聡明さ、あと最近は成長してきて逞しさが出てきた。

逞しく賢い兄に可愛らしい娘、董家自慢の兄弟である。

今や私は、知性では保や司には及ばず、武では和や琅？には届かず、そういう点では父親としては大変情けないかぎりだが。

あの子達が笑顔でいられるように私は露払い役として頑張ろう、子供達の笑顔を守る為ならば私は鬼にも悪魔にもなってやろう。

少しは父親の格好良い姿を見せてやらないと親として情けないから。それにそうすれば、いずれ大きくなった月が私を見て言ってくれるだろう。

「お父さん格好良い！そんなお父さんが月は大好き！月は将来大きくなったらお父さんのお嫁さんになる！」

と言ってくれるに違いない。

ドゴツグチャ、鈍い音が室内に響く

い、痛い和と保に殴られた、司君が汚い物を見る目で此方を見ている。

「貴方思うのは自由ですが声に出ていましたよ。」

なんと・・・！！声に出ていたとは。

保が和に続いて注意してくるかと思ったら、意外な言葉が。

「思うのは自由だが月は僕のお嫁さんになるんだーーーー！！！！」

よろしい息子よ、私は今、父として男としてお前の前に立ちふさが
る壁となってやろう。

和には勝てなくても私もそれなりには武を嗜んだ、その力を見せつ
けてやろう。

絶対に負けられない戦いがある！！

保ともども和にぶっ飛ばされるなんて、怒れる和に勝てる者はいな
かったか。

だが、私がやられても、すぐに第二第三の月を愛する私が現れるで
あろう・・・グフツ。

第十一話 絶対に負けられない戦いがある（後書き）

常識人だったはずのお父さんまでこんな事になってしまった、本当に大丈夫なのかこの話は？

とりあえずこんな駄文ですが笑っていただけたら幸いです、皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第十二話 保のターンに司のターンで涼州統一？（前書き）

この悪ふざけ作品で珍しい真面目な展開、まあ見事なご都合主義です。

とりあえずどうしようもない駄文ですが、今回も皆さん生温かい目でよろしくお願いします。

第十二話 保のターンに司のターンで涼州統一？

—保—

天水にておかしな動きあり謀反の兆し有りか？

執務室で私と両親、司親子、琅？さん6名が揃っている時に伝令が来る、

涼州に散らばった商人、となっている細作達からの早馬がくる。

むう、遂に涼州の武闘派韓遂が動き出しましたか。

とりあえず集めておいた天水に関する資料を並べそれを見ながら6名で議論。

あくまでも謀反の兆しか？

理由を聞くと少し前から米、麦、鉄といった物の価格が上がり買主は豪族達、

兵隊の動きがやけに活発、城内が慌ただしい、最近平和だったのに連日の実戦に即した演習。

、もし本当の反乱ならどれくらいの規模になるか見積もることに。

どうやら蠢いている連中の筆頭は宋揚だが、首謀者は韓遂で間違い

ないか。

大将の宋揚だけなら多くて三千、韓遂が周辺豪族巻き込むから一万越えるのは確実。

話が変わるが、涼州の武闘派って変な言葉だな、今はおとなしいが母上、

琅？さんとか、よくよく考えたら主力將軍が武闘派な人しかないんだから。

話を元に戻しましょう。

韓遂ですよ、演義だと琅？さんの義兄弟、実際は涼州を30年以上支配した実力者、

反乱を起こすが常に大将ではないキングメーカーで居続ける実力者。

それにしても何故今なんでしょうかねえ？

母上が行っている異民族への融和政策が甘いと判断されたからか？羌は取り込み、匈奴、？とは羌の仲介もあり良い感じになってきているからか。

異民族とは闘争あるべきなんていう奴等からしたら甘いと思われたか？

あとはなんだ？やはり嫉妬か、ここ数年の涼州の好景気、ただまあどうしてもなのだが、やはり拠点である隴西郡が他の地域に比べて一人勝ちの様相を呈しているのが。

隣家が金持ちで経済格差を感じた時に努力の差と言われて、“はいそうですか”と、簡単に納得はいかないだろうな、せめて異民族にやる金があるならこちらにもつとよこせか？

異民族対策の為、琅？さんが天水ではなく此方に常駐も響いたな、監視の目が届かな過ぎたか。

とりあえず反乱か？と思わせる牽制程度で、もし、このままいけそうならそのまま反乱か。

参ったねえ、反乱なんか起きたら母上は統治能力無しと洛陽の連中に解任されるか？

いや、涼州治められる人間がないし、口を挟んでくるくらいか。

仕方がないですね、指導者は舐められたらおしまいですし恐いところを見せますか。

宋揚は調べた情報を見る限り臆病な馬鹿だから、視察だなんだと軍

引き連れていけば良いとして、ただ時期が良くない、常備軍だけでは規模が小さい、徴兵はもうすぐ収穫期だから避けたい。

大規模なのは費用の問題もあるし、うーん、ケチりたいしどうすればいいか……。

董卓が洛陽でやったあれをやりませんかえ。

思い立ったが吉日、提案してみましよう。

「父上がすぐに出陣できる兵五千を率いて視察兼演習で来たと城に入る際に簡単な策を、馬鹿で臆病な宋揚ならばすぐに機嫌伺いに来ますよ、そこで脅せば終わりでしょう。」

とりあえず策の説明をする、簡単なトリックだが臆病者には効果的なのを。

「彼は臆病なくせに細作を放つなどの情報收拾をするような人間ではないから効果的でしょう。」

「答えを知ると単純だけど、戦うかも？と考えている時なら引つかかってしまうかも。」

「追い込まれたならば打って出る事も出来ない人間で、安全性も高いから良い策かなと。」

宋揚の人となりを私以上に知る人達には有効と判断された模様。

ただ、こんな提案をするのだから私も責任を取って同行しないといけないな、
うーん、策を考えるよりも母上を説得する方が骨折れそうで。

母上の説得は置いておいて、肝心要の韓遂をどうするかだなあ？

ふと、司ならばどんな悪辣な手が思い付くかな？と思い司を見ている。

心がオッサンだとはいえ肉体年齢9歳とは思えない悪い顔している、これは期待出来そうだ。

—司—

保さんが此方を見ている、面白い策を教えろという事か。

「韓遂からしたら今回は隴西郡への威力偵察ではないでしょうか？
皆さんはご存じだと思いますが細作や住民の情報、実績などから判断して宋揚は無能です。」

とりあえず皆の表情など反応を見ながら話を続ける。

「韓遂が勝つ気ならば馬鹿を神輿になんかしません、威力偵察に使うのに丁度良い捨て駒と。」

保さんの策は宋揚には利くが韓遂にはすぐに見破られるでしょう。

「宋揚達を押さえても韓遂は次の機会までと一瞬だけおとなしくなるだけでしょう。」

ここで一旦話を区切り周りを見渡す、韓遂の厄介さを知る面々が頷いている。

「馬臆様、韓遂は馬を大事にされてますか？」

いきなり話をふられ、しかも脈絡のないような質問に何の話だ？と首を曲げてから答える琅？さん。

「調べてある事の再確認？涼州の人間だから馬がないと生活大変だから、

大事にしている馬がいるよー、その馬の自慢をはじめて会った人に
するくらいだから。」

初対面に自慢って、資料見て性格分析もしましたがかなり良い性格
で、

それほどの名馬ならば余程大事にしているんでしょうねえ・・・。

此方を舐めてきたのですから統治者としてはそれ相応の罰を与えましょう、
撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけ、なんてセリフがありますしねえ。

今回の方法は策というほどではないですが、単純だからこそ効果があるかと、

向こうさん此方の怖さにビビるでしょう。

「宋揚の時とは違って韓遂には下手に出るようにして会いに行くと良いかと思われます。」

向こうの方が悪いのに何故こちらが下手に出るんだ？と考えているのが表情で分かる琅？さん。

「池陽君様と董擢様が隴西郡の新たな名物のお酒でも土産に持って挨拶すれば、

翌朝、韓遂さんも素敵な目覚めを迎え、今回はやり過ぎたと反省してくれますよ。」

話が漠然としすぎているからほとんどの人が頭に？マークを出している、

ただ皆ろくでもない策なんだろうという事だけは気付いていたようです。

保さんは僕が何を考えているのか分かったらしく苦笑していた、あの映画みたいに。

韓遂も見た目10歳にもならない私や保さんにこけにされるとは想定していないでしょうねえ。

嫌がらせやドッキリは昔から得意なんですよ・・・フッフ。

およそ一ヶ月後、玉座の間にて董君雅様の前に跪き全面降伏をする韓遂や宋揚達反乱軍が。

―韓遂―

参った、参ったどころではないか、まさかワシが子供に手玉に取られるとは。

ここ最近、董君雅の奴に知恵を貸している新しい軍師はどれ程なのかと思ひ、いずれ反乱を起こす準備の為に起こした威力偵察だが此処まで一方的にやられるとは。

宋揚の馬鹿をおだて、反乱の準備をするふりだけで有利になるぞと焚き付けたのはよいが、予想よりもはるかに早い展開だった、池陽君が五千の兵を連れてくるのは。

こっちが反乱の可能性ありと情報をわざと伝える事で驚かすつもりが。

読まれていたのか？と一瞬不安が、ただ当初の予定よりかなり早い

が、馬鹿には予定通りだと伝える、と簡単に信じ安心していた。

この後、馬鹿から頻繁に連絡が、連日三千近い兵が入城していると。

“ここ一週間で城内に待機する兵は一万を越えている、このままでは数の優位が”と連絡が。

元から自分の兵が三千しかいなく人頼みの数の優位という段階で数の優位など無いのだから、
当たり前事が分からないお前なんかと共に死ぬ気のある人間がいるか、と苦笑いする。

ただこの報告にワシはどういう事態なのか必死で考える、いくらあの隴西郡でも、

わずか数日で万単位の兵をすぐに用意できるはずはないのにと焦る。

翌日ふと気付く、夜半に兵をひっそりと城外に出し隠し、翌朝わざと派手に入城し、
これを繰り返す事で勘違いさせた、と。

小癪な真似をしてくれる、と策に気付いた時には遅かった、馬鹿から手紙が。

“話が違う、だから、私は反乱の意思など無いことを伝えに行く”と。

奴の無能ぶりに頭にくる、いくら捨て駒とはいえここまで無能だとは。

細作から報告があったがこの後城に行った宋揚達はさらに震え上がったそうだ。

「いろんなところから寝返りを伝える手紙ばかり送られて困る視察に來ただけなのに」

と池陽君に苦笑されながら言われ手紙の束を投げつけられたそう。

助言してくれるような者もないあの馬鹿には、偽手紙だとは分かつ、

誰が味方か？敵か？命の保証は？などいろいろ気が気でなかったらう。

細作にわざとこれらの情報を流してくるという池陽君のやり方に苦笑する。

それにしても馬鹿が行動開始してから二週間で戦わずに頭を下げさせるとは。

その三日後に天水に池陽君がわずかな兵を連れ酒を土産に悠々と現れたのは驚かされた。

奴は余裕を見せているが演技で、本当に戦を起すかワシの真意を汲みに來ただけだろう、

今の奴らはワシらと全面戦争をする根性はないと判断したが、これが間違いだった。

何故、奴は私に会いに來る際に自分の子供を連れて來たのかが分か

らなかった、
子連れはこつちを侮辱する為か？子供もいるし我々は最初から争う
気はないと伝える為か？

ワシは己の読みの逆ばかりいつておる状況に驚き、冷静さを失って
いた。

慇懃無礼とかではないが妙に下手に出る空の態度、わざわざ土産ま
で持ってくる、

池陽君は軍師だが毒殺だとか手段を選ばないような人間ではないか
ら酒は安心して飲めるなど。

結果論だがこの酒と董擢という役者にやられたんだったなど、見た
目は10歳くらいか？
話をしてみた感じは顔は両親に似たが単なる甘ったれの馬鹿餓鬼だ
なと思った。

産まれてすぐ「涼州の神童」という二つ名を持つ事を忘れていたの
が痛恨の失策だった。

池陽君は涼州の今後や異民族問題を相談してきた、今回の騒動につ
いて糾弾したいが、
そんな真似をしてワシがへそを曲げ実際拳兵したら？と怯え回りく
どく話すんだなと判断した。

筆頭軍師とはいえ所詮は単なる頭でっかち空がワシを攻めあぐねて
いる姿に内心大笑いする、
そして勝者の余裕を見せてやろうと奴の馬鹿餓鬼とも遊んでやるか

と。

董擢様も甘え上手で可愛らしく思え城内を案内し愛馬に乗せてやりたりと遊んでやる。

夜になり私が勝者だとはいえ池陽君は仮初めにも涼州の筆頭軍師で太守婿、主賓として宴席に招待する。

宴席が始まると酒に酔ったか主賓であるはずの空が親子そろって酌をしにきたりと、

ワシは日本酒の美味さ、口当たりの良さとは対照的によく利く酒だったらしく、
場にも酔ったのか、いつにも無いほど眠けにおそわれる。

夜も遅くなり、気にしないと言うので自分の部屋に戻り寝る事に。

朝、目を覚ますいつにも無く頭の動きが鈍い嫌な目覚め、なにか布団に違和感がある。

部屋中に強烈な血の匂いがする、よく見ると自分の腕や体が血まみれになっている、

違和感のあった布団をめくると、そこには血にまみれた愛馬の切断された首が転がっていた。

叫びたいが叫ぶ事など出来ない、必死で自分に落ち着けと言い聞かせる。

何故、誰が、どうやって、必死で頭を働かせるが、あまりの事態に脳が全く動かない。

そしてはじめて気づく、部屋の隅に池陽君と董擢様がいた事を。

ワシに向かつて董擢様は昨日の甘えた喋りではなく淡々と悪魔の笑みを浮かべながら

「良い夢は見れましたか？ 気に入っていただけましたか私の特製枕と薬入りの酒は。」

この後は急に口調を変え、明るく子供らしい喋りで、内容は真逆だったが

「殺しに来たければいつでもきてね、おじさん、寝ている時でもご飯の時でもいいよー、でも、殺しに来るからには殺される覚悟はしておいてね韓遂君」

こんな子供に勝てるわけがないと思い知らされた、武人としての誇りとか関係なかった、愛馬を殺され侮辱された怒りとかどうでもよかった、とにかく涙を流し許しを請うだけだった。

どれくらい泣いたか、許しを請うたか分からないが、董擢様が耳元で囁かれた。

「韓遂文役、あんたが漢王朝に敵意を持ち反乱を企ててようが私は一向に構わない、

私と友達になりたいのならば喜んで迎えてあげましょう、ただし、刃向うならば、

次は大事な馬どころか、こちらはいつでも、どんなふうにだって出来る事を……。」

それだけ言って董擢様は天水城から帰られました。

一保一

うん、今回の件は我ながらやり過ぎたね、ちょっと調子に乗り過ぎたところでないのが、
思い返してみると恥ずかしさで布団の中でジタバタしてしまえますよ。

ただ今回の騒動で韓遂さんまで、琅？さんに続いて母上でも父上でもなく私に忠誠を誓ってくるって。

精神年齢でははるかに年上だが、年上に服従されるのはやり辛い、
だって僕は子供だもん。

「ワシの名は韓遂、字は文役、真名は雷^{らい}、ワシの命と真名を董擢様に。」

なんて風に涼州のボスに服従されるのですから嬉しいなんてもんじゃないですよ、

董家が涼州を完全に支配に置けたのですから。

ここから余談ですが、雷さんがどうやら気になっていたのか執務室で仕事中に質問してくる、

「董擢様、もし私が馬を大事にしていなかったらどうされましたか？」と聞いてきた。

司が満面の笑顔で「その時は朝起きたら寝台の横に切り落とされた玉を並べていた」と。

雷さんが、というか皆引いているよ、それにしても私も同類とされたのは心外なんです。

第十二話、保のターンに司のターンで涼州統一？（後書き）

うーん、保の怖さ、不気味さを上手く表現出来なくてすみません、話の展開も強引で見事なご都合主義、上手くいきませんねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない（前書き）

このご都合主義三国志で出演者を新たに増やそうと頑張りましたよ。問題は一気に増えすぎたのと、恋姫原作キャラで無いまたオリジナル。

大丈夫なのか、話がまとまるのか、全員のキャラ設定できるのか？作者でありながら頭を抱えるばかりです、こんな駄文ですが生温かい目でよろしくお願いします。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない

—保—

「前々から言っていますがいくらなんでも人手が足りなすぎます！」

分かつちやいるけどやめられない♪だとスーダラ節ですが、やめるやめないではないね、むしろ辞められたら人材不足で大ピンチ

無駄話はやめましょう、話を真面目に進めましょう。

「^{あやみ}薊さんが言うように人手が足りないのはわかっています、ただ、人材不足は一朝一夕で解決するわけなく、キツイが今の状態で。」

流石、父上常識人です、このメンバーの突っ込み役です、言っていることが此処までザ・普通なのが、頑張れ父上。

そして、第十三話にして、遂に司のお母さんである李肅さんの真名が。

作者が親馬鹿なら和がいるしキャラかぶりで特徴が出し辛い、だから必然と出番がなくなる、真名を決めてすらない。

まさかこんなふざけた理由で涼州の最高幹部の出番がなくなるとは。

頑張れ薊さん、私は応援していますから。

「短期的な物と、長期的な物がありますが。」

司が口を開く

「短期的な物から説明を。」

母上が司に説明するよう促す。

「一番早いのは和様や母さんの私塾時代の知り合いとかを登用ですかね。」

まあ、一番早い解決方法ですな、ある程度知力なり武力なりある人間が手に入ります。

「問題は今疎まれ干されている人ならばうちに来やすいでしょうが、母上の知人ならば実力ある人でしょうしそれなりに地位を持っているでしょう、

本人が乗り気でも此方に来れるかどうか。」

母上のように太守とかしていたら登用なんて絶対に無理ですし、優秀ならば今の上司達が手放したがるか？という問題が。

私がとりあえず案に対する問題点をあげてみる。

個人的には母上の知り合いである劉表さんが普通に來たら笑うんだが、それにたいし私や父上が「お前は荊州太守だろ！」と突っ込めるかどうか。

「ねーよ！」

うん、心の中で思った事が口に出ていたね、父上突っ込みが荒いです。

「真面目に話すならば景気は良いがこんな遠方に来るか？」と。」

荒い突っ込みに文句を言うのはやめて、一番の問題点を口にする。

「「「たしかに」」」」

私と司以外の全員が同意する。

「私みたいに涼州出身とかでないとなかなか此処には來たがらないでしょう。」

母上がいう、確かに父上も母上と結婚したから涼州にいるわけで。

「洛陽にいられない、とか、追放されたとかでないとか来難いですね。」

齒に衣着せぬ発言などで洛陽の宦官に睨まれ島流しみたいな感じで來た薊さんが続く。

「ただ、今の漢王朝に不満がある洛陽にいる不満分子を引っこ抜くのはいい案かと、
実力あるが玉無しや馬鹿將軍に気に入られないために干されているなんて、
不遇な時代を迎えている者は幾らでもいるでしょうから。」

父上、口が悪いです洛陽に恨みあるんでしょうが、多分あるんでしょう。

「たしか裏切り敵国の細作になる者の理由は主に三つしかなく、
地位などで評価されないことへの怒り、自分の実力に対し貰える少ない報酬、
国の仕事で己の信じる正義と反するという正義感、まずこのどれからですからねえ。」

FBIだったか、CIAであった人がスパイになる理由を思い出し口にする。

「話を持ちかけられた人間も細作としてその国に残り同僚を裏切り続けるのと違い、
今の評価されない職場に早々に見切りをつけ転職ならば彼らも抵抗が少ないでしょう、
給与という点や見合った地位という物ならば洛陽よりは得やすくなるでしょうし。」

子供らしくない発言の私と司に対し雷さんが驚いている、前回それ

で痛い目にあつたのに。

まあ精神年齢が40過ぎで雷さんより実は年上なんて思ってもいいだろうから仕方ないか。

「では、近いうちに洛陽に父上なり薊さんに行っていたきたいのですが、

大谷商会洛陽支店建設の下見を兼ねて向かわれるのがよろしいかと。」

涼州のアンテナショップを洛陽に作る計画が進行中なので、そこは将来、洛陽でクーデター起こす際の拠点にするつもりなので。

流石にクーデター起こすなんて司以外誰も知りませんが。

「保さん、クーデターとはなんですか？」

薊さんが口を開く、おおう、また心の声が口に出ていたか。

「ここより遙か西の国の言葉で極秘裏に進めて開催し皆を驚かす祭の事です。」

とっさに答える。

「保さんお祭りなんか計画しているんだお祭り楽しいから大好き、それにしても保様は相変わらず博識なのー、異国語も知ってるなんて。」

琅？さんが感心しているようで、まあ、嘘はついていませんし、極秘裏に進め馬鹿な指導者達を血祭りにあげるだけなんですから。

司が苦笑している。

「この案はいいとして、人材確保の他の手段はなんですか？」

話が逸れてきていたので元に戻そうと母上が。

「各地に散らばる大谷商会で涼州で人材募集の為の試験をすると告知を、

遠方で費用などで来難い参加希望者は、涼州に荷物を送る荷馬車に同乗させれば。」

これなら涼州までの移動費用やらなんやらで躊躇している人間でも、負担軽減やら移動の安全確保されやすいという点から参加しやすくなるでしょう。

「問題はどの程度の質の人間が来るのか予想がつかないのでは。」

たしかに父上が言う通りで、告知範囲は広いが誰でもとなると。

「ならば、読み書き出来るかとか、告知の際にこの問題が解けたらとか、

そこで最低限のふるいわけをすればよいかと思えます。」

かなりハードル低いなと思ったが識字率が段違いに低い時代だったんだ、私達が小学生の時にやったようなテストより簡単でもかなり人が絞れそう。

「長期的計画という点ではどのような案がありますか。」

母上が最後の案を聞いてくる。

「国で孤児院を開く事です。」

やはりそれか、司の発言に一人納得する私。

「口減らしに捨てられる、または殺される子供や戦争で親がいなくなった子供、

また教育を受けさせたいが家が貧しく私塾に通わせられない家庭の子供に対し、

国が食事と寝る場所だけでなく教育を受けさせるという事です。」

ほお、という感じで案の内容に反応する雷さんと琅？さん。

「必ず優秀な役人になるとは保証できませんが、そういった子供たちが野盗になったとか、

路上で餓死したなどという事を防ぐことができる治安維持の観点からも進めたいと思います。」

司の発言に対し、父上が問題点をあげる。

「涼州の教育を受けたが他州に仕官とかならないか、それだと税金の無駄使いにならないか？」

その件に対し私が

「それに対しては、やり過ぎは良くないですが教えの中に愛国教育とでもいいましょうか、涼州のおかげで生きていると思えるような事を教える事で流出し辛くするのは？」

愛国教育をやり過ぎるは良くないが、大抵の国でやってますし少しくらいなら許されるでしょう。

「子供達も友達が身近にいてくれるのなら一緒にいたいと思えるでしょう、

僕は保さんがいたから楽しく、保さんだけでなく孤児達とか皆と友達になりたいですから。」

照れながら可愛らしい事を言う司、演技ではなく素で言っているな、ちよっと可愛いぞ。

薊さんが鼻血を流しながら司の姿に興奮しているのは見なかった事にしよう。

全体的に今回の提案の評価はよく、あっさり可決される。

「とりあえず洛陽への視察は人員の調整やらないと人を送れないので、大谷商会経由で各地に涼州が人を募集しているという通達を出しましょう、孤児院の件は予算を見ながら。」

方針が決まり、母上が結論を出す。

一司一

全国に広げた涼州アンテナショップである大谷商会、これを効率よく使って人材募集しましたが、実は通達を出す時に保さんには話しましたが他の人には内緒でやった事が。

チートなので普段は使いませんがあまりに人手不足なので使いましたよ太平要術の書を。

将来に不安を抱えているそこそ有能で仕官先探している人は何処か？と読むと、

まあ出るは出るは、色々な名前が多く出たエリアに優先的に人材募集の広告を出しましたよ。

数ヵ月後、

登用試験が終わりましたがやり過ぎたという感じになり、話進めた僕ですがなんか頭を抱えました。

いくらご都合主義なこの話にしても、何でしょうかこの応募してきたメンバーの優秀さは。といひましようか、歴史上こんな所にいてはいけない人間が大半なのが。

軍人部門では、まずは普通に使える淳于瓊さんが加入されましたよ、いいのかこの人いて？

演義だと単なる飲んだくれで官渡の戦いでは無能で烏巢落とされ最後処刑されましたが、

西園八校尉に選ばれたりしたくらいの人間で、官渡では奇襲に必死で耐えたり結構堅実な戦いが。

堅実な戦いが出来る淳于瓊さんには、突撃が得意な琅？さんの副官として頑張ってもらう事に。

私李儒に並んで董家らしい軍人がきました、郭？さんに李？さんが、ぴったり過ぎる二人。

二人とも軍事ではそれなりに活躍したが長安ぼろぼろにしたり、邪教にはまったりと、
なんと言いましようか、母親のお腹の中におつむのネジを忘れたの

でしょう脳味噌が。

二人は保さんへ絶対の忠誠を誓う雷さんの元で老獺さというか頭を使う戦いを学んでいただきましょう。

まあ、ふざけたことするようならば僕と保さんで洗脳、もとい教育すれば大人しく出来るでしょう。

それに保さんが普段と違う黒い笑顔をしながら、「可愛い可愛い月に被害が出るような馬鹿なら、生きたまま鼠の餌やら産まれた事を後悔する地獄を延々と味あわせてやる。」とボソツと。

月さんが絡むと保さんが怖いです、保さんの黒いオーラで背景が完全に歪んでいます。

軍人は良いんです、問題は文官といいますか軍師が冀州から大物ばかり来ました。

田豊、沮授、審配の三人が、私は二日酔いでもしているのでしょうか？これ何て袁家ですか？

これであと郭図がもしいたのならば袁家の軍師勢揃いですよ、大丈夫なのか袁家は？

人手足りるのかと他人ごとながら心配をしてしまいました。

演義とかで彼女達は意見対立激しく袁家がボロボロになった原因の一つで、

逆にもめごとの種が無くなってこれのおかげで強くなるのか？無いな。

それにしましても何でもありの世界とは言いますが、全員年齢は17、8くらいで、ブレザーにタータンチェックのスカートごめん、それ何処の女子高生という感じの。

気づいてはいけないのは彼女達が途中で衣装チェンジしないと、ずっと女子高生姿、黄巾党が始まろうが、官渡の戦いだろうが、赤壁の戦いだろうが女子高生姿、どんな熟女マニア向けAV何だという感じになりそうで不安で仕方がないです。

仕事の話に戻しましょう、史実では袁家の軍師だったわけで、採用試験パスするなど、三人とも真面目に仕事したならば相当に優秀ですから、そういう点では安心できます。

この三国志は正史ではなく外史だから何でもありとはいえ演義やらなんやらと真逆で、三人が幼馴染の仲良しで、しかも仲良し通り過ぎてなんか百合百合しい感じが。

将来何処かの国で色々な意味でキャラかぶりが激しいと突っ込みが来そうな予感がするのが。

それにしましても、女三人寄れば姦しいなんてよく言いますし大変やかましいです、
和様の顔を見ると喧しさに表情はいつも通りですが明らかに怒りをこらえているのが分かります。

涼州の高級役人として採用即和様の怒りで斬馬刀でバラバラに切り刻まれ鳥葬、
なんてのはさすがにまずいので、なんとかしないといけません。

ここは全員の配置をバラバラにして黙らせましょうと、和様の補佐役に田豊さん、
空様の補佐役に沮授さん、母上の補佐に審配さんと決めました。

あとは僕と保さんの手元に優秀な軍師見習いが欲しいのですが、まあ、
知らない人からしたら子供に補佐職となりますので、これはおいおい募集していこうかと。

將軍クラスが3人、軍師が3人新規加入と涼州の人員不足解消の目処が立ちそうです、

まあ、とはいえこれから人材募集の手を緩めずにいきましょう。

うちで出番無いくらいでも飼殺しにすればその分他国は人材難となるのですから、
やってやりましようと思いましたがね、劉備や曹操が人材不足だった

ら面白いでしょう。

さてさて、これからの董家、いや、私と保さんの悪ふざけが何処までいけるかと楽しみです。

人材が確保できたならば、涼州だけでなく領土を広げるとか考えてみますか、

司隸州は流石に無理ですが、そうですね益州の漢中とかくらは欲しいですね。

楽しいですねえ、こういう謀略を考えるだけで、それにしてもふと思ったのが、

イレギュラーな存在の私と保さんが頑張ってますが、正史で言う董卓と入れ替わりでですかね？

まあ、もしそうならば悪役として突っ走って董卓とは違って勝つようにしましょうか。

第十三話 人材難にやり過ぎたかもしれない（後書き）

書き終えて一言、6名は人が増えすぎた、オリジナルキャラばかり。

これで話が進んで恋姫原作キャラが来たらどうなるのだろうか、大丈夫か私？と胃が痛くなるばかりであります。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十四話、恋姫達と天才作家（前書き）

今回は拠点フェイズ、董家兄弟の触れ合い編です。

この話を読んだ皆さんに喜んでいただければ幸いです。

第十四話、恋姫達と天才作家

―保―

まさか、私が子供達に大人気になるとは思わなかった、前世の私を知っているのならば皆が口を揃えただろう「嘘だ!!!」と。

友人ではなく、なんか蟬が鳴く話の鉦女が出てきそうだが。

蟬で思い出したが仕事のしすぎで疲れていたんでしょうね、蟬の鳴き声が「死ぬ死ぬ」言っているようにしか聞こえない、と支店長に話したら「今すぐ有給を取れ」と言われ休まされた事が。

昔の思い出話は置いておいて何が人気なのかと言いますと、紙芝居屋さんを始めたんですよ、今や街を歩くと子供の列が続いてくる。

まるでハーメルンのバイオリンひきか、レミングスの集団入水だなどと。

きっかけは可愛くて可愛くて仕方無い月の為に絵本を作ろうと。

実は前回の話からまたキンクリしまして私が12歳、月が4歳に、私の服の裾をつかんで「おにいたま、あしょんでくだたい」

舌足らずに喋るところや私の後をとことこついてくる姿が愛おしくて、

何度吐血しながら「我が生涯に一片の悔い無し」と叫んだことか。

そんな可愛い月の頭を撫でてあげると頬を染めながら上目遣いで、「へうっ、おにいたまはずかしいでふ」これもヤバかった気絶していた。

ある日なんか遂に月に「やさしいおにいたまだいすきでふ」死んでも良いと思えましたね、司が言うには三日間意識不明だったと。

後に聞いたが父上は、自分よりも先に月に大好きと言われた私に嫉妬、だが、父親として私を助けないと血涙を流して苦悩していたよう
で。

だから私が目を覚ました時壁にめり込んでいた父上がいたと。

月の可愛さを語り始めたら何年かかってもしまらないので、話が脱線しすぎは不味いですし、話を元に戻しましょう。

前に話をして計画していた孤児員が完成しまして、

孤児員は聞こえが悪いと保育園とさせていただきましたが。

同い年位の子供が多いからと月や馬超こと翠ちゃんをよく連れて行

ってあげるのですが、

月が「おにいたまのはなしをみんなにしてあげてください」と。

こんな事言われたならば兄としては頑張らないといけませんよ、
執務、鍛練、保育園で授業、新商品開発、視察、
やる事だらけですが寝る時間を削って紙芝居作りですよ。

「夏の間遊んでいたギリギリは冬になりご飯がなくなり困って
いました。」

月や子供達は目を輝かせて私の話を聞いています。

「おにいたま、きりぎりすさんはどうなるんでふか？」

話の展開を気にする月が可愛すぎる。

「ご飯無くなったら戦えないからどうするんだ何処かに食べに行く
のか？」

なんで飢えて困っているのか分からないのか翠は、なんでこんな残
念な子に。

「ゆ、月が気にしているんだからはやく続きをはなさないよ、
ぼ、僕も月につきあって話を聞いてあげるんだから。」

緑の髪の子は保育園で一番賢いがやはりまだまだ子供で自分が気に

なるのに、
必死で誤魔化そうとするなんて可愛いなあもう、それにしても月に
真名を許されているとは。

「なあ、てきちゃん、きりぎりすはどうなってまうんや。」

何故かこの時代に関西弁の子は、私を妙な呼び名で呼んでくる。

「ごはんがないならかりをすればいいんだ、なんじゃくな。」

銀髪の子は幼子とは思えぬ勇ましい発言が、軍人にしたら楽しみな
ような不安なような。

「・・・ごはん？」

赤いアホ毛のあるこの子だけ明らかに話に食いつく場所が違うのが。

「はやくはなすのです、きりぎりすはどうなるんです！」

黄緑の髪の子は一番子供らしい反応だな、気になって仕方がないよ
うで。

いろんな子供がいるが皆話をするとは反応が違って面白い。

ここで蟻とキリギリス“弱肉強食編”の話の続きをはじめ。

「夏に頑張ってご飯を貯めていた蟻さんはキリギリスさんを家に呼びました、大変だったね外は寒かったろう、早く入って。君を歓迎するの宴会だよ。」

ここでまた一旦話を区切って見渡してみると。

「きりぎりすさん、たすかったんだよかった」

ああっ、もう、月は優しいなあ、ついつい目を細めてしまう

「なんだ宴会準備してあったんだよかったじゃんキリギリス」

裏があるとか考えないのでしょいか翠は、お兄さん貴方の将来が不安で仕方ないです。

「なんで蟻はキリギリスを甘やかすの、弱味を握られているの？」

子供らしくない意見だ、もっと素直にいこう私が言うのもなんだが。

「なんやたすかったんかいな、えんかいかさけでるなんていいな。」

酒のさの字も知らないガキンちょが、まあ、大人ぶるのも可愛いな。

「なきつくきりぎりすもなさけないが、あまやかすありもありだ！」

君は何故そんな人生ハードモードを歩もうとするんだ。

「えんかい、・・・ごはん」

お兄さん君に話を理解してもらうのは諦めたぞ。

「あまやかすとやさしさはちがうのですぞ、ありはしょうらいくろうするですぞ。」

なんだろうお兄さん、将来君がそうなりそうな気がしてしかたがな
いんだが。

流石にみんな蟻とキリギリス“弱肉強食編”の展開は読めないよう
で。

「宴会の最中にキリギリスさんは安心からか寝てしまいました、
蟻さんはその姿を見て笑いながら“やっと葉が効いたか”と呟きま
した。」

ザワザワ、福本な擬音が部屋に鳴り響く

「冬の間の御馳走が自らやって来るとはな」と蟻さんは、哀れキ
リギリスさんは、

蟻さんに殺され食べられてしまいました、油断大敵、蟻さんやった

ね、めでたしめでたし」

創作紙芝居、蟻とギリギリス“弱肉強食編”が終わり周りを見渡すと。

「へううつ、きりぎりすさんたべられちゃうなんて。」

泣きそうな月が可愛い、はううお持ち帰りー！

「なあ、兄貴、ギリギリスを食べるつもりなら宴会はしなくても良くないか？」

油断させるとか策だという事は分らないんでしょうか、策があっても気にしないのか。

「僕も先を読めなかったが、蟻の真意を読み取れなかったギリギリスの負けか、

いや、準備らしい準備をせず冬を迎えた段階でギリギリスの負けか。

「軍師みたいな思考をする子だな、鍛えたら面白そうな、とはいえ、やはりギリギリスが食べられた事は驚きだったようで。」

「まさかたべられるとはおもわなかった、いんどじんもびっくりや。」

インド人もビックリって古い表現だな、いやこの時代なら新しいか、
といえますか、なんでお前さんはその言葉を知っている。

「くすりとはなんとひきょうな、ぶじんのかざかみにもおけん」

蟻は武人じゃないぞ、お兄さんは君が将来猪武者にならないか不安だ。

「ごちそう、おなかすいた、ごはん」

うん、お兄さんそう言われると君の台詞を読んでいたよ。

「ありのさくはみごとにきまっただですが、ねねにはつうじないです。」

君が将来ギリギリに食われる蟻になりそうな気がしてならないよ。

余談だが、この時の私は知らなかったが私が作った創作絵本、

「蟻とギリギリス弱肉強食編」「三匹の子豚と逆襲の狼」「カチ
カチ山復讐の代償」

等の作品が、後に大陸中の軍師見習い達に策の重要性を教える教科
書になったそう。

「はわわ、実は蟻の策は冬になる前から仕組まれていたなんて。」

「ほお、狼は完璧な籠城したと思った豚をこう破るとは面白い」
「なんで狸もあっさり引つかかるの馬鹿じゃないの、だから男は駄目なのよ」

各地に散らばる軍師予備軍達にはかなり好評だったようだ。

更に余談ですが、夜中のテンションで一気に作った大人向け絵本、
「白雪姫く鬼畜の宴」 「桃太郎く栄光の代償」 「裏切りの兎と亀」といった作品も、
後に各地で大ヒットし、舞台化され上演はロングランになるのだった。

「あわわ、これは過激すぎるでしゅ、でも、朱理ちゃんにも教えてあげないと。」

「なんて華麗でないのかしら私と違って、私ならば皆がひれ伏したでしょうしオーホッホ」

「覇王はいつでも全力、とはいえ力を見せつける兎のような存在も面白いはね」

とりあえず色々な場所で色々な人に愛された作品だったようだ。

紙芝居終わった頃合いを見計らっておやつを持った女性がやって来る。

まさか、この黒髪を束ねたエプロン姿の上品な女性が、
憂いを含んだ微笑みをする綺麗な女性があの丁原だなんて。

呂布の育ての親の丁原がまさか保育園の保母さんをするなんて、

丁原という名前を聞いた時は驚いて飲んでたお茶吹き出したくらいで。

丁原さんがいるくらいですからもしかしたらこの保育園に、

三国志最強の呂布がいるのか？なんて馬鹿な事思ったりしましたよ。

とりあえずおやつですよ、新たなバトルが始まりますよ。

「おにいたまいっしょにおだんごたべまひょう、へうっ。」

月が私の手を引いて隣に座らせる、それにしても舌足らずなだけでなく噛むのも可愛過ぎるよ。

あまりの可愛さにちよつと鼻血でたし。

「僕は月と一緒に食べたいだけなんだから、でも月が望むから一緒にしてあげてもいいわよ。」

そう言いながらも隣にちよこんと座る子、可愛いなあ、この年で僕っ娘ツンデレメガネって。

「おっ、なんやいつもどおりおもしろそうなことになっておるやんか。」

この子はなんで反応がこうおっさん臭いんだ、ただいづれ一緒に楽しい酒が飲めそうだな。

めっちゃ好かれていますよ、ちびっこハーレムですよ、ロリならたまらないんでしょうなあ。

精神年齢45歳のおっさんには微笑ましいとは思えなくて。

一方、団子に必死な連中を見てみると、

「よし、お前と勝負だどちらが沢山食べられるか。」

翠、この中で7歳と一番お姉さんなのに、仕方がないなあ、これがあの錦馬超だとは。

「なにをー、はやくたべないならぜんぶわたしがもらうぞ・・・うぐううう」

急いで団子を食べるかのどに詰まらせているよ、この銀髪の娘は。

「・・・・・・もきゅもきゅ」

一心不乱に団子食べているこの子、何？食べている姿にめっちゃ癒されるんですが。

「れんどのー、おだんごだけでなくおちゃもありますぞ。」

うん、間違いなくこの子は将来貢いで痛い目にあう子だね。

こうして私の月達との紙芝居の会は終わるのだった。

第十四話、恋姫達と天才作家（後書き）

今回の話はいかがだったでしょうか？

それにしても前回出した6人のオリジナルキャラの設定をとばして、恋姫原作キャラを一気にこんなに出してしまうとは。

大丈夫なのか私、話が進むのか、どう絡ませて遊ぼうかな、とか、不安だったりわくわくだったり変な感じを楽しんでいます。

皆さんのご意見感想お待ちしております。

第十五話、保と司の考え事（前書き）

真面目とギャグが中途半端に交じってしまった、
ギャグオンリーなはずがどうしてこうなった。

そして話数を間違えていた直したが恥ずかしいミスして気づかない
とは。

第十五話、保と司の考え事

一保一

朝の執務も終わり昼食を取る、訓練も無く午後からする事が無く、ならば、と思ったが月達は侍従達と保育園に行っている。

未来技術の応用開発もする気が起きない、たまには、と部屋で一人ボーっとする。
ボーっとしていると、ふと、いろんな事を思い出す、司が前に面白い事を言っていたなど。

私は正史での董卓の代わりとして今の時代にいるのではないかと。

この世界には董卓である月がいるとはいえまだまだ幼子であり、時代は三国志にはまだ早く、
皇帝は霊帝になったばかりで、とはいえ本来ならば董卓はそれなりの歳になっていないといけない。

まだ12歳という若い私が月を若いというのもなんなんだが。

正史ならば既に死んでいるはずの董擢という存在になった私がいて涼州を実質治めている、

後の董卓の悪事の協力者で知恵袋な李儒が司であり、いないはずの時期に手元にいる。

董卓の元にいた郭？に李？までもが手元にいる状態、
この外史では正史の董卓役を私に求めているのだろうか？

それでもいいが、とはいえ、悪役董卓をやるのは真っ平ごめんだ、
まあ正義も悪も世の中には無いから、正義の味方とかでなく場をか
き回す存在になれば。

その為、正史でやらかした郭？、李？達やらお馬鹿さんは魔改造の
最中。

それにしましても、ヒヤッハーな正史の董卓にはならないように頑
張っています、
うーん、順調過ぎますねえ上手く行き過ぎている不安になるくらい。

涼州なんて辺境があり得ない規模で経済が拡大し続けているんです
から。

私と司が政治に参加するようになった7年前と比べおおよそだが人
口は倍増、
農業生産高もおよそ倍、商取引に関しては3倍以上になった。

とはいえ農業は水の確保など諸問題が山積みで中々規模の拡大でき
ないのが悩みだ、
農薬と肥料、輪作等で生産量は増えてはいるがこれからの伸びしろ
に不安が。

涼州の利益の一番は地の利を活かしシルクロードを使った大陸以外の貿易の独占、

あとは全国に散らばらせた大谷商会でうる新商品の販売での利益が。

とはいえ、頑張っても悲しいかな此処は辺境、北方四州だとかには敵わない、

一人当たりでは圧勝でも人口が違うなど、これだけ儲けていても総額では全然敵わない、悲しい物だ。

まあ、順調な経済はいいや、では、軍事は？漢の天敵である異民族への対策は？

涼州に限って言えば完璧に近い、例えば羌族とは相思相愛の関係である、ちと大袈裟か。

この前の事だが、羌族の族長が日頃の支援のお礼をしたいと隴西までわざわざやってきて、

ならば私は史実で董卓がやったように飼っている牛を潰して出したくらい感謝されましたよ。

トラクターなんてないこの時代に貴重な農機具である家の牛を潰す、しかも、子供である私が牛を潰す重要性を分かりながらそれを行う。

族長が如何に自分達が大事にされているのか分かり感涙するのも、まあ当然か。

ごめん族長、見た目は子供だが私は実は族長よりはるかに歳上なん

だ、
しかも正史を知っているから出来たやらしい手段なんだな、まあ言わないが。

おかげで軍馬を千頭程プレゼントなんてあり得ないサプライズが、ただそのあとにもサプライズが族長が娘を側室に差し出すとまで言い出したのは参った。

馬のオマケが族長の娘って、提供するなら順番が逆だろ、普通なら娘そして馬もだろ、
ビックリマンならシールだろ普通はウエハースではなく。

最近はお番が少ないから？皆忘れていないか？母上の私LOVEぶりを、

いやまあ族長に関しては私とは初対面だし知らなくても仕方無いが。

だが、砲弾は別の所からも撃ち込まれるとは思いついたですよ、

琅？さんが黒さが漂ういい笑顔で「うちの翠が先だろ順番無視はいかんよな。」って。

琅？さんがいつもと口調が違う！？黒いオーラが怖すぎます、

あと、私と翠ちゃんって何の話ですか、私は何も聞いてませんよ！？

太守の息子であり恋愛結婚なんか無縁な時代で、私の思いなんか関係ない時代だとはいえ。

翠ちゃんは7歳ながら可愛く将来は美人さん確定で物件としては優良物件です、

ただしお馬鹿すぎます、あと、当人の意思を無視してはいけません。

翠ちゃんは年齢的に私からしたら嫁ではなく、私は独身ですが娘みたいなもんですよ。

それに仮にですよ、翠ちゃんが15歳で私と結婚したとして、その時私の精神年齢53歳ですよ！

ナイスミドルですよ、ブランデーグラスとガウんな組み合わせの年齢です、

それで15歳の幼妻、犯罪ですよ、御天道様に顔向け出来ません。

この時代的にはセーフでも私的にはアウトです、一番アウトなのは、親友であります、あのナチュラルボーンテロリスト司になんといじられることか。

司にかかれば私など強風の前の蠟燭ですよ、一瞬で吹き消されますよ、

そうか！！翠ちゃんを司のお嫁さんとして押し付ければいいんです。

ナイス提案、私天才だ！！！！司が「これは孔明の罠だ」と叫んでいる頃には、

私はそれを見て司に「ロリコンにジョブチェンジおめでとう」と祝福のニヤニヤが出来る。

完璧なる勝利ですよ「勝ったッ！第3部完」って奴ですよ。

……、やはり負けフラグだったか、勝ったッ！第3部完は。

心を読みきられていたんでしょな、それとも分かりやすいくらい顔に出ていた？

1点ビハインドでノーアウト、ランナー1塁バッターは川相、何をする位分かりやすかったか？

「安心して司君のお嫁さんには蒲公英がいるから。」

ボス戦からは逃げられないというのは本当なんですネ、私も司も、琅？さんというボスに一方的に殺られるのか……。

しかも、司は私の翠ちゃんより年下な蒲公英ちゃんですよ、完全にアウト。

司を見ると顔付きが覚悟を決めた顔まさかメガンテを唱えるのか？

「お母さん助けてー！！」

やりやがった、司LOVEの薊さん、私LOVEの母上が暴走したら琅？さんでも危うしか？

違ったよ・・・・・・・・。。

「こういう機会に使わないと翠も蒲公英も将来行き遅れかねないんじゃない！」

本音を隠せよこの人！あと、もっと娘と姪の可能性を信じようよ！そして、みんな客人である羌族の族長を忘れすぎだよ、いくらなんでも。

族長固まっていたし。

「保様も司さまもてますなあ、ワシもあやかりたいは。」

雷は空気を読み！とりあえず司と二人で雷はボコったが。

あれは悪夢な事件だったな・・・。

話が明後日の方向に行きすぎた軍事に関しての考え事に戻そう。

太平要術の書も確保している、書の力を使えば張角達の場所も分かる、
そうなると思柄を抑えるのも可能、黄巾党すら起こるのを防げてしまおう。

これに関して司の言った言葉が、物騒にも程があるがどうも気になる。
ってしまおう。

「いっそ黄巾党、何進と十常侍の対立をこっちで管理して動かさない？」

凄いな！？軽い発想なのが、この大陸を揺るがす二つの大事件を、
コンビニに煙草買いに行ってくるね、なんて感じで話すんだから。

まあ、私達が大陸の平穩の為に暗躍して黄巾党が起きなかったとしても、

漢王朝の無能無策ぶりでは世は乱れるのは確実、黄巾党は看板にしか
すぎず、

結果は大して変わらないだろう大規模な反乱は遅いか早いかの違い
だけ。

霊帝がくたばって宦官と何進が争いその後の群雄割拠も確実に起き
るだろう、

霊帝が死ぬまでに完全に洛陽のごみ掃除と改革が済めば別だが、う

ん無理だね。

うーん、確かに面白そうだ、正史だと黄巾党起きるまで調べたらいまから13年後。

私達で時計の針を進めてしまっ、早い段階で群雄割拠にするというのも、今の段階で人材確保出来ていて金もある有力勢力は涼州位しかないのが。

例えば袁家なんて金しかない存在なのが、まあその金が桁違いなんです、

正史での袁紹は猜疑心強いと問題あったが優秀だった。

だが、こちらの奴さんは今は私と同じ子供、そうなれば袁逢・袁隗は優秀だが、

この二人が死んだら袁家は今の段階で内部分裂しておしまいでしょうなあ。

二人を殺れるくらいの暗殺者はいるからいざとなったらやってしまいか。

曹操だってまだこの外史では単なるガキンチョ、劉備なんて筵織りだ。

内心、司の言葉をやってみたくはある、とはいえ私はこの世界に積

極的に戦争しに来たわけではない。

それに私と司は戦争未経験の人殺しについては童貞だ、頭でっちな童貞軍師が、そんな人間が思い付きだけで人を死に追いやる戦争をやっているのか！？

あかんよなあ。

悩むねえ、本当にろくでもない人間だな、私も司も。

大陸の安寧を求めるならば私と司の排除が一番の最短ルートっぽいというのが。

思考が変な方向に行きすぎたそろそろ司が訳のわからん事言ってるって来るかな？

—司—

今日は昼食後暇だし、する事が無いので部屋で一人考え事、とりあえず、あとで保さんのところに悩み相談しに行こう。

最近よく思うのが、漠中とか司隸州といった涼州の周辺が欲しいというのが。

どう攻めるかなんてよく考えますが、欲しいから侵略を考えたりって私は一体何処の蛮族だ！と。

とはいえ、益州なんてグチャグチャになるなら早い段階で欲しいなあ。

涼州は広いが住みやすい場所が少ない水の確保やら生活基盤を大規模に揃える困難さが。

ならば我々がはやくでかくなるには早い段階でまともな土地を貰ってしまおうしかないかと。

国境線周辺に小さな集落を作ってそれを刺史の卻儉の所のはねっ返り兵が気に食わないと、兵に襲われて哀れ、可哀想な村、こんな悲劇が起きたら私達はやり返さないと。

こちらは領民保護と制裁という大義名分がありますから、こちらは何もしていないのに卻儉の兵の鎧を着た軍人に襲われるなんてねえ。

いくらなんでもあからさますぎるか？まあ靈帝や宦官共は馬鹿だから平気だろう、実行するときは念のため奴らに金や酒といった鼻薬を嗅がせれば確実だな。

こういう事を考えているから腹黒とか言われちゃうんでしょうねえ。

まあ、そんなことやるならば安全策で、漢王朝の連中に金ばらまいて司隸校尉を買わせてもらうかな。

涼州太守に異民族対策で活躍した褒美で琅？さんになってもらって、董家は司隸校尉になって、長安とか洛陽をおさめて実質董家がかなり早い段階で周辺を統一してしまうなんてのも。

これはいいなあ、董家なんて名門でも何でもない家が金を稼ぎ統治を成功させ名君主扱い、董家に新たにどこかの州の太守と兼任させてなんてのは洛陽はやりたくないだろう。

和さんは地元出身だというのもあるが、母さんと同じで洛陽に睨まれたから僻地涼州にきたと。

異民族対策成功なんて事で出世させると、洛陽の馬鹿共には邪魔な存在が増えるだけ、校尉任命は董家への褒美でありながら、故郷から引き剥がす罰にもなるなんて思えるでしょう。

涼州新太守に琅？さんにすることで董家の戦力をかなり削ることができる、二人が仲違したならばそちらに気が向き洛陽に砂掛けするような真似はしにくくなる。

司隸校尉は洛陽と長安を抑えるでかい地位だがそんな風になればより舐められる、

地方の豪族程度に漢王朝に刃向う力など無い、とこういう勘違いで舐めてくれるのが一番ありがたい。

漢王朝はでかいだけの龍、しかも死にかけ体のいたる個所が腐っている死にかけの龍、

宦官やら何進なんて連中はくたばり損ないという事実が分からないでしょう。

ちょっとこれは面白い、今度、会議の際に提案してみましよう。

色々考えるのが実に楽しい、たぶん今の僕は黒い笑いをしているんだろうなあ。

そういえば月ちゃんの保育園仲間に賈？がいたなあ、あの賈？だろうから鍛えてみるかなあ。

やめておくか、月ちゃんに影響あったなんて事になったら、保さん怒るから。

怒れる保さんにかかれば人体にある関節の数を倍にするくらいよゆうでしょうから。

とりあえず、今一番の悩みを相談するか、保さんならばナイスな答えを出してくれるはずだ。

一保一

予想通り、司がわけのわからん事を話にやってきた。

「保さん、将来戦争となって兵の前で演説をするならば、どちらのほうがいいかな？」

満面の笑みで何を言いだしているんだこいつは、頭が痛くなってくる。

「私の親友諸君らが愛してくれた董擢様は死んだ！　なぜだッ？！

戦いは、やや落ち着いた。

諸君らはこの戦争を、対岸の火と見過ごしているのではないか？！

董擢様は諸君らへの甘い考えを自覚させる為に死んだ！　諸君の、

父も、兄も、・・・以下略」

おいっ！！いきなり俺が殺されたことが前提の演説なのかよ、とりあえず突っ込んでおく。

「勝手に殺すな！あとそれは戦況が落ち着いた時にやるもんじゃないのか？

もう一つの案が嫌な予感がするんだが怖いもの見たさで聞こう、教えてくれ。」

笑顔の司が

「こっちは開戦前に適しているんだよ。」

嫌な予感しかない。

「とりあえず言ってみろ」

司の演説原稿を聞いていたら猛烈な頭痛がしてきた。

「諸君、私は戦争が好きだ、諸君、私は戦争が好きだ、諸君、私は戦争が好きだ、戦争が好きだ、殲滅戦が好きだ、電撃戦が好きだ、打撃戦が好きだ、防衛戦が好きだ、包囲戦が好きだ、突破戦が好きだ、退却戦が好きだ、掃討戦が好きだ、撤退戦が好きだ・・・以下略」

「聞いた私が馬鹿だった、いつから私はこんな戦争狂いキャラになったんだ司さんよ!？」

満面の笑顔で司が

「平気、演説姿恰好良いと思うよ、似合うよ。」

とりあえず司に対してオラオラをしておいた、大丈夫なのかこの天才軍師は。

これに頼らないといけない涼州ッて・・・。

第十五話、保と司の考え事（後書き）

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

とりあえず司の黒さが作者の予想を裏切り勝手に黒くなっていくとは。

第十六話 涼州の新人はやはり変人？（前書き）

第十三話で新たに涼州に加わった6人のうち軍人組が加わった直後の話を、

まあこんな感じのキャラですと言う説明の回です。

それにしても今後彼らは出番があるのか？和や司といった、個性だらけのキャラの中で新人達はいけるのかと不安になるばかりです。

第十六話 涼州の新人はやはり変人？

―淳于瓊―

皆様はじめまして私、馬騰様率いる騎馬軍団で団長代理を勤めさせていただいております、
姓は【淳于^{じゅんう}】、名は【瓊^{けい}】、字は【仲簡】、真名は【紅^{ほん}】と申します以後お見知りおきを。

二つ名は「涼州最後の突っ込み」「没個性の教科書」「困った時は淳于瓊」というのが。

將軍ですが二つ名がなくていいです、嫌がらせとしか言えない感じの物ばかりなのが。

涼州最後の常識といえますのは、涼州の突っ込み役は池陽君様、董擢様、私と三人いますが、
董擢様は実際はボケで、池陽君様は普通に見えて普通にぶっ飛ばされていたたりギャグ担当で、
そうなるとう涼州で純粋な突っ込みと言うのが私しかないことからつきまして。

「お母さん、紅は泣いても良いのですか？」

つい、不条理な人生が嫌になり呟いてしまいました。

「没個性の教科書」とは、政治、戦闘、キャラ、突っ込み全てに特

徴が無いと言われたことから、

「お父さん、まだ勤め始めたばかりですが紅は涼州での職を退職してもいいですか？」

「困った時は淳于瓊」とは私の突っ込みや発言があまりに普通な為、執務室での会議が目茶苦茶になった時に、普通の発言で場の空気をどうにかできるからと。

私は本当に軍人として涼州に採用されたのでしょうか？自分の人生に疑問が。

話を元に戻しましょう。

軍人としては、涼州いや大陸に名を轟かす名将、馬騰將軍の副官をさせてもらっております。

私などが涼州騎馬を手足の如く扱う偉大な將軍の副官が務まるのかと思います、

太守の君雅様のご子息である擢さまの強烈な推薦があり今の地位につきました。

擢様とはじめて会ったのは君雅様との面接の時であり、正直なところ、

“何故子供がこんな所にいるんだろう？”と思ったのですが。

採用が決まり何処の部隊への配属になるのか等決める際に私が呼ばれ部屋に向かうと、

君雅様、池陽君様、馬騰將軍、韓遂將軍だけでなくそこにも擢様、更に李儒様がいました。

「淳于瓊さんは戦場でのいたる局面で堅実に部隊を運用指揮するこ
とが出来る人物ですので、

馬騰さんの補佐として騎馬隊が効果的な活動出来るように尽力して
いただくのが適任かと思います。」

なんでこの場に子供がいる？くらいしか思っていなかった私ですが、
私の事をろくに知らないはずのその子供が、私以上に私のことを評
価してくれるなんて。

とはいえ、天下の馬騰將軍の補佐なんて無理だと思い断ろうか悩ん
でいると馬騰將軍が笑顔で、

「保君や司君は見た目は子供だけど実際はどんな軍師よりもはるか
に賢い軍師様なんだよー、
今の大陸で保君達を超える軍師なんかいるのかなー？保君が信じた
人ならば琅？も信じるよー」

と驚く発言が、それどころか擢様は騎馬の新しい装備、戦術、涼州
の政策全てに携わっていると。

世界は広く自分などまだまだということを思い知らされました、

だが、そんな私を擢様はかってくださったので期待に応えられるよう努力する日々です。

こういう風にしか喋れない私を見てまた普通とか皆に言われるんでしょう、それが辛いです。

だが、紅の一番の問題は、能力は良いがキャラにあまりに個性が無く普通な為、和や司といった話を弾ませる事が出来る存在と違うので今後出番があるのか？という点だった。

— 琅？ —

新しく涼州にきた紅ちゃんが部隊にきて、琅？は凄く助かった！。

保君はいろんな事を知っていたり頭がすごく良いのは分かっていたんだけど、

琅？の部隊に何が足りないか？紅ちゃんが部隊に必要、って良く分かったな！と感心しちゃった。

皆が紅ちゃんの事の特徴無い普通とか、からかっていて紅ちゃん怒っているけど、

実はみんな紅ちゃんの実力の凄さを認めているからなのが紅ちゃんだけが分からないなんて変なの！。

突撃するだけでなく奇襲したり、罠の準備をしたり、偵察や兵站を管理したり、陣形の指示や伝達したりと地味な事もキチンとこなせるなんてどんな部隊も必要とする人なのに。

琅？の部隊は突撃は強いけど粘られて長期戦に入ったりすると大変だったけど、部隊の皆も紅ちゃんがいるようになってからどんな状態になっても戦いやすいって言ってるのー、でも、それだと私の元だとやりにくいって言われているみたいだから部下達を怒っちゃった。

からかったり面白いから紅ちゃんには皆が褒めている事を内緒にするんだけどね・・・ニシシシ。

あつ、でも、普通と言う皆の意見に賛成する点もあるよー。

紅ちゃんも年頃の女の子なんだからもっとお洒落をしないと可愛くないのー！

街で紅ちゃんに声掛けられた時、警邏兵に話しかけられたのか？と思っ
て、
気付かなかったなんて事が何度もあったの。

仕事ないお休みの日に街に出るなら鎧姿ではなく女の子っぽい服を着ないと、

警邏の一般兵と間違われない日が無いって普通ではなく逆に凄い事

なのが感心しちゃう。

一雷一

今日は新たに涼州の將軍見習いとして入ってきた二人の挨拶の日で、城の謁見の前で自己紹介しているが、どうしようもないのが入ってきたなと呆れたは。

「郭？阿多だ、呼び方は任せる」

「李？稚然っす、阿多に誘われてきたッす」

ワシも軍人として細かい事は気にしないし、色々口うるさく言われたりしたのを無視してきたが。

この二人は流石にワシもあせったぞ、ワシの部隊への挨拶ならばいいんだが、和や空、保様、司様いる場での挨拶でこれはいくらなんでもないなと。

自由な城だが明らかに皆苦笑している、まあ結果出せば皆多少は目をつぶるところだが。

「なんで子供がいるっすか？」

気になるのは仕方ないにしても、太守への言葉づかいではないな。

「子守だろ。」

保様と司様の凄さを知らないからとはいえ、もしかしたら？を考えない、軍人として情けない。

「涼州の人間は基本寛大ですが皆が寛大だとは限らないですよ、礼儀を知らないなら躰されるべきかと。」

薊の口調が怒っているか、まあワシもこれは怒るべきだと分かっているが、

まあ、ワシの場合はゴチャゴチャ言うのは苦手だから力で教えてやろうと思ったが。

この少し前に入ったばかりの淳于瓊という奴なんか二人を怒鳴りつけたいが、

太守の面前だからと我慢していて怒りで肩がふるえているのが、見ていてよくわかる。

「躰されるべきって犬じゃないっす、失礼っす」

失礼はお前達の態度がだぞ、頭が痛い、李？か、こんな馬鹿でも武将になれる時代になるとは。

「文句あるなら回りくどく言うな、むかつくと素直に言えよ。」

なんだろうか、李？は馬鹿で済むが郭？はなんだ反抗期なのか？

「優秀な武官と聞きましたが、いたのは驍もされていないオツムがからな野良犬でしたか。」

「いい歳して権力にも怯えず反抗する俺恰好良いみたいに思っている痛い思考の人でしたよ、野良犬に失礼ですよ董擢様、犬の方が賢いですよ生き残るのに知恵が必要なのですから。」

保様と司様が顔は笑っている目が笑っていないあれは相当怒っている、あの二人殺されなきゃいいが。

「ガキが失礼なこと言ってやがるっす、ただ大人としてお前らが謝るなら許してやるっす」

「口先だけが一人前のガキがうるさい。」

保様と司様に確実に殺されるな、まあ御二方に忠誠を誓う私が代わりに拳で指導するか。

ワシがぶっ飛ばそうとする前に、保様が郭？の、司様が李？の懷に飛び込んで右の正拳突きを

ドゴッ！！鈍い音がした、二人は手を休めず更に前のめりになった相手の顎にガスッと左肘の一撃。

倒れこんだ二人の頭を右足で踏みつけ押さえるお二方、馬鹿共に何

があつたとかよりも、
お二方の息のあいかた、同じ間で綺麗に重なる一連の動作の見事さに感心する。

「うぐうう」

小さく鈍い声をあげる二人、將軍見習い候補でありそれくらいでは気絶はさすがにしていない。

「お前らが馬鹿であろうが構わない、ただ軍人なんだから目上の者に敬意を払え、

お前らが馬鹿で勝手に一人で死のうがこちらは一向に構わない、だが皆馬鹿の巻き添えはご免だ、
次会った時も馬鹿だったならばどんな敵よりもまず最初にお前らを殺してやるからな。」

司様が普段の喋りとは違う冷たく吐き捨てるように言う。

「礼儀を知らない知能も無い、そして、こんなガキにのされる、お前らに何の価値がある？」

今、這いつくばらされているのはお前らは殺すべき価値も無いと判断された事を足りない頭で理解しろ。」

保様が司様に続いて頭を踏みつけ抑えつけ、同じく冷たく口調で言い放つ。

この二人の問題は傲慢さと固定観念という致命的な物なのが、武人ならば相手の強さを読み、どう動くか察せないといけないが、強さを見誤りお二方が攻撃してくると思ひもなかったのが。

今まで生き残っていたのは偶然相手が弱かっただけで、これでは遅かれ早かれ、相手の強さも分からないで強者に喧嘩を売り、突っ込み最後はのたれ死にだなと。

保様、司様は武の方はまだ成長途上であり、大陸有数となっている知力と比べるとだが。

とはいえ空いた時間は鍛錬に励み、いつもワシや琅？に殴られ蹴られ這いつくばらされ、血まみれ泥まみれになりながらも這い上がり更に強くなろうとしている。

そんな保様と司様に、軍人としての肝心な物が不足する人間がどうやって勝つのだと。

「韓遂將軍、郭？、李？というヒヨコを預ますので、軍人とは何か？戦いとは何か？を、大変お手数ですが、ヒヨコを真の軍人とする為に軍人魂を叩きこんであげてください。」

言っている言葉はかなりきついが先程までの吐き捨てるような冷たい言い方ではなく、

むしろ優しい口調でワシに保様が命令してくるのだった。

「はっ、この韓文約が二人を董擢様の前に出しても恥ずかしくないよう鍛え上げます。」

保様と司真に絶対の忠誠を誓ったワシだ、忠誠の証としてこの二人を一流の軍人にしてやらないと。

「お前らが子供にやられて悔しいと思うのなら無様な姿を晒そうが這い上がってみせろ、

ワシを筆頭に涼州の人間は優しいから貴様らが這い上がってくるつもりがあるならば、

お前らが血反吐吐くまで、殺してくれとワシに頼み込むくらい徹底的に鍛え上げてやろう。」

ワシの軍人としての優しさを見せてやったら、まさか周りが冷やかしてくるとは。

「雷が優しいなんて大嘘つき、地獄の鬼だって逃げるにきまってるよ。」

「自称優しい雷に鍛えられるなんて、私ならば今すぐ殺してくれと頼むな。」

琅？に空やかましい、まあ、ワシの優しさは忠誠を誓う保様、司様にだけ向けられるのだから。

今日のこの出来事を悔しいと思うのならばこの二人は成長して強くなるだろう、さてどうなるか。

それにしても採用決めたのは和に空、そういった点でこの太守夫婦はよくこの二人を採用したな、
将来の可能性への投資なのか、人を見る目が無いのか、不安だ後者でない事を祈るばかりだ。

ちなみに郭？の真名は【日^り】、李？の真名が【光^{ぐわん}】、さすがにまあんだけ人前で無様な姿を晒し自分の未熟さを思い知らされたら真名を預けて忠誠を誓うか。

二人は馬鹿だが素直でよかったわい、これでひねくれていたら保様に逆恨みとかしていたな、
まあ保様や司様ならば逆恨みしても100倍返し位でやり返してくるだろうが。

第十六話 涼州の新人はやはり変人？（後書き）

郭？、李？の馬鹿さ加減をどういったものにするか悩んで、キヤラ設定をきちんとせず思い付きでいったら駄目でしたね。

これでは涼州の人間達がなんで二人を採用したのか分からない位、痛いお馬鹿さんになってしまったのが、失敗であります。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第十七話 未来の涼州将とまたも紙芝居? (前書き)

今回は未来の涼州將軍のちびっ子と保達のお話であります。

早く皆を成長させたいものですが、問題はそれがいつになるのかが。

今回も相変わらずの話ですが、皆さん生温かい目で読んでください。

第十七話 未来の涼州将とまとも紙芝居？

一保一

今日は月に司、護衛に紅さんを連れて保育園に来ました。

いつものように皆と遊んだり勉強を教えてあげたりしたあとお楽しみの紙芝居となりました。

ただ紙芝居に不安が、今日のは私ではなく司という点に猛烈に嫌な予感が。

タイトル見る限りは「赤頭巾」となっているから平気でしょう、いや、表紙の絵が原哲夫チックなのが大変バイオレンスな臭いがする。

いつから司はこんな画風を身に付けたのでしょうか？

紙芝居の絵柄ではない点に紅さんが明らかに頬をひきつらせている。

「今日は兄貴の絵じゃないんだな、愛で空が落ちてきそうだ！」

翠ちゃん、なんであなたが北斗の拳のオープニングを知っているんですか？

「いや、それよりもCYBERブルーだろ、ちようちゃん」

霞、なんで貴女はそんなマニアックな作品を知っている？
北斗の拳が出たら普通そこは花の慶次ではないかい？原哲夫作品の
知名度ならば。

とりあえず往年のジャンプ作品の話は置いておこう、
ちびっこ軍団が楽しみにしている紙芝居をやりましょう。

「おばあさんのお口はどうしてそんなに大きいの？」

絵のタッチが原哲夫作品な以外はここまでは普通にすすんでいるぞ、
司作が不安だが。

この絵柄の狼だと食われたら絶対に赤頭巾ちゃんは助からないと内
心思っているが。

「「「「あかずきんちゃんはやくきづ（け！）いて」「」「」

「それはお前を食べる為だよ」そう叫んだと思ったら、
おばあさんに化けた狼が赤頭巾に襲いかかりました、危うし赤頭巾
！！」

驚かそうと盛り上げて演じながら読む私

「「「「あかずきんちゃんにげ（るです）てー」「」「」

やはりちびっこだからすごい怯え方、皆いいはまり具合である

「いまこそたたかうんだ！」

翠ちゃんに華雄ちゃん二人だけ答えが明らかに違うぞ・・・、お兄さんは不安だ。

部屋を見渡すと護衛の紅さんもこの後どうなってしまう？と興味津々の様子、前に絵本描いている時にいたから赤頭巾はこんな話って簡単に話したし知っているはずなんだが。

考え事はいいや、ちびっ子たちの為に紙芝居に戻ります。

「隙をつかれた赤頭巾は狼に丸飲みにされてしまいました。」

周りを見渡すと子供達が今にも泣きそうな顔になっている。

「たべられちゃうなんて・・・うるうる」

あー、月はなんでこんなに可愛いんでしょうか。

「常在戦場、油断していた赤頭巾が悪いんだよな兄貴？」

翠ちゃん、私は貴女にどう接すればよいか分かりません。

「てきちゃん、くわれておしまいなんか？」

霞もなんだかんだ言っただけで気になっている模様。

話の続きをはじめ、なんかセリフが明らかにおかしくなってきた、

司の野郎め・・・、とりあえず動揺を隠しながら紙芝居を続ける。

「見たか愚かな人間よ、最後に笑ったのはこの狼様なのだからな！」
なんなんだこの狼のキャラは。

「おおかみのくせになまいきだ。」

華雄ちゃんジャイアンじゃないんだから気持ち分かるが。

「勝ち誇る狼の耳に、それはどうかな最後に笑う狼君？、謎の音が響きます。」

「「「「「えっ!？」」「」「」「」

今にも泣きそうだったちびっこ達が顔をあげる

ちびっ子たち驚いているが私だって驚いているんだぞ、
なんだこの目茶苦茶な展開は、狛師は出てこないのか？

「誰だ!？」 誰もいないはずのおばあさんの家に狼の声が響きます。」

もう嫌な予感しかしないよ、この後の展開予想すると。

「みかた・・・・・・・・?」

恋ちゃんごめん私にもわからない。

「まだ分からないのか間抜けが! まさか!?! 狼が自分のお腹を見ると、

‘外からの攻撃に強いが内側からは弱かったな。’ 赤頭巾の声が響きます。」

赤頭巾の台詞が最初の時と全然違うよ、なんなんだこのキャラは。

「僕は最初から分かっていたんだからね、赤頭巾が無事だって。」

さっき驚いていたのは誰? でもそんなところが可愛いぞ詠ちゃん。

「うちがわからこうげきするためだとは、ねねにはもうてんだったのです。」

素直に驚いてくれるのは演じる側としては嬉しいが。

「ズブシュと音がしたと思うと“うがぁー”狼の泣き叫ぶ声が響きます、

狼の体の内側から鋭利な刃物と化した手刀が飛び出してきました。」

いつからこんなに派手に血が飛び散る作品になった赤頭巾は？
紅さんが固まっているよ急展開とあまりのバイオレンスさに。

「やったか!？」

華雄ちゃん、さすがにそれはフラグだ。

「すごい・・・」

確かに凄いな恋ちゃん、絶対に出来る訳無いんだから。

「狼のお腹の裂け目から右手だけでなく全身狼の血にまみれた赤頭巾が遂に姿を表します、
左手には最初に食べられたが無事だったおばあさんを抱き締めながら。」

普通なら婆さんは死体、死体どころかミンチだよな。

「おばあちゃんもぶじだったんだー！」

目をキラキラ輝かせる月、駄目だあまりの可愛さに卒倒しそうです、ただ、こんな凄惨な紙芝居で喜んでいる月に不安もあります。

「食われたんじゃない、わざと貴様の口の中に飛び込んだのさ、お前さんに噛まれないか一か八かの賭けで内心ヒヤヒヤだったがね、」

うん、気にしたら負けだ、キザなヒーローみたいな喋りになっているのは。

「ぜったいにじしんあったくせにいやみなやつです。」

ねねちゃん、女の子な赤頭巾の口調に疑問は持たないんですか？

「不適に笑いながら言う赤頭巾、絶対に成功させる自信があったのでしょう、

さすがは地獄の戦乙女と呼ばれた伝説の戦士、赤頭巾」

赤頭巾にこんな嫌な二つ名があるなんて初めて知りましたよ、なんでしょうこの飛び具合、頭痛がします話を辞めたい誰か止めて。

「兄貴格好良すぎるぞ赤頭巾の奴、俺もやりてー」

翠ちゃん無理です狼に食べられたら死んじゃいます。

「腹を切り裂かれ息も絶え絶えな狼が命乞いをします、
“助けてくれ、婆さんだって無事だから、俺はもうこんな状態なん
だぞ”」

話の終わりが予想付いたがいいかげんにしてくれ、これはいくらなんでも。

「うわー、いのちごいとおおかみもなさないやつちゃうの。」

霞ちゃんなら突っ込んでくれそうと思ったら、話に引き込まれていく。

「赤頭巾やってしまえー」

駄目だ、常識人なはずの詠ちゃんでは完全に手遅れだ。

「命乞いをする狼に対し、赤頭巾は一言、貴様の失敗はただ一つ、」

「きさまはおれをおこらせた」

見事にちびっこ達の声がハモった、なんでここでジョジョ？
なんでちびっこ軍団は台詞が分かるんだ？と私は叫びたいよ。

「いけ」

恋ちゃんがのっている。

「こうして赤頭巾のオラオラで吹き飛ばされ殺られる狼でした。」

その前に腹切り裂かれた段階で死んでいるんだが、突っ込んだら負けか。

「「「ヤッター！」」」

ちびっこ軍団大喜び司も作者冥利に尽きるでしょう、紙芝居を読んでいる私は不満というか色々な意味でお腹一杯です。

「その日の夕方、丘にある小さな墓に話かける赤頭巾その顔は寂しそうでした、

‘子豚達よ遅くなったが仇は討ったからな’
そうです、それは煉瓦の家ごと焼き殺された子豚達の墓だったのです。」

私の作った「三匹の子豚く逆襲の狼く」と勝手にリンクしている。

子豚の死は悲しいが全て終わって良かったと安心するちびっこ。

「ドシュツ、妙な音が辺りに響きます’グッ’赤頭巾のくぐもった声が、

立ち上がろうとした赤頭巾の胸に一本の矢が突き刺さったのでした。

」

「「「ええっー！！！！」」」

子供達が10里先にも届かんばかりに驚きの声をあげる、うん、紙芝居を読んでいる私も驚きの声をあげたい。

「胸に矢を受けた赤頭巾、矢が飛んできた木陰を見ると、そこにたたずんでいたのは・・・、はいっ、今日はここまで続きは次回。」

このあと「あかずきんはどうなったおしえろー！」と、翠を中心に霞ちゃん詠ちゃんにまでボコボコにされるとは思わなかった。

幼稚園や小学校低学年にフクロにされるのはおっさんの心へのダメージでかいよ。

一番ダメージが大きかったのは月がポカポカ叩きながら、

「へうっ、おにいたまのいじわる、おにいたまなんかきらいでふ。」

膝から崩れ落ちたよ月に嫌いなんて言われたら生きていけない。

でも、私はすぐには死ねない、こんなふざけた話を書いた男を！連載物にして月に嫌われる原因を作り出した男を道連れに！

部屋の隅では、ちびっこ軍団に袋叩きにされている私の姿を見て爆笑している司と蒲公英ちゃん

蒲公英ちゃんだけ他にいたのは3歳にして紙芝居よりも、翠ちゃんとかを驚かすドッキリの策を司に聞く方が楽しいようで。

私や司とは違った点で天才になりそうだな蒲公英ちゃんは。

蒲公英ちゃんはまあいい、とりあえず被疑者司を拘束しないと。

「保さん大丈夫ですか〜?」

笑ってやがる、司め。

「司くう〜ん、こんなふざけた作品を作らなければ僕は無事だったんだよ、

なんで完結する話に勝手に続きを作るんだ、新たな刺客まで出して。

」

「保さん実はこの先の展開に悩んでいまして、皆には内緒ですよ、赤頭巾の母親率いる新たな敵軍団を出し、死んだはずの狼が赤頭巾の仲間に入るのもいいかなと?」

なんでそんな男塾的な展開なんだ。

「しんだあかずきんにしょつくりな、いもうとがでてくるのもありだとおもうによ。」

蒲公英ちゃん、満足に喋れず舌足らずな3歳の子がそんな駄目なストーリーを考えなくていいです。

私は貴女の将来を考えると大変不安になってきます。

「とりあえずお前を殴る、私の怒りを知ってもらおう。」

拳をボキボキ鳴らし司に近づく。

「逆恨みでしょう、大体保さんが紙芝居でゴルゴ13をやろうとするからです、

しかも、ゴルゴの武器はやはり銃だ、って、機密の火縄銃まで作品に出そうとして、

機密をなんだと思っているんですか。」

どうせいずれ分かっちゃうし、今ならまだみんな知らないんだから空想の武器扱いでしょ。

「最初に用意した僕の浦島太郎を没にするからこれになったんですよ。」

「絵にも描けない美しさはモザイクかかるR-18な意味ではない！」

司の描いたのを見た瞬間即破りましたよ、紙がもったいないが。

それにしても浦島太郎なんかやったら、

「絵にも描けないならなんで此れ描けているん？」と霞あたりに言われそうだ。

「とりあえずゴルゴ13は社会人の必読本じゃー！」

人類史上最高の作品をなんだと思っているのでしょうか司くんは。

「月ちゃんの教育に良くないと普段は色々五月蠅いくせに、ゴルゴ13はセックス、殺人なんて一番教育に悪いでしょうがー！」

なんて屁理屈でしょうか、司は至高の作品であるゴルゴを理解出来ないとは。

私は司と戦うべき運命にあったようです、向こうも覚悟を決めたようです。

一紅一

今日は董擢様、董卓様、李儒様の護衛として保育園にきたのですが。

ただ、最近韓遂様、馬騰様との調練で引き分ける事もあるお二人に護衛が必要なのでしょうか？

もしかしたら私よりも強いのではないか？と思ってしまいます。

それにしましても董擢様は本当にマメな方です、董君雅様達と一緒に執務を行い、調練に参加し、色々な物を発明し、紙芝居や本を書き、保育園にも来る。

一体、董擢様はいつ寝ていらっしやるのでしょうか？子供なのに倒れてしまわないか心配で仕方ないです。

今日は董擢様達の護衛で保育園に行くと最初聞いた時私が小さな子供と一緒になんて大丈夫か？
つい粗相をして泣かせてしまったとか不安でしたが、それは平気でした。

子供達と仲良く遊んでいるとチリンチリンと音が聞こえてきました、見てみると董擢様が「紙芝居の時間だよ」と鈴を鳴らしていました。

紙芝居が楽しみで子供達は走って集まっていました。

董擢様の紙芝居どんな話かと、大人ですが私も楽しみにしていました。

この日は「赤頭巾ちゃん」という私も少し知っている話でした。

前に董擢様から大まかに噺を聞いた限りの内容ですが。

おばあさんの家にお見舞いに行く赤頭巾をかぶった可愛い女の子がいて、

おばあさんだと思ったら実はおばあさんに化けていた狼にと。

そのあとどうなるのかが気になっていたので楽しみです。

「今回の紙芝居は自作ではなく司の作ったのだから不安でしかたない。」

董擢様がそのような事を呟かれていました、どう不安なのでしょう
か？

一目見て分かりました、李儒様の絵は大人顔負けの上手さなんです
が、

子供向けの紙芝居には似合わない物凄い迫力のある力強い絵柄なの
が。

絵を見た馬超様が「愛で空が落ちてきそう」と言われました、

私は、親の事言われると「親は関係ないだろ」とキレる銀行員に思
えました。

絵が力強い以外はお話は普通でたんと進んでいましたが、

赤頭巾ちゃんが遂に狼に食べられてしまった辺りからおかしな事に。

飛び散る血飛沫狼のお腹から飛び出た内臓、絵の凄惨さに驚きこころで記憶がなくなりました。

どれくらいだったのでしょうか？私が意識を取り戻すと、紙芝居は終わったのか董卓様や馬超様はおやつを食べてました。

ただ、董卓様与李儒様の姿が見えないので辺りを見渡すと、お二人は互いに愛用の武器である方天画戟と鉄扇を構えて向き合っていました。

「殺す！！」

何があったのでしょうか、とりあえず危険なので止めないと、ただ先程も言いましたがもしかしたら私より強いかもしれない二人をどうすれば？

オヤツに夢中になっていた子供達も二人の闘いに気付き、董卓様やら皆が危ないからと必死で止めようとしています。

「へうう、おにいたまあらそいはいけません」

「何やってんのよ、二人共止めなさい！」

「ばかなのです、どうせくだらぬりゆうなんですからやめるのですっ。」

董卓様、賈？様、陳宮様皆の言う通りです、危ないからやめるべき

です。

「兄貴、軍師に負けたら恥ずかしいから勝てよ」

「つかさおにいさま、さくしのすごさをみせてみてっ」

「なあ、かゆうよ、どっちがかつかかけへんか？」

「ぐもんだな、いつものようにさいごはあいうちでおわりだな。」

「みんなたべないからおやついっぱい」

訂正します、勝負を止めないどころか余興にしている人が大半です。

ガキーン、ドガーン、グシャ、ドゴツ、子供の喧嘩の音ではありません。

「くたばれ、このボケー！」

「死ぬのはお前だ！」

明らかに台詞が喧嘩どころではないです私の実力では相討ちがいいところですよ。

天国のお母さん、私、紅はとても無力です、どうすればいいんですか！？

どうすればと途方にくれていると張遼ちゃんと華雄ちゃん、呂布ちゃんがやって来ました。

「しょうぶにみずさすのはぶすいやけどしかたない、いくでかゆう、れん。」

「「おかあさーん・・・・・・・・おかあさん」」

お母さん？最初誰の事かわかりませんでした。

ニコニコした丁原さんが奥の部屋からやって来ました、
丁原さんは見た目からして強くなさそうですが大丈夫なのでしょう
か？

人は見た目によらないと言います、実際董擢様も李儒様見た目は子供です。

戦いはどうなっているか見ると、李儒様が董擢様に馬乗り鉄扇で滅多打ちに、
死にますよアレは、なのに「撫でているのかきかねーよ」董擢様は人間ですか？

私の気のせいでしょうか、普通なら争っている二人は血まみれの大怪我なはずですが、
傷口がどんどん塞がっていつているように見えるのが、お二人は人外ですか？

そんな人外、もといお二人の前に丁原様が現れました。

不思議と二人の争いがピタリと止みました、丁原様はどれほど強いのでしょうか？

アレ？地面にペタンと座った丁原様がホロリと泣きました、それだけです、何も言わず、ただ涙を溢しただけです、ですが場の空気が変わりました。

先程まで争っていた董擢様与李儒様が揃って土下座したり必死で泣き止むよう頼んだり、なんなのでしょうか涙一粒だけでこのようになるのですか？

涙一つで圧勝なんて、今まで武を磨くとかやってきた私の人生に意味はあったのでしょうか。

涼州はなんでこんなに常識が通用しない土地なのでしょう、私は勤め先を間違えたのでしょうか？

淳于瓊の悩みは続く。

第十七話 未来の涼州将とまとも紙芝居？（後書き）

駄目だ司の描くどうしようもない童話ばかり思いついてしまうのが、保達の訓練とか書くべき話があるのに、駄目ですねえ。

それにしても淳于瓊さんが没個性な割に使いやすい、その分キャラかぶりで空が消えてしまいそうですが。

思い付きで話を書いているから初期キャラがどんどん消えていきそう、不安だ。

第十八話 忘れられていた馬、そして二人の任務って？（前書き）

今さらながらドラマの三国志を見ていますが、見ながら恋姫は失敗でした。

小汚いおっさんの袁術に慣れてしまい美羽に愛着が持てない、美羽好きだったが。

華雄の戦いが敵将を宙に舞ませ最後は構えておいた偃月刀で串刺し、なんて魅せる戦い、でも殺られる時もお約束の関羽に瞬殺と魅せてしまうのが。

悲しいですよ華雄さん好きとしてはこの話での華雄さんは、まあ・・
・頑張ってもらいますか。

それにしても一番違うはずの貂蟬に違和感を感じないのは何故でしょうか？

さて、雑談はさておき今日もまた初っぱなからふざけた話です、皆さんどうぞ。

第十八話 忘れられていた馬、そして二人の任務って？

―保―

テンテンテンテンテテンテレレレレレ♪

「いらっしやいませー」

店内に入って面喰った、此処は本当に三国志の時代なのか・・・？

前回（第十話）“あの曲が流れたら此処はファ○マだ”と言ったが、あの曲が遂に流れはじめたよ、なんだ私が疲れているのか？妖術なのか？

此処は涼州にある武器屋なはずなのに完全に現代社会のコンビニだよ、

お会計の所で一番クジらしきものまでやりはじめているし。

いくら外史だとはいえ大丈夫なのかこの三国志世界はフリーダム過ぎるぞ！？

まあ、一番クジの商品が名馬だとか鎧だとか辛うじて三国志的要素があるのだが。

店内をきよろきよろと見渡していると『おおっ、久しぶり』と声かけられた。

神出てきたよ、ちょっと待て！！なんでそんなコンビニの制服っぱ

い物を着ているんだ？

この間まで仙人服と呼べばいいのか如何にも神様って格好だったのに。

見た目が禿げ上がった頭、額に深く刻まれたシワ、張りを無くした年寄りの皮膚、

それに胸くらいまで延びている長い真っ白な髭、手にはゴツゴツした杖を持っている。

見た目が完全に神だよな、なんで勝手に衣替えしてコンビニのユニフォームみたいなの！？

神な見た目な顔で神っぽくない服装していいのは亀仙人だけだろ。

『やはりお客さんとしてはワシが店の人間と分かりやすいじゃろ、あと商品陳列とかで汚れにくいし。』

ふ、普通の答えだよ・・・、いや、ぶっ飛んだ答えを求めてはいないよ、

だって、神なんてのがいて、コンビニ？経営している段階で既にぶっ飛んでいるんだから。

それにしても普通に心を読むな！！！！普段神との会話が念波だからとはいえ。

『おおっ、それはすまんのう、つい聞こえてしまうからな。』

だからそれをやめろと！！！！

『ちなみに制服を着るようになったのは指導員が巡回に来た際に怒られて、

店長として店に立つのならばちゃんと制服を着ろと。』

指導員！！！？？？完全にコンビニのシステムやん。

「もしかしてフランチサイズ制で他にも店舗があったりして。」

『おや、知らんのか知っていると聞いたぞ？多店舗展開するにはチエーンよりFC制だろうと、

とはいえ、まだまだ規模は小さく、長安、洛陽、陳留、建業とかまだ都市部だけじゃが、

まあいずれそのうちこの店も大陸全土に出来るぞ。』

はじめて知った驚愕の事実ですよ。

実に嫌すぎる光景だ、このままだと三国志の時代の中国なのに、扱っているのが武器だとはいえ、

どんな地方に行こうがこのなんちゃってコンビニだらけなんて事があるのか。

『文句があるならお前さんの横にいる社長に言ってくれるか。』

だから心を読むな！あと、犯人は司なのね、OK、あとでぶっ飛ばしておく。

「いやさ、前にはじめて来た時に店に活気がないから、その後、店に来る度にやり方教えていたんだ、

ならば、いつそ親会社を涼州にして運営しては？ということになってね。」

司君、大事なことは皆に相談しようよ、なに州の金でコンビニ経営をやっているの？

頭がクラクラしてきた、とはいえ、コンビニの話をここでしていても仕方ないので、

私達が神に呼び出された理由を聞くことにしよう。

『では、話が長くなっていいように裏に行こうかの。』神の後をついていく。

バックヤードに行く為の入り口をくぐると、いつものあの真っ白い部屋に、
ただ、いつもと違うのはテーブルに椅子、そしてコーヒーとケーキが用意されている。

「今回わざわざ私達を呼んだのは如何様で？」と私が話を進めよう
とすると、

『お前さんらには久しぶりだろう、まずはケーキとお茶を楽しむといい。』

「お茶と言うがコーヒーだけだな。」

司君細かいよ突っ込みが、貴方は相変わらず神を相手にするとき
口調が荒くなるな、

神の出番があるとその分、貴方の大好きな母親薙さんの出番が無く

なるからとはいえ。

私は司ほど神には恨みが無いのでこちらに来てからはじめてのコーヒー、

12年ぶりのコーヒーをゆっくりと味わうとしましょう、うん、実に美味しい。

そういえば、転生する時に成長限界突破するから頑張れば知はヤン・ウェンリーに勝てる、

と言われたな、それはまあいいんだ、ヤン・ウェンリーで思い出しただけの事なんだが。

彼は優秀だがコーヒーの良さを理解しなかったのが勿体無い、私みたいに紅茶もコーヒーもたしなめばいいのに、まあどうでもいいことだが。

さて、コーヒーの香りと味で鼻と舌をしっかりと癒されたし、肝心要な話を始める。

「久しぶりにコーヒーを楽しませてくれる為に呼び出した？」

「なわけないよな、保さんはコーヒー党だが僕は抹茶派だし、呼ぶなら抹茶を出すでしょ。」

司君それはギャグで言っているんだよね？まさか本気で言っているのかい？

私よりもはるかに優秀なのに、たまに君が頭が良いのか悪いのか分からなくなるよ。

そんなどうでもいい事を思っていると神が怒って叫び出した。

『いい加減馬を手に入れろー!!』

横にいる司の顔を見ると向こうもこっちを見ていた、目線が合う、お互いに忘れていたぜよ、

おお、神が転生の時に私達に馬をくれると言っていたんだったな・
・。

『ワシの設定ではお前さんが羌族の領地に挨拶しに行くとか族長が
前の為にと、

この前の歓待の感謝で馬貰えるようにしておいたのに、一向に行か
ないんだから。』

神、神、神さんよろ、駄目だろ私とかに話さずに隠しておくべき
だろ裏設定は、
カジノでディーラーが勝たせてくれるとかしないやろ、それくらい
あり得んぞ。

「気持ち嬉しい、ありがたい、本当に感謝している、転生して三
国志の時代を楽しめているし、
これだけでも満足なのに徹底的に優遇してくれるのはありがたい、
でも、仕方ないでしょうが!!」

私の発言に続いて司も神に答える。

「僕だって色々行ったりしたいんですがあの過保護な親が行かせて

くれると思いますか？」

『・・・・・・・・・・。』

神黙っちゃったよ、神が両親の性格をいじっていくれていてもよかったんだよ、

過保護過ぎて私達心配されすぎて遠くに二人で行けるような自由がないですから。

あり得ない存在ですよ私達の親、神を黙らす息子への溺愛、それを二人共持っているんですから。

どうするかねえ、まいったねえ、母上にロボトミーするわけにはいかないしねえ、
それに、この世界での大事な母上にそんなふざけた事出来ませんし、させませんし。

さて、どうするか悩むもんだねえ。

一司一

母さんの出番を奪う憎き神、最近では店長と呼ぶようにしているが、それはどうだっていい。

まあ僕もムカつくとか色々言ったりしていますが保さんと同じで神に感謝しているんですよ、
それなりどころではない物凄い優遇をしてもらっているんですし。

それに僕は先程抹茶でないのかよと言いましたが、コーヒーでも私の好きなキリマンジャロですよ、
こういう心遣いは嬉しいですよ、ただ僕にコーヒーを出すならやはり抹茶にしてください。

まあ、僕の抹茶好きな話は置いておきましょう。

前に神が言っていた、ごっつい馬をくれる話ですが貰えるのならば是非欲しいですよ、

まあ、馬どころか望めばV-22オスプレイだろうがなんでも貰えますが。

ですが、この時代にそこまでふざけたものは欲しくありませんよ、それにへりにしろ飛行機にしろ操縦した事が無いのでオスプレイなんか貰っても困りますから。

馬の話に戻しましょう、転生直前に神が言っていた原哲夫作品の馬を、

というのは大変面白そうです、ただ、不安もあります、貰っても乗りこなせるかどうか。

うーん、でも黒王号にしろ松風にしろ欲しいですよ、なんとか乗りこなして愛馬にしてみたいです。

見た目だけで周りは逃げ出しかねない巨体と威圧感を持っている点。

更に、馬鹿みたいに強いですから、もしかしたらあの馬はそこいらの武将より強いかも？

『強さは・・・、まあそうじゃの、三国志ならば関羽に敵うか敵わないくらいだ。』

「「ブッ！！！」」

あまりの驚きに保さんと揃ってコーヒーを吹き出す。

神、それはやり過ぎにも程があるぞ馬だけで軍神とやりあえるってどんな強さだと！？

そうなるにあの馬に勝てるのは呂布しかいなくなるような？

そんな馬を乗りこなせるように出来るのか、不安だ・・・。

話が少し変わりますが、先程名前が挙がった呂布ですが、いま保育園にいて、

保さんや月ちゃんに懐いています、涼州は将来の大陸一の武力を押さえているんですよ。

それに、僕や保さんは成長限界突破というアビリティがありいずれは範馬勇次郎越えの強さです、

原哲夫の馬に乗って、実力が最大で範馬勇次郎を超える生き物が二人いることになる、涼州は。

涼州は将来ですが、大陸最強の上位三名おさえてしまった？

そうなければかなりの無茶が出来るでしょうねえ、歴史では董卓に対抗するため十八鎮諸侯が集まり、中国史特有の水増しだろうが40万という大軍団を集め洛陽に向けて攻めてきますが、董家は史実みたいにしないでも真っ向から戦っても圧勝しそうですよこのままいけば。

実際涼州の騎馬部隊とか錬度、武装、戦術とか全てが他国と比べてチートクラスなのですから。

武将は将来有望な大陸最強の三人、さらに霞ちゃん、翠ちゃんもいる。

現役組ならば琅？さん、雷さん、見習い組の紅さんに、日、光の馬鹿二人もいる。

兵数も常備軍だけで今の段階で6万、余力はまだまだあり10万でも余裕でいけます、さらに徴兵もしたらどれほどの数になるやら？望めば異民族も派兵に協力してくるでしょう。

更に保さんと作り上げた大陸中に散らばらせ広げている商売人と細作の網で、市場価格を常にチェックし兵糧や鉄などの転売でかなり稼がせてもらっています。

おかげで他国は戦争をしなくなっても準備に相当苦勞するでしょう、その間こちらは一方的に殴り続ける事が出来ると。

「アレツ、これって詰んでない!？」なんて漫画とかの台詞でありますが、

今の段階でそれは涼州以外の国が「これって詰んでない!？」と言
うでしょう。

そんな状態ですから、馬鹿な霊帝に、玉無し、妹におんぶでダツコ
な肉屋の馬鹿、

明日にも洛陽に進軍すれば今言った馬鹿一同みんな仲良く晒し首に
してあげられるかと。

とりあえず、こういう事を深く考えるのはやめましょう、まともな
思考ではない、

勝てそう、と、勝てる、と、勝つ、では意味が全く違うのですから。

それにしても私の発想が明らかに悪なのが、神の目の前で神の代理
人に近い僕が陰謀を企むのは。

この戦乱の時代をどうにかしろと言うのが神の指示だったのですし、
陰謀は控えましょう。

『今日呼んだ本当の理由は馬の件ではなく、今、司が考えている事
に関してなんじゃ。』

神が口を開いた。

とりあえず保さんではないが、勝手に心を読むなよ!？

――保――

『今日呼んだ本当の理由は馬の件ではなく、今、司が考えている事に関してなんじゃ。』

何の事だろうか？ たぶん司が黒い笑みを浮かべていたから陰謀に
いてなんだろうが。

とりあえず分からない事は素直に聞く事にしましょう。

「どういったことでしょうか？」

『ワシがお前達を転生させる時にこの世界が大変な事になってい
ると伝えたじゃろ、
その件に関してお前さんらに協力を頼みたいと思ってな。』

その後聞いた限りでは神の代理人として混乱した世をおさめろと。

『そうなんじゃ、この世を安定させるというのは間違っ
てはいない
んだが、
たぶん想像している事とはかなり違うのじゃ。』

どういうことだ？

『この大陸の戦乱を治めるだけだったらお前さん方は必要ないん
じゃ、英雄がいるから。』

此処までは言わんとしている事が良く分かる。

「性別や性格とかが反転していたりしているI Fの世界だとはいえ、やはりそこは三国志、

今はまだだが後々劉備や曹操といった英雄が出て来るから安定は築けるという事ですか？」

『そうなんだ、問題はこの外史事態がなんじゃ。』

とりあえず私も黙って神の話を聞いてみようとなる。

『正史に対してこんな世界があつたらという願望から誕生するI Fの世界が外史なんじゃが、

時として皆の願望とかに関係無く偶然誕生してしまう外史があるんじゃない、ここの事なんじゃが。』

『外史は願望の具現であるが、此処は望まれて出来た訳でなく、存在が非常に不安定なんじゃ、

だから此処が存在するという認識が弱いとこのまま消えさってしまう、この世界の生き物には悪いが。』

「テレビの視聴率みたいだな。」

その例えはどうかなあ？司君よ。

『あながち間違っていない、だからこの世界を安定させる為に正史と違う特色を出さないと。』

「私達がこの世界に送り込まれたのは、既存の三国志をひっくり返

し目茶苦茶にする為と。」

なんか昔のプロレスの軍団抗争みたいだな言っている事が。

『そうじゃな普通にそのままではいつ消えるか分からないと不安定ならば、

劇薬だが徹底的にこの外史をかき回すお前さん達のような存在が必要じゃと思つてな。』

なるほど司の企む陰謀と関係しているというのもあながち間違っちゃいないな。

司はどうせ乱れる世の中ならばいつそのこと早い段階で黄巾党、何進や十常侍の争いを起こさせ、
または漢王朝やそれに準ずるだけの無能な諸候を早急に潰す事を計画したりしている。

一時的な混乱はでかいだろうがその方が大陸への被害を少なく出来るからという大義名分で、
とはいえ正史を知っている人間、維持しようとする人間がいたら、
真っ先に狙われるだろうな。

まあ、私も司も実のところ大陸の平和の為なんかではなく、自分が面白いかどうか、
あとは自分の周りにいる人間の命を守る為だけのエゴイストでしかないのだから。

傍から見れば場をかき回すだけの台風みたいな、そう、テロリスト

にすぎないんですから。

「私達みたいなふざけた人間のやる世を乱す行為が、皮肉な事に外史の存在価値を高め、この外史に住む人間の命を守る事になるとは実に皮肉で面白いじゃないか。」

私はやはり狂っているんだろう、こんな事を普通に思いニヤリと笑っているのだから。

「本来は暴君に天罰を下す存在の神が、好き勝手暴れまわっていいと錦の御旗をくれるんですから、こんなありがたい申し出はないですよね保さん、是非かき回してやりましょう。」

司も笑っている、お互い少しどころかかなりオツムのネジが外れているな。

「司なんか、錦の御旗なんか無くても常に面白いと思えば喜んで場をかき乱す人間だけだな。」

私の言葉にそれは心外だという表情を見せ苦笑している司、そんな二人を見ている神

『すまない、嫌な役回りをさせてしまって、危険で人から恨まれる事でもあるのに。』

神に頭を下げられるようなことではないんだがな、とはいえ凄いな

神が頭を下げて来るんだから。

既に私達はこの段階で、洛陽にいる天使とか呼ばれているお飾り皇帝よりも遥かに上の存在だな、まあ、皇帝の地位なんか興味無いし、だからどうしたというところではありますが。

それにこんな事言ったら気がふれていると言われるか、まあその前に不敬罪だと処刑されるか。

「今も好き勝手やっているんですから構いませんよ、歴史を無視している、

波乱万丈な人生に自分から飛びこめるこれほど幸せな人間なんかないんじゃないんですか。」

「おもしろき こともなき世を おもしろく、ですよね保さん。」

あの世の高杉晋作が聞いたら蘇って怒鳴りつけてくるぞ司君。

『とりあえず、この外史はお前さん達のおかげで今の段階でも当初に比べかなり安定している、今のままでいけば近いうちに、それでも何年もかかるだろうが完全に固定されるじやろう。』

「では固定されたら教えてください、ただ言っておきますが外史が固定されたからといって、

私達二人が急に真人間になれるわけないですから、死んでも無理だよな、特に司君は。」

「暴走した時の保さんの方がはるかに危険ですよ。」

とりあえず普段と同じように馬鹿話をする事で世界の平和を守る事を知るとは、

もう少ししたら司と話し合って、色々やらかしてみるか涼州の為に。

まずはなんだ静かに徐々にだが近隣州を切り落としていくとかか、楽しみだ、どう遊ぼうか。

『あつ、お前らに最後に頼みごとが、特に用無くてもいいから店に来てくれ、

お前さん達は何をするか分からないという点で他の人間と違って面白いからな。』

宇宙で一番偉いというか、この世界を作った神が完全に友達になっているな、

こんな狂った世界を楽しめるなんて死んで転生するのも悪くないな、うん、じつにいい。

「保さんは知らないが、また店の経営状態チェックでいくから待っているよジジイ。」

司も心底楽しんでいるな、さあ、これから更に好き勝手暴れまわりましょうか。

第十八話、忘れられていた馬、そして二人の任務って？（後書き）

恋姫世界をかき回す存在である二人に、更に自由に動けるようにさせてみました、フリーダム過ぎてどうなるか作者の私もこの後どうすれぱと。

後々なんでこんな展開にしまったんだ俺は！？と猛烈に後悔しています。

いつもいつもこんな馬鹿な話ばかりですが、皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十九話、嵐を避けられるのか？（前書き）

この話とは全く関係ないのですが今日は夕方から取引先のパーティーでした。

会場にいた人でずっと無口で、口を開いてもボソツと用件しか喋らず、

黙々と山のようにご飯を食べ続けている人がいた。

恋転生したのかよ！？と突っ込みたかったが、問題はその人が50近いおっさんでったのが。

多分、ここ最近の仕事の忙しさで疲れているんだなと思いましたよ。

話に全く関係ない雑談ですいません、さて、今日はどうなりますか。

第十九話、嵐を避けられるのか？

―保―

あつ、どうも皆さん、007ならば殺しのライセンス保有者みたい
に、

神から好き勝手やっていいよとお墨付き貰った董擢こと保です。

今日は涼州の外れに来ていますが、何もありません。

テレビもねえラジオもねえ、あの歌よりも何もありません、
車が若干でもあつたら怖いですが。

いるのは羌族の皆さん方にあとは馬やら家畜、涼州から来た我々が
いるくらい。

何故そんな場所にいるのかと申しますと羌族から招待を受けたから
であります。

招待を受けたのならばと涼州も羌族を大事にしているというアピー
ルのために、

太守である母上は無理ですが父上、琅？さん、雷さん、薊さん司の
親子、紅さん、私、

といった恐ろしく豪華な涼州の主力メンバーで行って来ましたよ。

羌族の皆さんから普段の取引や友好関係、そして族長達が城に来た時受けた歓待の礼をと、族長さんが特に私にお礼がしたいと大変貴重な牛を潰してまで出してくれたことへと。

「何が貰えるんでしょうねえ族長自ら渡そうとするくらいですから楽しみですね保様」

とか、紅さんやら皆族長のプレゼントが気になっているようで。

「そ、そうですね、どのような物を用意していただけるのかと。」
引き攣りながら返事します。

羌族の皆さんささい貴方方の用意したサプライズプレゼントの正体を知ってます、しかも、私だけでなく司君も、私の手元に来るように神が準備した馬なんですから。

羌族の皆さんとても良い人なんだろうなあ？驚かせようと頑張っているんだよ。

本当にごめんなさい、としか言えないですよ、答えを知っていて。

まあそんな事を思ったりしているうちに時がたち夜になり宴席にな

りました。

私は太守の息子な為見た目12歳のガキンチョな私もかなり良い席に案内されました、問題は私の横にチョコンと座らされたこちらの可愛らしい女の子はなんでしょうか？

族長が満面の笑みで「自慢の娘なんだが董擢様の妻として」私のお嫁さんにですか、族長第十五話で懲りてな・・・、なんて嬉しいサプライズプレゼント、

ごめん、このサプライズプレゼントは予想していませんでした。

馬じゃないとは、神大丈夫なのかあっさり期待を裏切られて。

まずいです、今回は母上は来ていませんが、琅？さんと薊さんがいます。

琅？さんは翠ちゃんを僕に、蒲公英ちゃんを司にと企んでいるんですから、

これは危険です、前回族長に順番があるだろと切れるような人です。

母上の私LOVEぶり、薊さんの司LOVEぶりとはまた違った危険さがあります。

それにしても翠ちゃんは私なんかに押し付けようとしなくても、今のまま成長すれば

将来結婚相手に困らない位美人さんになるの確実な可愛い女の子な

んですから。

とりあえず前回と違い母上はいいませんが、このまま結婚の話になると大惨事でしょう。

琅？さんキレル薊さんに飛び火、大惨事この流れだけは防がないといけません、

全力でなんとかしないといけません、あと族長でも当人の意思を無視するのも駄目です。

ただ“お前の娘なんかいらない”なんて言ったりしたら、今度は羌族側がキれます。

父上、雷さんとか涼州組は大丈夫か？と不安な顔を司君だけは楽しそうな顔をしています。

司君貴方も蒲公英ちゃんがいるから他人事では済まされないんですよ。

流血沙汰を防ぐ為にも舌先三寸でなんとか乗り越えられるように努力しましょう。

舌先三寸といえば昔、会社で部下の子に言われました

「課長は息を吐く様に嘘をつきますね。」

営業熱心でちょっとオーバーな表現をしてみると言ってほしかったなど

思いましたよ。

まあ私の知り合いの社長は部下と取引先へプレゼンに行った帰りのタクシー内で、

「社長は嘘つき病です今すぐ病院に行ってください」と部下に言われたそうで。

そこまで部下に言わせるとは何があったのでしょうかねえ？

聞いた話では仕事とるために納期で相当無理をしたようで。

まあ、嘘つきだとかの話は置いておいて今そこにある危機に対処しましょう。

「羌族の皆様は普段から私達涼州の人間は感謝しきれないほどお世話になってます、

それなのにこのような豪華な宴席に招いていただけるとは誠にありがとうございます。」

お世話と言ってますが持ちつ持たれつな取引の関係ですがへりくだっておきましょう。

更に挨拶を続けます。

「そして更に族長の自慢の娘さんを私のような未熟者にという話をいただけるとは、

これほど厚遇していただけるとは涼州の人間はどうやって羌族の皆様へ恩返しをすれば。」

遠回しな表現でやんわり断っておきましょう。

族長とか羌族の皆さんはどうやら話が変な流れに進んでいる事に驚いているようです。

驚くのも無理ありません、母上が進めている異民族融和政策で一番簡単で確実な手段は、家族にする事ですから、それを断ろうとしているのが融和推進者の一族では驚くでしょう。

「もしここで娘さんを私の妻に、となりますと涼州の者は諸手を挙げて賛成してくれるでしょうが、我々を知らぬ他州の口さがない人間達は族長は保身の為娘を人質として売った等と嘲るでしょう。」

彼らのプライドを守るためという形になるよう話をすすめましょう。

そんな事態になっていなIFの話だが、私の例えでその様子を想像し、

羌族の皆さんの表情に怒りが灯りは始めている。

実際漢王朝の人間達に異民族だからと蔑まれてきた屈辱の歴史があるのですから。

「誇り高き羌族の皆様が愚か者に馬鹿にされても平和の為に怒りを堪えるのは辛いでしょう！

そして、私は羌族の皆様以上に羌族の皆様への侮辱に耐える事が出

来ないです!!

その愚か者共を皆捕らえ首を叩き落とし門前に並べても決して気は晴れないでしょう。」

皆驚いています子供である私が此処まで激しく羌族の為に怒りるのですから、

ここまでの言葉を吐き出すとは思わなかったでしょうとどめを刺しにいきましょう。

「何故ならば親を家族を侮辱されて許せますか!? 私にとって羌族とは友人であります、そして、それ以上に父であり母であるのですから。」

中国ではお前の息子や孫だとか言うのは相手への最大の侮辱になるから、

気をつけないといけない表現ですがあえて言ってみました。

「娘さんの話を断っておいて、更に恥知らずな事にお願いさせていだきたいのですが、ただ一つだけ、父上と呼ばせていただけませんでしょうか?」

ここで土下座をしました、やりすぎたかもしれませんが、いや実際やり過ぎでしょう、

実の父親の目の前で勝手に異民族の族長を父と呼ばせてくれとか言ってるんですから。

族長とか皆さん感激しているようです、涼州の人間はポカンとしております、

司君だけは“上手く逃げ切ったなあ野郎”という顔でニヤニヤしていました。

上手くいったのは良いですが、この時代の人皆ピュアですよ、もう少し、人を疑う事を覚えましょう、騙した私が言うのもなんですが。

とりあえず逃げ切りに成功したようです、羌族の皆さんが笑顔で私の所に集まってきました。

私の知っている正史では羌族は漢に従うようになった後も何度も刃向ったりでしたが、これで更に結びつきは強くなったでしょう、漢ではなくあくまでも涼州であり私にですが。

無事に宴会は終わりました、これで琅？さんとかがキレルシナリオは回避できたなど。

問題は涼州に帰った後に、今日の私の発言が母上に怒られないかがとてもとても不安です。

まあ後の恐怖は後に考えるところでしょう。

翌日族長が「お前は私の自慢の息子なのだから何処に乗っていても恥ずかしくない

汗血馬にも負けない羌族自慢の馬を乗るようしないといけない」と、見に行ってきました。

「この馬“達”は羌の人間の誰にも懐かなかったがお前なら出来るだろう。」と案内されました。

達って複数いるんですか？神が私達二人の分の馬を用意してあると言っていましたか、

まさか羌族の皆は司の分もくれると言うのでしょうか？

私の分は分かるが羌族に司はあまり関係ないんだが。

一応、司は私と杯交した義兄弟と教えてあるので、兄貴だけでなく弟の分もという事でしよう。

それにしましてもどれ程凄い馬なのか分かりますが、羌族の人間の誰にも懐かなかったって、ある意味“人に懐かない厄介な馬をよこしたの？”と勘繰ってしまいますよその台詞では。

着いた先にいましたよ馬が、いや、馬！？という感じです。

馬の概念に収まらない巨大な生き物が。

普通の馬がポニーそれどころか世界最小の馬フアラベラに見えてしまう馬が二頭もいる。

あまりのでかさに見て驚いてフリーズしている常識人グループである父上や紅さん、

琅？さんや雷さんといった馬に慣れている人間もなんか引き攣った顔をしている。

私と司が近付いてみる「危ないです」おっ、紅さんがフリーズから復活して叫んでいる、

いや、馬のそばでいきなり大きい声出したりする方が危ないのに、臆病な生き物なんだから。

私と司が近付いたら何も言わず屈んで、背中に乗れと態度で示してくれ、だから跨ってみましたよ。

私達が跨ったと思うとスツと立ち上がりドドドドドつと走りだししました、
試し乗りをしてくれたんでしょう、感動しました、それ以上に死ぬかと思いました。

ラオウさまや前田慶次はこんな物に乗っていたんですか、阿呆ですよ。

ちなみに彼らに乗るのは簡単だったがその後が大変でしたよ。

鞍も鎧も付けていない状態で黒王や松風に全力疾走されるんですから、

私も司も何度舌を噛み切りかけ、股間から破滅の音が聞こえたことか？

危うく何もしていないのにナチュラルで宦官の仲間入りする所でしたよ、

嫌やー、まだ此方の世界に来てから全く使っていないのにおさらばするなんて、

まあ、おさらばしないで済みました。

「玉が潰れて駄目になっても将来子供が駄目になるだけやん。」

司君そんな冷静な答えはいらないよ、君だって危うく碎けかかっていたんだから。

「あの馬達を乗りこなし無事だったとは！？」

族長――！！！！！！なんだ、その発言は！そんな危ない物を渡すな！

昨日まで自慢の娘を与えて引きこもとした人間になんて馬を渡そうとするんだ！！

まあ、元が神のプレゼントではあるんだが。

遂に族長までもが私達のようなギャグの世界側に足を踏み入れてしまうとは。

とりあえず、こんな風にでしたがなんとか念願の馬を手に入れましたよ。

ちなみに黒王号や松風は流石にそのまんますぎてまずいのではない、

中国の伝説の馬から名前取ろうと穆王八駿から。

私が光より速く走れた「踰輝^{ゆき}」司が翼ある馬「挟翼^{きょうよく}」と名付けました。

私達二人のチート化がこれで更に加速しました、大丈夫か三国志の世界？と不安になります。

とりあえず司君は長物武器を手に入れてもらわないとそうではなくても武器が鉄扇と、
リーチがまったく無いのにこんなばかでかい馬に乗ってどうやって戦うつもりなんでしょうか？

此処から余談、

隴西の城に戻る最中にためしにと父上も踰輝に跨らせてあげました、まさか乗った瞬間に振り落とされ鎧に足がハマったまま落馬したために、

引き摺られ続け城まで赤い線が延々と続いていました。

ちなみに母上はさすが沈着冷静の董君雅と呼ばれるだけあり、
見ても「あら大きいのね」

うーん実は母上は沈着冷静ではなく感情の一部が欠損しているので
は？と悩んでしまいました。

あと、関羽とやりあえるという神の言葉通りだけあり、今の涼州で
の武力比較をすると

キレた和≡キレた薊<琅？≧踰輝≡挟翼<雷≧保≡司<紅

紅さんが「馬に負けた、馬に負けた、馬に負けた」と死んだ目をし
て呟いていたとかいないとか。

更に余談ですが涼州最強は一粒の涙でどんな争いも鎮圧できる丁原
さんという事で意見は一致しておりますが。

更に更に余談、私達が帰る際に族長が「なんとしてもうちの子の婿
に」と呟いていたとかいないとか。

第十九話 嵐を避けられるのか？（後書き）

ご都合主義にも程がある感じですが、やっと主人公達がチート化第一弾でした。

それにしても普通人である紅さんが普通である分かなり使いやすーいとは、

キャラ設定していた時は思いもしませんでした、・・・お恥ずかしい限りで。

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております。

第二十話 いつのまにやらラブ空間に？（前書き）

どうしてこうなった、どうしてこうなった、気づいたらこんな話になっていた。

淳于瓊さんがこんなに出演が増えるようになるとは思わなかった、この話を書いている作者が言うのもなんですが、どうしてこうなったのだろう。

あつ、ちなみに時間は更にキンクリして保達は今14歳です。

第二十話 いつのまにやらラブ空間に？

—紅—

「ひまだああああ〜！！！！」

李儒様がいきなり叫び出す、何を言っているのでしょうか？

つい先程朝議が終わったばかりでまだまだ執務が控えているのにですよ、

涼州の政治を司る李儒様が暇なわけなのですから皆書簡の山の処理なのですから。

だと思っていたのですが。

「分かる分かるぞ司さんよ〜〜！」

分かる人が出てきてしまいましたよ、しかも董擢様ですよ。

董擢様も李儒様と同じく涼州の指導者なんですよ、何処が暇なんですか！？

つい董擢様と李儒様をにらんでしまいましたよ。

「紅さん、こちらを見詰めていますかどうかされましたか？

美人に見詰められると恥ずかしいので照れてしまうんですが。」

いきなり何を言うのでしょうか李儒様は。

「な、な、何を言っているんですか李儒様は、わ、わ、わ、私がびびび美人だなんて！」

び、び、美人というのは董君雅様みたいな方を言うのであって。」

私なんかが美人なわけないんですから。

「紅さん、そこまで動揺しなくても惚れた司に誉められたからとはいえ照れちゃって。」

と、と、董擢様まで何を言ってるんですか！董擢様といい李儒様といい、

こうやって私をからかって遊んでくるんですから困ってしまいます。

私より年下の子供なのにわざとドキツとする事を言ってくるんですから。

最近の李儒様は、2年前に比べ背も延びてきて私とかわらない位になられて、

空いた時間を作っては調練に参加されているので日に日にたくましくなってきたいて。

茶色がかった肩まで伸びた美しい直毛、浅黒い肌に漆黒の瞳、彫りの深い顔立ち、

年相応に子供っぽく笑っていたかと思うと、時おり見せるやけに大

人じみた横顔が。

李儒様は軍師であり戦場に出る事になっても後衛で武を振るわないでいいはずですが、

李儒様にしか懐かない凶暴な巨馬挟翼を乗りこなし、最近の調練では、

涼州最強の琅？様とほぼ互角に戦える程の武の実力を見せつけたり。

そんな李儒様の姿を見ると胸が苦しくなる事があるんです。

って、ええい、私は何を考えているんですか、落ち着きなさい私。

李儒様は上司李肅様のご子息で単なる同僚で、年下の子供でしかないんだから。

「最近の李儒様は格好良いし、好きかと言ったら好きかな？と・・・」

はっ！！！！私は無意識にとんでもない事を口に出してしまっていた。

こんな事を聞かされても李儒様は迷惑でしょう、ううん、

迷惑とかでなくまた困惑している私を見てニヤツと笑っているはずです。

はっはっ恥ずかしい、どうすればいいんでしょうか、

そう、これは気のせい、そう、気のせいに違いないんです！！

一司一

どうもここ最近の仕事がパターン化していて落款押しマシーンになれば、

すぐに済んでしまうような仕事ばかりで、ついストレスがたまつて叫んでしまいましたよ。

「暇だー」と愚痴の為に叫んだら保さんも同意してくれたが、なんか紅さんがこっちを見ているのでからかったら話がおかしな方向にいつている。

「最近の李儒様は格好良いし、好きかと言ったら好きかな？と・・・」。

あれっ？紅さんがとんでもない事を口走っているような・・・。

「ほ、紅さぁくん、もしもーし、大丈夫ですか？」

呼び掛けるが返事がない、返事が無いただの屍のようだ、いや、違うし！紅さん生きているし、自分の発言にパニックっているだけだろ。

顔を真っ赤にして両手を頬にあて顔を左右にいやいやという感じで振っているよ。

紅さんもしかしてもしかして、私にガチで惚れているのか、だとしたら参った。

うーん、紅さんが私に好意を向けてくれるのはとてもありがたいが、好きとか嫌いとかそういう感情は無いし、でも人に嫌われるよりは好かれる方がいいが。

紅さんはすれ違った人間十人中十人が振り向くなんて程の美人ではないが、でも、けっこう顔立ちは整っているから美人な方だしなあ。

うん、性格は真面目だし、仕事もキチツとやるし皆の評価も良いし、服が破れていると気づいて縫ってくれたり女性的な面もあるし。

今までなんとも思っていなかったんだが、相手がこちらを好いてくれる、なんて知ってしまうと、ちょっとは気になってしまいうなあ。

これから仕事とかで顔合わせたりするとやりづらくなりそうだな、どうすればいいのかなあ、紅さんについて……。

一保一

おかしい！？冗談半分で二人を冷やかしたら、なんか反応がおかしい、

紅さんが司を意識しているのは何となく分かっていたから冗談で話

したら。

司も満更でないような、お互いがお互いを意識するようになったのか？

冷やかした人間としてはなんだかなあ……。

それにしても、このままで良いのか？今回の話が一向に進まなくなるが大丈夫か？

いいや、よくない！折角最初に司が暇だ！と話を振ってくれたのだから、

司もまさかこんなBOYS BEもどきみたいな展開にする気はなかったはず。

話を進めるようにしよう！

では話を進めるためにまずは状況確認だ、執務室を見渡すと、うん、薊さんがいる。

はっはっは、薊さんが紅さんの言葉に反応しそうだぞ大丈夫かな二人は？

こういった発言をしていると、友達の恋を邪魔するモテない男の嫉妬に見えてしまうね。

うん、嫉妬ではないよ司が上手くいってくれるなら嬉しいし、

ただ、司は良き人でいられるかがわからん、下半身とかフリーダムだったし。

まあ、司の恋愛の話はいいや話を進めましょう、何故なら今執務室では司LOVEな薊さんが荒れ狂っているんだから。

現実逃避しておきましょう。

とりあえず司の暇だ、という理由はよく分かる。

仕事がワンパターンで飽きているんだよなあ、書簡は多いが落款を押すだけ、量はあるが簡単に終わる仕事だから、皆なんであんな時間かかるんだか？

司が叫んだのは普段の単純作業へのイラつきもだろうが、最近の張略がなかなか結果が出てこない事へのイラつきだろうな。

司が仕事で悩んでいるのならば友人として手伝ってあげましょうか、司の企む事なんて絶対に面白いだろうし、協力するしますか。

問題は司がどれくらいの事をやろうとしているのかだな？

前にボソッと「漢中」と呟いていたし、あの漢中だろうなあ。

たぶん漢中地域の混乱起こさせるとかな？

漢中って歴史ではたしか劉焉が張魯を送りこんで橋を切って道を遮断し官吏を殺し、

それを張魯のせいにして益州が中央との連絡とれないと言い訳の材料にされていたはず。

もしかして司はそれを早い段階で此方で起こそうとしているのか？

漢中を益州から独立させてしまっって、涼州に増えている難民や族を鎮圧で派兵する気か？

もし私の予想通りならば実に面白そうだな、あとで聞いてみるか。

国境線周辺のゴタゴタほど戦争の材料に適した物はないしな、ふふふ。

「保様、保様、何やら考え事でも？」

おおっと、考え事していて雷さんに話し掛けられていたの気づかなかった、

漢中の乗っとり、戦争を企んでた、とは言えないので適当にごまかしますか。

「司と紅さん二人がもし将来くつつこうとなったらどうやって薊さんを説得するか？」

いくらなんでもこれは答えに無理があるかな？

「おお、それはたしかに難しい問題ですなあ、でも平気では？」

雷さんって戦場では策略家で頭良いが、こういう点は結構間抜けと
いうかよく騙されるな。

それにしても過保護な息子LOVEな薊さんが平気とは？何か策が
あるのか？

「親はなんだかんだ言いながらも子供の事を理解してくれるでしょ
うから。」

うーん、雷さん、だとしたら今この部屋の惨劇という状況を回避で
きていたような。

部屋を見渡したら、部屋が戦場になっているよ、何処の激戦地だよ。

もしくは忠臣蔵の松の廊下、薊さんがモルゲンステルンを振り回す
室内にいた衛兵達が敵わないまでも何とかしようとおさえつけに。

“吉良殿殿中でござる、殿中でござる”と吹き替えて違和感がまっ
たく無い状態だ。

「保君は翠がいるから平気だよねー。」

そんな事を思っていると琅？さんが来たよ、このままではまたこじれてしまうよ。

母上が介入してくるよ、私の結婚とかの話しになったら、どうおさめるか。

とりあえずいなしてみますか。

「ええっ、翠ちゃんがお嫁さんに来てくれますから私は安心してますよ、

翠ちゃん可愛いですし、ただまあお馬鹿さんなのはちょっといただけませんが。」

いつもなら嫌がる私があっさりと翠ちゃんの結婚を受け入れたことに驚いているよ。

「本当に翠でいいの？」

うん、いつもと明らかに反応違いますね、あんなだけ結婚させようとしていたのに。

「ええっ琅？さん、翠ちゃんはお馬鹿ですが純粹でとても可愛いですし、

いずれ私と手を取り合い共に歩んでもらえたら嬉しいですよ、ただそれは将来お互い大人になり、その時に翠ちゃん当人が望んでいたらすけどね。」

こういう断り方ならば琅？さんも仕方ないとなるな。

「はあつ、やっぱり保君は首をなかなか縦に振ってくれないねー。」
当たり前ですよ。

私は人に言われたからといって“はい、そうですか”と言う人間ではないですから。

それにすぐそばに母上がいるから不用意な発言は惨劇を迎えますので。

実際、翠ちゃんが、と言った時、母上の表情に一瞬ピクリと反応があったんですから、
わずかな変化で分かりにくいですが、これは気付かなかったら大惨事でしたよ。

それに私の好きな女性のタイプが母上みたいなクールビューティー
ですから、
翠ちゃんが将来クールビューティーになるかという点、うーん・・・
・？

今思い出しても転生した直後は辛かったね、理想のタイプの女性が
いて母親だったと。

私転生しているから精神年齢は47歳ですよアラフィフですよ只今、
今、37歳の母上位の年齢でちょうどいい感じなんですよねえ。

こちらでの年齢は14歳ですから、23歳歳上ですから世間はビツ
クリ、

ペタジーニやラミレスみたいな姉さん女房ですから。

あれ？当初母上が「保ちゃん是我的婿だ」発言をするたびに、
聞こえないふりをしていた私は何処に行った・・・。

あつ、結婚したいのはクールビューティーとは違いますが、可愛い
月です。

母上も月も私を大好きと言ってくれます幸せですよ、ただ家族と
しての好きですが。

うん、私は先程から何を言っているのでしょうか？

多分仕事の疲れとかストレスで混乱しているだけでしょう。

気のせいかな？私の好感度が先程からストップ安という感じで駄々下
がりしているような。

キュピーーン

今、何か凄く嬉しく感じる事を感じとりました、何か強烈な思いを感じました。

私にとってはすごく嬉しい事なのですが、気のせいかしら？

まあ、たまには感じたことや思っていることを横にいる空に素直に言ってみましょう。

「貴方、最近思ったのですが、今はいいですがいずれ保君も結婚しますよね、

今まで保に近づく悪い虫は排除なんて思っていましたけど、それではないと思って。」

あら、あの人がふるふるしています、どうしたのでしょうか？

「ううっ、ついにお前も子離れをするようになったんだな。」

泣きながら何を言っているのでしょうか、一体うちの人は・・・。

「保くんがお嫁さんを連れてきたら暖かく迎えてあげないと、保君が選んだ人なら間違いないですから、ただ一回はひっぱたきますけどね。」

私が微笑みながら言う横にいたあの人が苦笑してる、でも一度位はね、

私がお腹を痛めて産んだ大事な保君を取られるんですから。

でも、それ以上はしませんよ、余裕があるところを見せないと。

「やはり正妻の余裕を見せてあげないと保君の側室に対しては、ねえ貴方。」

あらっ、あの人が固まっている、どうかしたのかしら？

一空

久しぶりな出番の空ですが、とりあえず今から一言

『誰か助けて下さい、妻が、妻がああああ〜！！』

どうして妻がこんな風になってしまったんだ・・・。

なんか妻がこの後も

「最近、保君を見ると一人の男として見てしまいそうな私がいる。」

「貴方も好きよ、ただ保君も家族としてだけでなく男として好きになりそう。」

あまりの恐ろしさのあまり妻の目を見ることが出来ませんでした。

誰でもいいので助けて下さい！妻を治せる医者はいませんか？

五斗米道でも妖術でもいいから助けて下さい・・・！！！！

なんでこんなことになってしまったんだ。

一百合一

「二十話目にしてやっとの僕達の出番がきました！皆さんははじめまして、

僕は涼州三人娘で姓は【田】名は【豊】字は【元皓】真名は【芍薬しゃくやく】
って言うんだ。」

執務室の中が混沌としているなかで芍薬は一体誰に話しかけているのだろうか？

「芍薬ちゃん誰と話しているの？あつ、ちなみに牡丹は涼州三人娘の一人、

牡丹の名前は【沮授】で字が無くて真名が【牡丹ぼたん】だよー。」

牡丹まで一体誰と話をしているんでしょうか？

「ふふふ、牡丹さんあなたまで一体誰と喋っているんですか？

私も他の二人と同じように涼州三人娘と呼ばれておりますが、
姓は【審】名は【配】字は【正南】真名は【百合^{ゆり}】と申します、以
後お見知りおきを。」

なんか私も言わないといけないような気がしたのでとりあえず名乗
っておきましょう。

それにしても芍薬さんも牡丹さんもよくこんな混沌とした状況で普
通でいられるんですね。

李肅様が暴れ衛兵が取り押さえ、淳于仲簡さんや李文優様が呆けて
いて、

董君雅様が何かを話して、池陽君様は何か叫んでいて、何なのでし
ょうかこの状態は一体。

「ついに紅ちゃんが司ちゃんに告白したね、しかもこんな人前で。」

何処をどう見れば告白に見えてしまうんでしょうか牡丹さんには。

「アレを告白って牡丹さん貴方どこをどう見ればそう思えるのかし
ら。」

夢見る乙女ということだからなんでしょうか？

「でも、僕は紅さん誉めてあげたいな、だって好きって言うの勇氣
いるから。」

確かに告白は勇気が必要でしょうが、どうして二人には告白に見えるのでしょうか？

「芍薬さんまで、アレを告白というなんて、どう見ても独り言のたぐいでしょう。」

二人にあの瞬間がどう見えたのでしょうか？私の眼とは違った物が見えていたのかしら？

「紅さんも長かったねー、周りで見ている方が頭にきたくらいで。」

確かに芍薬さんの言うとおり淳于仲簡さんが李文優様を気にしているのは、

私達の間ではいつも話題に上がっていましたが。

「でも、芍薬ちゃんだって好きな人いるのに告白してないでしょ牡丹知っているよー。」

牡丹さんも此処で芍薬さんの思い人について話を振るなんて酷い人ですはね、

狙って発言しているのではなく自然と言っているのですから怖い人で。

「ぼたーん、何を言っているの僕はそんな雷さんの事をなんて」

芍薬さんもまた淳于仲簡さんに負けず劣らず分かりやすい反応をされる人ではね、
長い付き合いですが芍薬さんの新しい一面を見る事が出来るとは思いませんでしたは。

たまには芍薬さんを困らせてあげましょうかしら。

「あらあら、牡丹さんは韓文約様の名前など一言も出していないのに、

芍薬さんは何故ここで韓文約様の真名をよばれるのですか。」

私達三人の中で一番優秀な芍薬さんがどうされますかしらねえ。

「ううう、あううう……。」

実に面白いではね、真っ赤な顔して泣きそうなこんな可愛い芍薬さんを見られるなんて。

たまにはこういうのもいいなと思っていましたら、空気を読まない人間がいるんではね。

一光一

「ただいまっす李？っす、族討伐から帰ってきたっすが部屋どうなっているんすか？」

阿多と一緒に族討伐から帰ってきたっす、だから太守に報告に来たっす。

そしたら執務室中が目茶苦茶だったっす、盗伐した族のネグラより汚いっす、だから、言ってやったっすよ。

「こっちは阿多と一緒に族退治をしてやっと帰ってきたっす、それなのに皆が遊んでいるなんてふざけているっす、真面目にやるっす。」

そしたら急に執務室が静かになったっす、さすがおいらっす、おいらの威厳にかかればあっというまっす。

なんか部屋のいたる所から「光が常識を問うとは」「光に言われたらおしまいだ」

「李稚然に言われたらおしまいですはね」

皆して酷いっす。

第二十話、いつのまにやらラブ空間に？（後書き）

涼州の新加入六人組の出番を出来る限り作ってみました。

なんだろうハムの人を超える常識人で個性薄くなるはずの淳于瓊が、当初の予定と違ってなんかやけに出番が増えることになるとは、なぜなのかなあ？

今回は修正いらないと思ったら、年齢の所間違えていた、またか。

皆様のご意見ご感想お待ちしております

第二十一話、徐州から招かれざる客（前書き）

おうふ、またも新キャラを出してしまった。

恋姫原作キャラでなく、しかもまたもマイナーどころから、いや曹操や劉備とか大好きですよ、でも気づくと変なところから採用と。

第二十一話、徐州から招かれざる客

―保―

おはようございます、どつきあいでしたら、
今、涼州最強の一人になりました董擢こと保です。

部屋の外に出たいのですが、今、私室に身柄拘束されています。

「董孟高様、今の事態を認識されておりますわよね、
何故、今、部屋に閉じ込められているのかを。」

いいえ、いきなり軟禁される理由なんて身に覚えがありません、
品行方正、勤勉実直、質実剛健な私には全くわかりません。

ちなみに今、部屋には百合さんと雷さん私と三人がいるのですが。

「保様ならばあんな奴片手で捻って倒せてしまうぞ、
だから、気にすることなくどうどうと戦えばいいんじゃないよ。」

ええ、今や琅？さんともガチで引き分ける自分の武に少しは自信は
あります、

ただ、雷さん誰かが来ているの？相手誰なの？刺客が送り込まれて
きたの？

本当に訳が分かりませんよ。

私が私室に書簡を持ち込み落款押しマシーンになっていたら、半刻程前にいきなり部屋の扉が開いたと思ったら雷さんと百合さんがやってきて。

「董孟高様、緊急事態ですので部屋から出ないで下されますか。」

口調はいつもと同じだが、百合さんの表情からただならぬ事態と。

「百合殿も芍薬殿といい心配性だのう、保様ならば平気だよ、わはは。」

雷さんはいつものように豪快にお前らは心配しすぎだと笑っている。

うん、何が何だか分からないね。

「韓文約様、世の中にはもしもということがありますので、大体ですね韓文約様、事態を悪化させない為にこのような手段をとらせていただいているのですから。」

百合さんが雷さん相手に怒っている、雷さん百合さん苦手なんだよな、

上品な口調で理詰めで徹底的に攻めてくるからやり辛いようで。

謎だよなあ雷さん、私や司ほどではないが戦いにおいて策略家で優

れた武勇もあり、
でも、まずは策で相手を弱らせ最小被害で勝つ、この時代としては
珍しい勝利至上主義者で。

手段を選ばないで戦ってくれるから軍師の出した非道な策もOKと、
個人の武がとか寝言が当たり前な他の武将からすると卑怯、
と言われるような、まさに名将だが普段は何でこんな大雑把で、理
詰めに弱いんだ。

まあ、雷さんの考察はいいや、とりあえず話を進まそう。

ただならぬ事態なんだろうが一体何があったのか？まずはそれにつ
いて聞こう。

「百合さん、雷さん、一体何があったのか教えてもらえますか？説
明ないのは困ります、
先程から部屋を出るな！私ならば平気！とだけ言われても、何があ
ったのですか？」

「・・・・・・・・」

あれっ、急に部屋中が沈黙に包まれたぞ、これはもしかして、
内容伝え忘れた事に気づいてしまったか二人とも。

「わ、私としましたことがついつい焦ってしまって、
肝心のあらましを伝えるのを忘れてしまっていたなんて。」

滅多に見られない百合さんの慌て具合。

「おおっ、そういえば何があったか話すの忘れておったは、いかなのう、ガハハ。」

雷さんはいつものように気楽に笑っていた。

「百合さん、雷さん、二人ともうつかりさんなんだからまったく、ブツ飛ばすよ!!」

満面の笑顔で殺気を飛ばしながら言わせてもらいました。

「「誠に申し訳ございませんでした。」」

使徒イスラファエルに勝てるくらい見事に二人の動きがユニゾンした土下座だったね。

まあ、許してとりあえず話を進めましょう。

「実は問題はこれなんです」

百合さんが取り出して私に見せた物は、私が書いたジョークの本、この娯楽が少ない時代なら受けるだろうと私の知っている、落語やら小噺やら古今東西の笑い話を乗せて出した本です。

「これが何か？ 売り上げが悪く赤字出したからキレた本屋が乗り込んできた？」

自分の本だけ見させられても訳がわからないので適当に答える。

「いえ、今もこの本は売れております、問題は売れ過ぎた故になんです。」

意味がわからん？ 私の頭上に巨大な？ が浮かぶ。

雷さんが本を開いて渡してくる。

「この嘶に怒って保様を出せと怒鳴り込んできた奴がいて。」

開いたページを見ると、お釈迦さまと侍従の会話のページが。

「なんだ単なる小話じゃないの、これで怒るって尻の穴が小さい奴だ。」

そういった後自分の書いた小嘶本を読み、面白いなと笑っていると。

「確かに器が小さい相手ですが、相手が問題なんですよ董孟高様。」

相手が問題ねえ？ 誰でしょうか全く分かりません。

「誰が来たの？ 仏陀は既に死んでいるが？ 融でも来たか？」

まあ、んなわきゃないな、かるく話すと。

「保様よく分かりましたな、？融と名乗る男で。」

ブッ！！！！

思わず吹き出してしまう。

？融ですか、三国志での知名度は地味ですが、仏教の庇護者で略奪好きな人ですよ。

演義ではなぜか良い奴になっているあの略奪スキーが来るとは。

そりゃ怒るか、自分が庇護している宗教を笑い話にされたら。

ちなみにこんな感じの小噺なんです。

お釈迦様は産まれるまで母親のお腹に3年3か月もいたという事で、私からしたらなわきやねえだろと思いますが、老子が母のお腹に80年とか。

噺をすすめましょう。

侍従が仏陀に母親のお腹の中はどうだったのですか？と聞いてきたから仏陀が、

「夏のように暑すぎることもなく冬のように寒くなくすごしやすかった」と。

「ほう、それでは母親のお腹は春のようであったと」侍従が話すと、

仏陀は「いや季節は秋でした、時折下から松茸がニュツと顔を出す。」

じつにくだらないでしょうもない小喃ですよ、ただ酒飲んだおっさん達には大ウケ。

今、謁見室にいる？融殿から百合さんが詳しく話を聞くと。

当人は徐州で役人やっていて、ある日街を歩いて本屋に寄ってみた
ら、

今人気と書かれた本があり、なにげなしに手に取り読んでみると、
自分が支援している仏教をネタに笑い話をする奴がいる許せん！

それどころかこの本のおかげで、街を歩くと「松茸の庇護者」と笑
われ。

更に出勤すると小喃をネタに同僚に「松茸庇護ってあやかって大き
くなりたい？」

「チ○コに生まれ変わりたい？」と散々笑われ屈辱の日々を過ごし
ていると。

松茸呼ばわりされたり、普段から脳味噌筋肉と馬鹿にされるのも、
食卓に行ったら私の分だけ朝飯がなかったのも、全てこの私のせい
だ！と。

この屈辱は涼州にいる作者を討ち取って汚名挽回、名誉返上じゃー

!!

そして、その後名誉の死を迎えるんだと槍を片手に涼州に突撃してきたと。

おい、？融大丈夫か？汚名挽回、名誉返上はいくらなんでも不味い
だろ、

ネタにした私も悪いが松茸のとか笑った住民や同僚にキレろよ、私
にって八つ当たりだろ！

「切っ掛けを作ったわけですから八つ当たりではないですわよ。」

百合さんが突っ込んでくる、心を読んで発言しないでくれ。

「保様どうしますか？徐州のチ○コ人間は？追い返しますか？」

雷さん、松茸呼ばわりならまだしもチ○コ人間はまずいだろ、
下半身に脳味噌があるような人間じゃないんですから。

怒れるお馬鹿さんがいるのか、実に厄介です、会いたくないです。

「とはいえ私が会わないわけにはいきませんね、会いたくないです
が。」

ここにはいないが先程名前が上がったということは、
芍薬さんが向こうで私を会わせないようにしているんでしょうが。

私を守ろうと考えて行動してくれた二人には悪いが謝罪しに行きましよう、

？融さん自身は悪い事していないのに松茸呼ばわりは可哀想ですから流石に。

まあ、馬鹿だし、かなり八つ当たりもありますが目を瞑ってあげましょう。

「ちなみに今、誰が応対してくれているの？」

とりあえず私が行くまでの間宥めすかしている苦労人は誰かと尋ねる。

「あああーっ！！」

慌てないキャラの百合さんが叫んでいる、何があった！？

「今、謁見の間にありますのは、池陽君様に、芍薬さんに李文優様が……。」

あかーん、他の人間は良いが司だけは絶対にあかん、宥めるどころか火に油を。

「大丈夫だよ、司様ならば」

雷！！お前のその根拠の無い自信は何処から出てくるんだ！！！！

「大人しく突き殺される――――！！！」

雷さんに怒鳴ろうとしたら城の奥、謁見の間辺りからすさまじい叫び声が聞こえてきた。

――司――

仕事が終わったので城内をうろついていたら謁見の間から怒声が聞こえる。

小話の件で？融とやらが保さんを殺すと徐州から殴りこんできたそうで。

これは面白そうだなあ、こういう絶好の暇潰しがやってくるなんて・・・、
もとい、親友である保さんの命を守らないといけませんね！！

謁見の間の中を見ると空さんと芍薬さんが多分その？融という人を諫めていて、

その間に牡丹さんと雷さんが保さんを部屋に閉じ込めておく。

じゃあ、それなら私も手伝おうと「此処は任せて行って来て」

と僕が言ったら、皆絶望的な顔するのは何故かなあ？

？融という人を見ると、ショートボブにした髪型が特徴な人で、

うん、後ろから見ると巨大なチ○コだね。

「“松茸庇護するってあやかって大きくなりたい？”とか笑われているけど、その髪型と後ろ姿って、やはり松茸、もとい、チ○コを意識したの？」

素直に思った事を言ってみたんだ、人間我慢しすぎるのは体に良くないですから。

「貴様あああああああゝゝゝ！！！！！！！」

あら、何を怒っているんでしょうかねえ？ 槍で襲い掛かってきましたよ。

ヒュッヒュッヒュ、？ 融の放つ槍が空気を切り裂く音が聞こえる。

ただ、私の相手にならない、上半身を軽くそらすだけで避けれる。

「遅い遅い、そんな三段突きくらいなら簡単に避けれるぞ、あと、青筋立てて怒らない方がよいよ、更にチ○コそっくりになったよ。」

面白いから軽く煽ってあげましょう。

「誰が青筋立て怒張したチ○コそっくりだとおのれええええ。」

ブウン、ビュッ、ガキン

そこまでは言っていないませんがさすがに僕でも。

それにしてもよく怒鳴りながらあんな早い速度で槍を振ったり突いたり出来ますねえ。

とはいえ、しゃがむ、バックステップでかわし、たまに愛用の鉄扇で叩き落としてあげると。

「大人しく突き殺されろ!!」

なんて物騒なんでしょうか、そんな事を言うなんて。

それにしても突き、薙ぎ払い、切り上げ、切り下げ、必死でやっていますが遅いですねえ。

いや、馬鹿力はすごいですよ攻撃を鉄扇で受け止めたら手が痺れましたから。

でも、避けるのは簡単です。

「司ちゃん煽っちゃだめええ」

芍薬さんがこっちに向かって叫んでいますね、これはいわゆる振りですね、

上島竜兵がいて目の前に熱湯風呂押すなよ発言、それは押せという合図のように。

芍薬さんの方を向いて笑顔で頷く事で返事ということにする。

「さあ、お前のそそり立つチ○コ力はそんなもんか。」

アレっ？芍薬さんが絶望的な顔している、おかしいな！？

「当たれえええいい」

だから避けれてしまうつて、学ばないのかな？このお馬鹿さん、薙ぎ払いならバックステップ、突きならば軽く体を捻るだけで切り上げならサイドステップで余裕で避けれる。

フェイントがないただ突っ込んでくるだけの攻撃ならば簡単に避けれますよ。

おっ、保さん達がやってきた、主役が来たようですし、そろそろ終わらせましょうか。

「チ○コだけにやはり突っ込むのは得意なんですねー、それにしても特大サイズチ○コのくせに玉のちっちゃい男だなー。」

更に煽ってみましょう、動きがより大振りになって突っ込んできました。

あら？保さんが笑っていなくて項垂れている、保さんなら煽ると思うんですが。

「俺は女だああ！！！！」

あら女性でしたか、それは失礼しました。

「失礼しました女性だとは、とりあえずそのチ○コ髪型は男性になりたい願望からですか？」

男性と間違えるなんて失礼な事したので素直に謝りました。

「あがあああうがあああああ」

もはや人間の言葉ではない、獣の雄たけびみたいになっていますよ。

「おかしいですね、謝っているのに何故か攻撃が激しくなっているのは、
うーん、獣のようになってしまっではいけません仕方ない終わらせ
ましょう。」

ブウン

空気を切り裂くような切り下げを避け懷に飛び込み鉄扇で右手を思
いっきり強打する。

ガランガランカラーン

強打の痛みで？融は槍から手を話し、その槍が床に転がる。

ふう、これで大人しくなったでしょうね。

「うわわーーーーーん」

あら、膝を崩してペタンと座りこんだと思ったら泣きだし始めちゃいましたよ。

これは参りましたねえと思ったら、

「貴様のようなのがいるから、戦いは終わらないんだ！ 消えろ！」

保さんの声が聞こえたと思ったら意識を失う事になるとは。

一芍薬一

保ちゃんを切る、と徐州から？融さんっていう人が怒鳴りこんできたから、
僕も頑張って緊急事態を何とかしようと宥めすかしていると司ちゃんがやってくるなんて。

司ちゃん根は良い人だから平気だと思ったら、駄目だった僕の努力の水の泡なんて。

どうしよう謁見の間で戦いが始まっちゃうなんて。

「司ちゃん煽っちゃだめえ」

こっちを向いて笑顔で、理解してくれた。

「さあお前のチ○コ力はそんなもんか。」

ネタ振りだと思われるって、もう駄目だ僕には止められない、おしまいだよー。

そんなところで保ちゃんや百合ちゃん達がやってきた。

どうするんだよーこんな目茶苦茶な状態、僕なんかじゃむりだよー、
？融さんはやられて地面に伏せて泣き始めて、司ちゃんは僕悪くな
いって顔して。

こうなったら保ちゃんならばこの場を丸く収めてくれるはず、頼む
よー。

「貴様のようなのがいるから、戦いは終わらないんだ！消えろ！！」

保ちゃんが叫びながら縮地で一瞬で間を詰めて司ちゃんを殴った
！。

「悪は倒した、だから貴女も泣きやんでください」

そういつて？融さんを泣きやめさせようとしていた、なんか納得い
かないのはなんだろう。

「うわあーん、俺は汚名挽回も出来なかった、徐州では松茸呼ばわりされ馬鹿にされ、

涼州ではこんな奴にチ○コ呼ばわりされ辱められ武では打ち負かされる、

こうなったら生き恥をさらす前に死んでやる。」

汚名挽回って発言は恥ずかしいと思うんだ、しかも地元ではなく涼州にまで来て、

ボコボコにされて既にこの段階で生き恥をさらしまくっていると思うんだ僕は。

って、つい軍師として内心突っ込んでいたら事態は大変な事になっていたよお、

？融さんが小刀を取り出す喉を突いて自害しようと、止められないと思ったんだ。

そしたら保ちゃんがその小刀の刃を右手で握り締めて止めていたんだ、

右手からすごい血が出てて凄く痛そうなのに保ちゃん微笑んで。

「貴女が死んでしまったら悲しむ人がいます、私もそのうちの一人です。」

「貴女を悲しませた男は私が退治しました。」

「貴女のような美しい人に涙は似合わない、だから笑ってください。」

保ちゃんが自害を食い止めたんだけど、口説きにいつてるスケコマシにしか見えないよ。

結局、司ちゃんという悪がぶっ飛ばされた事でうまくおさまったんだよー、

でも、？融さんいいのかなあ、原因は保ちゃんが書いた本なのに・・。

しかも、？融さん明らかに最初は保ちゃんのことを切るとか言ってたくせに、

「こんな俺を美しいなんて言ってくれる人がいるなんて。」

「私を助けるために怪我を恐れず守ってくれるなんて」

「私の命を助けてくれた王子様」

なんか言い始めているんだけど、しまいには。

「お、おれ、いや、わ、わたしは？融と言います、真名は嵐^{らん}と、貴方様への愛のために戦わせていただきます。」

なんかとんでもない事を言いながら保ちゃんに真名を預けてたよー。

保ちゃんがあんな本を書かなければよかっただけなはずなのに、なんか全て司ちゃんが悪者になって保ちゃんが良い人になっていて。

それでいいのかなあ？融さん？

第二十一話、徐州から招かれざる客（後書き）

うーん、なんでまた？融なんかを採用しようと思ったんだろう、話を書いている自分でもまったく分からん。

とりあえず、また新キャラを出してしまった収拾つくのだろうか、そろそろ恋姫原作キャラを出さないといけないのに、どうしましう。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

オリジナルキャラ紹介（前書き）

とりあえず話が20話を超えオリジナルキャラがかなり増えたので、
此処でやつとキャラ紹介をさせていただきます。

これからさらに新キャラ増やそうとする私って馬鹿なんだろうな、
収拾つかなくしてしまう可能性が。

オリジナルキャラ紹介

一保一

姓 董

名 擢

字 孟高

真名 保

年齢 14歳（転生前の年齢は33歳）

通称 涼州の神童、産まれた直後に喋り立ち上がるなどした為、政治の世界で表に出ていないが城内から漏れ聞く噂で神格化されている。

特徴 この物語の主人公、前世の名「大谷 保」おおたにたもつ

一人将は私、元々は数百年続く地元の名士の息子、悪巧み大好き、悪戯大好き

もう一人の主役である司とは前世の段階で義兄弟の杯を交わす

司の悪ふざけに巻き込まれ突っ込み役が多いが基本はボケ、神から貰った能力成長限界突破があり鍛えると範馬勇次郎を超えられる。

今現在は琅？（馬騰）と怠慢でガチンコできる実力。

ただ、出陣した経験はなくそういった点で童貞の為、琅？
には劣る実力

超回復でアンデルセン神父並みの回復力＋毒、病氣無効

将来のお嫁さんは月と公言するほどの重度のシスコン
好きな女性のタイプは母親である和（董君雅）のようなク
ールビューティー

最近は母親が理想と公言するなど初期の時とは違う、
マザコンを超えた厄介な何かの病を抱えている

趣味
未来知識を使った発明、子供達に読む為に紙芝居作成、自
己鍛錬

雷との酒造、司に負けぬ悪戯

見た目 董毛特有のウェーブのかかった紫色の髪を伸ばし、丸い卵
のような輪郭

見た目は可愛らしい、目は常に笑っていない、背は155
cm（成長中）

武器 近接、乱戦時は方天画戟、遠距離は重藤弓、愛馬は黒王号
こと「踰輝^{ゆき}」

その他 過去の悪戯エピソードなどは作者の実体験が多数
ハロウィーンのコスプレで頑張り過ぎて警察に通報された
など

姓 李

名 儒

字 文優

真名 司

年齢 14歳（転生前の年齢は32歳）

通称 洛陽の神童、産まれた直後に天上天下唯我独尊というなど
悪乗りした為

ナチュラルボーンテロリスト、生粋のトラブルメーカーの
為保命名

特徴 前世では保の一歳年下の友人、前世名「上尾 司」
あげおつかさ

一人称は僕、前世では防衛医大卒から実家の総合病院勤務

保曰く天才、当人は姉が国指定の天才であるIQ140越
えだった為

自分は凡人だと思いこんでいる、謀略大好き、この世界で
は重度のマザコン

戦闘力では神との取引によりいずれは範馬勇次郎、今は琅
？と互角

保と同じくアンデルセン神父並みの超回復能力＋毒、病氣
無効

最近では紅（淳于瓊）と相思相愛まではいかないがお互い
意識する関係、

前世ではかなり自由な貞操観念だった為、女も男も有り、保に家庭は持てないと思われる。

場をかき回す悪戯大好き、当人曰くキレた保さんにはかなわない、

だから保さんにやる時は命懸けだとのこと

子供時代に先生に言われた「人の嫌がる事をしなさい」を間違った解釈で実行

趣味 陰謀、例えばいかに面白く三国志の時代をかき回せるか検討する事が多い

絵本作成、保絵本と違い原哲夫タッチなどかなり見た目のインパクトあり

農業、漢方薬や農作物の開発研究を兼ねて

見た目 茶色がかった肩まで伸びる髪をオールバックで、浅黒い肌、彫りの深い顔

鍛え上げられた逞しい体、可愛いではなく格好良い、背は167cm

武器 近接では鉄扇、遠距離は元戎、愛馬は松風こと挟翼きょうよく

その他 作者の友人がモデル、悪戯の大半は実話

一和一

姓 董

名 君雅

字 無し

真名 なごみ 和

年齢 37歳

通称 沈着冷静の董君雅、どんな窮地でも慌てず指示を出す姿から命名される

特徴 涼州太守、高貴な家の出ではない政務能力は大陸有数、賄賂を否定するなど、

性格が誠実過ぎた為宦官に疎まれ故郷涼州太守に出世という名目で左遷

保、司の転生したという秘密を打ち明けられている、保大好き

最近保を息子ではなく一人の男として見てしまうと発言、夫の空を悩ませる

私塾時代の同級生は空、薊、荊州太守劉表らがいる
保と月の二児の母

趣味 あるとすれば息子の保の行動を監視、応援する事
最近保を争う好敵手である嵐との調練が新たな趣味とな
ってきている

見た目 董毛特有の柔らかなウェーブがあった腰まで伸びた髪、丸

い卵のような輪郭

目は特徴的なつり上がったきつい目付き、背は165cm

武器 斬馬刀（鬼切丸）鬼すらも切るからと命名、空はこの命名センスはどうなの？と

保に言いよる人間が出たと感じた瞬間には構えている
キレた時の実力は薙と並んで涼州最強

一空一

姓 池

名 陽君

字 無し

真名 空

年齢 39歳

通称 涼州の常識、変人揃いの涼州人の中での常識人の為

特徴 和の夫で保、月の父、洛陽の名家の三男坊、私塾時代の同級生の空と恋愛結婚

和と同じく将来有望視されたが宦官に嫌われ、妻の和と共に涼州へ、

今現在は筆頭軍師として知恵を働かせる。

月大好き人間、月に将来はお父さんと結婚すると言われた
いと発言するなど

よく和にぶっ飛ばされるが、すぐに回復するなどギャグ体
質持ち

月ほどではないが、また和には敵わないが息子の保大好き、
保と司の秘密を打ち明けられてからは息子ではあるが、
二人の実力を一人の政治家として男として尊敬する事も。

酒に酔うと「私の真名空はそらではなく、存在が空気の“
くう”だ」が口癖

家庭では良き父であり良き夫である、最近の悩みは常識人
の為の出番の少なさ

趣味 和のご機嫌取り、月と遊ぶ、ただ和も月もベタベタされず
ぎて嫌な時もあると

城内の営繕、和達が壊した城内を笑顔で修繕している姿を
ちらほら

見た目 身長177cm、カラスの濡れ羽根色と言われる漆黒の髪
をオールバック

糸のように細いたれ目、優男のような細い顔立ち、ほんわ
か癒し系

武器 トンファー（名無し）あっても無くても変わらず一般兵に
毛が生えた程度

ただし月をめぐる保と争う際は保と互角の力を見せつけ
る事も

その他 本当は池陽君は名前じゃないんだが、作者の勝手な解釈で

名前にしました。

一薊一

姓 李

名 肅

字 無し

真名 薊^{あやみ}

年齢 38歳

通称 李儒攻略の最大の敵、紅の壁、最近はとくに紅を危険視している為

特徴 司の母、洛陽の私塾時代は和、空、劉表と同級生、空に惚れていた

和に負けたが今も空を落とせないか陰謀を企てる事も
紅は司を奪う敵でもあるが真面目さなどから内心認めては
いる

趣味 料理、司の服を縫うなど司に関して母親的な行動

見た目 光り輝く黒のタキシードにオールバック、保曰く宝塚、身長164cm

美人よりもハンサムと言われる、実際涼州では女性人気が

高い

武器　　モルゲンステルン（名無し）司に言いよる女性が出ると襲
い掛かる

キレた薙は涼州最強

その他　作者としては出番を増やしたいが、何となく使いにくい存在

一琅？一

姓　　馬

名　　騰

字　　寿成

真名　琅^{ろうかん}？

年齢　　37歳（和の二カ月遅れ）

通称　　涼州の化け物、見た目15歳のロリッ子おばさんの為

特徴　　翠（馬超）の母親、保に翠、司に蒲公英を嫁がせようと企
む、

嫁がせる為ならば鬼にもなれる、でないと二人が将来確実に一人身になると。

一人称は琅？、保の底の知れなさに平伏、保、司に絶対の

忠誠を誓う

大半の人は真名十君付けで呼ぶ

趣味

翠と蒲公英に保と司を籠絡するためのテクニクを教える
乗馬および馬の世話、これは涼州で生きていくための必須

技能の為

見た目 恋姫の蒲公英そっくり、身長148cm、茶色い直毛な髪
をポニーテールで、

上着はスカイブルー胸元オレンジのスカーフ、真っ白なシ
ョートパンツ、

足元はスニーカー、どう見ても15歳程度

武器

十文字槍（石断槍）石すらも紙を切るように切る切れ味から
保LOVEでキレた和とかネタを抜けば涼州最強

一雷一

姓 韓

名 遂

字 文約

真名 雷

年齢 34歳

通称 天水の策士、これはそのまんま天水周辺で謀略に必ず名を連ねている為

特徴 口癖はワシ、戦闘時は謀略、暗殺何でも有りの謀略家、普段は真逆の豪放磊落

武力は琅？に負けず劣らず、保と司に絶対の忠誠、二人だけには真名十様

それ以外は真名の呼び捨て。

保に愛馬を殺されるなどされるが、保や司が子供でありながらも、

謀略、肝っ玉のでかさ全てにおいて器の違いを見せつけられ忠誠を誓う

趣味 酒造、保や司の発明した酒を作る手伝い味見目当てではなくかなり真剣

流鏑馬、騎馬調練で知って以来はまる

見た目 身長184cmとこの時代では長身、左顎から鼻にかけて大きな傷跡あり

四角い顔で逞しい顔つき、一言で表すなら実に男くさい顔

武器 馬鞭（絶対勝利）保が戦で必ず勝つ事を命令された事からそのまんまな命名

一紅一

姓 淳于

名 瓊

字 仲簡

真名 紅^{ほん}

年齢 22歳

通称 涼州最後の突っ込み、没個性の教科書、困った時は淳于瓊、変人だらけの涼州で怒鳴れるなどからついた物がほとんど、あまりに常識的行動過ぎて花が無いと言われるのが悩み。

特徴 涼州が開いた人材募集試験第一号合格者、琅^{らう}?率いる部隊の副隊長

最近の司に惚れている、今は相思相愛までいかないがお互い意識する関係

常識的な突っ込みには定評あり

趣味 家事炊事と意外と女性らしい

見た目 趣味は女性らしい行動が特徴的だがファッションセンスは壊滅的

私生活での街への買い物時も鎧姿など私服は無いも同然性真ん中で綺麗に別れた真っ蒼な肩まで届く髪、美人系統の顔10人中10人が振りむくような顔ではないが整った顔立ち

武器 柳刃刀（文司）、先祖伝来の無名刀だったが司の名前から

抜き出し名付ける

一日一

姓 郭

名 ?

字 阿多

真名 日^り

年齢 27歳

通称 年中反抗期、その態度の悪さから命名。

遅れてきた厨二病、普段の態度から司が命令
馬鹿一号、光とセットで馬鹿二人組扱い

特徴 紅と同じく涼州人材募集第一弾で募集、遅れてやってきた
厨二病

あまりの態度の悪さから制裁ときたちびっ子保に一瞬でメ
られた屈辱あり。

で人気 普段の喋りからは想像がつかないが街の子供達の遊び相手

光とは幼馴染

趣味 風揚げ、子供達には風揚げ名人と呼ばれている

達磨さんが転んだ、司に教えられて以来子供達には最強の王者として君臨する

見た目 身長174cm痩せ型、赤い髪を短く刈りあげ、髭を伸ばそうか悩み中

やせぎすな為見た目の威圧感が無い顔つき対策として。

武器 昇竜偃月刀、前は特に武器にこだわりは無くあてがわれた物を使っていたが、

司の運営する店のくじで当たって以来愛用、理由は壊れにくいから

一光一

姓 李

名 ?

字 稚然

真名 光ぐわん

通称 馬鹿二号、言わずもがな日とセットで馬鹿一号、二号扱い
救いようが無い馬鹿、他の馬鹿キャラと違い憎め無さが無いから

ウドの太木、涼州一の背の高さぬぼつとした顔つきから

年齢 27歳

特徴 日とは幼馴染、兄貴分の日の後を追いかけていてそのまま涼州へ

いる為 「っす」が口癖、救いようが無いくらい馬鹿と認識されている為

かい 20話の時のように彼に常識を問われた時のダメージはで

人の名を呼ぶ際は字呼び捨て

趣味 趣味が郭？と言われているほど郭？の追っ掛け、
BL要素ではなく子供の頃から親分子分の付き合いの為

見た目 身長196cmこの時代にしては長身、ぬぼおとした顔
つき

武器 槍（名無し）日の昇竜偃月刀と同じくくじの景品
日と同じく今まで武器にこだわりは無かった。

一芍薬一

姓 田

名 豊

字 元皓

真名 芍薬

通称 涼州三人娘一号、芍薬、牡丹、百合の三人一組でいることがほとんどの為

知恵の一号、三人娘の中での一番の知識がある為

年齢 19歳

特徴 僕っ娘、人の名を呼ぶ際は地位に関係なく真名+さん付けで
ガールズトーク大好き、全ての物を恋愛と結びつけてしま
う桃色目線装備、

普段の喋りや行動から百合が一番に思えるが三人娘一の知識
戦場と普段のギャップ萌えで雷に片思い中

趣味 甘い物食べ歩き、牡丹からはあれだけ食べて太らないのは
卑怯と言われる。

牡丹、百合とのガールズトーク、三人寄れば姦しいの見本

見た目 水色の髪の三つ編み、白いセルフフレームっぽい眼鏡、

グレーのブレザーにベージュのタータンチェックのスカート
身長158cm

武器 鉄扇、司から護身で習っているがいかなせん付け焼刃護身
程度の実力

一牡丹一

姓 沮

名 授

字 無し

真名 牡丹

通称 涼州三人娘二号、二番目に自己紹介したから二号と
天然の二号、天然発言でパニックに陥らせるため

年齢 19歳

特徴 自分を牡丹と呼ぶ、人の名を呼ぶ際は地位に関係なく真名
十ちゃん付けで。

ガールズトーク好き、芍薬と同じく全て恋愛ごとに見える
桃色目線装備

素で芍薬の雷好きをばらしたりと爆弾発言娘として恐れら
れている

趣味 芍薬、百合とのガールズトーク

見た目 黄緑色のポニーテール、縁無し眼鏡の眼鏡、紺ブレザー白
のパンツスタイル

口調性格とは対照的で身長173cmと長身、巨乳ではな
く爆乳

武器 バグナウ、三人娘に共通しているが武力は無く護身程度の為

姓 審

名 配

字 正南

真名 百合

通称 涼州三人娘三号、三人娘で常に最後に自己紹介している為
おっちょこちよいの三号、冷静でいながらおっちょこちよ
いの為

年齢 19歳

特徴 喋りはかなりお上品、しないが高笑いがあったら完全なお
嬢様キャラ、

普段は冷静だが結構おっちょこちよい、芍薬、牡丹とのガ
ールズトーク大好き
人の名を呼ぶ際は姓十字で様付け

趣味 芍薬、牡丹とのガールズトーク、話のまとめ役

見た目 銀色のお団子ヘア、
ベージュのブレザーにベージュのタートンチェックのスカ
ート

身長148cmと、口調、態度と対照的な見た目ロリッ子、
でも巨乳

武器 皮の手甲、他の三人娘とおなじく武は嗜み程度で拳を守る

ため程度で手甲を装備

一嵐一

姓 ?

名 融

字 無し

真名 嵐

通称 チ○コ人間、司がショートボブにした彼女の後姿から命名、
禁句中の禁句

きのこの山、同じく司命名、これも呼ぶと危険だが最近は
受け入れている？

神童の盾、保に常につき従う護衛

年齢 20歳

特徴 一人称は俺、自害しようとしたところを保に止められて以
来の保大好き

汚名挽回、名誉返上などとお約束的な発言を平気でしてし
まう馬鹿、

ただ竹を割ったような性格、見た目のかわいらしさなどか
ら許されてしまう

史実で仏教の庇護者だったように熱心な仏教徒、最近は保

が上になった

趣味 保の護衛、保の副官兼護衛として趣味と実益を兼ねている
和との調練、保LOVE同士の好敵手としての女の争い

見た目 ボーイッシュな見た目、胸が無い、俺口調の為男性と間違われやすい

あだ名となったショートボブが特徴、身長145cm、涼州のちびっ子

武器 槍（蜻蛉切）保が自分の部下になるならばと神から受け取り渡す

オリジナルキャラ紹介（後書き）

オリジナルキャラの設定はこんな感じに見えました。

うーん、どうなんでしょうかねええ。

第二十二話、遂に出陣？（前書き）

北京ダック、恋姫の世界にあったら何と呼ばれていたのだろうか？
北京はまだこの頃無かったし、そんな事を夢で悩んでいた今朝。

自分でも分からないくらいこの作品で悩んでいるのか？とも思いましたよ。

とりあえず、今日も皆様生温かい目でよろしく願います。

第二十二話、遂に出陣？

一保一

「見ろ人がゴミのようだ！」

司くーん、開口一番君は何を言っているのかな、ため息が出てきたよ。

「司、今この場で言うな身内に言っている事になるぞ！敵兵に言おう。」

なんでこんな当たり前の事を言わないといけないんだ私は。

「董擢様、李儒様そろそろお願いします。」

うん？何か聞こえた？気のせいかな。

「そうはおっしゃいますが、ムスカは一応味方にも言ってたじゃないですか。」

たしかにそうだけど、って、待えええーい！

「駄目じゃん！！それだと私達が敵ごと涼州兵殺す事になっちゃうじゃん。」

私は仲間を大事にするぞ、勿論司だって仲間を守るが。

「保さん、真面目に答えないでも、流石に私でも・・・ねえ。」

妙に嫌な間があったぞ、今。

「いくら司でも平気だ、平気だと思う、まあちよつとは覚悟しておけ♪」

自分に言い聞かせましょう。

「オッホン！保様、司様ーお話をやめてください！」

あれ？やはり何か聞こえましたか？

「関白宣言乙、保さん、さだまさし好きですよね、歳に似合わず。」

さだまさしの良さを知らないとはなんと勿体無い！

「さだまさしの良さを知らないなんて人生かなり損しているぞ、ライブなんか歌よりもフリートークを聞きに行っているくらいだし。」

だてにライブのフリートークがCD化されてないですよ。

「董擢様！！！！李儒様！！！！」

なんかうるさいな、先程から周りが。

「歌じゃないのかよ!! さだまさしに求めるものは!？」

さだまさしのライブを知らない人は皆最初そう言うんだよな。

「いや、償いとかいいよ、あれを酒飲みながら聞くと泣きそうになるよ。」

タイトルの通り償いについての真面目な歌で染みるんだこれがまた。

「董擢様、李儒様、いいかげんにしてください!」

本当にうるさいなあ先程から、こちらは話が盛り上がっているのに。

「マジで!？あの涙を知らない冷血人間な保さんが泣くの!？」

えらく酷い言われようである。

「何気に酷いな、まあいいや、さだまさしは聴くと良い歌あるぞ。」

「こうなりましたら!」

ゴスッボグッ

「「うぐお、いってえー!」」

司と話が盛り上がっていたらいきなり頭部に凄まじい痛みが走る、頭を殴る時ってゴチーンとか響く音だろ?なんでこんな鈍い音がするんだ。

「誰だー!!!」

頭を押さえ踞りながら犯人を探す。

「と、と、と、董擢様と、り、李儒様がい、い、いけないんです!」

あら、顔真つ赤にして泣きそうな表情の紅さんがいた、もしかして先程のうるさいのは紅さんが呼び掛けていたのか?

「お二人がさっきから何度も呼び掛けていたのに無視するから・・・ううっ」

全く気づかなかった、って、これはまずい、紅さんが泣き出している、

泣きそうな美人というのはグツとくるものがありますが、って違う。

司と目線を合わせる、うん、これしかないね、恥も外聞も捨て

DO・GE・ZAだね。

「そ、そ、そ、そんな頭をあげてください、ど、ど、土下座なんかないでください。」

紅さんいい人だ明らかに俺らが悪いのに、土下座したら慌てちゃって。

ただ、これで終われば良かったんだが・・・。

一琅？一

これから部隊を率いて出発だと言う時に皆気が緩んでいるな、まあ、琅？としては今回の派兵は余裕あるんだけど、流石に気が緩みすぎだよ。

今の保君と司君は特に酷いんだからよく分からない話に夢中になっていて、

紅ちゃんの呼び掛け気づかないし、紅ちゃん泣きそうになっているし。

紅ちゃん大好きな司君に無視されていると凹んじやっていたし、二人とも殴られて気づいたみたいだけど殴った紅ちゃん泣いていたし。

司君には蒲公英がいるけど、でも、恋する女の子は助けてあげないとね、

こういう時は琅？みたいにやはり頼れるのは年上のお姉さんなの。

女の子泣かせる悪い男の子には罰がないとね、キシシ。

「二人とも本当に悪いと反省しているなら何処でも謝れると琅？は思うんだ。」

謝っていた保君と司君の二人が、私が話に加わってきて焦っているの。

でも、もう遅いんだ、パチンと親指と人差し指を鳴らすとあれが運ばれてくる。

「本当に反省してるなら土下座できるはずだ肉を焼き骨を焦がす高熱の鉄板の上でも。」

此処で決め台詞を言わないとね。

あれっ、泣きそうだった紅ちゃんが固まっているよ？

「ろ、ろ、琅？さん、その物体はヤバイ、それは冗談でもヤバイ！」

司君が腰を抜かして怯えている、でも、琅？は驚かせたりするけど冗談は言わないよ。

「なんで琅？さんがカイジを知っているんだよ！」

カイジ知っていたらいけないのかなあ？保君が変なことを言ってる、それよりも、今は焼き土下座の心配じゃないのかなあ？

気になるなら保君に教えてあげよーっと。

「今、保育園の紙芝居で翠や蒲公英とか子供達に大人気だよ司君の紙芝居のカイジは。」

保君が絶望的な顔している、知らなかったんだ、まあ、この後の展開の方が不安なんだろうけどね、ニシシシ。

「「うぎややあああああああああゝゝゝゝゝ！！！！」」

可愛い女の子を泣かす悪は琅？によって滅んだのだ。

—光—

うつす、光つす、今日はこれから孟高や文優達が出陣つす、謁兵所に見送りに行ったら、
一向に進んでないつす、自分は関係無いつすが流石に酷いと思ったつす。

だから、常識人の自分がバシッと言ってやるつす

「いい加減出兵するつす、遊ぶのはやめるつす！」

相変わらずな俺の一言っす、切れ味鋭いっす。

でも、また言われたっす。

「光君に言われるなんて。」 「光さんが正論吐いたら涼州は終わりだ」

皆本当に酷いっす。

一保一

熱いは痛いのは散々だった、いくら超回復能力があるとはいえ痛い物は痛い。

まったく司がカイジを紙芝居で広めなければこんなことにならなかったのに、最近忙しくて保育園に行っていなかったが、まさかカイジが流行るなんて。

あのあと司から聞いたが、目眩がしてきたよ。

月が利根川、詠が会長、恋が班長をお気に入りなんて聞きたくなかった。

可愛らしい月が言うのか？ 「Fuck you・・・ぶち殺すぞゴ

ミめら」と、

詠ちゃんが「祈るようになったら人間も終わりって話だ！」なんて言うのか？

うーん、詠ちゃんが言ったらちょっと似合ってしまいそうだった。

恋が班長なのは「班長ご飯持っている」と言っていたらしいが。

月と詠に関しては兄として保護者として不安しか感じません。

って、話が明後日の方向に行きすぎた、本題に戻りましょう。

今日は何があるのかと言いますと、今回益州を荒らしていた200名程度の賊が涼州に、涼州に被害が出る前に兵を派遣し鎮圧を、それで私と司が派遣される事になったんです。

それで今から閱兵場に集まる千名の兵の前で将としてこれから演説を。

私も司も、琅？さんとガチでやりあえる人間なのは兵達は知っているが、

初陣がまだなガキ二人が補佐が付くとはいえ大将で派兵されるんですから。

一応、大將が私、大將付き軍師が司、補佐として琅？さんに紅さん
って。

うん、初陣を迎える私や司にはとてもありがたい事ではあるが、
つき従う兵達からしたら実にふざけていますよ、たまらないでし
ょうな。

琅？さんが大將で二万とか普段率いているのに、千名の部隊の將の
補佐職って、
紅さんだって琅？さんの部隊の代理でいるのに申し訳ないと言
えない。

まあ、今回は上二人が初陣、しかも、兵数は賊より多いが新兵ば
かり、
賊に負ける訳はまず無いが何があるか分からない保険の為なんだろ
うが。

母上も父上も親馬鹿だよなあ、嬉しすぎるよ心遣いとして。

ならば期待に応えられるように頑張りますか。

では、まずは鼓舞しますか、兵達を、兵の前に出て演説を始める。

「諸君達を率いる事になった董擢だ、此処に集まっているのは私と
同じく皆新兵だ、
私のような者に率いられて皆不安であろう、私もだ。」

一瞬程度だが間を明け、新兵の顔を見る、皆不安そうな顔をしている、

まあ、私が弱気な発言をしているんですから当然でしょう。

「だが、それがどうした!と、我々も諸君らもまだ初陣もまだまだなひよっこだ、

だが普段から我々は馬騰將軍、韓遂將軍に鍛えられている一騎当千の兵ではないのか?」

新兵達に自分は強いんだという事を認識させましょう、そして燃料を投下しましょう。

「舐められているんだぞ、益州を追われ涼州に逃げてきたんだ賊徒共は、

精強なる涼州兵はだらけきった益州兵より弱いと看做されたのだ、よいのか諸君!我らは新兵だが愚かな益州の連中より弱いのか?」

「「「「「否!!!」「」「」「」

叫んでいる新兵達の顔つき、目付きが最初と違い瞳には怒りの炎が宿っている。

「ならば奴等に教えつけてやるのだ涼州の強さを、怖さを、我ら涼州を舐めた代償が如何に高いのかということ、奴等の首をネジ切り街道という街道に並べてやろうぞ!」

「「「「「応!!!」「」「」「」

これだけ煽ればいいでしょう、皆がやる気、もとい殺る気です。

補佐で一騎当千の琅？さんに紅さんいるんだから圧勝してくるしかないでしょう。

「街道という街道に首を並べるですか怖いすねえ保さん」

演説後に司が愉快そうに笑いながら話しかけてくる、目が笑っていないが。

「廃村を根城にした族はおよそ200名、こちらは5倍で猛将揃い余裕でしょ。」

わざとお気楽に発言する司、司も同じく緊張しているんだろう。

戦に行く前に弱気でいてはいけないんだが、周りに兵はいない、私と司の二人しかないから出来る話なんだが。

「常識的に考えたら勝てるのは分かっているけど死者を出さないか？不安だよ、

戦に犠牲は付き物とはいえ、やはり怖いよな人の命を預かるのは。」

たぶん率いる兵が100万だろうが、この怖さは消えないでしょうな。

ただ、ここで躓くわけにはいきません、今、司と企んでいます、将来歴史通りとなったら黄巾党、反董卓で何十万と戦うのですから。

「さあ保さん行きましょう、数は揃っているが初陣の將軍と軍師に初陣の兵達、

相手はしょぼい益州から涼州に逃げてきた馬鹿な賊徒共、全てがふざけている、

悪ふざけが大好きな僕達の為にあるような戦じゃないですか。」

司の言うとおりで、ふざけ過ぎな条件ばかりだ。

「これから嫌という程戦争するんだからな、ならば今日の戦いは次の戦いの為に、

次の次の戦いの為に行くか、派手に大陸に名を響かせるか。」

まるでどこかの少佐みたいだな、あちらの台詞はもっと凶悪だが。

「保さん、良いですねえ悪い笑顔していますよ、そうでなくちゃ保さんは。」

これからはじめての殺し合いに臨むのに笑っている私と司、戦を楽しもうなんて頭がおかしいんでしょう、でもそうでないと。

三国志の世界を本当の意味でかき回すんですから馬騰と淳于瓊なんて、

凶悪な助さんと角さんを従えていくんですからねえ。

保さん大将に千名の兵をひきつれて賊の討伐で益州の境にある廃村
近くまで来ましたが、
さてさて、いったいどうしようかねえ？

賊共は、村に籠城していて防衛戦する気満々で困った、とかではな
く、
賊の連中油断しきっていて、こちらに全く気付いていないのが。

楽に勝てるなんていいですよ、ローリスクハイリターンなんて最高
ですが、
ただ、此処まで相手が何もしていないと異なんではと疑ってしま
いますよ。

斥候を放って待つ事数刻、戻ってきた斥候の報告を聞くと、
村の入り口に二か所に見張りが二人ずつ、あとの賊達はまだ夕方だ
が酒盛り中と。

益州から逃げ切れたと安心しきっているんでしょう、涼州がすぐに
気付く訳無いと、
舐めてますねえ、益州は攻略の有力候補ですから細作だらけなんで
すが此方の。

しかも、こっちの兵は騎馬が大半なんですから情報伝達も移動速度
も反則ですよ、
それなのに賊徒共は涼州で大手を振って生きていられると思ってい
るんでしょうか。

さて、これからどうするか話をしましょうか。

「斥候の情報からですと賊徒は当初聞いていた数二百名より多くおよそ三百弱程度、

村には西と東の二か所しか入り口が無くそこに二名ずつ警備が、あとは中で皆宴会中。」

皆が食いつく情報は賊の数が予定よりも若干多いという点よりは、村の出入り口は二か所、警備も合わせて4名しかいなくあとは皆だらけていると。

「部隊を二つに分けて村に近づき夜まで待ち二か所から夜襲では？」

まあ、紅さんの言うのが無難ですが現実でしょう。

「紅ちゃんの言う方法で良いと思うんだ。」

琅？さんも同意と。

「夜襲もいいが村に攻めるとして同士討ちの危険性は？」

まあ、保さんの言うとおりですね、それならば。

「では、部隊を二つに分けて西側の出口側から火矢で攻撃しましょう、

此方は村に無理に攻め込まず、混乱した賊徒共を東側出口から逃げ

させます。」

なんで一気に攻め込まないのか紅さんとか聞きたい模様

「賊からしたら西側から敵が来ている、東側出口の方はあいているし益州に近い、

となると、賊徒共も土地勘の無い涼州よりも益州側に逃げるでしょう、

それで東側出口から出た先で待機していた混乱する部隊を攻撃をしていき、

弱り切ったところにトドメで琅？さんの騎馬部隊が。」

部隊を夜戦専門で鍛えた訳でなく夜戦で同士討ちのリスクがあるのですから、

出来る限りそうならないように被害を少なくする安全策で参りました。

これが敵がちゃんとした軍ならば罨仕掛けられているか？とか疑うんですが、ろくに見張りも立てず夕方には酒飲んでいて。

とりあえずこの啄木鳥の策で痛い目にあってもらいましょう。

西側からの襲撃部隊は紅さん率いる300名の部隊が火矢で攻撃尻を蹴飛ばし。

僕や保さんが600名を率いて東側出口の先の森で待機、琅？さんは100名の騎馬で。

数刻後、現代とは違い何も無い静かな夜、遠くからかすかだが銅鑼の音が聞こえる、

赤い炎が遠くからでもよく分かる、廃村だとはいえかなり燃えている。

少したつと東側の門が開いて賊共が逃げてきた、大半が飲んだくれ寝ていた奴らばかり、
軍師として策を練った苦勞が、鴨撃ちの鴨よりも楽な獲物になるとは。

兵が新兵達ばかりだから焦って混乱しないかなど不安な点もあったが、

あまりに相手が情けないからか、普段の訓練の方がはるかにきつからか、

皆落ち着いていて、敵を引きつけ、そして弓や元戎から矢が一斉に放たれる。

ハリネズミになって死んでいく死体だらけ、琅？さんの突撃準備なんかいらなかった。

結局半刻程度で逃亡してきた賊を退治し終え、紅さんの部隊から終わったと伝令が。

琅？さんは出番が無かったと凹んでいた、仕事しないで済むなんて、

私からしたら実に羨ましいんだが目指せ給料泥棒ですから。

そんな雑談はさておきまして本筋に、

伏兵がないか念のため気をつけながら村の中に入ってみたら、戦意があるような敵はいず、いたのは戦に気づかず寝ていた賊くらいだったのが。

結局、涼州軍は千名ひきつれ、軽傷5名、重傷、死者0名
賊徒共は死者237名、捕縛14名の完勝となった。

それにしても保さんは弓で僕も元戎ではじめて人を殺したが大した事は無かった。

向かってくる人を斬ったとかではなく、混乱した賊という名の酔っ払い達を、
遠距離から一方的に射殺す、そういう点では胸をはりづらい戦いだが出方ない。

あまりにもあっさりと童貞を捨てる事になるとは、普通ならば人を殺した事に悩むとか、
罪悪感から押しつぶされそうに、といった感じがほとんどないとは。

ただ、幾ら罪悪感が無くても人を殺す事に慣れてはいけなないと自分に言い聞かせ、
そして、保さん達と賊の死体を茶毘にふし埋めるなど戦後処理を終え。

いつもの日常生活に戻る為に城に戻る事にするのだった。

第二十二話、遂に出陣？（後書き）

保と司の初陣をさせてみましたが、うん、手を抜き過ぎましたね、カロリー50%OFFどころか0カロリーみたいになってしまった。

主役たちが人を殺すという大事なイベントを、
此処まですかすかにするとは我ながら酷い文章です。

こんな調子でいずれ黄巾党とかの戦闘が起きたら、
一体私はどう表現するんですかねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第二十三話、涼州の為に、未来の為に（前書き）

ギャグとシリアスが混じる感じになりました、文章力無いから凄い中途半端になってしまった。

まあ、ギャグオンリー、シリアスオンリーでも中途半端ですが。

この作品のヒロインのポジションを独走するザ・普通な紅さん、大丈夫なのか？恋姫なのにヒロインが淳于瓊ってマイナーで。

頑張れ紅さん。

第二十三話、涼州の為に、未来の為に

――司――

ガギーーン、ガギッ

「薙さん止めるんだー!!!」

おっ、すごい！武器がどちらも刀じゃないから鏢迫り合いと言うのか？

まあいいや、保さんの方天画戟と母さんのモルゲンステルンが押し合いになってる。

保さんが必死で叫んでいるが今の母さんには届かないと思うんだな
1。

ドゲシッ！

あっ、母さんが鏢迫り合いから脱する為保さんに蹴りを入れて距離とった、

保さんが吹っ飛ばされているって、この国で一番強いのに保さんが。

ブンブン ブーーン

物凄い勢いでモルゲンステルン振り回しているよ、空気切り裂いているし、

あのスイングあればベイスターズなら即日スタメン4番になるよ。

「保君行かないでください、お母さんを捨てないでー！ー！。」

部屋の中を見渡すと玉座では和さんが捨てられた女みたいになっているよ。

「和、泣きやむんだそんな姿を見せてはいけ、ブーン、ドゴツ、
・グフツ」

あつ、空さんが母さんの見事な一撃に殺られたぞ、
往年の中村紀のフルスイングみたいに振り抜いた一撃腹に喰らっているし。

「お義母様、やめてください！！！！」

いいね、涙流して叫んでいる紅さんの横顔にグツときたぜ！！

「紅ちゃん、それが状況を悪化させているんだよー！空気を読んで
！」

あつ、琅？さんが本気で言ってるよ。

「淳子仲簡さん、何故このような事態になったのか理解されている
のでしょうか！？」

口調がいつもと変わらぬようだが百合さん完全に怒っているよ。

「たもつくん、なんで私を捨てるんですか・・・」

和さん、あんな状態だと今後の涼州は大丈夫なのか？

「牡丹には泣いた和ちゃんの相手は無理だよー！！！！！！」

沮授の知恵をもってしても泣く和さんは無理なのか。

ドガッ、ボゴッ

暴れる母さんを止めに入った親衛隊が吹き飛ばされている。

「とにかく紅さんを守るんだよ、紅さんを此処から連れ出して！。」

芍薬さんが一番冷静に判断して指示しているね。

「・・・此処は保育園か、うるさい」

「まったく、あぶないっす、いい加減にするっす」

日、光、うん、玉座の間が戦場と化していても馬鹿一、二号はいつも通りか。

「うぐるううああー！ー、その女をこちらによこせ、邪魔をするなー！ー！！」

母さんがなんか獣みたいな唸り声上げて叫んでいるよ。

ブーーン ビュン ビュン

あいかわらず凄まじい勢いで空気を切り裂いているぞ、あんな重たい鈍器で。

「どうにかして薙さんの足止めをしろ、紅さんの避難時間を稼げー
ー！！！！

母上の説得をしたいのに、それどころではないー。」

保さんが必死で食い止めようとしている、おっ、馬鹿一号、二号に
気付いたぞ！

「行けっ馬鹿ミサイル！」

保さんが一号、二号を母さんに向かってぶん投げたよ。

グワラゴワガッキーン！！！！！！

あらっ、岩鬼のような一撃が出たよ、すげー壁を突き破ったよ、
まあ、日と光の馬鹿コンビならば誰も惜しまないだろうし平気か。

「保様と司様の前でお前ら無様な姿を見せるなよ、韓遂隊突撃ー
ー！」

怒れる母さんには敵わないだろうが、雷さんの虎の子の部隊ならな
んとかなるか。

ドゴッ、グハッ、ボゴッ

うん、駄目だね、足止めにもならないで雷さんともども吹き飛ばされていつてる。

「お義母さんも泣きやんでください、今のままでは俺も王子様も困ってしまいます。」

嵐が混乱する場に更に油を注ぎにいったぞ。

「うううう、保君はそんな女を取って私を捨てるのね・・・。」

駄目だこりゃ、和さん再起不能だな。

あつ、おはようございます、今朝も良い天気ですね李儒文優こと、司です。

今、城内の玉座の間は見ての通り修羅場です、どうしてこうなったかと言いますと、

では、これから何があったのか説明の為過去編に入りましょう。

ちなみにここまでギャグパートですが、これから一気にシリアスパートに入りますので。

って、僕は一体誰に向かって話し掛けているんでしょうねえ僕は!?

時は遡り、一週間前の朝議の席

「先程、提案があつたが洛陽に将を派遣するのは何故ですか、司様？」

雷さんは内心分かつているんだが皆への説明の為に尋ねてくる。

「涼州の為にです、死にかけの王朝にトドメを刺しにいかうと思つてまして。」

満面の笑顔で楽しそうな事があつたかのようにコメントしましたよ。

母さんは私から、和様、空様は保さんから前以て話をしていたので、琅？さんや雷さん達はなんとなく漠然としてますが感じとっていたようで。

ただ、紅さん、三人娘、馬鹿一号二号、嵐さんとかは口開けっ放しで固まっているよ、

僕のあまりに恐れを知らない傲岸不遜な発言にビビっているのか？

まっ、王朝が死にかけでそれにトドメをさす、なんて言い訳無用の不敬罪ですし。

これから何をやる気なのか計画について計画者の私と保さんで話しましょう。

「漢王朝の政は皇帝ではなく宦官によって動かされてきたが、

霊帝は政を顧みず女の尻を追うしか出来ない愚物、政は全て十常侍任せ。」

保さんが発言する。

「肥料や農薬を使い、二期作、二毛作、輪作をする農法、米、麦以外の食料生産、

大谷商会経由の大陸全土での兵糧の売買で涼州は食料事情に困っていませんが、

大陸は近年の凶作や蝗害により他州は確実に弱っていつているのですから。」

20世紀になり人口激増にたいし食糧難が起きると言われたが、化学肥料のお陰で食料を増産し人類の激増に対応出来たんですから、堆肥なんて存在すらないこの時代の農業では凶作も当たり前かと。

おおっと、考えが脇道に逸れすぎていましたね、元に戻しましょう。

なんで農業の話になったんだ？と皆は思っているようで。

「下手の考え休むに似たりなんて言いますが、実際は休むどころか迷惑をかけるばかり、

凶作により離民が増えその為税が減りと悪循環が起きているのですから、

困った馬鹿は減った税の穴埋めに増税で、更に国が弱まるだけなのに、ククク。」

保さんが肩をすくめ、洛陽の間抜けさに苦笑する。

「何故今回の計画をたてたかといいますと、大谷商会経由の確実な情報ですが、

洛陽の馬鹿とその周りが税收対策に官位の売買を検討していると。」

保さんの話に皆ザワザワしていますねえ、まあ、当然でしょう。

元々官宦に賄賂を払えば出世しましたが、それはあくまでも暗黙の了解で、

なのに、皇帝がそれを許すどころか自らが役職の叩き売りを検討なんて。

「凄いのう、洛陽はどうしようもないと聞いていたが靈帝がそこま
でとはな。」

漢の駄目さを知っている雷さんは良くも悪くも感心している。

「洛陽は汚職にまみれているけど売官なんて僕は信じられないんだ。
」

芍薬さんが疑いを持つ、まあ当たり前でしょう、三人娘が頷いている。

では、此処は私がだめ押しをしましょう。

「諜報部からの情報ですが袁家、曹家からも売官の話の確認が取れています、

「まあ、袁逢、袁隗、また曹嵩なんかは売官に難色を示していますが。」

「「「「なっ！」「」」」」

今度は和さん、空さん、琅？さん、雷さんとかが驚いている。

まあ三公を出すような名家の中にそれも当主周辺にこちらの細作がいる、

とバラしたんですから、まあ、驚くのも当然ですかね。

僕と保さんが作り上げた細作網がどれだけ広がっているのかという点、

あと情報源をボンヤリとだがばらした点、これらの事で驚いたんでしょう。

「今回の計画で洛陽に将を送るのはそれを、官宦達を後押しする為です、

実際、袁家は既に売官が始まるという流れに抵抗は諦めていて、ただ、面白い物で金で地位を買った曹嵩は抵抗をしているというのが。」

保さんが愉快そうに皮肉な現状を語っている。

実は保さんと僕は皆に嘘をついているんですよえ〜、
だって霊帝や官宦が売官を考える切っ掛けは僕達が唆したからなん
ですがね。

まあ僕達の提案は色々経由させて伝えていきますから誰の案か彼らは知る事無いですが、

あいつ等は涼州によって踊らされているとは気づいていないなんてそれとも踊らされているなんて関係なく捕らぬ狸の皮算用に必死ですかね？

「どうせ今の洛陽の連中なんて死に体なんですから徹底的に利用してあげましょう、

最後くらいは僕達に役立ってもらわないと、死体にも使い道はありますよ。」

保さん以外の皆が息を飲むのが分かった。

――空――

相変わらず保と司君の二人には驚かされることばかりだ。

二人がこの世界と似ているが異なる遥か未来から転生したと打ち明けられ、

家族だけの秘密が出来たあの時からもうすぐ十二年になりますが、これだけ一緒にいるというのにまだ底を見せない二人の実力に怯える。

父親として子供の實力に怯えるなど実に情けない限りだが、同じ政治家として、男として格の違いをこうまで見せつけられると。

保達は未来の知識を持っている、だがそれは此処と似た世界で、答えを知らながら試験を受けても実は間違っていたなんて事も。

二人は答えが合っているか確認して答えていく事が出来る、
答えが分かっている試験の内容確認なら楽勝と誰もが思うだろう、
ただ、それを誰にも気付かせず事も無げに迅速に精密に出来るだろうか？

袁家、曹家の中に情報源があるなんて二人は普通に話していたが、
そんな情報網を構築しているような国が大陸中にあるのか？
何処にも存在しないだろう、だが、この二人の子供は持っている。

しかも、情報源を守るつもりがないのかあっさりと袁家、曹家とば
らす、
それとも情報が漏れる事で袁家、曹家の中で疑心暗鬼を起こさせる
気か？

二人は大陸中の人間の何手先を読んで行動をしているんだ。

二人は私の自慢の大事な息子であり、その友人なんだが、
どれほどの化け物なのか涼州は化け物を懐に飼っているのか……。

ふうっ、父親の思考ではないな、実に情けないな私も。

―保―

司の話に皆実に驚いている、正義感で王朝を建て直す為洛陽派遣ではなく、

王朝を徹底的に腐らせ食い荒らし死んでもらおうと企んでいる事に。

私も計画立案者ですし、反対派も多いでしょうが計画の後押しをしましょう。

「今回の計画は皆さんからしたら賛成できない案なのは分かっています、

此処にいる人間全員に賛成どころか反対されても仕方無い案でしょうが。」

私達の計画の非を素直に認めましょう、営業と同じです、最初に不利益な点を伝え、あとから利益を伝えた方が良いので。

「母上、父上、李肅様、皆清廉潔白な人間で賄賂と無縁な誠実な人間という評を、

地に落とさせるような案、ただ、私達もやりたくてやるのではない事を理解して下さい。」

内心ノリノリですけどね二人とも、この時代で暴れられる!!と、騙している点は心苦しい、ただ、やむを得ずな点も伝えましょう。

「正義に燃え漢を建て直したいと思うのが普通でしょう、

ただ漢は大きすぎて贅肉が付きすぎ今からでは間に合わないんです、大陸の民という大の虫を生かす為なら漢王朝なんて小の虫を殺すし

か。」

これは二人の本音、皇帝がくたばろうが何ともないし守る気もないですから、ただ漢に属する民は出来る限りは守ってあげないといけませんからね。

「俺はコイツは嫌いだが王子様を守ると決めているから手伝う。」

予想通りまずは嵐が最初に同意してくれたか、司をコイツ呼ばわり、あと私を王子様呼ばわりは尻がこそばゆくなるからやめさせないと。

「前から言っているがワシの忠誠は洛陽でも和でもなく保様と司様にのみ、

だから正しい正しくないではなくお二人に付き従うのみだ。」

嵐に続いてこれまた予想通り雷さんがこちらについたか。

「今回の計画は机上の空論にしか過ぎないんだけど、ただ洛陽への対策は必要だし、

僕は軍師として常に色々と今後の事を考えておくべきだし賛成するね。」

これは意外だ慎重な軍師勢から芍薬さんが賛成するとは、史実の田豊ならば堅実さを求めて反対されただろうな。

「ガキが必死なら、大人は助けその業を背負ってやるのが宿命だ。」
さため

なんでこう言い回しが厨二病患者臭いんだ、久しぶりの出番の日は。

「阿多が賛成なら、孟高や文優に賛成するっす。」

日が賛成したから乗っかってきたか、本当に分かりやすいな光は、ただ一番問題だよな、主体性がなく常に日におんぶでだっこでは。

「牡丹としては洛陽対策が必要なのは分かるし面白そうだから賛成したいな、」

でも、売官をさせることでその後何がしたいの？それが分からないと賛成できないな。」

牡丹さんがまあ条件付き賛成で。

当初の目論見よりも賛成の意見が多いですね、とは言いましても、結局は太守の母上と洛陽対策の責任者になるであろう薊さんが了承しないと。

では、何故、こんな事をするのか目的を明確にしましょう

「今回の目的の第一弾は涼州の安泰の為に益州を手に入れる事です、今の益州刺史である郤儉は無能で悪政により難民が涼州に流れて来

ています、これから世は更に乱れ漢王朝に対し大規模な農民一揆が起きるようになります。」

民は蛮族の襲来に怯え何も無かった辺境が、今や大陸で一番の治安の良さなんですから、

おかげでいつも言っていますが益州、司隸州からの賊徒や難民が。

「洛陽では抑える事は出来なくなり地方軍閥に泣きつく事になるのですから、

そして迎える群雄割拠の時代と、先が分かっているから我が国は先手を打つのです、

必要な地位を買い、あと洛陽から筆れるだけ筆るだけです。」

皆は将来の平和を考えるといても所詮は数年先の事、

こちらは未来知識有りますから10年、20年以上先を見えていますから。

「涼州、益州にまたがった国家を樹立する利点としては防衛のしやすさ、

そして大秦、貴霜、南蛮と言った国々の交易独占が出来るのですから。」

攻められにくく守りやすい、そして大陸の富の独占、それで確実に力を蓄えれば、

曹操や劉備なんかが立ち上がる前にこっちは大陸の大半を支配出来るでしょう。

「高祖や光武帝みたいに大陸まとめようなんてうぬぼれる気はありません、

ただ家族や仲間が無事で過ごせる新しい国を作りたいだけなんです

よ。」

巨大帝国を作りあげ歴史に名を残すんだというならば中国ごときだけでは無理ですね、アレクサンダー大王や元を越す広さを支配しないといけないんですから。

そんな無理をするならば、益州、涼州程度の土地で、司君と二人でこの世界をグチャグチャにかき回して楽しんで老衰で死ねれば満足です。

一和一

話を聞いた限り、保君と司君らしい計画的なようで実に無鉄砲な計画で、

ただ涼州が此処まで発展してきたのも二人のこの計画的で無鉄砲なおかげで。

それに親として保君達には、私達を踏み台にしより高く羽ばたいてほしい物です。

ならば私のとる道は一つしかないでしょう。

「分かりました。孟高、文優、貴方達がそこまで言うのなら計画を実行しなさい、どうせ貴方達の事ですから、私の了承など関係無く話を進めているんじゃないが。」

保君も司君も一瞬表情が曇りましたね、読まれていたと、それくらい分かっていますよ太守である前に親なんですから。

保君は本当に自慢の息子ですよ、子供っぽい笑顔を見せながら謀略を企て、

大人顔負けの策を立てながら子供っぽい詰めの甘さを見せたり、誰よりも強い武を持ちながら争う事を嫌ったり、こんな素敵な男の子になるなんて。

好き勝手やらせてもつというんな面を見せて貰いましょう、保君には。

「私達の名誉など気にしません、涼州の、いや、民の平和の為にやるのならば、

漢がどうなろうが知りません、将、銭、物資を貴方達に預けます徹底的にやりなさい。」

みんな驚いていますね、でも、太守としてこれほど面白そうな話はありません、

涼州は富ませ大きくしてくれたのですから、増やした彼らが使い道を決めるべきです。

「「御意!!」」

さて、保君達の計画は上手いきますかねえ、フッフ。

「では母上、善は急げと申しますので、司と共に部隊の引き継ぎなど済み次第、
そうですねえ七日後には洛陽に向けてたたせていただきます。」

えっ、保君は何を言っているんでしょうか・・・！？

「な、な、何を言っているんですか保君！！！」

司君が洛陽に行くのは分かりますが保君は此処隴西にいるんですよえ・・・。

「母上、洛陽に行くといっても半年もあれば戻れますので安心してください。」

保君が半年もいない生活なんて考えられません、そうやって私を捨ててしまうんですね。

「うううう、保くーーーーん、お願いだからお母さんを置いていかないでーーーー。」

「な、和、保も言っているじゃないか、これではたも・・・ドゴツ・・・うぐああ」

貴方までも保君と私を引きはがそうとするなんて・・・ウワーーン。

一紅一

司君が洛陽に向かわれる、保様も言っている半年以内に戻ると。

でも、董君雅様が泣かれる気持ちもわかります。

たかが半年されど半年“も”会えないなんて。

こんな乱れている世だと一騎当千の武を誇る司様でも賊に襲われるかもしれない、

無事に洛陽に着けないかもしれない、そんな事になってしまったら私は……。

いや、司様の武ならば、保様もいるのです賊に後れをとる事なんて無いですよ。

それよりも洛陽には私なんかよりも綺麗な人はたくさんいるでしょうし、

司様みたいな美男子ならば言いよる綺麗な女性はいくらでも。

私なんて美人でも何でもないし、司様だって私みたいな女よりも、どうせ私なんかすぐに司様の記憶からも忘れ去られてしまうに……。

嫌っ！！司様が他の人に取られるのも胸が張り裂けそうなほど辛いけど、

それ以上に司様に忘れ去られるなんてもっと嫌！そうなたら私は……。

ならば私は悔いを残したくない、司様に私の思いを伝えないと、ふられてもいい、私は誰よりもお慕いしている事を司様にお伝えせねば。

―百合―

まさか董君雅様も、淳于仲簡様も末期の別れみたいになってしまうなんて、
このままでは董孟高様も李文優様も洛陽に旅立てなくなってしまいきますわね。

しかたありません、董君雅様については董孟高様に頑張ってもらえばいいとしまして、
淳于仲簡様に関しては私が後押しして差し上げましょう。

「李文優様、お話しがございます。」

夜に李文優様の私室に伺わせていただきました。

「こんな夜分遅くにどうかされましたか百合さん？
貴女のような美人が来てくれるのなら、もっとめかしこんでおけばよかったね。」

李文優様はいつもこうやってお戯れになるのですから、悪い人です。

「夜分に参りましたのは、淳于仲簡様が軍務の事で至急お話ししたい事があると。」

お膳立ては私がして差し上げましょう、あとは淳于仲簡様の頑張りで次第で。

「こんな時間になんでしょいかねえ？まあ良いでしょう、執務室にいるのかな？」

「いえ、私室でお待ちになられていると申しておりました。」

軍務と言いながら夜分に私室で、さすがに李文優様も分かれたよう
うで。

「ふふ、内密な軍議なんでしょうね、百合さん伝言役ありがとうございます、
ざいます、
もし母さんが来たらよろしくお願いします、ではちょっと行ってき
ます。」

さあ、賽は投げられましたわよ、さてさて淳于仲簡様はどうなるの
でしょうかねえ？

明日の芍薬さんや牡丹さんとの話題にさせていただきますましよう・・・
ふふふ。

一光一

昨日の会議はなんか色々凄かったっす、頭悪い自分にはよく分から
なかったっすが、

孟高と文優の話で分かったのはこれから涼州は忙しくなるっす。

阿多と一緒に頑張るっす！！！！！！

ただ自分には何をすればいいか分からないっす、だから、朝早くから訓練するっす。

皆起きていないような時間から頑張るっす、人が見てない所で頑張る俺恰好良いつす。

錬兵場に行こうとしたら文優に偶然会ったっす、仲簡の部屋から出てきたッす。

悔しいっす、自分だけでなく文優も仲簡と秘密の訓練していたっす、でも、頑張っている人を認めないほど自分はケチな人間じゃないっす！！

ただ文優は失礼っす！自分を見たら「あっ！」と言って挨拶もしないでいなくなったっす、

多分自分と同じで隠れて頑張っているの见られて恥ずかしかったからに違いないっす！

普段から文優にいじわるされるっす、だからたまにはこっちがやり返してやるっす、

兵との訓練の際に「文優は仲簡と朝早くから訓練していたっす！」秘密ばらしてやったっす。

そしたら訓練中なのに急に兵達がやかましくなったっす、訓練なめているッす！

仲簡も隠れて頑張る姿ばれたの恥ずかしいからいなくなったっす！
！職場放棄っす！

でも皆酷いつす、寿成、文約そして阿多にも殴られたっす、いじめ

恰好悪いっす!!!

第二十三話、涼州の為に、未来の為に（後書き）

とりあえず司君と紅さんに何があったかは想像にお任せします、まあ、分かりきっているでしょうが。

光の空気の読めなさ、馬鹿さが気に行ってしまった、それと対照的な兄貴分の日の使い辛さ、作者として頑張ろう。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第二十四話、保と司、二人の愛の差（前書き）

前回第二十三話の続きと言いますか？後日談と言いましょるか？

保、司、紅、嵐の4人のお話を書いてみましたが、当初の予想よりかなり甘くなってしまったような。

とりあえず紅さんの件で司に痛い目にあってほしかったと。

第二十四話、保と司、二人の愛の差

「司」

「ふああわわわ、眠い」

握りこぶしがスポツと入りそうな位の大あくびをする保さん。

コトツ

「昨日はお疲れ様でした、大変だったようで。」

紅さんがテーブルに全員分のお茶を置きながら保さんに話し掛けている。

「ええ、大変でしたよー、本来なら昨日には洛陽に旅立っていたのに、

連日のろけまくりで騒動をでかくし続けた人がいて、おかげで引き継ぎはまだ終わらず、

私は母上を説得する時間がなく、昨晚やっと泣き止んでもらったんですから。」

あらっ、保さん、今日は随分トゲの有るお言葉で、それにしても酷い人がいるもので。

紅さんが申し訳なさそうな顔している、たしかに、お義母様発言で被害増したね。

「司くうくん、なんで君は他人事のようにしているのかな？」

あれっ、なんか話の矛先が何故だか私に向かってきたような？

「保さんが母さんを止めたり、和さんを説得したり大変だったな、と。」

ありのままに事実を伝えましょう、伝え足りないかもですが。

「君が（前回の）あの後、に、「二人共私の為に争わないで！！」なんて、

泣きながら余計な事を言ったりしなければよかったのに。」

ゴキゴキ

あれ？なんか保さんが拳を鳴らしながら近づいてきましたね。

「男二人が女を求めて争ったら、女は必ず言わないと駄目でしょ？」

それが形式美なんですから、皆がやりたがらないならば、俺がやる、俺がやる、俺がやるどうぞどうぞみたいにお約束はあるのですから。

「それはねえ司君、物語であるから盛り上がるのであって、お前は紅さんに何度も使ったチ○コがついている男だろうが！！」

いやまあたしかに僕は男ですが、三国志の英雄が女性と性別が反転した世界ですし。

「な、な、何度もって・・・あわわわわ。」

あつ、保さんの発言に紅さんが完全にパニックだ。

「保さん発言が下品です、大体何度もではなく、何十回もです！」

間違いはちゃんと訂正しないといけません。

「何十回って・・・グフツ」

あつ、紅さんが血を吐いて倒れた、一体誰が犯人なんだ、ヤスカ!?

「貴様が紅さん相手に一日何ラウンドやろうが知らないが、連日ハメ狂うのと場をかき回すばかりで仕事をキチンとしろ!!」

なんて失礼な暴言でしょうか、保さんは僕をいったいなんだと思っているんですか!?

「ハメ狂いとは何事か!僕を四六時中発情しているみたいじゃないか!

僕は仕事を終えた空いた時間に貪りあっているだけだ、訂正しろ!

!!」

たまには保さんにガツンと言ってやらないといけません。

「む、むさば・・・ブクブク」

先程血を吐いたと思ったら今度は口から泡吹いて気絶した紅さん、一体誰が犯人なんだ、犯人は俺が見つけてやるじっちゃんの名にかけて!

ちなみに父方のじっちゃんは実家の病院の院長で産婦人科医で、母方のじっちゃんはゼネコンの取締役でダムを作っていたが。

「貴様がいつ、そのチ○コを使おうが知らないが反省しろー!!」

遂に殴りかかってきた保さん、右ストレートか、甘い!

ビュッ! 空気を切り裂くような速さの保さんの拳をスウエーで避ける、

本当なら殴り返したいですが、紳士なので注意して反省を促しましょう。

「先程からチ○コ、チ○コと叫んで下品にも程があります保さんは!!」

嵐さんに悪いと思わないんですか! 今までチ○コ呼ばわりされていた彼女に。」

保さんの護衛で一緒にいる嵐さんへの配慮が足りないと教えてあげないと。

「きい、きい、貴様あああゝゝ、殺す！確実に殺す！！！」
俺の王子様から授かったこの蜻蛉切で全身膽にしてくれるは！」

ほらっ、チ○コ発言連発で嵐さんがキレたよ、って、何故僕の方に向かってくる？

ヒュッ ヒュッ ヒュッ ヒュッ

速い！初めて会った時より更に速くなった四連突きが、
ただ甘いっ！突きだけならばウィービングで狙いを定まらせず避ければいい。

僕はモハメド・アリのように、蝶の様に舞い！蜂の様に刺す！

「もし僕を倒すなんて夢を見ているのなら、さっさと目を覚まして僕に謝った方がいい」

偉大なるモハメド・アリの言葉を使わせていただきますよう。

スパーン、ガキーン

懐から取り出した鉄扇を高速で振り降ろし、槍の穂先を上から叩き落とす様にはじく。

「甘い、甘い、不〇家のぺ〇ちゃんが泣いて謝るくらい甘いぜ。」

モハメド・アリの名言よりも僕的にはこちらのほうがいいか、問題はぺ〇ちゃん通じるか？

僕に勝負を挑んできたのなら叩きのめして格の違いを教えないといけません。

「そうそう当たるものではない。」

ふっ、大佐が私に降臨してきたぞ、この物真似意外と似ているんだ、ちなみに池田秀一が水戸黄門出た時の回はちゃんと見ていましたよ。

「嵐さん、貴女では僕を倒す事は不可能です。」

無理な物は無理と教えてあげませんと、軍人に必要なのは實力差を認識する事ですから。

「なにおおおおお」

それでも嵐さんは攻めてきますねえ、おっ！更に速くなった！

突き、薙ぎ払い、袈裟掛け、足払い、先程よりも鋭くなっています見事です、頭に血が上っているのに攻撃の質が上がっているのですから。

シュツ　ヒュツ　ビューン

凄まじい速さで振るわれる突き、薙ぎなどすべて交していく

ウィービングで動きを絞らせず、サイドステップでかわし、
鉄扇で穂先をはじくバーリング

「先程より速い、それでも僕を倒すのは不可能です!!」

ここまで見せつけければ私の勝ちが決まったようなものです、負ける
訳ないですが。

「不可能とは、自らの力で世界を切り拓くことを放棄した臆病者の
言葉だ!」

ここで僕の大好きなモハメド・アリの言葉を聞くとは思いませんで
したよ。

「だが、不可能です!!」

ガシッ

あれっ!?! 何だろうか? 僕を後ろから羽交い締めに行っているこの腕
は?

「じゃあ、これならどうかな? 不可能なのかな司君!? イケッ! 嵐
さん!」

これはいけませんねえ……。

「臍物をブチ撒けろ！」

なんでこの時代に武装錬金なんだ！何故嵐さんは知っているんだ？
って、それどころは。

ザシユ　　ザシユ　　ブスツ　　ドブシユ

「ウギヤアアアーーーーー……」

いくらなんでも麻酔無しで滅多突きで腹切り割くのはやり過ぎだろ・
・・ぐふっ。

十分後

「幾らなんでも腹切り割くのはやり過ぎですよ、嵐さん！
腹ってのは腕と違って生えてこないんですからね！」

とりあえずやり過ぎな保さんと嵐さんに注意をする。

私が超回復能力を持っているのを知っているのは保さんだけなんですから。

「腕もはえてこねーよ、ニンジャマスターガラミたいな事言うな！」

おおっ、人のボケが分かってくれた懐かしのBASTARDから使ってみたんですが、

それにしてもハンターXハンターとどちらがキチンと終わるのか？

「キサマがいけないんだろうが！！首を跳ねられ四肢をバラされ、その肉片全てを長江にバラ撒かれ魚の餌にされないだけ感謝しろ。」

嵐さん、この人目が一切笑ってないね、本気だよ、僕一応涼州の軍師だよ？

「嵐さんは優しいなあ「えっ！？」私ならば決して殺さないで、全身全ての関節を曲げてはいけない方に曲げてあげたりするよ。」

絶対に死にますそれは私でも、保さん本気で殺る気だよ。

これは参りましたねえ、仕方ない。

「誠に申し訳御座いませんでした。」

土下座ですよ、DO☆GE☆ZA、これならば怒れる保さんでも。

「「本当にすまないという気持ちで胸がいっぱいなら・・・！どこであれ土下座ができる・・・！たとえそれが肉焦がし骨を焼く鉄板の上でも」」

保さんも嵐さんもハモってる！？まさかの第22話以来人生二度目

の焼き土下座か!!

やめて、それは！焼肉は好きだけど焼かれるのは嫌いなもの！

ネイチャージモンには負けるかもしれないが作者は肉を焼くのは上手なの、

でも、作者でもやって良い事と悪い事があるんだ、牛肉と違うんだよ!!

30分後

恥も外聞もなく涙と鼻水流して謝り続けても許してもらえませんでした、

大分前から気絶していた紅さんが復活して一緒に謝ったら許してもらえた。

ただ、何故だか紅さんが謝る時に少し引っ掛かた点が。

「司さんを許してあげて下さい“うちの主人が”すみませんでした」

アレッ!?もしかして私詰んだ?人類に逃げ場無し!?

「助けてえー!!ビアン・ゾルダーク博士にディバイン・クルセイダーズ!」

「王子様、コイツどうしたんだ？急に叫びだして。」

やはりスパロボは分からないか、三国志時代の人には。

「司様に何があったのですか？」

紅さん、あなたの発言が原因なの。

「馬鹿が自分の人生の逃げ道の無さを知って絶望しただけだよ、あと嵐さん、前々から言っているがお願いだから王子様と呼ぶのは止めてくれ。」

保さん、幾らなんでも酷いよ、傷心の友は慰めようよ……。

ククク、だが保さん、見ているがいい！どうせ保さんも近いうちに、嵐さんにハメて後々ハメられた！？と気づいた頃には手遅れになるがいい！

フハハハ、俺は一人では死なんぞ！

俺はもう駄目だ、だがキサマも道連れだー！！

あれっ！？そんないずれハメられる男、保さんが嵐さんに耳打ちしている、

嵐さん顔真っ赤にして首を横に振っているが、最後頷いていた。

嵐さんがこっちにやって来た、なんだ？項垂れる私に耳打ちを。

「ボソボソボソッ・・」

ぐふっ！？わ、わ、私の負けだ、完敗だ。

保さんに完敗するとは、ここまで差を見せつけられるとは、無念・・。

――嵐――

いつも俺の事を侮辱するコイツを、ここ一週間散々迷惑かけられたから、

怒った俺の王子様と一緒に徹底的に成敗してやったぞ。

これが俺と王子様との愛の共同作業って奴なんだな！

本当ならバラして長江の魚の餌だが、紅がうちの主人を許してくれと謝ってきた。

コイツは俺をからかうから嫌いだが紅は俺を馬鹿にしない良い奴だ。

折角、紅がコイツと婚約したのに結婚式前に俺の怒りで、

紅をカモメ？だとか言うのにはしたくないから王子様に言ったんだ。

「結婚前に紅をカモメにしたくない、紅も謝ってきたし許したい。」

俺の王子様に紅の事があるからと言ったら、よく分からなかったが、それを言うならヤモメ？ヤマメ？だ、と笑いながら言って許してあげていた。

流石俺の王子様だよ！コイツは“ふぐ対てんぷらの敵？”とか言う奴なのに許すなんて、物凄く器が大きくて、物凄く優しく、そして格好良くて素敵だ、コイツと段違いだ！

俺が王子様に初めて会った時も格好良かったもんな。

コイツに敵わず侮辱され散々だった俺に対し、王子様はスツと現れたと思ったらコイツを一撃で殴り飛ばして力の違いを見せていて。

俺はコイツに侮辱され負けた屈辱に耐えられず自害しようとして、喉を小刀で突こうとしたら王子様は怪我するのに刃を握り締め助けてくれた。

俺に泣き顔は似合わない、とか、俺が美人、とか、俺が死んだら悲しい、

なんて言ってくれて、あの瞬間、初対面なのに俺の王子様になってしまった。

その後、お礼を言おうとして王子様に話した時に、なんでそんなに優しいのか聞いたら、

「強くなければ生きていけない、優しくなれなければ生きていく資格がない」

好きな台詞なんだと照れながら言っていたが、こんな事をサラッと
言える、

俺より年下だけど優しくて、キザで、格好良すぎて、更に惚れてしまったんだ。

俺は馬鹿だから惚れた相手にどう思いを伝えればいいか分からなくて、

ただ、思い立ったが吉祥寺？って言うから、その日の夜に部屋に忍び込んで。

部屋に俺が入ってきて王子様驚いていたな。

惚れたって言ったがこんな男みたいな俺だから無理だと思ったら、王子様優しくて、

俺の事を抱き締め、接吻してきて、沢山愛してくれて、思いを受け取ってくれた。

でも、馬鹿な俺でも分かってる、俺の王子様は俺の物にはならない
って。

「俺は王子様にこんなに愛してもらえてとても幸せです、でも俺は王子様と違って馬鹿で、偉くないし、女房なんてなれないし、不釣り合いで、

だけど、俺は王子様を愛してます、だから女房にしてくれなんて言いません、

ただ王子様の護衛として俺を側にいさせてください。」

俺がこんなこと言ったら王子様は優しいから断れないのに、幾ら馬鹿な俺でも俺の発言が卑怯なのは分かる。

王子様は一瞬だけ寂しそうな顔した後、俺を抱き締めてくれながら。

「では嵐さんに命令します、護衛として必ず私の横にいてください、そのかわり常に誰よりも早く、私と共に勝利の美酒を味わって下さい。」

俺の王子様は子供なのに本当にキザです、そして、とても優しいです、

だから惚れた俺は死ぬまで王子様の命令を聞いて何処までも着いていきます。

なんで俺があの日を思い出して語っているんだって？

さっきコイツが謝った後、俺様と王子様を見て気持ち悪い笑いしていて、

それに俺が何となくムカついていたら王子様が耳元で言ってきた。

「嵐さん恥ずかしいと思いますが、あの晩寝台で私に言った事を司に伝えてもらえますか？」

そうすれば嵐さんが司を武とは違う形で打ち負かした事になりますから。」

凄く恥ずかしいし、馬鹿な俺にはどういう事なのか意味が分からなかったが、

天才な王子様が言うんだから、間違いないと思ってコイツの耳元で伝えましたよ。

そしたらコイツ「完敗だ」とか「家庭という監獄送りは僕だけか」よく分からないこと言っていた、とりあえず俺がトドメをさせたのは分かった。

「流石王子様、コイツくらいなら一瞬でいつでも退治出来るなんて。」

俺の王子様を褒めてあげたら、また照れ臭そうにしながら。

「嵐さん頼みなんですが、いつも言ってますが王子様と呼ぶのはやめてください、
なんか尻がむずがゆくなるというか落ち着かないので、呼び捨てで良いですよ。」

むう！俺にとっては完璧な王子様なのだから王子様と呼んでいるんだから。

「これだけは我儘言わせてもらいます。」

寝台でいつもやられているから、こういう時くらいはやり返してみ

ない
と。

第二十四話、保と司、二人の愛の差（後書き）

うん、何でこんな話になってしまったのかなあ。

愛とモハメド・アリ語録の回になってしまったな。

さて、保と司は洛陽に無事旅立てるのでしょうか？次回へ続く

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第二十五話、今回も紙芝居、こんな状態で洛陽に行ける？（前書き）

恋姫の二次創作ですから恋姫キャラを出さないといけません！
というわけで原作と比べてまだまだちびっ子ですが、
原作キャラ達を久しぶりに出してみました。

久しぶりにちびっ子軍団と紙芝居を書いてみました、
さて、今回の話はどんな感じになるでしょうか？

ちなみに前回出演時より二年たっているので恋姫達も成長し、
その成長を分かりやすくするため、台詞に漢字を使いました。
大変分かりづらい訳の分からない表現方法で、ごめんなさい。

第二十五話、今回も紙芝居、こんな状態で洛陽に行ける？

一保一

前に朝議で決まった為、私と司達が洛陽に最長で半年程行くことになりました。

司と紅さん、薊さん達による痴話喧嘩やら、私と離れる事を嫌がり泣く母上、それら騒動の為、一週間で引き継ぎ等準備を終え出発の予定が、遅れに遅れてます。

あの朝議から二週間経過、本当なら既に洛陽の拠点にいるはずなのですが・・・。

引き継ぎも終わり明日出発ということになり、今日はしばらく会えなくなる保育園のちびっ子連中と遊んであげよう。

少しの間会えなくてごめんねと謝りました。

「お兄様どうぞご無事で」

月は家族で元々知っていますから、簡単に納得してくれました。

「ぼ、僕は平気だけど、ゆ、ゆ、月が寂しがるから早く帰ってくるのよ。」

ツンデレ僕っ娘の詠ちゃんについて「寂しがってくれてありがとう」と言ったら殴られた。

「兄貴、あの馬と行くんだからすぐ帰ってこれるだろ。」

翠ちゃん、私と司はお仕事で半年近く行くと前から話してますよ、コンビに行くわけでないので洛陽についてすぐに戻るなんて出来ませんよ。

「かあー、ええのう洛陽っちゅうのはどんどころか行ってみたいはー。」

霞ちゃん、観光旅行ではないんですが、とはいえ皆を連れていってみたいです。

「馬鹿者！なんでそんな大事な事をいわない、早く帰ってこい。」

華雄ちゃん年下にそんな風に怒られたくないです、でも、ありがとうございます。

「早く帰ってくるのです、でないとちんきゅーきつくなのです！」

ねねちゃん蹴った後から言わないでください。

「たんぽぽにおみやげよろしく。」

蒲公英ちゃん遊びに行くんじゃないのになあ。

「もう会えない？・・・」

会えます、会えます、半年だけです、恋ちゃんの言い方だと末期の別れみたいです。

とりあえず色々あったがちびっ子達とのお別れの挨拶は無事？終わりました。

皆文句を言いながらも、私と司の出発を受け入れてくれました、彼女達に出来る限り寂しい思いをさせないためにいっぱい遊んであげました。

皆で鬼ごっこかして遊んだり、歌を歌ったり、勉強したりして、お昼になったので一緒にご飯を食べ、そして今は皆大好き紙芝居の時間です。

今日の紙芝居は私の前世での有名作品「桃太郎」にしました。

今回の紙芝居も不安で仕方ないです。

あの後描かれていませんが実は保育園の紙芝居で赤頭巾以来の久しぶりの司君作品で、私が暇ならよかったのですが引き継ぎで時間が無くやむなく司君が作る羽目に。

なんで不安で仕方ないのか、と言いますと少し見た限りなんです絵が普通なんです、前は原哲夫調だったのに日本昔話っぽく柔らかい絵になっているんです。

逆にそれに不安を覚えてしまいます、嵐の前の静けさと言いましょ
うか、

あと司君の作った今回の紙芝居の量がやけにボリューム感がある事
に疑問が。

ただまあお馴染みの桃太郎です、平気でしょう・・・たぶん。

話は普通に進んでおりま“した”過去形なのは皆さんの予想通り途
中から一気に。

だんだん絵のタッチがおかしくなってきました、日本昔話なのが
楳図かずお調に、
鬼退治した桃太郎が血まみれです、見た目も漂流教室とかみたいにな
っていつてます。

「桃太郎達は鬼達を退治し、鬼達の隠し持っていた宝を持ち帰った
のでした。」

なんともいえぬ不安感を漂わせている絵ですが内容はまだ普通です、
というか桃太郎は此処で終わるはずです、おしまいでないのが不安
です。

「桃太郎の奴凄いよな兄貴、鬼達を犬や雉とかだけで退治しちまう
んだから。」

翠の言うとおりですどう見ても戦闘力の無さそうな生き物ばかりで
良く勝てたと。

「活躍はすごいんだけど、僕はこの絵にはものすごく嫌な予感がするんだ。」

詠ちゃんいい読みです、お兄さんは不安で心臓が16ビートを打っています。

「鬼退治をし宝を持ち帰った桃太郎達は英雄です、凱旋となるかと思いきや、

街に戻ると街の空気が何やら不穏なのです、民の様子が変わなのです。

」

おいつ、やはりか！？何でこんな陰々滅滅とした瘴気が漂うような街並みなんだ！

「へうっ、街の皆さんに何かあったんですか心配ですお兄様。」

ああああっ、月は可愛いなああ、今すぐ抱き締めて撫で撫でしてあげたいです、

ただ、お兄さんは月の心配以上に、展開が心配です。

「喜び勇んで帰ってきた桃太郎は気づかなかったのです、

そうでしょう、桃太郎は良い事をしたのだと思っているのですから。

」

子供達に話す話くらいは夢があってもいいのに。

「えっ、どういふことなんだ？英雄の凱旋ではないのか！」

華雄ちゃん、君の言いたい事はよく分かる、だが、えっ、と言いたいの私だ。

「そうです鬼を退治した際の返り血にまみれた青年に犬に雉に猿といった異形の集団、しかも、その血まみれの青年の引く車には大量のあり得ないような金銀財宝が。」

確かにリアルに考えるとそうだけど、それは暗黙の了解で触れてはいけないだろう！

「あちゃー、そりや間違いなく不審者扱いやな、擢ちゃんこれからどうなるんや？」

霞ちゃん、お兄さんも全く分からないんだ、展開が怖くてこれ以上めくりたくないんだ。

「鬼達を退治して奪われた宝を取り戻しました”桃太郎は高らかに叫びました。”」

「ここにいりゆぞー、つてにゃのりはだいじ。」

うん、蒲公英ちゃんにとってはその名乗りはアイデンティティーみたいな物だもんね、

まだ小さいから舌が回ってなくて決め台詞が決まっていけないぞ

「しかし、桃太郎の言葉を聞いて内心喜ぶ街の者はいませんでした。」

もう嫌だ、展開が読めてしまった、司ならばこうするというのが確実に分かった。

「早く気付くのです、自分達の姿が異常な事に。」

ねねちゃんそうだね、でも、それ以上にこの話がイカれている事に気づいて。

「ほとんどの者は桃太郎の言葉信じる事が出来なかったのです、何故ならば、今まで色々な町や村が鬼達に襲われ、宝を奪われ、鬼達に抗おうとした者達は皆殺されていたのですから。」

まあ、鬼と戦ったらそうなるだろうなあ。

「・・・・・・・・死んじゃったの？」

あああつ、恋ちゃんそんなつぶらな目で此方を見ないで、こんな酷い作品を演じている私の心へのダメージが大きすぎるの。

「多くの者が死んでいったのに、たった一人の人間とわずかな動物の力だけで、鬼達に勝てる訳がない！、この男は嘘をついていると思われたのでした。」

街の人たちの気持ち分かるが、それはあかん、この展開はあきませ

ん!!

「なんでなんだよ、桃太郎をなんで皆信じてやらないんだよ!!」

翠ちゃん、貴女の純粋さはとても大事な宝物です、とはいえそこまでのめりこまないで、

まだ9歳とはいえ貴女の力で首を絞められたら下手したら死んでしまいますから。

「もちろん、桃太郎の言葉を信じて彼が鬼達を退治したのだと信じた町の者もいました、ただ、そのような者達も桃太郎を明るく迎えるたわけではございません。」

もう嫌だ、ギブアップしたい早く終わらせたい助けて。

「信じているのに明るく迎えられないってどういう事なのですかお兄様？」

月その答えは多分恐ろしく残酷だぞ、どういう事かすぐに分かっってしまったよ。

「彼らは怯えたのです、この桃太郎という青年達は鬼をも殺す事が出来る人間、

それは鬼よりも強い生き物、人の形をした妖怪の類ではないのか?と思われたからです。」

やはりそうか、というか怯えない方がおかしいよな。

「僕もそう思ってしまうかも、鬼を倒せるという事はもはや鬼以上のなにかと。」

ああああ、今回も手遅れだ、詠ちゃんが街の人間の不安に理解してしまった、

「僕の月になんて紙芝居を読んでいるの！」と怒って欲しかったのに。

「もしこの妖怪が暴れたら鬼にも勝てない人間が勝つ事が出来るのでしょうか？」

いや、それは非力な人間には無理なお話なのです。」

街の住人が不安に思う異形と言っている程の実力だろうが、話的に妖怪扱いは駄目え。

「街の人間側にねねや恋殿のような人間がいれば別なのです。」

たしかに、あの陳宮と呂布がついたら妖怪どころか何でも勝てるだろう。

「そして、またある者は鬼達の逆襲を恐れたのです、もし本当に鬼を退治していても、鬼達を根絶やしに出来ているのか？生き残りが彼がいなくなった後に襲うのでは？」

討ち漏らしとか怖い事を書くなよ、分かるよ実際族討伐やっている人間として。

「手負いは怖い……」

恋ちゃんの言うとおり、だから根絶やしが必要って違う！これは桃太郎なんだ！

「街に戻った桃太郎を街の住民達は笑顔で歓迎しました、偽りの仮面をかぶった姿で、

桃太郎の宣言を信じる者、桃太郎を頭のおかしい男と思った者達、鬼達の逆襲に怯える者色々な考えを持つ人間がいました、ただ皆偽りの笑顔でした。」

もう嫌だ、皆が作り笑いしている街なんて見たくない、というか話をやめてくれえ。

「へうう、皆が嘘をついているなんて悲しいですお兄様。」

そうだな月、嘘は必要な時もあるがつかない方がやはり良いよな、作られた物語何だがそれに心を痛める月の優しさに、お兄ちゃんは獣になりそうです。

「ただ一つ街の人間皆に共通した意識があるのでした、あの持ち帰った宝が欲しいと。」

これから桃太郎を殺して山分けする算段だろ、それしかないよこの展開は。

「兄貴、何でこんな欲深いんだこの街の人間は。」

優しくて純粋な翠ちゃん貴女には分からないでしょうが、業が深いんだよ人は。

「元々田舎で優しいおじいさんとおばあさんの三人で暮らし育った純朴な青年、そのような青年に街の人達の悪意を読み取る思慮深さなど無かったのです。」

昔話で意地悪じいさんとか以外でそんな能力持っていたら駄目ええ。

「擢ちゃん、人を信じるって難しいなあ。」

霞ちゃん8歳の娘が、そんな黄昏た様な表情で深い発言をしないで。

「そして桃太郎一行の前に身なりの良い街の代表者という者が現れこう言いました、

“ 貴方様の活躍のおかげで鬼は退治され私達は安心して暮らせる事が出来ます、

しかも宝を取り戻してくれたとは、感謝しても感謝しきれるものではありません。”

絶対に下心あるというか裏がある発言のふりじゃないかこれは。

「そうだろ、そうだろ英雄を湛えないとは何事だ！」

華雄ちゃん、街の人達は腹に一物あるときさっきから言っているですよ、

どうして罨だと疑えないの？ 本当にお兄さんは君の将来が不安です。

「鬼退治からお戻りになられお疲れでしょう今日は私の家で休んでください、

そして明日感謝の意を表す為街の者総出の大宴会を開かせていただきます。」と。」

あー、確実に血の惨劇が待っているよ、皆殺し確定じゃないか。

「ぐぬぬ、桃太郎早く気づくのです、このままでは危ないのですぞ！」

ねねちゃんは罨と気づいたか、というか罨以外の何物でもないが。

「家に招かれた桃太郎達はお風呂に入り、その後、その家が用意した食事を食べました、

冒険の疲れもあったのでしょう桃太郎も雉も猿も食事を少し口に付けただけで、

ほとんど食べずすぐに寝てしまいました。」

犬だけ名前が出てこないという事は気づいたという事だよな。

「いにゆだけよびやれていないからぶじにゃんだね。」

おおっ、さすが蒲公英ちゃんにいい読みだ！！ぶじにゃんだねで猫かと思っただぞ

「ただ、何故か犬だけは他の仲間と違い、食事の時から吠え続けて、
食事をとらないどころか皆の食事の邪魔をしようとしていたのです。
た。」

薬の匂いに気づいたんだろうなあ、って、俺何こんな話の考察をしているんだ。

「……セキトと一緒に賢い」

セキトは賢いよね、前世でコーギー飼っていたからつい昔を思い出してしまう、
ええ、現実から逃避していますよ、こんなひどい話やりたくないの
で。

「寝てしまった桃太郎達を起こそうと必死で吠える犬、ただ皆起きる
心配がありません、
そうしていると襖があきました、そこには家の者達皆が立っていました、
彼らの手には刀や槍が握られ、そして一斉に襲い掛かってきたので
した。」

ホラー映画でも何でもよくあるパターンだな、
とりあえずもう良いよこの話は、げっぷが出そうなくらいお腹一杯
だよ。

「兄貴助かるんだよな桃太郎達は、なあどうなるんだよ!!」

死ぬ、死ぬ、首が締まって死ぬ、桃太郎達だけでなく私が死にます

このままでは。

「なんと先程の食事とかは桃太郎達を殺そうとした家の者が用意した罠だったのです、

眠り薬の入った食事を食べてしまい桃太郎達は目覚める事ありません。」

助からないよなあ、いや司の話だ、いきなり変なキャラが出て来て、助けるとか偏頭痛がしてきそうな展開があるか？

「擢ちゃん、もうおしまいなんか？英雄として死なせてやれんのか？」

霞ちゃんの言うように軍人の死に方としては悲惨すぎる、ただそれ以上に昔話の展開としてこの話が悲惨過ぎる。

「鬼達を退治した英雄ですが薬で眠らされてしまえば赤子も同然、武器を持った家の者達に刀で切られ、槍で突かれ殺されてしまうのでした。」

絵がああ、絵がああ、楕図かずお調の絵では駄目だああ凄惨過ぎる！！！！！！

飛び散る血しぶき、槍に突き刺された体、千切れている手足、これは。

「へうほうほう」

ああああっ、月が顔を伏せてしまった今にも泣きだしそう、頭を撫

でて慰めないと。

紙芝居を中断して慰める、ただこれから先もひどいはず大丈夫か。

「唯一食事の中に含まれた眠り薬の臭いをかぎつけた犬、もう桃太郎は助からない、

このままでは自分も危険だと察して一目散で家から飛び出しました、元々きび団子程度での契約、これで殺されては割に合わないと必死で逃げます。」

原作のきび団子で犬を引き込むというのが理解できないが、それにしても犬も明らかに死亡フラグだよな、この逃げるのは。

「逃げるのか卑怯な残って戦え、犬には牙があり、爪があるではないか!!!」

華雄ちゃん貴女の猪武者度はノーベル賞物です、死んで花実が咲く物かですよ。

「しかし、犬は甘かったのです、家を出て助かったと思ったのもつかの間、

家の外は中以上に包丁や鎌を持った街の住人に囲まれていたのです。

鬼に勝てる実力があつたとはいえ、それは桃太郎と3匹の獣という隊だからであり、

犬一匹だけでは多勢に無勢。犬もまた刺され、斬られ死んでしまうのです。」

相変わらず絵があああ、犬のバラバラ死体酷過ぎる。

「殿もいなく、退路の確保も出来ていない、一人で逃走に無理があったのです。」

いやまあ、そうなんだけど戦場ではないからおとぎ話なんだけど。

「街の皆は事件の発覚を恐れ桃太郎達の死体を燃やし骨を砕き灰にし川に流すのでした、そして、それからゆっくりと桃太郎達の持ってきた宝を山分けしようとしました。」

今度は街の皆でバトルロワイヤルかい？

「………犬達の敵を討つ」

恋ちゃん行っちゃ駄目え、これはお話敵はいないから！

敵がいるとしたらこの話を作った司だけど、これはお話なの。

「街の皆はお互いがお互いを監視しあう日々でした、誰かの口からばれるのではないか、いつ誰かが桃太郎を殺った時のように宝の独占の為殺しに来るのでは？」と。」

ヴェルデイのレクイエムBGMにすべきか、バトルロワイヤルスタートだ。

「ううううう」

あああああああー、月が泣いている、俺も泣きたいが、可愛い月が泣いている！許さん司を殺す！護衛の嵐さんが慰めてくれる。

司にキレたが、ただ泣いている月も可愛い、はううお持ち帰りー！

「ゆ、月、大丈夫だよ、怖くないよ。」

詠ちゃんもいてくれてよかった、でも、そんな詠ちゃんも泣きそうな顔、

ごめんね月に詠ちゃん、あとで司はめるから。

部屋の隅にいる司を殺意のこもった眼でにらむ。

嵐さんに月と詠を慰めてもらう。

「きっかけは偶然発生した小火でした、だが疑心暗鬼になった街の人は興奮します、

“あいつが殺そうと火をつけたんだ” “いややったのはコイツだ”

もう手遅れです、

皆が皆を敵と思い、武器を取り合い老若男女問わず殺し合いが始まるのでした。」

展開通りだ、脳内BGM流れたよ、この絵にも慣れたよ、

でもこの紙芝居は受け入れられないよ、とりあえず司を殺す、月を泣かしたのだから。

「なんでこんな事になるんだよ、分からないよ兄貴」

第一次世界大戦は一発の銃弾で始まったように翠ちゃんきっかけは小さいんだよ、

って、真面目に語る事ではない、これは紙芝居なんだから。

「こうして一人の青年の正義感による行いから一つの街が滅びることになるとは、

人の世とはなんと儚いのでしょうか、人はなんと罪深いのでしょうか。おしまい」

てめええええええ司、なんだこの終わり方は最後にぶん投げやがったなああ！

紙芝居終わった後室内を見回ると皆泣きそうな顔になっている、うんいくら何でも凄惨過ぎるよ、今回は絵といい内容といい。

って、部屋の隅にいたはずの司がない！！！！！！

そこに丁原さんがおやつの乗ったお盆を持ってやってきたので司の行方を聞く。

「司君ならば先程至急視察の仕事が入ったといって出て行きましたよ。」

丁原さんありがとう、オリジナルキャラ紹介の際に紹介忘れてしまいい、

しかも、今回はじめての台詞で、しかもそれが一行と散々な扱いで。

あの野郎、月が泣きだした事で俺がブチ切れるの分かって逃げ出したな、

とりあえず今から行きますかマンハントに！！！！周辺にいる護衛兵達に伝える

「私の方天画戟と弓を用意しろ、兵達も武装準備出来次第出陣する、目標は李儒文優、とらえた者には金一千銭、生死は問わずだ、至急用意しろ！！！！！！」

さあ、司君敵は涼州兵すべてだぞ、大秦くらいまで逃げてみせろよ。

一琅？一

城で馬達の世話をしていると司君が息を切らせてやって来た。

凄く慌ててるし様子が変わだし話を聞いてみたの、

司君の紙芝居をやっていたら月ちゃんが泣きだしたから逃げたって。

うん、それは必死で逃げるね、私でも怒った保君に隴西から天水辺りに逃げるよ。

司君は「まずい、まずすぎる、月ちゃんがまさか泣くなんて、

保さんの怒りが収まるまで消えます大秦あたりにでも行ってきます。

」

大秦ってあの大秦？涼州から抜けて遙か遙か遠いあの西の端にあるという？

司君は蒲公英の婿になるから大秦に行くのは困っちゃうな、

しょうがない此処は琅？が保君の事を相手してあげるか。

司君、どうやら紅ちゃんに捕まったけど、あくまでも蒲公英が奥さ
んだから、
今回の件を貸しにして蒲公英と婚約してもらうことで貸しを返して
もらおうと。

「司君、流石に大秦は遠いよ、それなら琅？がなんとかするよ。」

普段の思慮深い司君と違って、今の司君ならあっさり引っ掛かるか
も。

「でも、怒れる保さんは怒れるバンダースナッチより危険ですよ！」

ば、ばんだー？なんだろう、なんか聞いたことない名前だけど怖そ
うな、

でも、可愛い蒲公英の結婚がかかっているから頑張ってみるの。

「司君が謝ったら許してもらえように琅？も頼んであげるよ。」

司君は保君に戦っても勝てないと怯えているけど戦わなければいい
のに、

普段誰よりも頭いいのに、こんな簡単な事が分からないなんて。

それに保君倒すと将来の翠ちゃんのお婿さんがなくなっちゃうか
ら、

蒲公英よりも翠の方が結婚に苦労しそうな気がして。

「保君と戦おうと思うから勝てないのが分かっていけないんだよ、

司君も悪気があってでなく、ついなんだよね、だから琅？も一緒に謝ってあげるよ。」

こう言われたら司君も琅？を頼るに違いないね、ニシシシ。

「そんな悪いですよ琅？さんは何も関係ないんですから、それに月ちゃんが関すると保さんは人が違うから許してくれるか。」

司君の言うこともよく分かるけど少しは友達を信じないとね。

「保君は大好きな月ちゃんが泣いたから怒ったけど、逃げたらより怒るよ、

でも、保君だってちゃんとごめんなさいって謝ったら許してくれるよ、

一緒に謝ってあげるから、司君も保君も琅？の大事な家族なんだから。」

「ろ、琅？さん、本当にありがとうございます、保さんにちゃんと謝ります、

たしかに逃げてしまったことでより怒っているでしょうが。」

司君も逃げるのやめたし、もう平気だね、じゃあ謝りに行かないかね。

そう思っていたら武装した保君の兵隊達がやって来たの。

「失礼します馬騰將軍、我々は李儒様を拘束するよう董擢將軍から指示が出ています、

馬騰將軍、李儒様の逃走を手伝いをされるなどということは・・・。」

司君はもう逃げないから平気なのに、それに逃走の手伝いの疑いつて、だからいつもと違って真面目な口調で少し怒気を含ませながら言うてあげたの。

「李將軍は逃げる事なく董將軍の元に出頭します、馬寿成がそれに付き添うのですが、貴方方は私や李將軍を疑うのですか。」

失礼しましたとおびえた表情をしながら兵隊達がどいていく。

ちょうどそこに方天画戟握りしめた保君がやってきたけど、これは司君が怯えるのも。

今の保君には琅？と司君二人がかりで襲いかかっても勝てるかどうか分からないの。

「誠に申し訳ございませんでした、月ちゃんを悲しませてしまい、そして、保さん達の手を煩わせた事深くお詫び申し上げます。」

態度だけではなく心底申し訳ないという思いのこもった土下座をした司君

「保君、司君も本当に悪い事をしたと分かって今謝っているの、それで、

今から保君と月ちゃんの所に謝りに行こうとしていたんだ、月ちゃんの事で怒るの分かるけど、琅？も謝るから許してあげてほしいの。」

怒っていた保君も琅？まで謝るとは思っていなかったらしく、
「わかった、では司、私ではなく月に泣かせた事を謝ってこい。」
と。

司君は保君の言葉を聞いてすぐに走って保育園の方に向かっていったの。

「司も逃げないでちゃんと謝ったから許してやろうと思いましたが、琅？さんが一緒に、琅？さんまで謝ってきたら許さないわけにはいきませんよ。」

保君は琅？が謝ってきた事を不思議に思っていたみたい。

「だって、保君も司君も琅？の大事な家族だから、家族は仲良くないかね。」

笑いながら保君に伝えてあげる。

「家族・・・、そうですね家族ですからねえ、いずれは・・・クク」

流石、保君、琅？の言いたい事すぐに分かってくれていた。

「司君は家族と琅？に言われて意味が分かっていたみたいだけれどね、
頭良いのにあーいった所が詰めが甘くなって、蒲公英の旦那さんに

なるんだから。」

司君、蒲公英との縁談はまだ早いなんて言ってたけど逃がさないからね。

「私は、司が琅？さんの家族になる事に反対しなかった事を証言します。」

保君が楽しそうに黒いオーラ撒き散らしながら笑って言っていたよ、謝った事で許したというけど、やはり保君許していなくて利用するなんて腹黒いなあ。

翠は馬鹿だから旦那さんには保君位賢くないとね、こちらも楽しみな旦那さんで。

第二十五話、今回も紙芝居、こんな状態で洛陽に行ける？（後書き）

うーん相変わらず紙芝居の時は筆が進むというか、
乗り乗りですぐに出来てしまうのが。

あと、司を紅さんに続き更に自由な独身生活から縁遠くしました。

とはいえ、紅さんに続き、将来楽しみな蒲公英ちゃんと婚約なんて、
ちくしょー司モゲロ！！！！

皆さんのご意見ご感想お待ちしております！

第二十六話、悪意の伝言ゲーム（前書き）

ドラマの三国志Three kingdomsを何度も見直していますが、

陳宮の死の瞬間に「ねねちゃんがー」と言っていた自分に愕然。

何か色々と戻れない位置に来てしまったのか？

と自分を見つめ直したい今日この頃

さて、遂に今回の話で保達は洛陽に向けて出発しました、
とはいえ私の思いつき行き当たりばったりなご都合主義、
洛陽に無事着けるのか作者ながら不安です。

第二十六話、悪意の伝言ゲーム

―保―

パカラッパカラッパカラッ

「待って・・・さーい！」

良い天気だねえ、今日も見事に日本晴れ？日本ではなく漢だから、漢晴れ？かんはれって言うのと頑張れって応援しているみたいだな？

「そこは大陸晴れでよろしいのではないかと。」

「おおっ、それナイス提案！ただ人の心を読まないでくれ司君。」

パカラッパカラッ

「だか・待っ・・・さー・・・！！」

先程から後ろが何か煩いのですが、どうしたのでしょうか？

チラリ

おおうつ、嵐さん達が必死の形相で土煙を巻き上げながら追っかけてきている。

「おね・・・から、いか・・・で、はや・・・ぎ・・・す。」

よく聞こえませんか、何を言っているんでしょうか？

「保さん多分、“御願いだから先にイカないで早過ぎる”らしいよ。」

っ、っ、司君、何とんでもないことを言っているんですか。

「っ、っ、っ、司くうううん、なな、な、な、何を、何をいいいい言っているのかよくききき聞こえなかったた・・・。」

司君がニヤニヤしながら叫ぶ。

「だから嵐さんが、保さん勝手に先にイクな早過ぎるって。」

なななな、なんですとー、嵐殿おー！

ショックで口調がねねちゃんみたいになってしまった。

絶望した！

ショックです、愛した女性に先にイクな！と罵られるなんて、しかも早いと言われるのも辛いが“早過ぎる！”なんてショックです！

流石に竿師として食っていけるなんて思っはいませんが、前世でそれなりに女性経験がありますから自信はあったのに。

それなのに、しかも、あれだけ愛し合い、相性がかなり良かった、そんな嵐さんに人前で早過ぎる先にイクな！と人前で罵られるなんて。

ここにいられません！、いやっ、ここにはなく皆と一緒にいられません。

あと、泣いていいよね！？

「うわ~~~~ん！！」

バカラッバカラッバカラッバカラッバカラッバカラッ

――司――

ここ最近散々でしたがやっと目的地である洛陽に向かって出発しました。

保さん、私の作戦計画者二人、洛陽での太守代理で母さん、母さん付き軍師百合さん、護衛で嵐さん、馬鹿一、二号に兵200名。

更に涼州域内をぎりぎりまで琅？さんに雷さんに紅さん達が、騎馬隊を中心に2万の兵を引き連れ大規模調練と見送りを兼ねて。

とにかく暇です途中で長安に寄ったりするつもりですが、

その長安にしても遠いのですから、私と保さんだけならば、
蹴輝と挟翼がいるので飛ばせば長安くらいすぐですが、他に人がい
るので。

暇ですよ、実に暇ですよ。

今後の計画やら打ち合わせしながら移動すればいいですが、
流石に兵隊引き連れていると聞かれては不味い内容がありますので。

なんか良い暇潰しはないでしょうかねえ？心からスツとするような。

それにしても保さんと私の愛馬はさすが元々原哲夫作品の馬、
やはり凄いですね、普通にのんびりパカパカ歩いているつもりが、
ふと気付いたら他の馬率いる人を引き離してしまうんですから。

根本的に馬の大きさが違うから仕方ないんでしょうが、
この時代サラブレッドはいなくポニーとかくらいの大きさですから。

三国志のドラマや映画とか見ると騎馬隊は格好良いですが、
実際は大人が乗ったら地面に足が着きそうな小型馬ばかりで。

軽トラとフェラーリ位、いや、原チャリとヴェイロン位？段違いで
すな。

段違いの速さというと作者は昔、ランボルギーニオーナーに、
憧れの車だから知識で知っていたが「このディアブロどれ程速い？」

と。

「なんであの時の俺はあんな不用意な質問をしてしまったんだ！？
300は」

と後に謎な言葉を助手席でブツブツと言いつづけていたとか。

って、何の話をしているんでしょうか僕はいったい？

保さんと無駄話をしていると後ろで嵐さんが叫んでいますね。

先程僕が考えていたようにどうやら僕達が先行しすぎている、と、
僕は耳がすごくいいからなのか？保さんは聞き取れていないよう。

優しい僕は保さんに嵐さんの言った事をそのまま伝えてあげましよう。

「保さん多分、“御願いだから先にイカないで早過ぎる”らしいよ。」

そのまま伝えてあげました僕って優しいなあ、イントネーションは違うかも。

「つ、つ、つ、司くうくうくん、なな、な、な、何を、
何をいいいい言っているのかよくききき聞こえなかったた。」

保さんが面白いほどに動揺しているよ、久しぶりに見たが。

よく聞こえなかったみたいですから、もう一度言っただけでしょう。

「だから嵐さんが、保さん勝手に先にイクな早過ぎる！って。」

僕は正直者なので嘘も誇張も全く言ってないですからねえ、
保さんがなにか勝手に勘違いしてしまったら仕方ないですがニヤリ。

あつ、保さんの様子が変わだぞ、よく観察してみよう。

プルプル震え始めたぞ、どうなるのかな？

「うわ~~~~ん！！」

うおっ、あの怖い物知らずな保さんが大泣きして、踰輝で逃げている
っちゃったよ。

保さんって僕ほどではないが昔からかなり遊び歩いてきたから、
結構な技術と女性に評判なのに知らないんだ、自信持てばいいのに。

遊び相手ではなくガチの交際相手に言われたらショックか、
こちらも保さんに恨みがありますからたまにはいいか。

一昨々日の晩の食事中に（前話第二十話後）に母さんや皆の前で、
「司君、蒲公英ちゃんと婚約おめでとう、めでたい！」と爆弾発言
した恨みを。

突然の発言と、何を言っているか分からないと固まっていると、
「琅？さんが司を家族と言ってたの否定せず嬉しそうにしてたやん、

前から琅？さんが言ってた蒲公英ちゃんと結婚決めたから家族なんでしょ。」

あの時の琅？さんの台詞を思い出し、気づいた頃には手遅れだった。

まさかそんなあり得ない、とカイジみたいにぐんにやりしたり、

「待て慌てるな、これは孔明の罠だ！」と叫んで慌てる僕を見ても、あの時は保さんは慰めるでもなくニヤニヤしながら耳元で。

「おめでとう李儒文優君、5歳の嫁を持つペド軍師誕生だね。」って。

確かに僕は転生したから精神年齢46歳のおっさんだが、

5歳の蒲公英ちゃんと一緒にいたらロリ野郎呼ばわりも仕方ないが、ロリ呼ばわりどころか根も葉も無いペド軍師呼ばわりなんて酷過ぎる。

「それを言ったら保さんだって9歳の翠ちゃんの婚約者のくせに！」やり返せたと思ったら保さんの方が一枚、いや、はるかに上手だった。

「翠ちゃんが将来大きくなって私と結婚が嫌でなければ喜んで妻として迎えます！」

と琅？さんに約束して書類作ったから、あつ、司君先に言っておくね、

母上にばらしても平気よ、書類作成は父上で、母上と琅？さんの同意で作られたから。」

な、な、なんだと、そこまで先を読んで行動していたのか保さんは。
だが、保さんの言葉に窮地からの脱出のヒントを見つけましたよ。

「蒲公英ちゃんが同意しないと、無理矢理なんて政略結婚は駄目です！」

これならと思ったが保さんと琅？さんの方が遥かに上手だった。

「たんぽぽは好きだから、おにいさまのおよめさんになってあげるね。」

ナ、ナ、ナンダト・・・！？

「たんぽぽはやさしいからおとこのかいしようも、りかいしているよ、

たんぽぽがいにおんながいてもゆるしてあげるから、にしし。」

な、な、な、なんて事を喋っているんだ蒲公英ちゃんは。

子供だと思って甘く見ていた、小悪魔だったんだった蒲公英ちゃん、しかも、琅？さんと保さんなんて悪知恵働く悪魔二人が入れ知恵してたら。

あの晩、私は血涙を流したね、母上がいつものようにきれるのではなく、

「紅さんと蒲公英ちゃんに優しくしてあげるのよ。」あの言葉はきいた。

ききすぎたよ、母さんまで説得しているって、どんな根回しの良さだよ。

今日の意地悪くらい許されるでしょう、あの日の僕からしたら。

この前の屈辱を思い返していたら保さんが遥か遠くに、速いなー、流石に踰輝でとばすと、あっという間に豆粒だよ、って、保さん、そっちはまずいそっちは益州！司隸州とは向きが違う。

これはいけません、至急どうにかしないと、急いで嵐さんの元に。

—嵐—

王子様とアイツの馬は羌族の自慢として送られた馬だけあり凄いが、もう少しおさえて歩いてもらわないと追い付くのがやつとで。

踰輝と挟翼が早歩きしただけで俺の馬は全力で追い掛けないといけないとは、

本気であの馬が走ったりしたらどれだけ速いんだろうか？

あと王子様が言うには馬の乗り方にも色々あるみたいで、

飛ばす時用とか乗り方を色々使い分けていたが、それで華麗に岩を飛び越えたりしながら宙を舞う用に走っていたり。

それで驚いていると、王子様が言うには、海の先にある東の国には、鹿が降りれるならいける！と蹄の形が鹿と馬は違うから無理なのに、断崖絶壁を騎馬部隊で駆け降り敵陣を奇襲した天才がいたと言っていた。

なんでも知っているんだな王子様は。

って、そんなことを考えていたら王子様とアイツの馬が独走している、

走っていないくてあれなんだから、待ってもらうように伝えないと。

「王子様速すぎます、抑えてください！」

向かい風もあるから叫んでも聞こえないか？でも叫ばないと。

「二人とも速い、待ってくれー！」

全然気付いてくれない。

「待ってくださいーい！！！」

走っても追いつかない叫んでも声が届いていない、だんだん懇願になってきた。

「お願いだから行かないで、はやすぎます！」

おっ、アイツが気付いたみたいだぞ、いつもムカつくが役に立ったぞ。

俺の王子様に話しかけている、馬の動きが止まったぞもう一回だ。

「お願いだから行かないで下さい、はやすぎます！」

今度も王子様にはよく聞こえていないみたいだが、アイツには聞こえたようで、

アイツが王子様に何か話しかけているのが見える、立ち止まってくれた。

って、俺の王子様が何か叫びながら変な方向に行っちまったぞ、って、ヤバイ誰かとめろー！！なんだあの速さは、追い付けないどころじゃ。

そしたらアイツがなんか急いでこっちに来たぞ。

「保さんが泣きながら暴走して益州に向かっている！
勝手に他州に兵が行くのはまずいから、そのまま行軍を。」

って、何があったんだー！？

「貴様が何かやったんだろ王子様がそんな暴走するわけないだろうが！」

アイツが珍しく申し訳なさそうに言ってきたが。

「嵐さんが保さんに、イクの早すぎって、からかった。」

言っている意味が分からんぞ、王子様の馬が走るの速いのが？

悩んでいると、異変を察知してやって来た琅？さんが。

「嵐ちゃんは鈍いんだから、司君は、保君が閨で下手くそって言ったの。」

何を言ってるんだ、琅？さんは。

「王子様に閨で愛してもらったが凄く気持ち良かったのに、それなのに王子様が下手くそって、って、俺は何を言ってるんだ！！！」

琅？さんがニヤニヤしながら、「へえ〜保君って可愛い顔してやるんだ。」

俺は何を口走っているんだ！これが“公明正大な罠”という奴だな。

「保さんをどうにかしないと！」

アイツがまともな事を言ってるのがムカつくが、今は仕方ない。

とりあえず部隊は州境まで進む予定通りの行軍を続けることにして、俺の馬では追いつけないから嫌だがアイツの馬に同乗して追っ掛けることに。

コイツの馬は俺の王子様の馬と双壁をなす馬だけあり速いです、コイツには本当に勿体無い程の名馬だと思ったよ。

コイツが涼州の軍師だから仕方無いが敵ならばすぐにでも、王子様から貰った蜻蛉切で串刺しにして馬を貰うんだが。

蹴輝の足跡追い掛けて行ってる最中になんで王子様が泣いたか、どういう意味なのかコイツに詳しく説明を聞いて理解したが、王子様の一大事だから我慢したが今すぐ何度も殺したくなった。

一刻くらい挟翼で飛ばしていたら崖っぷちに王子様がいた。

「来ないで、近付いたら此処から身を投げて死んでやる!!」

普段の格好良い王子様と違いすぎて頭が痛くなってきました。

「下手くそな俺なんか」「どうせ早いよ」「笑いに来たんだろ」「完全に人間不信とかって奴になってしまっている、どうすればいいんだ!？」

「崖に追い詰められて泣いている人間と追い掛けた人間、二時間ドラマのエンディング寸前だね、刑事役は蟹江敬三？平泉成？最後は聖母達のララバイで・・・ドゴツ、グブアッ」

とりあえず訳の分からない事を言う、この元凶はブツ飛ばす。

「私に近づかないで！！」

さっきからだ俺の王子様が完全に壊れている、ドーシテコウナッタ！？

まあ原因は今さっき俺に槍の石突きで殴られたコイツだが。

「王子様、危ないから此方に来てくれ。」

崖っぷち危ないから徐々に近付くように。

「嫌だ、近づくな。」

完全に愛してる王子様に敵とみなされているなんて、俺も泣きたい。

「コイツを信じたら駄目です、嘘ですよコイツが言うことは、俺馬鹿だし難しい事分からないが王子様に嘘はつかない。」

俺の王子様が少しこっちに近づいてきてくれた。

「僕は嘘はついていないのに、意味深な言い方しただけ。」

ザクッ

「うぎゃあああああー！ー！ー！ー！！！！！！！！」

手元にあった蜻蛉切でコイツを黙らす為脇腹を突く。

「やっぱり本当なんだ、早いつて下手くそって笑うんだ私を。」

ああー！ー！ー！、コイツのせいでせつかく上手くいったのに。

「さっきも言ったが俺は王子様に嘘は言わないです！！！！

それに下手くそって、王子様に聞で色々気持ち良くしてもらって、耳をかまれたり、うなじをくすぐられたり、いろんな所に口付してくれて。」

「あー！ー！、聞きたくない、友達や知り合いの聞での様子なんて、聞いてしまうと想像がついてしまうから嫌なんだああ・・・グフッ。」

コイツがうるさすぎるから石突きで顔面を突く、
それにしてもコイツさつきからあれだけやられてなんで無事なんだ。

この後も聞での王子様の事を正直に言って説得し続けてなんとかあったが疲れたよ。

でも、おかげで夜に王子の天幕で嘘でない事証明してあげることになり嬉しかったよ。

一光一

洛陽に向かう事になったっすけど、なんでいきなり大将の孟高がいなくなっただっす。

後で戻ってきたっす、やる気あるんすか。

涼州は自分と阿多が頑張らないと終わってしまうっす。

夜に孟高の天幕に抗議に行こうとしたっす、

天幕から？融が出て来て「殺すぞ！」脅されたっす、ちびっただっす。

？融も自分と同じように孟高に抗議しに行ってくれてたっす、
自分に手柄取られると思って怒ったに違いないっす、そこまで自分
ケチじゃないっす。

とりあえず涼州には自分と阿多だけでなく？融もいるということが
わかったっす。

一和一

キュピイイーーーーー

「なんか感じた、今、保君に危機が迫っている、いま保君の危機が。」

「和、何を言っているんだ、今は保達は2万の兵と共に行軍中でそんな危機なんて。」

なんでこの人は親なのに感じ取れないのでしょうか、でも娘の月ならば。

「月は分かるわよね？」

「へうっ、危機ではなくお兄様に良い事があったような気がしました。」

えっ？ 危機が訪れているはずなのに、いいことって……。

「今から私も保の後を追って出ます。」

こうなったら人任せに出来ません、私自ら保を守らないと。

ガシッ

「何を言っているんだ、太守が勝手に城を離れては。」

あの人に後ろから羽交い絞めにされてしまった。

「貴方離してー！ 保に危機が！ 保に危機がー！ー！！」

保君に危機が近付いているの、危機が近付いているのー！！！！

保LOVEな和に取っては（性的な）危機が迫っているで間違いないでしょうが、
とりあえず色々あったようですが良くも悪くも今日も涼州は平和なようです。

第二十六話、悪意の伝言ゲーム（後書き）

紅さんに嵐さんに、保君に、司君、お前らまとめて皆死んでしまえ、何ラブってやがるんだ、こっちはイラついているぞ！

と作者のくせにやさぐれてしまっております。

どうしてこんなラブな感じの話になってしまったのだろうか？？？？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第二十七話、欲しい者はどうやっても欲しい！（前書き）

なんか凄くまじめな回になってしまった、
自分の書いたものなのに違和感が。

とりあえず今回も都合主義満載ですので、どうぞ。

第二十七話、欲しい者はどうやっても欲しい！

一保一

前回（二十六話）のような騒動はあったが無事に長安に到着した一行、

大谷商会経由で取った宿で夕食を終え明日に備え休憩中。

コンコンコンコン

「ちゃんと四回のノック、司だね、どうした？」

司が入ってくる

「ノック？」

護衛という名目で相部屋となった嵐さんがノックについてきいてくる。

そうそう、余談ですが、後に私と嵐の相部屋を聞いた母上は血涙を流していたとか。

「ノックとは大秦とかより更に西の国の礼儀作法です、司が扉を四回叩いたことで、

室内の主に入室の許可を求めるのと自分が来ましたという合図になります。」

嵐さんが感心している、まあ、この時代ノックなんてありませんか

らね。

ノックについて話を続ける

「扉を四回叩くのが正式な作法、三回は恋人や夫婦がする私的な関係者の合図、

間違えて二回の方がいますが、それは廁が空いているか確認するノックです。」

前世で実家の会社の面接の際ノックと喫茶店に連れて行くとか見極めによく使ったな。

「夫婦や恋人は三回なのか、王子様、俺はさ、三回で良いか？」

照れながら聞いてくる嵐さん、この人めっちゃ可愛いんだけど！！！！

司がいなかったら即寝台に引き込んで夜通し楽しんで、夜明けのコーヒーを楽しみたいんだけど、ちっ、お邪魔虫め。

って、コーヒーが無いから夜明けのウーロン茶か、なんか締まらないな。

「保さん、人をお邪魔虫扱いしないでください、最近扱いが酷いですよ、

私がノックしたから盛り上がれそうなきっかけが出来たが、今は内密な話。」

司の言う内密な話という点で嵐さんが席を立つ

「いえ、これからを考えて、嵐さんにはいていただいた方がよいかと。」

司が引き留める。

「わざわざ夜に、内密な、でも、嵐さんがいた方が良く、どういう面白い事かな？」

司がそんな揃った厄介事の匂いのする話を持ってくるなんて期待してしまいます。

「ゴホン、長安周辺にいる人材で将来有望な人材いないか探っていましたか、

諜報部からの面白い情報が入りまして。」

諜報部からの情報ですか、それは貴重ですね。

「何れ程の信用出来る情報ですか？」

私と司二人だけの取り決めでこの後の言葉で情報源や質を確かめる。

「絶体です。」

情報源は絶体に信頼できる、二人だけの秘密である“太平要術の書”ですか。

「なるほど、それは大事ですね。」

ついニヤニヤ笑ってしまふ。

「本当に俺がいても良いのか？」

嵐さんは私に部屋にいて良いよと言われたが、
本当にいてよいのか明らかに戸惑っている模様

「いえ、嵐さんがいないと困るかもしれないので。」

最悪、結構な揉め事が起きるということですか。

「では、前置きはいいや本題を。」

話を進めましょう、久しぶりの人材確保です、これは楽しみです。

「此処、長安の今の主はどんな人物か御存じで？」

回りくどいですね。

「本当の主人ですか？表面上の周辺地域の領主である司隸校尉のことではなく、
実質この街の政治を取り仕切っている官宦の王謙はかなり愉快な方なようです。」

王謙は歴史上では当人は家柄の卑しい何進が縁戚関係作ろうとして

断ったから干されて、

息子の王粲は後に魏の政治家として活躍した人間だったはずだが。

ただ、こちらの王謙は世間的にバレてはいけない大変愉快的な性癖をお持ちのようで、

極度のサディストな性癖を普段は上手く隠しているようですが。

「洛陽では張讓達がいて出世争いに敗れ最高位大長秋までいけないからと、

長安に赴任してその時の悔しさを晴らすかのように好き勝手やっています、

最近は特に学のある女をいたぶる事が好きなようで、今回彼が奴隸商人から掘り出し物を。」

話している内容は最低なんだが楽しそうに語る司、その売られたという掘り出し物が余程の大物なんだな。

「司馬防の長子、司馬伯達です。」

司の口からとんでもない名前が出てきた。

「……………マジ!？」

あまりに予想外の大物の名前が出てきたから一瞬固まってしまった。

一族揃って有能な大物大物キターー!!!

涼州強化の為に司馬八達全て引き込み計画してましたが、

来ましたね、なんて幸運、まさにご都合主義、これぞ僥倖。

「善は急げと思いまして、お話を。」

なる程売買は決まっているが引き渡しはまだという事なのね、その前に私達が今日にも買い取りに行く。

「嵐さん、今から出掛けますよ、奴隷商から有能な人材を買いに行きます、揉め事になるかもしれないので武装を、ただ基本は話し合いでいきます。」

奴隷商なんて嵐さん的には許せないでしょうから釘をさしておかないと。

「分かった奴隷商人なんてむかつくから殺したいが、王子様が止めるというなら。」

すみません、ただ、いざとなったら大暴れしましょう。

「では、身元を隠す為にこれに着替えてください。」

何処にでもありそうな服に、その上から羽織る道士服風のフード付きコート、

問題といえますか気になったのは、一体何なのでしょうかこの蝶の形の仮面は？

なにに、司君自作の正体バレるのを防ぐ認識阻害能力保有したマ

スクですか、

神に頼んだのではなく露天で売られていた生地を加工！？嫌になります、この世界。

ただ、こんなマスクをしている知り合いがいたら正体を見破れないのではなく、

私にはそんな知り合いはいないと思い込んでいるだけなのでは？

コートとマスクをあとはかぶるだけの姿に着替え、目立ついつもの武器は持てないので、

と、司君が日本刀を渡してくる、気が利いています。

まさか、こんな所で長曾禰虎徹を渡されるとは。

「保さんにはこれも」なんか時代に不釣り合いなアタッシュケースを渡してきた。

こ、こ、これは司君……。

MARK23とMP5SD3はあきません！！神の店から持ってきましたね！！

三国志世界をぶち壊すから駄目だって。

銀行に籠った強盗退治に行くSWATじゃないんですから、見つからなければ良いという意味ではありません。

そのステルススーツも駄目です、それゴルゴ13で出てきた奴ですよねえ！？

二人で転生する時に三国志の時代に無い物は持ち込むのは止めよう、と話したじゃないですか、そんなコンビで煙草買う位気楽に破るのは。

まあ折角司君が用意してくれたので、気持ちを受け取って装備させていただきましょう、

どうせ今回の件では使いませんし、終わったらすぐに返しますので。

作戦としては私と嵐さんの二人で中に入り商談、いざとなった時は待機している司君が退路の確保と。

それならば司君は道士服ではなく夜間用の迷彩にすればいいような。

「そこは仲間意識を高めるためです。」

さいですか、気をつけてください。

「では、嵐さん、とりあえず奴隷商人の所まで行きましょう。」

—司—

一般人はまず近づかないであろう長安の貧民街の一角に到着しましたが、

いやあ、此処はヤバいにおいがぷんぷんしていますねえ。

まあ、此処に揉め事を持ち込むとかしないのであれば、貧民街の人達は生きるのに必死で他人を気にしませんが。

さて、保さんと嵐さんが奴隷商人の建物に入っていききましたね、では、私は周辺の様子確認をしたりしますか。

うーん、暇です、あれから四半刻位たちましたが何も起きなそう
です、

まあ、その方が平和で良い事なんですが。

本当は考え事なんか良くないんですが、少し暇つぶしをしましょう
それにしましても太平要術の書はありがたいですね、望めばその答
えが分かるのが、
まあ今の上司に不満ある人とか涼州に来たら使えそうな人探すくら
いにしか使いませんが。

今回の長安の奴隷商人が司馬朗を捕まえていたのには驚かされまし
たよ、

司馬八達全員を口説き落として涼州に引き込む予定でしたが有り難
いことで。

私が計画して誘拐したわけではないですからいいんですが、
流石に自分がいつ実行に移した？とかつい自分を疑ってしまいまし

たよ。

マッチポンプは戦争以外ではやらないつもりなので、僕は誘拐はしませんから、
だから太平要術の書に出たリストを見た時は見間違えたかと思いましたよ。

あつ、そうそう、リストチェックの際に張角達を見つけました、旅芸人一座のガキでした、
当分先でしょうが、今後涼州に来た時に身柄を拐おうと企んでいます。

それにしても僕も保さんも真面目に働き過ぎですよ、涼州の為に働き、
この大陸の平和の為に黄巾党やら群雄割拠を何とかしようとするんですから。

どれだけの正義の味方、英雄なんだと、曹操、劉備、孫権なんか相手にならないですよ。

今日もこれから極秘裏に捕まった人間を助けに行くなんて、働き過ぎですよ、

労働基準監督署があったら助けてヘルプミーと言ってもよさそうなの。

おおっと、いけませんね、こんな素敵なアイテム手元にあると、
ついつい、本筋に関係無い事を考えてしまったりしてしまうのが。

さて、もうそろそろ商談も終わるでしょうし真剣に待機していますか、
保さんならば上手くやってくれるでしょうし、私の出番はないでしょう。

ただ、世の中絶対はありませんし、戦いになったらいつそ名乗り上げましょうかね？

「愛ある限り戦いましょう。命、燃え尽きるまで。美少女仮面！ポワトリン！」

うん、これはいけませんねえ、どうしましょうか、まあいいや。

「動きありそうだぞ。」

「変な感じっす」

「そうですか、では、二人ともよろしく願いしますよ、偽名を名乗るんですよ。」

保さん達も知らない伏兵も用意しておきましたし、有事でもなんとかなるでしょう。

一嵐一

アイツがまた変な話を持ってきた、ただ今回は救出作戦だと、

アイツにしてはまともだ、ただ、戦うのではなく買い取るというのが。

王子様が言うのも分かる、長安で揉め事は起こせないというのは、分かりたくはないが王子様が言うならば我慢するしかない。

それにしてもこの蝶の仮面はなんなんだ？正体がばれないというのが実に胡散臭い！

ただ試してみたら本当らしかった、部屋に王子様とアイツがいたはずなんだが、ふと気付くと俺の前に、アイツと蝶の仮面をした怪しい男がいた、誰だこいつは？

しかも、ムカつく事に、俺の大事な王子様の声そっくりにしゃべる偽物だったから、つい槍で突いてしまいそうになってしまった、仮面外したら王子様だった、凄い。

とりあえずこの仮面が凄い事は分かった、夜で人が街にほとんどいないのも良い、だが、本当に身内に分らないのだろうか、不安だ。

不安だ、奴隷商人の屋敷に入ったが、この取引が上手くいくか不安だ、

俺や王子様ならば余裕で脱出できるだろうが、騒ぎを起こさないようにするのが。

この嫌らしい笑みをしたデブな商人が変な事しなきゃいいが、周辺にいる気配だけで5人、この建物に入ってから感じた気配で30人はいるな敵が。

30人程度ならば俺一人で皆殺しに出来るが王子様から貰った武器の蜻蛉切でないのが、武器で身元が割れないようにと柳刃刀を渡されたが慣れてないから不安だ。

司馬なんとか言う奴は奥にいたみたいで、奥の部屋見せてもらうが、王子様と同じくらいの歳の子が汚い部屋の中で鎖に繋がれていた、許せない。

我慢だ、我慢、今は大人しくしないと。

うん？王子様が交渉しているが嫌な雰囲気、王子様ヤバイぞ！！

一司馬朗一

お父さんの紹介で宮中で働く事になり毎日休みなく働かないといけないで辛かったが、この前久しぶりの休みを貰えたから洛陽の街で買い物していたんだけど。

気づいたら夜で家に急いで帰らないといけないと思ったけど、

家まで遠いから近道しようと裏道通ったのが失敗だった。

失敗なんて言葉で済まないからこんな所にいる羽目になっちゃったんだけど。

怪しい5人組が「お嬢ちゃん遊ぼうぜ」なんて絡んできたから無視したが、

囲まれてしまって、知識には自信あるが体力がからつきしだからあつさり捕まって。

犯されて殺されちゃうんだ、とか覚悟していたら、
髭生やした頭っぽいのが「殺すより上玉だし売った方が良いな」つて。

あんな汚らしい奴等に犯される心配はなくなったのは助かったが、
奴隷商人に売られて長安まで送られるなんて。

捕まってから二週間以上たつ昨日変な仮面をかぶった奴と太った奴隷商が来た。

私の顔を見た後仮面をかぶった奴がこの牢屋から出て行った、奴隷商が

「あのお方はお前の正体を知って気に行ったと買っていかれたぞ、よかったな。」

最悪だ、あのお方とかいう仮面の奴、顔隠していたけど洛陽で見た事ある、

たしか、今長安で領主気取りで偉そうにしている王謙とかいう宦官

だ。

去勢されている宦官が俺なんか手に入れてどうするんだろうか？
って、こんなこと考えても仕方ないんだ、明日には王謙に渡される
って。

何度も死のうと思ったが怖くて死ねなかった、でも、いざとなった
ら。

そんな事を考えていたら、また牢屋にあの男と蝶の仮面した二人組
がやってきた。

一保一

前世の日本で生きていたら決して会う事はなかったんだろうな奴隷
商人なんて、

この時代でも今回みたいな事はなければ会う事はないんだろうが。

建物に入ると、歳の頃なら40過ぎた堅気ではない雰囲気したデブ
がやってきた。

見せ金で袋に入った金を見せたら、すぐに下卑た笑みをしやがった。

「私を選んでいただけのなんてお客様お目が高い、司隸州で一番の
奴隷商人ですから、

大きな声で言えませんが洛陽や長安でお偉方で当方を贖肩してくれ
る方も多数おりました。」

目は笑っていないし信用は出来ない、ただ金の面で折り合いがつけば、喜んで自分の親すら売ってくれるだろう、今回に関してはありがたいはある。

「女が欲しい、私の手元に置いておこうと思ってな。」

まずはラインナップを見せて貰う。

ろくでもないな、分かっちゃいたが、壊れている女だけで5人はいる、

嵐さんなんか我慢しているが怒りを隠し切れていない、分かるが抑えてくれ。

「俺をなめているのか！こんな女が欲しければ娼館に行くは！」

少し怒気を含め、腰の刀を抜くそぶりをしてみせる。

「滅相もございません失礼いたしました、こちらには色々な女がおりますが、

お客様は具体的にどういった女性を、ご期待に添えられると思いますか？」

安心しろ、お前さんは私の期待に添えられるのは分かっているんだよ。

「歳の頃なら15、6歳くらい、まだ男を知らない上玉をよこせ、聞いているぞ洛陽から連れてきた娘がいるだろ、あれを見せろ。」

具体的に知っている事に男は驚いている、既に王謙に売却決まっているから、

この話をどうやって断ろうか悩んでいるようだな。

奴隷商人なんてゴミだが、一度売った物を二度売りしたりしない、そういう点では商人としては信用出来るのだろうか。

「金ならあるぞ忘れたのか・・・。」

先程見せた金をデブに見せる、嵐さんに持たせた鞆の中にもまだ金があるように。

本当は金の入った袋これと併せて二つしかないんだよね、

とはいえ、この二袋であわせて金一千銭とんでもない金額ですよ。

董卓が曹操に暗殺されかけて怒って賭けた賞金と同じなんですから。

「分かりました、どうぞこちらです。」

屋敷奥の牢屋に案内される、牢屋の中には両足を鎖に繋がれた少女が此方を見ている。

「楚漢戦争期の十八王の一人である殷王司馬？の十二世孫に当たる司馬伯達だな？」

俺が正体を言い当てるとデブは驚き、娘はこちらを睨んできた、間違いないようだ。

「身元を当てられ驚くならまだしも、睨んでくる気概実に気に入った、この娘を買おう。」

さて、此処で金を払っておしまいです。

「娘の値段は金五百銭でございます。」

すさまじく吹っつけたな下手な郡の半年分だぞ、まあ足りるが。

「あとほかにですね、この娘は買い手が決まっております買主の方には娘は自害したと伝えます、

そのためお詫びであと最低でも買値の倍金一千銭を払わないと。」

な、な、なんと、合計で金千五百銭かよ、まずい足りない。

「私どもの商売は信用第一です、お詫びするとなったらそれ相応の慰謝料を払わねば、お客様は手持ちがあるようですのでこの価格でしたならば。」

実は一千しか持ってませんでした、他にもあるよといったお金ははったりでした、

とはいかないよなあ、さてどうするか悪知恵を。

「それにしても謎なんですよ？この娘の身元は私とあのお方しか

知らないのですから、
うちの部下共すら知らない身元をなんで貴方様は知っているのかと
お尋ねしたいのですが。」

まずいね、うん、武器持ったコイツの部下が武器持って三人も入っ
てきやがった、
本人確認する時に調子に乗り過ぎたね、まいったねえ、こうなった
ら先手必勝。

縮地で間合いを一気に詰め、デブの左後ろに立っていた男に長曾禰
虎徹で袈裟斬り。

まずは武器を持っている後から入ってきた部下から始末を。

「へっ……。」

デブが驚き間抜けな声を上げる、まあこっちが一瞬で間合いを詰め
て、
牢屋に入ってきた部下を一瞬で斬ったんですから驚くのも仕方ない
か。

俺の動きを見て嵐さんも普段使う蜻蛉切とは違う柳刃刀だが、
デブの右後ろに立っている一人の男を斬り伏せた。

よそ見している暇はないもう一人の武器を持った男を横胴で斬り始
末する。

とりあえずこの牢屋にいる武器を持った奴は全員殺したな。

チャキツ

長曾禰虎徹の切っ先をデブの首筋にあてる。

「さあどうする？ 一か八かの賭けで此处で助けを呼んで俺とこいつを殺すか？

娘は自害したという事にしてこの金を受け取り何も無かった事にする、好きな方を選ぶ。」

まあ、答えは一つしかないんですがね、YESか？ ハイか？ みたいな質問ですが。

「お、・・・それでは!？」

嵐さん私のことを王子と呼びそうになりましたが止めましたね、驚かせないで下さいよ、

こんな下種を生かしておく必要性はないですからねえ、怒りも分かれますが。

「わわわわ分かりました」

デブがゆっくりと懷から司馬朗の足かせの鍵を取り出す、多分コイツちびってるね。

「嵐さんコイツを任せた。」

そう言ってデブから受け取った鍵で少女の足かせを外す。

「君を助けに来た、今はまだ名乗れないが勘弁してくれ。」

少女を見ると驚いて呆けている、仕方ないですかね。

牢屋に閉じ込められていたら客が来て自分が売られると商談になつて、

しかも今度はそこで刃傷沙汰になり一瞬で三人が殺されるなんて流れじゃ。

「もしもーし、もしもーしーしーし」

返事が無いただの屍のようだ、いや死んではないか、とはいえ何だろう、

驚きのあまり瞳孔開いていないか？それを世間では死んでいるというか。

って、あかーん、って、良かった息をしている。

外が騒がしいようです、司達が突入してきたのかな？

警戒しておきますが問題が無いようなら彼女を連れて帰りましょう。

ドタドタドタ、誰かがこっちに向かって走ってくる、武器を構える。

「大丈夫か？フェイスマン、エンジェル。」

司くん、なんで君は敵のいる屋敷に突撃してきて名前で呼べないからとはいえ仲間をフェイスマンとエンジェル呼ばわりなんだ？

嵐さんがいきなり出てきた司に混乱しているよ。

「では、お前はハンニバルなのか？」

特攻野郎Aチームは嫌いではないが少し乗った野郎、本当は頭が痛い。

「いや俺はハウリングマッド、今庭ではハンニバルとB・Aが戦っている。」

日本語吹き替え版ではなく原作での呼び名かよ、ハウリングマッドって何人が分かる？

せめてクレイジーモンキーといえ日本人の為に。

って、ハンニバルとB・Aって誰だ？

「とりあえずリンチ大佐は捕えたんだな？」

普段人の心を読んでコメントとするくせに今回は無視で、しかも特攻野郎Aチームネタを続けるか、何でこんなにこだわるんだ。

「とりあえず人質は救出、ターゲットは確保した、さてこれからどうするよ。」

良い笑顔したぞ司が、たいていらくでもない事なんだよな。

プシュプシュツ

くぐもった音が連続して響く、デブの胸が真っ赤に血で染まる。

M P 5 S D 3で奴隷商を射殺する司

「邪魔者は消えました奴隷たちは全員大谷商会にいったん避難させましょう、

こういう時の為に店は極秘裏に裏門を開けさせております。」

相変わらず用意が良い事で、って、なんか忘れているような？

「コイツの言う通りやるとして、捕まった人連れて逃げられるのか捕まらないか？」

嵐さんの言うとおりで何処まで考えてあるのかな？

「あつ、途中で見つけた金がありますので、陽動部隊で僕がこれを街にばら撒きましょう、

こんな時間ですがここの人達は必死で金集めに夢中になりますよ、後は油と蝋燭と。」

O K O K、燃やすのね。

「保さんには前に教えた、油に船浮かべる時限装置で此処が燃えるようにしてください、

それでハンニバルとB。Aが引き連れてきた小隊長達と共に女を避難させて。」

本当に良くやるよコイツは俺に隠して部隊動かしたり、準備時間が無い急ぎよな作戦を何とか出来るようにするんだから。

Aチームにやけに拘るのだけは理解できないが。

とりあえず目標達成しました撤退するぞ、派手に燃えるように発火装置を仕掛けましょう。

あつ、大事な事を思い出した、虎徹を帯びているのなら「今宵の虎徹は血に餓えている」

この決め台詞を言うのを忘れていたんだな、しまった。

一日、光

「阿、……、ハンニなんとかは何人っすか、自分は9人っす」

「11名だ」

「先行ったハウリンなんとかが3人だから、もうすぐで終わるっす。」

「そうか」

「敵を斬りまくっているッす、でも、見せ場が無いような気がする

っす」

「そうだな。」

結局保にハンニバル、B・Aの正体が二人だと気づかれることなく、しかも、二人の予想通り殺陣などがあるわけではなく見せ場は特にないまま終わるのだった。

一和一

キュピーーーーーン

今日も来ました、長安の方角から何かを感じました！

保君を狙う敵が増えたような気がしました、前に保が言っていました、“イベントでフラグが立つ”とかいうのですね“イベント”とかいうのがあったんですね。

では、今日こそ

「長安にいる董孟高將軍に危機が迫っているようです、確認の為太守である私自ら長安に向かい対処します。」

私が宣言すると玉座の間が騒然となり、皆が一斉に立ちふさがってくるなんて。

「おいつ、和を止めろ、保様、司様に顔見せできなくなるぞ！」

「牡丹じゃ、和ちゃん止めるのは無理だよー」

「お前、ほら月も止めているん・・・ヘブシヤアアアアア」

「へうとうう、お父様が・・・。」

「今日も涼州は平和です・・・。」

第二十七話、欲しい者はどうやっても欲しい！（後書き）

とりあえず相変わらずオリジナルキャラだらけで、恋姫原作キャラがほとんど出てこない話です、それなのに司馬朗なんて出してしまうなんて。

桂花に「馬鹿なの、死ぬの」くらい罵られてしまいそう。

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第二十八話、司馬伯達調略作戦（前書き）

キャラの性格はほぼそのまんまで私や友人を出したらどうなるか、そんなことを考えながらホテルニューオー○二でお茶していたあの日。

まさか、もうすぐ三十話というところまで書くことになるとは。

ちなみに主人公の名字大谷はホテルニューオー○二から、司の上尾は打ち合わせ相手が上尾から来た人だったから、まんまです。

さて、今日のお話も皆さんからしたら半端でしょうが、よろしくおねがいします。

第二十八話、司馬伯達調略作戦

―保―

どうしてこうなった？ いや当然なのか？

「被告、董孟高、李文優、二人共申し開きはありますか？」

薊さんが全く笑っていない、いや笑う要素無いんだが。

はい、意義なんか有りません、言える訳ありません。

こうなったら弁護人の百合さんに期待するしかない。

「今回の作戦は太守代理である李肅様に極秘で行われたのは問題ですが、

弁護人としては今回司馬伯達様の救出という緊急性、また董孟高様達が望むべき戦闘でなく、あくまでも自己防衛だった点を。」

よしいいぞ、百合さん、そこだイケっ！！

「更に死傷者や金銭的な面で涼州軍への被害が皆無という点、しかも、長安の街では事件は仲間割れのせいと噂されており、また、救出された司馬伯達様当人からも寛大な処置をと。」

この弁護士優秀すぎるぞ、いいぞー、行け行け百合さん、これならば無罪は無理でも情状酌量で執行猶予は確定だ！

「検察側の意見はありますか？」

よし検事は誰だ？ボンクラだ勝てるぞ、勝った第三部完だ！

「検事の李？っす、孟高と文優の悪い所を言えばいいっすか？」

これは絶対に勝つ、こんな裁判制度分かっていないポンコツ相手なら。

「あん時急いで逃げるの分かったっすが、燃やさなくても平気だったっす。」

ヤバイ馬鹿がまともな事を言っている。

あの火事は逃げる際の陽動だから仕方ないやん、って、駄目やね、流石に派手に燃やしすぎた長安の貧民街の半分焼失したし。

幸いなことに死者0だったのは不幸中の幸いです、書類上いる人間が無事で無戸籍の人間が死んだなんて落ちはないよな？

中国ならば普通にあり得てしまいそうで怖っ。

「説明無しでいきなり自分や亜多、小隊長を呼び出して戦闘は無茶です。」

むう、緊急だから仕方ないんだって。

「一番酷いのは自分や亜多頑張ったのに気づいてなかったす、出番が全然無いなんて酷いっす、一番の激戦地だったす。」

そんなメタな理由が許されるのか？文句は作者にだろ。

「頑張ったんですね、日さんも光さんも・・・ウウツ。」

あれっ！？薊さんが泣いているような？って、そんなふざけた理由で有罪は・・・。

「判決を下します、被告董孟高、李文優の二人は死刑！」

そんな理不尽なーーーー！！！！！！！！

「という夢を見たんだが、保さん。」

夢の話かよ！

「司君、薊さん達の取り調べを受けている最中に何でそんな余裕な

の？」

「ケセラセラ？」

なるようになるさって、そういう問題ではないような？

取り調べくらいは真面目に受けようよ、司君。

数刻後

とりあえず、前回は奴隷商人との取引のつもりでしたが・・・。

「ついうっかり？ 気づいたらなんですけど奴隷商人一味を37564、長安の一角を焼け野原にしちゃった、てへっ、うっかり、うっかり。」

取り調べで、それで済まそうとする司君の肝の太さにびびられましたよ、

私的な部隊の利用やら暴走と言われても仕方ないのにあれは。

逃げる為にですが奴隷商人の金を奪ってばらまいて火をつけた、鬼平いたらおしまいだったよな、火付けに押し込みって一発アウトだよ。

あと、司の野郎、三国志世界を壊さないようにするため、自分達が開発した以外は未来兵器使用禁止って約束していたのに。

あっさり前回奴隷商人射殺しているし、それは駄目だろって注意したら、

「人が作った規則ならば、それは押し付けのエゴにしかすぎない！」
良い事を言っているみたいな感じでドヤ顔していたが、
その決まりを作ったのは私であり司くん本人なんだが！？

まあ、そんな事言ったら、「僕が作ったなら僕が破って何が悪い！」
多分、こんな感じで普通に呼吸するようにコメントしてくるよ。

ちなみに薊さん、百合さんの取り調べは司馬朗さんが寝込んでいるので、

当人が回復するまでは取り調べはストップとなりました。

とりあえずその司馬朗さんは救助した後ここ三日間ずっと寝たままです、

たまに魘されて叫んでいたりするようで、どれ程辛い監禁生活をさ
れていたのか。

先程目を覚ましたと報告がきたので、お風呂に入ってもらって、
その間に着替えと食事を用意させることにしましたよ。

今回の件で洛陽に向けての出発が一週間以上遅れますがやむを得な
いと、

司馬八達の一人と、宦宦や何進達宮廷工作なら前者の方が大事です
から。

お風呂から戻ってきた着替えた司馬朗さんは可愛かった、
歳は私と変わらないくらいか？茶色い瞳のクリクリとした目、
あと赤身がかった茶髪を両サイドでポニーテールにしているのが特
徴的で。

監禁生活の影響で食事も満足でなかったろうに若干頬が痩けている
が、
とはいえ、それでも可愛らしい女性？いや、可愛らしい女の子だな
と。

司馬朗さんへの食事は胃に負担がかからないようにお粥や麺類、果
物とかを用意して、
胃腸の調子に問題なければガッツリ食べてもらえるようにしまし
う。

「なんでこんなにしてくれるんですか、助けてくれただけでなく。」
司馬朗さんは私達涼州の歓待ぶりに驚いていますね、まあ、当然か、
普通は見知らぬ他人の為に命懸けたり歓待はしませんからねえ。

「話は置いておいて食事を、三日三晩寝ていたからお腹がすかれた
でしょう？」

いやあ、大変気持ちの良い食べっぷりで、あれだけ食べてもらえたなら、

料理人達も満足でしょう、当初用意した病人食どころか、私達が食べるような食事も食べ足りないのがつつかれましたよ。

私と同じくらいで160cm無い小さな体の何処に消えるのでしょうか？

病み上がりに酢豚や麻婆豆腐をがつく人始めてみましたよ。

まあ、明日胃カメラだから食事禁止ねと言われていたの忘れて、寿司屋で寿司に日本酒三昧をやって医者に説教食らったり、胃カメラ飲んだ後一時間は飲食禁止と言われていきなりカツ丼、こういった事を普通にやらしていた私が言うのもなんですが。

食後のお茶も終え、司馬朗さんが落ち着いたようなので話をしましょうと。

太平妖術の書で知ったというのは私と司だけの秘密なので、涼州の人材確保の為洛陽で評判の人物として前々から調べていた、先月から行方不明となったので探らせていて偶然見つけたと話を。

「司馬家の人間として育てられ人よりは優秀という自負はありましたが、

私のような小役人に何故そこまで、危険をおかしてまで。」

史実で伝えられる司馬朗よりは若干自信家のようなですね、とはいえ、涼州の厚遇ぶりに何故と疑問を持つほどには謙虚と。

どう答えましょうかねえ？照れ臭いですが熱い答えがいいでしょう、司君も情熱的に熱く口説きなさいといってきましたし。

さすがに歴史が証明しているからお前ん家優秀じゃん、とは言えませんしねえ。

一司一

「董孟高將軍、司馬伯達殿との会話の前に大事な事をすべきではないでしょうか？」

とりあえずこれから保さんが口説きにいく前に堅さを取り除かないと。

「どういったことですかね李文優殿？」

保さんは僕の言葉の意味を読みかねているようで聞いてきましたね。

「なあと簡単な事ですよ、此方の自己紹介をしましょうよ、こちらだけ司馬殿の名前を知っているのは不公平でしょう、ふふふ。」

「そりゃそうだ、これは失礼しました司馬伯達殿。」

僕が笑ったら、それにつられて保さんも笑っていますね。

「私は涼州太守董君雅の第一子で姓は董、名は擢、字は孟高と申し

ます。」

「僕は涼州軍軍師で姓は李、名は儒、字は文優です。」

「俺は董擢將軍の護衛で？融だ。」

「私は涼州太守代理洛陽駐留大使、姓は李、名は肅、字はありません。」

「私は李肅様付き軍師をさせてもらっております、姓は審、名は配、字は正南と申します。」

「將軍の郭？阿多だ。」

「阿多と一緒に將軍の李？稚然っす。」

「えっ………！？」

地位を気にせず順番も気にせず気楽に自己紹介をしましたが、どうやら司馬朗さんはこちらの正体に驚いている模様ですね。

太守代理に將軍、軍師と大物が集団にいるとは思いませんよね、僕が司馬朗さんの立場ならば、何これドッキリ？と思うでしょうなあ。

「申し遅れました、私は洛陽で役人をさせていただいておりました、姓は司馬、名は朗、字は伯達と申します、名乗り遅れた無礼誠に申し訳ございませんで

した。」

とりあえずお互いの自己紹介は終わりましたので、これからの事とかを話しましょう。

「伯達さんを僕達が救出をしたわけですが、何故このような事態に。」

敢えて聞かないでも知っているんですが念のため本人の口から言わせましょう、

それでいかに此方が頑張ったのか恩にきせてしましましょう。

まあ、予想通りで司馬朗さんは洛陽で拉致されて危うく売られるところだったと。

「翌日に私は引き渡されると言われ絶望していたところを助けられました。」

そんなピンチに僕達は颯爽と駆けつけて名乗る事もなく助け出し、しかも、寝食の世話までしていると、此処までやれば平気でしょうが、

借りはそれだけでない事を教えて差し上げましょ、ふふふ。

「あつ、そうだそうだ此処にいる皆に大事な事を伝え忘れました、特に司馬伯達さんのお話に関する事で大事な連絡となりますが。」

あまりに私の思い出したふりとか言い方がわざとらしいですが、まあ平気でしょう、

大事なのは演技ではなく私が今から伝える事なのですが。

「今回世間では奴隷商人と一味33名は同士討ちと謎の火事により全員死亡となっております、それで今回の関係者で唯一此処で名前が挙がっていない男についてなんですが。」

これだけ言うと司馬朗さんがピクツと反応しましたね、まあ、身元や顔を隠していたようですが直接会って知っているわけですから。

「今回の事件で諜報部が必死で調べましたところ買主は王謙と分かったのですが、

僕達では手が届かなくなってしまったという事態が。」

保さんや嵐さん以外室内の人間全員が驚いている。

司馬朗さんが明らかに動揺している、逃げられたと思ったからでしょう、

皆は買主が長安の実質的な主である王謙と大物の名が出た事に。

「ご安心を、奴が逃げたとかではなく、王謙に関する資料を送らせていただきました、

先程ですが王謙は汚職、横領の容疑で処刑となりました。」

あのような小物を殺す為に兵を動かすのはもったいないので、私達がまとめていた資料が彼のライバルの手元に届いていると。

そのライバルも綺麗な人間ではないですが、御しやすいような小物なので、

将来の長安を併合するまでは上手く使わせていただきます。

って、長安の吸収は保さんしか知らない極秘事項でしたね、

いけませんね気をつけないとついポロッと喋ってしまいそうです。

「今回の騒動に関して司馬伯達様に害をなそうとした者達は全て冥土に、

あつ、洛陽にいた拉致したゴロツキ共は洛陽に着き次第搜索し処刑予定です。」

ふふふ、司馬朗さん、此方がここまでやることに驚いていると言いますか、

何でそこまでと疑問でしょうねえ、まあ、私と保さんだから出来るのです。

「何故そこまでとお思いでしょう司馬伯達様、説明は僕から、いや、救出計画責任者の保さんから説明した方が良いでしょう。」

あくまでも保さんがOK出さなければ実行されない作戦ですからねえ。

熱烈に口説いてくださいよお、将来の司馬八達とか引き込みの為に。

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しいからです、

貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

「「「「「ブッ！！！！！！」」」」」

保さん以外全員噴き出したよ、保さん情熱的に口説けといったが、それは直接的過ぎて駄目だろう、仕官を求めているではなく女を求めているみたいだぞ。

「あうあうあう」

司馬朗さん顔真っ赤にして固まっちゃったよ。

「よろしいでしょうか？」

保さん空気を読んで！話をちやっちゃ進めないで！今、この部屋の空気は変なのよ！

「董孟高様も天然なのか、凄い事を言われますはねえ。」

「保さんも大きくなられたんですねえ、羨ましい限りで。」

母さんに百合さんとか桃色空間の空気に飲み込まれているよ、はあ、なんだかなあ。

おっ、あがっていた当人が復活した。

「な、なんでまた私をほし、ひ、必要とされるのですか？」

復活しきれていないね司馬朗さん、仕方ない。

「保さん堅い口調ではなく、いつもの口調でいきましようよ、さっきの言葉もあれじゃ説明が舌足らずで聞に誘っているみたいじゃないですか。」

保さんもアツ、っていう感じで情熱的に言ったが、あれは熱すぎるだろ。

「そっかそっか、じゃあ、司馬伯達殿、呼び方は伯達さんで良いですか？」

一気に砕けたなあ、まあ保さんらしくていいんだが、こっちの方が。

「私の命を助けていただいた恩人であられる董孟高様に恐れ多いです、

私の真名は桜花おうかです、桜花と呼び捨てていただいて結構です。」

おっ、真名を預けた、そうすると保さんも真名預けるから、司馬朗さんまた恐れ多いとか言いださないかな？

「貴重な真名をありがとうございます大事な預からせていただきま

す、では、私も真名を預けますね、保と呼んでください桜花さん。」

保さんが気楽に真名を預けてしまったから桜花さん困っているやん、保さんらしいな、そういうところは。

それにしても保さんのあの発言で、雷さんと光が寂しそうにするとは、

まあ雷さんは分かるが、光がねえ、面白いもんだ。

前回忘れ去られていた事にショック受けているのか、

今回の言葉に重ね合わせて、だとしたらすこしだけごめん。

平気よ捨てないから、保さんの肉の壁だからとか言ったら冗談でもヤバいかな？

—桜花—

奴隷商に捕まりもう駄目だと覚悟を決めていたら、いきなり表れて敵を倒し、

それだけならまだしも更に私の寝食の世話までしていただけるなんて。

正体を明かされたが涼州の太守子息の董擢様に、太守代理の李肅様と洛陽の小役人にしか過ぎない私なんかより遥かに偉い人たちがなんで？

命がけで私を助け、世話までしてくれるのかと思っていたら。

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しいからです、

貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

いきなり私が欲しいと言われるなんて男の人に口説かれた事ないから驚いてしまって、

どうすればいいのか分からず混乱してしまいました。

李儒さんと名乗られた方が言うには、そういう意味では内容で安心しました。

でも、何故か分かりませんがそう言われて少しさみしい気持ちがありました。

命の恩人でありますし私の真名桜花を預けさせていただきましたが、董擢様は笑いながらあっさりと保という真名を私なんかに預けてきて。

その時の笑顔を見て可愛いと思えてしまった。

「涼州は常に有能な人材を求めている、桜花さんからしたら薄気味悪いかもしれませんが、

私達は桜花さんの智謀、人柄が優れている点をよく知ってます。」

だから、あの時司馬？の十二世孫と私の事を知っていたんでしょうが。

「そこまで言われるのはとても嬉しいですが、私位でしたら他に幾らでも。」

謙遜ではなく思った事を。

「「おいしいー！！！！」」

驚いた、保さんと司さんが同時に叫んで突っ込んできた。

「いやいや桜花さん程の人間が幾らもいるなら大陸に千年帝国が出来てますよ。」

千年帝国ですか、そこまで言われるなんて。

「桜花さん以外の司馬家の皆さんの優秀さもよく知っております、桜花さんを含め姉妹が世間では司馬八達と呼ばれる程の智に優れた姉妹と、さらに桜花さんの叔母上にあたる司馬徳操さんの教育者としての優秀さも。」

私の事を知っているんだから知っていてもおかしくないんですが、司馬八達ってこれも知り合いが言い始めただけでまだ知られていないですし、おばさんのことも詳しく知っているなんて。

「桜花さん、そして姉妹の皆様に涼州の未来の為に是非来ていただきたいんです、

そして人材育成の点で徳操さんにも協力していただきたいんです。」

私だけではなく一族全員欲しいんですか欲張りなんですネ、

私だけでないというのがちょっと寂しいと感じてしまったんですが。

「なんで私の一族なんですか？」

「漢は近いうちに消滅します、大陸の為に涼州は益州等周辺を併合し独立します、

その為に必要な人材を確保したいんですよ、優秀な政治家である桜花さん姉妹を。」

漢が消滅するって何を言っているんですか。

「漢が消滅するなんて、それにそんな事誰かに聞かれたら!？」

「放っておいても漢は消滅しますよ、まあ私達がとどめを刺しに行くんですが。」

そんな事はどうでもいいんです、将来の人材確保の為に子供達の教育をしております、

その時に教育者の一人として徳操さんの協力をお願いしたいんです。

」

漢王朝消滅がどうでもいいって扱いなのが、って、とどめを刺しに行く、

って何を言っているんでしょうか保さん達は。

もしかしたら私は奴隷商人の手からは助けてもらえましたが、
とんでもない人に助けられてしまったのか、大丈夫でしょうか・・・
・？

野犬から助けてくれたのが猛虎の群れなんて。

それにしても攫われたなんて言っても洛陽の人達信じてくれるかな？

今から帰っても一か月以上の無断休職扱いで席無いんだろうな。

仕方ない、仕事がもらえるんならば、この虎の穴に飛び込んでみま
すか、
それにちよつといいかな保さんも、なんてね。

一嵐一

王子様が決めた事に従うと俺は決めていたけど、

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しい
からです、

貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

王子様がそういった時に俺は凄く苦しかった、なんだろうこの嫌な
感じ。

俺にはよくわかんないから聞いちゃだめなんだろうが王子様に素直
に聞いてみよう。

一光一

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しい
からです、

貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

孟高も思いつきり言ったっす、それにしてもどれ程の犠牲ってこの前の俺とかつすか。

だとしたらキツイっす、自分は消耗品っすか？

終わった後で文優が気持ち察してくれたっす、話しかけてきたッす

「日さんも光さんも使い捨てなんかじゃないですよ。」

文優は意外と優しいっす、見直したっす。

「肉の盾でい続けてもらわないと」

やはり文優は酷いっす。

第二十八話、司馬伯達調略作戦（後書き）

うーん、連休中出掛けたりしながらも空いた時間で、三国志を見直し続けるが本当に張飛ってトラブルメーカーだなと。

あれを見る度にどんどん鈴々が嫌いになる私がいいます。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第二十九話、長安での紙芝居と妹の愛（前書き）

今日はいつもより短めでございます。

話を進めるよりも、紙芝居とか歪んだ昔話を考えるのが楽しくて。

考えるも何も脳が昔から閃いているんですよ、病気ですよ。

さて、今日は紙芝居と、司馬家のお話で。

第二十九話、長安での紙芝居と妹の愛

一保一

おかしい、既に洛陽に着いているはずなのに、私は何故未だに長安にいるのだ!?

何故、私は未だに長安にいるんだ? 大事な事なので二回言いました。しかも、何故子供達の玩具にされているんだ!?

「紙芝居のにーちゃん紙芝居をやってくれよー!」

「おにちゃんは私と愛憎劇おままごとするんだ。」

「じゃあ、わたしも愛憎劇おままごとがいい、愛人役やる。」

「にいさんとは十七歩をやるんだ!」

完全に私は子供の玩具やね、愛憎劇おままごとは疲れるからやりたくない、

おままごとに「この泥棒猫」とか料理にタワシ出されるとか。

「お前ら絶対にごきげんよう次にやってるドラマ見ているだろ!」
と何度叫んだことか、子供の遊びなのに荒みすぎているよ。

十七歩って多分司が広めたカイジの影響だろうが、ガキに余計なものを教えやがって。

どうしてこうなったかと言うと前々回の騒動で逃走の際に火を放ったら、

まあ、貧民街を派手に焼いてしましまして、勿論世間では犯人は謎のままですが、

やり過ぎた罰として連日の炊き出しやら遊んであげるといった慈善活動を。

それで大谷商会等の出資で長安臨時保育園をやりはじめたと、孤児は洛陽に行く際に引き連れて将来の部下になってもらいましよう。

ちなみに司君は桜花さん混ぜて今、むこうでおままごとやってますよ。

「あなた、今日もお義母様が・・・。」

「俺は仕事で疲れているんだ、それにお袋の事はお前に任せているだろ。」

「みち子さーん、みち子さーん、部屋に・・・」

なんであんなリアルなおままごとなんだ、夢が無さすぎるだろ、まさか桜花さんが司とセットであのおままごとを楽しんでいるなんて。

桜花さんは常識人だと期待していたのに、ないは・・・。

愛憎劇おままごとや十七歩とかは嫌なので仕方ない、紙芝居でもや
ってあげますか。

「昨日やった或^{ある}負^ふ巢^すの少女^{はうじ}廃^{はい}児^じの続きだよー。」

当て字が嫌すぎます、ある地域の負け犬な駄目人間になりかねませ
ん。

「やったー、廃^{くわい}児^じと苦羅羅^{くらら}はどうなるんだー！」

やはり日本で人気あった物はこの時代の子供達にも人気です、
ただ、苦羅羅の字も何とかしてほしいです、苦行僧みたいな当て字
は。

四半刻後

「“苦羅羅の意気地無しー！” 廃^{はい}児^じは苦羅羅を車椅子から突き飛ば
します。」

さあ、この話のラストです、一番盛り上がるところです。

「苦羅羅頑張れー！」

涼州も長安も同じで子供達は紙芝居大好きです、さあ感動のエンデ

イングです。

「なんと苦羅羅がゆっくりとですが、震えながらも立ち上がったのです。」

「「「「やったー！立ったー！」「」「」」」」

子供達だけでなく一緒に見ていた大人達も大喜びです続きがあるのに。

「「奇跡だ」苦羅羅が立てない事を知っていた街の人は沸き上がります、

廃児は“苦羅羅が、苦羅が羅立った、教祖様のありがたいお力で。”

“俺のお袋の目の病も教祖様に”“うちもだ！”至る所で教祖様の奇跡が称えられます。」

紙芝居を聞いている子供たちだけでなく、大人達も動揺しはじめているようです。

「“二度と立ち上がれないと医者に見放された私が、
今こうして立ち上がったのは平田亜様ペーターのおかげ”

この一言で奇跡の人、聖者平田亜と呼ばれ教団は大きくなるのでした。」

福本作品みたいにザワザワしていますね、まだ続きがあるんですが。

「医は無力なのか、いや、五斗米道ならば・・・!!」

やけに暑苦しいやかましい喋りをする子がいますね、
ただ、この時代にしてはヴェとかの発音が素晴らしいですが。

「その晩、屋敷にて平田亜に足蹴にされる苦羅羅の姿が、
“てめえは演技一つも満足に出来ないのか愚図が!! 演技する位しか能が無いんだろ、
とりあえず廃児、この街で一通り信者も増えたし稼いだら次に行くぞ。”」

うん、凄い絵だね、ペーターに足蹴にされるクララって、
可愛らしいあの絵で描いてあるが地獄絵図だね。

ザワザワ言うだけでなく観客の顔がみんな福本作品キャラみたいになっっているよ。

「そうです、奇跡など無かったのです全とお芝居だったのです、
しかし、騙された事に気づかない村人達は幸せそうにしていました、
奇跡には種があり、知らない方が幸せな人生を歩めるのが世の中で
した、おしまい。」

実に酷い、うん、酷いねえ、よくこんな話がかかるな私。

私は子供劇場作品でもフランダースの犬を観ると泣き出すくらいなのに、

母を訪ねて三千里やらアルプスの少女ハイジは普通に汚せるって、一体どういう育ちをすればこんな酷い話が普通に思い付くのでしょうか。

パチパチパチパチ

おっ、こんな話でしたが至る所で拍手が起こっています。

「こんな深い話だとは、感動しました、最初は子供騙し程度だと思っていたら。」

天下の司馬八達の一人が感動しているよ、マジでっ!?

「宗教は毒なんだな!と改めて気づかされました、あっ、失礼しました、

私は張魯と申しまして、流れの医者で長安に立ち寄ったら何やら楽しげな催しがと。」

うん、気のせいだ、此処に五斗米道の張魯がいるわけないし、宗教を否定するような事とか絶対に言うわけないから、うん、別人だよ。

「董孟高様、今回の話は些か子供向けの話ではないかと思われませんが。」

多分、百合さんの発言が感想の中で一番まともなんだろうが、百合さんが一番空気を読めていない人に思えてしまうのは何故だろう

う。

とはいえ、紙芝居をやったり、遊んであげたりする事で、ちびっ子達に人気になるのも悪くはないですな。

――司――

うーん、保さんの紙芝居は大陸中何処に行っても子供達に大人気だな。

羨ましい、実に羨ましい、僕も紙芝居で子供人気で対抗したいが、僕の紙芝居も子供に人気なのに保さんに見られると殴られたりするの。

保さん友人として先輩としていい人なんだが、たまに暴力的なのがいけないよなあ、
保さんはもう少し気が長い方がいいのに！後輩の私が苦言を呈さない。

夜に保さん達と話をするから明日の紙芝居について打ち合わせしましょう、
その際にお互い作品の方向性違うが尊重して暴力はやめようと提案をしましょう。

今回候補にしているのが保さんも大好きなSAWシリーズにしよう

かと、

あのシリーズはいつも保さんと映画館で観て笑って、その後は焼肉にしていますし。

そういえば、作者の母親なんか作者の姉がお腹の中にいる時に父とデートで、

エクソシストを見に行って婆ちゃんにボロクソに怒られたなんて事があったそうで。

話がそれましたね、さて保さんの暴力頼みをどう無くすか考えないと、そうだ！

桜花さんが手紙の件で相談あるという事なので、説得を手伝ってもらいましょう。

桜花さんに出来たての新作紙芝居SAWを見てもらいましょう、そうすればこれは良い作品だと押してもらえるでしょうし。

――桜花――

お父さんへ

お父さんは既に伝令の使者の人から話を聞いていると思いますが、洛陽で誘拐されてしまいました。が運良く助けられまして今は無事です。

お父さん心配掛けてごめんなさい。

今、涼州太守のご子息である董擢様一行に助けられて、皆さんのお世話になってます。

ちょっと変わっている所もありますが、皆素晴らしい人です。

すぐにでも洛陽に帰って皆に早く会いたいです、

一人で戻るのは危ないからと涼州の皆さんと一緒に洛陽に向かいます。

早くお父さんや梅花ちゃん達に会いたいです、もうすぐ帰りますので待っていてください。

追伸

洛陽に戻りましたら、お父さん達に董擢様を紹介します。

「これでよしと、では保さんこの手紙も一緒をお願い出来ますか？」

私は保さんに許可をもらって一足先に洛陽に向かう方に、仕事に関する書類と一緒に家に手紙を届けてもらうことに。

「桜花さんわざわざ書いた手紙を見せないでいいですよ、人質じゃないんですから手紙の検閲なんかしませんから。」

私が渡した手紙を見て保さんが言うてくる。

「いえ、私も涼州で働くと思ったとはいえ、やはりまだ所属は洛陽での人間ですから、

他所の人間ですからケジメとしてキッチンとやらないと。」

普通はこういう事はうるさいと思うんですけどねえ？

「真面目ですねえ桜花さんは、それにしても手紙があっさりしてますね、

拐われた、助けられた、と物凄い波瀾万丈で手紙書ききれなさうなの。」

司さんが手紙の話に加わってくる、それにしても司さん、顔の左側が腫れていて鼻血が出た跡がそのままできて怖いんですけど。

曹？とかいう紙芝居をやりたいと司さんが保さんに話しかけたら、保さんが「あんな物やれるか！どんだけ人の死を見せたい」と司さんを殴り始めたのが。

保さんが乱暴なのを注意したいと司さんが此処に来る前に言っていたから、

これはいけないと思い注意しようとしたんですが、絵を見てやめました。

カラクリ仕掛けの罠を突破しないと殺されてしまうというお話は画期的で面白いんですが、

流石に子供達に読んであげるには無理があり過ぎるような。

話を戻しましょう。

「手紙を書こうにも書き始めたら長くなりすぎてしまいますから、それにもうすぐ会えるので今ここで書かないでも。」

手紙に書ききれるような量ではないですから、私もあんな経験をするとはい。

「あつ、そうだ、保さんを紹介したいって追伸で書いてましたけど、お父さんである司馬防さんが男連れて来ると勘違いして怒るとかは無いんですか？」

司さんも軍師だからか想像力が豊富なのか、お父さんは私を可愛がってくれてますが、そんな意味深に解釈する事はないですよ、それに隠す方が怒るでしょうし。

多分、勘違いとか起こるのならば。

「お父さんよりも梅花ちゃんの方が、あつ、妹の仲達のことです。」

まあ、大した事はないですけどね、普段はしっかりしているのに、家族だけだとお姉ちゃんな私に頼りっきりなんですけどね。

「たいしたことないですよ普段しっかりしているんだけど私にちょっと甘えるくらいだけで、お風呂入っていると途中から入ってきたり、寝ている布団に入ってきて抱きついてきたり、

ふざけて接吻してきたりするくらいだけで、子供っぽいだけで。」

「「えっ？」」

あれ、なんか反応が変ですねえ、気のせいでしょうか。

「梅花ちゃんはちょっと人見知りが激しいのか人と話していると私のお姉ちゃんを取るな！」

と言って武器持って相手を追いかけてまわすくらいだけの普通の子でちょっと甘えん坊な。」

まあ、甘えん坊なだけで普通の女の子ですよ。

「「「ええええっ？」」」

部屋の隅にいた嵐さんまで、そんな驚く事ですか？

「そんな驚く事ですか普通ですよ皆さん大げさに驚きですよ、梅花ちゃんは15歳にしてはちょっと甘えん坊なだけですよ。」

「「「ちよつとまったー！ー！！！！」」」

全くどうされたのでしょうか？

「桜花さん、十五歳ってもっと分別ある年齢ですよ、私の一歳上ですよ！？」」

保さんは14歳とは思えないような落ち着きがあったりするんですが、

お父さんよりも年上に見えてしまうんですが。

「そんなお姉さんが人と話しているだけで武器持って追いかけてわすって危険すぎるでしょ。」

危険すぎるって梅花ちゃんの事をひどく言い過ぎです！

「俺も甘えん坊とか言われたりしたが、そんなひどくないぞ。」

男っぽい嵐さんが甘えるんですか予想がつかいませんね、何故か分からないですが保さんが照れていたのは何故でしょうか？

「梅花ちゃんは甘えん坊な普通の子です！！！！」

お姉さんとして梅花ちゃんを守ってあげないと。

「「絶対無い！！！！！！」」

そんなに三名揃って声を合わせて否定しないでも。

「お風呂入ってきたり、布団に忍び込むって桜花さんを襲う気満々でしょ！？」

保さん、そんなあり得ないです。

「どうみても肉食獣が獲物として狙っているところですよ。」

司さんまでなんてこというんですか。

「俺だったら貞操の危機を察して家からすぐに逃げ出しているぞ！」

まるで梅花ちゃんが私に襲いかかろうとしているみたいじゃないですか、

単なる家族愛なだけですし、みなさん何を言っているのでしょうか？

「皆で梅花ちゃんの事を言い過ぎです、ならば洛陽で皆に紹介しますから、

そうすればすぐに梅花ちゃんが普通の子だと分かりますから。」

こう言ってみなさんに納得してもらいました。

とはいえ何か引かかるようでして、保さんなんか。

「やはり涼州はネタな人しかいないのか、常識人が欲しい。」

なんででしょうか？

第二十九話、長安での紙芝居と妹の愛（後書き）

S A Wを観て焼肉は司のモデルとなった友人といつもやっていた実話です、

ええっ、普通に話していましたが元同僚達はドン引きしてましたね。

S A Wは観ると馬鹿だなーと笑えるギャグにしかみないんですがねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第三十話、洛陽到着前も後も色々ありました。（前書き）

タイトルまんまで涼州軍団が洛陽に着いたはいいが、
というお話を書いてみました。

元から表現力ないですが、半端な内容ですいません。

最初から謝っておきます、すいませんでした。

第三十話、洛陽到着前も後も色々ありました。

一保一

「「はるるるる来たぜ洛陽」あゆるトラブル乗り越えて」
♪」

函館の女の替え歌を大音量で歌いながら登場とご機嫌な私と司です。

「わざわざ歌わないでください、しかも突然。」

あらっ、桜花さんに突っ込まれましたよ、私達の苦労を知らないんですかねえ？

その原因の一人であるというのにねえ。

「保さん悩んだんですよ、洛陽よー私は帰ってきたー！と。」

それもいいな、ただ、どちらにしても桜花さんに怒られそう。

「ガトーは格好良いなあ、でもただ叫ぶだけじゃ寂しくないか？」

あれはやはりGPO2Aでアトミックバズーカ攻撃があったから絵になって、

ただ「ソロモンよ私は帰ってきた！」と叫んでも絵にはならないよ
うな。

それにしましても私達が騒ぎたくなる気分も分かってほしいですよ、最近のゴタゴタを。

やっとですよ、やっと洛陽に到着できるんですから、実に長かったですよ、

長安に到着して桜花さん助けて事前活動してはや一ヶ月半もたってしまっただからです。

何があったのか最近の流れを説明しますね。

今回の洛陽への遠征は半年で帰還の予定で出発をしましたが、桜花さん救出など騒動もあり涼州離れる期間が更に延びそうだと手紙を。

涼州の色々な方々から返事がすぐに届いたんですが。

母上は「絶対に駄目！私と一緒にならば一緒に10年くらい二人っきりで旅を。」

父上が「和を止められないからやめて！！」牡丹さんが「牡丹を精神的過労で殺す気？」

あらまあ、見事に反対だらけという返事でしたよ。

大人達だけでなく保育園の子供達も怒ってましたよ。

月の「お兄様の嘘つき」はかなり心にダメージを与えましたね、洛陽遠征中止して涼州に戻ろうとしたら皆に羽交い締めになれましたよ。

詠ちゃんが「月が悲しんでいるから早く帰ってきなさい」も悪い事したなど。

華雄ちゃんが「武士に二言はないはずだろ腹を切れ」と、

武士はこの時代にいないはずなんだが、腹切ったら死にますし。

「保は嘘つきなのですぞ、だからダブルちんきゅーきつくです」
ねねちゃんにも悪い事したな、ただ、この時代にダブル？キック？
謎だ。

ただまあ、まだ私はまともだった、司がババを引いたなど。

「お手紙読ませていただきました洛陽の旅の日程が延びるとの事で、
長安にて人助けをされたということですが本当はその女性と・・・
途中略、

司様は甘い蜜を出す美しい花、綺麗な蝶が群れ集まるでしょう、
そんな綺麗な蝶と比べたら私のようなものなど・・・以下略」

紅さんの手紙を読んだが、あきらかに厄介な匂いがぷんぷんしているのが、

「あなた様の重荷になるのなら私は死を」なんて書いてあったり
もしたし。

この紅さんの状態はあまりにもまずいのではないかと紅さん対策に司を涼州に一時的にでも送り返すべきか議論が。

ただ、それをやったら壊れかけている紅さんが正気を取り戻したあと、

自分のせいで涼州がとか考えはじめてそのあとどうなるか分からないからと。

これはもつとまずい事態になりかねないと司の帰還は無しと決まりました。

結局、司は洛陽に行っても涼州に戻っても紅さん地獄から抜け出せないなど、

司が寂しそうに「紅さんの愛がこんなに重たいなんて」と呟いていたな。

うん、まさか私も紅さんがあんな爆弾案件になるとは思わなかったよ。

ちなみに司はそんな壊れかけのRadio、もとい紅さんをなんとかしないといけないと、

紅さんを如何に愛しているか、如何に会えない事が辛いのか、今回の仕事が如何に大事か、

と京極夏彦作品みたいな超大作と化したラブレターを書いていましたよ。

ただ、仕事について書くのは止めた方がいいぞとおもいましたね。

あの質問が来るぞ！「仕事と私どっちが大切なの！？」ってあの面倒臭い奴が。

仕事を選ぶと、愛がない！別れる！死んでやる！などの答えが来て。私を選ぶと、じゃあ何で構ってくれない！愛が足りない！と。

「仕事は仕事、お前はお前で比べて選ぶ物ではない」、なんて理論的に答えても感情論には勝てません、無理が通れば道理が引っ込む。

模範回答っぽいので答えてみるとどうなるでしょうか？

「お前という時間やお金を作るため働いているんだ、分かってくれ。」
これに対し「じゃあ、そんな会社辞めて！」と面倒臭い返しをされた友人が。

何の話をしているんでしょうか、私はいたい・・・。

結論、泣く子と地頭には勝てない！！

「でも良かった本当に、保さんが私と司さんの仲を邪魔をしている、二人の仲を引き裂こうとする保さんを殺してやる！！！！」とか紅さんが言い出さないで良かった。」と司が遠い目をして言っていたのが。

打ち合わせして決めたが、おいつ本当に大丈夫なのか涼州は？紅さんを放っておいて？

司を涼州に戻すのではなく今すぐ紅さんを涼州から長安に連れてきた方が良くないか？

涼州の人手が足りないのならば馬鹿二人を送り返すとかで調整して。

うーん、涼州の先行きがとても不安です、
とはいえ、実は爆弾はそれだけではなかったんですよえ。

「保さーん、梅花ちゃんから手紙が来たんですよー読みますか？」

洛陽の桜花さんの家族から返事が来たんですが。

「えー、っと、何々、早く愛しの桜花お姉ちゃんに会いたいのに、洛陽に連れてこないどころか未だに長安に引き続きさせて、私と桜花お姉ちゃんとの仲を引き裂く奴がいるから、そいつらを皆殺しにしてやる！って。」

ブルータスお前もか！！！！

完全に私を殺る気です、筆遣いがヤバイです、明らかに字に怨念がこもってます。

「梅花ちゃんったら大袈裟なんだから、まったく、ふふふ。」

桜花さん、ふふふって、大袈裟じゃないです！あきらかにガチですよ。

「桜花さん、そんなノンビリしていないで仲達さんを止めて！」

嫌です、ヤンだ人に殺されるなんて人生の終わりは。

「保さん大袈裟ですよ、梅花ちゃんちょっと表現が過大なだけで。」

絶対に違う！この字を、筆使いを見れば分かります。

私が桜花さんを助けた恩を返すのではなく“おん”が“怨返し”になっっていますよ。

しかも、連日長安の宿に洛陽の司馬懿さんから手紙が届くのが怖すぎて、

司も薊さんも百合さんもこれはヤバいと怯えていましたよ。

おかげで、さすがにまずいだらうと長安滞在の予定を前倒しにしましたが。

色々あり過ぎだよ、たかが手紙、されど手紙でこんなおびえさせられるとは。

「董孟高様洛陽にもうすぐ到着しますが、兵も長旅で疲れておりますので、

本日は特に予定は設けず早々に宿に入られた方がよろしいかと。」

百合さんの提言は確かにです。

「では、兵達には旅の苦労をねぎらう為明日、明後日と二日間の休息を与えましょう、

ただこちらには桜花さんがおりますので、私と司、嵐さんと一部の兵は司馬家に。」

桜花さんだけを早く送り届けないといけません、保護したからとはいえ、

こちらの都合で感動の体面が遅れているのですから早く会わせてあげないと。

けっして、司馬懿さんの怒りが怖いというわけではないですよ・・・。

一司一

桜花さんを引き連れて保さん達と司馬家に向かいましたが、

感動のご対面なはずが、何でしようか猛獣の檻に閉じ込められたような気が。

目の前にいる人があの司馬懿仲達さんですよねえ？

「桜花お姉ちゃんを返せー！！」

いや、もう返しておりますよ、それに攫ったのは僕たちじゃないし。

「おおおおお桜花さん、あの人怖い。」

保さんが明らかに怯えております。

「貴様あああ、お姉ちゃんの真名を勝手に呼ぶなあああ！！！！」

おい、司馬懿って軍師だろ、なんで琅？さんよりヤバい殺気を放っているんだが。

「梅花ちゃん、私はこの人達がいたから助かったの、恩人には真名を預けないと。」

庇ってくれるのありがとう、でもお姉さんならもっとガツンと言ってよ。

「お姉ちゃんが言うのならば、ううううう。」

ううううが泣いているとかではなく、獣の唸り声みたいなのが怖いですけど。

「ただの恩人じゃないんだよ、明日売られてしまうと決まってもう駄目だと思った所を、
保さんと嵐さんが乗り込んできて命がけで守ってくれて助けてくれたんだよ。」

桜花さんが司馬懿さんを納得させるためなんだけど、とんでもない事ばらしやがった！

「えっ！！？？」

そりゃ驚くよ、教えた話と真実が違うんだから。

「桜花さん、その話はまずい、って、もう遅いか。」

保さんの言うとおりにまずい、あくまでも桜花さんを買収して助けたという事に、
そうでないところが長安焼き打ちした事ばれちゃうのに、って、手遅れだね。

「勘違いで怒る梅花ちゃんには本当の事を知ってもらおうと思って、すいません。」

せめて僕達に事前に「話します」とか一言言って欲しかった。

「保さん、もう完全に手遅れですし司馬家の皆さんには真実を話しましょう、

涼州がどれほど本気なのか話をするのにちょうどいいかと、ただし司馬家限定で。」

こうなったら話をしましょう、長安焼いた事ばれるのはまずいですが、

まあ、桜花さんの命の恩という形で黙ってもらいましょうか。

一 梅花一

大好きなお姉ちゃんが攫われて以来、お父さんも妹も毎日眠れない日を過ごしていて、ある日涼州の董擢とかいう人の使いという人間が来て桜花お姉ちゃんを助けてくれたと。

董擢とかいう人が大好きな桜花お姉ちゃんを助けてくれたのは嬉しかったが、どうも人買いに売られる所を買い取ったと聞いて、所詮は人買いの仲間だと思っていた。

しかも、洛陽まで送り届けると言ったがすぐに連れて来てくれないで、

家族皆がどれだけ桜花お姉ちゃんを心配していて会いたかったのかわからないの！と頭にきた。

しかも、桜花お姉ちゃんが帰ってきた時に親しげにお姉ちゃんの真名を呼ぶなんて、

助けてくれた恩をかさにきて偉そうにしているんだと思って怒った

ら、

桜花お姉ちゃんに怒られた。

しかも、お姉ちゃんが簡単に話してくれた事は知っていた事と全く違ったのが。

お姉ちゃんを命がけで守ってくれたのならばもっと誇って、こっちに恩を売ればいいのに、

何でそんな大事な事を董擢達は皆揃って隠そうとするの？と分からなくなった。

夜に家族が揃った時もお姉ちゃんは、その事には何も言わず

「全ては保さん達当人から説明を」とだけ言われた、秘密にされて嫌な感じだった。

そんな事が気になっていたら桜花お姉ちゃんが、

「保さん達涼州の方々が私の帰還を祝いたいと言われて、家族皆を呼んでいる」

と招待を受けた、普通は助けられたうちの家族が招待するのに、

しかも、助けられたお姉ちゃんがそんな話をしてくるなんて、すごく変な話だと思った。

翌日その宴席に行く事になったら更に疑問が、呼ばれた先が洛陽の中心地にある

大谷商会という大きなお店で此処は大陸全土の特産品を扱うだけの

単なるお店なはずなのに。

お店に着いたら「司馬家の方ですね主人が待っております」と奥座敷に案内された。

主人って誰の事なのだろうか？なんで、このお店何だろうか？わかんないや。

奥の部屋に行ってみたら、昨日お姉ちゃんに紹介された董擢さんや李儒さん、

だけでなく、何人も偉そうな身なりの人とかが待っていた。

「司馬坊様、そして御家族の皆様、本来ならば身内だけで司馬朗様の御帰還を祝いたいのに、
本日は私達のに招待でこのような所まで来ていただく事になり深く御礼申し上げます。」

いきなり董擢さんが深々と頭を下げてきたので、菊花お父さんが戸惑っていた。

このあと董擢さんや桜花お姉ちゃん達から受けた説明を聞いて、驚いてしまった。

此処にいた人たち全員が皆涼州の將軍様とか偉い人なのに、お姉ちゃんを助けるために、
危険を顧みず奴隸商人の所に行って命がけで桜花お姉ちゃんを守って戦ってくれたって。

菊花お父さんも妹の鳳仙花とか皆驚いていた、此処にいる人たちが、縁もゆかりもない桜花お姉ちゃん助けるために危険を顧みず戦ってくれた事に。

「な、何でそこまでしてくれたんですか、私の娘の為に？」

この菊花お父さんの質問の答えも予想がつかないにも程があった。

董擢さんと李儒さんが言うには、漢王朝は既に滅びかけていて、近いうちに大規模な農民の反乱がおきて、王朝はそれを駆逐できず、そのため国は更に乱れ地方の豪族が挙兵をし群雄割拠の時代を迎える。

その為に地に伏している間に力をためる為司馬家の力を借りたいと。

漢王朝はボロボロでいずれは滅びると思っていた、とはいえまだまだ王朝は健在なのに、さらに王朝すらおさえられない農民の反乱が起きるなんてあり得ないと思った。

「そんなあり得ない」

話を聞いていてあまりに荒唐無稽でつい口に出てしまった、家族皆もうなずいていた。

でも、董擢さんと李儒さんの二人はまるで未来を見てきたかのよう

に、
静かにただ淡々と歴史を語るように「そうなりますよ」と。

「司馬八達の中で最も才気溢れると言われる司馬仲達殿が、常識なんてつまらない物に思考が捕らわれてしまうようではいけません。」

同年くらい李儒さんにたしなめられた。

この後も延々といろんな話をしたけど、二人の話を聞けば聞く程驚いた。

大陸の外れである涼州はだいぶ前から将来の群雄割拠になる事に備えていて、
異民族を取り込み、優秀な人材を登用し、軍備を整える、拠点を作っていたなんて。

この大谷商会も大陸中に張り巡らせた諜報網であり、将来の軍事の拠点だなんて。

この二人は5歳になった頃には既に遥か未来に起きる事が予想付いていたなんて、
私だって頭の良さには自信があったのに二人には全く敵わないと思いきらされるなんて。

世界中にあるどんな事よりも私には大事な大好きな桜花お姉ちゃんの事とか関係なく、

この二人の见ている世界を見てみたくなった、色んな事を教えてほしくなった。

こんな風に思ってしまうなんて思いもしなかった。

此処にいる董擢さん達は大好きな桜花お姉ちゃんを守ってくれた恩人だから、

家族皆桜花お姉ちゃんを大事にしているから協力しろと言われたら断れなかったが。

「涼州の為に、いや、大陸の民の為に是非皆さんの御協力をお願いしたいのです。」

そんな風に頭下げられて頼まれるなんて。

洛陽にいて勉強するよりもはるかに面白いと思ったから二人についていこうと思った、
そしたら、私だけでなく菊花お父さんも鳳仙花達妹も皆同じ思いなんて。

こうなったら家族全員で涼州に行って、涼州の皆から徹底的にいろんな事を学び、

司馬八達の凄さを大陸中に見せつけてやるんだから！！

第三十話、洛陽到着前も後も色々ありました。（後書き）

ギャグやシリアスが中途半端ですいませんでした。

司馬家まとめて涼州に入れてしまった、やり過ぎてしまったと反省。
どうするんでしょうかこんなオリジナルキャラだらけにしてしまっ
て、

恋姫原作キャラとからむようになったら收拾がまったくつかなくな
りそうなのが。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第三十一話、袁家、曹家、お嬢様達への嫌がらせ（前書き）

とりあえず涼州勢以外にも恋姫キャラを出したかったので、いつも通りのご都合主義ですが二人をちよびっとだけ出してみました。

第三十一話、袁家、曹家、お嬢様達への嫌がらせ

―保―

洛陽での仕事終えたある晩、司と二人で酒を飲みながら馬鹿話をしている、

ちなみに三国志の世界だから良いね、ガキなのに酒飲んでも文句言われないのは。

「なあ司君よく、袁家って名門だよね？」

ちよつとした思い付きを向かいで飲んでいる司に話す。

「何を今さら、三公を四代に渡って輩出した名門じゃないですか。」

司君がなに分かりきったことを聞いてくるんだという目付きで言うてくる。

「いやさ袁逢、袁隗に明日会うんだけど話の内容が涼州と取引継続するかわりに、
涼州の優秀な人間を連れて子供達の家庭教師をしてくれと、曹家からも同じように。」

うちは家庭教師のトライじゃないんだぞ、面倒なことぬかして思いましたよ。

「袁家内の派閥争いに関係ない人間に教えを受けさせたい、

まあ分からなくはないですが本当に面倒ですなあ、それに関する事で？」

司君も何の話が来るのか分からない模様、ただ、話を聞いたら喜んで乗ってきそうだな。

「二人の子供となるとあの袁紹と袁術だけど袁術産まれたばかりだから流石に無理だが、

面倒な事押しつけられた意趣返しで袁紹をお嬢様キャラに改造してやろうかな？」と、

当然駄目な方のお嬢様にね。」

絶対に乗ってくるよ、こんな話をしたら司君ならば。

「なにっ？その素敵な！面白そうな！悪巧みは。」

司君が目キラキラ輝かせて話を聞いてくる食いついたな。

「ほら、曹操と袁紹って若いころから交流があったということですよ、

この二つの家にまとめて出来る嫌がらせだし面白いかなと思って。」

この世界でも二人が交流はあるようですし、まあ今はまだちびっ子同士のようですが。

「どうしてまたそんな面白い事を思いついたんですか？」

司君は私の思考経路が気になったようで。

「ほらっ、袁紹と曹操って董家の天敵でしょ？反董卓の盟主と檄文を飛ばす、今日昼飯を食っていた時にふっと急に思い出したんだ、そしたら、なんか無性に頭に來たんだ月を虐める糞共が殺してやる！！！！と。」

昼飯の時に思い出し怒りをしていたら、ふと気づいたら昼飯時の混雑するはずの食堂から、人がまったくいなくなっていましたよ、どうやら殺気を出していたようで。

「保さん抑えて、思い出してそんな殺気を飛ばさないで、僕でも怖いんですから！それにこちらの世界ではまだ反董卓なんて起きてないじゃないですか！？」

当たり前です、あの可愛い月が連合組まれるような人間になるわけじゃないじゃないですか、まあ連合組まれたとしたら、ふざけた輩は生きたままミンチとか地獄を味あわせますよ。

「それは分かっているけどこの胸のモヤモヤはどうすればいいんだ！？」と、それで思っただ袁紹と曹操って若い頃から交流あったということから、まあ袁紹は内心曹操を見下していたとか色々あったみたいだけど。」

袁紹を駄目にすれば、曹操にもかなりの被害出せるかなと。

「とりあえず保さん馬鹿話するには酒が飲み足りないでしょ、もっと飲みましょう。」

酒飲みながら馬鹿話を続けましょうか。

コンコンコンコン

ノック四回ですね誰でしょうか？

「はい、いますがどちら様ですか？」

ノックマナー出来ているから百合さんか桜花さんあたりかな？

「桜花と梅花なのですが、今、大丈夫でしょうか？」

おっ、前回からお仲間に入った、司馬懿仲達さんこと梅花さんと、お姉さんの桜花さんですか、どうかされたんでしょうか？

「どうぞ部屋で司と二人で飲んでいるだけですよ、どうかされしましたか？」

何でしょうか夜に女性二人で部屋に来るなんて。

「先程この部屋から物凄い殺気が出ていて何かあったのかと思ひまして。」

おおっ、それはいけませんねえ、実に申し訳無い。

「すみません、思い出して怒っていたことが、もう何もないですから。」

それにしてもよく私が殺気飛ばしているのに近づけますね、
賊狩りやらなんやらやって培った本物の殺気なんですけど。

「無事ならいいんです、賊でも現れたのかなと思って。」

あつ、そうだ、これはチャンスかも梅花さんとゆっくり話をしてみたかったし。

「二人とも、もし時間が空いているのならば知恵をお借りしたいんですが。」

司馬朗に天下の司馬懿の力を借りてみましょう。

「どうされました？お二人がいれば私の知恵なんか必要ないかと。」

えー、司馬朗さんの頭の切れだって並みではないのに、

むしろ私なんか未来知識を使うというイカサマしているだけなんですから。

「たいしたことじゃない馬鹿話なんですが。」

馬鹿話と聞いて桜花さんは？と梅花さんは飽きれ顔している。

「司馬家の力を借りたいっていうから何事かと思ったのに、馬鹿話

ですか？」

すいません、司馬家の頭脳無駄遣いしようとする相談なんです。

「いやあ袁家と曹家のことなんですが、どちらも涼州のお客様ですが、

まあなんといいましょうか董家と浅からぬ因縁があり一泡ふかせてやりたいと。」

嘘は言ってません、因縁があるのはもっと未来なんです。

「えっ!？」

桜花さんが驚いてますね上客に嫌がらせをするなんて事と、董家と袁家、曹家に因縁があるなんて知らないですから。

未来の事を知っていたら怖いですが、私や司君以外で。

曹家と聞いてピクリと反応する梅花さん、司馬懿と曹操は外史でも因縁あるのか？

「曹家って、あのムカつく糞ガキ曹操のいるあの曹家？」

酒が入っているせいか、梅花さんがヒートアップしてる。

「梅花ちゃん何かあったの？」

「あのガキ、家に来て糞ガキの癖に私の物になりなさいとか嘗めた事抜かしくさって、さらに桜花お姉ちゃんとか家族は要らない司馬家で私だけあればいいとかぬかして。」

梅花さんの切れ具合ならば涼州を出ていっても決して曹操の元には行かないな、

ただ、梅花さん切れるのはいいが口調が変わりすぎているよ。

「私は何言われてもいいけど梅花ちゃんを怒らせるなんて許せない！」

よし、桜花さんにも火がついた、ここで燃料注入だ。

「聞いた限りだが曹操はろくな女にならないねあれは確実に、いずれ漁色家になるよ綺麗な桜花さんとかお二人の貞操の危険が、あともし曹操に下っても、疑り深いから忠誠誓っても疑い続けるくらいは普通にする。」

史実の曹操についてですが教えてみました。

「桜花お姉ちゃんをあんちくりんな糞ガキには渡さない、殺してやる、

桜花お姉ちゃんと愛を語らいあうのは私だけなんだから！」

うん、この娘怖いよ、いろんな意味で。

「可愛い梅花ちゃんを悲しませるなんて、保さん今から焼き討ちに行きましょう。」

訂正、この姉妹怖い!!

なんだよ焼き討ちって、何処の蛮族の侵攻だよ、全く。

「まあ酒飲みながらの馬鹿話ですからおさえておさえて、さあ飲んだ飲んだ。」

こう言って、少し抑えましょう、怖いよ、のってきた二人が。

一時間後

良い具合に皆酔ってきましたし、何をしたいのかとか酔っ払いの肴として話をしましょう。

「袁紹を馬鹿なお嬢様にして仲が良いという曹操を振り回してもらおうと、それで僕達や世間の人々は“あゝ馬鹿御一行がいる”と笑うとこれだけです。」

下らないわねえ、と笑いながら酒の肴として馬鹿話を楽しむ桜花さんに梅花さん。

「じゃあ、どんな駄目なお嬢様にしますか？揉み上げロールパンはお約束で。」

司君、まずは見た目からいきますか確かにお嬢様は見た目が大事ですから、問題はもみあげロールパンと言ってもこの時代のお二人には通じないだろう。

「ロールパンどころかガッツリと竜巻みたいにしませんか？馬鹿さの証明として、あとはオーホッホって無駄な高笑いをして“名門袁家の”とか普通に言うような。」

一目でお嬢様だ！と周りが認識するくらいキャラを濃くするんですね？

桜花さんが乗ってきたなー、かなり酔われているようで。

それにしてもロールパンが何故通じるんだ、これはどの時代もお嬢様には共通なのか？

「それならば悔しい事があると“お父様に言いつけてやる”とか言うようになってもらうとか。」

梅花さん実に良い提案です、たしかに何かあると親に頼み込みに行く馬鹿っていい！

これはお嬢様だけでなくスネ夫とか金持ちキャラはこうでないためですよ。

「勝手に目の敵にしている仲間の靴に画鋲を仕込ませるとか、盗みの濡れ衣きせるとか。」

梅花さん、それも良い、やはりお嬢様キャラは底意地が悪くないといけません。

「最高の提案ですね！ 当人がいない間に忍び込んで服破くとかやらせたいですね。」

うわゝ、司君は発想が酷いなあ、そんな風にしようなんて。

「悔しい事があったら手ぬぐいの端を噛ませてキー悔しいって、やらせて。」

皆も拍手して大笑いしている、酒が回っているから楽しめるんだろう。

「保さん酷いねえ、そんな奴いたら絶対に友達にしたくないよ、それを作ろうなんて。」

「梅花ちゃんも保さんも司さんも言いたい放題ですねえ。」

「桜花お姉ちゃんだって、言っている事が酷いの。」

ちなみに、ここにいる四人は知らない、後に袁紹馬鹿お嬢様改造計画は成功するのだが、
主な被害者が曹操ではなく赤毛の地味な子と黒髪のおかっぱ少女になることを。

—司—

酒の席でした馬鹿話なのに、なんで皆それを実行に移そうとするのかなあ、

僕は、保さんや桜花さん達と悪乗りをしすぎたかもしれないと後悔しましたよ。

何故か？

いま、僕の目の前にいるのが袁本初なんですけど、何この可愛い生き物！？

ドラマとかじゃ威厳あるオッサンが！優柔不断で常に疑心暗鬼な袁本初が！

将来確実に美人になるの確定な見た目、金髪ストレートのロングヘアー、

誰にも分け隔てなく接する謙虚で心優しい照れ屋な10歳の娘ですよ。

私と4歳しか変わらないですが、若干年の割りに精神が幼いかな？

これを髪の毛ドリルな高笑い恥知らずな馬鹿タカビーお嬢に改造するって、

ダイヤモンドを漬物石にするくらいの無駄遣いを僕達はやるんです

から。

宝石を泥の中に投げ捨てるのとどちらが勿体無いか。

酒飲んで盛り上がった時のテンションを素面の場に持ち込んではいけません。

反省しましょう。

「先生、郭凶先生、どうかされましたか、お顔の傷が痛まれるのですか？」

「大丈夫ですよ、ちょっと考え事をしていただけですから。」

ちなみにいま僕は覆面軍師“郭凶公則”として袁本初の家庭教師をやっております。

保さんが一応お前さんの身元ばれないようにと顔に大怪我を負った設定でいると、

大谷吉継みたいな白頭巾で顔隠していますが、僕の嘘を素で心配してくれています。

本当にいい子です、とても思いやりがある。

保さんはすごいですよ、こんな良い娘に呼吸するように当たり前に嘘を教えますし。

保さん酷いもんなあ、舌切り雀を読んであげていたと思ったら、小さいツヅラと大きいツヅラを選ぶなら大きいツヅラを選べ！そして客に選ばせるような試す真似をする雀なんか殺してしまえ！とか。

董卓にする気ですか、彼女を？

月ちゃん大好きな保さんからしたら袁紹は憎き反董卓連合の盟主とはいえ、それは史実の袁紹であり、ここは外史なのに、しかも連合は遙か未来なのに、月ちゃんがいじめられたわけでもないのに、あのシスコンは、まったく。

とは言いながらもまあ、僕もこの教育を楽しんでいます。

例えばある時は、

「郭図先生、この場合の城攻めにはどのような策を用いればいいのでしょうか？」

常に勉強熱心ですよ、軍事、政治とかいたる事に。

「いいですか袁家のような名門の戦いには策略など要らないのです、あれは兵を揃えられない弱小の考えなのです、数で押すだけでいいんです、

指示は単純に“雄々しく、勇ましく、華麗に進軍”これだけでいい

のです。」

私が教えているんですが、実にろくでもない教えですなあ。

またある時は、

「人は見た目で九割を判断します、だから袁家の威光を見せつけるため、

袁本初様の率いる軍の鎧は見た目を優先し黄金に輝く鎧が宜しいかと。」

馬鹿が来たと皆に分かりやすくするための目印としていいかと。

「郭図先生、見た目の装備よりも兵の錬度をあげた方がいいのではないでしょうか？」

うん、その通りだね袁紹ちゃん、でも、それでは面白くない。

「たしかに一理あります、ただ見た目から入ることも大事なのです。」

どうせ袁家の兵なんて錬度よりも数頼みなんですから、見た目だけで良いです。

それで戦場で立派的な的になってください。

またある時は、

「このような場合は誠意をもって応対すべきではないでしょうか？」

人と接する時は誠意は大事ですよ、でも、私は貴女にそんな物は望まない！

「袁本初様は他人を気遣えるとてもお優しい方ですが、優しすぎてはいけません、

そのような態度をとると相手は袁家を舐めてきます、時には見下しオーホッホと高笑いです。」

高笑いしないお嬢様キャラに何の価値があるのでしょうか？

「相手を侮辱するのですか？」

侮辱以外の何物でもありません、何故そんな疑問形？

「人はつけあがる生き物なのです、だから時には立場の違いを教え込むのです。」

どんどん実直な良い子を歪ませていきましょう、本当に酷いなあ教える事が。

オマケ

「生きる事全てが博打です、だから博打は徹底的にやりなさい、負けて金が無いなら借金をしてやればいいんです、勝って返せばいいんです。」

「そうだよなアニキッ、勝てばいいんだよな！」

「文ちゃん、それは危険すぎるよう。」

ふふふ、郭図として袁家で好き勝手やっていますが、たのしいですねえ、

あきらかに袁紹さん駄目な方向に突き進んで行ってますから。

本当に僕も保さんもろくな死に方をしないでしょうねえ、まあ、実際酔っ払ってトラックにひかれるとろくな死に方ではないですが。

ちなみに曹家では僕李儒として普段応対していて、保さんがたまに謎の軍師“許攸子遠”に、素直だった袁紹さんと違って曹操は大怪我をして顔隠していると言っていると疑ってきましたよ。

そこはさすが保さんといいましうか準備しているんですが、ただその準備が問題で、賊退治した際の賊の顔の皮剥がしていてそれを被っていたんですから。

少しその顔を見せたら、曹操といえども所詮は子供、すぐに黙りましたよ。

曹操を騙す為とはいえ、躊躇無くそんな物をよくかぶれるな！？と、

何処の羊たちの沈黙ですか？レクター博士ですか？保さん貴方は・・・。

「大事なのは覇道です！他者に頼る事なく自力で決着を着けるのです。」

「同盟を組んで攻める方が効率が良くなって？」

「曹操殿は他人の力を借りないと敵を撃つ事は出来ない。」

普段、勝てば官軍、使えるならば同盟だろうがなんだって使えなんて言う保さんが。

たぶん曹操には孤独な辛いルートを歩んでもらって、もし、曹操がでかくなったならば、

近隣諸侯と組んで一気に魏を攻めて滅ぼす気なんでしょう、酷いなあ考える事が。

オマケ

「夏侯元讓、武器なんて当たればいいんだ、貴様みたいな馬鹿は頭を使っても無駄なんだから、
考えるよりも貴様は刀を振れ！考えるな感じるんだ！敵を見たら突撃するんだ馬鹿なんだから。」

「きさまああああ馬鹿にしているのかー！ー！」

いやまあ、どう聞いても保さんは馬鹿にしているでしょう、何でわざわざ確認するんだと。

「夏侯妙才、貴女は分かっていますか？この世で姉こそが至高なのです！」

「たしかに、子遠殿に負けて額に肉と書かれ泣いている姉者の姿にくるものが。」

軍人としてではなく、人として駄目な方向に行かせるんですか色々たくらみますねえ。

ふふふ、曹操と袁初をもっともっと徹底的にいじりましょう僕達の玩具として。

後に歴史家は語るんでしょうねえ。

袁家も曹家も破れた理由は官渡でも赤壁でもなく、涼州を信用してしまい、

僕らみたいな酷い人間を教師にしてしまったことだね・・・ククク

最初は面倒臭いと思いましたが嘘教えたり袁家や曹家を玩具にするの楽しくなってきた、

どうせならば他の家もやってみるかな孫家とか、遠いから会いに行

けないし無理か？

あとは何処の家にやるかな？劉備は筵織りで儲けさせて商売人にしてしまうなんて面白そう、

それか周辺の賊共を太平要術の書で操って、劉備を村ごと焼いちゃうとかもいいな。

ふふふ、僕もとことんゲスな手段ばかり考えつきますねえ、まあ、この時代を楽しむならタブー無しでいいかなとですね。

僕も保さんも十常侍や何進とか馬鹿の相手で普段精神的に疲れていますし、

たまにはこういうストレス解消しないといけませんしね。

さて、次はどんな嘘を教え込みましょうかねえ。

そうそう、それにしても少しずつだが子供達がポンコツになっていつてゐるのに、

こいつ等の親達は気づかないもんなんですねえ、駄目ですねえ、そんな親では。

親ならば子供の事を常に見守っていてあげないと、世間には悪い人が沢山いるんですから。

第三十一話、袁家、曹家、お嬢様達への嫌がらせ（後書き）

恋姫で麗羽の無能具合や曹操の霸道主義とか、
なんであんな致命的な欠点を持っているんだ？と思う事があり。

どうせならばと保と司の二人の悪ふざけを原因にしてみました。

ちなみに書いている私が言うのもなんなんですが、

二人がお嬢様化させる前の賢い麗羽の可愛さがいいなど。

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております

第三十二話、洛陽攻略作戦開始（前書き）

何進はアニメ恋姫の何進ではなく、単なるおっさんにしました。

今回は保に司、何進に、十常侍の張讓、趙忠とおっさんだらけ、しかも、今回はギャグほぼ0、シリアスといえますか悪巧みばかりです。

第三十二話、洛陽攻略作戦開始

一保一

ある日の夕方

「街の酒屋なのですが、先程、何進大將軍様の使いの方が参られまして、

その際に頼まりましたお酒をお届けに参りました。」

荷台には酒の入った甕を満載した荷車を引いてきた酒屋の使い。

「何進様から話は聞いている、酒屋が来たら何進様の所まで持ってこさせろと言われている、

もたもたするな天下の大將軍様をお待たせするな、早くしろ！」

己が偉いわけではなく単なる門番に過ぎないが矮小なるプライドを守るため、

自分も將軍と同じだともいうかのように偉そうに命令をしてくる。

“ 実に愚かだ……”

内心呟いてしまう、皇后の兄で漢王朝の最高幹部である大將軍何進が、

酒屋の配達人に直接自分の所まで酒を持ってこさせろなどという、不可解な命令を出した事をおかしい？と思わないとは。

親切心でこれから会う何進に門番の解雇を伝えるべきか、ふと思う。

そんな事を考えながら何進宅に潜入と、さて、ちゃっちゃと何進に会いにいきましょう、
潜入っていうと泥棒かスネークみたいですね単にお仕事に來ただけですが。

とりあえず壁に耳有り障子にメアリーと言いますし、涼州の人間が何進の元に来た、
なんてことがばれないように気を付けて行きましょう。

そういえば、壁に耳有り障子に目有りと聞いて最初に想像するのが、
頭が碎けて死んでいる死体、室内は脳症と共に飛び散った耳や眼球が、
壁や障子にはりついている惨殺現場っぽいイメージが。

多分こんな認識する人間は世界でも私だけだろう、いや、司君もだな、
そんな馬鹿な事を思いながら目的の何進の部屋に向かう。

「何進大將軍、お初にお目にかかります涼州太守代理で参りました董孟高でございます。」

たまには真面目にやらないといけません、第一印象は大事です。
それにしても幾らこの世界は何でもありとはいえこの時期はまだ虎賁中郎將だったはず、
なのに既に大將軍の地位にいるという点に突っ込みたくはある。

「おおっ、遠路はるばる御苦勞、わざわざすまん、このような真

似をさせて。」

ほおっ、笑顔で迎えてきましたね、偉そうな態度はとりませんし、涼州はスポンサーですから上っ面だけでもキッチンとしようとか？

いや違うか、根は良い人と言うか、おおざっぱなどどこにでもいるおっさんなんだろう、

それが身分不相応な地位についてしまっただけなんだろう。

考え事はよしでしょう、今日は將軍の元に陳情に来たのですから、考え事して將軍のご不興を買ってはいけませんからねえ。

まあ本音は妹頼みでしかないこんな男に嫌われようが全く構わないんですが。

「いえ、何処にハエがいるか分かりませんから、特に十匹のハエはやかましいですから。」

「ハッハッハッハッ！！！」

何進が大笑しているよほど十常侍と上手くいっていないんでしょう、心底大笑いしていますどれほど十常侍の連中を嫌っているんでしょうか。

今の何進があるのは、十常侍の郭勝の後押しのおかげで妹が靈帝に嫁げたのを忘れている？

まあ、そんな恩よりも今は単なる目の上のタンコブにしかすぎないのでしょう。

私は十常侍を庇っているわけではないですよ、私達の本音は何進も十常侍も同じハエ。

「前々からワシと会いたいという話があったから時間を開けておいたのだが、

どういった用件かな？わざわざ涼州自慢の酒を届けに来て酌をしに来た訳ではあるまい。」

事前に話を聞いているくせに面倒臭いなあ、様式に拘るような事か？

「私達涼州の庇護者である何進大將軍様に悩みを聞いて頂こうと思ひまして。」

一応、身分が下であるこちらが陳情して助けてもらうという形にしないといけないのが、

こんなただいだけの愚図に頭下げるのも馬鹿らしいんですが、仕事ですやむを得ず。

「ほおっ、涼州の知恵袋と呼ばれている董孟高殿が悩みですか？稀代の天才が思い悩むのに、平凡な私なんかで相談の役に立つのか？と。」

ほお、私が単なる子供ではなく政治家である事は認識しているんですね、って当たり前か。

「わ、私なんかを御存じで。」

わざと大げさに驚いておきましょう、此方が洩らしたのが分からな

いとは・・・。

子供が来たらこの馬鹿なら怒るでしょう、だから、たんなる子供でないぞ、とね。

「知らないでも思ったか？」

してやったりな顔していますね、気づいていないのか馬鹿め！！
してやったりしているようで実は自分はしてやられたりという事に
気づかないのか。

あー、それにしてもまだるっこしい、いちいち分かっている用件を
延々と語るなんて！

なんて風には流石に突っ込めないから我慢します、ただ面倒臭いな
あ。

「実は今、私達家族が住んでいる自宅がかなり古く、また辺境にあ
り不便でして、
しかも、家族が増えすぎて手狭になり、更に隣家の鼠に悩まされて
いるんですよ。」

「あれほど稼いでいる涼州が引っ越し如きで悩むとは珍しい。」

その稼ぎも宮廷対策でお前さんみたいな馬鹿に配っているんだから
な。

「それで手狭になった古い家の代わりに良い物件が無いか探してい
たら、

隣家が丁度良い広さのようでして、まあそこは鼠が出るのが難点ですが、

出来ればその物件を手に入れ掃除をし、是非引っ越しをしたいなど。

」

益州という隣家に引っ越したいだけなんですよねえ。

「回りくどいな、涼州からわざわざ益州に移動したがるのは何故か？」

まあ、ストレートなご質問で御座いますこと、隣家としか言っていないのに、
とはいえ、事前にした交渉で話は済ませてあるから分かっているんじゃないか。

「これは異な事を私は隣家と話しただけで益州等とは一言も。」

まあ、事前交渉しているからお互い分かっていると思いますが。

「董孟高殿、先程も言ったがワシは回りくどい話が嫌いだ、お前さんが頭が良いのは知っている、今回の話の、益州牧の見返りはなんだ？」

今いる刺史の卻俟を辞めさせてまでお前達を据える利益はなんだ。」

馬鹿肉屋とか言いたいが、あー、面倒臭いなあ、こいつら、死ねばいいのに。

「益州からの金による支援は当然ながら、何進様が一番欲しがる物を用意できるかと、

「安眠できる布団か？」いえ、洛陽で事が起きた際の十匹の蠅退治に必要な兵の派遣を。」

布団って凄い答えが来たな、やはりこいつは馬鹿だ、致命傷の馬鹿だ。

「ふむ、対価として悪くはないな、とはいえお前らを州牧にしろと私に口出ししろと？」

ワシはあくまでも大將軍でしかなく政治に口出せる訳ではないのだから。」

よく言うよ妹におんぶで抱っこな外戚で政治に口出しまくっているのが、まったく。

「いえ、何進様は税收対策で陛下が考えている官位の売買の後押しをするだけでいいです、

こちらはそれが始まった際に金を払い益州牧の地位を買うだけです。」

お前さんみたいな馬鹿にはあまり借りを作りたくないの、自分でなんとかしますよ。

「ほう、ワシは何もしなくてもお前さん達の支援を受けられるというのか、いいな。」

都合がよすぎると疑問に思わないんですかねえ？

「もし董家の益州牧就任に反対する者が出た時にお口添えをしてい

ただければ、

そうですねえ名目としては涼州で五胡を押さえた実力を買って、益州に被害を出す南蛮など異民族討伐し治安平定のため、私は支持すると。」

まあ、反対なんか出るわけないように根回しはしておきますがね、とはいえ、保険はやはり必要ですからね。

「たしかに、こういう形ならばワシが横車を、と十常侍は難癖をつけ辛くなるな。」

お前さんも十常侍もいずれ派手にもめてもらいますよ、私達の管理されながら。

「これならば丸く収まりますし、大將軍様の手を出来る限り煩わせないで済みますので。」

この馬鹿には美味しい所だけを得られるように思いこませませんと。

「うむ、貴重な意見、実に参考になったぞ、涼州の漢王朝への忠誠はよく分かってる、ワシに安心して任せろ！悪いようにはしないぞ！大船に乗ったつもりでいるがいい。」

頼りにされて胸を張っていますねえ、私達に利用されているだけなのに。

「ありがとうございます、涼州の人間はこのご恩決して忘れません、では、お堅いお話は置いておきまして、何進様に献上品が。」

さてさて、これから更にもてなしますか。

「献上品か、涼州の名産品か？何を持ってきたのだ？」

子供のように目を輝かせているよ、いい年したおっさんが。

大將軍になってしまったのが不幸なんだろう、このおっさんは、単なる肉屋のおやじのままであったならいいおっさんであったんだろうな。

「まず一つ目は涼州の作りだした酒である焼酎の10年物の古酒です、

涼州は大秦と取引しておりますが、彼らの皇帝ですら飲む事が出来ない貴重な品です。」

約10年前に初めて作った焼酎を寝かせたものですから、そうでなくても焼酎は涼州が作ったた新しい酒で流通量が少ないのですから。

「大秦の皇帝ですら口に出来ないほどの貴重品とは、じっくりと味あわせてもらおう。」

単なる肉屋上りが皇帝ですら口に出来ない物をなんて言ったから、まあご機嫌な事で。

「もう一つは、先程何進大將軍がおっしゃられたように、

大將軍という地位におられては心休まる時など無いでしょう。」

さあ、司君と二人で用意した悪意のプレゼントを差し上げましょう。

「うむ、このような地位に着くと、無理難題が多くてのう、お前さんのように氣を使ってくれる人間がどれほどいる事か。」

演技ではなく疲れた表情を見ているな、それが嫌なら辞めろといいたい。

「何進様どうぞこちらを、疲れを取り心を癒してくれる霊薬阿片でございます。」

ふふふ、どうせ駄目になるならば徹底的に落ちてくださいね。

「ほお、そのような素晴らしい物があるとは、知らなかったぞ。」

知っていたらこんなヤバイ物に興味は持ちませんよ、フフフ。

「大秦よりも先、西の果てにあるある島国はこの霊薬の為に戦争をしたくらいですから。」

阿片はこの大陸を食い物にして、侵略されるきっかけになったんですね。

「涼州の王朝への忠誠、この何進しかと心に刻んだぞ。」

さて、此方は上手くいきましたが十常侍側に行った司くんは無事に

終わっていますでしょうか？

――司――

さて、何進の方に行った保さんは無事終わっていますでしょうかねえ？

僕は同じ時間に十常侍の張讓の家で、張讓、趙忠と話をすることに。

「張讓様、趙忠様、これは“大秦の皇帝すら”未だ飲む事が出来ない、

涼州の酒である焼酎、それを10年寝かせた貴重な一品でございます。」

張讓はシルクロード経由で来た大秦のワインに喜んだなんて話もあるくらいなので、

大秦の皇帝すらという点を強調しましたら実に喜んでいきますよ、僕からしたらたかが焼酎くらいでという感じですよ。

沖縄で飲んだ泡盛の30年物やウイスキーの50年物とちがって、この世界で作った酒はまだまだ未熟でなんちゃって古酒という感じですか。

「土産で斯様に貴重な酒を戴けるとは、一宦官に過ぎない私なんかに一体何の用が？」

多分、保さんが行った何進もこんな感じでとぼけたりなんでしょう、

張讓も趙忠も前以て工作しているから知っているくせにボケナスが、まったく。

「張讓殿が言われたように、このような貴重な物に如何に礼をすれば。」

いえいえ、礼だなんて、お題はあんたらの命みたいなものですから。

「お二方のお力を是非お借りしたいと思ひまして本日は参りました、実は私の主を涼州牧に任じていただきたいと思ひまして。」

「これはおかしな話を、董家の今までの活躍ならば何もせずとも州牧の地位など、涼州牧よりも更に上を目指すというのでもないのならば、頼んでくるような事でも。」

見た目からして狸な張讓の親父が戯言を、知っているだろこちらの要求を。

「たしかに董家の活躍は漢王朝にも響いているからそんな心配せずとも。」

こちらの趙忠は見た目は狐だな、狸に狐、何処の昔話だ。

「いやいや、おとぼけはなしにしましょう、涼州を正当な所有者にという事です、

是非、涼州の地は馬騰にお任せいただきたいのです。」

こちらから望みをいきなり言うなんて弱みをさらけ出すだけなんです、
腹芸を延々としているのもつかれるのでとっと話を終わらせましょう。

「董家の活躍といいますが涼州の五胡対策も馬騰が現場で話を纏めているのですから、
そういった点からも馬家に正当な評価をしていただきたいというだけです。」

まあ、董君雅様の融和政策は見事ですが、琅？さんの役割が大きいのも事実ですから。

「ふむ、たしかに馬騰殿の活躍は目覚ましく、軍を率いてもよし異民族との交渉もこなす、
と八面六臂の活躍をしている州牧に適しているのでは？」と宮中でも言われておるしな。」

張讓がコメントすると、それに乗っかるように趙忠も喋り始める、
二人以内と喋れないのだろうか、どちらかがかけたらおしまいかな？

「だが、今、涼州をまとめる董君賀を太守から外す落ち度などないぞ、
無理に董君雅を外して、馬騰殿を州牧にしたらやかましい事にならないか。」

よくいいますなあ、落ち度が有る無い関係無く、因縁つけて蹴落とすの得意な連中が。

まったく狸と狐ですね、まあ人を騙していると思って良い気になってください、僕と保さんという二人率いる涼州に踊らされている事に気づかず踊り続けなさい。

「その点にしましては董君雅様には益州牧でも任じるのはよろしいかと、五胡対策、涼州の治安改善の褒美という名目で任じるのはいかがかと。」

益州をよこせなんてふざけた注文でしょうが、そこを飲ませましょう。

「ふむ、上手い事を考えましたな益州は高祖劉邦の帝業の基礎となった地で、

涼州での成功による栄転という形ならば文句は無いでしょう。」

趙忠が理解したようすな。

「だが、実際は南蛮の脅威に晒され、治安の悪化もある、また僻地で左遷先と。」

張讓がそれに続く

「しかも董家は涼州の出身ですから、故郷から引き離すわけですの
で。」

益州をあげるのは高い物ではないという風に思いこませているだけで、

董家への嫌がらせという風に話が代わっている事に気づかないでしようが。

「董君雅は異民族には上手く対応しているが、漢への忠誠は物足りないからもう、

そういう点としても面白い、ただ州牧で董家、馬家だけ優遇するわけにはいかんじゃろ。」

張讓のおっさんの言う忠誠ね、この馬鹿共への上納金が足りないという事ですな、

今の涼州から物を貰うなんてとんでもない借りを作るだけなのに。

「州牧制を後押しした五月蠅い劉君郎様を交州牧に、荊州太守である劉景升様を荊州牧に、

後は袁家、曹家といったように各家からも州牧に任ずるという形にすれば。」

彼らにとっては魅力的な提案になるでしょうねえ、邪魔者を洛陽から排除できるんですから。

「私達が陛下にお頼みすればどうにでもなるがこのような大計画を実行となると疲れるな、

このような深い疲れがとれるような、私達を心底から喜ばせる物はあるのかね。」

ふふふ、露骨に要求するようになってきていますねえ、

実にありがたいです、話が早くなるのですから。

「良い話があります、ただ、さほど疲れないように出来ますからご安心を、

陛下が進めようとしている官位の売買を後押しするだけです。」

「そんなに楽になる物かね。」

「ええ、理に目ざとい物ならば喜んで州牧やら太守の地位を買うようになりますよ、

それに今回の一番の利益は張讓様、趙忠様にはたまらない物かと思えますが。」

「ほう、それほどまでの価値ある物が手に入るのかね？」

利益がなんなのか分からないんですかねえ、察してくれてもいいのに、

まあ適度に優秀で、それなりに馬鹿であるから十常侍なんかでいるんでしょうが。

こんな事思ったら保さんに「お前から見たら大抵が馬鹿ばかりだ」と苦笑されそうか。

「一番の売り物は時間であり、安心ですね、靈帝の周りにたかるハエがいますが、

そのハエに近い連中などを榮転等という名目で皆洛陽から追放できるのですから。」

二人が唾を飲み込む音が聞こえましたよ“鈍いんだから、もう、いやんなっちゃう！”

うん、可愛く言ってみたが、精神年齢46歳のおっさんが言う台詞ではないですね。

「事が起きた際にはハエには私兵等いないのですから、大將軍で禁軍の指揮者ですが、あくまでもそれは陛下がいた時のみですから、ゆっくりと排除できますよ。」

靈帝のおっさんが死んだ時の事を簡単に話しているなんて、恐ろしく不穏当な発言していますが誰も気にしませんよ、所詮はその程度の皇帝ですから。

「涼州の人間は恩には恩を、と必ず報いる者です、必要とありましたら、有事の際の護衛および汚れ仕事を受け持たせていただきますが、ふふ。」

不敵に笑いながら。

「あつ、もちろん金銭、物資という形でしっかりと恩に報いさせて頂きます。」

彼らの大好物をあげる事を伝えないとですね。

「まだまだお若いのに恐ろしい頭のキレだ、貴殿を敵にはまわしたくないな。」

「実にすばらしい、貴殿や貴殿を遣わしてきた馬膳殿には悪いようにしないからな。」

このお二人さんとはいいい関係を気づけそうですね、私に操られるだけの人形として、邪魔になったら捨てればいい、使い捨てしていた側がされる側になってもらいましょう。

「では、仕事の話は此処までにして、お二人に献上したい物があります。」

僕と保さんの二人で選んで送ってあげるプレゼントです、彼らのような人間には実にお似合いだと思いますが。

「先程の珍しい酒や、今までのようなありがたい話だけでなくまだあるとは。」

「李文優殿の恩義にはしっかりと報いさせて頂きますぞ。」

ええ、心底喜んでください、死ぬほど嬉しいと思いますよ。

「普段からお仕事が忙しく、また大変で心休まる日々など無いでしょう、

そのようなお二方の為にこそあります霊薬阿片でございます、阿片は、吸う事で疲れを取り、心を落ち着かせてくれる、これぞまさに霊薬です。」

どうせ貴方達は死んでるような人生、これで死んでも大して変わらないでしょう、

ふふふ、しっかりと味わってください、もう涼州無しでは生きれないくらいに。

それにしても、僕も保さんも本当にろくな死に方しないでしょうな、正義の味方がいるのならばまず僕達二人を殺すべきなんでしょうね。

死にゆく漢王朝をこれから涼州勢がしっかりと搾り取って貪らせていただきますからね。

さようなら靈帝、さようなら十常侍、さようなら何進、死ぬまでの短い時間をたっぷり楽しんでくださいねえ。

第三十二話、洛陽攻略作戦開始（後書き）

うーん、シリアスになり過ぎたかな？

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第三十三話、三人で悪巧みを話そう（前書き）

久しぶりに神と保、司といった会話を延々と、
今回もギャグがほとんどない回ですいません。

ただ、二人の悪ふざけといいますか悪巧みは健在です。

さて、今回はどうなるのでしょうか？

第三十三話、三人で悪巧みを話そう

一保一

テンテンテンテンテテテンテレレレレレ♪

うん、洛陽でもこの曲が流れるんだね、今日はいつものように嵐さんと司君で洛陽を巡回中、
涼州で見慣れているあの店があったので入って見る事に。

「李CEOお疲れさまです。」

忘れていた司君はこの武器屋の経営者でしたね、遂にCEOですか、三国志の時代を滅茶苦茶にするとしていたが横文字役職採用ですか。

「しーいーおー？」

「保さん、何が言いたいか分かりますよ、だがまだ甘い！
ちなみに神は今FC経営から本部に引っこ抜きストアアドバイザー
ですから。」

兄さん頭が痛いよ。

うん、今頃ナイトヘッドやっても分からないね、今の人には分からないね。

いつも言っているが神って偉いんだよね？なんで巡店指導員なんかを？

「神ストアアドバイザーお疲れ様です。」

スーツに首から社員証ぶら下げてコンビニでたまに見る人な格好だ、本当に、しかも、呼び名神って、そのまんまなのね。

「保さんがなんか色々と話をしたいみたいで、とりあえず奥で。」

司君と神に連れられ、いつものように店の奥からあの部屋に。

“あの部屋”と言ってもSEOAにあった、あの部屋ではないぞ、リストラ予備軍を送り込み自分から辞めたいと言わせるあの何もない部屋では。

そういえばセ○ガガであの部屋が無いのには笑ったが、いやまあ、ゲームには出せないし、あったら笑えないか。

まあ、そんな話はどうだっていいや。

真っ白いいつもの部屋の真ん中にテーブルと椅子が用意され、テーブルの上にはケーキと紅茶が用意されている。

「今日はトシ○○イヅカの山椒と胡椒をきかせたチョコレートムースを。」

神、お前はOLなのか！？何故そんなにスイーツに詳しいんだ！お笑い漫画道場な過去を捨てた嫁を持つ男の店のケーキとか良く知

っているな!?

「これ、作者が僕のモデルになったあの男に喰われてマジギレした奴ですよ?」

司くくん、君は何訳の分からない事を言っているんだね!

『そうじゃ、その夜に復讐だ!と言ってバーであの男がキープしている焼酎をあけて、

30歳過ぎているオッサン二人が掴み合いになったんじゃよな。』

おい、神まで何を言っているんだ!

話が進まなくなるぞ、そんな話をはじめると終わらなくなるぞ。

今日はそんな恥ずかしい話をしに来たわけではないのに。

「雑談を止めて、肝心要の話をしましょう。」

私が真面目にならないとこの話は終わらなくなるから頑張らないと。

「保さん真面目はいいよケーキを楽しもう、チョコレートの甘さだけでなく、

口に含むと広がる粒胡椒のもつピリ辛さ、山椒の香りがふんわりと広がって、

うん、実に堪らないですね、大変美味しゅうございます。」

司君料理記者歴40年の岸○子みたいなコメントしないでくれ。

「うめえー、初めて食べたがめっちゃ美味しいじゃん。」

「岸○子って料理の鉄人の頃から料理記者歴40年の肩書きが変わらないが、時の流れから外れた住人なのかな？サンジェルマン伯爵みたいに何百年後にもいるのか？」

司君、岸○子について私に聞かれても全く知らんがな、料理記者歴40年は、女性の歳の事を言わないのはマナーだからじゃねえのか？

『グランナイツの諸君、合神せよ！とか言いだしているかもしれんじゃろ。』

司に神、その二人待てーい、なんでそんな話で盛り上がる！

神、何で超重神グラヴィオンを知っているんだ

四半刻後

肉体言語でやっと収まった、放っておいたらスパロボとかの話になるぞ。

「前に話をしたが、こっちはさんざん暴れているがこの外史は落ち着いた？」

一応気になった事を聞いてみましょう、前回話をしてから半年くら

いしかたっていないんですが。

『まだ外史が固定されるほど完全ではないがあともう一步くらいじゃ、普通10年かかる所を半年で安定に近づいているぞ、何でこんな早いんじゃない。』

神、分かると思うが、俺らが好き勝手やっただけですが。

「外史？安定？」

「好き勝手暴れてあり得ないようなことした方がいいって言うた
だろ、

だから、僕達なりの三国志を必死で進めているだけで。」

司と私がやり過ぎというくらい暴れていますからねえ。

『好き勝手やりすぎじゃぞ、何進や十常侍達に阿片教えるとか。』

えっ！？怒られるの？好き勝手やっていいと言われたからなのに。

「怒っちゃやーよ！」

「王子様コイツの変な喋り方はなんだ？」

「司君、さすがに文章では分かりづらい、志村けんのやるオカマ口調は。」

懐かしいなあ、志村けんがいきなりやチョースケによく言っていたが、
だが、今の世代には分からないだろう。

「なななな、なんですとー！！」

なんかねちゃんみたいな反応しているな司君。

『今の世代には八時だよ全員集合はわからないぞ。』

神も私と同じ事思っていたか。

「絶望した！ドリフやひょうきん族が通じない世代に絶望した。」

絶望って大げさな、と言いたいが、ここら辺の話題通じないのはさ
みしいねえ。

『どうでもいいが話が進まなくなっているが大丈夫なのか？』

うん、気をつけないとあきませんね。

それはいけません、話を進めましょう。

『いやまあ、怒ってはいないんじゃない、むしろ感心しているんじゃない、
よくやれるなど、今回のような行動は普通正義感で止めようとしな
いか？』

まあ、躊躇してしまうかもしれないね普通ならば。

「手段を選ばない分早く終わらせられますから、それだけですよ。」
やるが多すぎるからチンタラしてられないんですよえ。

「ルールや正義の価値は場所や時間、育ちで常に変わるものでは？」
その通りだね、皆が一緒なのは管理社会とかどころじゃなくて問題だらけだよね。

『ハッハッハッ、お前さん達は愉快だなあ、普通ならば神に言われたら、
悔い改めるとか泣いて許しを乞うたりするんじゃないかな。』

「神？」

私と司の会話が聞いていて心底愉快なんだろうな、楽しそうに笑っているよ。

「ご希望ならば今からそうしましょうか？」

神が望むならばたまには神孝行でもしますが、演技ですけど。

「多分世界一の大根役者になりますよ。」

そうだねえ、自然に出来るんだったらアカデミー主演男優賞取れますよ。

『さっき言ったとおり怒っているわけではない、世間と違うなと。』

世間と一緒にって、そんな大事なんじゃないかねえ？

「世間を知っていますし、常識的だと思いますがね私は。」

この作品でも私なんか常識的なキャラになるかと思いますが？

メタな発言はいけませんね、あと司君が心を読んで突っ込みたいよう
うで。

「保さんの常識って、メキシコの麻薬カルテルとか？あーいった組織的な常識ですか？」

「めきしこ、まやくかるてるってなんだ？」

あの一、私はどんな蛮族でしょうか、警察と戦争なんてやりませんよ、

法を順守する、ごくごく一般的な小市民にしかすぎないのに。

『まあ好きにしてくれ、外史を消滅させるよりは遥かにましだ、それにお前さん方に好きにやれとワシが言ったんじゃない。』

「消滅って何だ？」

今さら駄目と言われても辛いですよ。

「さすが神！話わかるじゃん、だてに地球を巨大なウォシュレットにしている！」

司君、それはノアの箱舟の件ですか？

とりあえず突っ込みたい所があるので突っ込んでおきましょう。

「司君、ウォシュレットはT○T○の商標登録です、
せめて、温水洗浄便座と呼ぶべきです、他社に悪いでしょ。」

IN○Xやパナ○ニックや日○とか他の温水洗浄便座製造メーカー
に悪いですから。

『ワシの偉業をサニタリー用品と同等扱いにするな、だいたい尻は
洗っていないぞ、
だから、それを言うならば水洗便所でいいのではないか？』

むう、たしかに水洗便所といった方がいいかもしれませんね。

「保さん神がこちらに染まってきましたね、こちら側に。」

「うん、いい感じに染まりすぎだな。」

神様がまさかこんなにこちらに染まるとはねえ、まあ、神って結構
エゴイストやしな。

『気になっているんじやが、ちなみに次は何をやるつもりだ？』

普通の人間とは違う、かき回す人間のやる事に気になって仕方がな
いよう。

「僕の考えている案は色々ありすぎて困るんですよ、益州が手に入

り次第領内統一、涼州を併合して建国する、うちは善政を引いていますし劉備の入蜀を防いだりして、あと孟獲が出てくる前に南蛮を制圧し、そのあと人種融和政策で南蛮を併合しようかなと。」

うん、良い案ですねえ、南蛮に煩わされて領内の治安が乱れるのはいやですしねえ。

「私としては今やっているんですが司馬家経由で水鏡先生こと司馬徽を引き込もうと、荊州から連れ出すことで、諸葛亮やら鳳徳を引き込めないか実験してみたい。」

人材育成の点から水鏡、盧植とかは引っ張り込みたいんですがねえ。

「僕としては史実の董卓のように洛陽に入るようになるならば大谷関、虎牢関といった関に他国は知らないような大砲などの火薬兵器を設置し、関をイゼルローン化させてしまっただけで簡単には通過できないようにするとか。」

面白いでしょうな、トーチカ作ったり、関をコンクリで固め大砲設置したり、ただ数があるだけの連合軍をアウトレンジからボコボコに。

「あとは黄巾党を私達が管理しながら暴れさせるのも面白そうですかね。」

うん、これは二人で前々から話していた件なんですよ。

「私としては高句麗、烏丸、五胡、山越など異民族と協力関係の維持を、

反董卓のような事態になった瞬間に一斉に蜂起させられるように、なんてのも。」

こういう勢力と結んでおいて常に他国をかき回せるようにしておきたいですよ、

反董卓や官渡とかで拠点がボコボコにされていたら面白いだろうなあ。

「後、僕が考えているのは三国志演義でいう周泰や蔣欽みたいな江賊あがりを取り込んで、

呉や荊州にも負けないような船団を組んだりするのも面白そうで、南船北馬どころでないような、陸、海、何でもありの部隊を作るとか。」

たしかに今順調に進んでおりますしこのまま二人の計画通りにいけばこちらは大国で、

そうなると曹魏ではなく涼州益州連合が赤壁をやるかもしれないので準備は必要かと。

とはいえ、無事に涼州、益州連合国家が出来るとも限りませんが。

うん、私や司君の意見はどれも全て絵に描いた餅でしかありませんが、

どれも実行できたらたしかに面白いなという物ばかりで。

全部出来たら、うん鬼だね、曹魏？孫呉？相手にならんよ、と。

「まあ、夢ではなく現実的な所だと涼州で上手くいつている保育園制度の先を、

私や梅花さんを中心に教え育てる軍事学校を、司を中心に育てる医学学校設立を。」

国を発展させるためには軍人や医者はいくらいても困りませんから是非やらないと。

「人材育成もですが今の開発を発展させ重工業化を推し進め、富国強兵策の実行ですかね。」

うん、富国強兵というのは分かりやすい指針ですしねえ。

「あと私が考えているのは、まだ量産化は出来ていませんが火縄銃は出来たので、

次は量産化、ゲベル銃やミニエー銃といった更に進化させるのも。

」

他国には火縄銃量産も脅威でしょう、ここで更にミニエー銃や、アームストロング砲とかの開発成功したら大変面白い事になるでしょうねえ。

『どれも実に野心的な野望じゃな、大陸を支配出来るじゃろうな、中国という意味ではなくユーラシア大陸全土を。』

確かに出来そうですが、ただ、二人ともそこまででかい夢は持っていないですよ、

実際そんなでかい国なんか支配出来ても管理しきれないだけですからねえ。

「実は僕の計画で保さんにも話をしていないぶっ飛んでいる計画がありますよ、

ただし、聞いたらイカれていると思いますよあまりにもふざけていますから。」

司君らしくない勿体ぶった言いかた、よほどふざけた計画なんですよ、楽しみだ。

「イカれているのは元からだろ。」

『今までの計画でもかなりはじけているが、それを超えるというのは気になるぞ。』

神も食いつきますか、どんな楽しい事を教えてくれるんでしょうかねえ。

「大したことではないですよ、天下三分の計なんですよ。」

司君がぶっ飛んでいるとか散々前振りした割りには普通な答えですね、

三国志で行き着く奴ですね、これがどうイカれているというのでしょうか？疑問ですよ。

司君が話辛そうなというか、内容を話していいのかという感じで思
い悩んだいるようで、
いつものようなカラカラ笑うような表情をしていませんねえ、
まさか！？

「史実の曹魏、孫呉、劉蜀の天下三分ではなく、もしかしてだが私
司、月で天下三分か？」

パチパチパチ

「良く出来ました！大当たり！！！！！！」

私の行き着いた結論を手を叩き笑いながら正解と伝える司君。

『確かにそれは普通ならばイカれていると言われるな。』

神もあまりにふざけている答えに驚いたようで、驚く神なんて見れ
ないぞ。

まあ、普通の人は神に会う事すらないんでしょうが。

一司一

流石保さん、僕の考える事すぐに分かるんですから、

前世から含めて20年以上の付き合いになりますが、流石ですよ。

「劉蜀は益州涼州連合でまとめてしまうので存在しなくさせますが、例えば保さんが曹魏に、僕が孫呉に着く事でまとめてしまうと・・・ククク。」

いやあ、感情を押さえているんですがつつい黒い笑いしてしまうんですよ。

「司君も企む事が実に悪いなあ、まさか曹操も孫権も本人達は頑張っているが、

実際はこっちの匙加減で存在しているだけというのが、当人達は踊らされているだけなんて。」

これは実に面白いと思いますよねえ、こっちが人形遣いで徹底的に操ってあげると、

これらの国の王に仕えているふりで仕えさせているんですから。

『二人は本当に面白いな、徹底的にかき回してくれと言ったワシが引き攣るんじゃないかな。』

ふふふ、何でわからないんですかねえ、僕達にかかればこんなの日常茶飯事なんです。

「いつも言っておりますが“おもしろき こともなき世を おもしろく”ですよ。」

面白さは人から与えられるのではなく自分で見つけないですよ。

「司君、いつも言っているやん、あの世の高杉晋作が蘇って殴りに来るぞ。」

「高杉晋作って誰？」

蘇ってきたら舌先三寸で丸めこんで、一緒に遊んでもらうだけですよ。

『外史を安定させるという名目はどうでもよくなってくるぞ、楽しませてもらうぞ。』

ふふふ、神様安心してください、言うまでも無くたつぷりと楽しませてあげますよ、

感謝しているんですよこんな楽しい世界に送ってくれた事を本当に。

保さんと二人でつまらない常識なんか一切無い世界で遊べるんですから、

ただ僕達の活動は普通の人が見たら薬が強すぎて毒になるかもしれないでしょうが。

『そうだそうだ、二人に聞きたい事があつたんじゃ。』

なんでしょうかねえ、二人に聞きたいなんて。

『お前さん方と一緒に来てくれたそちらの女性をワシに紹介してくれないのか？』

あと、そちらの女性が話についていけないんじゃないのかね？』

そちらの女性？

横を見してみる

「「あつ嵐さん!？」」

保さんと一緒にいつもいるから気づかなかった、待っててくれと伝えるの忘れていた、
さてさて、どうするかなあ?というか、どうにかしないとまずいだろう。

『おっ、第三者を巻き込んだことで更にこの世界が安定したようじゃぞ。』

いやいやいや、今はそれどころじゃないだろう、この馬鹿神!?

さてさて、どうしますかねえ、うん、まいったね・・・。

結局神に頼みこんで嵐さんに此処であつた事の記憶をちょっと消してもらって済みました。

あぶねえ、聞かれたらまずいんでもない事を喋りつづけていたな。

「保さん頼むよお、自分のかみさんをしっかり管理してくれよ。」

「いや護衛であり、私の伴侶として自分と常にいてもらうから当たり前すぎて、ついね。」

いやいやそういう問題じゃないだろ、保さんも嵐さんに弱いんだから、まったく。

ちっ、モゲちまえよ。

第三十三話、三人で悪巧みを話そう（後書き）

嵐さんがいるが気づいていなかった感を出したかったんですが、自然な感じで表現しようにも、私の表現力の無さでは難しい。

まあ、難しいとか以前なんでしょうがね。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第三十四話、洛陽滞在中な人々の平穏な休日（前書き）

今日は前回、第三十五話の後日談と言いますか、涼州から来た人達とかの様子を。

第三十四話、洛陽滞在中な人々の平穏な休日

—嵐—

なんか記憶が昼過ぎくらいから無い、俺はどうかしたのか？

って、俺はなんで今、俺の王子様におんぶされているんだ？

朝、俺の王子様に、アイツと俺の三人で洛陽の街を散歩しようと言われて、

内心、アイツ邪魔だからいなくなれと思ったんだが。

ただ王子様がアイツや俺を誘ったから、俺が文句言うわけにはいかないのが、

アイツが勝手について来たわけでないし、嫌だけど仕方ないと。

それでアイツがやっている変な武器屋に行ってから記憶が無いのが、気づいたら王子様におんぶされていた、俺に何があったのか？

とりあえず、俺が目を覚ましたの王子様に気づかれたらおろされちゃうから、

もう少し寝ているふりしよう、たまにはこうやって甘えないとな俺も。

おんぶされながら洛陽の街を歩いているなんて、普通なら恥ずかしくて仕方ないが、

俺は寝ているんだから、恥ずかしい事は無いよな、あつ、王子様は

恥ずかしいか。

でも、ごめん、王子様もう少しだけ甘えさせてもらうぞ。

「聞だけでなく甘えん坊さんなんだから、嵐さんは。」

すっかり気づかれていた、王子様ズルい、わかっていたなら言ってくれよ！

あと気付かれてると分かったらなんか物凄く恥ずかしくなった。

「は、恥ずかしいからおろしてくれー！！」

こうなったらジタバタして脱出しかない。

「嵐さんは私に甘えたいんでしょ、だからおろしません！！」

太ももをさっきよりガッチリと押さえられて逃げられなくなっちゃまった。

「・・・いじわる、でも、そんな王子様大好きです。」

は、恥ずかしいけど、素直に思っている事を王子様の耳元で囁いた。

「フッフ、照れ臭いですよ嵐さん、じゃあ、その言葉を部屋で証明してもらえますか。」

しよ、証明って、まだかなり日も高いのに、夜まで相当時間あるのに、
でも、王子様と部屋で好きって証明って……えへへ。

この後おんぶされたまま部屋に戻ってまだ日が高いのに閨で色々
意地悪な事された。

王子様普段とても優しいくせに意地悪なところがあるのがちょっと
嫌だ、

ううん、でもそのちょっと嫌というのが好きなんだけど。

うん、閨で王子様が俺にしてくる意地悪なんか大好きだし……。

―日&光―

久しぶりの休日っす、暇っす、だから、阿多と調練することにした
っす。

さすが阿多っす、相変わらず強いっす、ただ自分も負けてないっす。

阿多が愛用の武器昇竜偃月刀で斬り払ってくるのを自分は槍で同じ
ように斬り払いで、
お互いの武器がはじかれて阿多が距離を取ろうと後ろに下がるのを
見逃すほど甘くないっす。

自分は間合いを詰めながら三連突きっす、ちん、水月、金的の正中線狙いの突きっす、

阿多はそれを読んでいたので左に飛んで避けながらの斬り払いしてくるッす。

でも、自分も阿多の動きを読んでいたっす。

間合いを詰めて自分の槍の柄で阿多の昇竜偃月刀の柄にぶつけて攻撃を防ぐっす、

そして、そのまま押し合いになったっす、自分は体勢崩す覚悟はあるっすが、

此処で決めてやろうと右の膝で阿多の腹に一撃入れてやったっす。

ただ、押し合いになっていたので膝蹴りの威力が弱かったっす、阿多はそれを読んでいてわざと腹で膝蹴りを受けていたっす。

自分が蹴りいれたせいで片足になり不安定な所に阿多は更に押し込んできたっす、

自分は倒れたっす、上になった阿多は偃月刀の刃を首筋に当てたっす。

自分の負けっす。

攻撃を読んで無理に避けようとしてないで受けて利用するなんて、やられたっす。

この試合では負けたっすが、次の試合は自分が優位に立っていたっ

す、
今度もさっきみたいにもつれ合いになったっすが、自分の左肘の一撃が阿多に決まったっす！

阿多がよろけたっす、自分は肘を入れた時の勢いを生かして回転して、
もう一発肘を入れようとして決まったと思ったっす。

「あの万年発情バカップルが、チクショーもげちまえ！！」

いきなり文優がわけのわからない事を叫びながら現れたっす、
あまりの事に驚いて自分も阿多も動けなかったっす。

文優は更に叫んでいたっす！

「こっちはいい人だったがいつのまにか爆弾案件になって、
こっちはいつも涼州から届く手紙を読む度に胃が痛くなるのに！！」
何なのか分からずにいた自分っす、それに対し阿多は頭良いっす。

「嫉妬か、なまじ愛を知った為にその愛がある故に苦しむ。」
多分意味深なんす、ただ、自分には何言っているか意味が分からない
いっすけど。

訳の分からないこと一通り叫んだと思ったら、文優がこっちに来た
っす。

「キサマは弱い、だから僕がキサマを鍛えて最強にしてやる！」

目が血走っているっす、片手には文優の得物の鉄扇を握りしめているッす。

明らかに八つ当たりっす、理不尽すぎるっす！

「天は我を見放したか。」

阿多諦めたら駄目っす、そこで試合終了っす！

殺られる前に殺るっす、阿多の時のように寸止めだとか無いっす、自分と文優の力の差では本気で殺しにいくしか生き残る目はないっす。

「ウオオオオオー」

文優の間合いに飛び込みながら檣で斬り上げるツす、それに対し文優は読んでいたのか、左手に持った鉄扇で檣の穂先を引つ叩きながら、空いていた右手の掌打が顎に入つたつす。

文優が前に言っていた脳が揺れて頭蓋骨にぶつかって立てなくなつたつす。

脳震盪っす。

一撃で立てなくなったっす、実力差があり過ぎるっす、阿多の時みたいないな接戦と違って完敗っす。

「さあどうした？まだ脳震盪ただぞ、かかってこい！！
さあ戦いはこれからだ！！お楽しみはこれからだ！！ハリー！ハリー！ハリー！！ハリー！！」

文優がヤバいっす、これは確実に殺す気っす、鍛えてやるとか最初言っていたが嘘っす、
確実に自分を殺る気に違いないっす、賊討伐でも感じた事がない恐怖っす！

「そこまでだー！！！！！！！！」

阿多が文優の背後から昇竜偃月刀で袈裟斬りっす、これなら殺れる！！

「甘い、殺す気ならば声をあげずに殺気を出さずに静かに斬りかけれ！！！！！！」

左手を後ろに回し、阿多の振りおろした昇竜偃月刀の刃を鉄扇で防いだっす、
そして、そのまま振り向きざまの右拳っす、阿多は後ろに飛び退き避けたっす。

「正々堂々とか甘い事を言わず、卑怯とも思わず背中から斬りかかる実に素晴らしい、それでこそ軍人の戦い方だ、ならばそれに応え全力で戦ってやろう。」

14歳のガキの台詞じゃないっす、自分を瞬殺したが本気で無かったっすか、

文優との力の差は分かっていたっす、でも本気で無くて一瞬とは思わなかったっす。

上着を脱いで上半身裸になった文優が構えて言ったっす。

「かかってこい。」

横薙ぎはしゃがみ、切り上げ、切り下げは最低限の横の動きだけであわし続ける、

阿多が攻撃し続けているのを文優は全て紙一重で避けて格の違いを見せつけているッす。

阿多が振りおろした刃を両手で挟んで止める白羽取りっす、前に文優や孟高がやって見せたがそれは一般兵の攻撃で洒落だったっす、

今回は本気でいった阿多の殺る気の速さの刃を止めるとは。

「どうしたこの程度か？では、次はこちらからいくぞ。」

文優が変な構えをしたっす。

両足を開き両手は上にあげた変わった構えっす、前に孟高が言っていた「オーガの構え」とか言う奴っす!!

文優の背中に鬼の顔が浮かんだと思ったら、文優の右拳の一撃が阿多を打ち抜いたっす。

一撃で阿多が吹き飛ばされ、たかが一撃っす、されど一撃っす。

阿多が死んだと思ったくらいの一撃だったっす。

「さあ、二人とも早く復活しろ、まだまだ時間はあるぞ、楽しもうじゃないか」

鬼がいるッす、背中に鬼の顔が浮かんでいたのはだてではない、本物の鬼がいたっす。

今日の自分と阿多は何も悪い事はしていないのに、何でこんな目にあうっす!!!!

一司一

ちくしょーーー、なんなんだ保さんと嵐さんのあのイチャラブ具合は。

こっちは保さんが嵐さんに待っていて言わなかった為に、

神との会話をガツツリ聞かれて、これはヤバいと肝を冷やしていたというのに。

神と話をして嵐さんの記憶を消す事でなんとかあったが、本当にヤバかったんだぞ、いや嵐さんが俺らをどうにかするとかは無いだろが。

僕と保さんが話をしている内容は一般に公開できる内容ではないというのに。

嵐さんを眠らせて、その間に記憶を消したは良いが、なんだ、その後のおんぶして一緒に帰った時の二人のいちゃつき具合は。

片方は寝たふりしていて甘えて、保さんはそれに気づいていちゃついで。

何が「聞だけでなく甘えん坊なんだから嵐さんは。」

キイイイーーーーー、悔しい!!!!!!!!!!

袁本初お嬢様化計画でやったキーーーー悔しいをまさか僕がやるなんて。

僕だって紅さんとイチャイチャしたりしたいよ、って紅さんからの手紙が……。

「司様に早く会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、

いや、今の紅さんの場合、僕が性的に食われて、そのあとリアルで食われるとかか。

あかーん、僕にはやらないといけない事があるんだ、涼州を、三国志を

「助けてください！！！！！！」

世界の中心で愛を叫ぶみたいになっている、
って、あれ、オーストラリアなのに世界の中心と勝手に名乗っているのか？

政治的ならばワシントンD・Cか今ならば北京とかじゃないのか？
とりあえずこの悔しさは、大谷商会の庭で調練していた日と光に、
寸止めとかぬるい調練しやがって、もっと激しくやりあええー
ー。

― 百合 ―

「ふう……」

涼州にいた時よりは少ないですが、洛陽でのお仕事も色々ありまして忙しいのですが、
本日は久しぶりの休日をいただきました、朝からのんびりさせてもらっております。

ただ部屋でのんびりしているのも手持無沙汰で飽きてきますわねえ、董孟高様が言う仕事中毒と言う物なのでしょう。か私も？

そうですね、司馬伯達様と司馬仲達様をお茶にお誘いしてみましよう、

？融様から教えていただいた新しく出来たお茶屋さんのお菓子が美味しいという事ですので、

お二人とお茶を楽しみながら交友を深める様にしましょう。

？融様には失礼ですが、あの男っぽい？融様がお茶屋さんに興味が
あるなんて、

？融様も人の子なんですはね、いや、違いますはね。

「おお俺にはこんな店は似合わない、おおお俺のおお王子様と一緒に
行くんだだだ」

とか恥ずかしがりながら独り言を言って阿蘇阿蘇を読んでいるんで
しょうねえ。

ふふふ、可愛らしいですはねえ。

それにしましても、涼州に残っている芍薬さんや牡丹さんが知りま
したら、

私だけが洛陽で美味しいお菓子を楽しんでいるなんて知ったらズル
イとか言われそうですね。

私や牡丹さんからしましたらあれだけ食べても太らない芍薬さんの
方がズルイんですがね。

ふふふ、こんな事をゆつくりのんびりと考えたりするのも楽しいですわね、

でも、考え事は置いておきまして、お二人を誘いに行きましょう。

—桜花—

コンコンコンコン

「はい、ありますがどちらさまでしょうか？」

4回のノックですから、保さんか、司さん、百合さんの誰でしょうかねえ？

保さんと司さんは嵐さんを連れてお出かけになられたから百合さんでしょうね。

「審正南です、司馬伯達様、もし御暇でしたら妹の司馬仲達様もお誘いしまして、
街に新しく出来たお茶屋さんでお菓子とお茶でも一緒にいかがかと思ひまして。」

あら、百合さんからお茶のお誘いですか、それは嬉しいですね。

でも、ちょっと惜しかったですねえ、若干合わなかったようで。

「あつ、でも、ごめんなさい、そちらのお店には行けないんですよ。」

その事を百合さんに伝えないといけませんね。

「あら、予定がありましたか、それは申し訳ございませんでした。」
用事があると言えば幼児なんです、百合さんもなので。

「いえ、つい今さっきなんです、が薊さんが部屋に来られました、
天気も良いので皆で東屋で庭でも見ながらお茶にしませんかと誘われまして。」

薊さん、私に梅花ちゃんに百合さん、女性4人でのんびりお茶をするのも良いですねえ。

四半刻後、東屋にて

「たまには太守代理の仕事も無くのんびり皆さんとお茶するのも良いですね。」

「桜花お姉ちゃんがいるなら私は忙しくてもかまわないけどね。」

「梅花ちゃんは本当に私に甘えるんですから。」

「ちょっと違うようなのでは、司馬伯達様。」

あら、百合さんが言うには私と梅花ちゃんは姉妹仲が良いというのは違うんですかねえ？

「桜花お姉ちゃん、百合さん、薊さん向こう見て。」

「「まあ」」

保さんが嵐さんおんぶして帰ってきてますね、何があったんでしょうかねえ？

「嵐さん顔真っ赤にされてますはね、でも満更でもなさそうで。」

薊さんの言うように嵐さん照れて入るが顔がほころんでいますし、嬉しくてしょうがないんでしょうね。

「大好きな人におんぶされながら洛陽の街歩いて帰ってきたから照れているんでしょう。」

確かに、あの状態で洛陽の街を歩くんなんて相当恥ずかしいでしょうね。

「桜花お姉ちゃんにしてももらえるならば何処でも私は平気だよ。」

本当にお姉ちゃん子で甘えん坊なんだから梅花ちゃんは。

「とりあえず、今日はもう嵐さんと保さんの部屋には近付かない方がよろしいかと、

明日のお昼に嵐さんご一緒に、何があったのかとか詳しく利かないと駄目ですはね。」

そうですね、誰も馬に蹴られて死にたくはないですからね。

それにしても百合さんも意外と良い性格しているようで、でも、私
もか、

明日のお昼御飯の時にこの四人に囲まれて慌てている嵐さんがいるんだろぅな。

「あの万年発情バカップルが、チクショーもげちまえ!!」

「こっちはいい人だったがいつのまにか爆弾案件になって、こっちはいつも涼州から届く手紙を読む度に胃が痛くなるのに!!」

今度は裏庭の方から凄い叫び声があったんでしょかねえ・・・。

あつ、皆ニヤニヤしている、これは楽しそうな予感ですし、見に行ってみましょう。

第三十四話、洛陽滞在中な人々の平穏な休日（後書き）

とりあえず涼州の皆は平和ですという感じが書けたか？

とりあえず保め、モゲてしまえ、

あと紅さんの病み具合が今後大丈夫か？

書いている私が不安に思ってます。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第三十五話、約束は守ろう（前書き）

今日の話は中途半端かと、って、それはいつもですね、私の文章表現力や構成力の無さとかでは。

第三十五話、約束は守ろう

一司一

保さんと色々な話をしたので誰にも聞かれないようにするために、いつものように武器屋からあの部屋に行き神と保さんの三人で今後の事を話す。

「今日は流石に嵐さんを引き連れてはいませんね。」

前回の苦い思い出を話す。

「あれは本当にすまなかった、今日は嵐さんは日と光と調練するようになんて伝えておいたから。」

ならば問題無し、さてさて、今日ものんびりと物騒なお話をしましょう。

「保さん出来るわけ無いんですが、長江あるじゃないですか堰き止めたら面白くないですか？」

いきなりな僕の話の振りに、なんだ？という感じで反応する保さん。

「どうした？急にダム建設の話になってゼネコンにでもなるのか？」

いやまあ、いつものように妄想話ですが。

『ワシが力を貸せば出来るじゃろうが、それは望まないじゃろ。』

本当に追い込まれたら頼むかもしれませんが、さすがにそれは。

三国志の時代、現代関係無くいきなり三峡ダムが出来たなんてまずいからです。

「大したことではないんですが昨晚三国志の世界について考えていたんですが、

赤壁について考えていて三峡ダムを偶然思い出したんですよ。」

保さんが三峡ダムについて思い出そうとしているようで。

「あれって確か水を満杯までためると地球の傾きが若干変わってしまούνじゃなかったっけ？」

たしか理論上は2.5cmだか傾きが進むでしたっけ？

『人間が地球の動きにまで干渉するようになるのだから、無茶をするもんじゃのう。』

ええ、神話での神の行動ほどでもないが人間も無茶するもんですよ。

「赤壁でダムってことは水責めか？」

保さん良い感しておりますねえ。

「神の力は絶対に頼りませんし、今の時代の建築技術や時間が足りないから無理ですが、

もし長江の上流にダム作れたら赤壁が地獄になるでしょうねえと思
って。」

ろくでもない発想をさせたら僕はこの時代一なのかな？

『敵軍が布陣したらダムを決壊させると、流域は壊滅するじゃろ
うな。』

確実に荊州の一部や呉とかが途方も無い水に襲われ消滅となるで
しょうな。

「司君、お前さんは確実に世界三大虐殺者の一人に名前を連ねるな。
」

ええ、なるでしょうねえ、歴史上初の虐殺者に。

「って、こんな話をしていても仕方が無いので、今日のお話を。」

とは言いましても今日の話自体はさほど大事ではないんですが。

「さてさて、今日はどんなお話でしょうか、楽しみにしております
よ。」

保さんの期待を裏切る内容ですいません。

「僕は人を驚かせたり、からかったりするの好きですが嘘つきに
なるのは嫌なので、

洛陽にいますし桜花さん攫った馬鹿共にそろそろ天誅を下そうかと

思いまして。」

うそつきはいけません、馬鹿な事を話したりするのは良いですが。
桜花さん誘う時（二十八話）に洛陽の拉致犯を殺すと言っておきま
したしねえ。

『袁家と曹家、朝廷至る所で好き勝手嘘八百並べているくせに嘘つ
きではないと。』

これは異な事を神が。

「司君が嘘つきかどうかは別としてやりましょうか、仲間を守らな
いといけませんし。」

酷いなあ、何でそんな事言うんでしょうか、僕ほど誠実な人間はい
ないと思うのですが。

「僕ってそんな信用ありませんかねえ？」

二人とも頷いているよ失礼な。

『ただそのような話ならば此処に来て話さずとも、当人と話をすれ
ばいいだけではないのか？』

普通ならばそうでしょうねえ。

「いや簡単なことで、太平要術の書で身元確認は出来ていますし、

とりあえず夜になったら下見に行きますので、それまでの暇つぶしをしにきたんです。」

最も下らない理由でしょうね。

『「はひっ？」』

保さんと神二人があきれている。

「まあ神と話をしにね、たまには雑談も良いでしょと、この前も来たばかりですが、此処なら馬鹿話しながら資料作ったりとか好き勝手出来るでしょうし。」

こんな身勝手な理由で神と話す人間は僕だけでしょね。

「夜になったら現場の下見か、OKOK、それまでは何をするんだい？」

大したことじゃないんですよ、ただ人眼があるとまずいので。

『此処でないとまずい事なんじゃろ。』

いえーす、神様よう分かってらっしゃる。

「本気で立ち会いを、武器を使って殺し合いです、僕達には超回復がありますから、

首をはねるとか心臓をえぐるとかしない限りは死にませんから、とはいえ、そんな本気の殺し合いを涼州の皆には見せれないですか

ら。」

普通の人が聞いたら驚くようなとんでもない事を言っていますね私も。

「そりゃそうだ、俺らの秘密を人に見せられるものではないしな、いいねえ本気でやり合おう、最強になるには最強の敵がいらないとな、涼州の皆には悪いが、司の本気とは違うからな、やるか。」

嬉しいですよ、本気の保さんと僕とでやりあえるんですから。

さあ、遊びましょう、誰よりも強くなる為に保さんは踏み台になってもらいましょう、

保さんも誰よりも強くなる為僕を踏み台にしようとしているんですよねえ。

「神様、此処の場所を夜の洛陽の貧民街にしてもらえますか、これからやる天誅の訓練を兼ねてやった方がいいでしょうから。」

どうせならば普段出来ない状況でやりあった方が面白いでしょうし。

『そうかそうか、分かった、ではワシは高みの見物をさせてもらおう、

洛陽の街中で争うがいい、武器はお互いの得意な物を用意しよう。』

パチン

神が指を鳴らした瞬間、見慣れた洛陽の街並みになっていた。

一保一

パチン

神が指を鳴らしたと思ったら、右手には方天画戟、肩には重藤弓、それに甲冑とフル装備で洛陽の街に立っていた。

周りには司はいない、私と違う場所に飛ばされたか。

『お前さん方を洛陽の街にランダムで飛ばようにしたぞ、いろんな戦闘が楽しめるように。あと普段の得物と鎧も、ちなみに此处でやりあうなら死んでも蘇れるようにしたぞ。』

何それ怖い！！！？？？

「この糞神、完全に殺しあえというのかよ！！！！」

殺し合いをするとか言っていたのに、司君、蘇れなかったらまずいでしょ、二人とも死んじゃったなんてなったら。

『殺しあいすると言っていたのはお前さんじゃろ。』

同じ事考えていたね神も。

「細かいぞ！！」

司君の怒鳴り声が聞こえる、すぐそばにいるようだ、声の方に行っ

てみます。

司君をすぐに発見する。

「いくぞ!!」

方天画戟を構え突っ込む、司は突如現れた私の攻撃を鉄扇でいなし始める。

強い、洛陽の街の中での戦闘になったが司の奴とにかく強い。

元から武では同じ程度の強さだが市街戦になるとこれほど厄介とは。

ある程度の距離まで近づけばこっちの得物は方天画戟、司は鉄扇、本来ならばリーチの違いは圧倒的な違い、こちらが有利なはずなんだが。

司は巧みに戦う場所を狭い路地に誘導してくる、こうなるとリーチの長さが弱点に。

誉め言葉として実にいやらしい、まあ、戦いでは当たり前なんだが。

切り払いとか振り回したくても路地の狭さが、壁が攻撃の邪魔をしている。

もうい壁だから壁ごと吹き飛ばすなんてのも出来るが、相手は私と力量差なしな司、ならばそんな攻撃をしたら致命的な弱

点が。

壁ごと吹き飛ばす攻撃をするなら大振りになり攻撃は隙だらけになり、
しかも、方天画戟が壁に当たる分速度も威力も鈍くなるのですから。
司にとっては絶好のチャンス、私にとっては大ピンチになってしま
う、
いつもより遅い隙だらけな攻撃、懷に飛び込まれたらおしまいです
よ。

仕方ないから路地で戦うとなるとどうしても攻撃の手段が突き主体
になってしまう、

ならば司にとってを防ぐのは簡単、防御に徹してカウンター狙いで。
ならば、こちらは方天画戟を捨て素手での攻撃に持ち込もうとした
が、

そうなると今度は司が圧倒的に有利な状態になってしまう。

元々、司には身長差で負けていて更にこちらは素手、司は鉄扇とり
ーチの差が。

私と司の本気の戦いであり寸止めなんてない殺しあい、
武器なんか捨てて正々堂々かかってこいなんてお互い言う訳もなく。

結局初戦はリーチの差に敗れ司の鉄扇の殴打で鼻骨、顎、鎖骨、肋
骨、膝、

全身のありとあらゆる骨を碎かれ、何カ所内臓が破裂したのだろう

か？

現代でも助かるか分からないような確実な致命傷を負わされました。

見事な完敗、アホみたいな回復能力、あと神の力でこの場では死なないが、

痛みがないわけではなく半端でない痛みに苦しみましたよ・・・。

神が楽しみたいらしく、一本目が終わるとまた洛陽の別の場所に飛ばされる、

また最初から索敵からスタート、今度は私が有利だった。

およそ150 m先、闇に紛れ物陰を慎重に動いている司君発見、慎重に動いているのは分かるが、司君、最初にこちらに気付かれたのは失敗だよ。

司の動きをゆっくり観察する、二本目開始から既に四半刻が経過している。

向こうはこちらがアウトレンジに切り替えたことは認識したようで、司も遠距離用に元戎を持っているが、ただこちらより射程距離ははるかに短いからな。

だから、こちらは向こうの射程外である150 mを維持し続け、司に見つからないように気を付けて観察している。

向こうはこちらをまったく認識出来ない状態ですが、
だが本能で感じているでしょう、自分が既にロックオンされている
ことに。

何となく感じるんでしょ、ないやな感じを、喉が渇き、背中やわきの
下が汗まみれになり。

さて、こちらは焦らずにゆっくりと息を潜め攻撃のチャンスを待ち
ましょう。

月に雲がかかりはじめそうですね、では、そろそろいきましょか。

古式通りに半胡坐射で、私の弓は弓だけでなく矢の羽も軸も真っ黒
に塗ってありますから、
街灯など無いこの時代、明かりは月くらいしかないこの闇夜、そし
て月に雲がとなると。

この世界に来てさんざん鍛えた私には150 m程度の距離なら余裕
で狙った場所に。

弦を引いた時のキリキリという弓のきしむ音で気づかれないか、
そんな事を思ってしまうほど無音の世界、息を整えて。

ヒュッ

放たれた矢の空気を切り裂く音が一瞬だけ耳に残る。

綺麗に吸い込まれるように矢は司の胸に突き刺さった、

後ろの壁にもたれるようにゆっくりと倒れこむ司の体。

多分司が受けた傷は致命傷なんだろうが、鎧を装備している為、油断しないで壁にもたれ掛かって倒れている司にもう一本矢を放つ。次は鎧では守れない首筋を狙って放つ、矢はまたも吸い込まれるように突き刺さる。

遠目で見ても完全に動かないのが分かったので確認の為近づく、最初が司の心臓を貫き即死だったろう、そして二撃目は喉を貫き確実にトドメをさしている。

本気の戦いであり、殺しあい、いくらこの場では死なないとはいえ、やはり20年以上の付き合いの友人を射殺すのは気分の良いものではないな。

―神―

実に面白い、この二人はいつ見ても。

二人の育った環境ならば正義感、倫理観等で躊躇われるような行為も、

二人は呼吸のごとく当たり前のように計画し実行する。

正義や悪などといった感情が他人に比べて乏しいわけではない、世の中を斜めに見すぎではあるが、自分の行いが誇れない事を知っている。

だが、それを恥じることなく当たり前のように行い続ける。

今もそうだ、自分達が強くなるため強力な敵が必要ならばと、つい先程まで笑いながら話していた友人を、今は全力で殺しあっている。

憎しみがあるわけでもなく、悲しみがあるわけでもなく、かといって戦闘狂でもない二人が、どちらもむしろ直接的な戦いを嫌っているのに。

だが、今の二人の様子を見ると殺しあいを楽しんでいる。

どちらも人でありながら人とは思えないような思考をしているようじゃ。

「楽しいなあ司君、全力でやりあえるのは」

笑いながら方天画戟で全力で斬りかかっているの、あやつは。

「保さん、容赦無さすぎですよ、なんですか最初の一射目で心臓ですよ、

即死なのに、更に喉笛ってどれだけ僕を殺したいんですか!？」

鉄扇で攻撃を弾き返しながら器用に喋っているのお、普通ならばこんな状態で喋ってられるような余裕はないんじゃないがの普通は。

「一本目のお前に言われたくないよ、なんだあの殴打は、体中の骨が碎け内臓が破裂したぞ、派手にやってきやがって。」

笑いながら至極楽しそうにいつも此処で馬鹿な会話をしているように、いつものように話ながらお互いの命の奪いあいをしているのじゃから。

この二人は人間としてなんなのじやろうな、実に観察対象として面白い。

そんな事を思っていると今回の決着が着いたか。

保の方天画戟が司の腹を貫いたな、決着がついたなと保が油断した瞬間、

司がその隙を見過ごさず喉を咬み千切ったか、司の勝ちか、ただ司も致命傷じゃが。

凄まじいな、腹を貫かれ致命傷を負っているのに諦めずに喉を咬み切る、

司は人の命だけでなく自分の命すら勝利に必要なら利用する、その執念。

保よりも手段を選ばぬという点では司の方が強かろう、

ただ、技、力、キレ、速度等はわずかながら保の方が上ではあるが。

成長限界突破能力を付与したが二人とも14歳で既に限界突破するとは、

思考といい武力といいここまで面白い生き物だとは、見ていて飽きんぞ。

――司――

神にそろそろ時間じゃろと言われるまで保さんとやりあったが、保さん強すぎ、強いというか友達に容赦無さすぎですよ。

脛椎折られたり、首をもがれたり、腹貫かれたり、いくらこの場では死んでも平気となっていて全力でいけるとはいえ。

「司君やり過ぎ、えげつないの多すぎ、目を普通に潰してきたり。」

保さんほどではないですよ、まったくもう。

「いやいや、そっちの方がやりすぎでしょう、僕を何回殺しましたか。」

それにしても、笑いながらこんな話を話す僕達は狂っているんじゃないかねえ。

さて、この続きはまたいつでも出来るので、まずはゴミ掃除の下調べですね。

今日僕たちがゴミ掃除をしてもいいんですが、長安の時みたいな揉め事はごめんですので、

今日はしっかり下見をしておいて、確実に殺れる時に殺りましょう。

それに拐われた被害者である桜花さん自身が手を下したい、と言う
かもしれませんし、
もし僕達が行動を移すにしても念のため奴等を拉致るだけにしない
といけませんね。

監視しますか。

それで攫った後は桜花さんから処刑のOKサインを貰いましょう、
それで最後は天誅と書いた紙でも銜えさせ洛陽の大通りで晒し首に
でも……。

――桜花――

涼州から派遣された人達の宿である大谷商会の内部は大騒動です、
保さんと司さんが朝出掛けたまま夜になっても帰ってこないのです。

「桜花さんみたいに攫われた？」

「何か揉め事に巻き込まれた？」

皆さん色々可能性を考慮して心配していますが。

二人の実力ならば大抵の問題に巻き込まれても平気でしょう、
むしろ、あの二人が野放しになった方が問題で、二人よりも洛陽が
危険なような……。

皆が必死になって探し回っていましたが夜中になっても見つからず、今日はもう駄目か、搜索の続きは明日になると思っていたら、玄関から声が。

「「ただいま〜!」」

話題の保さんと、司さんの声です、周りの騒動を知らないのかのんびりしたもので。

二人が帰ってきたと気づいて、心配していた薊さん達と玄関へ向かいました。

“何をやっていたんですか!!!!”と、怒ろうと思ったが二人の姿見て啞然としました、

なんで服やら顔やら全身血まみれなんですか、しかも二人共陽気に笑っているんですか!?

ものすごく怖いんですが、その姿が。

「二人とも自分達の姿が異常ってわからないっすか?」

あの色々と残念な光さんが言うとおりです。

どうやら二人の血は怪我をしたという事ではなく返り血のようですが。

そして、此処で気づいたんですが二人の後ろに転がっている人間達

が、引き摺って連れてきたと思われる、血まみれで気絶している人はな

なんですか!?

「保さん、司さん、その後ろの人達は一体誰なのですか?」

玄関に集まった皆同じことを思っていました。が代表して薮さんが尋ねました。

予想だになかった答えを保さんが答えてくれました。

「桜花さん後ろの者達は貴女への約束のお土産です、煮るなり焼くなり好きにしてください、

とりあえず膝を砕いたりしたんですが、その程度でピーピー喧しいから気絶させたんです。」

保さん、明るく楽しそうに膝を砕いたとかとんでもない事を言ってるんですか!?

って、何で私にそんな怪我人がおみやげになるんですか!?

「だ、だ、だいたい、誰なんですか、私へのお土産といわれたこの可哀想な人達は?」

気になるので詳しく聞きましょう、この私宛のお土産といわれた可哀想な人達は、

一体、私がいつ半殺しにされた男どもを欲しいと言ったのでしょうか?

「桜花さん、覚えていないですか？前に貴女を拐った例のゴロツキ5人ですよ。」

司さんが説明してくれたけど、ちょっと待って！今なんて言いました！？

「「「えっ！？」「」」」

この玄関にいた人間皆が同じように驚いていました。

「前に話をしましたとおり僕と保さんは桜花さんを攫った奴らを探していたんですよ、

それで偶然なんですけど、この前手に入った情報でどうやらこいつ等だと分かって、

保さんと5人全員の身柄をおさえられるように朝から見張っていたんです。」

あの時に司さんが「ゴロツキ共は洛陽に着き次第搜索し処刑予定です。」と言っていたけど、

私がないのによく私を攫った人達って分かったんですね、でも本当に本人なのでしょうか？

もし人違いだったりしたら、顔見ましたがこんな顔していましたが。

「桜花お姉ちゃんを攫った奴らがついに捕まったんだね、こいつら殺してやるー。」

梅花ちゃんやめて、おさえてー、人違いかもしれないだし。

「桜花さん安心してください、こいつ等が犯人であるのはこいつ等自身が自供しました、しかも桜花さんだけでなく過去にも色々人攫いをやっていたりと自供を……くくく。」

人違いかも？なんて、私の不安な心中を察してか答えてくれた保さん、それにしても自供したと笑いながら言っていたが、保さんの笑いが怖い。

「いつでも逮捕できるように朝からずっと行動を見張っていたんですよ今日は、

とはいえ、さすがに夜になったので一旦戻り皆に連絡をしようと思っただけですよ、

そしたら、どうもこいつ等の様子が変わって、新たに事件を起こそうとしていたので、

このままでは罪なき人に更に被害が出ると、今しかないと保さんと身柄拘束をしたんです。」

この人達の新しい被害者が出る事が無くてよかった……。

でも、何でこんな無茶を。

「董孟高様や李文優様が幾ら強いとはいえ、しかも事件が起きそうと緊急性があるとはいえ、

二人で暴漢五人組を取り押さえるなんて無茶をしないでください！
！」

うん、百合さんが言う通り、二人ともすごく強いけどそんな無茶をするなんて、

もし二人の身に何かあったら私はどうすればいいんですか。

「王子様がそんなことするなよ、そういうのは護衛である俺の仕事なんだから！」

嵐さんも二人の無茶に怒っていました、保さんが帰ってこないのを心配していましたし。

「今回の件で皆さんにご迷惑をおかけした事深くお詫び申し上げます」

保さんと司さん二人が揃って謝ってくる。

とりあえず二人が謝った後に、薊さんが玄関口で皆話しているべきではないと。

たしかに、真夜中とはいえ縛られた血まみれの男達連れて来た血まみれの保さん達、
こんな姿を知らない洛陽の人々に見られるといけませんから。

人目につきにくく音が外に漏れないように全員で倉庫に行ったのですが、

そこで保さんが私に聞いてきました。

「桜花さん、今からあなたに酷な質問をします、貴女が当事者だからですが、

もし、答えられないというのなら答えなくてもいいです。」

保さんが聞いてくる事は、この人達の処分をどうするかですね。

「役人に突きだせばこいつ等は人攫いであり死罪は免れません、貴女は被害者ですし、

もし恨みを晴らしたいというのなら貴女が恨みを晴らしてもいいですし。」

そう言って、保さんは方天画戟に手をかけました、殺したいが自分の手を汚したくないなら代わりということですね。

「僕としては役人に突きだすのではなく、此方で処刑をすべきかと思いますが、

死体を洛陽の大通りに並べておくんです立て看板と共に見せ物にして、

人攫いである外道共に天罰を下したなどと書いておけば見せしめとしても良いかと。」

さらっととんでもない怖い事を言っている司さん、私自身恨みはありますし、見せしめの効果も分かります。

でも、やはり役人でも何でも私達が勝手に私刑をやってはいけないです、

梅花ちゃんを私を攫った奴らだからやってしまえなんて怒っています。

「私刑はいけません、恨みはありますが恨みを晴らす為に私達が勝手にやったら、

それでは彼らと同じで私達も犯罪者になりますから。」

私がそういうと薙さんや保さんはホッとした表情をされていました。

「やはり桜花さんはまともですねえ。」

司さん、まともでないのは司さんや保さんですよ……。

「桜花さんの言うようにこれから先は役人に任せましょう、私刑はやめましょう。」

何となくだけど、保さんも司さんもホッとしたという感じの表情だった、

あの時も人を切ったりしていたけど根は暴力が嫌いな優しい人達なんだろうな。

「了解しました、では、罪状を書いた竹簡といっしょに警備隊の詰所の前に捨ててきますか、僕達がやったとか余計なこと喋られないようにする為に喉笛を潰しておきましょう。」

司さん、私刑はやらないと言っているじゃないですか、さらっと恐ろしい事言わないでください。

根は優しい人だと思ったのに、でも、保さんは。

「アゴ砕くくらいでいいだろ、喉笛はやり過ぎだ。」

アゴ砕くのもやり過ぎです!!!

「どうせならば裸にしてこの寒空の下詰所の前に捨てておくのがよろしいかと。」

ゆ、ゆ、ゆ、百合さんまで何を言っているんですか!?

「こいつ等運ぶの面倒だし、足に縄つけて馬で引き摺って連れてくか?」

嵐さん、それは詰所に着くまでに彼らは死んでしまいます!

「面倒だからこのまま埋めるッす。」

「その上に桜でも植えてやればいいだろ墓石代わりに。」

光さんに日さん、処刑はしないって言ったじゃないですか!!!!
なんですか生き埋めって一番残酷じゃないですか!

「日、梶井基次郎とは文学的だな!」

保さんなに褒めているんですか、止めてください。

「面倒だから箆をかぶせて火をつけるとかすれば、今後の処理も楽なのに。」

だから司さんの意見は怖すぎます!!!!

「裸にするのなら涼州の砂漠地帯に放置するのが良かったんでしようがねえ。」

薊さんまで、誰も止める人がいないなんて。

「桜花お姉ちゃん、涼州に勤めるようにしたのってもしかしたら間違いだっただかもね。」

梅花ちゃん言わないで、私もうすうす感じているの、でも、それは認めたくないの……。

涼州の人達は“優しい”人達ばかりなようです。

第三十五話、約束は守ろう（後書き）

締め切りが無く、ただただ長いだけの話になってしまった。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第三十六話、一方的敵視に困る日々（前書き）

司君のモデルである友人達と飲んできました。

「足なんか必要ないんですお偉方には分からないんです」
と骨折して松葉杖なもう一人の友人に良い笑顔で言っていました。

相変わらずクレイジードクターでした。

今回は保君達の活動が順調にいきすぎた故の弊害について書いてみました。

第三十六話、一方的敵視に困る日々

一保一

「僕は人に愛されたい!!」

司君の叫び声が広がる、洛陽の臨時執務室

当然ながら一同ポカーーーン

少したってから、

「司、お母さんは貴方を愛していますよ。」

いや、薊さん、司の発言は多分そういう意味ではないですよ。

「王子様、アイツがまた気持ち悪い事を叫び出したが殴っていいか？」

嵐さん、司君の行動は突飛だが暴力はやめてあげて。

「李文優様は会えない淳于仲簡様への愛を欲しているようです。」

百合さん、それ絶対に違う、連日涼州から送り届けられる紅さんの手紙を見る度、

紅さんの愛が重たいし怖いと怯えているぞ司は。

「文優は元から変だったすが、遂に狂ったつすか。」

光に馬鹿にされるなんて可哀想過ぎるぞ、司君。

「どうした？愛をくださいなんて、辻仁成にでもなったのか？」

今の世代に分かるのかな？一応私の世代よりもっと上なんですすが辻仁成は。

「保さん、僕はラジオで真夜中のサンダーロード、とか言わないですよ、

大体、ECHOESなんか分からないでしょ保さん以外の皆さんには。」

司君懐かしい！言ってたねえオールナイトニッポンで言ってた、言ってた。

「辻仁成ではないんだ、僕はてっきり司君が生まれ代わりだと・・・ニヤニヤ。」

意味深な言い方をして、ニヤリと笑う。

「何か含む物があるみたいですが、言いたい事があるならどうぞ。」

司君、今、君は自分で自分の死刑執行命令書のサインをしたようなもんだぞ。

「司君が辻仁成かカヲルかと思ったのは、だってあんなキザな、ほら、司君、紅さんにB「アー――！保さんあんな馬鹿だろ！何を言っているんだ！！」」

司君が焦っていますねえ、なんで私が知っているんだ！？と、ふふふ、あの下半身が自由な司君があんなこっ恥ずかしい台詞を吐くとは。

「なんで保さんが知っているんだよ、一番知られちゃいけない人に！！」

いえいえ、知られちゃいけないのは今後司君が口説く女性だけです。

「王子様、アイツどうしたんだ急に頭抱えて？」

「李文優様に一体何があったのですか？」

「司君のあの慌て方ってその人に何を言ったの？」

皆、司君のあまりの慌て方に相当気になっているようで。

私は独占が嫌いなんです、良い物は共有しないといけません。

「嵐さん、百合さん、桜花さん耳貸してください。・・・ゴニョゴニョ」

秘密の独占はいけません耳打ちしてあげます。

「「えっ、マジで!?!」」

普段の皆さんと全く違う口調で反応したのが、余程驚いたんでしょ
うね。

「アイツ凄いな、そんな事言うんだ、俺も王子様に・・・。」

ふふっ、嵐さんが望むならいつでも言ってあげますよ。

「李文優様も普段と違って、キザな事を言われるんですわねえ。」

百合さんが司君を見る目がなんか妙に生暖かい感じになりましたね。

「司君が好きな人が、それが当人にそんな事言われたらねえ。」

桜花さんも生暖かい目線で司を見ながらニヤニヤしていて。

「あんたサラッと人の秘密をばらしやがったな!?!」

司君怒っているのかな? もう、短気なんだから、もう。

「いい加減にするっす、文優は馬鹿で仕方無いっすが、
いきなりワケわからんことを言いだしたりするなっす!

孟高や皆もそれで騒ぎ立てるなっす、まじめにやるっす!」

「「「「光に言われたよ・・・」」」」

って、最近このパターンがやけに多いので、光に言われて凹むのは無しで。

話を本筋に戻しましょう。

「司が愛が欲しいとかいきなり寝言を抜かしたのはどうした？」

いつも発言が突飛な司君、慣れるとなんでそんな話か感覚で分かりますが、
とはいえ、訳がわからないですね、下半身事情ではないのでしょうか。

「ここにいる涼州の人間に理解してもらえないかもしれませんが、
なんか、最近至る所で僕達は目の敵にされていませんか？」

司君の発言に対し皆はウウンと否定を表すように首を横に振っている。

「涼州の秘密を探りに細作が潜り込んできているとかはありますが、
他州、宮中、商人からあからさまな敵意をとかはないですわね。」

百合さんはないですか。

「洛陽の街の奴等は涼州の人間と比べて暗いし雰囲気悪いけど、敵意とかはないぞ、こっちを羨ましがっているとかはあっても。」

嵐さんは素直な性格だからか感覚で敵意とか察するの上手いですし間違いないでしょう。

嘶の本題と関係無いが、嵐さんが言うように洛陽の雰囲気悪すぎです、すね、陰鬱というか、

まあ涼州が景気や政治が良すぎるから雰囲気が良いとかなんでしょうが。

「私は元々洛陽の人間ですが特には敵意を感じませんが、梅花ちゃんは何かそういう悪意みたいな感じた事ある？」

「桜花お姉ちゃんと同じで敵意は感じた事ないなあ、やはり妬みとかかな？」

洛陽の人間である司馬姉妹も感じることはないですか。

「個人的怨恨は？」

「阿多の言う通り文優が恨まれているだけじゃないっすか？」

日や光が言うようにそれもありそうだが違うんだよなあ。

「じゃあ、司の言う事が分かる人間は私くらいだけですか。」

司と私以外は明確な悪意を向けられてはいないようで、ちょっと羨ましい。

「保さんありますよね！こっちは悪い事していないのに嫌味言われたり、

勝手にこっちを敵視して、今すぐ殺すぞ位の目で睨んでくるのが！」

なんなんでしょうねえ？好いてくれとは言わないがそこまで嫌わないでもと。

「失礼な話ですが、気のせいでなくてですか？」

百合さんとかからしたら信じられないんでしょうが。

「いや確実ですね、私ならば宮中であつた皇甫嵩に色々言われたり、あとはなんだ曹家に家庭教師で行ったときに酷いんだ襲われたりしますから。」

皇甫嵩に睨まれるとは思ひもしなかったですよ、

三国志ではいい人なんですけどね知名度は微妙だが。

「僕は宮中に行った際に会う王允とかが敵視してきて、あとは袁家で襲われたり。」

王允なんて美女連環の計しかない三日天下のじじいのくせに。

「「「えっ!?!」」」

皆、驚いている、そりゃそうだ家庭教師先で襲いかかられたのかなんて。

「袁家や曹家から来ているんですよ、潜り込んだ細作とかでもイラツとさせられているのに、

袁家と曹家なんか客だから、こっちは細作を捕まえても一応生かしているんですよ、

捕らえている奴等の首切り落としてアイツらの家の前に並べてやるうか。」

まったく、曹家や袁家は何を考えているんでしょうか？

「そんなひどいのか王子様っ!?!」

嵐さんがいない一人の時が酷いんですよ。

「でも、どうしてまたそんなことに?」

百合さんが聞いてくるが、たしかに原因はなんなのか気になりますよね。

「保さん、こちらは心当たりが全くないですが、原因究明のため、どんな状況で襲われたりしたのか思い出しながら考えてみますか。」

司君の言う通り過去の状況から判断してみるしかないでしょう。

「皇甫嵩に言われたのが“何進將軍にどう取り入ったか知らないが、貴様らのような洛陽を腐らす人間の好きにはさせないぞ”とか言うてくるのが。」

酷い言われようですよ、言っている事もわけわからないですし、なんでしようかこの嫌われ方。

根も葉もないですよ、洛陽を腐らすなんて。

「あと曹家なんかまったく意味がわからないですよ！曹操と夏侯姉妹に、

“あの金髪グルグルの部分も頭蓋骨か？デコッパチに鬼太郎もどき、どうなん？”

と尋ねただけですよ、信じられないことに三人がかりで襲ってくるって。」

どんな野蛮人でしょうか、いきなり三人がかりで襲い掛かるなんて。

戦いを挑むにしてもせめて一対一でしょうが、まあ、三人くらい片手でも余裕ですが。

「僕は王允のじいさんに“十常侍と共に宮中を腐らすウジ虫が”と罵倒されたり、

袁家は“昔のおしとやかな姫やまともな文ちゃんを返せ！”と殴りかかってきて。」

司君も苦勞しているんだなあ、御苦勞様ですよ。

「「逆恨みもなんとかしてほしいですよ、はあっ……。」」

ため息までも完璧に司君とハモる。

官位の売買を後押しして、阿片を教えてあげたり、賄賂あげているくらいで、

漢王朝の寿命をほんの少しだけ縮めてあげているだけなのに。

「お、お二人の言っている事がよく分からないのですが。」

あらっ！？頭の良い百合さんらしくもない。

「保さんに司さん、それは逆恨みではなく当然かと。」

あれっ、桜花さんが違うというなんて。

「桜花お姉ちゃんの言うように、当たり前前の事を言っているよ。」

あら梅花さんまでもが違うと言ってますが。

「文優も孟高も馬鹿っす！」

いつも言っているが光にだけは言われたくないダメージがかすぎ
る。

「いやいや、僕達が腐らせるとかって酷くないですか？既に腐っているのに、

なんか如何にも僕達が元凶みたいな言われ方するのって癪にさわりません？

お前らが無能だから腐っているんだと、こっちは少しだけ加速させただけで。」

司君の言う通りです、既に終わっている物にトドメを刺しにいくだけで何が悪いと。

死にかけていて治療してどうせ助けられないというのならば、無駄な延命なんかするよりも早い段階で延命治療なんか止めるべきです。

「だいたい曹操のあの髪はどう見ても骨でしょ、サイの角みたいに。」

まあ、実際のサイの角は毛が硬質化した物で骨ではないんだが。

「夏侯惇は綺麗なオデコだからデコッパチと呼んであげたくらいで、あとは卵の白身塗って炙ってテカリを出そうとしたり、額に肉と書いていただけですし、

妹の夏侯淵に片目隠すのは鬼太郎だよな妖怪レーダーないのか？そ

んな髪型していながら。」

たったこれだけで、いくらガキとはいえ武器構えて三人で襲い掛かるなんて。

皆黙ってしまった、私の苦難を理解してくれたんでしょ。

「袁家も酷いですよね、いくら子供とはいえ殴ってくるんですから、単にねえ、袁本初のお嬢様という才能を開花させてあげただけで、あと文醜さんに博打の楽しさと借金してでも打てと教えた位で。」

元からあった才能の開花のお手伝いで文句って実により得ないですね、

0を100にしたら有罪でしょうが、こっちは1を2した程度で。

あらっ！？桜花さんと梅花さんも気まずそうな顔していますね、袁本初の才能開花させる案で知恵を貸してくれた事で何を気にやむのかと。

「と、と、董孟高様、李文優様、とりあえずはお気をつけください命狙われる事に。」

百合さんが私達の理不尽な被害に理解示してくれたか、とりあえずという点に引っかかりますが、

あくまでこちらは一方的な被害者なのですから。

「桜花お姉ちゃん、悪意無くこんな事が普通に出来る人がいるんだ

ね。」

「絶対悪とでも言えればいいのかもね梅花ちゃん。」

司馬姉妹言い過ぎです！まるで私達が凄く悪いみたいじゃないですか、
なんですか絶対悪って、正義も悪も見る側の違いで実は同じ物なのに。

「二人は曹家、袁家と戦争を起こす気っすか？」

光、戦争って大袈裟な、だいたいこちらは喧嘩を売られた被害者なのに。

「この二人という這い寄る死には、曹家、袁家ではあまりに無力か。」

日、相変わらず言い方が痛い！なんだ這い寄る死って、
こちらが被害者であり加害者ではないというのにねえ、司君。

とりあえず分かったのは司君も私も逆恨みの八つ当たりについていると、

うーん、どうすればいいんですかねえ、参りましたよ。

曹操と袁紹は史実で反董卓連合を組みましたが、
やはりこちらでも董家に仇なす不倶戴天の敵になるとは滅ぼすしかないな。

第三十六話、一方的敵視に困る日々（後書き）

原作恋姫キャラでこの二人に振り回されないですむキャラはいるのでしょうかねえ？

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております

第三十七話、州牧就任の前に（前書き）

今日は二人が洛陽に來た本来の役割に関する事で書いてみました。

相変わらずのご都合主義な話ですが、

今回も皆さんの付き合いのほどよろしくお願いします。

第三十七話、州牧就任の前に

一保一

どうも本日15歳の誕生日を迎えた保です、しかし、誕生日に仕事をしていますよ。

そういえば前世で最後の誕生日を迎えた時は出張先での仕事でしたね、

その翌日に司君と飲んで事故死して素敵なこの世界へようこそと。

此方の世界でもウェルカムフルーツならぬ、ウェルカムデスなんてならなければいいですが。

それにしても誕生日を迎えたところで、だからなんだ！という思いですよ、

大好きな可愛い月や私の理想の女性のタイプである母上がいるわけでないんですから。

私が女性ならば誕生日を迎えて今何歳かで一喜一憂したりするんでしょうが、

私の股ぐらには立派なうまい棒がありますからねえ年齢など気にしません。

さて、訴えられそうなどうでもいい話をして現実逃避するのはやめ

ましよう、
仕事とは何かといいますと、話は二刻前に戻りますが。

二刻前

私の誕生日を洛陽にいる涼州勢の皆さんに祝ってもらうことになりましたよ、
ちなみに同じ誕生日の司君は十常侍からの呼び出しでただいまお出掛け
中。

司君がいない程度ならばまだいいですよ、誕生日会に問題がありました。

問題とは、その宴席に何進と皇甫嵩がいるんですが、はい、困りましたよ。

「邪魔だから帰ってよ」と言えない相手なのが、大変厄介です。

大將軍のくせにフットワーク軽いねえ、なんなんだよお前！？
お兄さん心底驚いたよ、とても嬉しくないサプライズが来たね。

相変わらず皇甫嵩のねーちゃんは私を逆恨みしていて目の敵にしますよ、

まあ、飼い主である何進がいるから表面上は笑顔ですが。

逆恨みはやめて欲しいです、私を“洛陽を腐らす元凶”呼ばわりですよ、

皆が賄賂で役職を買うからそれなら陛下がやれと提案し、賄賂まいて、

あと、いずれ死んでもらうがそれまでは扱いやすいようにと阿片を教えただけで。

私なんかその程度ですよ、皇帝が愚かすぎて漢は既に死に体なんですから、

陸に打ち上げられた鯨と同じであとは時間の問題で死ぬだけなのに。

そんな当たり前の事が分からないで漢に忠誠を誓うって阿呆やね、腐敗の元凶の皇帝や官宦ではなく此方を恨むってなんて迷惑な。

空気ですか？最低ですよ、見た目笑顔で和やかだけど空気はピリピリで、

また、この何進のオッサン、このピリピリ感に気付かないし。

凄いや、たぶん赤ん坊だって空気感じて読むというのに。

「今日ワシが来たのはな、おまえさんらに良い知らせがあったの。」

何進のおっさんは空気読まないで話勝手に進めている、しょうがないか。

報告を楽しみにしましょう、私達の裏工作が実った事でしょうが。

大將軍である何進が現れただけでなく、良い知らせだなんて発言、まあ、皆内心分かつてはいるが願いが通じたかと喜び騒がしくなる。

ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・

うん、何人かは会話ではなく動揺している擬音だね、カイジだね。

良い話でこのざわざわは逆転しないといけない麻雀でドラ引いたとかテンパった時だろ。

「何進大將軍のお言葉ですよ、皆さんお静かに。」

薊さんの一言で場がシーンと静まり返る

「なあにめでたいことなんじゃから騒がしくていいぞ、涼州太守董君雅殿を益州牧に任ずる勅旨が出ることが決まった。」

よっしゃ！とりあえずこれで計画が進む、小さくガッツポーズする。

「「「「ありがとうございます何進大將軍」」」」

皆が一斉に抱拳礼をし頭を下げる

「近いうちに陛下の遣いの者が正式な通達を持って涼州に向かうぞ、はっはっ、皆かしこまるでない、さあ董擢殿の誕生日を祝おうぞ。」

畏まらなくていいはありがたいし、報告は嬉しいよ、ただ、お前さんが私の誕生日会主催者みたいになるなよ、内心突っ込む。

一刻後

「董擢殿、皇甫嵩將軍と三人で静かに話をしたいのだがな。」

はい、仕事（賄賂の受け渡し）の話ですな、貰う側が話をふるなよ。

薊さんが太守代理ですが呼ばれないで呼ばれたのが私だけなのは、何進と交渉する汚れ仕事は私の仕事で計画者は私と司君ですからね。

とはいえ、賄賂を渡すだけの誰にでも出来る簡単な仕事なんですが。

「いやいや、今回は大変じゃったんだぞ。」

はいはい、こういう話のふりするということは賄賂の増額要求ね、まあ、OK OKよ、益州手に入ればすぐ元は取れますし、金はまだまだありますから。

「何進大將軍様のお力を持ってしても苦勞されたとは、このご恩に我々は必ず報いさせていただきます。」

ふふ、金はたっぷり払ってあげますよ、ただ、この貸しは高いですよ、

十常侍と潰しあいになるようにしてあげますから、怨返しをね。

「いやな、劉焉が交州を望んだいたくせに益州が良いなんて言い出してな、

しかも、五月蠅い劉焉を洛陽から追い出したい官宦もそれを後押しして、

ちと肝を冷やしたんだ、ただまあ簡単なもので董君雅の五胡対策を見てみる！

益州の南蛮や五胡の問題を劉焉に出来るか！と一言言ったらおしまいだ。」

前に私が教えた脚本通りにきちんとやってくれたようで。

それにしても、ついさっき今回は大変だった発言したわりには、たった一言で解決したのかよ！と内心ちょっと突っ込みたかった。

「あと勿論お前らの望んだように涼州牧は馬騰になるようにしておいたぞ、

十常侍の馬鹿共は董家の持つ戦力を分断出来たと今頃小躍りしているだろう、

だが、実際はこれで董家は益州と涼州を支配することになると。」

司君が十常侍に利益あるように見せていますからねえ、

ありがたい事で、これでガツツリと稼がせてもらって今後に備えさせてもらいましょう。

「母である董君雅、義母になる馬騰も喜んでおりましょう。」

本当は義母予定ではないんですが、琅？さんは私に翠ちゃんを企
んでますが、

一応世間的には馬家と縁戚関係を計画していると言っております。

まあ翠ちゃん今は子供ですが可愛いし婚約は私も満更ではないです
が、

ただ、将来翠ちゃんが大人になってから決めてもらうようにしない
と。

「ワシにはお前さんは実に羨ましいぞ、子供と言っていい若さで知
謀に優れ、

可愛い婚約者もいて、武も相当な物と聞いておるぞ、前途洋々で。」

社交辞令にしても少しは嬉しいですね、とはいえ、前途洋々なんて、
これから徹底的に大陸を切り取りに行くんですから険しい道ですよ。

「いえいえ、何をおっしゃいますか私などまだまだでございますよ、
それに私が好き勝手出来るのは何進大將軍がいるおかげですから。」

こういう謙遜嫌いなんですよ、かといって本音で、お前よりは勝っ
ているなんて、

さすがに酒の席の冗談でも言えるわけないですがね。

まあ、此処にはいない司君ならば恐れず言いそうですが。

「だ、大將軍様はまだまだお若く、そのお力は実に優れております！」

ずっと黙っていた皇甫嵩のねーちゃんが急に声をあげる。

ははーん、なるほど蓼食う虫も好き好きね。

「ありがとう董擢殿、皇甫嵩將軍、ただワシも分かっているんだ、自分が初老を迎えた宮中に居座る無能な輩でしかないことを。」

目の前には大將軍と呼ばれる何進が、ただ普段の豪快なおっさんでなく、演技でなく疲れた顔を見せていた、いつもよりもはるかに小さく見えた。

「ワシは妹のおかげでこんな地位に就いているが、宮中は魑魅魍魎だらけ、いつこの地位から下ろされ消されるか怯え小銭を稼ぐだけの小物だよ。」

己を自嘲している中年、これが本当の何進の姿か。

何進は大將軍ではなく肉屋の親父だったら良い人だったろうな、ただ運良く？悪く？皇后の兄として大將軍の地位に就いてしまったのが。

それにしても何進のおっさん、酒が変な所に入ったんな、でなければ自分の家族でも無い私や皇甫嵩にこんな話をするなんて。

皇甫嵩は何進の話を聞いて明らかに狼狽しているし。

「董擢殿、ワシはお前さんや董君雅殿をととも気にいっているんだ、だから、お前さん達にワシは出来る限りの力を貸そうと思っている。」

何進に賄賂を渡しているとか関係無く涼州が贖身されているのは分かる、

何進に取り入ろうとする人間はそれこそ山のようにいる、だが何進に願いを叶えてもらえる人間がどれほどいるか。

「お前さんは益州牧と涼州牧の地位を手に入れるように行動しているが、それは目先の小銭のためではないのは分かる、もっと先を見ているのだろう。」

ほお、ちょっと感心してしまった、愚鈍ではなく愚鈍を演じていたか、

此方の動きが先を見据えた物だと読んでいたとはね、面白い。

「何進様の考察お見事でございます、ただ、此方は矮小なる者です。」

話がどう転ぶか分からないので常に謙遜して腹の底は隠していない

と。

「隠さないでいいお前さんがワシを測ったようにワシもお前さんを測ったのだから、

野心あふれる姿、汚職を憎む高潔さもある、目的のためなら手段を選ばないとする覚悟も、

ワシもお前さんほどではないが野望はもっていたからな、同類は分かるぞ。」

何進を馬鹿にしていたがなかなかの人物だったとは、先入観で人を見ていなかったのが痛恨。

それにしてもこのおっさんの口調、過去形か己の能力の限界を知り諦めたのか？

「ワシは宮中に来た時は腐敗を憎み正そうと正義感に燃えていた、信じられないだろうが。」

多分演技ではなく真実なんだろうな、それがいまや腐敗の温床の一人とは実に皮肉な。

「元が庶民であり民を顧みない政治をする王朝への怒りがあった、宮中を正そうとした、ただ地位はあってもワシは無力だった、だから金をばら撒き地位を与え敵を味方に引き入れるなどやってきた。」

目的の為ならば手段を選ばずか、だがその手段こそ己が否定していた物、

このおっさんの独白が真実ならば矛盾に苦しんだんだろうな。

「それはワシ自身が若い頃怒り批判していた腐敗だった、自分は何をしたい、自分は何をしてきた、何度も自問自答したよ。」

手段を選ばずなんて出来る性格でないなら辛いだろう、私や司みたいになんでもありではないのではな。

ふふっ、私達は面白ければなんだっていい間違いか。

「だからもう諦めていたんだよ、自分も漢王朝の流れに身を沈め、蓄財に走り、己の身を守るためだけに没頭するように。」

辛い現実から目を背けたか、まあ凡人には仕方ないだろう敵がでかすぎるのでは。

「だが、常にも思ってもいる、国は皇帝で成り立つのではない、国は民で成り立つ、

そんな当たり前な事を皇帝も宦官も貴族も宮中にいる誰も気づかず、霊帝は政治を顧みず女と金儲けにおぼれ、十常侍や貴族は好き勝手に続ける、

そんな愚か者どもしかない漢に存在の意味はあるのか？と・・・。

「

すごいな、漢王朝否定しやがったよ、そこまでは、ポーズだけだと思っていたがどうやら本気のような。

「大將軍、そのようなことを申されては！」

皇甫嵩のねーちゃんも流石にまずいと止めに入っただがまあ無駄だな。

「ご安心を、この部屋の周りにネズミは一切おりませんので、それに私も大將軍も酒に酔って夢を見ているだけで、明日には忘れていきますよ。」

一応、平気な事を伝えておきましょう、こんな会話無い事にすれば。まあ外戚で好き勝手やっている何進が実は王朝を否定しているというのが、漢王朝に忠誠誓っている人間が聞いてはいけない内容だよな。

「ワシはな民を守ってくれるなら皇帝が誰であろがかまいやしない、それがお前さんだろうが五胡だろうが、誰でもいいんだ。」

そこまで覚悟出来ているというならば引き込んでみても面白そうだな。

「何進様・・・」

漢に忠誠を誓っている皇甫嵩には辛いだろうな、自分の思い人は漢に対し忠誠どころか有害だと否定しているのだから。

「これから世は更に乱れ王朝の者では抑えられないだろう、

ワシはお前さん達ならそんな時代を勝ち抜き民を助ける事が出来る
と思っっている、
いや、お前さん達ではない、貴殿に民の未来を託してみたいと思っ
たからだ。」

何進は無能ではないどころか有能だな現実を知り未来が読めている
のだから、
面白い、司に話そう、場合によってはこちらに有用な人材としてひ
っぱろう。

それにしてもそこまで期待されるなんてなんというか尻が。むずが
ゆいですね

それに正義の味方をするような人間ではないですし、そんな人間じ
やないんですがねえ。

もしこれが実は演技であり私をはめる為の罠ならば、それはそれで
面白いんですが、
敵として優秀な方が受けて立つ側として面白いから退屈しないで済
む。

味方になるならばたっぷりとその力を利用していただきましょう。
司君楽しくなってきたよ、私達の予想を裏切っているんですよ無能
だと思っっていた者が、
賢い人間だったよ、私と司が噂やイメージに注意し過ぎて人を見て
いなかったなんて。

ならば、これからシナリオを書き換える準備をしましょうか。

まったく最悪の仕事ですよ、仕事が大嫌いなんですから私は、しかも、こちらが計画していた予定が引っくり返してくれるなんて。

使い潰すはずの人材がまさか役に立つかもとは、

敵には容赦しませんが味方になるなら抱き締めてあげませんとね。

あと、此処に戻ってくる司君の説得をしないといけませんね、

「僕がいない時にそんな楽しそうな事があったなんてズルイ！」
位は怒って言いそうですから。

はあ、本当に仕事が嫌ですよ、しかもこんな面白そうな仕事なんて。

何進のオッサン、こっちに期待するならしっかりと楽しませてあげますよ。

――司――

ピキーーーーー

うん、今何か感じた、なんか今保さんに凄く楽しそうな事があった気が。

今回の僕は外れを引いたな、いや、いつも当たりを引いていないが。

今日は僕と保さんの誕生日会を皆がやってくれるという事なので、大谷商会の執務室で仕事をしていて夜の宴を楽しみにしていたのに・・・。

張讓様、趙忠様からお呼びがと言われたら行くしかないですよ。

あー、頭来た、こうなったらあとで神の元行って飯食わせてもらおう、

目黒の北インド料理屋のカレーを神に出してもらって山のように食べやる！

そういえば、目黒のインド料理屋で思い出したなあ、保さんは北インドではなく、

カレーと言ったら京橋にある某店みたいな南インドのカレーだ！と。

そこに僕の姉が来て、カレーなら四谷タイ料理屋のグリーンカレーだ！と議論になって、

あの時、保さんは大親友だがカレーに関しては敵となったんだよね
と
思
っ
て。

結局いさかいが二週間以上続いて、手打ちにしようとなって仲裁役に保さんの当時の彼女がきて、

本所吾妻橋の高級洋食屋の比内鶏カレーになり食後に明細見て震え
上
が
っ
た
ん
だ。

カレー一人前五千円でステーキやらワインもボトル頼んでいたから・・・。

なんか保さんと喧嘩する時ケーキやらカレー、あとは酢豚のパイナップルって、

食べ物に関してばかりでかなり頭の悪い喧嘩しかないのが情けない。

でも、唐揚げにいきなりレモン汁かける奴は許さないと保さんと意見一致していたな、

保さんと僕は本当に三十越えた大人だったのか自分でも不安になってきたよ。

馬鹿な事を考えているうちにつきました張讓の屋敷に、
いつものように用意された部屋に入り張讓と趙忠が来るのを待つ。

此処に来るといつも思うのが宦官になんてなりたいんだろうねえ？と、

血筋が良くないと太守とか上級職になれないから食うためにとかでしようが。

よくちよん切る覚悟が出来るよなど、現代みたいに全身麻酔なんて無いのに、
だいたい切るなんてもったいないよな、相手に色々弄らせるのが気持ち良いのに。

これから来る二人は切ったにしてもどれくらいの切断なのかねえ？
玉だけが一般的だが竿も切る完全切断とかなのか？

宦官の歴史を調べると、中には賄賂渡して玉の切除甘くして、
子供を作ったという宦官もいたというのも驚きですが。

うん、僕は何真面目に馬鹿な事を考えていたんでしょか。

おつ、考え事をしている間に張讓と趙忠がやってきましたね、とりあえず二人の事は玉無しと玉竿無しと内心呼びましょう、まあ僕は二人のがどんな風になっているか見た事ないですが。

「張讓様、趙忠様、お忙しい中貴重な時間を割いていただき誠にありがとうございます。」

本当はこっちが呼び出されたから、お前らが言うべきなんだけどね、まあいいや、口先でへりくだるくらいどうだって。

「回りくどい話は無しでいこう、おめでとう靈帝陛下が馬騰殿を涼州牧に任ずる事を

決められましたぞ、早く伝えるべきだと思ひましてね。」

狸に似ている張讓、本日から改め玉無し狸が言ってくる、人を呼びつけたのは州牧の件がなかったと驚かすのと、金用意してこいよという事か？

僕は玉無し狸の報告してきた内容なんか正直どうでもよく、考え事をしていた、

狸なのに玉が無いなんて信楽焼の狸は立派な物を持っていないといけないのにと。

「ただ途中で難問もあり、官位の売買とはいえ馬騰殿はまだ州牧に

は早いと反対もありまして。」

今度は狐似の趙忠、玉竿無し狐が口を開いていた。

本当は横車なんか無いのだろうが、こちらから更に搾り取りたいんでしょう、

まあ、自分達は搾り取りたくても玉が無いから出ない、その代償行為か？

下品だねえ、僕も言う事が。

それにしましても、こんなふざけたプロファイリングをしていたら、FBIプロファイリング捜査官ロバート・K・レスラーに怒鳴られるか？

そういえばワイドショーとかで一時期テレビによく出ていたな、なんで、FBIプロファイリング捜査官を出したがつっていたかよう分からんが。

まあ、いいやFBI心理分析官の話はどうだって。

「お二方の御協力に涼州の皆は心底感謝しております、今宵はお二方のご活躍に見合ったお礼をお持ちしました。」

喜んで受け取ってください、後の三途の川の渡り賃ですから。

「それにしても貴殿は本当に悪い人ですな、董君雅の元で働き、董君雅の息子と刎頸の友と思わせておいて馬騰の為に働くとは。」

なんか時代劇の悪代官みたいな口調で喋るなよ、笑うから。

「面従腹背とはまさにこの事ですな、いや責めているのではないぞ、貴殿のような人間がいるから不当に評価されない馬騰殿の活躍が認められたのだからな。」

評価しないのは賄賂を渡してこないからで、判断はお前さんたちだろ、まったく。

「蝶々は甘い蜜を出す花に寄っていくものですから。」

私を楽しませてくれるのは保さんだけですよ、今のこの世界では。

「貴殿にかかれば名君とか呼ばれる董君雅は蜜の出ない枯れた花ですか、

ならば、いずれは馬騰殿もとなるのですかな・・・くくく。」

何が面白いんでしょうねえ、こいつ等の笑いのセンスが分からん。

まあ、自分の大事な玉を切り落とすような人間のセンスや思考が分かるわけ無いか。

「楽しみにしておりますよ、貴殿の漢王朝への忠誠を。」

漢王朝の中心部にいる自分の懐へ届けられる金の事ですね。

「もちろんでございます。」

もちろんでございますよ、お二人とも嬉々として金を受け取っているが、

先程も言ったがそれが三途の川の渡り賃になるのにねえ、よかったね。

「貴殿の提案通り、州牧制を進める事で洛陽で口やかましく我らを非難する者共は

州牧に任命という名目で地方に飛ばす事が出来るのだし貴殿には感謝しているぞ。」

それで地方に軍閥が出来るという事を分かっていないのがいいねえ、僕達の場合はそれを望んでいて早く戦乱の時代が来る事を今か今かと待ち遠しくてですよ。

「貴殿の実力は我らは高く買っているぞ、仕事次第ではいずれは三公の地位に据えてもと。」

十常侍や宦官の皆さんに賄賂を届ける仕事の實力ね、

三公ねえ、そんな物いららないのに、まあ、ただでくれるなら貰ってやるよ。

取り合えず、今一番欲しいのは笑いながらお前さん達の首を刎ねられる権力が欲しいよ。

ふう、疲れましたよ、保さんは今頃誕生日会で楽しんでいるんだろ
うなあ、

はあ、ずるいよなあ、こっちは嫌な仕事しているのに。

それとも保さんは僕みたいに何進の呼び出しを受けて僕みたいに被
害を受けていたりして、

まあ、そんなことあるわけないか……。

さてさて、とりあえずこの二人の狐と狸を機嫌良くさせてとつと
帰れるようにしよう。

第三十七話、州牧就任の前に（後書き）

何進を苦悩するおっさんにしてみました、

こうする事で話がどんどん收拾つかなくなりそうですが。

さてさて、大丈夫なのでしょうか私は。

カレーで大ゲンカとか全て実話です、いやはや情けない

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第三十八話、忘れ物はお弁当？ハンカチ？皇帝の勅命？後任人事？（前書き）

今回は前回の話（第三十七話）直後の話です。

今回の話は前回の何進將軍の真面目な独白とは真逆の、ふざけた物になっているのでしょうか？

皆様のご意見、ご感想よろしくお願いします。

第三十八話、忘れ物はお弁当？ハンカチ？皇帝の勅命？後任人事？

「司」

「ずるい、ずるい、ずるい！！！」

僕の怒りの猛抗議ですよ。

「ズルイと言われても司君は張讓、趙忠に呼び出し受けたから仕方ないだろ。」

いや、それは分かっていますが、でも、ずるいですよ。

「でも、保さんは誕生日会で皆に祝ってもらって、それで何進から秘密打ち明けられたり、そんな素敵なイベントが目白押して、こっちは宦官の駄話に延々と付き合わされて。」

あの会話がどれだけ非生産的だったか知らないから仕方ないなんて言えるんですよ保さんは。

「こっちは貴殿ならば三公に据えても、とか糞みたいな話ばかりですよ。」

あれほど非生産的な話は無いですよ、要は金よこせばなんだっていうだけで。

馬鹿じゃないかと、だって皇帝が売官をやっているんですから、

阿呆共に必要以上の金なんか渡さないでも皇帝から任命されるんですから。

「三公が糞みたいって、私なんか役人でしたからそこを目指していたのに。」

桜花さんの言う事は分かりますが、金払えば買える地位なんか興味無いです、

それに地位に着くことが目的ではなく地位について何をするかが大事なんですから。

「矜持なんか関係なく貰える物は貰えば良いっす！」

おおい！これ本当に光なのか？馬鹿二号が矜持なんて言葉知ってるなんて。

「いいですよ、あんな馬鹿共に世話になるならクーデター起こして皇帝になりますよ。」

ただでもらえるならば貰っても良いですが、ただ、与えられるものではなく、

自分から手に入れないですよ、変な所で頑固ですから僕は。

「クーデターって何、桜花お姉ちゃん？皇帝になるとかとんでもない発言しているから、

謀反だとかろくでもない意味の言葉なんだと思うけど。」

フランス語で国家に対する一撃ですね、クーデターの本来の意味は。

「コイツが凄いのは皇帝になるって普通に言えるって、俺なら不敬罪が怖くて言えないよ。」

嵐さん、そんなに怖いもんですか？僕からしたら皇帝がなんぼのもんだ！と、

しか言えないですがね、お飾りでしか無いあんな皇帝に何の意味が。

「司君、君がずるいと言う発言から話が明後日の方向にずれたから話を本筋に、

今は朝議の場であり、俺と君の二人の飲み会じゃないんだから。」

確かに言われてみたらその通りですね。

「今回、僕と保さんの二人が中心になって動く事で進めた独立計画ですが、

順調に進みまずは最初の段階である益州、および涼州の州牧の地位を得ました。」

あれ？百合さんとかがなんか引いているような、って、さきほどからか。

「李文優様、独立計画という表現は漢への反意有りとなりますので言葉をお控えください。」

百合さん違うよお、反意有りという事ではないんですよ。

「「最初から漢など相手にしていない（だろ！）です！」」

保さんと見事に重なりましたね。

「昨晚じっくりと何進大將軍と話をしましたが、私も彼と同じですね、忠誠を誓うのならばあの阿呆な皇帝ではなく民に誓いますよ。」

そうですね民は税をおさめてくれて僕等を食わせてくれるのですから、

王朝などは税を奪うだけでただ存在するだけの邪魔な存在ですから。

「保さんが今さらつととんでもない事を言わなかった、桜花お姉ちゃん？」

「私もとんでもない事を聞いてしまったような気がするな、梅花ちゃん。」

あれ？司馬姉妹は耳が遠いようですねえ、僕にはしっかり聞こえましたが。

「孟高さん、今の発言はどういう事ですか？」

母上とかに詳しく説明してもらえますか保さん。

「今言ったとおりで何進は皇帝に忠誠なんか誓っていません、それに彼は、うわさされるような暗愚ではなく先を見る目がある等かなり優秀で

す。」

保さんが家臣について更に話を続ける。

「何進は今のままでは漢に先が無い事、王朝が倒れる事をしつかり認識しています、

彼は漢王朝を正そうとしたが無理だったので、そのかわりこちらに夢を託すと。」

夜中に戻ってきた後、保さんが話をしたいと言われてこれを聞いて驚きましたよ、

僕も保さんも噂とかを信じ込み己の目で何進を見極め無かった、痛恨のミスですよ。

まあ、私のミスで誰か死んだとかいうようなわけではないんですが、こんなミスを簡単に犯すようでは戦場で軍師なんか出来なですよ、自分が情けない。

「そうでしたか、何進大將軍の協力をいただけるのは心強いですね、ただ今は必要なく、私達は益州と涼州を統一し富国強兵策を推し進めるのですね。」

母上の言う通り、・・・ではないですね、州牧で就任する前にやらないといけない事が。

「保さんは何進に、僕は張讓、趙忠に話をして例の物を貰えるように話を。」

州をまとめるのが簡単になる魔法の書類をね。

「文優例の物ってなんすか？もったいぶらないで教えるッす！」

光ではさすがに分らないか。

「見せ場なんだから我慢してやれ。」

日、確かにそうだが、そこは言わないでください。

「靈帝からの勅命です、これを命を早急に出してもらわないと、州牧就任と同時に、

うん、これは金にかかるがやむを得ないので、緊急の出費の申請をしたいと思います。」

これは州牧の地位買った根回しよりも高くつきそうですが、やむをえません。

「保さん皆さんが気になっているようですし何故勅命が必要か話ませんか？」

直前まで明かさないでもいいんでしょうが、教えておいた方が、次の作戦に移した際に皆に指示を出しやすくなるでしょうから明かしましょう。

「計画しているのが州牧就任と同時に益州の大掃除です、ただこれ

には大きな問題がありまして、
あくまでも太守や県令は漢が任ずるもので私達が罷免できる物ではないのが。」

保さんの言葉に皆が嫌な予感がという感じの顔していますねえ、
皆さんが心配するようなことではないんですがねえ、至極当然なもので。

「だから、太守や県令の罷免という権限を一時的でいいから皇帝陛下の勅命で貰いたいと、
まともな太守達もいますが、調べる限りどうしようもないのも多数いますので。」

まあ、皆さん納得してくれたようで、短期間で制圧するには必要ですから、
使える物は何でも使わないといけませんからねえ。

「そこで州牧就任の祝いだとかいって皆集めて、その場に保さん達が兵を率いて登場、
事前に調べておいたどうしようもない奴等をまとめて処刑・・・、
もとい罷免を。」

オオっと、つい言い間違えてしまいましたよ。

「桜花お姉ちゃん今処刑って言ったよね？」

「処刑と間違い無く言ってから罷免と言い直したね、梅花ちゃん」

あらっ、司馬姉妹が若干震えているような？

気のせいですよ、気のせい、処刑前提なんて考えていませんから。

「司君いくらなんでも本音が漏れ過ぎだよ。」

あらまあ、手遅れでしたか、まあ、いずれ話す事でしたし。

「それでもし宴席に現れない連中がいるなら、僕や日、光が兵を率いて攻めると、こちらには勅命があるのですから、そういう連中は朝敵という形で処理を。」

あらっ？ 周りを見ると皆完全に引いている、大げさなんだからなあ。

とりあえず勅命貰ったら長いようで短かった洛陽の滞在期間が終わりますね。

「僕と保さんが動けば勅命はすぐに貰えますし洛陽からの撤退も近いですから、

一か月も無いでしょうし皆さんそれまでの間に洛陽にお別れをしておいてください。」

とはいえ、洛陽で色々あるのは洛陽在住の司馬家の皆さんくらいだけでしょうが。

「司、撤退の話はいいですが後任の大使への引き継ぎもありますからそんなあせらないでも。」

確かにそうですね母さんの言う通りで、それにしても後任は誰になるんでしょうねえ？

「保さん、後任の大使は誰と誰になるんですか？涼州と益州で二人いるわけですから。」

保さんが固まっている、どうしたんだ？

「ごめん、涼州への連絡で、後任をよろしくと言う事を伝えるの忘れていたでしょう。」

ちょっとまったー、保さんだいじょうぶなのか、それ？

「「「「えっ？」「」「」「」

うん、皆がえっ？というのも当然ですよ

一保一

「大事な事を忘れていたな、どうするかなあ・・・。」

私としたことが情けないにも程があります、いやはや。

「でも言われてみたら確かに僕もすかーんと忘れていましたしねえ。」

」

司君の言うようにスカーンと忘れていたと言う表現がピッタリだな。

「何でそんな大事な事を忘れてるんですか！」

桜花さんの言う通りで、誠に申し訳ございませんとしか言えません。

「司馬伯達さんの言う通りですわよ、一番大事なことなのではないですか！」

桜花さん、百合さんとステレオで怒鳴らないでも、マリアナ海溝より深く反省してます。

「まあ、起きた事は仕方ないんだから、これからどうするかを。」

たしかに梅花さんが言うように大事なのはこれからどうするかで。

「よしっ！梅花さんは僕達のみか「諦めているだけ」・・・そうですか。」

司君が梅花さんに瞬殺されてしまいましたよ。

「孟高や文優の駄目な所は皆知っているっす、周りがもつとしっかりしないっす。」

光に駄目人間呼ばわりされると本当に来ますよダメージが。

「とはいえ、二人だけの問題ではなく、誰も気づかなかったのが問題だ。」

日の言う通り誰も気づかなかったのが問題なんですよ、
なんで知力や政治が80台とか普通にいて、こんだけいて誰も気づかないんだ。

「「うつ！」」

あつ、馬鹿一、二号にセットで正論言われて軍師勢の皆黙っちゃったよ。

あつ、どうも、もうすぐ益州牧になる董君雅の長男、保君です。

今、議論しているのは本国に後任大使を送ってと頼むのをガッツリと忘れていたことで。

大使の件で一番無難なのは薊さんと司、私をそのままでしょうが、
ただ、これには問題が、
私達がいないと益州と涼州と別れるから人が育つまでは当分の間人材不足に悩まされるのが。

益州でどれ程優秀な人材がいるかが問題ですねえ。

細作と太平要術の書の下調べだと使えそうな武将で黄忠、嚴顔、張

任、法正らがいるが、
とはいいまでも、彼らを涼州流政治になれさせるのに時間がかかるでしょうから。

あと、司と私が戻るの遅れると仕官学校、医学校設立が遅れる問題もありますし。

此処で司君がひそひそと耳打ちをしてくる。

「保さん最終手段だ、成都↓あの部屋↓洛陽の移動で、あれならすぐ行けるから、

拠点は益州や涼州に移していても対して時間のロス無く出来るのが。」

駄目です！それ凄く便利ですが明らかに不審でしょう！？

朝洛陽にいて、昼に成都にいるなんてあり得ないでしょうが。

と言いますか、はじめて聞きましたよ、あの部屋経由の移動って！そんな手段があったならば私達は洛陽駐留しないでよかったじゃないですか。

実際、司君もそれが出来るならば紅さんの件で苦労しなかったのでは？

「保さん、あの部屋経由の移動には実は大事な問題があるんですよ。」

私の心を読んだのか司君が更に耳打ちしてくる。

なんでしょう？ドラマのフリンジみたいに境界を移動し続けると
肉体に損傷が？

いやですよシェイプシフターになって水銀飲むような生活は。

そうでなくても人間離れしたアンデルセン神父並みの回復能力があるのに、

更に人外化が進むなんて真っ平ごめんですよ、いくら私でも。

「安心してくださいフリンジみたいにはなりませんから、ただ、大事な問題です、
経営者の私がいつもいたら従業員が働きづらいでしょ？」

頭痛くなってきたよ、まあなんとなく分かるよ言いたいことは、
支店に本来ならば本社にいる社長や会長来ると息苦しいのは。

まあ中にはそんなの気にしないどころか役員に恐れられる人間もいます。

私の友人で、ある上場企業に入社が決まり新入社員歓迎会で役員達との食事会になり、

全員酔い潰していったって役員達に恐れられた新入社員がいたんですが。

アイツよくクビにならなかったよな、今や若き課長と出世コースにのっているが。

まあ、そんなどうだっていい話は置いておきましょう。

「そんな理由なのかよ！」

とりあえず司君には怒っておきましょう。

「大事でしょうが、社員のやる気という点では！」

お前さんは例の武器屋の経営者の前に涼州の政治家だろう。

「二人で何をひそひそ話をして盛り上がっているんですか？」

あつ、薊さんに気づかれた、どうするんですか司君？

「すいません、もうすぐ紅さんに会うんだなと思い出しまして、帰国後を想像し軽く現実逃避をしてしまし、それを保さんに怒られてました。」

よくまあ適当に息をつくように嘘が言えるなど、ただ、言い訳には無理がないか？

「今は仕事中ですよ司、ただまあ、母は貴方の無事を祈ります。」

おいー！薊さんに通じちゃったよ。

「李文優様、命を大切にされてください。」

百合さんは紅さんの何だと思っているんでしょうか？

「絶対に負けられない戦いがあるっす！」

テレ朝の日本代表戦のCMみたいな台詞を言うなよ、光！

「王子様、こいつもカマキリみたいに最後は食われる？」

いやいや嵐さん、それは酷いだろう人食部族じゃないですから紅さんは。

あと、カマキリのメスがオスを交尾後に食うのは飼育化で野生ではまずあり得ないし。

「愛故に人は苦しむのか。」

日、なんだろう、思わせぶりな言い方しないでいいよ、痛々しいだけだから。

とりあえず何故か司君の言った適当な嘘を皆理解しちゃうんだよ、いくらなんでもないだろ、あれは・・・。

しかも、みんな司へのコメントが恋人に会うというような内容でない物ばかりなのが。

確かに最近の紅さんの手紙は鬼気迫る物がありますが、そこまでではないでしょう。

「そんな皆さん大げさな、最近の手紙がちょっと怖いですが大したことは無いですよ。」

あらら？私の発言に対し皆が一斉に首をぶんぶん横に振っている、何でまた？

司君が懷から取り出した竹簡を私に見せてくる、なんでしょうか？

「ヒイイイー！！！！！！！！！！」

まさか私が悲鳴をあげるとは。

ただ一言“会えないのならば”とだけ書いてある。

問題は血だよな、この色は・・・。

おい、紅さんやバイだろ、なんでこんなことになっているんだよ！？

こうなったら仕方ない。

「今回問題になっている洛陽駐留大使引き継ぎの問題解決の為、

私は李文優軍師だけを先に一時帰郷させることを提案します。」

司君がエッ、と驚いた顔でこちらを見ている。

「「「「意義無し！」」「」」」

よし、皆がのった、これで皆助かる。

「はひっ!？」

司君がなんか固まっている、今がチャンスだ。

「皆、司を逃げられないように縛って！」

「た、た、保さーん、僕は死にたくないーい、死にたくない、助けて
!!」

死にたくないって、司君は何を言っているのでしょうか、ただ愛しい人に会うだけなのに。

「誰かこの男を連れ出せ！」

うん、半ば犯罪者扱いやね、これは流石に可哀想か、言ったの私ですが、

でもまあ、親である薊さんも何も云わなかったし問題無いでしょう。

とりあえず縄で縛られた司君を愛馬挟翼にくくりつけて出発させましたよ。

後日涼州から早馬で届けられた竹簡には、司君が真っ白に燃え尽きていたと報告が。

“幸せは犠牲なしに得ることはできないのか、時代は不幸なしに越えることは出来ないのか”

ジャイアントロボで草間博士の残した遺言が心にしみるね。

司君を失うことで得たこの平和を守り抜いていけないといけなないと、私達は洛陽の空の下で心に誓うのだった・・・。

ちなみに、後日司君から届いた手紙には、仕事の報告ではなく、“覚えていろよ”とだけ血で書かれているのだった。

って、大丈夫なのか、大使の後任の件は・・・。

ちなみに、秘匿されていたそうですが紅さんだけでなく母上も私に会えないなら、

と鬼も逃げだしてしまいそうな鬼気迫る状態だったそうで。

第三十八話、忘れ物はお弁当？ハンカチ？皇帝の勅命？後任人事？（後書き）

洛陽編はとりあえずもうすぐ終わりそうです。

ただ今は洛陽へんの終わりよりも、今回の話の直後、
紅さんと死んだ目をしてやつれている司君の話を書きたいのですが。

問題はどうか書くかが今の所最大の悩みであります。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第三十九話、司君は平常運航（前書き）

今日は前回、第三十八話からの続きで、
涼州に向かって急ぐ司君の平常運航姿です。

今日も見事に駄文ですが、皆さんに少しでも喜んでいただけたら幸いです。

第三十九話、司君は平常運航

—司—

前回、保さんに縛られ挟翼に乘せられ涼州に送り帰されましたよ。

何度死ぬかと思いましたよ、普通に乗るのも大変な馬なのに、私は縛られていてバランスとれない状態で全力で走られるんですから。

舌を噛み切ること四回、落馬すること数知れずですよ……。

そのうち三回は落馬して運悪く脚でパツカーンと蹴っ飛ばされ。

これ死んじゃう奴ですよ、馬に蹴られたバカボンパパみたいなところじゃないですよ。

挟翼は頭が良いですよ、私が落馬したと分かると私の頭を噛んで持ち上げ、
反動つけて首をグリーンと思いつき振る私は挟翼の背中にドサツと叩きつけられる。

すいません、縛られて手足の自由がきかない私を乗せてくれるのは優しいですよ、

ただ、頭噛まれるの痛いなんてもんじゃないんですが!!

しかも、頭噛んだまま持ち上げられるの半端でなく痛いんですが、インディアンが戦利品で相手の頭皮を剥ぐんじゃないんですから! ? どんな拷問ですか。

更に、それで振り回されるって、殺されます、死の原因が愛馬の優しさですよ。

挟翼の噛む力があれば、私を縛った縄くらい簡単に咬み千切れるんですが。

ええ、愛馬の頭の良さに涙が出そうですよ、まったく!

って、鞍からずるずる落ちてしまいそうです、このままではまずいです。

グボォッ

グフツ、落馬して左後ろ足が鳩尾に入った、死んでしま・・・。

挟翼が戻ってきた、痛い、痛い、助けて頭を噛まないで!!

これがあとどれくらい続くんだ・・・。

函谷関にいた役人さんが縄切ってくれなかったら死んでましたよ、繰り返しで。

役人さん達最初僕のこと気づかなかったって巨大馬の背中にずた袋が乗っていたって。

気絶していた僕が「助けてくれ」と魘されなかったら気付かれなかったって、

函谷関の役人さん優しかったよ、あまりに僕の見た目が惨めだったから。

僕は偉いんですよ！今の身なりは酷いですが涼州の軍師で！十常侍と知り合いで！

神からの依頼を受けて外史を守ろうと頑張る守護者なんですよ！

うん、多分今その発言をしたら関所の人間が無礼者と斬りかかってくるな、

いや、馬に蹴られ頭を強く打ったか？と心配されて、より優しい目でみられる・・・。

うがあああゝ、なんでなんで僕ばかりこんな辛い目にあうんだ。

それもこれも保さんのせいだあああああ！！！！！！！！

なんか気分が陰々滅滅としてきましたよ、何でこんなに僕は不幸なんでしょうか？

はあ、落ち込んでいても仕方が無いのでとりあえず仕事ですし、涼州まで最低限の休憩で挟翼でとばして行きましょう、急がないと。

あらっ？涼州への道を急いでいるとそんな僕の進路を防ぐように三人組がいますね。

なんかこっちに話しかけてきますね。

「ようニーチャン、立派・・・・・・・・・・。」

バカラッバカラッバカラッ

なんか言っているみたいですがなんなんでしょうねえ？

こっちは飛ばしているんですから聞けるわけじゃないじゃないですか。

それに今急いでいるんですから見知らぬ人間の相手なんか出来ません。

まあ僕の勘違いでただ単に「おはよう」とか挨拶したいだけなのかも？

念のため振り向いて確認してみましよう。

あらっ？振り返ってみると男達が必死の顔して追いかけていますね。
何でしょうか、はっ、まさか僕の正体が見破られたのか？

僕が伝説の放浪貼り絵画家で彼ら三人は「清せんせーい」と
これはいけません、山下清なのにランニングシャツ姿で無いなんて
知られたら。

まあ、本当の山下清はランニング姿で放浪なんかせず、
画家は御洒落でないといけないとベレー帽姿だったようで。

って、ちょっと待った、僕はいつから 山下清になったのでしょうか？

違いますね、という事はあれは全く違う用件の人でしょうがなんで
しょうか？

観察をしてみましょう、よく三里位追っ掛けていますよ、
中国の一理は500mで日本よりは短いとはいえ良く走ること。

人相が悪い、見た目が汚い、うん、賊だね、ついでに手に武器持っ
ているし。

判断基準がおかしい？いや、まあ、人は見た目が大半ですから。

どうやら彼らは僕に難癖をつけようとしてみたいですわね、面白い、
保さんやら挟翼によってたまりにたまったこのストレスを発散させ

てやる。

いや、間違え、賊なんて不埒な輩は正義の力で成敗してやる！！！！

挟翼を立ち止まらせて待っている、彼らの叫び声が聞こえる。

「待てー！！！！！」

「待ちやがれー！！！！！！！」

「止まってくださーい！」

賊の癖になんか丁寧な奴がいるぞ、引き離してマラソンさせすぎたか？

僕は優しいのできちん止まって待ってあげましたよ。

「待ちやがれ・・・ゼーゼー。」

肩で息していますねえ、可哀想ですねえ。

「あばよ、とっつあーん！」

ハイヨー、挟翼イケー！

本当は「ハイヨーシルバー」といきたいが、今の子供には分からない

いですね。

これでまた後ろの馬鹿共と距離が離れたらまた立ち止まっとと。

「待てー！ー！！」

「待ちやがれー！ー！ー！！」

追っ掛けて来るなら、台詞が違うだろ、待ちやがれではないだろ、そこは「までールパー！ー！ーん！」か「ルパー！ー！ーん逮捕するー！ー！！」だろ。

空気の読めない奴らだ、だから賊なんかに身を落とすんだよ。

ピタリと立ち止まって、待って近づいてきたら、またも。

「あばよ、とっつあーん！」

ハイヨー、イケー挟翼！

さあ、彼らは何回まで耐えられるか実験してみましよう。

彼らが諦めそうになったら修造と化して諦めるなよと励ましましょう。

「諦めんなよ！諦めんなよ、お前！！どうしてそこでやめるんだ、そこで！！もう少し頑張ってみろよ！」

よし、彼らも元気に追っ掛けて来るでしょう。

一刻後

「もっと熱くなれよ・・・！！熱い血燃やしてけよ・・・！！！！人間熱くなったときがホントの自分に出会えるんだ！」

あらっ？修造になっての応援しているが動きませんねえ、15回目になると倒れてピクリとも動かないですね、大丈夫でしょうか、死んだ？

近寄ってみましょう。

あっ、生きています、生きています。

「おね・・・まっ・・・」

「アニキな・・・っしなん・・・。」

「もう動・・・・・・・・。」

何を言っているのか全く分からないですね、困ったことに。

とりあえず確認しましょう。

「お前達は賊か？」

「そ・・・う・・・・・・・・だっ。」

たった三文字そうだと答えるのに、なんだこの長さは。

これじゃあスリランカの首都なんか言わせたら何年かかってしまうやら。

とりあえず彼ら賊という人間失格な存在になってしまった人には説教です。

「撃っていいのは撃たれる覚悟があるものだけだ、未来の偉い人は言う、

お前さん達、人から脅しとるからには脅し取られる覚悟があるということだな。」

コードギアスでルルーシュが言った名言を使わせてもらいましょう。

「アニキ、未来の偉い人って意味が分からないぞ。」

デブがルルーシュの名言を分からないなんて。

大体アニキって何だ兄弟じゃないだろ、ワセリン塗ってテカテカでないし。

「お前が馬鹿だから分からないだけだ、コードギアスを見て勉強し直せ糞盗賊が。」

僕がとりあえず何の事か教えてあげました、なんて優しい僕。

「なんだと・・・」

いまだに息が上がったままだから倒れたままで立ち上がれない名も無き盗賊達、

見た目からヒゲ、チビ、デブとでも呼びますか、サヨウナラそんな三人。

とりあえず暴れられたら嫌なんで倒れている三人に対して、一人ずつマウントポジションからの滅多打ちを、逃げられなくしてやりました。

「ぐふっ。」

「こ、こ、殺さないで・・・。」

「許してください」

なんでこんな事言うんでしょかねえ？

「馬鹿野郎、これお前ら人間にもなれない屑共への愛の鞭だ、我慢しやがれ！！！」

僕ってちょっと残酷だな、でも、賊を殺さないなんて優しいなあ、多分、優しさがほとんどですよ、優しさ50%なバファリン越えですよ。

「安心しろ、僕は大陸一の優しさを誇る人間だから・・・ニヤリ。」

つつい邪悪な笑みを浮かべてしまいますね、賊共が脅えているよ
うで。

「「「ヒィー！」」」

男が悲鳴をあげるな情けない、悲鳴をあげていいのは、
病んできている彼女から血染めの手紙を送りつけられた時だけです。

本当にどうしよう？涼州に戻って紅さんに会った瞬間に

「貴方を殺して私も死ぬ」なんて言われて刺身包丁で肝臓をエグられたりしたらどうしよう。

うん、現実逃避はいけない、まずは賊退治をしよう、僕は正義の味

方だから。

「なに殺しはしないよ、君達の荷物と服は全部押収して燃やして、それで君達は縄で縛って蜂の巣がある木にぶら下げ最後に蜂の巣を壊すと。」

アナフィラキシーショック起こさない限りは死なないですし、優しいなあ僕。

「鬼！悪魔！」

「人でなし！」

「お願いしますなんでもするから許してください！」

おいおい、賊だろ、なんで賊がそんな情けない事を言っているんだ。

もし現代だったら夜のジャングルで全身に蜜を塗って投光器の光を当てるよ！？

全身に虫がたかって体中を食いついたりする結構な拷問を計画しましたよ。

それかダークナイトのジョーカーみたいに殺しあいさせて、生き残った人間だけを許してあげるとかしましたよ。

なんて酷い話でしょうか、僕の溢れんばかりの優しさを理解されないなんて。

「お前さん等、僕は優しいんだぞ「うそつけ！」まあ、否定する前に話を聞け、

本来ならば此処から一番近い長安まで連れて行き役人に引き渡す、そうなたらお前さん達賊はどうなるか分かるだろ？」

優しく諭してあげないといけませんね。

「殺される」

「斬首」

「処刑される」

三人ともよく分かっているじゃないですか。

「それに僕は急いでいる、そうなると君たちを長安まで連れていく時間が、
仕方ないから足を縄で縛って長安まで肉が裂け骨がむき出しになろうが引き摺るしかない。」

「「「斬首より酷い！」」「」」

いい年した大人が三人もいながら情けない、怯えすぎです！

確か、此処からならば長安の街まであと三十里でいどのきよりですから。

ちょっと紅葉おろしの親戚になるだけくらいで。

「だから僕は優しいから選択肢を増やしてあげたんですよ、長安まで三十里程君達を引き摺って運良く生きていたら斬首されるか？」

裸で木にぶら下げられ蜂に刺されるだけか？どちらでもいいように。

「

どうです、僕の優しさがよく分かるでしょう。

「いや、見逃してくれたら・・・。」

「許してください。」

「殺されない代わりに死よりも辛い拷問なんて。」

何を言っているんでしょうか、彼等は？何処が拷問ですか単なる罰ですよ、

私のストレス解消という正義の実行を見逃して無かったことにしろとは。

「本当は勇午のパキスタン編であった奴をやりたかったんだぞ、

お前さん等を上半身裸にして灼熱の太陽で熱せられた岩に縛り付けられて背中を焼かれて、

しかも、お前さん達の耳に蜜をぬっておくから耳からアリが入り最後は脳を食われて死ぬと。」

「悪魔がいる、人の姿をした悪魔がいる!!!」

はあ、なんか人の事を無茶苦茶言ってますね話がこのままでは進みません、

しょうがない、僕の正義を賊共に実行しましょう。

「ウギヤアアアアー!!!」

「痛い、痛い、助けて蜂が、蜂が・・・。」

「いつそ殺してくれー!」

おおつ、三人とも涙流して僕に感謝しているみたいですね。

よし、良いことを沢山したし、早く涼州に向かいましょう。

じゃあ、最後に皆に別れの挨拶をしましょう。

「まったく僕は忙しいんですよ、急いでいる途中だというのに、文句があるなら家まで来いや!喧嘩ならいつでも買ってやるからな!僕は洛陽の曹操だ!逃げも隠れもしないからいつでもかかってこいや!!!」

よし、これでよしと、優しいなあ、うん、僕って実に優しい。

曹操なんか何もしていないのに賊退治をただけでなく、賊をただ処刑するのではなく改心の余地を与えるなんて、名声上がりますよ。

賊も殺されないで済んだと曹操の情け深さに感謝するでしょう。

こういう人の見ていないところで頑張るのを縁の下の力持ちというんだな。

急いで涼州に向かわないと、紅さんに会いたいように会いたくない、そういう点では急いで向かいたくないという点も、はあ、大変ですよ。

後日、全身蜂に刺され死に掛けた裸の三人が見付かり、鬼より怖い拷問魔曹操という呼び名が囁かれるようになったとか。

第三十九話、司君は平常運航（後書き）

洛陽編はもうすぐ終わると言いましたが、
司君の暴走させたりで終わるのでしょうか？

益州編に無事入るのでしょうか、この話は。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第四十話、ヘッドハンティングの旅に行ってみよう（前書き）

今回は笑いが少ないです。

新たに恋姫キャラを出す話にしてみました。

第四十話、ヘッドハンティングの旅に行ってみよう

一保一

「暇です、実に暇です！司君が帰ってくるまで暇です！！」

叫び出したくなるくらい暇なんです。

「暇なのは分かりますがわざわざ叫ばないでもよろしいのではないのでしょうか？」

百合さん言っている事は分かりますが、暇で仕方が無いんです。

「王子様近場に旅行でも行く？でも、そんなこと無理か。」

嵐さんナイス！！そうだ！暇なうちに休暇をもらいましょう、軽く旅に出しましょう。

「とはいえ此处一カ月休みなく働いてましたし、休まれてはいかがでしょうか？」

桜花さんに言われて気づいたが、確かに休みないですねえ、まあ朝から晩まで仕事漬けというわけではないから対して辛くないんですが。

よし、休みを貰って司君から聞いたあの部屋を使って移動して旅行しましょう、

人材確保の旅、第一段として誰かに会いに行ってみましょう。

誰にあつたら面白いか？史実で董卓とやりあつた人間が面白いか？
そうなる と孫堅か。

「じゃあ、すみません皆さん、明日、明後日と二日間お休みをいただきます。」

皆にお休みをいただくことをわびておきましょう。

「謝らなくていいつす、孟高は休み無しで頑張っていたつす。」

光ありがとう、でも、そんなに私が真面目に仕事しているわけではないんだけどね。

「休める時に休むは将の仕事。」

日に言われたが、確かに休め休め言っている私が休んでないのも問題だな。

「保さん久しぶりの休暇を楽しんでください」

薊さんにも休暇の後押しされましたし、問題無いですね。

「嵐さん、二日間ほど護衛の任を解きます、ちょっと色々やりたい事があるので。」

嵐さんに着いてこられるとちょっとまずいので、仕方ないですが。

「えっ！！？？」

あらっ、まあ、常に横にいてくれとあの日聞で言ったのは私ですからねえ。

「ごめんなさい、でも、ほんの二日間ですし、まあ今晚は一緒にいますので。」

ごまかす為に、今日の夜は嵐さんを甘やかしましょう。

「王子様がそういうならば、分かったよ。」

嵐さん本当にごめんなさい、いずれ話しますが、まだ今は早いので。

では夜になるまでの間に司君の部屋に保管されている太平要術の書で居場所等確認しましょう。

「孫堅、孫堅、孫堅のデータは何処かいなと。」

パラパラ

太平要術の書をめくってみると、あったあった、孫堅のデータが。

居場所は会稽で県丞をしていると、まだ建業とかではなく、太守になる前ですね。

それにしましても、孫堅の個人データも見れるので見てみましたが、なんですか、このパワプロみたいなふざけた表示形式は。

統率95武力92知力70政治71魅力93

数値が反則的な高さをしていますねえ、是非欲しい武将です。

特筆すべき特徴はと“ウォーモンガー”“気分屋”“特攻癖”“野生の感”“飲酒○”
色々な能力が多数ありますね。

特攻癖とウォーモンガーは怖いですねえ、暴走が有り得そうで、
とはいえ、これほどの能力は見事としかいいようがないです。

自分の能力は見ない方がいいでしょうから司君のを見てみましょう。

パラパラパラ、パタン

太平要術の書を閉じましたよ、見なかった事にしよう。

数値の欄が全てお花やら髑髏の絵になっている、バグっているのか
？限界突破しているからか？

あと何だ？“嘘つき”“トラブルメーカー”“暴君”“倫理観×”
“ドS”って危険なのは、
暴君はあかんذار、いくらなんでも、出世させてもナンバー2まで
にしないと怖い。

“天才経営者”“威圧感”とか良い点もあるな、“性豪”はまあな
んと言えよいか。

とりあえず明日から二日間ほど会稽に行ってみましょう、

じゃあまずはその準備の為に宮中に行って来と。

それが終わったら今晚は嵐さんと二人で夕食を共にしたりしますか。

—黄蓋—

会稽城の錬兵場

「黄蓋將軍、孫堅様がお呼びのようです。」

訓練中の兵に声を掛けられ振り返ってみると愉快そうな顔した堅殿が立っている。

「祭、今日も頑張っているはねー、今、時間良いかしら？」

いつもならこんな事聞いてこないで、話を勝手に進めて行くのに。

「どうしましたのじゃ堅殿、わざわざ錬兵場まで来ないでも。」

いつもの堅殿ならば練兵などめんどくさーいとか言って練兵場など近づかないのじゃが。

「面白い手紙が来たんだけど、祭が興味持ちそうだなと思ってね。」

こういう言い方をしているが明らかに堅殿自信が興味あるのを立場があるから、

儂のせいにしてしているんじゃないかな。

「どんな手紙が来たんじゃ堅殿？」

堅殿はよほど興味があるんじゃないだろうな、ニコニコしながら懷に抱えていた竹簡を渡してくる。

「さっき皇甫嵩將軍の紹介状を持った涼州太守代理洛陽駐在武官っていう人が来てね、

その人が持ってきた竹簡を見たら驚いてね。」

なんで涼州の太守代理が会稽の堅殿に手紙を送ってくるんじゃない？それにしても中を読んでみたが、なんじゃこの手紙は。

“美味しいお酒と食事を楽しみながら色々とお話をしませんか？”

なんじゃろうか、この砕けた文章の漠然とした手紙は？

書いてある場所は会稽の高級料理店での食事の誘いとは。

五胡対策に優れ経済が発展している涼州が一体堅殿に何の用なのじゃ？

「何のためか分からないし、身元の確認も取れないし、堅殿断るべきじゃろ。」

明らかに堅殿が不満そうな顔している、こういう時の堅殿には言っても聞かんじゃろうな。

「えー、祭、折角面白そうな事が近付いてきたのに、祭は行かないのー!？」

堅殿の発言に違和感を感じるのじゃが。

「堅殿、もしかして最初から行く気で儂が同行するか聞きにきたんじゃないだろうか？」

「だから祭に聞いたんじゃないの、祭は行かないの？って。」

やっぱりか堅殿、儂も堅殿もそんな胡散臭い人間に会う暇なんか無いはずじゃろ。

「そんな暇なんかないじゃろ堅殿にはやる事があるじゃろ。」

「ぶーぶー美味しいお酒って書いてあるし、祭も一緒に飲みに行こうよー。」

はあ、堅殿は会稽の県丞と要職にいと理解しておらんのかな？

はあつ、諦めて夜に堅殿に着きあうしかないんじゃないかな。

一保一

二人で来るという事を聞いたので、会稽で一番高い料理店の個室を用意して待つことに。

どうやら来たようですね、店員に案内されて美女二人組が部屋に入ってきましたよ。

「孫堅文台様、本日はお忙しい中時間を割いて頂きありがとうございます、
いました、

また、事前の約束も無い急なお誘いという非礼を深くお詫びさせていただきます、

申し遅れました、私、涼州太守代理で洛陽駐留大使館の董擢孟高と
もうします。」

思い立ったが吉日とは言いますが、私もやる事が無茶と言いますか
司君並みに強引な手段を取るんですから、常識人と自称しているが
無理ですねこれでは。

とりあえず急な呼び出しのお詫びをしましょう。

「あらいいわよ、面白そうだったし、それに皇甫嵩將軍の紹介状を
持ってこられたんだし、

洛陽からわざわざお酒の誘いに此処まで来るなんて物好きなのね。」

怒っているようではないですね、怒るではなく何かあるのか楽し
みで仕方無いんだろう。

「失礼じゃが太守代理とかいっている割にはやけに若いようじゃ
が
お主は。」

孫堅さんのお供でやってきた銀髪の女性に歳の事聞かれましたか、
まあ、私や司君が特殊で絶対にあり得ない事ですからねえ。

「ええ、この間15歳になったばかりです、とは言いましても、ここ数年ずっと母である涼州太守董君雅の元で政にかかわっておりますもので。」

「「えっ!! 15歳（じゃと!?!）なの!?!」」

お二人とも相当驚かれているようで、うん、新鮮な反応だね、今や涼州では当たり前前の事ですからねえ、でもそれがどれだけ異常なことか。

「す、凄い、若いのに優秀なのね。」

孫堅さんはまだ驚きがおさまっていないようで。

「いえいえ、若輩者が涼州の諸先輩方を必死で真似しているだけです。」

とりあえずは謙遜しておきましょう。

「謙遜しなくていいわよ、それよりも私を知っているみたいだけど名乗らないとね、私が孫堅、字は文台、堅苦しいのは嫌いだからこの口調で話させてもらうわね。」

どうやら、私の年齢の驚きから取り戻したようですね。

それにしても軽い口調が軽いつかでなく全体的雰囲気からして軽い、

これがあの江東の虎か。

なんでしょうかそこはかとなく感じてしまうのが、私や司と同じタイプ、かなりフリーダムな要素を持つ人間の匂いにする。

いやまあ、私や司君の二人みたいに生きていて面白ければ、この世はどうなってもいいなんてフリーダムさはないでしょうが。

ちなみに事前に調べた資料だと28歳、ただ、見た目は二十歳くらいか、

地面に着くのでは？は大袈裟にしても腰より下まで伸びた桃色のストレート。

臙脂色の胸元がバックリと開いた、深いスリットの入ったチャイナドレス、

日に焼けた褐色の肌を惜しげもなく晒して、そして素敵な巨乳が。

巨乳フェチではございませんが、これは大変ご立派な人類の宝でございます。

これで今現在は孫策と孫権の二人の子持ちだとは参りましたとしか言えない、

歴史だと孫尚香とか、あと何人か子供がいたようだが。

「ほら、祭も名乗りなさいよ。」

一緒に来た方は祭さんか、真名であるから気をつけないと、いった

い誰なのだろうか？

銀髪ロン毛を後ろで束ねた爆乳のお姉さん、軍師ではなく武人らしいが一体誰だ、

孫堅に付き従っている武人となるとだれだろうか？

年齢は孫堅さんよりも年下で25歳くらいかな？

とりあえず言えるのは孫堅殿に続いてこれまた眼福としか言えないおっぱいが、

おっぱい星人ではございませんが、ありがとうございましたとお礼を言いたくなります。

「黄蓋じゃ、字は公覆じゃ。」

ほほお、苦肉の策のあの老将黄蓋がこんなに若い魅力的な女性だとは、

この時代でこの若さなら赤壁の頃は史実だと爺さんだが美熟女になってそうだな。

苦肉の策で美女が棒打ちにされると、ヤバイちよつとそそる物があるね。

「黄蓋殿ですか御高名はかねがね伺っております、兵卒や民に慕われる名将と。」

三国志での評価ですが、孫堅さんよりも威厳とか真面目さがあるな、まあ孫堅さんが自由すぎるだけで、孫堅さんみたいな人が上の方が

いいんでしょうが。

ただ、孫堅さんが上だと、黄蓋さんとか皆振り回されていそうだが。

「あら良かったじゃない祭、兵卒や民にも慕われる名将だなんて。」

孫堅さんがニヤニヤしながら黄蓋さんを見ている、

面白いおもちゃを見つけたという感じで、私や司君がたまに見せる
邪悪な笑みですね。

「堅殿、客人の前でからかうでない、儂が名将ってお主もそんなも
ちあげるんじゃない。」

黄蓋さん凄い照れようで、冷静にしていたが慌てている所が可愛ら
しいなあ。

「いやいや、御謙遜を洛陽で話題ですから孫堅殿、黄蓋殿お二方の
実力は。」

三国志で相当活躍された名将であるのは間違いないですし。

「だからお主もからかうでない!!」

あら、怒られちゃいましたよ、可愛いなあ、美人が照れて怒る姿っ
て。

「ふふ、祭も照れちゃって、って、立ち話もなんだし座ってお酒を
たのしみましょ?」

あら、もつと黄蓋さんをいじつてみたかったです、孫堅殿に言われたように座りましょう。

「これ、堅殿、なんで堅殿が勝手に席に着いたり話を進めておるんじゃない？」

たしかにまあそうですねえ、とはいえ大して気にはしていませんが。

「ぶーぶー、祭ったら堅いんだから貴方もそんなの気にしないでしょ！？」

いやいや、確かに気にはしませんが、私にいきなり振られても困るのです。

まあ、お気楽に答えてみましょうか。

「孫堅様お気遣いありがとうございます、私も気楽に出来るのでありがたいのですが、ただ、私がよくてもいつものように話をしてしまったら黄蓋様に睨まれてしまいますよ。」

なんだかんだ言いながらも気楽にいきますよという感じで答えてみましょう。

「ぶーぶー、貴方も口調が堅いわよ、もつと家で話をするみたいに話して。」

ぶーぶーって、三十歳近い子持ちの口調じゃないよ。

「今、なんか歳の事かな？なんか失礼な事思わなかった？」

こええー、一瞬だがかなりの強烈な殺氣飛ばしてきたぞ、流石野生の感を持っている人間だけあって鋭いなあ。

「いえいえ、そのような事は何も。」

ちょっとビビったし、否定しておきましょう。

「堅殿、客人に殺氣飛ばして怯えさせてどうする。」

さすがに黄蓋さんが止めてくれましたよ、あの殺氣は普通の人間ならチビりますよ。

「あら祭、この人これくらいの殺氣なんてなんともないでしょ、おとなしい振りしているけどこの人の武は相当やるわよ。」

ふうう、江東の虎には隠し事は一切できませんねえ、実力を分らないようにかなりだらけさせているんですが。

とはいえ、いらぬ揉め事を起こしたくないから隠していたんですが。

「堅殿、そうなのか？」

黄蓋さんには分かり辛いようで、まあ、孫堅さんの持つ野生の感が半端で無いんでしょうが。

「いえいえ、私の武など名将と呼ばれるお二人とは比べ物にはなりませんよ。」

うん、これはまずいですね、孫堅殿の発言で私を警戒されてしまいましたよ。

「……………」

孫堅さんがこっちをじーつと見ている、隠し事は通じないですね。

「ふう、まいりましたねえ、要らぬ警戒をされないように隠していただきますが。」

しょうがない正直にばらしましょうか。

「単なる童かと思ったら、相当人を食った御仁の様じゃのお主は。」

孫堅さんはニコニコしているが、黄蓋さんは相当此方を警戒しているようで。

「当初の予定がだいぶ変わってしまいましたし、仕方ないですね、では、回りくどいのもなんですし、本日の理由の説明しますね。」

ストレートに話をしましょう、隠し事をしてもう手遅れですし、今回は粉をかけに来た程度ですが。

「あら、それは悪い事をしたわね、でも、本題があるなら早く教えてほしいわね。」

正直に話をしましょう、この二人を何とか手に入れたいですし。

「私の君主である涼州太守である董君雅が今度益州の州牧に着く事になり、
その際益州内の統治で協力してくれる、郡太守候補を探しております。」

今回の目的を話してみしよう、まあ江東の虎が益州にもし来てくれたならば、
呼び名が何になるんでしょうねえ、蜀の猛虎とかになるんでしょうか？

「凄くうれしいお誘いね、私なんかが太守だなんて、でも涼州太守の董君雅様が
益州牧なんて話聞いたことないし、太守なんてあなたが勝手に決められないでしょ。」

孫堅殿の口調、目付きが変わりましたね、江東の虎と呼ばれる姿を見れましたよ。

フフフ、なるほどなるほど、これは虎と呼ばれるだけがありますよ。
喋っている内容は普通ですがこちらを明らかに疑った目で見ておりますねえ。

「話があり得ないくらいおいしい話じゃな、太守代理如きがどうにかできる物ではあるまい。」

孫堅さんや黄蓋さんの言う事が最もですね、単なるガキがこんな話持ってきて、

しかも、それを聞いて信じる人間がいたらその人間はどれだけ脳味噌がお花畑でしょうか。

「フッフ、まあ、当たり前でしょうねえ、信じてもらわなくても結構ですが、

私も涼州勢には色々と洛陽に伝手がありました。」

今の私は不敵な笑みをしているんでしょうねえ。

司君に内緒でこんな事やっているんですから、また司君に文句を言われそうですが。

「お主急に口調が変わるとはの、それにしても、お主がいう伝手というのは、紹介状の主である皇甫嵩將軍か、將軍が幾ら偉くてもそんな事は無理じゃろ。」

黄蓋さん甘いですよ、そんなわけないじゃないですか。

パサッ

懷から取り出した書類を二人の前に投げる、失礼にも程があるでしょうが、

今のお二人は大して気にはしないでしょうが。

「何かしらこれは？って、祭、これ見て。」

私の出した書類をみて孫堅殿が目を丸くしている、さすがに私がこんな物を持っているとは思いもしなかったでしょう。

「堅殿どうしたんじゃ、そんな反応をして。」

黄蓋さんもこれを読んだら驚かれるでしょうねえ。

「・・・・・・・・・・。」

完全に黙ってしまいましたね。

「お分かりいただけましたでしょうか、特別な伝手があると言ったのが。」

前に司君と話をしていた書類を見せたんですから。

母上が益州牧になる際に益州の太守や県令の罷免、そして代理職任命許可

という権限の一时的移乗なんてあり得ない凄まじい勅命なんですから。

「堅殿、儂は初めて見るんじやが、これは本物の勅命じゃろうか？」

黄蓋さんの動揺の仕方は半端じゃないですね。

「祭、私だって直接見るのははじめてよ、こんな書簡を見るなんて。」

先程までの孫堅さんとは全く違う反応なのが面白いですねえ。

普通ではこんな書類を太守息子が、いや、三公クラスでも手に入るでしょうかねえ？

昨日宮中に行った際に何進大將軍に頼んで用意してもらった特別な書類ですし。

「お二人にはなかなか信じてもらえないでしょうがこれは正真正銘の本物ですよ、

まあ、皇帝陛下の勅命を懐に入れて普通に持ち歩いているなんて信じられないでしょうが。」

二人に見せた書簡を懐におさめて話を続けましょうか。

「まあ、お二人には色々気になる事もあるでしょうし、とりあえず此処は酒家ですので、

私がお誘いさせていただきますしお酒と食事を楽しみましょう、孫堅殿、黄蓋殿。」

さあ夜はまだまだ始まったばかりですよ。

第四十話、ヘッドハンティングの旅に行ってみよう（後書き）

新しく恋姫キャラを出したいのでご都合主義ですが一気に話を進めてみました。

孫策達を出すかはまだ悩み中でございますが、ちなみにまだ孫尚香は産まれていないという設定にしてみました。

とりあえず孫堅はまんま雪蓮という感じにしてみました。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第四十一話、まさか、そんな、都合良くはないよな・・・（前書き）

前話での保と、孫堅、黄蓋の三人での酒席の続きです。

原作の恋姫を無視して突き進んでいるこの話ですが、今回の話で更に暴走する事になりました。

第四十一話、まさか、そんな、都合良くはないよな・・・

一保一

「ふふふ・・・」

つい笑みが漏れてしまいますね。

「どうしたのじゃお主？急に笑い始めて、何か面白い事があったか。」

祭さんが私の笑みに対し疑問を持たれたようで、まあ大したことはないんですが。

「いや、美人二人を侍らせて美味しいお酒と食事を楽しませていただく、

私はなんて贅沢で世の男性にどれ程うらやましがられる事かなと思ひまして。」

素直に嬉しいなら嬉しい、楽しいならば楽しいと言わないですね。

「私は貴方と違って飲んでも飲んでもお酒の味がしないわよ。」

えっ、江東の虎がなんかキャラに似合わない発言している。

「儂もじゃ。」

あらまあ孫堅さんに続いて黄蓋さんまで、これで苦肉の策をやる胆力があるのかな。

「お二人ともっとお酒を楽しみましょうよ、これはたかが紙切れじゃないですか、洛陽で女の尻を追っかけ回し発情しているだけの猿が印ついただけの。」

そう言って私は勅命の書かれた書簡を懐にしまう。

「皇帝を猿呼ばわりって、貴方は皇帝にでもなったつもりなの？」

皇帝なんてなりたくもないですね、あんな面倒臭い職業に。

「万年発情している猿を猿呼ばわりしただけですよ、それに皇帝になるなんて、あんなのは阿呆になる仕事ですよ。」

正直な感想を述べておきましょう。

「漢王朝の名誉の為にはお主を此处で切るべきじゃろうな。」

あらあ、楽しい宴席が、空気が急にピリついてきましたねえ、酒の席で無粋ですなあ、まあ、私は気にせず飲みますがね。

「不粋ですよ折角の酒席で流血沙汰にしようなんて！と言いたいで

すが、

黄蓋さん切る格好だけなんてわざわざしないでいいですよ。

二人とも私がどういう事を話すが気になってそう簡単には切れないでしょう、

それにお二人なら、私が氣にくわないなら既に切っているはずですから。」

上司への不満と同じですよ、真面目にやっちゃだめですよ、酒をぐびぐびって、酒の肴程度にして楽しまないね。

「堅殿、腹の底を読まれているぞ、この童には何も通じんぞ。」

いやいや、それは買いかぶり過ぎですよ、この二人に襲いかかられたら、

流石に私の負けですよただ此方をうかがっているのが分かったから釘を差しただけで。

「私の勘は貴方は信用出来るから引き込んだ方がいいと言ってるの、ただ、同じように私の勘が貴方はとても危険だと警告してるのよね。」

くふふ、面白いですねえ勘を信じていて、しかも、その勘は相反する答えを。

まあその点に関しては間違いないでしょうなあ、味方は抱き締めますが、

司君と同じで場をかき回すような人間ですから、私は。

「孫堅様は実に素直な方で、政治家ですからもつと隠された方がいいですよ、

とはいえ、孫堅様のその素直さは実に、好意に値しますよ。」

いやあ、良い顔です、天下の孫堅と黄蓋さんがポカーンとしていますよ、

こんな時に好意とかなんて言い出すから咄然としているようで。

ただ、折角私が渚カヲルの声真似したんですが、どうやら分からなかったみたいですな。

とはいえ三国志の英雄に「お前最後は握りつぶされるんかい！」とか言われたら嫌ですね。

「どうされましたお二人ともポカーンとされて折角の美しい顔が台無しですよ、

いや、これは違いますね、美人はどんな顔をされても美人ですね。」

うん、驚いて咄然としている姿も美しいですよ、やはり元の素材が優れているからですね。

「お主は一体どういう人間なんじゃ、漢王朝や皇帝陛下をコケにしたと思うと、

急に儂や堅殿を口説くようなことを言い出したりしおって!？」

怒りや照れとかではなく困惑しているようですね黄蓋さんは。

「どういう人間と申されましても見たままそのままで、普段通りにしているだけで、それに先程孫堅様に家で話をするようにと言われたのでいつものように会話を。」

黄蓋さんが呆れかえっているようですねえ。

「黄蓋様驚かれていますようですがこれでも正直なところまだましだと思いますよ、普段はもっと場をかき回すのが得意な嵐みたいな男がいますから。」

「貴方も相当なのに、そんな貴方以上なのね、涼州の人間は大変なのね。」

私が相当って、そんなすごいもんですかねえ？ ちよっとかき回すだけで、それに普段の私はいつも司君に振り回されているばかりなんですからねえ。

「ええ、私もいつも振り回されていますよ。」

司君に勝てる人はいるんでしょうかねえ？ 泣く丁原さんには誰も勝てないでしょうが、まあ、泣く丁原さんは反則です、あれに落ちない人間はいないでしょうし。

「今日会ったばかりじゃが、お主のそんな姿が全く想像がつかんのじゃが。」

ええええー、なんか私って相当イメージが悪くなっているような!?

「多分ですが、普段の孫堅さんに振りまわされている黄蓋さんみたいな感じですよ。」

そんなシーンは一度も見た事無いですが、イメージがわくんですよ。

「それは大変じゃな、儂もいつも堅殿の我儘に泣かされているんじゃない、

儂も酒は好きじゃが堅殿は仕事をしないで朝から飲んでいたりも。」

おおう私の中の孫堅イメージが音をたててガラガラと崩れていく、とりあえずフリーダムで物凄い駄目人間でもあると。

「ぶーぶー、祭ったら酷いー、祭だって私に誘われたらすぐに飲みに現れるのに。」

大丈夫なのかこの二人は、と要らぬ心配をしてしまう私、まあ、司君と私みたいな関係ではあるんでしょうが。

でも、良いですねえ、なんだかんだ言いながらも上手くいっている二人というのは。

「お二人の姿を見ていると今回の私の誘いは無茶で失礼にも程がありました、

私はお二人にお会いすることが出来て本当に良かったと思いましたよ、

お二人のような方には是非私や涼州の人間の盟友になっていたただけたら。」

人間として信用出来るというのが良く分かりますよ、

太守にとお誘いしていますが、そう簡単にはうんと言ってもらえないでしょう、

最終の理想は涼州への組み込みですが、まずは同盟なり確実に味方にしないと。」

「盟友って？」

孫堅さんが盟友と言う点に疑問を持ったようで。

「言葉通り盟友です、私達に従いなさいそうすれば益州内の太守にしてやる、

という主従でなく、上下の関係などない仲間であり友人になってほしいんですよ。」

素直な思いです、私達はこれから更に大きくなる為にもこういう好人物とつながりが欲しい。

本音は下に欲しいですが江東の虎と呼ばれるだけあり、虎を飼いならすのは難しいでしょう、

ただ、その虎と友人になるというのは十分可能でしょう。

「友人なんていうけど、貴方達と私達では考えとか全く違うでしょう、

それになんでこんなに孫家を優遇しようとするの、どんな下心が。」

まあ、疑われますねえ、こちらの方が圧倒的に上なのに、力で、といかず、
盟友になってくれと頭下げるなんて普通はないですから。

「私達と孫堅様は考えは離れているところか、近いから可能だと思います、

孫堅様も涼州も民を愛し、民あつての国とわかっているのですから。そして、私は今の漢が100万の兵で襲ってきてても怖くなく笑って叩き潰せますが、

孫堅さん貴女一人を家を敵に回すことがどれ程恐ろしいか、孫家とはそれほどだからです。」

ただいるだけの有象無象の軍を恐れる事なんてないですが、猛将に率いられたとなると。

「涼州、いや、お主にとっては孫家とはそこまで恐るべきものじゃないと？」

黄蓋さんはいくらなんでも孫家にそんなという感じで信じられないようですね、

孫堅さんもまた買いかぶり過ぎだという感じですね。

ここまで持ち上げられて照れるではなく困惑している表情からもわかります。

「大陸の遙か西の果てに帝国を築いた皇帝であり名将が言った言葉のとおりだと、

一頭の狼に率いられた百頭の羊の群れは、一頭の羊に率いられた百頭の狼の群れに勝る、と。」

ナポレオンがいった言葉ですがその通りでしょう、上が馬鹿では勝てる物も勝てなくなる。

「そんなに私を買ってくれるなんて嬉しいは、でも、さっき言った通り、

私の勘は貴方を信用出来る、でも、とても危険だとも、自分の勘に自信あるの、

だから相反する事を教えてくる勘を信じるかどうか確認しないとね。

」

ふふふ、素直にいきましようよ、孫堅さん回りくどいのはいけませんね。

「孫堅様の好みに合わせましよう、私の力を先程からうかがっていますし、

これでお互いの思いのたけをぶつけあいませんか？私も嫌いじゃないですし。」

部屋の隅にどかしておいた方天画戟を取り出す、それを見て孫堅さんにもやっと笑う。

「南海霸王で話し合いましよう、お互いの事が良く分かっていいですよ。」

そう言って南海霸王と呼ばれた刀を右手に持ち、チャキツと音が鳴る。

「堅殿抑えるんじゃ、いくらなんでもそれはまずいぞ、お主も吹っ掛けるでない。」

ふふ、黄蓋さんは私達の戦いを抑えようとしていますが手遅れですよ、

武人が二人いて、どちらも武器を手にしてやる気なんですから止めようなんて無理な事で。

「祭、退いてちょうだい。」

孫堅さんの目付きが完全に狩りの時の肉食獣の目付きになっていますねえ、

いいですねえ、ゾクゾク来ますよ、強者とやりあえるんですから。

黄蓋さんの言葉は全く届いていないですねえ、ただ、少しだけ聞いてあげましょう。

「孫堅様、黄蓋様の言うように抑えた方がいいでしょう此処は高級料理店の個室ですから、

ここで県丞が乱闘騒ぎなんて醜聞は避けないといけませんから、どこか別の場所です。」

途中まで“おおっ、そうじゃろ”という感じでいた黄蓋さんが、なんだと！？という感じで驚いている。

黄蓋さんごめん、私も火がついたから抑えれないんだ。

「そうね、ならばこの近くにある小川のほとりならば。」

店で食事の支払いを済ませて外に出ましたよ、時刻的には夜の9時くらいでしょうか？

ただ街頭がないこの時代、街外れまで行かないでも街にはほとんど人がいませんよ。

孫堅さんの道案内で目的地に着いたが、

小川に向かっていている時も着いてからも黄蓋さんは止めようとしている。

「堅殿、いくらなんでもまずいじゃろ、県丞と太守代理がやりあつて、もし何かあったら、

お互い酒も入っている、しかも、戦う為の事前の準備もせずまともな状況ではないじゃろ。」

確かに、その通りなんですよ、でも、そんなのは関係ないんですよ。

「常在戦場、戦場で準備するから待ってくれなんて言えるかい、退きなお嬢ちゃん。」

ちよつと強めな言い方で退くように言う。

「なっ！？儂はお主の事を思っているんじゃない、堅殿の強さを知らんから。」

お嬢ちゃん呼ばわりは反応なかったですねえ、此方がやる気な点に困っている。

言えませんが圧倒的に私の方が歳上なんですよねー。

「祭退いて、こんな強い相手がいると思ったら血のたぎりが止まらないの。」

孫堅さんは右手に握りしめている南海霸王を今にも抜こうとしている。

小川ぞいだけあり足元は石だらけであまりよくない、明りは星空のみ、

しかも、お互い少なからず酒が入っている、どうなりますかねえ。

力のセーブ出来なかったり、事故が起きる可能性が大きいですが楽しみです、
常に道場のような場所とか完璧なコンディションでいれるわけないのですから。

孫堅さんは南海霸王を抜き正眼の構えで、今にも襲いかかるとばかりに。

「貴方も構えなさいよ。」

私はそれに対し、方天画戟を右手で柄を持ち右肩にかけた状態で。

「戦場で都合良く構えなんかしてられる状態なんかあるとでも？
いつでも来な。」

暗いからハッキリ顔は見えないが、私の言葉で明らかに不機嫌な表情になりましたね。

「お主は堅殿をあおるな!!!」

ふふふ、黄蓋さんには悪いですがおさえられないんですよ、強い者と戦いたいと。

私と孫堅さんの距離は10mも離れていない、武器の間合いよりはだいぶ遠いですが、これくらいならば簡単に詰まる距離。

足元に小砂利がある、牽制そして開始の合図で孫堅さんの顔に向かって蹴る、

孫堅さんはそれにひるむことなく顔で受けながら突っ込んできた。

そして上段からの振りおろし、かなり速い攻撃だが甘い！サイドステップで避ける、

そこへ間合いを更に詰めながら逆袈裟で斬り上げて来るのをバックステップでかわす。

足場は悪いがそれはお互いさま、袈裟斬り、逆袈裟ならば上半身をひねるだけや、

サイドステップなどして避けていき、斬り払いにはバックステップかしやがんで避ける。

突きにしても狙いが正確なので避けやすくボクシングで言うウィービングで、

狙いを絞らせないようにする動きをすれば避わすのも簡単で。

「ほらほら、避けてばかりじゃ私は倒せないわよ、その右手に構えた矛はなんなの？」

器用ですよ、あんなだけの連激を繰り返しながら喋っているんですから。

「簡単に避けれていますよ、方天画戟を使うまでもない、江東の虎の本気を見せてみる！！」

更に煽ってみましょう、英雄の本気を見せてほしいんです。

「堅殿の攻撃を初見なのに易々と避わしているとは。」

黄蓋さんが驚くのも無理ないでしょうねえ、

こっちは司君と殺し合いをして鍛えたりしているんですから。

「後悔しても遅いわよ！」

そういつて殺気をだしてくる、いいねえ、ゾクゾクしてくる、これほどとは。

私が煽ったおかげもあり孫堅さんの攻撃がさらに激しくなってくる、

速い、更に速くなった、この足場の悪さでは避け続けるのが辛くなる速さ

ヒュッ ガキーン

余裕かましている場合ではなくなったか、更に速さがあがった攻撃、足場の悪さで足を取られかけた隙に袈裟切りが来ましたよ。

右手で持っていた方天画戟の月牙の部分で刃を受ける、今のは少し危なかった、

少しぐらい斬られてもすぐに治るが、さすがに見せるわけにはいきませんからねえ。

此処でつばぜり合いになるが、うんちよつとまずいかもね。

「貴方との戦いがこんな楽しいなんて、もっと楽しませて!!」

「ええ、もっと楽しませてあげますよ。」

こんな事言っているが内心あまり余裕はないんですが、今の段階では。

攻撃受けたがなんて力だ！女性らしい細い体からとは思えない力強い一撃、

右手だけで方天画戟を握っていたから右手が痺れた。

速さ、重さ、どちらも一流で、このままではまずい。

押し合いになったので右膝を入れる。

よし綺麗に決まった、孫堅さんが後ろに飛び退いて間合いを取った、結構な威力で蹴ったから相当のダメージだろうな、女性を蹴るのは

気がひけますが。

「孫堅さん満足していますか？」

「あら？もう終わりなの。」

暗いからハッキリ見えないが顔は楽しそうに笑っているな。

「いえ、孫堅様、私の真名は保です、保とお呼びください。」

小説とかで殺し屋が殺す相手に自分の名前を教えるとかではないですが、

本気で行く私の覚悟を見せるつもりなので真名を教えました。

「そう、では、私の真名は桃蓮^{たおれん}よ。」

これで終わりにしようという此方の意図を理解したようで孫堅さんも真名を。

さて、孫堅さん悪いけど本気を出させていただきますよ、この世界では司君にしか使ったことが無いですが。

「うおおおおおー！！！！」

獣のように叫び全力でいけるように力を解放していきいきしますよ。

「なんと」

黄蓋さんが私の殺気に驚いているようですね、いや黄蓋さんだけでなく。

「えっ、えっ。」

孫堅さんも戸惑っているようですね、私が此处まで濃い殺気を飛ばしているんですから、ふふ、もし殺気をあびたのがそこいらの雑兵ならばどうなったことやら。

足場は相変わらず良くないですが、平気でしよう。

シュツ ヒュツ

縮地で孫堅さんとの間合いを一気に詰め、方天画戟で斬り払いにはいる。

ガキーン

一瞬、物凄い金属音が響く

孫堅さんは南海霸王の刃で方天画戟の月牙をなんとか受け止めたが、私の攻撃の速さと威力についてこれず南海霸王が両手から弾き飛ばされる。

「それま・・・」

南海霸王が弾き飛ばされたので止めようと合図しようとする黄蓋さん

ドゴッ

だが、私は攻撃の手を緩めず武器を飛ばされ隙を見せた孫堅さんの鳩尾に石突きで一撃

完全に決まった、私にもたれかかるように倒れる孫堅さん。

うーん、さすがにやりすぎたか。

時間として10秒くらいたってからか？私がとどめの一撃を入れた事に気付いた黄蓋さんが。

「今のトドメはいらんじやろうが、とはいえ見事な戦いじゃった。」

黄蓋さんに怒られてしまった。

「すいません、ただお互い不完全燃焼を避けるため決着をつけるべきだと思います、
とはいえ気絶させてしまったのはやりすぎでした、すいません。」

黄蓋さんに素直に謝罪することにしました。

「では、悪いと思うならお主は堅殿を部屋まで連れて行ってやれ、まあ堅殿もこれだけ思いっきりやれたんだから笑って許してくれるじゃろ。」

黄蓋さんが笑顔で言うてくる。

さて、孫堅さんを部屋まで連れて行けといわれましたがどうやって運びましょう？

県丞と役職者ですからお城にある部屋なんでしょうが、まあ、部屋の場合は黄蓋さんに着いていけばいいとして。

気絶している人を無理矢理起こすわけにはいきませんし、どう運ぶか？

しかたない、おんぶする事にしましょう。

「かるっ！」

ちょっと驚いて声が出てしまった。

ナイスバディーとはいえ、妙齡の細身の女性ですから軽いのは当然ですが、
とはいえ、この体の何処にあの力があるのかと驚いてしまいましたよ。

孫堅さんをおんぶしてずり落ちないように孫堅さんのお尻を両手で抱えるように持ち上げて、
もちろんやましい気持ちは一切ないですよ！あくまで孫堅さんを落っこたさないためで。

南海霸王と方天画戟は黄蓋さんが持ってくれる事に。

「お主はまだその若さなのに、すさまじい武じゃのう、本気の堅殿とだとワシでも引き分けるのが精一杯だというのに。」

城までの帰り道に黄蓋さんが私の武を褒めてくれるがあまり嬉しくない、

というか今の私は心は此処にあらざる状態、だって、背中に当たるこのポリウム感が。

そして気絶している孫堅さんの吐息が首筋にかかってゾクゾクっと、落ち着け董擢孟高、おぶっているのは江東の虎で子持ちの人妻なんだから。

落ち着くんだ、こういう時は素数を数えるんだ

“ 2、4、6、8、10、12、14、16、18・・・”

うがあああああ、素数なはずが何故か偶数をカウントしてしまう、そして意識するなと思う度に背中に当たる見事な弾力が。

つきあっている嵐さんが胸が無い分この差が凄くて、

いや、嵐さんに不満があるわけじゃないですよ、大好きですし。

とはいえ、懷石料理もいいが、ラーメンもいいように、普段と違う物がまた。

ダラーンとしていた孫堅さんの両腕が私の胸の前でくまれる、無意識で孫堅さんがやっているんでしょうがこれはたまりません。

背中に更に密着する大変ご立派な胸が。

マ・クベがいたら「ジオンはあと10年は戦える」と言いだしそうな物量が、

そして先程から私の首筋にかかる吐息、そしてほんのり香る良い臭いが。

あああー！

氣絶している孫堅さんを起こすわけにはいかないが叫び出したくなる、

煩惱退散！！！！！！！！！！

「戦いの最中に堅殿もお主に預けたし儂も真名を預けよう、儂の真名は祭じゃ。」

祭さんが真名を預けてくれました、私を認めてくれたんでしょう、嬉しいです、でも、祭さん本当にごめんなさい、今の私は全感覚神経が背中にいってゐるもので。

背中への圧迫感に対し煩悩を抑えようと戦いながら、祭さんに案内されてなんとか会稽の城内にある孫堅さんの部屋に到着する。

ごめん、途中から歩くのが大変でしたよ。

波動砲充填率130%というくらいになってしましまして、もう一人の私が。

おんぶしている孫堅さんを寝台に寝かせようとするが、両手が首筋にかかったまま離れない。

というか、更にギュッと締まってきている、まさか……。

「ありがとうね」

気絶していたんじゃないの！？目を覚ましているし――！！

「さて、これからやり返さないと、やられっぱなしはくやしいからね。」

何を言っているんだ、この人は、まさか……。

カプッ

右の耳たぶを甘噛みしているし。

「祭、悪いけど二人っきりにして。」

これはもしかして、もしかしてですか、いや、そんな馬鹿な、彼女は人妻で、姦通罪は罪が重たいんです、って、そんなわけないよな。

はい、パニックです!!!!!!

「堅殿！」

祭さんが注意してくれる、助かった！嬉しいような、嬉しくないような。

「いいじゃない、旦那が死んで今は一人身なんだから、それにやられたらやり返さないとだめでしょ・・・ふふふ。」

よし、嬉しいニュースだ、人妻“だった”で今はセーフ！
って、違うぞ私！ちよつとまズくないかこれは。

「ふう」

ギーーパタン

って、そんな事思っている間に祭さんがため息ついて出て行ってしまった、

もしかして、僕は食べられてしまうの？まさかそんな事はないよね？

首筋に絡んでいた両手が外れて背中から退いてくれた、
安心したが、嬉しいような悲しいような。

「じよ、じよ、冗談はやめてください」

童貞みたいに動揺した喋りになってしまった。

「冗談ねえ……。」

なんだろう、悪戯っぽい笑みを浮かべているのが気になるんですが。

ドン ドサッ

寝台の上に押し倒されてしまった、私の上に跨った孫堅さんは、両手で僕の顔を抑えて舌を絡ませてくる濃厚なキスしてきた。

くちゅくちゅ

お互いの舌と舌が絡みあい、唾液の混じり合う音がする。

「それでも冗談だと思っているの？」

見つめながら言うってくる孫堅さん

ヤバイ俺が寝台に押し倒されているという傍から見たら相当間抜けな姿なのはいいとして、

凄く綺麗だ、間近で見る孫堅さんの綺麗な顔に心臓掴まれたのでは？ってくらいギュっときた。

こんな美人に見つめられたら、先程のおんぶで既にもう一人の私は我慢がなのに。

「孫堅さん、いいんですか。」

こんな風な状況で間抜けな質問なのは百も承知、二百も合点なおあ

兄さんですが。

「だーめ、真名を教えたでしょ孫堅ではなく桃蓮と呼んで。」

そういつて桃蓮さんは更にキスをしてくる。

こうなったら毒を食らわば皿までじゃ！

空いている左手を背中に回し、右手をお尻に回し孫堅さんをギュツと抱きしめ転がり、

今度は体勢が入れ替わり自分が上になり桃蓮さんにのしかかるような状態になる。

「ふふ、あたっているのは何かしら？」

はい、我慢出来ませんとなっているジュニアです。

でも、メインディッシュはまだ先ですジュニアには我慢してもらいましょう、

まずはオードブルから、睦事は片方だけでなくお互いが楽しめないといけません。

口だけでなく、桃蓮さんの首筋や耳たぶにキスしながら、

先程おんぶしていた際に背中で楽しんでいた胸をもみしだく。

先程祭さんにやられたらやり返す、と桃蓮さんが言っていたが、やられるわけにはいきません“絶対に負けられない戦いがある！”です。

こうなったら試合でも、睦事でも勝ってみせるしかないです。

翌朝

よく落語であります表現で“カラスカーと鳴いて夜が明けて”と言いますが、夜が明けてしまった、寝ていませんよ、寝ているどころではなかったですよ。

凄かった、桃蓮さんはまさに江東の虎としかいえない肉食獣でしたよ、

ですから私も食われない為に必死で戦いましたよ、おかげで夜が明けてしまいました。

冷静に考えたら大丈夫なんでしょうか私は？

会稽城内で、城の人からしたら見知らぬ私が県丞の部屋で一夜をすごすって。

まあ、なんとかなるでしょう、というより、今はもう一つの大きな問題が。

桃蓮さんが先程「時期的に良かったし、そろそろ三人目が欲しかったんだ」って、なにやら大変恐ろしい言葉を囁いていたのが……。

うん、大丈夫だ、たった一晩くらいでどうにかなるものでは。

司君が言うように“ハメたと思ったらハメられていたと。”はないはず……。

それにしても二日間の休暇を貰って旅に出たが、
もしかしたら私はとんでもない事態に陥ってしまったなんてないよ
な……。

第四十一話、まさか、そんな、都合良くはないよな・・・（後書き）

とりあえず前話で二児の母という表現にしたのは、まあこういう風になったら面白いかなとやってみました。

原作の恋姫に出て来るヒロイン達はみんな18歳以上、知るか！？という感じで独自設定で突き進ませていきます。

とりあえず、黄巾まであと10年、保君はこのまま無事乱世で生きていけるのか？

皆さんの御意見、ご感想お待ちしております

第四十二話、江東の虎に振り回される二人（前書き）

保君の二日間の休日の最終日の話です、

とはいえ、このままだと休日が二日で終わらず、

洛陽に戻れなくなりそうなの？保は大丈夫なのか！？

第四十二話、江東の虎に振り回される二人

一保一

おはようございます保です、つい先程まで真っ白に燃え付きていましたよ……。

燃え尽きる原因である相手の桃蓮さんは私に裸で抱きついたまままどろんでいます。

つい今さっきまで夜通ししていたからまどろむのも分かりますよ、限界突破している私が「らめえええええ!!」と言うくらい激しかったんですから。

ガチャ、ギー

おやつ？桃蓮さんの部屋の扉が開く、誰が入ってきたのかな？

それにしても扉のたてつけ悪いなギーって、蝶番にCRC556でもすべきだな。

「堅殿いい加減起きろそろそろ朝議じゃぞ、って!?!擢殿お主大丈夫なのか？」

祭さんが入ってきましたよ、起こしに来たという事は余程の時刻なんでしょうねえ。

私を見て驚くという事は余程なんでしょう。

「お、おはようございます祭さん、こんな恰好ですいません。」

とりあえず身を起こしたいし、服を着たいが抱きつかれているから出来ないのが、

寝台から抜け出す事すら出来ないのが困りましたよ。

「お主、昨晚と異なりだいぶやつれているようじゃな・・・。」

祭さんが私の姿を見てなんともいえない微妙な顔つきしている。

「まあ、色々とありまして・・・はあっ。」

大変だったんですよ、具体的に何発やったとか祭さんに言えるわけないですが、

どれ程の熱い戦いがあったかなんて、閨でも桃蓮さんは戦闘と同じで攻撃的で。

私と祭さんが話していると抱きついてまどろんでいた人が目を覚ましてきましたよ。

「ふああゝあ、おはようゝ祭。」

桃蓮さんはテカテカですよ私がゲツソリなのとは対照的で。

「おはようじゃないぞ堅殿！もう日も昇ってだいぶたつんじゃぞ、いつまで寝ているんじゃ。」

でしょうねえ、日が昇ってもさかっていたのは分かっていますから、本当にすいません。

「祭、違うのよ、さっきまで愛し合っていて終わったからちよつとうとうとしただけよ、

彼凄いのよこんな可愛い顔して武だけでなく閨でも寝かしてくれなくて。」

おい、この人朝から何を言っているんだ、フリーダム発言過ぎるぞ！！

「ちよつと何を言っているんですか！！寝かしてくれなかったのは桃蓮さんじゃないですか。」

“もう出ないです、もう勃たないです、後生だから許して”と思った事か、
でも、それでも何とかなってしまった我が下半身が、まあ、私も満足でもなかったですが。

「ええい、お主らしい加減にするんじゃない！」

「痛い、痛い、耳が千切れる」

祭さんがキレましたよ、すいません、だから、
耳を引っ張って無理矢理寝台から引きずり下ろさないで。

はい、桃蓮さんと私並んで裸で正座させられて説教ですよ。

それにしても説教の間、祭さん、私が裸でいるせいで下半身が気になってしまうようで、

赤い顔しながらも視線はチラチラと私の下半身のうまい棒の方を。

それに気付いた桃蓮さんがニヤニヤしています。

あのー、とりあえず説教はいいのですが、せめて服を着させてもらえませんか……。

「堅殿、朝から風呂沸かしておいたからとっとと入ってくるんじゃ。」

すいません、昨晚試合で桃蓮さんを私がぶっ飛ばしたりしなければ、そして閨でこんな激し連戦が無ければ朝から風呂なんて必要が無かったのに、

本当にすいません、ご迷惑をおかけしまして。

「そうね、じゃあ保一緒にはいりましょ。」

うおおいっ！なにサラッと普通に俺の手を引いて風呂に連れて行くうとしてるのよ！

しかも、風呂まで服着て行こうよ！まだ素っ裸ですよ、服着ないならせめて羽織るだけでも。

「堅殿！！！！あと、お主は断われ！」

祭さんマジギレだよ、そして、私にまでとばっちり来たよ。

「桃蓮様いつてらっしゃい、私はこの城の人間でないので此処にいるだけでも問題でしょうから。」

とりあえず私は大人しくしておきます、ボーっとしたいので。

「保も行こうよー、お風呂場でっていうのも良いと思うんだけどなー。」

これで一緒にお風呂なんて行ったら死にます、私の干物の出来上がりです。

嫌ですよ干物なんて、熱海温泉旅行の土産じゃないんですから。

とはいえ、寝台とは違うシチュエーションも良いな、と考えてしまいう自分が嫌。

「堅殿！！！！！あと、お主はいい加減服を着ろそれで朝食に付き合ってもらうぞ。」

裸でいさせたのは説教した祭さんなのに！まあ口答えはしませんよ。

桃蓮さんは文句を言いながらもお風呂に行きましたよ、問題は裸のままだったが。

「さ、さ、祭さん止めないでいいんですか？」

部屋から出て行った桃蓮さんのいた方を指さしながら祭さんに話しかける。

「素直に風呂に行ってくれただけでもまだましじゃ……。」

裸の件は目を瞑ったというか気にしない事にしてしまったのか。

さて着替えましょうか、とは言いましても本当はお風呂に入りたいです、

全身に残り香が漂っていますし体中が色々とベタベタしてますから。

まあぜいたくは言えませんが、仕方ないです着替えましょう裸にいるのも情けないですから。

「これが必要じゃろ。」

祭さんが桶に入った水と手ぬぐいを持ってきてくれました、ありがたいです。

これで少しはさっぱりします、ただ体を拭く前に言わないと。

「祭さん、僕が言うのもなんですが部屋から出てもらえますか？ 一応裸ですから。」

此処は桃蓮さんの部屋ですから出るのは私の方がいいかもしれませんが、でも、それだと、

城の人間からしたら見知らぬ私が廊下に裸でいる、即おロープ頂戴物ですよ。

そしたら「しんごー、しんごー、裸で何が悪い」とか叫ばないといけないんでしょうか？

「おおっ、すまん、とはいえ、此処は堅殿の部屋じゃ部外者一人にするわけにいかんし、
儂は後ろを向いていよう、終わったら呼ぶんじゃぞ。」

はいほーい、じゃあ、ちゃっちゃと体を拭いて着替えましょうか。
とはいえ、ここでちよつといたずらしてみましよう。

「着替え終わりました。」

嘘です、裸です、全裸で仁王立ちしてサムズアップとふざけたポーズを決めてみました。

チャキッ

祭さんが無言で弓を構えましたよ、これはいけません冗談が通じないです。

「悪ふざけが過ぎました、誠に申し訳ございません。」

世界一美しい土下座ですね、漫画に出来るくらい美しい土下座をお見せしましたよ。

多分私のこの土下座姿を見て「どげせん」の連載が始まったに違いないですよ、

まあ、原作と作画が対立して最後は打ち切られてしまうんでしょうが。

何の話をしているんでしょうか、私は。

「でも、大きさは結構立派な物だったでしょ!？」

ヒュッ

矢が右頬かすったあああ、アブな、ちょっと血が出たし。

「重ね重ね申し訳ございません、調子に乗り過ぎました。」

さすがに矢を防ぐこと出来ると思いますが、此处で騒動起こして衛兵呼ばれたら……。

私は裸で必死で逃げる、うん、なんて絵にならないんだ、素直に謝らないと。

「立派って、大きいんだと思うんじゃが儂は他に見た事が、って何を言わせるんじゃ!」

けっこうじっくり見ていたのね、しかも意外と照れちゃって、可愛いですねえ。

って、こんなことしている場合ないですね、とつとと着替えましょう。

「祭さん、着替え終わりました、大変お待たせいたしました。」

着替え終わった童が謝ってくる。

堅殿は風呂に入りに行こうとせんし、この童はふざけているし。

起こしに行ったらこんなに疲れる事になるとは思いませんかった。

「じゃあ食堂に行くぞ。」

城で働く者の朝食にしては遅い時間なんじゃが、それでもこやつは客じゃからのう、

いや、客ではないんじやろうが、ただ、他州の太守の息子で失礼があつてはならないし。

ただ本当に太守の息子なのか疑わしい部分だらけなのが。

本当は勝手に城内を歩かせるのはまずいんじやが一応県丞の客という事で平気じやろ。

儂が先頭になってこの童を食堂に連れていく。

儂の向かいの席に座らせ食事姿とかを観察して判断する事に。

「いただきます。」

膳に手を合わせ食に感謝をしたり、食事の作法を見る限り礼儀作法はキチツとしているようじや。

まあ、事前連絡もなく堅殿にいきなり会って食事しないか？などといった手紙をよこす段階で、

礼儀作法がキチツとしているとか言えないんじゃないだろうか……。

昨晚の食事でも分かったが食事の姿が美しい、こうやって見ると、やはり太守の息子と言うのは嘘ではないんじゃないだろう、育ちの良さが見て取れる。

「祭さんは食べられないのですか？それと見つめられ続けると恥ずかしいのですが。」

こ奴の観測に集中し過ぎていたか、もっとさりげなく確認しないといけないな。

「おおっ、すまんのう、お主の食事の動作に品があるので見ていたんじゃない。」

嘘ではないからいいだろう、堅殿に害なす者でないか注意をしないと。

「そうですか普通に食事をしているだけなんですけどねえ？」

ふつうにしている食事の作法がしっかり出来ているんじゃないから、堅殿にもこういう所は見習ってほしい物じゃ、まあ、それは儂もじやな。

「お主は変わっているのお、食事の姿を一目見るだけで分かるが育

ちの良さ礼節がある、
かといって、昨日のようにいきなり約束もなく堅殿を呼び出す非礼
と矛盾していて。」

儂が思った事を素直に聞く事にしてみよう、こ奴も堅殿と同じで、
回りくどい言い方するよりも本音で話をする方が好むじやろうから。

「変わっていますかそうですね、私も自身が変人だとよく分かって
いますが、
ただ、昨日も言いましたが涼州には私より凄いのがいますよ義兄弟
なんです。」

それは疲れそうじゃのう、こ奴以上というのがまだおるのか涼州に
は、

堅殿に泣かされる儂以上に涼州の面々は泣かされていそうじゃ。

「やはり変わっている、普通、変わっていると言われたら否定する
のにお主は肯定する。」

こ奴は儂の言葉を聞いて愉快そうに微笑んでいる。

「自分が異常だと分かっているからこの時代を楽しんで好き勝手出
来るんですよ、
それに人と違うなんて褒め言葉ですよ、人と同じなんてつまらない
ですから。」

分かっていてやるというのだから、筋金入りの変わり者じやな、
つくづく涼州の人間が大変なんじやろうなと同情してしまう。

そんな儂の心情を読んでこ奴が口を開く。

「でも、涼州の皆もそれなりに変わり者ですよ、それに結果を出せば文句を言いませんよ、

民と政の関係と同じようなものですよ、民は為政者が暴君だろうがなんだろうが、

自分が飢えないで食っていけるなら大して気にせず不平不満は出ないように。」

こ奴、育ちが良く若いのに歳に似合わない擦れた考えを持っているのが謎なんじゃよなあ、

そういえば、昨晚こ奴は儂に対して言い放ったな。

「昨晚儂に向かって“退きなお嬢ちゃん”とか言ったが、お主は15歳なんじゃろ？

10歳近く年下のお主に言われても儂はあの言葉に違和感を感じなかったんじゃ。」

向かいの席のこ奴はあつ、という感じで驚いている。

「戦いで気が逸っていたからとはいえ失礼な事を言っていました、申し訳ございません。」

深々と頭を下げてくる、いや怒っているわけではなく、謝ってほしいわけではないんじゃ。

「いや謝らないでいいんじゃ、あーいった場面であったのじゃから、ただ、先程も言ったがお主の言葉に儂が何故か違和感を感じなかった事が。」

こ奴に尋ねても意味はないんじやろうが、これは儂の感じ方の問題

で。

ただ儂の疑問に対し、顎に右手を添えて首をかしげて何か考えこんでいる。

「祭さん、内緒ですよ、公に出来ない事なので、ちょっとお耳を拝借したいのですが。」

そう言って儂の真横にやってきて耳打ちをしてくる。

「実は祭さんのお父さんよりも年上でもうすぐ50歳になるんですよ。」

何を言っておるんじゃこ奴は、あまりの言葉に訳が分からなくなっただぞ。

「お主が50歳じゃと、馬鹿を申せ！」

あまりにもふざけているからつい一喝してしまう。

「ふふふ、冗談ですよ、ただまあ歳の割に色々経験しているからならんでしょねえ、

涼州の神童なんて呼ばれたおかげで子供の頃から色々叩きこまれましたので。」

経験の多さか、まあそれが一番しつくりくる答えなんじゃが、とはいえ、あれだけ違和感なく感じるなんてあるんじやろうか？

はあ、こ奴は本当によう分からん男じゃ、悪党ではないんじやろう

が、
ただ百発百中の堅殿の勘が言うにはこやつはとても危険だというのが。

とはいえそんな事を言った堅殿はこ奴を閨に引きずり込み、
しかも、今朝の感じじやと相当な気に入り具合なようで、わからなくなる。

「簡単な事ですよ私を味方にするのはいいが敵に回すのは厄介だというだけですよ。」

儂の考えを読みすかしているかのように話をする。

「宮中に顔が利き、異民族とも円満で、金もある、手を組むのが得なのは確実ですよ、
とはいえ、昨日も言いましたが求めるのは恭順ではなく盟友になってほしいだけです。」

言っている事は分かるんじやが、話が美味しすぎるのが不安になるのが。

「お主は本音を言っているんじやろうが、話が上手すぎるんじや。」
正直に言っておこう、どうせこちらの腹の内など読んでいるんじやろうから。

「くふふっ、本当に私好みです、回りくどくなく本音を言ってくれますから、
普通は私が疑わしいと思ってもっと回りくどく言うのに、好意に

値しますよ。」

儂にまで色目を使ってくるのか、いや、そういうつもりはないんじゃない、やろうな素であろう、

って、堅殿の場合はこ奴が色目を使ったのではなく襲われていたんじゃないがな。

「お主は本当に軽いのか、それに全くつかみどころが無いのは、ひょうひょうと話をしている、それと話をしている、話がどんどんそれていくし、なんなのじゃ。」

霞というか霧というかこれほどまで掴みどころが無い変わった人間を見た事が無い、訳の分からない事を言ったりして単なる気狂いかと思ったらそうではなく。

「なんなのかと言われましても董擢孟高という単なる一人の人間でしかないですよ、信用できないならば時はあります、知ってもらおう為此からもお付き合ひ頂ければ。」

そうじゃな、確かにこ奴の言う通りでこれから時間をかけて判断すればよく、

今すぐ答えを出さないといけないわけではないんじゃないからな。

「ひ、酷い、私をあれだけ弄んでおきながら、祭に付き合っってと口説くなんて!!」

ここで堅殿が現れおったか、こ奴の言葉に驚愕しているようだが、明らかにバレバレの演技なのが、堅殿は何をしているんじゃないか。

「私を閨で襲ってきたのは桃蓮さんでしょうが！？というか、わざと話を面倒臭くしようとしなくてくださいよ。」

閨で襲って来たとかお主は何を言っておるんじゃない？

「堅殿、儂がいつ口説かれたんじゃない、それにこ奴は儂の事などなんとも思っておらんじゃろ。」

まったく堅殿は面白そうな事があると分かるとかき回すだけかき回すのじゃから。

「言っておきますが、私からしたら祭さんは女性として美人ですし性格もいいし、本当に魅力的で素敵だと思ってます、お付き合いできるならば是非付き合ってほしいですし。」

な、な、な、何を言っておるんじゃない、儂なんかそんな魅力的で素敵なんて、

こ奴はまたいつものようにふざけて言っておるんじゃない。

「冗談でなく本気で言っているんですが、貴女はとても魅力的な女性だと、って、痛っ！！」

そんなこと言われるのは初めてじゃぞ、まさか儂が魅力的って。

痛っ、って、こ奴は儂を口説いていたから嫉妬した堅殿が尻をつねったのか。

「たもつー、もう浮気するなんて許せない！祭も口説かれて嬉しそうにしない！」

堅殿落ち着いてくれ、たまにはいいじゃろが儂が褒められても。

それにしても堅殿はこ奴と本気で付き合う気なのか？

「桃蓮さん浮気なんてそんな・・・、ただ、祭さんが己の価値が分かっていないから、

正直にどれ程魅力的な価値があるのかを教えてあげただけですから。

」

儂がどれ程魅力的って、そうか魅力的なのか、こんなに褒められると世辞でも嬉しいぞ。

「ぶーぶー、それでも保が祭だけ褒めて、私を褒めてくれないなんてひどくない。」

堅殿が臍を曲げてしまう、こうなると厄介なんじゃが、どうするんじゃない？
じゃ擢殿お主は？

「桃蓮さん貴女がどれほど魅力的な女性かは私はよく分かっていますよ、

それに昨日閨でしっかりと貴女に教えていただきましたし。拗ねな

いでくださいよ、
拗ねているよりも私の為に微笑んでくれませんか、貴女の笑顔に私は癒されるのですから。」

堅殿を抱きしめながら耳元で囁いていた、堅殿も口をとがらせて膨れていたが、

すぐに不機嫌な表情がきゆうに笑顔になったし、ふう、助かったか。

よく聞こえないが他にも何か言っているようじゃが、

堅殿があ奴の手を引っ張って何処かに連れて出ていってしまったぞ。

それにしても、あ奴は照れもせず堅殿や儂に対して齒が浮くようなセリフが言えるんじゃ、

天性の女たらしなのか？ 堅殿が危険と言ったのはそういう事なのじやろうか？

そんな考え事をしていると城の文官がやってきて儂に声をかけて来る。

「黄蓋様どのようにしましょうか？」

一体何があったというのじゃ、わざわざ儂に聞きに來るとは？

「どうしたのじゃ？」

わざわざ文官が尋ねて來るとはよっぽどのことなんじやろうが。

「朝議の時間なのに孫堅様が現れず、それで呼びに行こうとしましたら見当たらず、

門番が言うには見知らぬ男性を抱えて城を出て行かれたと、その際に“今日は久し振りの休暇を貰う”と、朝議に県丞がいないのは・・・。」

堅殿 おお おお おお ー ー ー ー ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

— 桃蓮 —

お風呂上がって部屋に戻ってきたら二人ともいなくて探そうとしたら、

衛兵が言うには祭達は食堂にいるって言うから行ってみたら、なんか面白そうな事が。

祭が保の事がどんな人間か分からなくて色々問いただしているみたいけど。

いつそ私みたいに保と全力で戦って、閨を共にすればどんな人間かすぐに分かるのに。

まあ、祭にそんなこと言えないけどね、男性経験無いみたいだし。

保のひょうひょうとしている所に祭が困惑しているみたいで、なんか面白そうだから祭をからかってみよう。

からかってみたのはいんだけど。

「あつ、言っておきますが、私からしたら祭さんは女性として美人ですし性格もいいし、
本当に魅力的で素敵だと思ってますよ、お付き合いできるならば付き合ってほしいですよ。」

祭は自分の魅力を分かっていないからそれを教える為に褒めるのは分かるんだけど、
こんな事を私の目の前で普通に言っているのにちょっと頭に來ちゃった。

ほんのちょっと前まで、あれだけ寝台でお互い色々やりたりしていたのに。

でも、私が拗ねていたら謝る為に抱きしめて耳元で囁かれたのは嬉しかったな。

「桃蓮さん貴女がどれほど魅力的な女性かは私はよく分かっていますよ、

それに昨日聞でしたっかりと貴女に教えていただきましたし。拗ねないでくださいよ、

拗ねているよりも私の為に微笑んでくれませんか、貴女の笑顔に私は癒されるのですから。」

私の為に微笑んでって、そんな事言ってくる子供がいるんだ、この子、

確かに祭が言うように本当に何歳なんだろうか分からなくなってくるはね。

「昨晚のような食事の時、話をしている時、戦っている時、聞で乱

れる姿、

色々と魅力的な桃蓮さんの姿を見ていますが、どれもとても魅力的です、

先程拗ねないでと言いましたが拗ねている姿も可愛らしくてまた魅力的ですし、

これ以上私をいじめないでください、我慢できなくなってしまいますから。」

もう、この子は可愛い顔してこんな照れるような事を平気で言うんだから。

それにしても、我慢できなくなってしまいうなんて、そんな事言われたら私だってねえ。

祭はさっきから保の言葉に照れていたたり、しかも、今は考え事しているみたいだし、

もしかして、今なら祭を撒ける絶好の機会なのでは。

思い立ったが吉日、昨晚はやり返そうとしたんだけど保に色々やられたから、

今度は此方がやり返してあげないとね、負けっぱなしは駄目よね。

祭がこちらに気づく前に保を連れてどこか二人っきりになれる宿屋にでも行こつと！

県丞として母親として頑張っているんだし、たまにはお休みを貰わないとね。

でも、祭ったら酷いからこんな事言ったら“堅殿は仕事さばり過ぎじゃ”とか言うはね。

とりあえず保と寝台での続きをしましょう、玉のお休みくらい好きにしないかね、

寝台の中でも言ったけど、三人目の娘も欲しいしね。

可愛らしいし、武も優れていて、頭も良くて、宮中に顔が利いて、お金持ち、

それで睦事も上手いし、うん、理想のお父さんじゃないの！

門番に「今日は久しぶりにお仕事お休み貰うね」と言えば、県令とか皆に私の休暇は伝わるでしょうし、さあ、保、愛を確かめ合いましょう。

待っててね雪蓮、蓮華、貴女達に新しいお父さんと兄弟が出来るからね！！

第四十二話、江東の虎に振り回される二人（後書き）

敬愛する落語家立川談志の死を知りへこんでいます、
とはいえ、それなのに、普通にこんな話を書いている。
うーん、私って馬鹿なんでしょうなあ・・・。

皆さんのご意見、ご感想をお待ちしております。

第四十三話、孫堅、孫策、孫權、黄蓋、勢揃いは大惨事？（前書き）

孫堅ヘッドハンティングの旅は今回が最終回です。

少しずつですが原作恋姫キャラを出せるようになってきました、
とはいえ原作までの歳になっていなく相変わらずちびっ子ばかりで
すが。

第四十三話、孫堅、孫策、孫權、黃蓋、勢揃いは大惨事？

―保―

死ぬ、いくらなんでも死ぬ、腎虚で死にます、もし、死にはしなくても擦りきれぬ。

何が擦りきれぬかって？ナニに決まってんでしようが、喋りがオッサン言うな！！

なんか将来の益州の為にヘッドハンティングの旅に出ましたが、ヘッドハンティングどころか睦事ばかりで、しかも、このままでは二児の父に。

おかしい私のプランと全く違うぞ、孫堅を益州涼州連合に引き込んでおいて、

将来反董卓だとか益州が巻き込まれるふざけた戦争が起きたら、馬騰、马超、孫堅、孫策、私、司、呂布、張遼、華雄で無双するつもりなだけだったのに。

このふざけた世界なら、この9人がいれば10万程度ならいけそうだな、

って、んなわきゃないか、人間が一人で万人と戦うなんて無理ですから。

って、現実逃避はいけませんね、そろそろ現実を認識しないと。

「保く、どうしたのボーツとしちゃって？ほら、続きしよっ！？」

この人タフすぎるよ、男は女性と違ってすぐ次に、とはいかないの！とか、そんなの一切関係無いからね。

それにしてもイッたらおしまいな男と違って女性はいくまでの波といいましょうか、

いったあとも余韻があるはずなのに、なんというかわんこそばみたいになっているし。

なんでこんなすごい、同じ人間なの？

「桃蓮さん、死んじゃう激しすぎて本当に死んじゃいますよ、

朝までしていたのに、さらに朝拐われてからもうすぐ夕方なのにずつつとつて。」

本当にこれは無茶です、性欲に脳味噌を支配された童貞中学生でも、ここまで色に溺れるなんてないですよ！童貞中学生が悟り開きかねないですよ。

「だって、保が女の喜びを教えてくれたんじゃない、だから・・・。」

なんと、私は眠れる獅子を起こしてしまったのか！？自業自得なのか。

とはいえ、下らない満足感もありますね女性に達して満足してもらえるとというのは男として。

「ねえ、あなた・・・。」

そう言って抱きついてキスしてくる桃蓮さん。

桃蓮さんどうやら私を旦那にしようと企んでいるみたいですが、この人との結婚生活だなんて無理です生活を維持できません死んでしまいます。

落語の「短命」みたいにやり過ぎで結婚即死なんて風になりかねないのが。

「さすがに昼食もとらず没頭するなんてのは体に良くないですから桃蓮さん、それに私は今日の夜にはこの街をたたないといけないですから、体力が。」

祭さんと話しながら朝食を食べたとか除けば、15、6時間はしているような、体力がいくらあっても持ちませんよ、何でこんなにタフなんでしょうか？

24時間戦えますか？リ○インですか？

いくら桃蓮さんがいい女でも24時間戦うなんて御免こうむります。

「この街を離れるって！？あれだけ私を弄んでおいて私を捨てるの・・・。」

いやまあ色々しましたよ、胸で挟んでもらったり、その状態で舐めてもらったりとか。

弄んできるといって一方的みたいですね、お互いに楽しんでいたじゃないですか、まったく。

だいたい捨てるも何もねえ・・・。

「はあゝっ、桃蓮さん、観客もいないのに三文芝居はやめましようよ、

今朝の段階で教えたじゃないですか二日だけの休日で今日の夜に帰りますって。」

分かっている事をわざわざ言われてもですよ。

「ぶーぶー、保乗り悪いわよ、体の相性はこんなにもいいのに。」

いやまあ、相性は大変良かったですよ、だからといって残るわけにはいきませんから。

それはそれ、これはこれです。

肉欲に溺れて浦島太郎みたいに洛陽に帰った頃には皆に忘れられて

いるなんて嫌ですから、
そうなる、やはり浦島太郎は竜宮城で乙姫相手に、ならば絵にも
描けない美しさというの。

前に司君が言っていた解釈が間違いないという事になるんですね！

うん、私は何を言っているのでしょうか、病気です。これでは。

「あのですねえ、私だって体調が良ければその小芝居にだって乗っ
かりますよ、

ただ、さっきも言いましたが飯も食わず没頭し続けお腹もすいたし
疲れているんです。」

司君と普段からどうしようもない小芝居とかやってふざけています
が、

さすがに腎虚で死ぬ寸前なくらいまでできていると頭も働かずのつか
れませんよ。

「保はそんな事言っているんだけど、そのうち私が寝台で甘えても、
“今日は仕事で疲れているんだ、またにしろ”と言うようになって
背中を見せて寝て、
その繰り返しで私達はセックスレス夫婦になるのよ、それで私が
不倫して家庭崩壊なのよ。」

ちょっとまってーい、何だ今の発言は！！！！

突っ込むべき箇所が多すぎて、一体何処から突っ込めばいいんだ！？

よし突っ込みの個所が沢山あるがまずは一個ずつ突っ込んでいきましょう。

「突っ込んでいくなんて、散々私に……。」

聞こえない、聞こえない、桃蓮さんが私の心を読んで言うおやじギヤグなんて聞こえない！

まず、なんで私と桃蓮さんが夫婦なんだ！？

まあ、セフレでというのなんか現代の倫理観で育った私には引かかる点が有りますし、

『嵐ってお嬢さんはどうなんじゃ？』やかましい！神久しぶりに出てきて突っ込むな！

嵐さん自身が“俺は護衛だ”なんて言っていますが、私が手をつけてますし、

そういう意味ではセフレと言われたら否定できないんですが、そういうつもりじゃなくて。

あと、なんで私と桃蓮さんの夫婦の設定が中年セックスレス夫婦になる、

その設定だと私が40越えている中年サラリーマンでないとしつくりこないだろ。

『でも、お前さんは精神年齢は48歳じゃろ？』やかましい！だか

ら神は出てくるな!!

一番の疑問は桃蓮さんなんでセックスレスなんて言葉知っているの？
この時代の人間で英語なんか存在しない時代だというのにまったく。

「勘よ！こう言った方がいいとピーンと閃いたの。」

なんてピンポイントで働く厄介な勘なんだ、頭痛がしてきたよ、
あと、桃蓮さん、普通に人の心を読んで発言しないでね。

この時代の人は皆ニュータイプなのでしょうか？
だとしたらシャアはあんなに頑張らなくても良かったと。

「とりあえずもうすぐ夜になるんですし、だから一緒に夕食を取り
ましょうよ、
夜には会稽をたつのですから、しばらくの間桃蓮さんと会えなくな
るんですし、
会えない間の為にもいろんな桃蓮さんの姿を記憶に残しておきたい
んですから。」

色々あったが彼女にはまってしまいましたね、ふふふ、私も計画性
が無いといえますか、
なんといいましょうか『下半身に節操が無いんじやろ』だから、や
かましい!!!!!!

神め！人の思考にまぎれこんできて一々ピンポイントで突っ込んで
きやがって、
しかも、それらすべてが正論で否定できないのがまあ腹立たしい事。

「また会いに来てくれるの……？」

私の胸板に抱きつきながら上目遣いで尋ねてくる、グフツ、これはくるものが。

一夜の遊びではないか不安に思っているんですね、惚れられたんですか？マジで？

こういう事は真面目に答えましょう、まあ、

私が年上女性の手のひらで転がされているだけかもしれませんが。

「勿論です、女が欲しいだけならば娼館にでも行ってきました、昨日知り合ったばかりだとはいえ、桃蓮さんを好きになっていなかったら今こんな風と一緒にはいませんよ。」

自分から火の中に飛び込むようなものでしょう、ただ父親になるのもいいかもしれません。

でも、まさか孫堅を味方に引き込むつもりで来たらまさか嫁さん候補になっていたなんて。

司君が聞いたらどんな反応をしているんでしょうかねえ？

ただ、司君の暴走する乗りの良さと桃蓮さんの暴走は相性もいいかも、

いかーいーん、私が目茶苦茶に振り回されているという事じゃない

ですか。

まあ、まだI Fにしかすぎないからいいでしょう、とりあえず今は確実なことから、

とりあえずまず一番最初に帰ったら嵐さんに謝りましょう、誠意をもって正直に。

誠意大將軍のように、って、これでは駄目だスキャンダルまみれで最後逮捕なんてことが。

嵐さんにキチンと謝りましょう、それで振られたならば仕方無い事です、

浮気をした私がいけないんですから。

「子持ちだよ、貴方からしたら年上のおばさんだよ、それでもいいの？」

私の精神年齢は48歳ですよ、それで桃蓮さんが28歳だから、歳の差は20歳、それってなんて虎舞竜の高橋ジョージ？

それに子供がいるのは知っていますし、今からどうにかしろなんて人非人な発言はしません、

親になってみるのもいいかもしれませんが、まっいきなり大きな子が出来るのもなんです。

「先程も言いましたよ、好きになっていなかったら一緒にいませんよ。」

桃蓮さんがひしつと抱きついてくる、私の答えが嬉しかったんですよ。

ただ、今頃言うのもひどいんですが謝る事もあるので正直に話しましょう。

「逆に私の方こそ問いたいのですが桃蓮さんは私でもいいんですか？ 私は年下のガキで、

私は家柄や地位がありますから政治的に側室だなんだと後宮作事になりますよ？

あと今一人付き合っている女性がいます彼女は家の違いから護衛という形になっています、

更に涼州馬家の長女が婚約者です、誠意の無い男と貴女に詰られても反論できません。」

董家を独立させ国家をつくるとなるといずれは政略結婚も考えないといけませんからねえ、

“月をお嫁さんに”なんて冗談言っている場合ではないですから、実際、洛陽の連中では金や地位目当てで娘の婚約者にと私に近付いてくる者とかいますし。

翠ちゃんの件は琅？さんにいつも言ってますが将来当人が嫌と言ったら無しで。

翠ちゃんの件と違って無しにならないのは嵐さんとの間ですね、当人は日陰の存在でいいなんて言ってますが、私は側室なりきちんとケジメをつけますよ。

嵐さんがいない生活は無いと思っています、付き合ってたまだ何年もというわけではないですが。

とりあえず今は桃蓮さんとの話の最中ですね、他の女性の事考えるのは失礼ですね。

「保はいずれは王様になるわけだから仕方ないよ、それに、正直に今付き合っている人いるって言うてくれてよかった。」

おおーい、本当かよ、こんな良い女からお許しがもらえたなんて。ならばここでキチンとはっきりさせましょう、思いを伝えましょう。

「肉体関係持つてからって順番が逆ですが、私とお付き合いしていただけませんか孫堅文台殿？」

こういう事はきちんと口にしないといけませんね。

「はい、私なんかでよろしければ、董擢孟高殿。」

嬉しいね、実に嬉しい。

でも、少し前までこの人と夫婦になったらやり過ぎで腎虚で死ぬ、とか言っていた私が付き合える事を喜ぶのも変な話ですが。

ただやはり人に嫌われるよりも好かれる方がいいですよ。

「会いに来てても月に一回程度で今回みたいに二日くらいとかしか会えないでしょう、

ただ必ず会いに来ますから待っててもらえますか？都合のよいふざけた発言ですいません。」

桃蓮さんをなんとか益州に引っ張り込めればいいんですが、とりあえずは通い恋人ですね。

それにしても出会った翌日には結婚前提の交際って、どんだけふざけた事か。

少し前のビビ婚ですね、って、あれは松田聖子の消したい過去か・。

「ちゃんと待っているから平気よ、でも、だからといって放置したら嫌だからね、

あとは、そうだ子供達にも新しいお父さんを紹介し「その件は待ってください」・・・。」

父親になる気が無いわけではないですが、大事な問題がありますので、その説明を。

「今の段階で私がいきなり新しいお父さんですと名乗ってお子さんの前に現れても、

お子さんに認めてもらえるかも知りますし徐々に馴らしていくではないですが、

紹介は良いですが父親ではなく、今は交際していると知ってもらう事からで。」

ドラマで後妻を迎える際に前妻との間の子供がなんてありますし、実際やはり、いきなり新しいお父さんなんてそう簡単に受け入れられないでしょうから。

だいたい、この世界での年齢ならば、桃蓮さんの夫よりも、桃蓮さんの娘の孫策さんの兄と言った方が違和感がない年齢ですから。

「平気よ、いざとなったら貴女達に兄弟が出来たから、お父さんと呼びなさいと言えば、朝も言ったけど今ちょうどいい時期だからもしかしたら10ヶ月後にはね……。」

相変わらず凄いな何段飛ばしなんだ思考の飛び具合が、子供にめっちゃ反感抱かれますよ。

本当にとんでもない暴れ馬に手を出してしまったな、常時ロデオ状態ですよ、でも、こんな人生も良いですね、問題は私の母上がどうなってしまうかが……。

「あと、娘さんですが、祭さんがどんな反応するかが……。」

私と桃蓮さんが出会ってすぐに肉体関係持つ事に驚いている、祭さんが、うん、結婚前提でいきなり話進んでいるの知ったらどうなるのだろうか。

「祭なら平気よ、勘だけど。」

その勘が当たる事を信じるのみですよ。

まあここまできたら覚悟を決めましょう。

話がかかりますが、気になっていた事を聞いてみましょう。

「付き合うようになってから聞くのもなんですが、私なんかでよかったんですか？」

さっき言ったとおり私は色々と問題の多い男ですから、それに、最初私は危険だとか言っていたくらいですからねえ。

「お金持ちだし、強いし、頭良いし、家柄もいいし、でもそんな打算だけじゃないのよ、勘で貴方は危険と言ったけど、戦って、そして寝たら、情がわいたじゃないけど、当初の不安と違い信用できると思って、それに凄く私達相性がいいでしょ、・・・ふふふ。」

最後の理由が一番大きい理由じゃないのか、もしかして？まったくもう。

セックス基準にすると危ないんだぞ、喧嘩してセックスして仲直りなんてカップルは、今度はセックスの為に喧嘩なんて風になるから上手いかわなくなりやすいとかあるのに。

チュッ

とりあえず照れ臭いとか呆れるとかいろんな感情が渦巻いているが、今はこれかなと照れ隠し代わりのキスをする。

「貴方は食事と言ったけど、夕食まではまだ時間があるからねっ・
・・？」

しょうがないなあ、このわがままお姫様は、私も吸いつくされないように頑張りますか。

とは言いながらも楽しくて仕方ないですけどね堕ちてしまわないよう気をつけましょう。

一刻後

とりあえず、私と桃蓮さんは祭さんに見つかりこってり絞られましたよ。

ちょっと口から魂がでてしまうようなトラウマが出来かねない説教でしちょ。

説教終了後、桃蓮さんが晩御飯にしようとなり、ならば昨晚酒席を設けた高級料理店にと。

その席に孫策ちゃん、孫権ちゃんも同席させるといふ事になると、祭さんがめっちゃこっちをいぶかしんだ目で見てきますよ、いやまあわかりますよ。

「雪蓮、蓮華、こちらの方はお母さんの友達で涼州太守代理の董擢孟高さん、ご挨拶しなさい。」

そういう風に言うと言った目まんまちびっこくなくなった桃蓮さんな娘さんが挨拶してきた。

「孫策伯符です、董擢さんはお母さんと友達なんですネ・・・。」

歳の頃なら12歳くらいか、玩具を見つけたみたいな悪戯っぽい笑みを浮かべて此方を見て、私と桃蓮さんの関係で何となく察する物があつたのでしょうかねえ？

「孫権です、字は仲謀です、董擢孟高様はじめまして。」

此方の子があの子の孫権ですか、母親や姉と違ってかなり堅そうですねえ、私をなんとかいましょうか値踏みしているのですか？警戒した目付きで見えていますね。

とりあえず食事を楽しみましょう、プライベートはほとんどお金使わない生活ですし、こんな時くらいしか使いませんし高級料理店の料理を楽しみましょう。

桃蓮さんが県丞と要職はいえ普通はこれだけの高級店もあり縁ないでしょうし、

お子さん達やら皆さんも満足していただければいいのですが。

それにしてもメニュー到北京ダックがあつたのは笑いました、この時代はまだ北京という地名は存在しないのに、店員に突っ込みたい。

おかしい、突っ込み要素だらけですよ、北京ダックに必要な水飴だって、

私が涼州で作って少しずつ流通が始まったばかりなのに。

『そういう世界なんじゃ!!!!!!』

はっ、神からの突っ込みがあつたが、今までと違ってこれは触れてはいけない匂いが。

とりあえず私が存在しないはずの北京ダックを食べる事に集中する、桃蓮さん達の子供達も食べるのに集中している、祭さんはお酒を楽しんでいるようで。

そんな状況の時に桃蓮さんが。

「雪蓮、蓮華、先ほど董擢さんをお母さんの友達と紹介したでしょ、友達とは違うのよ本当は、貴女達の新しいお父さんだから。」

「」「」「ぶっ!!!!!!!!!!」「」「」

孫家の二人の娘、祭さん、私全員が一斉に嘖き出す、とんでもない爆弾投下しやがった。

「堅殿どういう「お母様新しいお父さんとは一体どういう事ですか・・！！！！！！」」

驚く祭さんの追及の最中に孫権ちゃんが口をはさむ、いや、それは私も言いたいんだよ。

「さっき、まずは紹介からという話だったでしょ、桃蓮さん！」

あつ、真名を読んだのはまずったかもしれない。

「へー、真名で呼ぶし、新しいお父さんって、ねえ・・ニヤニヤ」

やばい、上の子、孫策さんに玩具としてロックオンされましたよ、この感覚だと、デコイ無いから追尾ミサイル撃たれて撃墜でおいでしよう。

「いきなりお父さんとかそんな事言われても、大体貴方はお母さんの何なのですか！！」

蓮華と呼ばれている孫堅ちゃんは僕を指刺して怒っている、年齢で言うとり歳くらいかな？年の割に凄いしっかりしているな。

たぶん、翠ちゃんと同い年だろうがおつむの出来は段違いなんだろう

う、
翠ちゃんはいいい子だが猪武者だし、って、違う、今は翠ちゃんの事
考えている場合じゃないですね。

言えないよなあお母さんとは昨晩会ったばかりで、戦って気絶させ
て、
昨晩からつい今さっきまで二人で延々と肉体を貪りあっていたなん
て。

「いや、だから貴方達の新しいお父さんと言ったじゃない、蓮華。」

桃蓮さん、孫権ちゃんはそんな事を言っているんじゃないですよ!!

なんで、この子はそんな簡単な事も分らないのという目で蓮華ち
ゃんを見ているの？

それはギャグで言っているの？だとしたら面白くないし、本気なら
怖いよ。

「まさか昨日の今日で夫になろうとしているなんて、こ奴は。」

祭さんごめんなさい、なんか私自身も勢いに飲まれてというか、
まあ、いろいろあったがひかれ合っちゃったんですよ。

愛に理屈はいらないんです、ごめんいい事言ったつもりだが、
違うね、私が無節操というか、いい加減というかのに負けたとい
うか。

とりあえず色々あったんですとかしか言えないですよ。

「新しいお父さんになるというなら真名で雪蓮と呼んでね。」

いいのかそんなあっさりと預けてしまつて？

バーン

孫権ちゃんが怒って机を両手で叩いた音が室内に響く。

「ちょっと、雪蓮姉さん！！姉さんは真名をもっと大事にしてください！
さい！

こんな怪しい得体のしれない人間にいきなり預けないでください。」

この子本当に歳不相応に優秀だし、真面目だし、これから苦勞する
んだろうなあ、

こういうしっかりした良い子が報われないと可愛そうやね。

義理の娘になるはずなのに、私も全く他人事な感想だな。

「あらいいじゃない、蓮華も真名を預けなさいよ、ねえ母さん？」

だから雪蓮さんそんな簡単に真名預けろなんて言っちゃだめでしょ、
それで今、蓮華ちゃんが怒っているんですから。

「そうよ蓮華、保さんに真名を預けなさい、お父さんに。」

おおおい、貴女フリーダムな人と分かっていたけど、真名の扱いを注意しなさいよ、
あとわたしはあくまでも“未来のお父さん候補”なのに、もうお父さんって早すぎるよ！

とりあえずこの酒席をなんとか丸く収めないと、洛陽に帰ろうにも帰れないよ。

「それにもうすぐ貴女達もお姉ちゃんになるんだ」「ブッ！！！！！」
」

おおおい、何でとんでもない爆弾を放り込んでいるんだよ、こんな所でとどめを刺しに行っているのか？

祭さんと雪蓮ちゃんがまた噴き出していたよ、私も危うく噴き出す所でしたよ、

私の場合は噴き出すよりも今回はむせるでしたが。

「ななななんですってえー」

孫権ちゃん、そう叫びたいのは私もだよ、だから叫びながら私を睨まないで。

それにしても怖い怖い怖い、出した回数は半端じゃないが昨日知り合って寝たばかりなのに、
もう着床したとかいうのか、一発必中なのか？いきなり父親なんて

無いよな。

うおおお、私が一番否定していた出来ちゃった結婚は避けたいぞ！

“出来たっちゃ結婚”と言えばちよつとうる星やつらのラムちゃんぽいね、どうでもいいが。

まあ、妊娠が分かるのも少したないと無理だし、そんな都合よくは、

いまはとりあえず、雪蓮ちゃん、孫権ちゃん、祭さんをどうにかしないと。

本当に無事に洛陽に戻るのかな・・・。

第四十三話、孫堅、孫策、孫權、黄蓋、勢揃いは大惨事？（後書き）

なんか書いている私が孫堅と合わせた段階ではこうなるなんて。

ネタ抜きで当初考えていなかった展開になってしまった。

なんだろうドカベン作者の水島先生みたいになっているのか？
だとしたら結構な重傷ですよ、どうしましょう。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第四十四話、説明しよう、決断しよう、正義を実行しよう（前書き）

前回保がケジメを取ると考えた事とか休暇中の出来事に関しての続きです。

今回も無駄に長いだけの駄文ですが、皆さまよろしく願います。

第四十四話、説明しよう、決断しよう、正義を実行しよう

― 百合 ―

「保さん大丈夫ですか？ 凄い疲れた顔をしているようですが。」

李肅様の言う通りですはね、“二日間の休日をいただきます”

とおっしゃられて昨日、一昨日と董孟高様は休暇をとられたのですが、

休暇を過ごしたとは思えないような疲れた顔とでもいいでしょうか。
・・。

前に李文優様に教えていただきましたが“男子三日会わざれば刮目して見よ”

なんて言うらしいですが、この三日間での変わり様はどうしたのでしょうか？

ちなみに言葉の用法としては間違っていそうなのは気のせいでしょうか？

三日ぶりにお会いしました董孟高様は明らかにやつれているのが。

一体何があったのでしょうか？

久しぶりに休日をいただいた際についていはいはしゃぎ過ぎてしまい休み明けは疲れている、

なんて経験は私もありますがここまで弱っているなんて事があるの

でしょうか？

三日間でやつれてしまうような事態なんて一体何があったのでしょうか？

実際、私だけでなく？融さんとかほとんどの方が朝議の席で董孟高様を見た際、

あまりの見た目の変わり様に驚いて混乱していましたし。

「体調を維持するのも将の務めだ、將軍失格だ。」

郭阿多様の言う通りです、ただ、常在戦場とよくおっしゃられ、普段から体調に気を使われている董孟高様らしくないのですが。

「日さんに言われた通りです体調維持を失敗したなんて将失格です、皆さんに心配をかけてしまい誠に申し訳ございませんでした。」

そういつて董孟高様は深々と頭を下げられました。

謝罪しているからでしょうが、いつものような明るさがまったく見当たりません。

「皆怒っていなくて心配しただけだからそんなに謝らなくてもいいよ、

ただ、休みの間に何があったのか位は説明して欲しいんだけどなあ。

」

司馬仲達様のおっしゃられる通りです、怒るではなく心配しているのです、
出来れば本人から説明がないと私も含めて皆気になって仕方ないのですが。

「うーん、なんて説明をしたらいいんでしょうかねえ？」

董孟高様は私達へどのように説明したらよいのか悩まれております、
そんなに説明が難しい複雑な事態に巻き込まれたのでしょうか？

「そうですねえ簡単に表現するならば虎を見に行って戦ったと。」

虎と戦うのとやつれるにどういった関係があるのででしょうか？

おっしゃっている意味がよく分かりません。

「「「えっ!?!」」」

司馬家の皆さんは声をあげて驚いているようです。

私達涼州の人間とは驚く点が若干異なっていそうですが。

「菊花お父さん、桜花お姉ちゃん、私の聞き間違いかな？」

虎と戦ったって信じられない事をサラッと話されたような気がする

んだけど。」

「梅花、私もすっかり聞いたぞ虎と戦ったと。」

司馬親子は驚いているようですが虎と戦うのはさほどもえずらしくありませんが、

涼州の武将は調練だといってよく遠方まで虎狩りに行かれたりしているのですが。

とは言いましても、私も今では普通にしておりますが、涼州に来た当初は、

狩りで虎を普通に捕まえて来る皆さんを見て、同じ人間なのだろうかと思いましたが。

慣れというものはおそろいですねえ、異常な事が普通に思えてしまうのですから。

ただ、勝手な想像ですが董孟高様や李文優様ならば竜退治位してしまいそうなのですが。

「董孟高様、虎退治は過去にもされていたのにどうしてまた今回はこのような事態に？」

どういった事があったのか細かく尋ねてみましょう。

「「「えええっ!?!?!」」」

更に司馬家の皆さんが驚いて動かなくなっていましたね。

「梅花ちゃん、何度も虎と戦っているのが普通らしいよ私の聞き間違いでないなら。」

司馬伯達様の反応が実に初々しいですわね。

「虎と戦うって普通軍隊とか皆で行って倒すんでしょ？」

これは涼州に戻りましたら後学の為に司馬仲達様を狩りに連れて行ってあげるべきかと。

「いや、虎狩りなんて少数で行って、戦う際は一人で弓だけで倒しますよ普通は。」

董孟高様は普通に話をしておりますが、虎狩りなんて並みの武芸者では無理なのですが。

「王子様、踰輝に乗っていかなかったし弓は部屋に置いていったよな!？」

少々待ってもらえますか!馬、弓無しで遊びに行くように素手で虎狩りに行ったのですか?

そんな無謀な事したら董孟高様が幾ら強くても死んでしまいますよ!?

まあ、今ここにいらっしゃるのですから無事だったという事なんで

すが。

「流石に武気無しは無いですよ方天画戟は持ってましたよ、それで戦いました、

ただ、いつも使っている重藤弓は必要無いので持っていかなかったですが。」

虎狩りする際は遠距離から弓でしとめるものですよ！弓が必要無いからを持っていけないで、

方天画戟で虎と近接戦をするとは何を考えているのでしょうか？

「何があったかと言いますと、虎に会ってみたくなったので食事で誘い出してみて、

現れたから一緒に食事をしたんです、ただ、途中でお互いに盛り上がり興奮してしまい、

その後戦うことになったんです、流石虎と呼ばれるだけあって強かったです、

夜に灯りの無い足場の悪い川沿いで戦ったからちょっと危なかったですし。」

狩りって隠れている得物を陰からひっそりと狩る物ですよ？誘い出す物なのですか？

虎と一緒に食事をして、というのが想像つかないのですが？どうすればそのような事が。

途中で虎とお互いに盛り上がってきたから戦うというのが、獣とな

んで一緒にいれるのですか？

あと狩りは当然のことながら明るい時間にやるものですよ、
灯りの無い夜なんて危険な事をさらっと言っておりませんか？

「倒したはいいが（虎が）気絶していたから（虎を）おんぶして連れ帰ったんです、

そのあと後ろから（虎に）噛まれて喰われたと、ただまあ助かりまして、

そのあと飲み食いもせず延々と（虎と）戦って、それで昨晚は虎だけでなく、

その（虎の）子供達にも噛みつかれたりじゃれつかれたりしまして、
こうなりましたと。」

董孟高様、誠にすいません、おっしゃられている言葉の意味が全く分かりません、

いや、単語の意味は分かります、ただ文章にすると理解の範疇を越えています。

虎をおんぶしたのですか？虎って人食い虎とかいうくらいで人間より大きいですよねえ？

あと、気絶しているとはいえ、生きている虎をおんぶしているというのが、

そのようなことができるのでしょうか？とどめを刺さないで平気なのですか？

虎に噛まれて喰われたというのが最大の謎です！虎に噛まれただけ

で死んでしまいます、
なんで、そんな命懸けのことを若干照れながら普通に喋っているのですか。

虎と延々と戦っていたというのも、董孟高様は私と同じ人間なので
しょうか？

引っかかる点が多すぎますし、私程度の頭では何一つ理解が出来ません。

とりあえず分かったのは、董孟高様は普通の人ではありえないような事をして、
虎と戦っていたということでしょうか？それで精も根も尽き果てやせ細った？

私の理解の範疇を超えてしまいました、考える度に頭が痛くなってくるので、

この件はこれ以上考えるのをやめる事にしましょう。

実際、司馬伯達様、司馬仲達様とかかなりの方が私と同じように頭を抱えておりました。

話が少し変わりますがこの話の後偶然見てしまったのですが、
更に私の頭痛を悪化させるような謎の出来事がありました。

董孟高様の部屋の前を通りました際に声が聞こえたのですが

「嵐さん申し訳無い私はこの二日間貴女を裏切っていました。」

覗いてはいけないのですが覗いて見ると董孟高様が土下座して謝っております、

一体何があったのでしょうか？

お二人の関係は分かっていますし裏切ったという事は浮気したということでしょうか？

でも、董孟高様は虎退治に行っていたのですよねえ、それが何で浮気になるのか？と。

私の頭では完全に理解できなくなりました。

一人で虎退治に行った事を謝っている？虎退治は浮気になるのでしょうか？

近接戦で虎と戦うなんて危険なことをしたから謝っているのでしょうか？

全く分かりません、この土下座している意味が。

理解できない事ばかりで混乱していました、おかげで新たに頭に浮かんだ疑問が、

？融さんは董孟高様と同じように近接戦で普通に虎を倒せるのか？
等という訳の分からない、ありえないような疑問だったのが・・・。

本当に何があったのでしょうか？　こういう時に董孟高様の盟友の李文優様がいたら、何を言っているのかとかわかったのでしょうか。

―保―

なんか二日間の休日をいただき三日ぶりに朝議に出たら皆が驚いていますよ。

昨日祭さんにも言われましたが余程普段と違う酷い顔していたのでしょう、

たしかに顔洗う時に水面に映った今朝の私の顔は痩せ細り目付きは爛々としてましたし。

皆さん心配してくれて本当にありがとうございます。

ただ、口が避けても言えません、桃蓮さんと肉欲に溺れたせいで痩せたなんて。

うーん、皆しつこく聞いてきますが、なんて説明をすればいいのでしょうかねえ？

、
恥ずかしいですし嘘をついて誤魔化すにしても難しいですねえ・・・

薊さん、菊花さん、桜花さん、梅花さん、百合さんと軍師タイプの

人だらけ、

司と違って私は嘘をつけない人間なので皆さん相手では簡単にバレてしまいます。

袁家や曹家に嘘しか教えていない？さあ、何の事でしようか！？

再度言いますが私はうそつきではないですので、昨日一昨日の事で嘘ついても、

すぐに動揺してばれてしまいますよ、間違いないです。

そうだ！！！効果的な嘘をつくには真実を混ぜる事だとよく言いますし、

全部本当ではなくてよいわけですからね真実を混ぜて話せば、うん、そうしましょう。

「何があったかと言いますと（江東の）虎に会ってみたくなったので食事で誘い出してみて、

（彼女が）現れたので一緒に食事をしたんです、ただ、途中でお互いに盛り上がり興奮してしまい、

その後戦うことになったんですよ、流石（江東の）虎と呼ばれるだけあって（桃蓮さんは）強かったです、

夜に灯りの無い足場の悪い川沿いで戦ったからちょっと危なかったですし。」

「（桃蓮さんを）倒したのはいいが（彼女が）気絶していたから

（彼女を）おんぶして連れ帰ったんです、そのあと後ろから（耳を）噛まれて

（性的な意味で）喰われた、と、ただまあ（一人でいくことなく）助かりまして、

そのあと飲み食いもせず延々と（性的な意味で）戦って、それで昨晩は（江東の）虎だけでなくその子供達（孫策、孫権）に（新しい父親という件で）噛みつかれたり、じゃれつかれたりしまして

（ようは桃蓮さんとやり過ぎで）こうなりましたと。」

私は嘘を一切言っていないく真実だらけですし、

私の話を聞いて皆が勝手に勘違いするだけですからね。

哲学者カントは作品の中で嘘を絶対についてはいけないと、ただ、聞いた側が勝手に勘違いするような事なら言ってもよいというのを実践してみました。

こういう表現ならば皆頭良い分、話が飛び過ぎていて文章の意味が理解できず混乱しますね。

とりあえず無事に私の恥ずかしいというか情けない部分は隠す事が出来ました。

うーん、とはいえ、やはり嘘をつくのは心が痛む。

とくに桃蓮さんと肉体関係を持ち嵐さんを裏切ってしまったことが。

それで昨晩悩んだが嵐さんとの関係をキチンとして妻に迎えると決

めましたし。

ならば昨日何があったかの説明はいいから早く嵐さんに謝らないといけません。

朝議が終わったら部屋で話がありますと伝えましょう、それで謝ります、

これで嵐さんにふられた、またはひっぱたかれたとしても私の身から出た鯖ですし。

そういえば身から出た鯖って、今の子分かるのかな？

好きなんですよねえ中崎タツヤ作品読んでいるとニヤリとしてしまつて。

「王子様話があるっていったいどうしたんだ？考え事しているみたいけど。」

って、現実逃避はやめましょう、今部屋で、嵐さんがいるから、素直に謝りましょう。

「嵐さん申し訳無い私は貴女を裏切ってしまった。」

土下座なんか何の意味もなく謝っているというポーズにすぎないのですが、

私が本当に悪い事をしたと謝っているんだなと客観的に見て分かりやすいでしょうし。

私は本当に卑怯な人間ですよ、こういう計算があるのですから。

「王子様やめてくれ、一体どうしたというんだ、いきなり土下座して謝らないでくれ。」

正直に全部話しましょう、頭に來たならば煮るなり焼くなり好きにしてくれと。

昨日までの事を説明後

「王子様の説明でなんで俺に謝ってきたのかよく分かった、でも、気にしないでくれ、俺は王子様の護衛だから、あと、前にも言ったが女房にしてくれなんて俺は言わないし、誰と付き合おうが構わないから、それに王子様の結婚相手はそれなりの人でないと駄目だろ。」

嵐さんの口から出た言葉は、殴られる、罵られるよりもはるかに辛かった。

私のだらしなさの為に、嵐さんに、恋人にそんなことを言わせてしまったのが。

嵐さん強がって口ではこんな風に言っているがショックを受けているのは分かります。

はじめて閨を共にしたときに“俺は護衛だ”と嵐さんに言われた時に、
彼女が覚悟しているならと受け入れないで、ちゃんと否定してあげればよかった。

こんな事になったあとに言うのは、無理矢理帳尻合わせするために言っているみたいで、
私の人間としてのせこさが嫌になりますが、彼女との件をケジメつけないと。

「こんな状況で今から私が言う事は人として酷い事です、雰囲気も何もなく、
過ちをごまかすみたいな内容です、ただ昨晚色々考え答えをだしたのです。」

私が何を言うのだろうかと嵐さんは戸惑っているみたいです。

私に別れようと言われるのではとか想像しているのでしょうか嵐さん不安そうな表情しています。

「私の正妻となるとどうしても家柄や地位の問題もあり政略結婚になっ
てしまいます、

ただ私は心底嵐さんの事を愛しています、だから私の護衛兼愛人という
日陰の存在ではなく、

私の側室に、生涯の伴侶になっていただけませんか？」

本当に私は卑怯です、付き合っている二人から一人に絞るわけではなく、
しかも立場があるから正室は無理とふざけた事を言いだしているのですから。

多分、今の私の言葉は別れようと言うよりも身勝手な言葉ですよ。

でも、まさかこんな酷い事を言う私なんかを好きでいてくれるなんて、

私は本当に良い人に出会えたんだなと思いましたよ。

「王子様がこんな俺を側室なんかで迎えてくれるなんて言ってくれて嬉しいよ、

本当に俺は単なる護衛でよかったのに、女房にしてくれるなんてありがとうございます。」

それにしても正室が出来る前から側室がいるなんて私は実にふざけていますね、

でも、そんなふざけている私を好きでいてくれる人間が二人もいてくれるのですから。

なんて酷い人間で、なんて幸せ者なのでしょうが私は。

「涼州に戻ったら益州への移動とかあり忙しいでしょうが、まずは私の両親に話をして、
嵐さんとの結婚の許可を貰いましょう、それで嵐さんの親御さんにご挨拶に伺わないと。」

司君に話をしたら、人間として最低とか色々言われていじられるでしょうねえ。

まあ、私は普段から漢王朝をぶっ壊そうとか、買収やら、何でもござれな

最低な人間ですからね、今さら最低と言われても、本当に私はろくな死に方しないでしょうな。

一司一

ピキーーーーー

なんかここ数日保さんの身に物凄く面白そうな出来事が起きていそうなのがした！

なのに、なんで僕は保さんのそばにいないで盗賊を捕まえているんだ！！

あー、面白そうな事があるに違いないのに、この盗賊達のせいだ！

「いいか僕は今涼州に急いで帰っている最中なんだ、しかも、僕の勘では、

どうやら今親友の身にとっても面白そうな事があつたはずだ、それな

のに、それなのにだ、
僕は貴様らなんかの為に時間を割かないといけない羽目に陥っている。」

「「「「「・・・・ガクガク」」「」」」」

何を震えているのでしょうか、今まで散々悪い事をしてきたのですから、
少しくらいはやり返されないといけないでしょう。

「お前ら賊共に僕は正義の使者として罰を与えないといけない、ただ僕は優しいから、
どの罰が良いか三つの物の中から好きなものを選ばせてあげますよ。」

「一つ、首から下は生き埋めにする、誰かが通りかかれば助けてもらえるかもしれない。」

これは助かる可能性高いですよ、問題は此処が一週間に一人通るかくらいの山道ですが。

「一つ、もう二度と賊はしないという更生するという誓いの証文として右腕をいただく。」

鬼平犯科帳で鬼平がやった奴ですね賊だからといってむやみに殺さない、いいね、
まあ、こんな場所で右腕失ったら、医療器具やらなんやらがでないか

ら結局は……。

「一つ、顔に“僕達は野蛮な賊です”と落ちにくい墨で書かれて、両手両足の関節を外されて近隣の村の門前に裸で捨てられる、三つのうちどれが良い？」

これも相当助かる可能性が高いですが、まあ人としてのプライドやらなんやらが
こんなことされたら木端微塵でしょうがね。

はあ……、本当に保さんの身に面白い事が起きていたらどうしよう！？

まっ、そんな都合よく面白い事なんて無いでしょうが。

仕方がないです、正義の実行をすることでこの憂さを晴らしましょう、

それが終わったら急いで涼州に帰らないと。

紅さんからの手紙洛陽に今も届いているのかなあ、怖いから中が読めないよ。

涼州に着いて紅さんに会っても無事でいられるのかなあ、僕は。

第四十四話、説明しよう、決断しよう、正義を実行しよう（後書き）

原作が恋姫とは思えない話だな書いている私が言うのもなんですが、主人公の妻が孫堅に？融と原作に全く出ないキャラなんですから。

とりあえずそろそろ洛陽編を終わりにして時間を一気に進めて、もっともつと原作キャラを出したいと思います、とはいえ、例えば次回いきなり反董卓連合とかになっていたら怒られそうです。が。

とりあえず今日も見事に駄文ですいませんでした。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第四十五話、お互いに嫁さん候補を紹介しよう（前書き）

今日の話は久しぶりに司と保が揃って嫁さんについてと。

司と桃蓮さんの組み合わせが面白くなるといいんですが。

第四十五話、お互いに嫁さん候補を紹介しよう

一保一

この前桃蓮さんに会いに行った際に使ったように今日も例の武器屋からあの部屋に。

「お疲れ様です、保さん、って、嵐さんがなんでここにいるんですか？」

司君が驚いていますねえ、それにしても司君がやつれています。

「俺がいちゃ悪いのか！？って、なんで隴西に戻っているはずのコイツがいるんだ？」

あと紅まで洛陽にいるんだ！？王子様、どういうことだ？」

嵐さんが司君達がいる事に驚いていますねえ。

私は神様に司君が呼んでいると呼ばれたからしっているが、流石に私も驚いた紅さんがいるのは知らされていなかったから。

「今日は訳あって嵐さんを連れて来たんだ司君、それにしても司君やつれていないか？」

この間の私みたいにやつれきっていますよ、まあ、紅さんなんだろうな。

あんだけ会いたい、会いたいと言っていた司君とあえた紅さん、その紅さんの執念に魂を削られた感じなんでしょうな。

魂をというよりは、精液を絞りに絞り取られたというところかな？行かんね表現が下品にも程があるね、もっと上品にしないと。

それにしても、手紙読む限りでは病み方は半端で無かったようだが、目の前にいる紅さんは隴西で別れた時と全く変わっていないなあ。

ごめんなさい、見た目が全く変わっていない分、なんだろう、逆に怖いんですが。

「司様、なんで洛陽にいるはずの保様や嵐さんが此処にいるんでしょうか？」

それにこの真っ白い何も無い空間はいったいなんなのでしょうか？」

嵐さんや紅さんは知らないから驚くのも仕方がないんでしょうが。

神からの伝言で、司が此処に来てくれと呼び出しているというから来たんですがねえ、

一体どういった要件でしょうか？紅さんがいるから私と同じ話を話したいのか？

「あっ、司、説明はちょっと待ってくれ、実はもう一人お客様が来るんだけど、

説明が二度手間になるのはもったいないから、もう一人が来てから

で。」

嵐さんと司君には合わせないといけない人間がいますからね。

司君が、えっ、と言う表情をしていますねえ、そりゃそうです、嵐さんが来る事すら知らず驚いている司君なんですから、もう一人来るって。

おっ、噂をすれば影ではないですが、ちょうどいいタイミングで来てくれました。

「此処は何処なの？あっ、保がいたー、手紙が届いたから来たけど、

何で洛陽にいるはずの保がいるの？もしかして、もう私に会いたくなっ

て来てくれたの？
だったら凄くうれしいんだから、うふふ。」

桃蓮さんが走り寄ってきていきなり私の右腕に抱きついてきました、当たっているんじゃないの当たっているのよですね、相変わらずのボリューム感が。

自分の知らない人間が親しげに私の真名を呼び腕に抱きついてくる、そんな桃蓮さんの姿を見て嵐さんが今にも怒鳴り出しそうです。

ただ、そうなるちょっと面倒なので、手でちよっとおさえてくれと嵐さんに合図する。

「ううう……。」

合図を理解してくれたが、嵐さんが怒りを鎮めるのに苦勞している、ごめんね、嵐さんにも関係する事だから話をきちっとしてからでない。

おっと、嵐さんがその悔しさと私を取られないようにする為に左腕に抱きついてきた。

桃蓮さんみたいに胸が有るわけではないが関係無いね、やきもちやいて同じようにやってくる嵐さんが可愛いなあ。

私が嵐さんを微笑んだ顔で見ているのを見て、今度は桃蓮さんがちよつとムツとした表情で尋ねてきた。

「貴女は一体誰なの？ あつ、もしかして前に保が言っていた恋人？」

流石野生の勘保有者、閨で簡単に話をした嵐さんの事が一発で分かりましたか、

まあ、桃蓮さんが私に抱きついたら嫉妬したという段階でかなりのヒントですが。

「桃蓮さん、そこらへんは自己紹介の時間を用意するから少し待ってください。」

フリーダムな桃蓮さんには話を勝手に進められないように強めに言うっておきましょう、

まあ、司君並みにフリーダムですから少しくらい注意しても聞かないでしょうから。

「た、た、保さん、僕の見知らぬ人がいるのですが、一体誰ですか親しいようですが？」

此処はそんな簡単に人を連れてきていい場所ではないですよ……。」

珍しい気が動転している司君を見ましたよ、こんな姿めったに見れませんよ、

多分ですが、ハシビロコウが空を飛ぶ姿を見れるくらいまず見れないですよ。

分かっていますよ、簡単にどこるか私と司君だけが知っているはずの場所だったんですから。

「ふふふ、気になるようですね、とりあえず自己紹介の前に此処がどんな場所か、

簡単に説明をした方がいいのじゃないでしょうかねえ、司君？」

気が動転している司君を見たりいじったりしたいですが、話が一向に進まないのも嫌なので、

司君に落ち着いてもらう為にも簡単に仕事をしてもらいましょう。

悩んでいる、悩んでいる、司君がこの空間をどう説明すべきか悩んでいる、

本当に珍しいなあ気が動転していたり、悩んでいる司君の姿なんて。

「此処は大陸ではない場所とでも言っておきましょう説明しようにも説明しようがないので、

まあ、僕達はそちらにいる爺さんの力でこの場にいるんです。」

どう説明すればいいか分からないから表現に悩んでいるようですね、まあ、私達が転生者で、じい様が神様だなんて話せないですからねえ……。

まあ、私も話をしろなんて言われたらどうごまかせばいいんだと悩むでしょう。

とりあえず神様の力を借りましょう、こういう時は。

皆が神の方を向いている、そりゃそうでしょう、大陸ではない場所とか、

明らかに言っている事がおかしいのですから。

『僕はしがない仙人なんじゃよお嬢さん方、この世界で保と司の二人とだけ交流があり、
それでこうやってたまに話す為、僕の仙術でこうやって会えるようにしたんじゃない。』

神もさすがに自分が神である事は隠してくれて気を使わせてすみません。

“三人のお嬢さん達に仙人と言う事にしておいた方が神だと話すよりはまだいいじゃろ、
僕もお前らを呼び出しなどしているんじゃないからお前らに気を使わんとな。”

神が念波で話をしてくる。

神に氣を使わせて申し訳ないです、まあ、神と言う存在だろうが仙術だろうが、

嵐さんや紅さん、桃蓮さんならば言うなと私達が言えば触れないでくれるでしょうが。

いや、桃蓮さんは無理かも、まあ仙術という事にしてごまかしませう。

「此処の空間、此方の方について話すのは僕達だけならばよいですが、

皆さん家族であろうが他の人には決して話さないようにお願いします、まあ、

仙術で離れている所にいる人間に会えたなんて、あまりに非現実的過ぎて、

誰に話しても信じてもらえないでしょうが念のため。」

確かに司君の言うようにこの事を話しても誰が信じてくれるでしょうかねえ？

とはいえ、此処の事や神に着いて漏れたらまずいので注意しておきましょう。

まさか、此処で死なないのをいい事に私と司君で殺しあいしていたなんて、

言ったりするわけにはいきませんからねえ。

「とりあえず馬鹿な俺にはこの爺さんとかこの白い場所がよく分からないが、

王子様が秘密にしろと言うなら誰にも言わない、俺らだけの秘密なんだな、クフフ。」

嵐さんは、私と嵐さんとかだけの秘密という点に喜んでいるようですね、可愛いですよ、

いずれは転生したという秘密も教えるべき何でしょうが、まず今はこれくらいで。

「へえー、保は王子様なんて呼ばれているんだ彼女に・・・、此処での件はよく分からないけど秘密にしろというのならばいいわよ、

それにしても貴方って本当に謎ね、皇帝の勅命をもらえたり仙人に知り合いがいたり。」

桃蓮さんが不敵な笑みをしている、まいったなあ、

まあいずれは奥さん方を会わせるつもりだし、どうせ知られるし仕方がない。

「機密事項です。」

この時代の人にハルヒは分からないでしょうから通じないだろうなこのネタは。

「ぶーぶー、機密事項って何よ、たもつー!？」

膨れる桃蓮さんも可愛いなあ、これで二人の子持ちと言うのが驚きだよ。

「保様、司様が言われるのでしたら、正直私の理解の範疇を超えていて、それにこのような事を喋っても気がふれていると思われそうですから。」

紅さんの言うようにまず頭がおかしい人扱いでしょうね、これを話しても。

さてさて、話を進めましょうか自己紹介もしないといけませんし。

『立ち話もなんじゃろ、座って話をしようじゃないか。』

パチッ

いつものように神が親指と人差し指を鳴らす、真っ白い何も無いだっ広い空間に、テーブルとソファァーが現れる、三人掛けのソファァーが私達用で、二人掛けが司君達用か。

「えっ、えっ、えっ!?!」

「今何が起きたんだ、王子様!?!」

「これが仙術なんだ面白い!?!」

三者三様の反応をしておりますねえ、ちょっと面白い、

やはり常識人な紅さんのとまどい方はいいですねえ。

桃蓮さんはさすがフリーダム人間、全く動じていないどころか喜んでいますよ、

レストランの誕生日イベントみたいに普通に過ごしているのは流石ですね。

とりあえずいつものように席に着き、テーブルの上に並んでいるお茶とお菓子を楽しみながら、
いろいろと話をすることにしましょう。

「谷津シューに、お茶はダージリンセカンドフラッシュですか、うん、実に良い。」

それにしましても今日のお菓子は谷津にあるあの店のシュークリームですが、
いつもいつも感心するよ、神なのに、スイーツ好きなOLみたいに
いろんな店を用意して。

『相変わらず凄いな、すぐに分かるんだから。』

ええ、どちらも大好物ですから、すぐに分かりましたよ。

「なんだ、この菓子うめー！」

嵐さんは素直に喜んでいますね、ほおばる姿も可愛いなあ。

「だーじりんせかんどなんとかってなんですか？ 司様。」

紅さんはお茶が気になるようで。

「大陸の南西にある高山地帯で取れる希少なお茶です。」

まあ、この時代の人にはうまく説明できませんよね。

「こんなの見た事無いんだけど、美味しい！！」

そりゃそうです、三国志の時代にこんな物があつたら大事件ですよ
桃蓮さん。

さて、お茶とお菓子の話もいいですが、話を進めましょう。

「司君から呼び出しを受けてきたら、司君と紅さんがいて用件は何
となく予想がつくが、

まあ、先に此方の話をしましょう、司君には悪い話ではないから驚
くだろうが。」

私の話をしましょう、何故なら桃蓮さんがいるから紹介もしないとい
けませんので、

私の驚くだろう発言に先程から驚きっぱなしの司君がこちらを訝っ
た眼で見てくる。

「司君、私は此方の二人の女性と結婚を前提にお付き合いしているから。」

女性を連れてきた段階で何となく予想はついていたんでしょうねあまり驚きはない、

というか司君も紅さん連れて来ているから結婚報告なんだろうが。

「保さん、今日僕が保さんを読んだのも同じように彼女と結婚する事を決めたので、

報告をしようと思いましたが、そちらの方の紹介をしていただけませんか？」

手で司君を制する、メインディッシュは取っておかないといけませんから、

司君がびっくりしゃっくりして座り小便してしまうくらいなるのを期待しているのですから。

「とりあえず桃蓮さんに自己紹介していきましょう、桃蓮さんは最後に・・・くふふ。」

駄目ですねえ、つつい笑いがこみあげてしまって、悪い笑顔しているんでしょうねえ。

「保ー、悪い笑顔しているよお、そんなに友達を驚かせたいの？」

桃蓮さんが私の右頬をぷにぷにと人差し指で突っつきながら笑っている、

この後どうなるのかが楽しみで仕方がないでしょうが。

さてさて、どんなことになるでしょうかねえ……？

一司一

保さんが悪い笑顔している、普段は僕が保さんを振り回しているのだが、

この笑顔している時は僕がやられる番の時だ、いったい誰なんだこの女性は。

歳は20歳前半くらいか？ 凄く明るい性格、口調も軽い、悪戯っぽい笑みを浮かべていて、

桃色のストレートロン毛、健康的に自然に焼けた褐色の肌、そして物凄い巨乳、

さらにその胸元を強調するようなこの時代ではありえないようなドレス姿で。

ただ、保さんの嫁候補だからとかではなく、並みの人物ではないのがわかる。

笑っている姿とは対照的な武のオーラというか、やるなと言うのが一目で分かる雰囲気、

いったい誰なんだ？ 保さんが結婚すると言う相手で、この時代の武人となると。

それにしても、洛陽を旅立って保さんと別れて二週間もたっていないのに結婚すると、

一体どういう事なんだ、そんなに手が早かったか保さんって、何が

あつたんだ一体。

「うふふ、貴方も保と一緒に面白いはね、普段はひょうひょうとしているけど、

保と一緒に物凄い武を持っているけど普段は分からないように爪を隠しているのね、

そっか、貴方が保が言っていた涼州にいる嵐のような男というわけね。」

何者なんだ、武に関しては保さんが話したのではなく察したのか、恐ろしい勘をしているな、それにしても嵐のような男って保さん何を言っているんですか。

「武に関しましては人目を忍ぶ為に隠しているわけじゃないんですが、

僕が殺気を出してしまうと周りに人が近寄れなくなってしまうので已む無いです。」

相手を見る為に隠しているんですが、それにしても良く気付いたな、普段隠しているがまず誰にも分からないんですが、僕の武に関しては普段は。

「そういう事しておくはね、私の真名は桃蓮、自己紹介がまだだけど、

保の知り合いなら平気だろうし真名を預けるはね皆、桃蓮と呼んでね。」

いきなり真名を預けてきたから僕も含めて保さん以外皆ポカーンと

していますよ、
なんだろうか、この人もしかしたら相当どころではすまないじゃ
や馬なのか。

「とりあえず自己紹介を僕は李儒文優ともします、涼州の軍師の
一人でして、

保さんの幼馴染です、真名を預けていただきましたし保さんの奥様
になられるので、

僕の真名である司を預けさせて頂きます、桃蓮様。」

この人がどんな人か分からないからとりあえずはオーソドックスな
自己紹介を、

うん、なんか調子が狂ってしまいます、桃蓮さんとは相性悪そうで
す。

「口調が堅いんだから司は、そういえば保も最初は硬かったんだか
ら、ぶーぶー。」

ぶーぶーって、この人多分相当名の知れた武将なんだろうが、何こ
の自由さは!?

保さん、この人相当どころではないじゃ馬だぞ、保さんどうや
って飼いなしたの?

とりあえず桃蓮さんの正体を知りたいが怖いから知りたくないとい
うのも、不安だ。

「わ、私は姓は淳于で名が瓊と字は仲簡と申します、真名を預けていただきましたので、私の真名も預けます、私の真名は紅と申しまして、涼州で馬騰將軍の元で副將をしています。」

紅さんが完全に場に、いや、桃蓮さんの存在に飲まれてしまってますね、

いや、そうなるのも無理が無いですよ、明らかに空気がおかしいですし。

嵐さんがおさえているが、桃蓮さんが保さんに甘えている姿に噛みつきたいようで、

何とか抑えている一触即発な状態でもあるし、それなのに桃蓮さんは自由に行っていて。

カオスな様相を呈し過ぎているのが、紅さんも慌てるくらいで正気を保ってられるな、

常人ならばパニックになってもおかしくない状況なのに。

まあ、あの会いたい手紙を毎日送る情熱があるから、紅さんも常人では……。

「それで司の奥さんになるのね、結婚はまだだから私と同じで婚約者になるのか。」

紅さんがやはり空気に乗けたというのか、言葉ではなく首をコクコクと頷いて肯定している。

「桃蓮、お前が何者か知らないし、俺の王子様にベタベタするのは正直許せないが、ただ、この前王子様に教えてもらった結婚相手だというのが分かったから我慢する、俺は？融、真名は嵐だ、王子様の護衛で、この前王子様に結婚してくれと言われた。」

桃蓮さんが涼州勢ではないですから知らない相手ですし、敵意バリバリですな、それにしても、嵐さん当人が妻になる気はないとか言っていたんですけどね。

まあ当人が勝手に自分は愛人でいいと一步身を引いていたが、保さんがやはりそれはよくないと口説き落としたんだろうな。

「全員知っているでしょうが私は董擢孟高で真名は保と、今すぐではないですが、嵐さん、桃蓮さんを妻に迎える事を決めたので、この場で発表させていただきます。」

結婚する気はいいが、保さんは今後どうやってあの和さんを説得するのでしょうか？

保さんがかかった時の和さんは大陸最強の武を誇るくらいですから、どうなるか。

さて、一番最後に紹介されるのが、今回の一番の目玉、保さんの婚

約者、
一体誰何だ？もしかしたら琅？さんを超えるかもしれない武を持ち、
凄まじい勘をしている、雰囲気といい名のある武将に違いないだろ
うが。

とりあえず、紹介する前に一旦心を落ち着かせる為、お茶をいただき
ましょう。

あれ？桃蓮さんがニヤツと一瞬だけだが表情が変わったぞ、悪戯す
る笑みだ、

私がお茶飲んで嘔き出すのを期待しているのか、でも耐えてみせま
す、こうなったら。

「私も保と結婚を前提に付き合う事になったんだけど、普段は会稽
の県丞をやっている、

孫堅、字は文台「ぶほっ、ごほっ、ぐえほっ！！！！」司、貴方大
丈夫？急にむせて。」

そそそそそ孫堅文台だ！！！！！！！！本物なのか？あの孫堅文
台なのか！？

江東の虎かよ？保さんどうすればこんな大物を口説き落としたんだ。

あまりの驚きにお茶が気管に入ってしまった、未だ信じられない。

「司様、大丈夫ですか。」

驚きのあまりお茶が気管に入ってむせた僕を心配してくれる優しい
紅さん、

紅さんは孫堅はまだこの時代そんな有名ではないから僕みたいにはならなかったが。

「紅さん、僕は夢を見ているのかもしれない、頬を思いっきりつつてもらえますか？」

保さんと孫堅さんが狼狽しパニックになっている僕を見てニヤニヤしているよ。

「えっ、思いっきりつねるんですか？わかりました。」

痛い、痛い、痛い、思いっきりつねってくれと僕が言ったが頬がちぎれるかと思った。

うん、夢ではないんだね、尋常ではない痛みを感じたし。

「桃蓮さん、恐れ入ります孫堅文台と名乗られましたよね？」

同姓同名の他人ではなく江東の虎なんだろうが確認をしましょう。

「そうだけど、どうしたの、信じられないの？」

悪戯っぽい微笑みをしながら答える桃蓮さん。

「孫堅文台様という事は孫策伯符、孫権仲謀の親御さんですよね？」
だめだ、どうしても信じられない、あまりにも衝撃がでかすぎて。

「そうだけど、そんなに信じてもらえないのかなあ？でも、娘の名

前をよく知っているはね。」

ああ、本当なのか、こんなあり得ない事があるのか。

この世界で保さんと二人で好き勝手やって三国志の世界をぶっ壊すと決めたが、まさか江東の虎を妻に迎えようとするなんて、いくらいい女だとはいえあり得ない。

「王子様、そんな凄いのか、この桃蓮は？武の腕はすごそうだが。」

嵐さん、その人教科書に載るような伝説の人なの、1800年後とかに普通にゲームとか小説とかで名前が出て来るスーパースターよ！

「僕からしたら信じられないとしか言えないです、あの孫武の子孫で！江東の虎！

勇猛果敢で智謀も高いまさに名将、涼州にいる馬騰に匹敵する英雄の中の英雄が、将来仲間になってほしいと思っていたが、保さんの妻になるとは・
・ありえない。」

駄目だ、何度考えてもあまりにあり得ない事態に脳が思考を停止したよ。

まいったなあ、そりゃ保さんももったいぶるよ、こんなサプライズがくるとは。

「まさに名将とか、英雄の中の英雄なんて持ち上げられるとくすぐったいはね、でも、保もだけど貴方もよく知っているはねえ、私なんて地方の県丞でしかないのに。」

未来知識ある私と保さんだからこそ知っているんでしようが、いやはや参った。

参ったとしか言えませんが、本当に参った、保さんあんた凄いよ。

「司君驚いたかい？」

驚かせすぎだよ、でも、孫堅さんと保さんが縁組となると僕達の計画を修正しないと、悪い意味ではなく、物凄く野心的な派手な計画にしないといけませんな。

『保、お前さんには司が驚き慌てるなんて珍しい姿を見せてもらった札をせんとな。』

神め、楽しんでやがる、保さんや桃蓮さんらまだしも。

はあ、今日の話し合いは長くなりそうだな・・・。

第四十五話、お互いに嫁さん候補を紹介しよう（後書き）

悪ふざけ男司君も、桃蓮さんに限ればぶんぶん振り回されるなど、この話はまだ続きます、次回は陰謀というか計画編で。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第四十六話、孫堅さんといいい嫁さんはいいが、お世継ぎは大丈夫？（前書き）

前回の続きであります、保、司に桃蓮といった組み合わせの談話を。

ノリの良い孫堅と司なら相性がいいはずが、
司が振り回されるキャラになってしまったか。

第四十六話、孫堅さんといひ嫁さんはいひが、お世継ぎは大丈夫？

—司—

ふう、紅さんとの結婚を話すつもりがまさかこんな事になると思ひもしませんでしたよ。

流石保さん、僕が今まで出会った人の中で勝てないと思わされた数少ない人ですから。

さてさて将来の結婚で盛り上がる保さんと桃蓮さんには悪いですけど、

二人の仲を冷ますような事です但仕事をしましよう、聞かないといひけない事が。

「保さん、桃蓮さん、お二人は結婚は本気なんですか？再度確認しますが、
表現悪いがセックスフレンド、肉体だけの関係でなくてもよいかと？」

保さんや桃蓮さんには悪いですが確認しないといひけませんから、
とくに一番大事な事をね、覚悟が出来ているかを聞かないといひけません。

「司の心配は分かっているよ、私は本気だ、覚悟は出来ている。」

保さんは私の言いたい事を理解してくれたようだけれど、桃蓮さんは

大丈夫なのかなあ？

「あら、私だって本気よ、今更貴方に言われなくても、あの日、保に告白された時から。」

本当でしょうか、何処まで覚悟が出来ているのでしょうか？
私が嫌な役を進んで引き受けないといけませんね、ここは。

「桃蓮さん、貴女と保さんの間に子供が出来たら皇帝の子、皇太子ですよ、
上の二人、孫策、孫権を抑えられますか？ 場合によっては切れますか？」

孫家の二人の娘は保さんの子供ではないから二人には皇位継承権はないですが、
結婚すると義理の娘になりますからねえ、関係がちと厄介になるかなど。

結婚しないならば二人はあくまでもただの姉になるだけですし、
先程みたいに騒ぎだすとか厄介な関係になりにくいのが。

子供の姉ではありませんても、非情な時代ですから、僕達も色々可能性を考えないといけません。

二人が史実通り有能であまり欲が無ければいいですが、
もし無能だった場合または有能だが権力欲が強すぎて邪魔になった場合は。

農作物は作物の質をあげる為にあえて間引きしますが、それと同じ

ように、
保さん達の関係にトラブルを持ちこまれるならばその前に間引きが必要と。

「「・・・・。」」

皆が黙る桃蓮さん以外も、ただ、黙った意味が皆違うのには苦笑したが。

「保さんが皇帝って、どういうことなんですか!？」

紅さんそこですか!?! 話の流れで食いつくところが違いますよ。

って、ちょっと待ったああ、今まで散々陰謀を話していた僕達の言葉から理解していなかった?

「紅さん、私や司は漢王朝を終わらせると前から言っていましたね、後々、涼州、益州、南蛮など周辺をまとめた新帝国を立ち上げるという事です。」

保さんの口から直接説明してくれましたが紅さんはやはり引っ掛かるんですねえ。

前々から漢王朝を終わらすと僕達は言っているんですからねえ。

ただ、やはり普通の人は漢王朝を終わらせるという事に躊躇しますか、

僕達が新たな皇帝やシステムを組み上げるのは理解してほしいんで

すが。

そうでしたね、常識人である紅さんでしたね、今さらながら思い知らされましたよ。

まあいいですよ紅さん、王朝を壊すとか汚れ仕事は僕の仕事ですから、

紅さんの仕事ではないですから。

妻に対しても僕って冷たいんですねえ、でも、愛しているんですよ。

愛と仕事は別という事ですよ。

僕は紅さんを愛していますよ、愛していますよ、ええ。

あの“会いたい”と紙面一面に書かれた手紙とか異様な雰囲気にもまれたわけではなく・・・。

「王子様に子供が、って、お、俺だって母親になれるんだよな・・・」

だ、駄目だこの人、馬鹿だからとはいえ嵐さんたのみますよ、まったく・・・。

僕からしたらあれだけ保さんとやることをしっかりやっておいて今さら母親になれるんだよな、

って、逆に将来保さんとの間に子供が出来ていなかった方が僕は驚きますよ。

保さんが無精子症だったら別ですが、まあ平気でしよう。

まっ、嵐さんも紅さんと同じで、実に当人らしい発言といいましようか。

嵐さんのこういうお馬鹿なところに保さんが惚れているんですかねえ？

それにしましても呑気なお二人と違って、こちらのおねく様はまあ怖い事。

ぐふふふふ、そりゃそうだな、僕が煽ったんですからねえ。

「私を舐めるな！李儒文優、私を誰だと思っている！覚悟無く生きていると思ったか。」

桃蓮さんはソファーから立ちあがり左手に持っていた剣を今にも抜いて襲いかからんとばかりに。

良いです、良いです、実に良い、素晴らしい、これが江東の虎ですか、

保さんが氣にいるわけですよ、素晴らしい怒気、威圧感、見事ですよ。

こんな人間が仲間になってくれるんですから、堪らないですよ。

「司、試すなよ、私達の計画では最初から問題無いだろ。」

保さんが出てきましたか、まったくフォローの発言するなら早くして下さいよ、

僕は怖がりなんですから、こんな怒気を浴びるなんて怖くて怖くて

「すみませんね、試するような真似をしまして、ただ、いざという時もありますから。」

まあ桃蓮さん自身も、此方が念のためと試していたのは分かっていたようで、
すぐに怒気を抑え気にするなという感じでソファアに座りなおしましたが。

とはいえ怖かったあ、これほどの怒気を見せてくれる人大陸にどれほどいるのでしょうか？

跡継ぎの件はある程度は解決しているんですけどね、

皇帝の後継者にはなれないが、個人の家を残す後継者という形で。

「桃蓮さんに安心してもらえる事を言うなら孫策、孫堅のお二人は孫家の後継者として。」

董家の跡継ぎは保さんが皇帝になるので月ちゃんに。

こうすれば、皇帝である保さんの血筋とは別で、僕と蒲公英ちゃんの馬家、

孫策、孫権の孫家、月ちゃんの董家と御三家みたいにしておくことができますから。

まあ内心あまりでかい家が残るのもどうかというのがありますが。

とりあえず皇帝になった保さんの後継は月ちゃんと保さんの子供から決める予定で。

まあ後継問題はもう少し後にしてもいいでしょう、さすがにまだ帝国が出来ていませんから。

とはいえ、帝国をつくるならばある程度すつきりさせておかないと、こんな時代です、

保さんに何かあって亡くなった、後継を決めていないからお家騒動なんてのは避けたいですし。

僕の本音ですか、僕は正直面白くなればどうだっていいんですよ、酷いですねえ、実に酷い。

保さんの無二の親友のくせに、こういう事平気で思うんですから。

とはいえ、それ以上に思っているのは保さんも僕も、まだ見ぬ将来の保さんの子供達や、妹である月ちゃん達よりも遥かに長生きしそうかな、とか馬鹿な事思ってしまうのですが。

それにしても当初の予定であつた益州涼州連合国を作り、それ以外の曹操、孫堅、劉備、袁紹達は潰しあいさせてしまう予定が。

僕の考えた素敵なプランを台無しにしてくれましたよ、保さんは。

あと漢王朝潰さないで保さんを劉弁にくっつけてしまうなんてのも考えたりしたんですが。

まあ、桃蓮さんがこっちに来たからといって、保さんと劉弁が結婚してはいけないわけはなく、

保さんを、劉弁、孫堅、馬超を嫁に持つあり得ない男にするなんてのも面白いが。

でもなあ、桃蓮さんがこっちに来てくれたんだし、それならば、当初考えていた予定を変えて、まったく新しい計画を考えますか。

とりあえず保さんには文句を言いましょう、人の計画をぶち壊してくれたねと。

「本当に当初の計画を無視して勝手な真似をしましたねー、保さん。」

うらみがましいジト目で保さんを見させて頂きましたよ、

イメージ的にはサクラ大戦の妬く真宮寺さくらみたいな眼つきで。

保さんは勝手な事してすまん、という気持ちがあるのか、目線をそろしました。

そんな保さんの脇にいるのは、江東の虎ですよ？虎というよりは飼い主に甘える猫？

先程私に向けた怒気とかどう見ても桃蓮さんは血に飢えた猛虎とい

う感じでしたよ、

ですが、今、保さんの脇で抱きついているのは猫、しかも野良猫ではなく家猫の子猫ですよ。

一体どうすればそこまで虎が変質するんでしょうかねえ？

私の思いを察してくれたというのか保さん分かったんでしょうねえ、コメントしてきましたよ。

「愛に理由はいらないだろ。」

そういつて両脇にいる嵐さんと桃蓮さんを抱き締める保さん、保さんに抱き締められて嬉しそうにする桃蓮さんと嵐さんの二人。

うん、殺したいね！保さんが冗談で言っているのは分かるが、いつからそんな女たらしみたいなた台詞を吐くようになったんだ。

純粹だった保さん戻ってきてくれー！！！！！！

ごめん、僕は何を言っているんでしょうか、保さんは昔から不純だったな。

「司、君に言われたくないぞ、昔の君は・・・。」

おおっと、保さんに心を読まれてしまいましたか、保さんに変な事言われたくないので考えるのやめましょう。

前世での御乱行ばらされるのはまずいでしょう、転生したという事は秘密ですし、

あまりに変な事言われて横にいる紅さんに知られるのは。

知られるだけならいいが、それでまたねえ紅さんが、
“会いたい”だらけな手紙の時以上に病んでしまわないかが怖いで
すし。

「司様、昔の君って、どうされたんですか？」

ヤバイ、紅さんが気にしている。

「なあにたわいもない馬鹿話ですよ、人の計画を乱しまくっていた
と。」

適当にごまかしておきましょう。

はあ、肝心要の今後の予定に着いて話をしましょう。

細かい計画は別として今後の大まかな計画の再確認だけでもしまし
ようか。

「董家、孫家、馬家、五胡、南蛮それらの中心に保さんが座ると、
まずはその為に早急に益州を統一して、桃蓮さんも益州の太守にと。
」

例の書類を使って今いる無能な太守の皆さんにおさらばですよ、
桃蓮さんを太守代理に任命すればよいと、洛陽に文句は言わせませ
ん。

「それで三、四年か司……。」

私の発言に対し保さんが頷いて答える、私の考えを読んで納得してもらえたみたいです。

「私が太守になるのは分かるけど三、四年って、どういうこと保？」

桃蓮さんの勘は相当らしいですが、流石に僕らほど阿吽の呼吸ではないか。

まあ、僕と保さんの息の合方が半端じゃなかったですから、ええ、初対面で息ピッタリで周りにいた人間は初対面と信じてくれなかったです。

「三、四年とは桃蓮さんが益州内で郡太守を勤めてる期間ですね、その後は十常侍に董家を弱体化させる為に揚州あたりの州牧で赴任してもらおうと。」

まあ、涼州の時のやり方と同じですね、単純ですが効果がありますよ。

「どうしてまた董家を弱体化させる必要が起きるのですか？」

紅さんは疑問に思っているようですね、州牧就任は金積みめば解決しますが保険をと。

「十常侍には王子様が邪魔だからか？」

嵐さん良い答えです！素晴らしい、常に保さんの脇にいただけあり

学んできていますね。

ただ相変わらず普通に汚名挽回、名誉返上とか雰囲気をついんきだと言っています。

「十常侍の連中が大事なのは己の金と洛陽から敵を排除することです、

そうすると董家は何進に与する者で、洛陽に流す賄賂が少ない、ですから、

董家はお邪魔虫以外の何者でも、それで南蛮鎮圧したら恩賞をどうするのかとなります。」

これ以上董家にでかくなってもらっては困るでしょうからねえ、まあ地方の軍閥であるだけならば気にもしないでしょう、彼らは洛陽が無事ならですし。

「だから、今の段階の予定では南蛮鎮圧の大將は私になりますので副將に桃蓮さんを、
そうすることで桃蓮さんが活躍したいいう事で彼らに付け入る隙を与えてあげれば。」

その通りよく出来ました、さすが保さんと言いたいですが、まだ足りないです。

「惜しいなあ、三、四年と期間をきった一番大事な用件が抜けていますよ保さん。」

ふふふ、一番大事な事を忘れてるなんて保さんらしくないな。

いや、分かっていたが、あえて触れなかったんだろうな、甘い!!

「保さん、桃蓮さんとの間にその期間の間に後継者をなしてもらい
ませんかね、

董家、馬家、孫家連合を強固にする為夫婦仲を維持して下さいと・
・クフツ。」

保さんが、この野郎言いやがったな!という感じの顔していますね。

ふっふっふっ、嵐さんと桃蓮さんの板挟みに苦しむがいい!

つつい、笑いが込み上げてしまいますね、我慢しようにも。

僕って悪い子だなー、分かっているで掻き回してしまうんですから。

嵐さんがこれで拗ねてしまって、保さんが嵐さんを宥めるのに必死
になると、

今度は桃蓮さんが妬いてしまうから苦労する事になるでしょう。

あれっ!?!私の目論見となんか違うような光景が・・・・。

保さんが両脇の二人を抱き締めながらなんか囁いている、

桃蓮さんはニンマリして嵐さんが照れているがなんかOKしている。

気まずい空気になるはずが何も起きないぞ、むしろ向かいの三人の
空気がピンクだぞ。

ちくしょー、なんだ丸く納めやがって、この野郎、まさか3Pか!?

チクショー！モゲロ！スリキレロ！この竿師め！

ゴフツ

嵐さんに槍の石突きで突かれた、何も言ってはいないのに……。

「思うは勝手だが口に出すな気持ち悪い、あと王子様を愚弄するな。」

まさか口に出ていたなんて、こんなお約束をやっていたとは。

まさか3Pは否定しないとは、やるな嵐さん！！

サクツ！

今度は桃蓮さんが剣で僕の左肩をー！！痛い、痛い、痛い！！！！！！！！！！

嵐さんですら石突きで突く程度なのに剣で刺してくるって。

「もう、司も分かっている、言わないの野暮な事は。」

剣で人を刺す突っ込みは野暮ではないのですか？

超回復能力が有るから良いが、なかったら病院送りですよこれでは。

「期間をきつたのは桃蓮さんにはあまり益州にいてほしくないんです、

二人の仲を引き裂いてやりたいという事でなく故郷である呉郡とかをまとめ、

孫堅さんが船団を仕切ってほしいんですよ、南船北馬というくらいですから。」

桃蓮さん達が最強の船団を、涼州からは精強なる騎馬軍団、南蛮からは象兵部隊を、

そして保さんが率いる火縄銃を標準装備した歩兵軍団を作ってみたんですよ。

まあ、此処までキチンとしていなくてもいいんですけどね、みんな槍兵だろうと勝てばいいだけですが、格好なんかどうでもよく勝てばいいそれだけ。

ただまあ、そう都合よくいかないですから、鍊度、装備はキチンとしないといけません、

船、馬、兵器、兵糧とかキチンとしていないといけませんし。

やはり勝つべくして勝ち、負けるならば負けるべくして負けたと思います。

とりあえず洛陽に戻りましたら、桃蓮さんを今の県丞職から、益州に僕達と一緒に派遣されるように王朝に働き掛けましょう。

十常侍には、孫堅は董家への監視役ですとでも話をしておきましょう。

さて、まあ、大まかな事も決まりましたし、今日は驚かされましたし、

今日は仕事の話はもうおしまいとしますかね、保さんと雑談でもしましょうか。

場の空気も真面目な仕事の話は終わりという感じになっておりますし、

涼州に帰り着いてからの紅さんに泣かされた事とか愚痴りましょう。

あれだけ肝を冷やされたのですから、少しくらいは紅さんにやり返さないんです、

保さんとかと話をしましょう、桃蓮さんとももう少し交流を持ちたいですし。

あれっ？雑談をしようにもなんか、空気が変なのですが。

「司君、今日は色々驚かせたりしてごめんな、驚き疲れただろ、だから、今日は早く紅さんと城に戻って休んだ方が良いよ。」

あれれれ、保さんがなんか妙によそそしいぞ、僕に帰る事を進めるなんて。

いつもならば話の本筋からそれで野壺に落ちるみたいなくらい脱線しまくる雑談するのに。

保さんだってもうすぐ僕と同じように両脇に侍らせている方々と結婚するんですから、

男同士で「結婚か嫌だね」とかマリッジブルーなトークとかしまし

ようよ。

「今日は保だけでなく、司とも知り合えてとてもよかったは、もっと話もしたいけど、

でも、今日はもう遅いから終わりにしましょう、また今度ね司。」

あれ？桃蓮さんまで変だぞ、もっと色々話しようよ、普段の事とかどんな人間とか、

気になる点は多数ありますし話をしてみましょうよ。

まして婚歴が唯一有るのですから結婚生活はどんな物か先輩として教えてほしいです。

まさか、まさかなのか、この僕に帰れと言いたいのか！？邪魔だと言いたいのか！？

先程三人の雰囲気ピンクになったが今からイチヤコラチュツチュなのか？

「お前、帰れよ、邪魔だよ、空気を読めよ。」

嵐さん、いくら盛っているとはいえ、なんて酷い言い草でしょうか！？

そんなに保さんのチ○コがいいのか！！保さんのを求めないでも、後ろから見た貴女の姿が髪型のせいもあり巨大なチ○コみたいな頭しているのに。

ドゴッ！

グボツ、グヘツ、ゲホツ、あ、あ、嵐さん喉笛を石突きで突くなよ、いくら穂先でなく石突きでも喉笛は下手すりゃ死んじゃいます。

「じゃあ、口に出すなよ、王子様の前だから遠慮しているんだ、お邪魔虫め。」

あー、3Pかよ、この空間でこれから3Pかよ、肉欲に浸るのかよ、おい、神止めろよ、いくらなんでも神の前で始めるぞ、神聖な空間だろ、こいつら。

ハプニングバーじゃないんだから止めろよ、神なんだから。

『まあ、俺もたまには気を使ってやらんとな、それにな、驚くお前を保達に見せた貰ったお礼もせんとな。』

チクショーーー、周りは皆敵だらけか、味方は妻になる紅さんだけだよ。

「司様、いや、あなた、今のあなたは惨めです。」

敵しかないない、オールレンジ攻撃か!!!!!!

洛陽に来てから僕の運はだだ下がりというか、何でいつも、僕だけがこんな悲惨な目に合わないといけないんだー!!

第四十六話、孫堅さんといひ嫁さんはいひが、お世継ぎは大丈夫？（後書き）

保と司率いる涼州勢力は今後どうなるんでしょうか？

もつと好き勝手暴れて恋姫世界をグチャグチャにしたいものです。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第四十七話、人気作家童攏君サイン会（前書き）

書いているうちに原稿ミスって消してしまいました、
下書きとか無いからまたOから書きこみが、泣きたい。

しかも、書いている最中にPS3が故障、
バッドタイミングが重なり過ぎて泣きたいです。

第四十七話、人気作家董擺君サイン会

一保一

宮廷対策もだいぶ終わりました、洛陽でする仕事もほとんどなくなりました、
こういう暇な時だからこそ普段しないような仕事をしようと思いました。

現代では当たり前ですがこの時代ではありえないイベントをということ、
私の書いた本のファンへの交流イベントとしてサイン会を開催することになりました。

月達に読んであげる為に涼州時代に書いた紙芝居の本や、ラブロマンスや、滑稽本とか、
いろんな本を書きましたよ、おかげで今やこの時代でもっとも知られた人気作家ですよ。

まあ元ネタは現代にある本ですからやっている事は単なる著作権法違反ですが、
バレる事はないでしょうし、涼州の貴重な資金源ですから大事にしないといけません。

こんなイベントが開かれるのは歴史上はじめての事ですから凄いいお客さんです、

皆僕の書いた本を持って笑顔で来てくれるのですから作者冥利に尽きます。

一人一人彼らの本にサインと一言コメントを書いて握手してあげていますが、

みんな「ありがとうございます」とか喜んでくれていましたよ。

中には僕の見た目を知ってなのか女性のお客様では、サインの際に「これを読んでください」とラブレター渡されたりしたのにはまいりました。

すぐそばで護衛でいる嵐さんがそれを見て妬いていたのが。

フッフ、僕の奥さんは可愛いですねえ。

それにしてもいろんな人がいましたよ、小さな子連れとかは絵本のファンで、

女性だと恋愛小説、男性だと落語とか小話の本のファンが多かったですね。

途中トラブルもありました、並んでいるお客さんにピンクのビキニパンツ姿のスキンヘッドで、

もみあげ三つ編み顎髭のガチムチマッチョを見て会場にいた子供達
が泣き出したりして。

内心、私もこれはちよつと顔面が引き攣りそうになりましたが、
仕事なので満面の営業スマイルで、サインと握手をしましたよ。

サインする際の名前で“貂蟬”と聞いた時は一瞬頭がクラッと来ましたよ。

とはいえ、三国志に出て来る有名男性武将の大半が女性なんているおかしい世界ですし、

傾国の美女貂蟬がガチムチな兄貴的な人でもまあ仕方がないかと。

ただサインの際に「もう可愛いんだからたべちゃいたいくらいドフフ」

と聞こえたのは私がサインと握手のやり過ぎの疲れで聞き間違えただけでしょう。

まあ、貂蟬さんでの驚きもありましたが、この後もっと驚く事件がありましたよ。

あとどれくらいの人が並んでいるのかな？と背伸びしながら列に並んでいる人達を見ると、

何やら私が見た事あるような人達の姿が、気のせいでしょうか？

いえ、間違いありません、あのちびっ子金髪クルクル姿は曹操孟徳ですよ、

しかも、後ろにはお伴として夏侯惇元讓、夏侯淵妙才の姉妹も引き連れて。

なんで来るのかなあ？

うーん、僕の書いた本を抱きしめながら楽しそうに夏侯姉妹と話している姿を見ると、

普段家庭教師で嘘を教えている事が若干申し訳ない気持ちになってしまいますねえ。

とはいいまして、曹操は史実では袁紹とセツトで反董卓連合の顔ですから、可愛い可愛い月の敵になるのですから攻撃の手を緩めるわけにはいきません。

曹操の順番になりますと先程まで夏侯姉妹と楽しそうに話していたのとは異なり、急に厳しい顔つきになって私の事を見てきましたよ。

「貴方、涼州太守の息子の董擢孟高よね、涼州から優秀な家庭教師をと頼んだけど、来たのは優秀なはずの貴方ではなく別の人間が来たから今日が初対面なのよねえ。」

うーん、違うんだよね、一応私も家庭教師で行っているから会っているんだよ、
とはいいまして、私は謎の覆面軍師“許攸子遠”で教えているんですけど。

「今日このような形で初めて会うという形になってしまい申し訳ございません、
ただ、それにしましても、天下の曹操殿に私の作品を愛読していただき光栄の至りです。」

こういう風に私が言いますと、普段の傲岸不遜な喋りとは異なりまして、

頬を赤く染めて照れてしまう姿に、不覚にも可愛いと思えてしまいました。

とは言いましても、貴女は董家の敵でしかないのですから。

「敵将曹操の首とったり!!」とはいかないでも、その金髪クルンクルンを高枝切りばさみで斬り落としてあげたいです。

「それにしても今日はじめて貴方と会ったはずだけど、前に何処かで会った事ないかしら？」

なんでかしらないんだけど今こうやって貴方と話をしていて思うんだけど、

貴方の声を聞いたらすごくムカムカするのよ、貴方に言っても仕方がないんだけど。」

ええっ、会った事ありますよ、先週もそちらに授業に行って会いましたから、

まあ、ムカつくのもわかりますよ常に嘘ばかり教えていますからね・・・。

ちなみに先週は、メンマは職人さんが割り箸を延々と煮て作ると教えてあげました、

彼女は「嘘だ!」と言って信じないから「貴様はやったことないだけで否定するのか!」

と一喝して、しかも、買収したメンマ職人にも割り箸を煮て作ると嘘の証言もさせましたし。

さて、彼女はメンマの真実をいずれ知るんでしょうかねえ？

真実を知る前にメンマの事馬鹿にすると切れるようなメンマ命な人間に会ったりして？

まあ、そんな人間いるわけないですしあり得ないですね、馬鹿な妄想はやめましょう。

あとは家庭教師として最近やったことだと何が有ったでしょうかねえ？

そうさそうさ彼女の弟の曹仁君、これが可愛い子だったんですよ、

ちよつとウェーブかかった金髪の可愛い少年でしたよ。

そんな曹仁に、海外で大人気だと騙して金髪を真っ黒に染めて七三分けにして、

曹仁をサラリーマン姿にしてあげたらひきつけ起こしていたな。

あとはドクロの髪飾りに粘土で肉付けして生前の顔を復元してあげたりもして、

これが生前の顔ですといって見せてあげたらこの世の終わりみたいな顔していましたよ。

いやあ、世界には悪い人がいるんですねえ、本当に悪い人がいる物で。

ちなみに、一緒に並んでいた夏侯姉妹の二人はというと。

「何書いてあるか文を読んでも分からないが絵だらけで面白いからお前の本は好きだぞ。」

「子供向け絵本の文が理解出来ないなんて恥ずかしい事を堂々と言う姉者もまた。」

うん、お前ら何しに作者である俺に会いに来たんだ！という感じがすよ。

とりあえず二人の本には「でこっぱち、でこ輝き過ぎ」「パチモン鬼太郎」

とサインしてあげました、まあ、平仮名で書いたから分かる事はないでしょうが。

そんな風にして曹操達にサインをしていると、何やら聞き覚えのある声が。

よく見てみるとなんといました、もう一人の金髪クリンクリン頭がお供を連れて。

「あら華林さん、貴女はそんなところで何しているのかしら!？」

いや、お前さんも此処に並んでいる段階で何をしているのか分かるだろ。

正直突っ込みたいですよ。

私に気づいた袁紹さんが私に話しかけてきました。

「先生もこんな所にいるなんて暇なのかしら？」

私が作者の本のサイン会ですよ、そのサイン会にお前さん来ているんだぞー。

「それにしましても先生は相変わらずみすばらしい恰好をされてますはね、

三公を四代に渡って輩出したこの華麗なる袁家と交流があるのですから、

外に出る時はせめて服くらいは綺麗な格好をしてください、オーホッホッホ」

うん、袁紹、彼女と話をしているが私は内心ガッツポーズしたいですよ！

私と司君の二人で家庭教師で嘘ばかり教えてスクラップにしようとしてますが、

これほど見事に、たった半年程度の期間でポンコツになってくれるなんて。

良いぞお、もっと人を見下し、馬鹿みたいな高笑いする人間になれー！！！！！！

でもまあ、そんな風にポンコツになって、私を見下していて、何用かしら？

みたいな事を言っているが、私の書いた紙芝居をまとめた本をすっと出してきましたよ。

サインして、「豚もおだてりや木に登る」と平仮名で一言書いてあげましたが、

大事そうに私のサイン本を抱えていましたよ。

やはりそこは子供ですね可愛らしい姿でしたよ、
先程の曹操と同じでちよっとキュンと来ました。

ただまあ、ロリではないのと、彼女達は董家の敵、といいましょうか、

悪ふざけの相手である点からキュンときてもどうでもいいんですが。

まったく曹操といい、袁紹といい素直でないんですから、まったくもう、

もっと素直にサインください、ありがとうと子供らしくしなさい。

人生の大先輩である私の前くらいでは子供らしくしていればいいんです！

まあ、私もこの世界だけではまだ15歳ですからそれは無理が有りますか。

「姫く、アニキとの話なんかよりも早く博打を打ちに行こうぜく、
斗詩から金借りたから昨日の負け分は取り返すに早く行きたいんだから！」

「文ちゃん、文ちゃん博才ないんだから、博打はやめなよー！」

いいぞお、ガキのくせに博打にはまって駄目人間街道を突き進んでいますね、

これで早い段階で酒びたりになったら完全に人生落伍者街道独走するな。

関羽にやられる前にポンコツになって壊れかけのRADIOとして離脱するのか？

袁紹だけでなくこっちも見事にポンコツになってきているぞ、やったー！！

こんな場所ですから出来ませんが、マシオカみたいにヤッター！！と叫びたいですよ。

いやあ袁家は曹家よりも金が有りますしスクラップにするだけでなく、

徹底的にむしり取るのもやらないといけませんね。

袁紹は司と二人で頑張って洗脳と言いましょとかお馬鹿にしようとしたおかげで、

袁家の兵隊の鎧が金ぴかになるのが決まりましたし、実にたまりませんね。

見た目にこだわる華麗なる鎧を作れる腕の良い職人達なら知っているぞと教えて、

涼州で鎧とか装備の受注を出来るようになりましたので笑いが止まりません。

装備の貧弱さが半端でないとすよ、金ぴかで見た目だけはご立派ですが、

まあ、あれだけ金ぴかだと光を集めてレーザーみたいな失明兵器作れそうですよ。

いやあ、本当に袁紹は順調にどんどんアホになっていきますねえ、実に嬉しいです。

鎧だとか武器とかを涼州に普通に依頼しているなんて信じられない事するんですから、
董家との戦争が始まったら供給源断たれるという問題は考えていないのだろうか。

袁術がもう少し大きくなったらこちらも阿呆になってもらって涼州の財布にしましょう。

袁紹を見ると「妾腹のくせに」とか陰で言ってしまうような人格に問題が大変ある子に、

それで袁紹が部隊の鎧を金ぴかにしたから袁術の兵隊は銀の鎧を着るようにと対抗させましょう

あととはなんでしょう、袁術といえばこれ、蜂蜜ですね、
蜂蜜が手に入れないとキレるような我儘いっぱいの子にしてしましましょう。

ふふふ、袁家は将来無事でいられるんではないか？

袁家の周りにいる人間はこんな酷い人しかいないんですから

ああ、可哀想に袁家の皆さん、でも、ごめんなさいねえ、稼がせてもらいますよ！！

「金を持っていない？じゃあジャンプしてみろ！チャリンと音がしたらパンチだからな」

と一昔前に体育館裏であつた不良たちのカツアゲみたいにしてしまいました。

情け容赦なく、差し押さえの赤札貼りまくる税務署みたいに徹底的にやりましょう。

董家の為に袁紹、袁術達は立派な財布になってもらって最後は派手にやられてもらいましょう。

うん、両袁家やら曹操が徹底的に潰しあってどちらが滅びるかまでやってもらいいます、

ただし、どちらも滅びるまでの間に涼州が雀れるだけ雀り取って粕しかない状態に。

歴史通り曹操が勝ってその後袁家の莫大な金が曹家に流れたなんていうのは癪ですし。

まあ癪とは言いまして、実際の所平気ではありますが。

涼州は既にスタートラインの段階で相当フライングをして人材やら金を手に入れてますし、

それならば曹操が袁家の金を手に入れられても涼州益州連合は勝てますよ。

いやあ私のサイン会の話だったのが金髪クルクルセットが揃ってしまった事から

話がそれまくってますね。

まあ、とりあえず分かった事は今回のサイン会はやって正解だったと。

そして曹家と袁家という金髪クルクルの連中は徹底的に司と私の玩具にしちゃいましょうと。

第四十七話、人気作家童攏君サイン会（後書き）

保と司の悪ふざけのおかげで少しずつですが、
華琳と麗羽の二人が原作のキャラに近づいていきます。

さて、次はどの原作キャラを出しましょうかねえ・・・。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第四十八話、涼州での司の苦勞（前書き）

第四十五話で司が紅さんと結婚する事を決めた理由とかの話。

今後保が和とかに結婚する事を伝え説得することが出来るように根回しを、

嘘です、要は司君の暴走というお話であります。

第四十八話、涼州での司の苦勞

一司一

久しぶりに涼州の城に帰ってきましたが、洛陽での普段と違って朝議も静かですよ、
と思ったのもつかの間で、なんと言いましょうか執務室が地獄絵図になりました。

原因は、まあ、僕のせいなんでしょうかね？とはいいまして、僕にはマリアナ海溝よりも深くヒマラヤ山脈よりも高い訳が有るのですから。

どんな訳ですか？って、なんと言いましょうか“洛陽に行って色々と疲れた”と。

そんなのは言い訳にならない！？僕の苦勞を知らない人間は放って置きます、

どれほどの苦勞が有ったのか、聞くと涙、語るも涙な可哀想な長編ドラマがあったのかと。

多分ですが僕のこの苦勞話を徳光がもしふとした話で聞いてしまったならば、
あまりに泣き過ぎて最後はしなびた茄子の古漬けみたいになってしまいますよ。

世界で三番目に可哀想な僕でしたから、ちなみに一番は“マッチ売

りの少女”で、

二番目は“安寿と厨子王”で、その次が僕になると。

これ、この前亡くなられた家元立川談志の落語「粗忽長屋」で出て来る表現だが、

この話を読んでくださっている読者の中で何人が分かるんだろうか？

うん、どうでもいい話にでしたね、話を戻しましょう。

では、どうして執務室での朝議の場がこんな風になったのか、きっかけである僕が苦勞しているあたりから説明しましょう。

皆さんハンカチを用意しておいてください、ナイアガラの滝みたい
な涙を流しますから。

元々、僕と保さんの立てた計画を実行する為に少し前に涼州から洛陽に旅立ちましたよ、

洛陽まで往復する帰還に宮中対策で半年を予定しておりましたよ。

しかし、世の中なかなか予定通りにはいかず、例えば桜花さん助けるついでにうっかりで、

長安を派手に焼いてしまったり、洛陽での太守引き継ぎ忘れがあったり、と。

当初の予定が半年でしたが、どうやらこのままでは一年になるなど。

本当に僕は大変だったんですよ！僕だけ洛陽から帰ってきた方がいいが、

またこれから行くんですよ、何故僕だけが洛陽と隴西を二往復しないといけないのかと。

でも、そんなの僕の苦勞をコース料理とするならばオードブルにもなりませんよ！！

まずはこの前ですが洛陽から戻る際に保さん達に縛られて挟翼に乗させられたので、

挟翼から落つことされ蹴られ引き摺られ噛まれぼろ雑巾になりましたよ。（第三十九話）

涼州に戻って来てからもダメージを受けましたよ、しかも、肉体よりも心に被害が、

保育園にいる子供達と話をした際に大ダメージを受けましたよ。

「お兄様と一緒に嘘つき、嫌いです、へううっ」と月ちゃんに泣いてポカポカ叩かれ。

「僕の月を悲しませるなんて許せない！」と詠ちゃんに首を絞められ。

「じゅちゃん、男が女を悲しませたらあかんよ」と霞ちゃんに諭されて。

「約束を違えるとは腹を斬れ！」と華雄ちゃんに切腹させられそうになり。

「・・・誰？敵っ？」とか言われて恋ちゃんに僕の存在は忘れ去られていて。

「きりもみちんきゅーきつくー！」とねねちゃんに新しい技で飛び蹴りされ。

「半年の約束じゃないのかよ！」と翠ちゃんに馬で追いかけて回され。

「お姉様と違ってたんぽぽは理解あるから男はある程度自由にさせてあげるの、

でも、最後は奥さんであるたんぽぽの元に戻るしかないの、ニシシ」と逃げ道を塞がれ。

僕が一体何をしたというのですか！！仕事をキチンとやっていたんですよ、

確かに帰るの遅くなっていますが子供達に不倶戴天の敵扱いで身も心もボロボロに。

でも、これでもまだオードブルにサラダ程度の雑魚ですよ、僕の身に起きた悲劇では。

メインディッシュ一皿目は言わずと知れた婚約者である紅さんですよ。

涼州に帰ってきましたが今も洛陽にいる人達を涼州に帰す為にもと、急いで引き継ぎの大使を連れて洛陽に行きたいから戻ろうとしたら。

「そうやって貴方は私を捨てて他の女の元に行くのね」なんて言い

出すとは。

すいません、こちらの世界ではまだ唾つけたのは紅さんだけですが、なんか僕が凄い女に対して酷い人みたいじゃないですか。

明らかに紅さんが私の説明なんか無用な世界に旅立っているのが、こちらの世界で僕はまだ15歳ですよ、童貞でもおかしくないんですよ！

いやまあ、童貞何それ？というくらい紅さんとはお互いに楽しんでいます。

なんで紅さんは現地妻みたいな事を話しているんですか？

まだこれだけならばよかったですよ、いや、本当はよくないんですが。

待っていましたよ事件が。

僕は保さん以外には負けない武を持っていますよ、でもですね、軍人である紅さんが虚ろな目をしながら本気で刺身包丁片手に襲ってくるなんて。

危なかったですよ！強かったですよ！次の三国無双に刺身包丁の紅さんが出演、

と、なりかねない強さでしたよ、本当に強かったですよ殴るわけにはいけないですし。

うつろな目をしながら言ってくる台詞が、「貴方を殺して私も死ぬ

！

「こうすれば貴方は私だけの物に！」 「私も一緒に死んであげますから。」

僕もとにかく必死でしたよ、保さんと殺しあった時を思い出しましたよ、

刹那（75分の1秒）でも反応が遅れたら殺られるの確定でしたよ。

大体なんですか、あの刺身包丁は！？ ロンギヌスの槍に匹敵する聖具か何かですか？

アンデルセン並の超回復を持つ私が、切られた傷口がなかなか塞がらないって。

惨めですが涙と鼻水でパックしたような顔になりながらも必死で土下座しましたよ。

母さんもないですし、暇があまりないので洛陽から帰ってきたらですが、

紅さんとちゃんと結婚式をあげるから、と念書をしたためましたよ、更に給料の三ヶ月分どころか何年分だ！？ という婚約指輪を買って進呈しましたよ。

そして、紅さんに私が引き継ぎを終えて洛陽から戻るまでの間に、故郷から今のうちに紅さんの両親を呼んでおいてくれと伝えたら落ち着きましたよ。

落ち着くまでに、右腕一か所、左わき腹一か所、左太もも一か所刺

されて。

刺し傷は三か所だけですが切り傷ならば体中に数え切れないくらいで。

賊退治行ったり、桜花さん救出の殴り込みの際もかすり傷一つ負わなかったのに・・・。

とりあえず僕の人生は完全に詰みましたよ、洛陽宮中を手玉にとる策士な僕が、
齢15歳にしてもはや籠の中の鳥ですよ、もうおしまいですよ、ええ。

二件目のメインディッシュは、この続きとでも申しましようかねえ？

紅さんと結婚を決め、その後保さんと嵐さん達に結婚予定を報告しましたが（第四十五話）

あの翌日に空さんと、紅さんとの結婚の話を雑談していたんですが、最悪な事にその内容が琅？さんとたんぽぽちゃんに聞かれ知られましたよ・・・。

「たんぽぽは婚約者だよね司君、婚約者で差があっちゃいけないよね。」（第二十六話）

笑顔です琅？さんが、笑顔な分怖いです、けた外れの恐怖が襲って

きましたよ、
胃がキリキリと、脇や背中に滝のような汗をかきましたよ、琅？さんの話に。

琅？さんが僕の肩を掴んでいます、力のこもり方が、ミシミシメキメキと異音が、
危うく両肩の骨が粉微塵になるまで握り潰されるところでしたよ。

「たんぽぽは将来、奥さんとして武人としてご主人様を助けてあげるね。」

将来はいいから、今、この場で貴女のおばさんから助けてください！と言いたいです。

琅？さん、たんぽぽちゃんコンビに言われましたら逃げられませんよ……。

「司君、たんぽぽと結婚するけど、まだ6歳だから睦事は駄目よ、ニシシ。」

と小悪魔の微笑みを浮かべながら言ってくる琅？さん、うん、ぶっ殺したいね。

どんだけ僕は女に大して節操無しと思われているんですか！まったくもう。

はあ、紅さんとたんぽぽちゃんへの婚約指輪だけで貯金が全部無くなりましたよ。

保さん達と帰ってきたら益州移転で忙しく暇がないはずなのに結婚式二件か。

街の服屋で大至急で紅さんとたんぽぽちゃんの花嫁衣装作成ですよ、ただ、たんぽぽちゃんなんかは花嫁衣装ではなく七五三の間違ひでは？と思いますが。

本当にこの件は困りましたよ、僕は何も悪いことをしていない被害者ですよ！！！！

なのに、街の人が僕が歩いている姿を見ると子供を隠そうとするのが辛いです。

僕はペドフィリアではない！！！！

子供隠す親共を無礼討ちで切り捨てても問題ないですよ？そんな奴らは。

はああ、この段階でお腹一杯どころか胸焼けしそうな事態ですよ、でも、攻撃の手は緩みませんと言いますか事件は続いたんですよ。

まあ、ここまでが私のストレスがたまる原因だったんですよ、この後、つい先程ですがちよつとした事がきっかけで事件が起きてしまったんですよ。

朝議があつという間に惨劇ですよ。

“事件は会議室で起きているんじゃない現場で起きているんだ！”
なんてありましたか、

朝議の場ですよ、事件は会議室で起きているんだ！ですよ。

何があったかと言いますと、朝議が終わった後に雑談になった時に
ですね、

一連の僕に降りかかった騒動を知って和さんが一言言っただけです、
悪気はないんでしょう。

「（たんぽちゃんとの結婚を）あらあら微笑ましいわね。」

たんぽちゃんは小さいですから微笑ましいのもなんとなくわかり
ますよ、

まして、和さん、母さん、琅？さんは年も近く仲いいですから。

でも、カチンとききましたよ、僕の苦勞も知らないで！！と、叫びた
かったですよ。

ならば私だって、と保さんに関する事で火種を投げ込んであげまし
たよ。

問題は投げ込んだ先が油田だったようで大爆発したといいましたよ
か。

「羨ましがられないでも平気ですよ、近いうちに保さんも二人の女
性と結婚しますよ、

しかも、子供もいますから、もうすぐおばあちゃんになれますよ。」

嵐さんと桃蓮さんの事を伝えましたよ。

大炎上ですね、イラク戦争の時の放火された油田みたいに激しく燃え上がりましたよ。

「えっ、えっ、保君に子供ってどういうことなの！？教えて司君！？」

琅？さんは純粹な興味プラス翠ちゃんの結婚相手予定として気になるから食いつきましたね。

「保様もあの若さで親になりますか、しかも、二人も一気に娶るとは実にやりますのお、ワシも保様や司様を見習って嫁の一人や二人娶りたいですは！！」

久しぶりな出番（メタるな！）の雷さんはいきなり二人と結婚、子持ちという事に感心、うん、紅さんという爆弾案件やたんぽぽちゃんであれば引き取ってもらえませんか？

なんてことは言えませんが、はあ、雷さんは気楽でいいなあ……。

「司さんだけでなく保さんも僕よりも若いのに結婚なんて、保さんなんか子持ちになって、えっ、雷さんが嫁の一人や二人娶りたいって、僕は子沢山が良いなあ……！」

同じく久しぶりな出番またもメタの芍薬さんは相変わらず片思いな雷さんの事を妄想か。

「皆、司ちゃんの話が気になるのは分かるんだけど騒いでいる場合じゃないよ、

開いてはいけない地獄の釜の蓋が開いた事気づいていないの？」

地獄の釜の蓋が開いたって、そんな物騒な事があるんですかねえ？

はっ！！！！！！！正直牡丹さんに私は言われるまで気づきませんでした。

パンドラの箱は開いてしまっていたんです！

ゴゴゴゴゴ、というジョジョ的な擬音が聞こえそうでした、体中から怒気、殺気、ヤバイ物を大量に発しています和さんが。

「ツカサ~~~~！！今、お前はなんと言ったあああああああ
ー！！！！！！」

和さんの声がヤバイです、明らかに大気が震えだしはじめています。

いつの間にか片手には斬馬刀が握りしめられています、ヤバイ、この状態でミスったら嵐さんや桃蓮さんが殺されてしまいます。

江東の虎とか関係ないです、瘴気というのかヤバそうな物を噴き出していますよ。

「つつつ司君のはは話は気になるがとおお抑えるんだだ！そのざざ斬馬刀をおお置くんだ！！！」

ヤバイのは分かります、空さんの震え方からも、洒落では済まない事態に陥りましたね。

総員第一種戦闘配置ですよ！エヴァンゲリオン出動しますくらいですよ。

皆、保さんの結婚と子供というワイドショー的要素に盛り上がっていましたが、和さんのヤバさを失念してましたよ、危険度は大江山の酒吞童子並みですよ。

「この事態になること気づかず騒いだ牡丹が言うのもなんだけど、どうするのよ司ちゃん！和ちゃん保ちゃんが洛陽に行ったせいで会えないから会いに行く！と毎日言いだして大変で、その度に皆でおさえようと毎日が戦争で最近になってやっと落ち着いたのに！！！」

いやあ、私もうつかりでしたよ、和さんの保さんLOVE度合いを、“失敗、失敗、てへっ”流石にこれでは許されませんね、仕方がありません。

こうなったら僕が鎮圧に出陣しましょう、皆さんに見せてあげましょう私の本気を。

「側室なら許してやるとは思ったが、やはり保君のお嫁さんは私だ
ああ！！！！」

うん相変わらずぶっ壊れた発言しているなあ、和さん凄いやな保さん好き具合が。

そういえば、保さんは好みの女性のタイプがクールビューティータイプで普段の和さんで、

冗談抜きで付き合ってしまったばとか思っちゃうね、イカンやめておきましょう。

皇帝ネロとアグリッピナみたいになるのはさすがにまずいでしょうから。

保さんが暴走したら止められるような人間はいないんですから、

丁原さんがいれば泣いて収まりますが、都合よくいつもいるわけないですし。

とりあえず保君のいる洛陽に行こうとする和さんをスクラム組んで受け止めようとする皆。

すごいよ和さんがラグビー日本代表に入ったら日本がワールドカップ優勝するよ、

あの突進力はどうしようもないですよ止められないどころか吹き飛ばされていく。

単なる警備兵どころか馬騰隊、韓遂隊、親衛隊の最精鋭が相手にならない。

「つかさああ、相手の名前を言ええ、今から殺してくるから!!」
これはいけません、多分江東の虎でも駄目でしょうねえ殺されますよ。

仕方ない、重装歩兵に大盾持たせて円陣を組むように囲んでもらいましょう、

和さんと私だけの為に用意された特別戦闘会場を作りましょう。

いやあ、対峙しましたが凄まじい殺気です、殺気だけならば、下手したら今の保さんの最大値越えているんじゃないんですか？

だとしたら大陸最強ですよ、和さんが。

うん、楽しんで戦う敵としてはいいですねえ、桁外れの強さというのが、
ミスったらおしまいな強さ、危険さ桁外れですよ、いいねえ。

では、僕も本気でいかせてもらいましょう、あの日保さんと殺し合った時のように。

盾持って僕と和さんを囲う兵達が倒れそうになりながらも必死で耐えて立っています、
まあ、こんな至近距離で二人の殺気に耐えないといけないのですから。

「司君こんな強くなっているんだ、雷！今の司君じゃ琅？や雷じゃ敵わない強さに。」

「ああ、司様がこれほどとは、ワシ自身戦慣れしているはずだが震えが止まらんぞ。」

古兵である琅？さんや雷さんも驚いているようですね、僕の全力を見て、

僕の力は保さんと全力で殺し合ってまで磨きぬいた力ですから。

ブン！！！！

凄いな、あの巨大な斬馬刀を左手一本だけで斬り払いやがったよ、いつもみたいに鉄扇で受けたらはじかれて、武器が無くなりおしまいですね。

斬馬刀の弱点である間合いに思いっきり飛び込んで戦うしかないですかね、

とはいえ、キレた保さんのお母さんですし、この威圧感といい懷に飛び込めるかな。

とりあえず厄介ですよ、なんとか距離を取ってかわし続けましょう、しかし、この執務室という限られた狭い空間では避け続けるのはキツイですなあ。

とにかく避けるしかないですね円陣組ませている中ですからあまり派手には動けません、

でも、こうでもしないと城が壊されかねないので。

とにかく避けていたら攻撃がだんだん荒くなってきてます。

今ですかね、袈裟切りをかわしてと。

“今だ！” 隙が出来た懷に飛び込んで、武器を握る手を攻撃して斬馬刀を取り上げましょう。

グフツ。

隙が出来たのはやはり罠でしたか、確かにみえみえぽかったが飛び込もうとしたら、
近付いた瞬間にボディブローを、見事にくらってしまいました。

和さんは斬馬刀を離したと思ったら、両手での抜き手が僕の肋の下、横隔膜に突き刺さり、ヤバいと頭は思っているけど防げない状態です。

右の掌底でアッパーみたいにして顎に決められ浮かんだ僕の体を、左手でのど元を掴まれ地面にたたきつけられました。

駄目だ完璧に決まってしまった脳が揺れている完全に立てないです。
和さんに喉元に手刀を突き付けられた、まさか僕が相手にならないとは。

「殺されたくなければその泥棒猫の名前を吐け！」

ヤバい、これは殺られますね、喉笛かつ切られますね。

こうなったら、効く訳無いだろうけど、ごまかしてみるしかないか。

「保さんが言っておりましたお母様には婚約者を紹介したいが、まずはその前に普段仕事でお疲れのお母様を癒す為温泉に親子二人で行きませんか、と。」

いくらなんでもそんな戯言通じるわけないだろうな・・・、周りを見てみると、

琅？さんがそれは無理があるよ、という顔している、やはり駄目か。

「た、た、保君がそんな事を言っていたのね、お母さんと二人っきりで温泉なのね、ふふふたりっきりでおお温泉なのね、じゃあ、保が帰ってくるまでは仕事を頑張らないと。」

あ、あっさりと通じてしまったよ、いくらなんでもこんな苦しまぎれの嘘が通じるとは。

「保と夫婦水入らずで温泉でしっぽりとなんて、うふふふ」

和さん、保さんは貴女の息子さん、夫婦水入らずって！！

旦那さんである空さんが遠い目をして、仕方ないんだという感じで力なく首を振っていた。

洛陽にいる保さんごめん、とりあえず理想の女性のタイプなんだろ、今度会ったら説明するから和さんと温泉に行つて来てあげてください。

でも、これが悲劇の始まりだとはこの時の涼州の皆知る由もなかった・・・。

なんていうことがなければいいんですけどねえ。

第四十八話、涼州での司の苦勞（後書き）

保と和の親子の温泉旅行の話考えたが、
うん倫理的に問題が有るような話になってしまいそうです。

頑張れ保に司、家庭を得る為ならば覚悟は必要だぞと。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第四十九話、お願いですから正氣に戻ってください!! (前書き)

今回が洛陽編の最終回でございます。

司と保の掛け合いの回でございます。

今回はいつもよりちょっと短めです、

いつもが無駄に長すぎるんだけでしょうが。

第四十九話、お願いですから正氣に戻ってください!!

―司―

砂塵を巻き上げながら荒野を疾走している漆黒な二頭の巨大馬、そして、その背にまたがる二人の少年がいた、というか僕と保さんです。

バカラッバカラッバカラッ

「司君、内密に話がしたいというからわざわざ飛ばして皆から離れたがどうした？」

僕達二人の遙か後方に豆粒位のサイズで涼州の皆がいます。

遂に洛陽にいた人員の交代が始まりまして、今、保さん達と涼州に戻っている最中ですが、

その際に、ふと保さんに話ていない大事な事を思い出し内密に伝えようと。

内緒話なので周りに人がいない場所ということで少しだけ先行しました、

これくらい離れたならば聞かれることはないですし平気でしょう。

前回（第二十六話）みたいに、保さんが暴走して走りだしたら大惨事を迎えそうですが、

まあ、今回は平気でしょう、何の根拠もない平気でしょうですが。

「保さん、実は言うのを忘れていたんですが僕結婚しますの。」

はひっ！？という感じの顔していますね保さんが。

それはまあそうですねえ、紅さんと結婚するの保さん知ってますし、

だって、桃蓮さんや嵐さんとか保さんの奥さん候補に話しましたからねえ。

保さんだけでなく、僕と紅さんの関係は涼州で有名で時間の問題と思われてましたし。

「わざわざ報告しないでも知っているから、紅さんとの結婚はこの前教えてくれたやん、

まさかたんぽぽちゃんと婚約だけでなく結婚してペド軍師になるとか？ハハハ。」

ぐはっ、どれだけいい勘をしているんだ保さんは、ビンゴだよ。

ただ、ペド軍師になるわけではないですから、そこは否定しないといけません。

「当たりですよ、保さんムカつくくらい良い勘しすぎです。」

なんで分かるんですか、まったく保さんには敵いません、ただ、言わせてもらいますがペドではないですからね僕は。

「マジか！？隠さないでいいよ、よしア○ネスに通報だ！」

ヤメローー！あんなゴマの灰、もしくは道中師なんかを呼び出すなあゝ！！

鬼だ！保さん、隠さないでいいよと言いながらア○ネス呼び出そうって。

ちなみにここは外史だけどあれの先祖見つけて皆殺しにしておくべきか？

多分、狭い世界でだが英雄になれるかな？冗談はさておき。

「言っておきますが未成年に手を出したとなってアグ○スならば、僕達と関係をもった紅さんやら嵐さん、桃蓮さんアウトですよ。」

保さんがそれはまずいと気付きましたねえ、まったく頭良いのに・・・。

怖いのは保さんの無駄な交友録ならアグ○スなら知り合いにいそうなのが。

なんで携帯に総理大臣、ダチョウ倶楽部、金メダリストとか普通に登録されているの？

あんなうさんくさい携帯電話見たことないですよ、何処であの交友録が。

保さんの携帯電話という妙な物の話はおいておきましょう。

まずは否定しておきましょうペドについては。

「ペドではないですから!! 最近ムカつく事に小さい子を持つ親が僕を見ると、子供が危ないと隠そうとするのが、無礼討ちにしようと思度思ったか。」

保さんが踰輝の背中の上で転げ回らんばかりに大笑いしている、そんな面白いか。

うわゝ、大親友であるとはいえ、ぶっ殺してやりたくなるは。

とはいえ、保さんとやりあったら勝てなそうだし。

「よし、司君、月に近づいちゃ駄目だからね!!」

保さんが凄く良い笑顔でふざけた事を抜かしやがった。

殺す! 確実に殺す! 殺して死体を切り刻んで手でこねてこねてハンバーグにして、びっくりド○キーみたいな店で売り出してやる! 材料きいて皆ビツクリと。

まっ、そんな事しませんがその代わりあとで大ダメージ与える攻撃をやってやる。

保さんが一頻り笑ったあと僕に話の続きをしろと手で合図する。

「紅さんとの結婚の話が琅？さんに漏れて、婚約者で差があるなんてないよね？」と。」

なるほどねえ、という感じで納得している模様な保さん、でも、保さんも大丈夫なのか？翠ちゃんの婚約者であるのに。

「うちはまだ結婚云々の話はしていないから平気だろ。」

甘い、なんて未来の見通しが甘いんだ保さん。

甘すぎます、ガムシロップに蜂蜜ぶちこんで煮詰める位甘い！

もしくは、インド料理屋で出てくるインドのドーナツ“グラブジャムン”並みに甘い。

地雷原でタップダンスする位危険ですぞ、最悪の想定をしていないのは……。

でも保さんが余裕になるのも分かりますよ、琅？さんに手をうって、翠ちゃんとの婚約は将来翠ちゃんの了承次第と約束取り付けているのが。

抜け目無さすぎです、仲間内での遊びでも普通にサマ仕込んだりするし。

「保さん、すまない、貴方に謝りたいことがある。」

この会話の流れで僕が謝るという事態に危険を察知し顔色が変わる保さん。

滝のような汗流していますね、想定外の事態が発生したと気付いたようで。

多分ですがバイオハザードでラクーンシティにTウイルス流出した、と聞いたアンブレラ社幹部ってこんな感じの顔していたんでは？って顔です。

分かり難い！？

とりあえず怒れる保さんならば片手でタイラント位退治しそうです。

僕ですか？僕はゾンビと戦うなんて野蛮な事は嫌いですから、面白いだろうとウィルスをもっと進化させたりして事態を悪化させるくらいで。

バイオハザードとかのどうでもいい話は置いておきましょう。

「この前、朝議の際にうっかりで保さんも二人の嫁を持つ予定で、更に子持ちになりますから、もうすぐおばあちゃんですよと和さんに伝えちゃった。」

まあ、うっかりではなく思いっきり狙いすましてばらしたんですが。

「明らかにうっかりではなくばらす気でばらしたね、司君！」

やばい、保さんが怒りだしそうです、まずいです、
目がまったく笑っていないですよ、本当にまずい。

「まあ、キレるのはちょっと待ってください、その後があるので。」

とりあえず一連の流れを説明する事にしましたよ。

保さんの良いところは弁解の余地をくれるというか、
話をちゃんと聞いてくれるのがヒステリックに怒って説明できない
なんてなく。

まあ、その弁解がふざけた内容だと雷どころではないですが・・・。

この前、和さんが保さんの結婚と聞いてブチギレて大暴れ、
和さんは相手の名前を知らないがとにかく殺すと、竜巻みたいな暴
れ具合で。

涼州の精鋭が止めに入るが怒れる和さんでは相手にならず、
ならばしかたないと僕が出陣するも、本気でいったがまさか秒殺さ
れたと。

私が秒殺されたと聞いて保さんが驚愕の表情を、まあそうでしょう
ね、

僕に勝てる人間はうぬぼれ抜きで大陸では今や保さんだけなのに。

首に手刀を当てられその嫁を誰か吐け、吐かなければ殺すとなり、このままではまずいと最終手段だと嘘で勝負に出たんです。

保さんが“普段仕事で疲れている和さんに日頃の感謝の為、洛陽から帰ったら二人っきりで温泉で行こう”と言ってた。

そしたら先程まで大暴れしていた和さんと異なり、急に落ち着いて終息したと。

ただし、その際に和さんが「夫婦水入らずでしっぽりと・・・」といった感じで恐ろしい事を口走っていて、空さんは諦めムードと。

僕が一連の騒動を伝え終わると腕組みしながら話を聞いていた保さんが

「司も大変だったな、仕方ないよテンパってそうなるのも、まあ、遅かれ早かれ嫁さんの事は涼州に戻ったら話すつもりだったし。」

あれっ！？保さんが優しい、まったく怒っていなさそう。

「司、お前の辛さとか理解してなくて、迷惑かけてすまない。」

保さんが僕に向かって深々と頭を下げてきた、いやいやいや、保さんに殺されかけるよりは謝ってもらった方がいいですが、今回の騒動で主犯は僕で保さんは悪くないんですから。

それにしても、なんか話がおかしな方にいきそうなのは僕の気のせいだろうか？

「司君がわざわざ私のためにお膳立てしてくれるなんて、期待に応えないとな。」

うん？

明らかに保さんが変な事を言っているようだが、なんなんだ？
もしかして、もしかしてか？ いや、そんなわけないよな・・・。

「今までのように母上ではなく、和と耳元で囁いてあげればいいのか？

私も今までのように母上の息子ではなく一人の男として・・・。」

保さ～～～ん、そこは駄目だ、修羅の道を歩み過ぎだ～～！！！！
いくらなんでも駄目だって、皇帝ネロとアグリッピナじゃないんだから！

どうしよう保さんがいろんな意味で遠くに旅立ってしまった・・・。

こうなったら保さんには悪いが荒療治しかない！

テレビが壊れたら右斜め上45度からチョップすればいいように、
壊れた保さんにも何かしら斜め上の発想的な一撃を与えないと。

何がいいんだ？アキレスならば踵へ、ミノタウロスならばテーセウスの一撃みたいな。

保さんにはやはりこれしかないか、ただ効果がでかすぎるかもしれないが。

こうなったらやむを得ない。

「保さ〜ん、妄想するのもいいですが、その前に月ちゃんの伝言を。」

月ちゃんと言ったらピクツと一瞬だが反応したぞチャンスだ。

「保さん、僕が涼州に戻った際に月ちゃんに言われた事伝えますね。」

さあ、この言葉を聞いて衝撃を受けて目を覚ましてください、僕は壊れた保さんなんかを見たくないのですから。

「半年で帰ってくる約束だったのに嘘つきなお兄様なんか大嫌いです。」と

あれっ？「月ちゃん大好き！将来はお嫁さんに」なんて言う保さんが普通だ、こんな事を言われた保さんならば、頭をかきむしり叫び出すくらいしかねないのに。

いやっ、違う、体が微妙にだが震えていますよ、

必死で月ちゃんのお兄様なんか嫌いという言葉に耐えていますね。

「詠ちゃんが“月を悲しませるなんて許せない”恋ちゃんが“誰？敵”と。」

恋ちゃん存在を忘れていて敵発言もダメージでかかったですよ、僕が半年越えていたとはいえ一旦帰ったから良いが、保さんは年ぶりですからねえ。

グフツ ドサツ

保さんの方から変な音聞こえたから見てみたら大量に血吐いて落馬している！

保さんアカーーーーー！！！！！！！！！！

急いで挟翼から飛び降りて、血に伏している保さんに近づく。

「保さん大丈夫か!？」

吐血具合がヤバいだろ、胸元とか血で真っ赤に染まりきっているよ、この吐血具合は食道破れた時とか食道癌の末期で死ぬ時の状態だろう。

保さんいくらなんでもヤバいだろ。

「俺はもう駄目だ、兄は世界で一番月を愛していた、とだけ伝えてくれ・・・パタッ」

[illegible]

— 桜花 —

司さんが保さんに内密な話があると先に行ってしまいました、少し行った先で二人が馬から降りて止まっていたから何かと思って近付いてみると。

い、い、い、一体何が有ったのでしょうか……。

保さんが血を吐いて倒れていて、まだなんとか死んではいないようですが、
事切れているみたいになっていて、司さんがそんな保さんを抱きしめて泣いているって。

本当に何があったんでしょうか？

後から更に百合さんや梅花ちゃんとか皆が集まってきた、あまりの事態に騒然となる皆。

「王子様に何が有ったんだー！！！！目を覚ましてくれよ！！」

嵐さんが倒れている保さんを見て号泣して、司さんを払いのけ保さんを抱きしめていますよ。

「嵐さん、愛していたよ……。」

こんな悲しい告白はあったでしょうか。

でも梅花ちゃんだけがなんともないかのように落ち着いているのはどうして？

「此処で死ぬと可愛い妹さんに会えなくなりますよ。」

梅花ちゃん貴女はこんな時に何を言っているの？

梅花ちゃんが保さんに話した瞬間に。

「月に会えないなんて駄目だ、嫌われようが俺は生きないといけない！！！！！！！！」

死ぬかも位だったのが急に飛び上がり立ち上がって元気になっているって。

皆ポカーンとしています、何故あれ程血を吐いた人間があっさり復活出来るんですか。

菊花お父さん、梅花ちゃん、鳳仙花ちゃん、司馬家は皆董家に仕える事になりましたが、
本当にこのまま董家に仕えていて大丈夫なのでしょうか・・・？

第四十九話、お願いですから正氣に戻ってください！！（後書き）

第二章洛陽暴走編は今回が最終回でございます、

さて、原作虫の大暴走恋姫、益州、孫家はどうなりますでしょうか？

ちなみに保の携帯電話ネタは、司君のモデルになった友人の携帯です、

どうしてこんな謎な交友録が出来あがるのでしょうかねえ、謎です？

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第五十話、頭痛に悩まされる董家筆頭軍師（前書き）

今回は董家で振り回され苦勞する苦勞人、空の話であります。

先に宣言しますが、相変わらずご都合主義で目茶苦茶な話ですので。

第五十話、頭痛に悩まされる董家筆頭軍師

一空一

お久しぶりです、こうやって出番迎えたのはどれくらいぶりでしょうか？

保の父親であります池陽君こと空です、久しぶりの出番をありがとうございます、

等とは言えません、出番が無くてもいいから平穩を下さい。

頭が痛い事ばかりでして・・・。

保達が洛陽から戻ってきて、これから益州へ移動する準備の日々を迎えるのですが、

今のうちにと司君と紅さんが華燭之典（結婚式）を挙げる事になりました。

ただ、その翌日に司君は姪のたんぽぽちゃんとも華燭之典を挙げるというのが。

琅？幾らなんでも無茶が過ぎる15歳の新郎に6歳の新婦は・・・。

司君がまだ何処かの王で、たんぽぽちゃんが負けた国の王女とかならば、

恭順の意味で嫁入りさせるのも分かるが、琅？もなにも六歳の姪を

縁組させないでも。

琅？は何を焦っている？「娘と姪が行き遅れにならないように」とか言っているが、
幾らなんでも心配し過ぎなのではないだろうか？

翠ちゃんもたんぽちゃんも可愛いですよ、しかも子供だから可愛いというのではなく、
将来は更に可愛くなるでしょう、更に涼州牧馬騰の親族という価値も有るのに。

それほどなのに、なんで今の段階で縁組を急がせるのでしょうか・
・？

まあ、司君の結婚とか、関係無い事考えて現実逃避をするのはやめておきましょう。

まずは頭痛の種の一つである人材登用について考えてみましょう。

保達が優秀だから登用したと洛陽から連れて来たという司馬親子、洛陽にいる友人から司馬一族という優秀なのがいると前に聞いた話の話題の人物とは。

元々保と司君の計画では司馬家全員を登用するということだったが、運良く？運悪く？長女の司馬朗が攫われていたから救出したのをきっかけで登用したと。

保や司君が言うには一族全員鍛えれば州牧や優秀な軍師になれる宝

石の原石ばかりと、
保達の言う事に間違いは今まで無かったが、本当なのであろうか？
と疑ってしまいます。

父親である司馬防さんは役人歴も長く優秀なのもまだわかるが、
その娘達である司馬朗ちゃん、司馬懿ちゃんとかはまだ保達と大し
て変わらない歳ですし。

どうすれば保や司君はそんな事が分かるのだろうか？

確かにまあ話をしてみたり試験を受けさせてみたら大器の片鱗が見
えましたが。

判断材料は、前に保が私や和とかだけに教えてくれた秘密である前
世の記憶でしょうか？

もしそうだとすると、それだけで保達が採用するなんて事はあるのだ
ろうか。

保も司君も武将でありながら軍師であり、物事を徹底的に疑ってみ
て、

色々な可能性を常に考慮する人間であるから記憶だけで採用はしな
いでしょうが。

でも、どこまであの二人は分かっているのだろうか、不安です。

しかも、その不安は私だけでなく採用された司馬朗ちゃん当人もあ
り。

「才能を買ってくれるのは良いんですが、本当に未熟な私なんかでいいのですか？」

と申し訳なさそうに言ってきたくらいですから。

ただまあ、紅さん、芍薬さん、牡丹さんとか採用した時も、採用された本人達よりも、保や司君の方がその人間の事を理解していたし間違いはないのでしようが。

ただ、やはり私は軍師として色々な可能性も考えないといけないですし、

保や司君のやる事を無条件でめくら判つくわけにはいかないのですし、不安です。

あと更に保が言っていたのが、洛陽に睨まれていて評価されない有能な人物登用で、洛陽県令の周異という人物も太守候補でこちらに派遣してもらいうようになっていると。

県丞の孫堅殿といい、県令の周異殿といい、普通に登用すると話しているが、どうすれば既に地位のある人間を当たり前のように引っ張ってこれるのでしょうか？

保は笑顔で「何進大將軍を味方に引き込んだから大抵の事は可能です。」

とサラッと普通に話しているのが、大將軍を引き込むって理解が追いつきません。

洛陽攻略で何進大將軍に賄賂などでそれなりに協力させるとは言っていたましたが、

まさか、好き勝手やらせてもらえる程の協力を得られるなんて・・・。

自画自賛になってしまいましたが優秀な董家、それとは対照的に大將軍は妹のおかげの出世。

ただ董家は一州牧に過ぎず地位としてはまったく大將軍に敵わないのに保がいうには仲間と。

更に司君が言うには、大將軍の敵対勢力である十常侍の中心である張讓、趙忠も、利益をある程度渡す事で利用しているだけでなく、いずれ涼州無しでは生きられなくなると。

一体司君は何をやったのでしょうか？

司君がそう言いながら含み笑いをしたことからろくでもない謀略なのでしょうが。

二人はどうすれば私からしても天上人みたいな人間を利用する事が出来るのでしょうか。

駄目だ、色々考える度に頭痛が酷くなってきました。

ただ、今一番私の頭痛を酷くさせるのは人材登用でなく、保の恋人についてで。

「司が、華燭之典をあげる際に将来の仲間として式に招待したいと言っていたし、

私も早いうちに父上、母上に将来の妻として紹介したいから。」

と言って、涼州に保の嫁としてやってきた女性なのですが・・・。

お父さんは今まで保に好きにやらせてきましたし、貴方のやることに間違いはなく、
そんな貴方が選ぶ女性ですから金目当てだとか変な人はいないでしょう。

保は「私の説明よりも実際に皆さんに会ってもらった方が早いですが、」

と細かい説明を全くしてくれませんでしたね、

とりあえず司君が前に喋った件で子持ちというのは知ってましたが。

でも、実際会ってみまして今回は驚かされ過ぎました。

保、貴方の親と言ってもおかしくないくらいの年上の女性を連れて来るとは。

しかも、子供は小さいのかと思ったら、保、貴方とほぼ歳が変わらないというのが。

結婚を前提に付き合っていると云ってましたが、もし今結婚したならば、

新郎が15歳、新婦が28歳、娘が12歳と9歳、どんな家庭ですか!?

驚かされてばかりですよ、司馬家について教えてくれた昔馴染みの友人から、

“孫堅と言う若い将来性のある面白いのがいる、後ろ盾が無いから引つ張りやすいかも”

と聞いた、まさか、その話題の孫堅当人が保の妻としてやってくるとは・・・。

保、貴方はどうやって知りあって? どうやって口説き落としたんですか?

どうすればそんな事が出来るのですか? 相変わらず息子である貴方が分かりません。

しかも、この孫堅さんは保や司君が言うには、

単に保の妻と言うだけではなく、益州統治の際の太守候補の一人でもあると。

優秀だとは人伝に聞きましたがどれ程の人物なのか私達は知りませんし、

私達への細かい説明無しですよ、そんな女性を太守候補と言われている。

大体、県丞から太守って、何段飛ばしで出世させる気ですか!?

保からの話を聞いたびにいろいろと頭が痛くなってきました。

とりあえずそういったもろもろの事についてなど保と孫堅さん当人に説明されましたが、

説明が衝撃的なもあり私は頭がこんがらがってしまいました。

これではいけないので、内容を整理してみました。

・呉郡の出身で親の後を継いだ訳でなく実力だけで若くして会稽の県丞。

・地元での二つ名が“江東の虎”と呼ばれる程勇猛果敢な武将。

・保と司君曰く、将来の益州内の郡太守最有力候補として誘った一人。

・保が今、結婚を前提でお付き合いしている。

・二人の子持ちで長女が12歳で、次女が9歳。

・二人の知り合った馴れ初めが、保が人材登用の為に突然会いに行つて、

太守にしたいと誘って、戦う事になり倒して、そのまま男女の関係になった。

整理しましたよ、要点を箇条書きにしてみました。

確認すれば確認するだけ強烈な頭痛がしてくるのは気のせいでしょうか……。

どうやら私だけではなく、薊も琅？も雷も涼州三人娘達も頭を押さえていました。

「保君は私達よりも何倍も頭が良いし、凡人では天才を理解できない物だから仕方ないね。」

琅？、悪いが少し黙ってくれないかと、貴女の言っている事も少しは分かるが、ただそれで納得する事が出来ない、仕方ないで済ませるなんて出来ないでしょうが。

「保様はそこいらの人間とは違うと思っていました、いやはや、まさかこんな美人を惚れさせるとは実に凄いのう、儂も見習わないと。」

雷も変な事を言わないでくれ、お願いだから見習わないでくれ。

それにしても容姿は二の次と言っていた保がこれほどの美人を連れて来るとは。

「美人もブスも顔の皮を一枚剥けば筋肉だけで大して変わらず、容姿なんてその程度、

更に美人なんて三日で飽きるだけ、それならば性格や価値観が合う人間でない」と。

なんて言っていた保がこの女性に惚れ込むとは、よほど魅力的なのだろうか？

恋は盲目などと言いますし、もしかしたらと思い不安なので話をしてみました。

私の懸念は外れました、相当の好人物であり、頭の回転速く武も噂以上の実力者、しかも、さっぱりした性格で誰からも好かれやすい魅力的な人間でしたよ。

とはいえ、何故彼女、孫堅さんなのでしょう？

10歳以上年上で子持ちで、普通の親ならば結婚に反対する条件ばかりなのに。

保の結婚に関してで、まだ嵐さんを紹介してきたのは分かりますよ。

嵐さんはちょっと馬鹿で粗暴です、でも憎めないお馬鹿さんで保君に着くす姿といい、

それに洛陽に旅立つ前から二人が付き合っているのは分かっていますし。

保はいずれ私達の後を継いで州牧となりますし、正妻だけでなく側室もとなるでしょう、

ですが、まだ15歳なのいきなり二人も妻を娶る予定だと言ってくるなんてねえ。

遊びで女性といたずらに関係を持つのではなく、

きちんと結婚を考えるのはいい事ですが、いきなりすぎないかと。

私は息子の教育を間違えたのだろうか？と頭を悩ましましたよ。

それにしましても、これらの騒動に関して一番驚いたのが、保が恋人を連れて来たが私の妻で、保の母である和が落ち着いている事が。

夫である私としては信じられません、今まで散々やらしてきた人間だとは思えません。

実際、司君が保が妻を連れて来ると言った時の荒れ狂い方とか凄まじかったですし。

和は結婚に反対するだけでなく二人に襲いかかる位してもおかしくないはずですが。

ですが、嵐さんと孫堅さんが保と付き合うようになるまでの馴れ初めを聞いているくらいで、

襲いかかるどころか大変おとなしくしていて二人の嫁候補を見つめているのが。

結婚の事で和が猛反対すると思っていた嵐さんも孫堅さんの二人も、

「お二人とも保をよろしくお願いします妻として保を支えてあげてください」

と言った和の台詞を驚いた顔で聞いておりました。

一番驚いたのは普段から和と一緒にいて、保への愛で暴走する姿を見ている私ですが。

保が事前の説得で和にどうやって理解させ納得させたのでしょうか？全く分かりません。

涼州に帰って来た直後に保が和と結婚の事で誰にも邪魔をされず話をしたい、

と言って二人で休暇を取り一緒に旅行に行ってその時に説得しきったようですが。

本当にどうすればこんなに和の態度が変わるのでしょうか分かりません。

「私がどれだけ二人を真剣に愛しているか、覚悟を決めているか話していただけです。」

と保が言っていました、保の説得だけでどうにかなるのでしょうか？

和が反対をしないで認め、保も真剣というのなら私が反対するわけにもいきませんし、

それに嵐さんも孫堅さんも人柄としては問題が無く信用できる人間ですから許すしかないと。

でもやはり納得いかないですね、結婚についてではなく和についてですが。

こんなにあっさりと和が、保の結婚に着いて理解を示し納得してくれると、

今まで散々保の事で暴れて来たのは一体何だったのか？と思えてしまつて。

本当に何があったのでしょうか気になつて仕方が無いです。

「越えてはいないか、とはいえ不安だ……。」
と保を見ながら司君が言っていた独り言がやけに気になつてしまつたのですが。

はあ、人材登用といい、結婚の件といい頭が痛い事ばかりですよ、また医者に頼んで頭痛薬を処方してもらわないといけませんですよ、こまつたものです。

第五十話、頭痛に悩まされる董家筆頭軍師（後書き）

とりあえず、董家と孫家の縁戚関係成立させてみました、反董卓連合が出来ても叩き潰す準備が着々と進んでおります。

さて、今後董家はどのようなのでしょうか。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第五十一話、若き紫苑や巖顔次期太守とお話を（前書き）

昨日は友人から高級な中華料理店に招待されて、少し早いですが誕生日を祝ってもらいました。

気づいたら紹興酒、白酒でベロンベロンで今日は二日酔いでした。

うなされながら朝起きて最初に思ったのが、

“ 桔梗なら二日酔いどころか普通に朝から飲んでいるんだろうな ”

朝から自分の思考が本当に駄目なんだなあと反省しました。

第五十一話、若き紫苑や嚴顔次期太守とお話を

一司一

此処は涼州から遠く離れました益州の州都である成都、その成都の中心部にあるとある高級料理店の個室です。

涼州から僕と保さん、嵐さん、空さん、桜花さん、梅花さん、桃蓮さん、

牡丹さんの8名が遠路はるばると成都くんだりまでやってきました。まあ、もうすぐ益州牧になりまして、皆成都住まいになりますからいいんですが。

席に着いてお客様が来るのを待っておりますと、待ち合わせの時間よりも少し早く、

今回招待した黄忠さん、嚴顔さん、張任さんの益州の若き幹部の3人が。

更に洛陽県令であつた周異さんも来てくれました、合わせて4名の人間を迎えております。

「皆さん、本日はお忙しい中貴重なお時間を割いて頂きありがとうございます。」「

空さんがお客様である4名に対して深々と頭を下げる。

お客様を席に案内し、まずは乾杯しまして食事会が始まりました。

「今日は皆さんにご招待いただきましたが一体どういった要件なのでしょうか？」

紫色のストレートな髪、ピンクの胸元が開いたチャイナドレスの女性が口火を切りましたね。

胸元だけでなくスリットも凄いですねえ、チャイナドレスのスリットは馬に乗る為にあった、

とか関係なくエロいですねえデザインが、このデザインした人間はまったく分かっておりません。

ここまではっきり見せるのではなく、もしかしたら太ももが見えるか？

くらいのチラリズムが大事であって、見えてしまつては駄目なのに。って、此処で熱弁をふるってはいけませんねえ、仕事に集中しましょう。

それにしてもなんとという戦闘^{おっばい}力でしょうか、これは、保さんの奥さんである桃蓮さん超えですか？見事で、人類の宝とも表現をしましょうか。

仕事に集中できていませんでしたね、おっぱいに反応してしまうなんて、

とはいえ、あの胸は一体どれほどのサイズが有るのでしょうか？見ただけでは分かりません。

落語家立川談慶師匠みたいに僕が元ワコール社員でブラジャー担当していたら、
メジャーで測る事無く一目見れば〇〇cmの〇カップなんて分かったんでしょが。

「今日は益州牧で着任いたします董君雅の代理としまして、皆様への事前のご挨拶でと。」

保さんが話を進めてくれるようですね、まあ、ここはやはり、益州牧代理の空さんと保さんが話を進めるべきですね。

「申し遅れました益州牧董君雅代理であり長子の董擢孟高と申します。」

保さんが笑顔を見せながら自己紹介しましたね。

仕事モードはいつておりますねえ、おっぱいには一切興味が無いようですね、

実際、胸のサイズを気にするような人ではないですからねえ保さんは。

それに僕も保さんも仕事モードに入るとポーカーフェイスですから、興味があってもさも興味無いような表情をして自然に隠し通すでしょうが。

ただ保さんのお父さんの空さんは目のやり場に困っているようではあります。

「当主代理と申したがお主ずいぶん若いのじゃな。」

これまた見事なおっぱい、うん、人類の宝というべき女性が口を開きましたね。

フリーザの戦闘力ではないですが、53万とか言い出しそうなご立派な物が。

ですから、僕も胸に興味を持つのは抑えましょう、これではまるで僕がおっぱい星人、

と言う事になってしまいますので、僕も女性を胸に関係なく平等に愛する人間です。

ちょっと人と違うのは僕の場合女性だけでなく男性でも平等に愛せてしまうのが、ふふ。

歳の頃ならば23、4歳くらいでしょうかねえ？

少しウェーブのかかったグレーの髪を簪を使って束ねていますね。

服装は先程の方の服と同じようにチャイナドレスですが、こちらは胸元が開いているではなく、

肩の部分とか全くなくチューブトップみたいになっていますね、

おかげで、そのご立派な物の上半分がしっかり見えております、眼福眼福。

頭の中は常にでっかいおっぱいな飢えた童貞中学生だったならば、当分の間白飯のみで頑張れるおかずになったでしょうなあ・・・。

仕事中に僕は何を考えているのでしょうか、真面目にしないといけ

ませんね。

「董家は才能ある者にたいしては年齢や出自等一切問わないで役職を与えますので。」

いつもの保さんならばもっと謙遜しているのでしょうか今日はストレートですね、

まあ、こちらがどんな人間か知ってもらうには良いですね、その方が。

「ほう、という事は自分は優秀であると公言なさっているというところでよろしいのかな。」

洛陽県令から栄転という形で引張る周異さんが興味深げに保さんを見ております。

黒神ロン毛で臙脂色のお腹を冷やして女性にはあまりよくなさそうなドレス、

それで、これまた益州勢力に負けない立派な物をお持ちで、見事です。

嵐さんが劣等感にさいなまれそうだな、先の二人といい周異さんと己を比べて。

こういう事は冗談でも思っではいけませんね、後々、つい油断してぼろりと本音、

それで怒った嵐さんに蜻蛉切りでグサリ、ウギヤーという流れは避けたいので。

「優秀かと問われましたら素直にハイと答えますね、まあ、私だけでなく、
そこにいる李儒、司馬朗、司馬懿と皆優秀で軍師を勤めていますので。」

保さんが僕や桜花さん、梅花さんを紹介する。

名前を呼ばれた桜花さんはそんなこと無いですと謙遜するように首を横に振り、
梅花さんは桜花さんが否定する様を見て更にそれを否定しているという感じで横に振る。

僕は、まあ意味深な感じで軽くフフフと微笑んでいましょう。

「とりあえず招待を受けた我々だけでなく、招待して下さった方々、
皆見知らぬ者ばかりで、そちらの方、こちらの方では話辛いでしょ
うし、
自己紹介をしませんか？招待を受けた側である私が話を振るのも変
ですが。」

そう言って緑色の髪の毛のボヘミアンボブと言うんでしたっけ？そんな
髪型で、
白地に鳳凰の刺繍の入ったチャイナドレス姿のこれまた美人が話を
してくる。

この方のドレスは胸元が開いてはいませんが、逆にそのおかげでエ
ロさ爆発です、

くつきりと表れるボディラインが凄まじいです。

なんでしょうか益州は空気や食とかに巨乳化させる要素があるので
しょうかねえ？

最初に話をした紫の髪の方が三国志では老将であった黄忠さんです
か、
グレーの髪の人が厳顔さん、そして自己紹介をと言ってきた方が張
任さんですか。

とりあえずこちらでも自己紹介をしましょう。

自己紹介後、保さんが話を進めております。

「今回、この宴席にいる人間で涼州組の人間でない方、孫堅さん、
周異さん、
張任さん、黄忠さん、厳顔さんの5名に伝える事が有りまして。」

孫堅さんは前もって話をしておりますし、周異さんは洛陽から太守
に任命すると、
ただ、他の三人は太守にしますという話をどう受け取りますかねえ、
まあ驚くでしょう。

「伝える事とは一体どういった事でしょうか？」

黄忠さんは保さんが何を言うか分からないようですね。

まあ、初対面で分かったら気持ち悪いです。

それに太守にするなんて言っても信じないでしょうね、三人はまだ県令にすらなっていないのですから。

「簡単な事です、五人の方々には董君雅が益州牧になった際、各郡の太守として董君雅を支えてほしいというだけの話です。」

保さんが用件を伝えましたねえ、桃蓮さん、周異さん以外のお三方は驚いていますねえ。

「今、私達を太守にと申されたのですか？」

どうやら三人の中でのリーダー格と思われる張任さんが尋ねてきましたね。

「ええ、そうですね、予定としましては董君雅が益州牧に就任してからですが、

予定としましては就任の三ヶ月後には太守になっていたかどうかと、それまでは董君雅の元で太守になる為の政務等を学んでいたく事になります。」

州牧就任してすぐとはさすがにいきませんからねえ、

まあ、こちらの5人には大変でしょうが三カ月の間にスパルタで教え込みますよ。

「太守も何も私や、ききよ、嚴顔、黄忠はまだ県丞程度でしかなく、いきなり太守などと言われましても、それに・・・」そこは細かく説明しましょう」・・・」

保さんが一々疑問に答えるのも大変だからでしょうね、話を遮って説明をする事に。

三カ月と期間を切ったのは、就任から三カ月をめどに今いる益州の無能な、

または脛に傷を持つ太守等をまとめて大掃除する期間であること。

そこで空席になる巴郡などの太守に5人を据えるという事、5人を選んだ理由は、有能という点から採用と決めたと。

「太守という話ありがたいが、紫苑、今いる連中がそうやすやすと排除されると思うか？」

「皆問題がありますが、桔梗が言ったようにそんなに隙は無いかと思われませんが。」

紫苑が黄忠さんの、桔梗というのが嚴顔さんの真名のようなですね。

「クフフフ」

僕と保さんが、ついそこ意地悪い感じで笑ってしまい、そんな二人を桃蓮さんや桜花さんが“僕達が性格悪い”と抗議するような眼つきで見て来る

「桜花さん、あれを、どれでもいいのでどれか一つ皆さんに見せてあげてください。」

保さんに呼ばれた桜花さんがいくつかある竹簡の中から一つ適当に抜いて、

三人の目の前に広げることにする、それを見て驚いた顔する三人。

いや、益州の人間ではないが、周異さん、桃蓮さんも読んで驚いているようですね。

それはそうですね、いま5人が見ている竹簡は益州にいる、とある太守の名前、家族構成、趣味、また汚職や横領といった罪状等個人情報事細かに記されているのですから。

「今の段階で既に処罰できるようになっております、ただ、猶予期間と申しましょうか、董君雅様が就任してから更生した者に猶予を、それで見極めと準備に三カ月と。」

今度は僕が説明をしてあげましょう、涼州は、いや僕と保さんは昨日今日ではなく、5年以上前から益州だけでなく周辺の土地の役人達を徹底的に調べ上げているのですから。

「また既存のどうしようもない太守の処罰に関して、そして、更に、皆様方の郡太守への任命に関する権限も、洛陽に一任されておりますので。」

そう言って、保さんが桃蓮さんに見せて驚かせたという、霊帝の勅命も見せる。

「これでお分かりいただけましたでしょうか？」

保さんが笑顔で太守候補の5名に伝えているが、この笑顔って怖いよ、

こちらはお前らの事は分かっているんだぞと脅しているんですから。

「洛陽の県令をやっていた私にいきなり益州内で太守になれと勅命が来た時は驚いたが、このような物を用意しているとは、底の見えない怖さ、それを見せつけられるとは。」

周異さんが空さんや保さんを見ながら呆れ半分という感じですか？言ってきました、

まあ、これだけ根回しの良さを見せつけられると呆れるのも仕方ないでしょうね。

「私達をいつでもどうにでも出来ると脅すのですか？」

張任さんはこちらの事を思いっきりいぶかしんだ目で見てきますねえ、

まあ当たり前ですよ、普通に脅迫しているんですから僕達は。

「ご安心を、益州の風通しを良くするだけですから、それに、貴女方はどうにかできるような傷を持たない清廉な人物と分かっていますから、まあ、清廉であつたため汚れた人間に疎まれ、益州では出世し辛かつたようですが。」

有能で清廉なんて人間は出世させたくないですからねえ、お邪魔虫ですから、
今の地方の軍閥の連中みたいに自分の懐を潤す事に必死な連中にとっては。

「私が前に孫堅さんに話をしたのですが、董家は服従など求めています、
私達の盟友になってほしいだけです、まあ盟友でなくてもかまいませんよ、
私達を利用してください、今後自分達が更に出世する為の手段として。」

この時代に服従ではなく盟友になってくれなんて、言われた方は胡散臭く感じるでしょうな。

ただ、保さんの言う言葉に嘘はないですからねえ、服従なんか要りませんよ、
保さんも僕も皇帝とか独裁者になりたいわけではないのですから。

「私達の言葉が信じられないというのなら三カ月の間に董家を見極めてください、
それで問題無いと思ったらよろしくお願いします、もし、董家が駄目だ、
または肌に合わなかったと思ったのならば言うってください、何処に行かれても良いです、
今後の為に他州で太守になれるよう洛陽に連絡をいれますので。」

これまた皆さん驚いているようですねえ、僕達からしたら有能でも

価値観が合わないなら、お互いに損ですから、無理矢理いてもらわないで出て行ってもらった方がいいですから。

まあ、僕達の事を思っけて口うるさく注意してくるとか、そういうありがたい人間ならば、出て行こうとしても保さんや僕が必死で引き留めますが。

「周異さんのように軍師の性としてつい疑ってしまふならば、しっかり疑ってください、張任さんの探し求めていた仕えがいのある主君だと思いますよ、母上、董君雅は。」

気に入って頂けるでしょうねえ、忠義の士である張任さんならば和さんや保さんならば。

「ついですが、もし皆様の知り合いで有能なんだが真面目すぎて上に睨まれ出世出来ない、とか、若いからというだけで評価されてない等で推薦したい人間がいたら教えて下さい、董家は出自、年齢等下らない事は一切問いませんので、僕みたいな人間がいるくらいですし。」

あらっ？保さんの発言に対しほとんどの方が首を横に振っていますねえ。

僕や保さんは実に胡散臭いですから、名目は太守息子とかですが、公にしません生まれ変わりなんてねえ・・・、もっとも胡散臭

い経歴ですよ。

「堅い話はそれまでにしまして食事を楽しみながら色々楽しいお話をしましょう、

張任さん、嚴顔さん、黄忠さん、お酒をかなり嗜まれるようですね？浴びるほど飲んで頂いて構いませんよ、どうせ保さんの驕りなんですから。」

僕がそう言うのと保さんが僕の方を睨んできましたよ、保さんだけでなく桃蓮さんまで。

桃蓮さんが僕を睨んだ理由は保さんとは全く違う意味でしょうが。

「司、私も浴びるほど飲みたいんだけど私は駄目なの？」

やはりか、酒を好き勝手飲ませないことへの抗議ですか、まったく。

「桃蓮さんも好きだけ飲んでくださいよ、どうせ、僕でも涼州の税金でもなく、支払の全ては保さんなんですから、僕の懐は一銭も傷みませんしどうぞ。」

今日の話し合いをやりましょうと前もって計画したのは保さんですから、やはり言いだしっぺが支払いをキッチリやってもらわないといけませんよ。

「ただ桃蓮さんや嵐さんは自分が飲むより、必死にならないといけない仕事があるでしょ、

愛する旦那様である保さんに、二人とも妻なんですからお酌をしてあげないとね。」

僕の言葉に桃蓮さんニヤツとして、保さんにベタベタしながら酌を
しはじめて、

嵐さんが桃蓮さんに負けられないと同じく保さんに酌をしはじめて、
保さんは僕を何故だか知らないが睨んでくると、何故でしょうかね
え？

それにしても、周異さんも、益州のお三方も保さんが若いのに結婚
している事、
しかも、二人も妻を娶っている事に一番驚くなんて、太守にすると
いうよりも驚くとは。

ちょっと笑ってしまった、やはり女性にとっては結婚は特別な事な
んですねえ、

とか、そんな事をしみじみと思っていましたよ。

さて、これから益州の未来の太守の皆さま方とはやく打ちとけて、
董家の支配をより強固に出来るようにしましょうか、仕事熱心だな
あ僕は。

まあ何かというと酒を酌み交わすだけですが、酒飲みが理解し合う
には、

これが一番分かりやすいですしね。

益州の3人が桃蓮さんみたいな人だったら、この後戦いになるん
ですかね？

まあそんな事はないでしょうから、平気ですね、平気じゃないかな？
まあちよつとは覚悟しておきますか、さだまさしのようになりそう
だな、なんとなく。

第五十一話、若き紫苑や巖顔次期太守とお話を（後書き）

原作よりもだいぶ前の時期なので、

年齢の事を触れても矢が飛んでこない紫苑さん達でした。

話の展開が遅いですが、話が進んだら、

司が歳の事を言って矢で蜂の巣にされる絵が浮かんでしまいます。

読んでいただいた皆様のご意見、ご感想お待ちしております。

第五十二話、江東の虎の異変!?(前書き)

前回の話から二カ月弱ですが時間は少しだけキンクリしまして、既に涼州勢の主力が益州への移動を済ませた後の話であります。

第五十二話、江東の虎の異変!?

一司一

前話から少したちました益州に着任した董家ですが、まあ、順調に仕事をしております。

とは言いまでも、

益州の大掃除を終えない限りは出来ない仕事が多くそれなり程度です表の仕事は、その分優しい言い方でリストラ、本音は逮捕処刑する為の下準備という裏の仕事が忙しいです。

竹簡とかにまとめていますよ、処刑予定の愚か者達リストを作って、この竹簡を横文字で言うトデスノートになるのでしょうか？

ちなみに、このデスノートに名前が載っている益州の役人の中で、桃蓮さん達5人の太守候補からの幹部候補で推薦受けた人物が全くいなかったです。

というわけで、掲載された人間は皆仲良く斬首なり、吊るし首に、仲間はずれは無しといい事です、仲間はずれが無いなんてみんな仲良く揃ってと。

そうだ、吊るし首の判決を下すのならば、保さんにはあの台詞を言わせましょう、

「貴公の首は柱に吊るされるのがお似合いだ」と。

でもなあ、これを決め台詞っぽく言わせ続けたりしたら絞首刑王とか、

可哀想な二つ名がつきそうだな保さんに。

串刺し公に対抗できるしいじゃん、とかと思いますが、親友が、となると可哀想か。

それにしましても、和さんに頼んで行った政策の一つ、新しい州僕として就任した祝いで、

益州全部で税率を5%ほど下げるよう指示したが効果あり過ぎですよ。

まあ、各太守や県令達はその指示を一般には無かった事にして、いつも通り徴税、浮いた5%を懐に入れるのに必死で。

元々税率下げるつもりですが、馬鹿を見極める為にやったが効果あり過ぎ、

馬鹿共は僕達が仕掛けた罠に見事にかかっているな、こういう馬鹿はありがたいですよ。

君達は自分で自分の死刑執行命令書にサインしたというのが分からないとは……。

彼らを処罰する大義名分が出来ましたし、これで彼らの私財も没収できると、

それでその私財を民への還付、および公共事業の推進が出来ると笑

いが止まらない。

忙しいですよ、彼らの墓穴を掘る準備したり、ガサ入れがいつでも出来るようにしたり、差し押さえ出来る金額が幾らか計算したりやる事が有り過ぎて参りましたよ。

あと、今いるお馬鹿さん達だけでなく前任の刺史である卻俛も処罰しないと、益州での彼の悪政で涼州に散々迷惑をかけてくれましたからねえ、怨を返さないと。

江戸の敵を長崎で討つになりますが、馬鹿なリストラ候補太守とかと同じように、洛陽から彼の身柄を好きにしていのように許可を貰って処刑させていただかないと。

彼らは愚かでどうしようもないですが死ぬ前くらいは人の為に役に立ってもらわないと、民が血を望むならば与えてあげないといけませんから、餌役という立派な仕事を。

はあ、忙しくて仕方が無いですよ、まったくゆつくり謀略を練る暇がない。

更に、保さんと僕でこういった謀略の張り巡らし方や実行の仕方とか、

周異さんの娘である周瑜さんや、桜花さん、梅花さんとか軍師勢に教えないといけませんし。

体が何個あっても足りないですよ、医学校の創設もしないといけな
いですし、
神から貰った能力で異常な健康あるからいいが、無かったら過労死
しますよ本当に。

こんな事を思ったりしながら私室で書類仕事をしていると。

コンコン

ノック音が聞こえました、ただ此処はトイレではないから二回は間
違え、おいしい。

「入ってまーす。」

トイレで返事するように返事してみる。

「あっ、回数を間違えてしまいましたね、失礼しました。」

この妙に色っぽい喋りは益州のおっぱいお化けの一人紫苑さんです
ね。

紫苑さん、桔梗さん、張任さん達とは仕事で仲良くやらせてもらっ
ております、
リストラ候補達とは違い仕事に熱心で僕達から政治を学ぶのに必死
ですから。

おかげでリストラ候補達は自分達の未来を知らないので、
“ 太守の子守をさせられている、頭が堅く使えない奴らには丁度良
い罰だ” と。

ふふふ、ありがたい事ですnee、彼らに対して情け容赦なく殺れる
というのが。

いけませんnee、陰謀をたくらんだり、腹の底で笑ったりはいいで
すが声を出しては。

紫苑さんがわざわざ僕の部屋まで来たのですから、何か用事が有る
のでしょうか。

「お疲れ様です紫苑さん本日の政務も勉強も終わっていますがどう
かされましたか？」

僕の向かいの席の椅子を引いてあげて席に座るよう案内をし、
テーブルに紫苑さんの分のお茶をおいて、質問をする。

そういえば、これもノックと同じで益州の皆さんに驚かれましたね
え。

椅子を引いてあげるとか、現代のレストランでは当たり前前のサービ
スですが、
役職者自らがやるというのが信じられないようで、女性には紳士で
いないですよ。

「仕事に関してではないのですが、最近気になる事がございまして、桃蓮さんの様子がおかしいようで、司さんなら何か御存じかと。」

うーん、質問の内容は別として口調が堅いですねえ、緊張しているようで、

紫苑さんの方が10歳近く年上なんですから、もっとフランクに話してほしいですが。

また話がそれてしまいましたねえ、いけません、
ついつい思考が脱線してしまうのが僕や保さんの悪い癖ですよ。

それにしましても、なんでまた紫苑さんは僕に桃蓮さんの事を相談されるのでしょうか？

「僕に話しかけるな虫酸が走る！」というわけではないですよ。

ただ、桃蓮さんは保さんの奥さんですから、そこは保さんに聞くべきかと、
ただ華燭之典挙げていなく正式な妻ではなく内縁の妻だ、とかあります。

いや、内縁だとかはどうでもいいのです、何故担当者に聞かないのですか？

冷蔵庫が壊れたら電機屋さんなり冷蔵庫メーカーに連絡ですよね？
たまにいますが電気屋でもないのに僕にテレビ映らないとか言ってくる人が、親なんです。

説明書読め！修理センターに電話しろ！としか言いようがないです

よ、

素人がなんでも出来たならばその道のプロで飯を食っていますよ。

あとは僕の実家の病院とかでもいますよ、患者で「〇〇という病気だ！治療しろ！」

うん、その前に“お前は黙れ、口から糞を垂れるな”位言いたかった、

あとは“問診に具体的に答えろ”としか言えませんよ、って、何の話でしょうか。

勝手に自分の病気を決めつけられても困るんですよ、確認してカルテ書きたいのに、こういう人は来てほしくないんですよえ。

保さんと桃蓮さんが夫婦であるから、桃蓮さんについてだから話し辛いということかな？

まあ、僕に相談に来ているのですからキッチンと応対しましょう。

「桃蓮さんの様子がおかしいというのは、一体どういった事でしょるか紫苑さん？」

説明が遅くなりましたが、黄忠さん、厳顔さんからは真名を既に預かっております、

張任さんと周異さんに関しては三ヶ月後の間に信用が出来ると分かっただけという形に。

「先週の事なんです、私と桔梗が仕事を終えたのでお酒を楽しもうとなりました、その時に桃蓮さんがそばを通ったので誘ってみましたのですが、今日はいいと断ってきて。」

な、なんだと、そんなどうだっていい事か、人の悪巧みを中断させてまでの相談が。

とはいえ、確かに言われてみれば変ですねえ。

いつもの桃蓮さんならばお酒飲みましようと言えば仕事投げだして来かねないのに。

涼州、益州連合に新たに加わった面子の中でも、酒好きだからですかね？

紫苑さん、桔梗さん、張任さん、桃蓮さん、祭さんは息が合うように、

仕事後にこの5人の方々の組み合わせで一緒に飲んでいる姿をよく見るのですが。

紫苑さん、桔梗さんに桃蓮さんとか、桃蓮さんと祭さんとか、必ず酒の席になるとどこかしらに桃蓮さんの姿がいるという位なのにですよ。

エベレスト挑戦する理由を聞かれ「そこに山があるからさ」と答えた

ジョージ・マロリーの名言ではないですが、いつも酒の席にいて、「そこに酒があるから」とマロリーが化けて出てきそうな迷言を残した桃蓮さんが。

言われてみますと確かにここ数日の桃蓮さんはいつもと少し違いましたねえ、

元気が無いと言いますか何か病気でしょうか？

益州という縁もゆかりもない地に来る事になり、太守の勉強したりと、

今までの県丞の職と比べ大変ですから疲れているとかでしょうか？

とりあえずまだ夕方ですんな遅い時間ではないですし、夜に保さんとも会いますから、

その際に桃蓮さんとも会えるでしょうから話をしておきましょう。

「多分慣れない益州という土地に来たのと仕事の大変さで桃蓮さんは疲れているだけですよ、後で保さんに会いますし、その際桃蓮さんと会うでしょうから体を労わるように話します。」

僕がこう伝えると紫苑さんも納得してくれたようです。

「そうですね、太守になる為勉強中ですが、これほど大変だとは思いませんでしたし、

司さんや保さんは幼い頃から普通にこなされていたというのが今でも信じられないくらいで。」

そのように言って僕を見て微笑んでいる紫苑さん、何となくお母さ

ん的な雰囲気を漂わせている、
多分、将来は素敵な旦那さんを見つけて子供を産んで良いお母さんになるんでしょう。

多分ですが、桔梗さんは紫苑さんとは対照的にお父さんという感じになりそう、
なーんて本人には言えませんが、まあ、桔梗さんならば笑って許してくれそうですが。

紫苑さんが部屋から出て行ったのでまた仕事をしようと思うと部屋の扉がまたノックされる。

コンコンコン

「司殿、儂じゃ祭なんじゃが今少し時間は良いかの？」

三回のノック、家族や恋人のするノックですね、まあ真名も許している同僚ですし、
信用しているので三回ならばいいでしょう。

扉を開け部屋の中に案内をする。

「お主に相談するのが一番良いと思ってやってきたんじゃが。」

今度は祭さんが相談ですか、一体何の相談でしょうか？

相談を受けるなんてキャラじゃないんですが僕は、僕の部屋は懺悔

室になったのでしょうか？

いっそ相談受け付けますとか、貴女のお悩み解決しますとか書いた看板出しましょうか？

やめましょう、気づいたら面倒事を押しつけられる落ちが待っているでしょうから。

それにしましても、紫苑さんに続いて祭さんが来ましたよ、

巨乳好きな人だったらたまらない流れでしょうねえ、あとで桃蓮さんに会いますし。

巨乳無双とでも言うんでしょうか？さて、馬鹿な事考えるのはやめて話をしましょう。

「本日はどうされましたか、桃蓮さんの様子がおかしいが、当人や夫である保さんには聞き難いから僕に尋ねに来たとか？」

先程紫苑さんから桃蓮さんの事で相談受けたくらいですし、ちよっとした冗談を話してみましよう、会話を楽しみたいので。

「おおっ、さすがじゃのう、よく儂の言いたい事が分かるとは。」

な、なんだと。

「堅殿が変なんじゃ、一昨日の事じゃが儂が兵の調練をしている時になんだが、

丁度堅殿がそばを通りかかったんだが、こちらを見たがすぐに他に
行ってしまつて。」

その何処が変なのでしょうか？

仕事の邪魔をしてはいけないと考えて他に行っただけではないのでしょうか？

私の頭に浮かんだ疑問を理解したのか祭さんが説明してくれる。

「いつもの堅殿ならば、“祭、次は私とよ”と言って乱入してくるはずなのにじゃ。」

確かにそうですねえ、保さんと話していた際に、桃蓮さんはウォーモンガーであるという話になったくらいですし。

「そう言われてみるとおかしいですねえ、調練の仕事の邪魔してはいけない、ではなく、私も混ぜてと言ってくるような人ですからねえ、桃蓮さんは。」

僕も自己鍛錬中に戦いを挑まれた事もありますしねえ、先程紫苑さんから相談受けた、お酒の事といい調子が悪いのでしょうかねえ？

「紫苑さんからのお酒の誘いを断ったりとかもあったみたいですし、ちょっと調子が悪いんじゃないんですか？益州は今までと気候も違いますし、

暑さ寒さ、湿度と環境が変わりなかなか体が機構の変化に追いつかないなんてありますし。」

本当は紫苑さんから相談受けた事を此処でばらすのは問題なんです
が、

まあ、同じ桃蓮さんに関する事ですし平気でしよう。

「なんと堅殿が酒の誘いを断るとは！だから此処最近天候が荒れた
んじゃない。」

そう言っ、祭さんが笑っている。

祭さんの言う事も分からなくはないですが、酷いなまったく。

「桃蓮さんには内緒にしておきますよ、祭さんが「桃蓮さんが酒の
誘いを断るなんて、
異常事態があったせいで近いうちに益州は槍が降る」と言っていた、
なんて。」

私も祭さんの発言に少し乗ってあげましょう、桃蓮さんには言いま
せんよ、
ええ言いませんよ、ただ文章にして伝えるかも、なんてね。

「これ、儂がいつそのような事を言ったのじゃ、お主は勝手に話を
広げるでない！！
とはいえ、槍が降るか・・・クククク。」

台詞だと怒っているようだが祭さんも笑いながら言ってますし怒っ
ていませんね、
どうやら槍が降るという表現がかなり気に入ったようですね。

珍しい事が起きたから槍が降るなんてこの時代の人は言わないんですね勉強になりました。

どうでもいい事ですが孫権ちゃんが聞いたら、真面目だから本当に槍が降るのかと心配しそう。

保さんに後で会いますからその際に桃蓮さんと会いますし、話をし
て確認しますと、

先程紫苑さんに伝えたのと同じように伝えたと、そうかと納得して
祭さんも帰りました。

さて、仕事に戻りましょうか、これでまた相談者が来たら笑うん
ですがねえ、
しかも、桔梗さんや周異さんあたりが来たら巨乳のスリーカードで
すよ。

あとで保さんと一緒に桃蓮さんに会うでしょうから、巨乳フォーカ
ードですよ、
ポーカーでまず負けない鬼のような手じゃないですか。

何を考えているんでしょうかねえ僕は、さて仕事に戻りましょう。

「司〴〵いる〴〵?」

ノック無しで入ってきましたよ、今度は孫策ちゃんでした。

「おいしい!」

おっと、つい心の声が出てしまいましたよ、巨乳好きとかではないですが、

馬鹿な事を考えていましたし、いつそフォーカード、ファイブカード行ったら笑えたのに。

「何がおしいの？」

おっと、まだ“がきんちよでおっぱいが今は残念”と言えませんが、適当にごまかしましょう。

「先程からいろんな人が来て帰っての繰り返しで、その度に仕事が進まない状態だったので、

僕がいるか聞かれたら居留守使おうと思ったんですが、雪蓮ちゃんにいきなり入ってこられて、隠れる機会を逃してしまったから“俺おしかったな”と本音を言ってしまったんです。」

「ぶーぶー、居留守を使おうなんて、司は私と会いたくないの？ 酷いんだから。」

どうやら上手くごまかせたようです、この世界では馬鹿な事考えていると、

つい油断して口に出してしまって悲劇がなんてよくある事ですから気をつけないと。

「それにしても、ぶーぶーとか口癖とかやはり桃蓮さんと親子ですね雪蓮ちゃんは。」

「そりゃ親子ですからね、でも、そんなに似ていないと思うんだけどなあ。」

いえいえ、クローンかと思いましたよ、場をかき回す台風みたいな所とか、

江東の虎の子供もまた虎なんだなと思いましたよ、子供のくせにウオーモンガー要素あるし。

「それにしても今日はどうされましたか、お母さんの桃蓮さんについて相談ですか？」

二度ある事は三度あると言いますし。

「凄くよく分かったわね、私も母さんと似て勘が鋭いけど、司も良い勘しているはね。」

なんだろうこれがデジャヴってやつですか？というか、桃蓮さんいろんな人に心配されるって問題ですねえ夜にしっかりと話をしないと。

「とりあえず似ている似ていないの話をする為ではなく、どんな相談でしょうか？」

どうせ普段と違う姿を見せたのかなんでしょうが、さて、なんでしようかねえ？

「大した事じゃないんだけど、いや、大した事かしら？
成都の街を歩いていたら母さんを見かけたんだけど、街の医者に行っていたのが気になって。」

城にも医者はいるからわざわざ街の医者に行かないでもいいのに、城ではまずいという事は病気を知られてはいけない？

大好きな酒を断り、同じく大好きな戦いにも参加せず、極秘裏に医者に通う……。

成る程、そういう事ですか、答えに行き着きましたよ、ほほほ、なるほどね、

桃蓮さんは気にしないんだろうが、相手に気遣ってというところではないでしょうかねえ。

「鬼のかく乱という諺があるくらいですし、体調を崩されただけですよ。」

もし私の出した答えが間違いだった場合話を変に広げるとこじれてしまいますし、

それで保さんが大暴れなんてなるといけませんから、適当にごまかしましょう。

「鬼のかく乱って酷いはねえ司、でも、母さんが体調崩すなんて信じられないはね、

そういう点では、確かに鬼のかく乱ってピッタリな表現ね。」

そう言って雪蓮ちゃんはケタケタと笑っている、僕の出した答えならば、

笑えない事態になりそうですが、いやこの子は平気か問題は蓮華ちゃんか。

「食べ過ぎなんですよ、たぶん。」

“保さんの松茸を” 食べ過ぎたんですよ、うん、最低だね僕って、
どんだけ脂ぎった親父の言うようなギャグですかまったく。

『やはり実質年齢47歳はオヤジじゃな！』

うっさい、出番普段無い癖にいきなり表れて突っ込むな神よ。

「母さんが食べ過ぎって？」

やはりそこはまだ子供か、まあ、僕が下卑た笑みを浮かべながら、
意味深に言っただけではないですし流石に分からなかったか。

「まあ、夜に保さんと会うから、その際に会えるでしょうし、
雪蓮ちゃんが心配していたと伝えておきますよ、あと鬼のかく乱で
笑っていたとも。」

僕が言ったはずなのに、自分の責任にさせられると焦った雪蓮ちゃ
んの猛抗議を避け、
私は部屋にいとまた誰か相談に来そうなのでとりあえず部屋から
出て城の中を歩く事に。

少し早いですが、保さんの部屋に行ってみましょう。

コンコンコン

親しい友人ですのでノックは三回で良いとして、返事が無い、いまいようです、
他に行こうと思いましたが室内から声が聞こえます、ノック気づかなかったようです。

「保さんノックしたけど聞こえなかったかな？入りますよ。」

ガチャ、部屋の扉を開けてみると・・・。

何でこの時、僕は扉開けちゃったんだろうかなー、数分前の僕の馬鹿！

「流石にまだ三カ月弱だから聞こえないわよ、もう気が早いんだから。」

「でも、もしかしたらと思ってね、君の血を引いているから普通じゃないしね。」

桃蓮さんのお腹に耳を当てている保さんが桃蓮さんに話しかけていて、

桃蓮さんは少し恥ずかしそう、そして拗ねたような顔をしていましたよ。

「普通じゃないって、ぶーぶー、それを言うなら保の方が普通じゃないのに・・・。」

膨れながら桃蓮さんのお腹に耳を当てている保さんの頬をつつく桃蓮さん。

「私と桃蓮、普通でない者同士の血を引くならという事にしようか？」

ハッキリ見えないが、保さん顔微笑んでいるというかにやけているんだろうなあ。

なんだろう、この二人の空間、物凄く気まずいですし、今すぐ他に行きたいんですが、
普段と違う見てはいけない姿を見てしまった衝撃で体が言う事をきかないで固まっている。

「ありがとう、僕が口うるさく言ったからとはいえ大好きなお酒とか色々我慢させて。」

やはり正解でしたか、とはいえ、これほど正解を当てても嬉しくないクイズというのは。

「少しの間だけだから、それにその分私も保君に甘える事が出来るから・・・あつ。」

桃蓮さん、何でこのタイミングで僕の事気付くの、保さんにも気付かれたし。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんか色々とすまない。」」」

三人同時に見事にハモって謝りあうとは。

「僕は何も見えていないから！僕は何も見ていないから気にしないで
！！」

ギーーーーーガチャ

保さんの部屋の扉を閉じて部屋に戻る事にする、うん、見なかった事にしよう、
仕事し過ぎで疲れていたんだな変な幻覚見るなんて早く部屋に戻って今日は寝ましよう。

この後少しの期間、お互いに悪い事をしたわけではないが、
なんか妙に気まづくなる、僕と保さんと桃蓮さんだった。

第五十二話、江東の虎の異変!?(後書き)

孫家の三人目、小蓮を出す為に書きましたが、
うん、なんだろう、書いていて、司と同じく気まづくなったのは何
故か?

江東の虎がキャラが保の前でだけ普段と全く違うというようにした
が、

そのせいだろうか?書いていて気まづくなったのは。

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております。

第五十三話、江東の虎の異変その後の余波（前書き）

前回、第五十二話の続きであります。

今回も振り回される人で司、空の二人の軍師が泣く羽目に。

第五十三話、江東の虎の異変その後の余波

一司一

今日もいつものように益州の州都、成都の城で朝議を進めています。

「以上で兵器開発計画の報告終わります、た、保さん次の計画について提案をお願いします。」

僕の報告事案が終わったので、次の事案にという事で保さんに話を振るが。

なんだか気まずいです、今までのように話をする事ができません、お互い好きという事を意識し合った中学生男女みたいになっていきます。

「あつ、ああ、はい、今度の法案は税制体型変更を・・・。」

僕だけでなく、保さんも喋りや応対がぎこちなくなっていますよ。

あれ（第五十二話）からなんか保さんと気まずいです、困った事に皆も僕と保さんの仲がおかしい、ギクシャクしているのはどうしてだ？と。

言えない。

桃蓮さんが妊娠して、保さんがなんかイチャコラしている現場を見て、

三人が三人とも気恥ずかしさもあって妙な空気になっていると。

困った事が、これは仕方無い事だろと思いますが、ただ許せない事態も。

前回、紫苑さん、祭さん、雪蓮ちゃんから桃蓮さんがかしいと相談受けて。

とはいえ、桃蓮さんは妊婦の身ですから、やはり酒を控え、調練に参加する事もせず、城の皆にはまだ内緒なので街の医者に通う。

桃蓮さん本人が紫苑さん達になんともないからと言っても説得力無し、

わざわざ皆に内緒にするように医者に通うという事態がまずいというのに。

真実を話すわけではなく、皆は僕に相談したが効果無しと。

とっとと妊娠した事を公表してくれたらありがたいんですがねえ、まあ、天からの授かりものですし、もしかしたらというのもあるんでしょう。

ただ本人達が隠す一番の理由は、人にいつ話をすればいいのか？という事なんだろうが。

効果が無いだけならまだしも、僕と保さんの間がおかしい、おかげで陰で言われてますよ、

「役立たず」「つかえね」 「粗チン」とか最悪な評価が。

粗チンは酷いだろ、この益州でどれ程の物か知っているのは紅さんだけなのに。

言った奴を見つけて八つ裂きに、とはしませんが、誰でしょうかねえ、まったく。

皆の不安といいますか、疑問が解決しないで僕が役立たず呼ばわりもキツイですが、更に困った事に、保さんが妊婦である桃蓮さんを甘やかしすぎというのが。

妊娠の事実を教えていない状況でかいがいしく奥さんに奉仕する旦那さんに見えるから。

城に料理人がいるのにまかせないで保さんが料理してあげたり、とか、

桃蓮さんのかわりに雪蓮ちゃんや蓮華ちゃんの面倒みてあげたりして。

桃蓮さんは保さんがわざわざそこまでやらないでもと戸惑いながらも、保さんに甘えられるということからそれを喜んで受け入れているのが。

おかげで保さんという株は今や買い注文ばかり連日のストップ高ですよ。

一方、僕は何もしていないのに「同じ軍師で、同じ男でこの違いか」とか、普通に仕事しているのに低評価ですよ、オリンパス並みに株価大暴落ですよ。

僕の仕事は謀略の類いだから公に出来ないの！でも、人の三倍は働いているのに。

あまりにも悔しいからストレス発散と八つ当たりで賊退治で暴れる際に、

「逃げる奴は賊だ、逃げない奴はよく訓練された賊だ」と言っただけで。

「戦争狂」「死神」「殺人鬼」の呼び名が、いまや売り注文殺到ジャンク債並の扱いに。

はあ、なんでこんな事になったのでしょうか？

もう嫌になりましたよ、僕だけが悪者になる生活は、

いや、仕事でならばいいですよプライベートがボロボロになるのが。

とはいえ、僕からバラすのも違いますしねえ、保さんに話しますか。

まずは余計な心配かけさせないために外の医者行かせるのやめさせましょう。

そうですよ僕が担当医になり極秘裏に診察しましょう、前世で本物の医者ですし、

今も医者の育成の為の学校を作ったり、医学書書いたりしてますし。

保さんが桃蓮さんに付きつきりというわけではないですが、

こまめに世話している為にあまりかまってもらえない嵐さんも不機嫌です。

まあ、奥さんではありますが、嵐さんは日陰の存在でいいと公言していたくらいなので、

表立って不満を口にしてはいませんが、やはり良い気分ではないでしょう。

ただまあ、桃蓮さんに程ではないですが保さん己の時間を割いて嵐さんの応対もしているので、

嵐さんも物凄いうっ屈した物を胸に秘めているというほどではないですが。

ただ、やはり妊娠した奥さんが大事なのは分かりますが、これはいけません、

ハーレムを作ったならば女性を平等に愛してあげないといけません。

それが出来ないのであればハーレムではなくセックスフレンドにとどめておくべきです。

朝議が終わったら嵐さんと話をして巻き込んで、保さんと桃蓮さんに話をしましょう。

「李儒さん、李儒さん、大丈夫ですか？先程から名前を呼ばれていますよ。」

おっ、と、考え事はやめましょう、今は朝議の時間でしたね、これはいけません。

周異さんに何度も声を掛けられて気付くなんて、失格ですね。

「申し訳ございません、先程説明した法案の候補に穴は無いか考えてしまいました、今後煮詰めていく事ですから今考える事では無かったですね、もうしわけございません。」

僕の台詞で皆納得してくれているようで、ただまあ、付き合いの長い芍薬さんとかは、僕がこういう時に考え事している時は大抵ろくでもない事だ、と目で訴えかけてくるとは。

はあ、僕って本当に不当評価されているよなあ。

「嵐さん、申し訳ないですが今お時間よろしいでしょうが、内密に

お話が。」

朝議が終わると無駄話をする訳でなく、すぐに保さんの護衛として、足早に出て行こうとする嵐さんに急いで声をかける。

「護衛があるから今で無くて良くないか？それに内密って此処で話せないのかよ。」

嵐さんを指さした後サムズアップといいましたようか親指を立てて。

「（保さんの）件で、ちょっと。」

嵐さんすぐに分かってくれて、しかたないなと納得した表情で了承してくれる。

「保さん申し訳ないです、嵐さんと警備案の相談したいので、嵐さんお借りします。」

朝議で周異さんに嘘ついたように不自然にならないように、適当な理由をつけて嵐さんをお借りする事にする。

「うちの奥さんに手を出すなよ、まあ、了解した、嵐さん今日はずっと部屋にいるから。」

保さんはカラカラと笑いながら冗談を言って、了承してくれる。

冗談でもやめてくれよ嵐さんが警戒するんだから、嵐さんは冗談あまり通じないんだから。

「とりあえず、僕の部屋でお話ししましょうか。」

そのように嵐さんに伝えて、部屋に案内する。

うん、部屋に来てもらった方がいいが嵐さんが警戒している、保さんの冗談のせいで。

そんな事する気なんか一ミリもありませんよ、まったく。

「保さんの件なのですが、最近桃蓮さんに付きつきりですよね。」

とりあえず、いきなりですが本題にはいりましょう。

「桃蓮が体調悪いみたいだから、王子様が看病ではないが面倒みているから。」

うん、仕方ないと思っている気持と、やはり同じ奥さんなのにという嫉妬心、

そういう点で、少なからずは不満があるようですね顔に出ていますよ。

あと分かった事は、嵐さんも桃蓮さんが妊娠した事を知らないという事です。

もう一人の奥さんにも教えてあげなよ、保さん……。

「どうして今こうなっているのか嵐さんは知らないみたいですが、まあ、僕は理由は分かっているんですよ、だから、保さんに控えてほしいなど。」

こう言うと保さんと桃蓮さんの仲を引き裂こうとするお邪魔虫みたいな発言ですな。

「王子様が一生懸命に女房の桃蓮の世話するのやめろというのか！？」

嫌がらせとかお邪魔虫とかそういう風に取りれてしまいますか、まあ仕方ない。

嫌がらせとかではないとアピールするため首をぶんぶん振って否定する。

「嫌がらせではなく、保さんがそうでなくても忙しくて寝る間を惜しんで働いているのに、更に桃蓮さんのお世話となると保さんの肉体的な疲労もかなり大変でしょうし。」

こういう風に話をするとか確かにという感じで納得してくれる。

せこいですが、僕以外の人間からの説得があった方が保さんに効くでしょうし、

なんとか舌先三寸で嵐さんを騙して味方に引き込みましょう。。

「桃蓮さんがどうしてこうなったかいずれ話すでしょうが、保さんが無理し過ぎないように、

桃蓮さんの状態とかを皆に公表して皆が協力していくべき!」
「まして。」

この発言は嵐さんに効果がありましたね。

「俺の王子様が無理をするのはよくないよな、それに俺もあんな風に構ってほしい。」

見事に食いついておりますねえ、保さんの心配とやはり嫉妬でしょうなあ。

嵐さんは素直ですねえ、簡単に本音をポロッと話してくれるのですから。

「嵐さんも理解してくれましたか、幸い僕は医術の心得もありますし、

保さんに説得しに行くので、嵐さんも保さんに無理するなどと説得してもらえたらと。」

嵐さんが驚いている、これでも僕は医者なんですがねえ、信じてもらえないとは。

って、違いますね、僕が医者かどうかで無く、桃蓮さん本当に医者に通っているんだ、

皆に隠して医者に行くなんて実は何がしかの重病なんだと思ったんでしょうね。

「分かった王子様に無理しないように説得すればいいんだな、皆に頼れと。」

うん、とりあえず嵐さんを味方に引き込めた、よし、保さんを説得しに行きましょう。

嵐さんが勝手に桃蓮さん不治の病くらいに思いこんでいなければいいんですが。

コンコンコン

「保さんお話があります、入りますね。」

ノックして保さんの部屋に入ると、今日は桃蓮さんのお腹に耳を当てていませんね。

とりあえず桃蓮さんもいますし、ちょうどいいですね。

「司君、どうしましたか、嵐さん借りた用事は終わりましたか？」

用事はすみしましたよ、隠し事するなど抗議する仲間に引き込みましたし。

では、いきなりですが本題に入りましょう。

「保さん、いい加減桃蓮さんの事をカミングアウトしましょうよ、城でなく街の医者に通わせたから桃蓮さん重病隠している？」と思い

こまれているよ。」

保さんがそれは参ったなあという感じの表情でいます、
頭良いのに何で、そういう当たり前の事が分からないんですかねえ？

「司、貴方の言いたい事も分かるけど、こういうのってどう話をすればいいのかと思って。」

桃蓮さんも皆に要らぬ心配をかけていたかという感じで、困惑の表情を浮かべてます。

こんな事言ったら失礼ですが、桃蓮さんならばあっさりと軽く、
「保の子供妊娠したわよ」とか、普通に話して周りを啞然とさせそうです。

「王子様、桃蓮病気なんだろう、俺とかに心配かけないように隠して看病するなよ、
俺とか皆に話してくれよ、俺も頑張って看病するから王子様も無理しないでくれよ。」

嵐さん泣きそうな顔しています、完全に桃蓮さんは不治の病位思っていますね。

保さんも、桃蓮さんも違うのに・・・という困惑、あと、まいったなという表情している。

「もう一人の奥さんである嵐さんにも隠すから、こう勘違いされてしまうんですよ、

皆も凄い心配していますよ、いい加減話をするべきですよ、病気でなくなんなのかを。」

少し強めに怒ったような口調で言いました、実際怒っていますし、変に隠されるから話がこじれて面倒臭くなっているのですから本当にもう。

「えっ、桃蓮もうすぐ死ぬんじゃないのかよ、騙したのかオマエ！」

うおーい、嵐さんが勝手に思い込んだだけでしょうが、嵐さんが怒って襲い掛かってくる、ヤバイ助けてーい。

「嵐さん待ってくれ、司は悪くないんだ、桃蓮さんは病気じゃないんだ、

妊娠した事をいっ言えばいいか分からないからかくしていたんだ。」

保さんが気まずそうな表情で嵐さんに真実を話してくれましたねえ、ただ、もう少し早く言ってほしかった、右頬にいいやつ一発貰ったよ。

いてえ、なんつで僕はこんなに不幸な目に合わないといけないんですか。

「王子様が妊娠したのか！！！？？？」

「「逆、逆！！」」

桃蓮さんの妊娠という事に驚いて気が動転しての発言なんでしょうが、

桃蓮さんのすっ飛んだ発言に対して、三人が一斉に突っ込む。

「嵐、分かっていると思うけど保で無くて私が妊娠したのよ、今回で三人目になるけど、

まだ正式に妻になっていないし、雪蓮達娘とかにいつ言えばいいのかなとかあってね。」

ああ、やはり娘さん達にはどう切り出すべきか難しいでしょうねえ。

お母さんは結婚を前提に付き合っている彼氏がいます、実質旦那さんですよ、

とはいえ、世間ではまだ一応未婚、それで出来ちゃった婚ですから。

まして、新しい父親が長女と3歳しか違わないなんてありますからねえ、

雪蓮ちゃんよりも蓮華ちゃんへの説得が難航するでしょうねえ。

「司、今日の夜に発表する為の宴席を設ける準備を手伝ってもらえないか、

私の家族と嵐さん、桃蓮さんの家と、司親子と身内だけの席という事でまず話すか。」

桃蓮さんもまずは家族にだけでもという点に同意して目線で保さんに合図してますね。

僕達親子も身内扱いですか、ありがたい事です。

そうだ涼州に残ってもらっている琅？さんと紅さんには手紙で教えてあげましょう、

琅？さんは涼州牧ですからおいそれとこっちに来れませんから連絡しないですね。

紅さんは三週間後にこちらに来てくれる予定なのでその時に話すのもいいんですが。

とりあえずそうと決まりましたら、高級な料理やお酒を用意しましょう、

めでたい事ですから、少しくらい贅沢にしないといけません、ただ皆に迷惑をかけたから支払いは当然保さんの小遣いからですが。

ただ、この発表の席がやはり修羅場になるとはこの時の僕はは思いませんでした。

一空一

朝議を終えたあとの仕事で益州各地から和に州牧就任のお祝いを、と挨拶しにやってきた人間の応対を一通り終え夫婦で疲れたと休んでいると司君が。

「今夜、保さんが親しい者だけで酒席を儲けたいという事でして、和様、空様のお二人共忙しいでしょうが夜にお時間いただきたいとの伝言です。」

一体何でしようかねえ、保が伝えに来ればいいのに、わざわざ伝言役で司君を使うなんて、何か話したい事があるが夜まで隠しておきたいからという事でしようかねえ？

城の宴会場や食堂ではなく、場外にある高級な料理店という事ですから、身内だけに話したい事があるという事ですかね？ 为什么呢？ かねえ。

とりあえず和と月の家族三人に最低限の護衛だけを連れて料理店に向かう。

店に到着すると、奥の部屋に案内される、中に入ってみると保に、保の婚約者である桃蓮さんと二人の娘さん、あともう一人の婚約者嵐さん、それに司君と薊の7名が待っていた。

一体何でしようかねえ、本当に身内だけが揃ったと、とはいえ、桃蓮さんのお二人の娘はあまり面識が無いから、身内というのに若干の違和感も。

どんな用件でこの宴席は用意されたんでしょうねえ？ 面子的に保の家族の事とかですかね？ 華燭之典の日付を決めたとかですかね？

全員が席に着き、まずは乾杯をしようとなり、皆に酒を配られる、うん、月に雪蓮ちゃん、蓮華ちゃんにまで酒を出すのはどうかと思うぞ。

まあ、保達も当たり前のように酒を普段から飲んでいるが、まだ15歳で子供なんだがなあ、私が15歳御頃なんて酒飲まなかったぞ。

まあ、私の場合は貧乏で苦労したから酒を飲む経済的余裕が無かっただけだが、保が稼いだお金で買ったり作っているし、まあ、宴席の乾杯くらいは酒はいいか。

乾杯と酒を飲んだと思ったら、保が今日の宴席の目的を伝えてきましたよ。

「最近桃蓮さんが普段と違うとか皆に心配かけてすいませんでした、今日はなんでそんな事したのか説明しようと思ひまして、桃蓮さん。」

そう言って桃蓮さんに話をするようにすすめる。

一体何の話なんでしょうかねえ？最近妙にこそ何かしている、ということ、桃蓮さんと親しくしている同僚も心配していたのですが。

「保との間に子供が出来ました、今妊娠して大体三カ月です。」

えっ！！！！！！！今、なんかサラツとんでも無い事を言いません

でしたか桃蓮さん？

私の聞き間違いではないでしょうか？あれ？部屋の皆、殆どの人が固まっている。

「か、母さん、私聞き間違えたのかしら、なんかとんでもない事を口走っていない？」

雪蓮ちゃんが頬を引くつかせながら恐る恐る桃蓮さんに確認取っています、
やはり妊娠といったが、あの妊娠なのか、任天堂フリークという意味での妊娠ではなく？

「とんでもないことって、ただ貴女の兄弟が出来ただけだけど。」
ただ、じゃないでしょうが軽いですよ反応が！まさか妊娠が聞き間違いで無いとは。

ドン ガチャン

「お母様妊娠ってどういう事ですか！！なんでこんな男と」

蓮華ちゃんが机をたたいたから机の上の皿とかが派手に音をたてましたよ、

物凄い剣幕で桃蓮さんに抗議していますね、目線は保ですが。

とりあえず蓮華ちゃん必死なのは分かるが、こんな男発言はだめですよ、

何故ならば私や和というこんな男の両親が此処にいるんですから。

「へううう、お兄様に子供が出来るんですね、お兄様の子供だから可愛いでしょうね。」

月は驚いていますね、驚いている月も可愛いです、やはり月の将来のお婿さんは私しかないですね。

グボッ

和に心を読まれて殴られるとは……。

それにしても和が暴れ出さないか不安なんです、あれ！？普通にしている。

「保の子供ですか、それは嬉しい事で、ただ、桃蓮さん子供は天からの授かりものですし、

今後益州の太守とかになるわけですが無理をされないで元気な子を産んでくださいね。」

和がほほ笑んで声をかけている、おかしい、何でこんな普通にいるとは……。

って、こ、これは、机の下では握り拳が作られていて、しかも、爪が肉に食い込み手から血が流れている、和そこまで怒りを堪えるとは。

「それにしても保さん、まだ華燭之典を挙げていませんが先に妊娠とはねえ、

出来ちゃった結婚は駄目だよとか昔言っていたのに、まったく助

平なんだから。」

司君、まずいそんな発言で茶化すのは、蓮華ちゃんと和が怒っているんだから。

「王子様、俺も王子様の子供が早く欲しいって、我儘言うのは駄目なのか？」

嵐さん、それもまずい、和が殺る気になってしまいうから、発言を控えて！！

「何で王でもないのに、私や雪蓮姉様と大して年齢変わらないのに、母様以外にも女性と付き合っているんですか、こんな節操無しと。」

だから、先程口に出していないが、その節操無しの両親が目の前にいるんだよ。

握りこぶしから血を流して怒りをこらえながらも微笑んでいた和が、プルプルし始めたあかん、大噴火寸前だよ、まずい、このままでは、皆抑えてくれ。

「司がこの前言った食べ過ぎの意味分かったは、保の事を食べ過ぎて妊娠したと。」

司君、何で雪蓮ちゃんなんて子供にそんなオヤジ臭い事を言っているんですか、

そして、雪蓮ちゃんもそんな馬鹿な事を楽しそうに話しているんですか！！！！

まずいんです、今和を刺激しては。

プチ

編な音が聞こえたと思いましたよ、この後まさかあんな大惨事を迎えるとは。

とはいえ、この後から記憶が無いんです。

分かっている事は、成都にある超高級料理店一店が立て直しのため一カ月の休業をすることになり、
その店に関しては益州牧とか幹部は出入り禁止になるなんて・・・。

第五十三話、江東の虎の異変その後の余波（後書き）

うーん、料理店でのドタバタが甘すぎたな、
まあ、文章が拙いのはいつもの事なのですが。

皆さんのご意見感想お待ちしております

第五十四話、真劍〇十代しゃべり場益州編（前書き）

桃蓮さんの妊娠ネタで今日も引っ張ってすみません、
なんというか、お馬鹿な事が閃いて書きたくて仕方無くなったもの
で。

第五十四話、真劍〇十代しゃべり場益州編

―保―

「董孟高様、今、決めてしまうのは些か早急かと思われませんが。」

私の提案に対して百合さんはまだ議論するには早いということですか。

「確かに今ここで話し合うのは時期早尚かと思いますが、ただ、いざその時になってから決めていたのでは遅いですよ。」

司君は私の意見に賛成ですか、司君ならば賛成するとよんでいました。

早いうちから計画をたてておかないといけません、無計画は駄目ですから。

消費者金融の広告である“ご利用は計画的に”と同じですよ、

「計画的でなかったから使う羽目になったんじゃないの？」と司なら言いそうだが。

「く、く、くだらない、このような事を議論する暇なんかないのではないかと、

今の益州は問題山積みで、こんな事を話し合っている暇は無い。」

周異さんは議論する必要性無しとバツサリきましたか、
いえいえそんな事無いです、益州の未来がかかっているのですから。

ここで意外な人が私や司君といった議論推進派に乗っかってくる。

「確かに時期早尚でくだらないと思われませんが大事な問題だと思います、

今の漢と同じでは、先を見て計画しない場当たりの行動が後に混乱を。」

桜花さんの発言に執務室内がどよめいておりますよ。

ザワツザワツ

一部の警備兵なんか福本作品の黒服みたいになってますよ、桜花さんが漢王朝を無策の集団だと批判したわけですから。

動揺する人間には周異さん、紫苑さん、張任さんがいますから、周異さんなんか家が三公出した名門ですし、そういう家の人では口に出来ないでしょうね。

司君が念のため漢王朝批判したなんて口外するなよと警備兵に睨みをきかせる。

「桜花お姉ちゃん、何もこんな議論に参加しないでも。」

王朝批判のどよめきと異なり桜花さんが議論推進派に加わった事に梅花さんは驚いているようで。

「董家の皆とやっていくなら、馬鹿みたいな事とか色々楽しみたいと梅花ちゃん。」

“馬鹿みたいな”というのは些か心外なんですけどね、とはいえ、天下の司馬朗こと桜花さんが加わってくれるならば力強い援軍です。

「桜花お姉ちゃんが参加するならば私だって、この議論に加わるよ、周異さん、秦の始皇帝の偉業とはなんですか、答えてもらえますか？」

キター、天才司馬懿こと梅花さん参戦ですよ、この戦勝しましたね。

それにしても始皇帝の話とは、議題とどう結び付くのか？

唐突な梅花さんの質問に対し、周異さんの表情で分かりますが戸惑っていますね。

「始皇帝の偉業となると秦による大陸の統一をしたこと、あとは北方の騎馬民族対策に万里の長城を築きあげた事かと。」

周異さんの答えは教科書通りの答えですね、あと何があったかな？

「なんだろう？漢字や貨幣、車巾の統一くらいかな。」

芍薬さんが独り言を。

「そうです！芍薬さんが当てたように車幅等を統一しました、地味ですが私達の便利な生活を支えてくれる偉業です。」

結構大事なことなんですが、梅花さんそれとこの話題をどう結びつけるのですか？

「いいですか、統一するという事が如何に大事な事なのかわかりますか、
今、ここが分かれ目なんですよ、ここで統一して意志疎通しておかないと……。」

梅花さんは演説を一旦区切る、皆何故ここで引っ張るのか？
統一しないことによるデメリットは何なのか皆分からず悩んでいる。

「一体、何が問題あるというのよ、梅花は？」

当事者の一人である桃蓮さんが梅花さんに問い掛ける。

「皆さんいいですか、保さんと桃蓮さんの子供なんですよ、
将来一体どんな子になるか考えてみて下さい、予想を皆答えてみて
ください。」

予想も何も、私と桃蓮さんの子供ですから、女なら美人、男なら美
男、
頭も良いでしょうし、腕っぷしも強いっぱしの武将になりますよ。

「保は可愛いし、桃蓮さんは美女で男でも女でも美しい。」
母上ありがとうございます、あとで感謝のハグをさせていただきます
す。

「知も武も兼ね備えた一流の軍人になるだろうな。」

父上、父上の誕生日は盛大に祝わせていただきます。

「王子様と桃蓮の子供だろ、天下無双の武を誇るだろうな。」

嵐さんありがとう、今度閨でたっぷり可愛がってあげるね。

「はっ、親馬鹿ならぬ家族馬鹿、もとい馬鹿家族ですな。」

「「「なっ！」」」

おい、バツサリ切りやがったよ梅花さん、仮にも雇い主とその家族だよ、

なんですか！その容赦の無い袈裟斬りでバツサリみたいな切り捨てかたは。

「ちょっと家族愛が激しいと言えがいいのでしょうか、和や月ちゃんに対して。」

はい、母上は理想の女性で、月の将来のお婿さんですから私は。

マザコンのシスコン、というか家族と一線越えそう、

倫理的に危険なボーダーライン上にいるとか陰で言われているとか。

犯人は司君ですから、やり返しましたが。

「悪巧みが凄そうかな、腹黒そう。」

牡丹さん、私と桃蓮さんの子供は笑点のパープルかよ!?

「洒落ではおさまらないような迷惑なイタズラをしそうですね。」

百合さん、迷惑なイタズラって司くんじゃあるまいし酷過ぎますよ。

「小悪魔ではなく悪魔？」

牡丹さん！なんで私と桃蓮さんの可愛い子供が悪魔なんだ！

「場をかき回すだけかき回して飽きちゃったと言って最後にポイツとするかな？」

桜花さんまでそんな酷い評価をしてくるなんて、酷い。

そういえ「ポイしないでください」と言って結婚してすぐに離婚した芸能人がいましたねえ、
私は最初から興味無いからポイされてもどうでもよかったので忘れていて、今思い出しましたが。

「堅殿と擢殿の血を引くとなると、それは確実に戦闘狂じゃろな。」

祭さんまでもが敵に回ったか、はあ、強い者と戦いたくなるのは宿命みたいなものでしょ、
と言いますか、向こうから勝手に戦いを挑んでくる事ばかりで困っ

ているんですよ。

「付き合いは短いから詳しく分からないが情け容赦無いところかと。」

周異さん付き合い短いならば無理にコメントしないで・・・。

しかも、意外に酷い事を言っているし。

「相当なお酒好きですかしらね、仕事しないで朝から飲んでいそうで。」

紫苑さん、どんな風に私と桃蓮さんを見ているんですか、私が仕事をさぼったことなんて一度もありませんよ、仕事中に笑いを与える事はあっても。

「結構怒りっぱいだな、御屋形様の場合は。」

桔梗さんの目の前で私も桃蓮さんもキレた事無いのに。

あと、御屋形様はやめてくれ、私はまだ単なる軍師にしか過ぎないんですから。

「返答に困りますので、他の方に聞いてください。」

張任さん、その応対って、結構ダメージでかいんですが。

「皆さん大事な事を忘れてはいませんか？睦事の達人ですよ。」

司、キサマアアア~~~~！！！！！！

あと、睦事ときいて牡丹さん、張任さん、紫苑さん頬を染めるな！！

男と女がいたら愛し合っていたならやる事をヤルそれだけじゃないですか、

まったく、何でそんな桃色的になるんでしょうかねえ。

桃蓮さんの顔を見るとあまりの言われように明らかに頬がひくついている、

うん、私と同じで怒りを相当我慢していますね、私ですか？“皆まとめて殴りたい！”

「保と私の子供は腹黒くサボリ魔で、酒飲みで睦事好きな戦闘狂と、そういう風なろくでなしな組み合わせになると言うの？」

桃蓮さんも私もキレる寸前ですが、必死でこらえていますよ。

ただ、皆気づいているのかな、私と桃蓮さんの手元には武器があるという事を。

「「「「「その通り！」「「「「「

よし、お前ら自分の死刑執行所にサインしたな、執行を開始する。

「小便は済ませたか、神様にお祈りしたか、部屋の隅でガタガタ震えている。」

私が殺気を全開にする、横を見ると桃蓮さんもまた皆に殺気全開。

「殺す！」

桃蓮さんが南海霸王を、私は方天画戟を構える、私も桃蓮さんも賊狩りでも見せない、
純粹なる怒気、殺気を皆に対して完全に解放しましたから。

「保に桃蓮さん、二人ともやめなさい、本気で殺気を開放するの止めなさい、

周異さんとか護衛兵とか殺気に当たって気絶していますから。」

母上に止められて、ハッとなり周りを見てみると軍師勢は大半が気絶して、

益州の太守見習いの皆さんがかなりひきつった顔していますねえ。

「儂らが殺気に飲まれるとは、堅殿とやりあった、あの時より更に強くなったか。」

いやまあ、あの時は本気で舌が全力ではなかったですから。

強くなったのは、一応合間を見て司君と殺りあって鍛えてますから。

「お屋形様まさかあんな牙を隠し持っていたとは、見た目だけなら年端もいかない子じゃが。」

益州勢の皆には初お披露目でしたね、桔梗さんは驚きながらも楽しみにしている、
という表情です、嫌ですよ中途半端に調練で戦うのは無駄に疲れるだけで。

司君とやりあうみたいに全力で容赦なくならいいんですが。

「あまりの殺気に動けなくなるなんて。」

後の五虎將軍にそこまで恐怖を感じさせられるとは、努力した甲斐がありました。

「梅花さんのせいでなんか気まづくなりましたが何を言いたいんですか。」

とりあえず気絶から復活した梅花さんに話を戻す、
とりあえずみんなへの怒りはこらえましたが、噴火したいですよ本音は。

「あんな凄いいんだ、これからからかうの気をつけないと。」

梅花さん、さすがにからかったくらいでは全力は出しませんから、
だって、

私や司君が全力でいったら、撫でたつもりでも相手の頭が吹き飛ぶ世界ですから。

「いいですか、保さんと桃蓮さんの子供の教育をキチッとやって、私達の事をどう呼ぶかキチッと統一しないと、どうなるか予想がつくでしょう。」

皆が目をつぶり色々想像しているようです。

「例えばですよ、後に周異さんがもうすぐ40歳と年齢的に大台乗りそうで気まずい所に、10歳になった二人の子供が現れて“おばさん、その格好は無理が無い？”と言われたり」

おい、ちょっと待て、いくらなんでもうちの子供はそんな失礼な事を言わないぞ！

周異さんがなんかプルプルしている泣きそうになっている。

「実の祖父母とはいえ、まだまだ私は若い！と思っていた50近くになった空様や和様の元に、お二人の子供がやってきて“じいちゃんまた禿げてきた”“ばあちゃんしわ増えた”と言ってきて。」

父上、母上、そんな未来は無いから安心してください、

父上は髪の毛がふさふさしています、母上もいまだに若々しいです。

父上も母上もあせている、平気ですから安心してください。

「良いんですか、将来自由奔放なお二人の子供に、人前で“おばさんいつ結婚するの？”

なんて言われたりして、その晩もお一人様で涙しながら自棄酒を飲むのですか！」

紫苑さん、桔梗さん、張任さん、祭さんとかを見ながら何を言っているんだ、梅花さんは。

皆、これまたプルプル震え始めている、皆綺麗だしまだ若いし行き遅れはないだろうに・・・。

心配し過ぎではないかと、それともお一人様確定コースを突き進んでいるのか？

「「「嫌（だ！）（じゃ！！）です！！！」」」」

まだまだ若い女性陣が将来の自分の姿を想像して一斉に嫌と答えましたよ。

それにしても本当に私の子供（まだ予定）の評価が酷いのが許せないんですが。

ちゃんと教育して女性ならばおしとやかに、男ならば沈着冷静な子にするんですから。

何でみんな私と桃蓮さんを睨む！！！！

それは仮定の話で、しかも、仮定の話をしたのは梅花さんなんだぞ、

その梅花さんの言葉に皆が勝手に怯えただけなのに。

「分かりました保だけでなく皆が心配していますし二人の子供の教育については、

今から益州、涼州、皆の知恵を絞って色々考えておきましょう。」

産まれてもないどころか、妊娠三カ月で何を言っているんだと思われませんが、

大事なんです、子供の教育を考えないといけないのは。

「まず第一になんと私たち親を呼ばせる事から考えましょう、父さん？お父上？パパ？ダッド？

桃蓮さんならば、お母さん？お母様？母上？ママ？マザー？マミー？」

大事です、まずは私達両親をなんと呼ばせるのかを決めないといけません。

「いやまずは親よりも目上の女性に対してだろうから、お姉様と呼ばせるべきじゃろ！」

此処で祭さんが出てきたぞ。

お一人様で自棄酒発言がダメーシだったかのつてくるとは。

「自分がお姉様には無理がある年齢になった時に“お姉様”は言われるときついでしょうから、

だから、真名に様付けにするのはいかがでしょうか、礼儀正しいですし。」

百合さん、その言い方は地雷を踏んだかも知れんど、といいますか見事に踏んだぞ。

「ほお、配殿は私が年齢的にお姉様と言われるのはきついと申すんじゃない。」

百合さんはそんなつもりじゃないんでしょうが、祭さんの怒りゲージが凄い勢いで・・・。

「そそそ、そんな、まだまだ黄公覆様はお若いですよ。」

その言い方もまた新たな敵を作りかねないような。

「黄蓋さんよりも年上の子持ちな私なんかではお姉様は絶対無理なんでしょうねえ。」

周異さんまでもが加わってきた――、おい、どうするんだよ、この状態。

完全に仁義なき戦いのあのテーマが流れているぞ、殺し合いになるぞ、どうすればいいんだ。

「保さん、貴方のお子さんがきっかけの争いなんですから仲裁お願いします。」

司君、君は一体何を言っているんだね!?

サバンナで腹をすかせたライオンとハイエナが獲物をめぐって争っている間に、

しかも、全身に生肉をまわりつけて飛びこむようなものだぞ。

死ぬは!!

とりあえず、こうなったら仕方が無い、見ない振りだ。

「桃蓮さん、嵐さん、街で美味しいお茶屋さんを見つけたのでそこでお茶にしましょう、
それでお茶が終わったら日が高いですが、僕の寝台で三人で色々と言合いましょうか。」

「良いぞ、王子様。」

「保も好きなんだから、もう……。」

行きましようか、私の後ろで誰かが吹き飛ばされたような気がしますが気にしません。

この後お茶屋で三人で杏仁豆腐を楽しんだりして、色々楽しい一日を過ごしましたよ。

翌日皆、顔に青あざ作っていて、こっちをやけに睨んでいたのは何故なのでしょうか？

とりあえず言えるのは、今日も益州董家は平和です。

第五十四話、真劍〇十代しゃべり場益州編（後書き）

政治をしないで、将来生まれる小蓮がどう人を呼ぶのかの議論だけで、

一日が暮れるそんな益州、黄巾党とか将来は大丈夫なのでしょう？

書いている私が言うのもなんですが。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第五十五話、涼州からのお客様（前書き）

昨晩は頭が痛いし風邪引いたかなと思って、
熱をはかったら39度近かったです、でも、今日の昼には平熱に。

自分も保たちみたいなの超回復能力あるのか？とか思っていました。

第五十五話、涼州からのお客様

一司一

本日は涼州から益州に部隊がやってくるので出迎えに上がりましたが、
なんか先頭で部隊を率いている人間が、いてはいけない人がいるよう
うな。

「おい、司君、久しぶりだね。」

涼州から琅？さんが益州にやってきましたよ、うん、涼州から兵隊
を連れて来てくれ、
と頼んだのはいいがまさか州牧本人がやってくるなんて・・・。

「なんでまた琅？さんが来ているんですか、州牧の仕事があるでし
ようが！！」

顎に手を当てて首を傾けて？という感じの顔つきしている琅？さん、
あれ？僕は当たり前前の事を言っただけですよねえ、何で疑問に思っ
たんですか？

「そりゃだって、保君が今度お父さんになるんでしょ、翠の母とし
ては、
翠の将来の旦那さんである保君の奥さんに会ってみたくて来ちゃっ
た、てへへ。」

おいおい、興味本位で簡単に来ていいもんじゃないだろう、

よいのか？州牧はそんな軽いのかよ！？

といいますか、桃蓮さんが涼州に来た時に会っているじゃないですか！！

まあ、色々と話したい事とかあるんでしょうねえ、保さんも琅？さんに話があるようですし。

「そんな軽く州牧が任地離れちゃ駄目でしょうが。」

大丈夫なのだろうか、州僕がいないという状況で。

「いいじゃない、司君たら堅いんだから、すぐに帰るし、とはいっても、大掃除とかあるんでしょ、それを手伝ってから帰るんだけどね。」

大掃除するのに必要な即戦力の部隊を派遣してくれと頼みましたよ、益州の駄目な太守を退場させるのに必要な兵やら武器が足りないの

で。

琅？さんが来なくても州牧代理である雷さんか琅？さんの部隊の副将である紅さんとか、

日や光とか派遣するにしても人はいるじゃないですか、まったくもう。

あと、すぐに帰るって、益州から涼州って大変な距離あるのに、新幹線が走っているわけでないのに、化け物ですか、この人はまったく。

「他にも適任はいるじゃないですか、雷さんや紅さんとか。」

「あつ、そうか司君は琅？じゃなくて、紅ちゃんに会いたかったんだね。」

いかん、琅？さんがニヤニヤしている、鼠を見つけていびる猫みたいになっているぞ。

今は奥さんですし会いたくないと言ったら嘘になりますが。

「安心して司君、紅ちゃんなら来ているから。」

「えっ！！！！！！！！！！」

琅？さんや、今なんとおっしゃいましたか？

私の聞き間違いで無いのならば紅さんを連れて来ていると。

まさかと思ってよく見てみると部隊の後続に馬に乗った紅さんの姿が見えてきた。

「お久しぶりです、司様、いえ、あなた。」

三カ月ぶりに会いましたが、うん、あなたって言われるのってグツときますね。

「なんで紅さんが此処にいるんですか？」

僕の当然の疑問に対して紅さんも困惑した表情をしながら答えてく

る。

「琅？様が益州に向かわれるという事なので、私が残ろうとしたのですが、

琅？様が、副将なんだから一緒に来ないと、としつこく言われました。」

大丈夫なのか、涼州に雷さんと日、光、菊花さんしかいないのかよ、どうするんだ緊急事態とか起きたりした日には。

「二人とも仕事に関する話なんかしてちゃ駄目だよ、色気が無いんだから、

司君は久しぶりに会った奥さんである紅ちゃんにかけ言葉があるでしょ。」

琅？さん、ニヤニヤしながら言わないでくださいよ、

まいったなあ、どうしてこの人はそうやって楽しむかなあ。

涼州にしても、益州にしても、琅？さんや桃蓮さんとか自由な人多いかなあ、

桃蓮さんの娘の雪蓮ちゃんも相当自由な子になりそうだし。

「久しぶりだな、紅、いや、おまえ、会いたかったよ。」

「私もです、あなた。」

ぎこちなくなっていましたでしたが、ハグして再会を祝しましょう、琅？さんがニヤニヤしながら此方をガッツリ見ているのが、やめて

くださいよ。

涼州から来た兵隊の皆さんが空気を読んで皆明後日の方向向いたりしているのに。

「久しぶりに会ったんだし今日は仕事は良いよ、琅？が残りはやっとくから、
紅ちゃんも司君と再開をいろいろと楽しめばいいよ、閨とかで、ニシシ。」

いやいやいや、何をおっしゃいますか、うさぎさん。

空気を読んで他向いている涼州から来た兵隊の皆さんも皆反応に困っているでしょうが。

ただ、「モゲロ」とか「リア充氏ねではなく死ね」とか呪詛の言葉も飛び交ってますが。

いつから三国志の時代にリア充なんて単語が知っているんですか。

「司君も早く涼州に戻ってきてよ、琅？達と一緒に戻るんですよ。」

益州が落ち着かないとおいそれと涼州に戻れませんよ。

来週に益州の大掃除ですが、大掃除したらおしまいではなく、それから新太守就任させてと落ち着くまですくなくとも三カ月はかかるんですから。

それに、医者として桃蓮さんの出産立ち会いとかもありますし、益州にはあと1年はいないといけないんですから。

「無理言わないでくださいよ、すぐに戻るなんて出来ませんよ。」

「そうですよ、琅？様、無茶言わないでくださいよ。」

僕と紅さんの夫婦二人で抗議ですよ。

「そんな事言うけど紅ちゃん、毎日司君に会えない早く会いたいってずっと言ってたじゃない。」

やはりそうなのか、結婚して落ち着いたとはいえ、洛陽の時と同じだったか。

もしかして、また来るのか毎日あの手紙が？あれは怖いからごめんこうむりたいんだが。

はあ、来ちゃったのは仕方無い、とりあえずは琅？さん達部隊の駐留展開させたり、

明日から益州と涼州の兵を合わせて益州全土に散らばらせ大掃除の下準備をしないと。

涼州から届いた量産化した火縄銃と火薬のテストもしないといけませんし、

やること多いし急がないといけません、それに夜は紅さんのご機嫌取りか。

やれやれですよ。

一保一

朝議を終え、午後は私の部屋で桜花さんと仕事をしていましたが、夕方になり部屋にお客さんがやってきました。

今日の昼に涼州から応援部隊が来たというのは聞いていましたが。

「なんで琅？さんがいるんですか！！」

頭が痛くなってきた、涼州牧本人が来ちゃってるよ。

「さっき司君にも言われたよ。」

頭が痛い、なんでこんな軽いんだ。

雷さんを州牧代理で任せたとかでしょうが、来ちゃ駄目でしょうが。

「琅？さんが来てくれたのは非常に心強いですが、何でまた本人が。」

予想の斜め上の答えが来るとは。

「保君の奥さんに会いに来たんだよ、保君もその歳でお父さんになるんだ、」

本当に色々頑張っているねえ、ニシシ。」

何に頑張っているかは言わずもがなですが、やめてくださいよ、一緒に今仕事している桜花さんが意味分かって照れているよ。

「琅？さんわざわざ来ないでも涼州で桃蓮さん親子と会っているでしょうが、

司君の華燭之典挙げた後とか、夜の宴席で飲み比べしたりしていたじゃないですか。」

「知っていてもいいのよ、保君もいちいち言う事が細かいんだから。」

いやよくないだろう、本人を知っているのに勝手に益州まで来ちゃうなんて。

私の話を無視するかのように、私の部屋を見わたす琅？さん。

「あつ、桜花ちゃんだ、お久しぶりー、保君と二人っきりで部屋にいるなんて、

桜花ちゃんも保君と付き合う事になったのかな？毒牙にかかっただけかな？」

オイオイ、この人は来てそうそう何を言っているんだか。

毒牙って、私は節操無しで女ならば誰でもよく食い散らかしている人みたいじゃないですか。

「違いますよー、やめてくださいよ琅？さん。」

ちよっと赤くなりながら否定されてもなあ、説得力無いですよ桜花さん。

私に好意をもってくれているのは知っていますよ、きっかけは長安で救出したからですかね？

好いてくれるは嬉しいが私と付き合うかは別の話で、一時的な憧れみたいなもんでしょう、どうせ。

「赤くなっちゃって、可愛いんだから桜花ちゃんは。」

そういつてニヤニヤする琅？さん。

なんか、このままだと気まずくなりそうなので話を変えましょう

「桃蓮さんに会いにいきましょうか、丁度私も仕事が落ち着いたので。」

とりあえず桃蓮さんに会いに行きましょう。

「良いじゃん、もうちょっと桜花さんをからかおうよ、保君だって桜花ちゃん可愛いとか思っているんですよ。」

桜花さんが怒ろうにも怒れなくなっている、此処は変なコメントをしないようにしよう、
もしコメントを間違えてしまつて今後仕事する時になんかギクシャクするのは嫌ですから。

いや、桜花さんと付き合っていないくて、ただの友達で、同僚だけですよ、

もし、今の会話とかが梅花さんに伝わったらもめるだろうな。

“桜花お姉ちゃんは私の物だー！！！”とか血走った眼をしながら叫んで、

梅花さんが襲いかかってくる可能性があるから怖いんですが。

とりあえず雑な対応ですが、話を他の事にしましょう。

「聞こえませんが、何を言っているのか、聞こえませんが、今から桃蓮さんの行きますよ。」

琅？さんの手を引っ張って、強引に私の部屋から連れ出して桃蓮さんの部屋へ。

「桃蓮さんならば今日は部屋で休んでいるはずですから。」

とりあえず、急いでこの人を桃蓮さんに会わせましょう。

琅？さんの手を引いて部屋から連れ出す、桃蓮さんの部屋に向かう。

「もう保君ったら強引なんだから、会ったばかりなのに寝台に連れ込もうなんて。」

ない、ない、ない、またそうやってふざける。

「ひ、酷い、保には私という妻がいるのに、また新たな女を連れ込

むなんて。」

桃蓮さん、部屋にいたんじゃないの？いきなり現れてショートコントを始めないでください！

「保は琅？の方が良いんだって、貴女はもう過去の女なのよ、お払い箱なのよ。」

琅？さんが更にショートコントに乗っかり始めましたよ。

二人が俺を期待した目で見ている、何そのショートコントに乗つかれというのか。

仕方が無い……。

桃蓮さんと一緒には祭さんがいたから、そうだ巻き込んじゃえ。

「安心しな、祭、お前もちゃんと可愛がってやるからな。」

下卑た感じの笑みを浮かべながら祭さんの顎を右手でくっを持ち上げて言う。

祭さんが呆れ果てていますね。

「はあっ、何でお主らはいきなりそんな事が打ち合わせ無しで出来るんじゃない。」

ため息をつかれて呆れられてしまいましたよ。

「「ぶっちゃけノリ！」」

おお、綺麗に三人の喋りが見事にハマったぜよ。

「祭ちゃん、ノリが悪いよお、突っ込むよりもこの寸劇に付き合ってよ。」

付き合わされる祭さんにとっては迷惑なお誘いですねえ、
とはいえ、巻き込もうとした私の為にも内心ノってほしかった。

「そうよ、祭はいつもノリが悪いんだから。」

まあ、祭さんはボケキャラではなく突っ込み役といえますか、
桃蓮さんに振り回されるキャラですからね、ノリが悪いと言われても仕方がないですがね。

「祭さん突っ込みだけでなく、ボケもこなせる万能選手にならないと。」

無茶な事言うなと後で祭さんに怒られそうですが。

「はあっ……。」

むうう、祭さんため息だけついてどっか行っちゃいましたよ、
どうしましょう、なんか微妙な空気になってしまったんですが。

興がそがれたといえますか、ショートコントはやめて、

とりあえず桃蓮さんの部屋でお話しましょうか。

「それにしてもこんな寸劇やるといつもならば何処から表れ乗っかってくる司君がいない。」

「そうね、司が来たなら、この愛憎劇即興芝居も色々話が膨らんだろうにねえ。」

「司君はほら紅ちゃんも連れて来たから今頃はむふふ、明日は皆で冷やかそっか。」

冷やかすとか面白そうだが、とんでもない事をサラツと言わなかったか、この人。

「紅さん来ているんですか？涼州は人手の方は大丈夫なんですか？」

「雷に日、光とかいるし平気だよー・・・・・・・・たぶん。」

多分って、大丈夫じゃないよなあ、まずこういう時って事件は起きるはずだし。

大丈夫なのだろうか涼州は・・・・・・・・。

第五十五話、涼州からのお客様（後書き）

皆さんのご意見、感想お待ちしております

第五十六話、益州大掃除（前書き）

ギャグが無いです、シリアス？な回です。

シリアスでもなさそうです。

それにしてもいつものように誤字脱字だらけとなりそうです。

第五十六話、益州大掃除

―保―

久しぶりに洋装を試してみました、うーん、どうもしっくりきませんね、

前世ではガタイが良かったのもあって日本人の割に洋装が様になっていたんですが。

あつ、どうも皆さん董擢孟高こと保です。

何をしょっぱなから悩んでいるのかと申しますと、今日のお祭りの為に、

司君が晴れの席だからと私と司君の二人の為に燕尾服を用意してくれましたよ。

よくこんな物を用意してくれましたよ、燕尾服に黒の皮靴、

うん、この時代の人間ではありませんね、当たり前前の事なんです。

母上や嵐さんはよく似合っていますと言ってくれますが、

あまりに異質な格好なので桃蓮さんとか「変な服」と言われましたよ。

当然ですよ、でも、この外史の世界、時代的に存在しないはずのチャイナドレスとか普通に存在していますしねえ。

そう言う点では、男物で燕尾服なり、モーニングコートがあっても

いいのですが、
とりあえず、本日の恰好は燕尾服、シルクハットですよ。

とはいえ、凄い違和感ですよ、古代中国、三国志の時代にイギリス紳士ですよ、

それか？これから内閣の任命式に行く前の閣僚みたいな姿になっていますよ。

大体、昼からやるイベントなのにタキシードなのはおかしくないか？ モーニングコートでは！

おかしいよ、と突っ込んだら無視しやがって司君め。

ワイシャツのカフスボタンなんか七宝焼きで出来ていて、
しかも董家の「董」とか描かれているなんて手間かかっているのが。

それにしましてもどうやったのでしょうかタキシードは頑張れば、
この時代でも作れるでしょう、生地とデザインだけですし。

司君、こんな物作るのに無駄なお金を使わないでください、
経済を回すため消費活動は正しい、とか言い訳は良いですから。

とりあえず、この珍妙な格好だけならまだしも、更に武装しろというのですから、
いや、分かっていますよ、今日のイベントは武器必要なのも分かります、

ただ、燕尾服にシルクハット姿で日本刀や方天画戟片手に持ってい

るんですか、

ごめん、そんな人見かけたら俺すぐに逃げて通報するよ。

まあ、現代日本じゃ捕まりますけど銃刀法違反で。

さて、司君の用意した服装の文句は置いておきましょう、とりあえずはこれから始まるパーティーの準備しましょう。

名目は母上董君雅の益州牧就任祝いと誕生日祝いの宴席となっているんですから、
こういう名目付けないと皆さん集まってくれませんからねえ、たっぷりもてなしますよ。

問題は、そこで出る料理の大半が今日のゲストの最後の晚餐になるかと思うと、
いけません、つつい、この日がやっと来たのかと思うと笑みがこぼれてしますね。

「くふふふふ……。」

さて、黒い笑みは抑えて今日のイベントの準備をしないといけませんね、盛り上げますよお。

サプライズイベント盛り沢山、洛陽からゲストもいますし、楽しんでいただけるでしょう、

さて、既に益州の至る所に城内にも兵を配置したりしました。

益州の各地に散らばせた兵達は成都の指示を待った状態で、

城からすぐに早馬もいつでも飛ばせるようにしましたし。

さて、シヨウの始まりまであともう少しですよ、フフフフフ。

—梅花—

今日の予定の最後の打ち合わせを保さんしよう、宴席会場になっている、

庭園に作られた特設会場に來たらいだが、なんだろう、声掛け辛い。

「くふふふふ……。」

ううん、声掛け辛いではなく、とにかく近づきたくない、物凄く怖いんだけど、

そうでなくても、見た事無い変な格好している段階で近付きたくないのに。

なに、あの邪悪な事企んでいますという笑い声は。

「梅花ちゃんこんな所でどうしたの？」

後ろから声掛けられて振り向いたら、不思議そうな顔している桜花お姉ちゃんがいる。

「保さんに用事があったてここに來ただけど、桜花お姉ちゃん、なんか知らないけど、

珍妙な格好した保さんがいるけど悪い笑み浮かべて笑っているけど、大丈夫なのかな？」

桜花お姉ちゃんは保君を見て、私の両肩を掴んで言ってきた。

「保さんと司さんが悪い顔している時は、そのまんまろくでもない事企んでいる時だから、怖いと思ったのは仕方ないよ、今日の予定を考えているんでしょうね。」

笑う事ではないんだろうけど、恨み骨髓と言いますか、相手が相手でろくでもないから、益州の大掃除を、財政改革、民からの支持率増を出来るから嬉しくて仕方無いんだろうが。

やる事は相当派手だし、人としてはろくでもないんだろうけど・・・。

とりあえず、本番でその笑いはしないでね、怖いなんてもんじゃないだろうから。

周異さん、張任さんあたり引くくらいで済めばいいんだけど。

一司一

遂に尾の日を迎えましたよ益州に着任してから三カ月、最初のビツクイベントですよ。

さてさて、時間になりましたし、宴席が始まりますね。

中国風の宴席ではありますが、司会進行を僕と保さんがやる変わった形式にしましたよ、
サプライズイベント盛りだくさんですからMCいないと進め辛いんですよ。

とりあえず、こんな目出たいイベントですので燕尾服にしましたが、うーん、保さんに不評ですねえ、燕尾服知らないこの時代の人ならまだしも。

タキシードではなく燕尾服にしたというのがこだわりですよ、まあ、保さんに“昼とかにやるイベントだからモーニングコートじゃねえ？”

細かいんだから保さんは、まったくもう。

それにしても朝から今日のイベントを考えていると笑みが止まりませんね、
遠足前日の小学生みたいなもんでしょかねえ。

「司、そろそろだぞ。」

おおっと、保さんに呼ばれましたね、益州内の太守、県令が揃いましたね、
洛陽からのゲストも準備できておりますし、前益州刺史の郤儉ですよ。

益州ぼろぼろにして賊を大量に出して散々涼州に迷惑かけてくれた
怨を返さないかね。

さて、時間になりました、皆揃っています、始めましょう祭りを。

卻儉の出番だけは少し後なのですがまずは今回のMCである保さん
と僕の挨拶から。

「本日は董君雅の益州牧就任及び誕生日に参加いただき誠にありが
とうございます、
本日、この宴席の司会をさせていただきます董君雅長子の董擢孟高
です。」

「同じく、本日の司会をさせていただきます、李儒文優でございま
す。」

こんな感じで始まる宴席なんてこの時代には無いでしょうから、
まあ、楽しんでください皆様に喜んでいただけるようにしているの
ですから。

まずは、皆さんにお酒を進めないといけませんね、まずは最初のサ
プライズといきましょう。

「えー、皆さまの手元にお酒の方が揃ったようですので乾杯をさせ
ていただきたいのですが、
乾杯のご挨拶を本日の御来賓である涼州牧であられる馬騰寿成様お
願いたします。」

保さんが司会を順調にこなしていますね、それにたいし琅？さんは事前に話しておきましたが、やはり普段とは全く違いますし、こんな風な挨拶は恥ずかしいのか慌てていますね。

「董君雅様益州牧就任、及び、お誕生日おめでとうございます、私事でございますが、私も三か月前から涼州で州牧の任に着かせてもらっておりますが、これも前任の太守であったお姉様、董君雅様の元で学んだおかげであります。」

「それではご指名ですので借越ではありますが、乾杯の発声をさせていただきます。

皆様、恐れ入りますが酒器を手にご起立、ご唱和をお願いいたします、

董君雅様、そして此処にいらっしゃる皆様のご健康を祈念しまして、乾杯！」

「」「」「乾杯」「」「」

見事に馬騰さんの乾杯の挨拶が終わりましたよ、ふふふ、良いですねえ、実にふざけた乾杯の挨拶ですよ。

此処にいる人間のうちどれ程が健康なんか気にしないで良くなるんですから。

皆様にもっともお酒と食事を楽しんでいただきますよう、末期の食事なんですから、しっかり味わってくださいねえ。

董家、涼州とかを甘く見た馬鹿共にはツケを払ってもらいましょう。此処三カ月好き勝手やらせていたのに目をつぶっていたんですから、この日の為に、ええ、いい具合になめてくれましたよ、ありがたい事で。

宴席もはじまりまして3、40分経ちましたね、そろそろですかね、皆さん良い感じで酒が回って来たようですね。

対照的に益州、涼州連合の人間は皆真っ蒼な顔していますよ、そりゃそうですよ、これからこの宴席が一気に変わるのですから。

保さんが合図をしましたね、侍女に連れられて月ちゃんが退出しましたね、

そして、城の門は閉じられ、誰も城から逃げられなくなりましたよ。城どころか、会場の周りも全て武装した塙に囲まれていて逃げられないですが。

「えー、皆様楽しんでもらえているようで宴席を用意したかいがありました、ここで董君雅より皆様への贈り物があります、ただ、その前に、今日、この宴席の為に洛陽より届いた手紙がございますので、読ませていただきます。」

招待客の連中は何事だろうと思いますよねえ、これから青ざめてい

ってもらいましょう。

さあ、保さんお願いします、徹底的にやってあげてください、何進のおっさんに頼んで用意してもらった書類なんですから。

「靈帝陛下からの親書でございます。」

さあ、とんでもない名前が出て来たからみんな一気に固まりましたねえ、

ふふふ、それに対し益州涼州勢は余裕が出てきましたね。

頼みますよこれから始まることで動けないなんていうのは困るんですから。

皇帝からの親書と聞いて会場内は驚いていますが、ただ、皆まだ余裕がありますね、

董家が箔付けで皇帝の名前を出した位に思っているんでしょうね、甘いですよ。

「では、代読させていただきます。」

信じられないでしょうねえ、皇帝からの書類を普通に保さんが読み上げるんですから、

それだけでも信じられないんでしょうが、内容はもっと信じられないでしょう彼らには。

「益州牧董君雅に命ずる、太守、県令の地位を悪用し横領、搾取などの恥知らずの行いを行う、漢に刃向いし痴れ者共の処罰を朕は命ずる。」

こんな勅命が待っているとは思ひもしなかったでしょうねえ。

「皇帝陛下からの勅命でございます、皆様御覚悟を。」

僕の一言で会場に一気に兵隊をなだれ込ませましたよ。

皆あまりの内容と突然の出来事で動けなくなっていますね、簡単に身柄抑えましたよ。

「クククク、馬鹿共が見事に引かかりましたね、保さん。」

いやあ、あまりのおかしさにいついっいつい声をあげて笑ってしまいますよ。

「司君、本性表すのはやいですよ、もう少し厳肅にいきましょうよ。」

保さんがそう言うと、涼州、益州連合の皆さんは笑っている。

おさえつけられて呆然となっていた者達が笑い声で正氣に戻ったようですね。

「何をするんだ。」「私を誰だと思っているんだ。」「貴様ら許さんぞ」

うーん、陳腐な台詞ばかりですね。

とりあえずやかましい、叫ぼうと思ったら。

ブン

風切り音が聞こえたと思ったら方天画戟で一人の太守の首が飛ぶ

「みなさうん、何か勘違いしていませんか、貴方達は朝敵なんですからね、いつでも殺せるんですよ、調子に乗って口開いているんじゃないよ、屑共が。」

笑顔で間延びした言い方で保さんが脅しあげていましたよ。

いやあ、一人首をはねて殺気をちょっと見せただけで一気に黙りましたね、

あれだけキャンキャン吠えていたくせに一人首はねられたくらいで黙るなんてヘタレ共め。

「では、最後の招待客でございます。」

保さんの台詞で黙っていた皆がどういう事だという感じになりますね。

縛り上げられ猿轡された前益州刺史の郤儉が連れてこられ、地面に転がされました。

捕虜とかならばきちんと扱いますが、彼らは叛徒共ですからゴミ以

下の扱いですよ。

「皆様何でこのようになったかとお思いのようですね、ご安心ください、

キチンとした理由がありますので、貴方達の罪を教えて差し上げますから。」

「と言いましても、一発で終わりますよ、三か月前に出した五分の減税ですね、

皆さんいけませんねえ、私達には五分減らした分で納め民に減税あった事教えないなんて。」

僕が発表したこれだけで、此処にいる全員が公金横領という形で処刑出来ますよ、
安心してください、僕達はそんな甘っちょろくないですから。

笑顔で伝える事伝えて皆を絶望させてあげましょう。

「それだけで無いですよ、五年前から調べていますが派手に皆さんやっていますねえ、

横領、窃盗、密売など色々やっていますねえ、皆さん、いやあ、見事という程で。」

各人の罪状をまとめた竹簡を当人に配って見せてあげることに、
みんな驚いていますねえ、詳細にまとめてあるのですから各々の悪事を。

「馬相、担当地域での略奪、賄賂、殺人で処刑、趙祗は略奪、殺人で処刑……。」

という感じで此処にいる太守、県令全員の罪を発表してあげました。

いやあ、疲れますねえ、これだけ犯罪者だらけですと。

「前益州刺史の郤儉殿、安心してください忘れていませんよ、貴方も刺史時代公金の横領など悪政をした罪で処刑とさせていただきます、仲間外れではないからご安心を。」

仲間はずれでない、ご安心をつて酷いですねえ、言う事が保さんはまったく。

「あつ、そうそう安心してください、皆さんのご家族とももうすぐ会えますよ、

あの世で家族仲良く過ごしてくださいね、既に各々の城に兵が派遣されておりますから。」

うわああ、凄いなあ、抑え込まれた連中とかでいい歳した人間が泣いているよ、

あれほど泣き崩れる人間久しぶりに見たな。

太守だけが犯罪とかではなく、その嫁とかもそれで贅沢しているとかですから、

まあ、悪いですが、民衆が血を望むので彼らへの餌となってもらいますから。

「ひっ立てなさい」

和様の声が響きました。

「あつ、皆さん今すぐ処刑ではないから安心してください、
……どちらにしても処刑ですが。」

空さんも言う事が黒いなあ、最後にボソッと凶悪な事を言うなんて。

あれ？これから処刑場で皆仲良く打ち首かと思いましたが変わうよう
で。

保さんのアイデアは、彼らが悪政をしていた担当のエリアで公開処
刑とは、

董家の本気度合いを見せるという事ですか、そして、五分の減税の
再度発表と。

後は、彼らが不正にため込んだ貯蓄を回収して民に戻したり、
公共事業にと益州統一が簡単に出来るように利用させていただきま
しょう有効に。

ふう、これで益州の統一の目処が立ちましたよ、さてさて、
今回みたいない件もありましたし、人手不足になりますが、
この前お話ししました5人はどうなるでしょうかねえ？

張任さんや周異さん達が太守として残ってくれるんでしょうかねえ？
まあ、とりあえず今は此処にいた馬鹿共の処罰の準備をしましょう
か。

あー忙しい、忙しい、普段の仕事だけでなく、公開処刑までやって
あげたりなんて。

そうだそうだ、ゲストにゲストは特別と伝えないと。

「卻俟さんは被害が益州全土ですから何処で処罰すべきか悩みまし
たので、

医学発展の礎になっていただきます、今度、医者教育の一環で解
剖をしてあげようと、

普通は死体でやるんですが生きたまま全身をバラバラに切り刻ませ
ていただきますので、

平気ですよ死ぬまでの時間が斬首と比べて少し長い程度ですから。」

肝っ玉小さいですねえ、あっという間に気絶しちゃいましたよ、
よくこんな小心者がこんな派手に悪事を起こせるとは世の中面白い
もので。

「医学発展の為の礎になれるなんて光栄です」と喜んでほしかった
のになあ。

さて、仕事頑張りますか。

第五十六話、益州大掃除（後書き）

とりあえず益州統一が一步進みました回です。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第五十七話、周異さん、張任さん太守の席はいかが？（前書き）

この話を書いている最中に誕生日を迎えるとは・・・。

ヤン・ウェンリーじゃないが誕生日の先延ばしが出来ないだろうか、おっさんになったのだから誕生日が嬉しくないです・・・。

第五十七話、周異さん、張任さん太守の席はいかが？

一保一

およそ一カ月ぶりに成都に帰ってきましたよ、思ったよりも成都は落ち着いていますね。

あれだけ派手に大掃除をしたのですから、しかも各地に兵を派遣して、

不安がなくなかったのですが、民達は今回の掃除を歓迎してくれました。

税金を下げ民を助け、不正をしていた太守達を遠慮しないで処断したのですから。

とはいえ、さすがに大変でしたね、前任者達という罪人を担当地域に連れて行き、

住民を集め、前任者の悪事を公表し公開処刑を行い、そして、再度減税の発表、

董家の責任者として謝罪をして、今後二度と起きないようにすると。

当初の予定では成都の城で一気に即決裁判にして処刑だった予定を変えたのですから、

忙しくなったのも仕方が無いんですがね、私の発案ですし。

本当に上手いききましたよ、笑いが止まらないくらいに。

益州にはびこる痴れ者の大掃除の目処がつかしましたよ、やる事は過

激ですが、
中途半端にやって後々もめるのならばここで被害を出さないように
しないと。

益州のまともな太守、県令達は当然助けましたが怯えたでしょうね
え。

まあ平気でしょう、当初の予定である太守達の罷免権利とかだけだ
と危険なのではと判断し、
念のためにとすぐに洛陽に行って勅命という形にしておいて正解で
したね。

掃除をするのはあくまでも皇帝の指示という形にして董家への不満
を減らさないと、
手を下すのも絵を描くのも董家ですが、あくまでも上からのご意思
という事にすれば。

司君らしい悪知恵には本当に感謝しますよ、確かに董家は大掃除は
したいが、
董家の意志で掃除をした日には、董家が恨まれてしまう可能性がで
かいですからね。

それに兵隊達も、あくまでも皇帝陛下の勅命であるという形での仕
事ならば、
彼らが益州の元仲間や元上司であり知った顔を討つ嫌な仕事も、
“勅命だから仕方ないんだ”と己に言い聞かせられ負担を少しは減
らせるのですから。

「保さんお帰りなさい、お疲れでしょうが報告をお願いしたいのですが。」

司君が迎えに来てくれましたか。

久しぶりに戻った成都の城で一つ風呂浴びてのんびりしたいんですが、お仕事ですから、勝手な事は出来ませんし、ちゃちゃっと終わらせましょう。

謁見の間に着きますと、母上、父上だけでなく、皆さん勢揃いですね。

「董擢孟高ただ今戻りました。」

包拳礼をして帰郷した事を伝えました。

「よく戻りました、報告の方を。」

母上は久しぶりに私が帰ってきて会えた事を喜んでくれているようで、

仕事での真面目口調ではありますが本当に喜んでいてくれていると表情から分かります。

戻った事を伝え報告を急いで済ませちゃいましょう。

「巴郡太守であった馬相及び一族、また共に不正をしていた者達へ

の処断も、

後任太守としまして桔梗さん、もとい厳顔殿への引き継ぎも無事に終わりました、

ただ太守を含め上のかなりの数が一気になくなったので後継の太守となったはいいが、

当分の間は書類仕事に忙殺されてしばらくは酒を飲む暇が無いと愚痴っていますが。」

私の発言に大広間にいる人間達はドツと笑いだす。

厳顔さん、紫苑さん、祭さん、桃蓮さんが今の益州の人間で酒飲み代表でしたからねえ、
少しくらいは我慢してもらわないといけませんね、今度秘蔵の酒を持っていますか。

「酒飲みの桔梗が飲めないなんて余程の事態ね、それを笑って話すなんて酷いんだから保も。」

桃蓮さんは愉快そうに笑って言っております。

「堅殿も酷い事を、自分が飲む事が出来ないから仲間が出来たと喜ぶなんて。」

祭さんが言うように、どうやらお酒を飲む事が出来ない仲間が出来た事を喜んでいるようで、
厳顔さんは仕事が落ち着いたら飲めますが桃蓮さんは妊娠ですから当分の間無理ですが。

「ぶー、じゃあ、祭も桔梗の仲間として、当分の間禁酒ね。」

「堅殿、儂の人生の唯一の楽しみを奪うというのか!!」

桃蓮さんと祭さんのやり取りにまた室内でドツと笑いが起きる。

笑いが起きたが、冷静に考えてみよう、妙齡の女性の唯一の楽しみが飲酒。

・・・・・・涙が、強く生きろ、祭さん。

私の報告も終わり、皆も報告など業務が終わり、雑談となりましたが、

室内を見渡すと周異さんと張任さんがいらっしやいます。

「それにしましても周異さんも張任さんも此処にいるという事は益州に残ってくださいと。」

前に話をしていた件を話してみる。

「益州に残った方が楽しめると思ったからな、董擢殿や李儒殿といった軍師勢の、

特にお二人の若いながらの見事な手並み等学ぶ事はまだまだあるなと、

私だけでなく娘の冥琳に勉強させるにも益州は良いかなと。」

冥琳って、あの美周郎ですよ周瑜公謹ですよ、本物の天才に勉強を教える日が来るとは。

演義では諸葛亮の方が評価されているが、私からしたら周瑜こそが

天才ですよ、
それにしても、益州の未来は明るすぎますよ、どうしましうかねえ？

時代が目茶苦茶なこの世界のおかげもあり本当ならまだ世間に出てこないはずの世代もいて、
司馬朗、司馬懿といった司馬一族、田豊、沮授、審配といった現役の軍師の優秀な事。

更に将来有望であろう賈？、陳宮は保育園にいる、これで周瑜も来るのですから。

何この圧倒的な知力は、エイジャの赤石を使ったカーズ並みに反則ですよ我ながら。

ただ人材確保の手は緩めませんよ、今度荊州にいつて水鏡先生を口説きに行きますし、
こういう優秀な先生を登用してバンバン優秀な人材を育ててもらわないと

そうですねえ、更に徐庶、諸葛亮、？統、荀？、荀攸、鍾？、郭嘉、程？、魯肅、陸遜、法正、
あまり欲張るといけません、こういった優秀な軍師を手に入れないといけません。

武将としては孫策、孫権、張遼、呂布、華雄、馬超、馬岱と将来有望なのがいるから、

領地運営を任せられる優秀な軍師を多数用意しないと。

むふふふ、「勝った第三部完！」この台詞を言っても益州涼州が
圧勝してしまうな、

うぬぼれではなく、今のままなら一人勝ち目に見えていますね、い
かん、気を引き締めないと。

「保さん、保さーん、もしもーし、もしもし保さん。」

はっ、司君に名前を呼ばれていた。

「おお、すまん、ちょっと考え事をしていた。」

素直に謝りましょう。

「むふふふ、って、笑う考え事って、何を考えているんですか！
？」

桜花さん赤い顔しているが何か勘違いしていない？人材についてで
すから。

「まあ、董孟高様が急に邪悪な笑みを浮かべるのはいつもの事です
から。」

ぐはっ、百合さん酷いよ……。

「周異さんだけでなく、娘さんの周瑜さんという天才が学んでくれ
るなんて、

益州には将来有望な天才だらけだなと思ったら笑いがこみあげて来て。」

正直に話しておきましょう、やましい事は一切ありませんし。

「まだまだ子供で勉強中な冥琳をそこまで評価してくれてありがとうございます。」

周異さんは親として娘が褒められた事が嬉しそうで、いやいや、周異さんも凄いが周瑜なんて反則ですからねえ。

「保さん、今の涼州益州連合ならば総統閣下が出来なかった千年帝国が出来ますね。」

ミレニアムオブエンパイアですか、ふふふ、そうになったら司君に少佐になってもらいましょう。

「とりあえず娘さんである周瑜さんは、私と司、軍師勢で徹底的に鍛えてあげますね、

そうですね桃蓮さんの娘である雪蓮と一緒に学んでもらいましょう。」

ダンキン、もとい断金になってもらいましょう、折角、孫家、周家がいるのですから。

ダンキンだったら日本に昔あったドーナッツ屋になっちゃいますね。

「保、親の私が言うのもなんだけど雪蓮は勉強なんてしないと思う

んだ。」

困惑したような表情で桃蓮さんが話しかけてきました。

それは分かっております、桃蓮さんと同じで勉強と言ったら逃げ出すタイプでしょうから。

「今、何か失礼な事思わなかった、保？」

「桃蓮さんの困惑した表情も綺麗だなと思ったんです。」

あぶねえ、相変わらず凄い勘しているな、不用意な考え事すら出来ないとは。

どうでもいいが、周りの皆“バカップル”“モゲロ、むしろ擦り切れる”とか呪うな。

「話戻しますが逃げるのはなんとかします、司君と私が逃げられないようにしますから。」

ニヤツとする、皆が一瞬青い顔したのはなんででしょうかねえ、そんなひどい事はしませんよ。

ちなみに成都の街では、惨劇が控えているを持ち前の勘で感じ取る娘が。

「なんか今凄いゾクゾクとしたんだけど、風邪でも引いたのかな。」

おいしい、勘だったんだが、勘違いしたか、忍び寄る危険に気付かないとは。

「これから益州の皆と世話になるので皆に既に預けたが董擢殿にはまだだったので、

周異ではなく今後は私の真名、海琳はいりんと呼んでください。」

「ありがとうございます、では私も真名である保を預けさせていただきます。」

これで問題無いですね、ではもう一人の張任さんはいかがでしょうかねえ。

「海琳さんは了承いただけましたが、張任さんはいかがですか？」

私の呼びかけに対し張任さんは此方を向いて微笑んでから。

「和様には既に伝えましたが益州は人手不足でしょうし手伝わせていただきます、

正直今回のような太守達の罷免とか強引なやり方に同意できない部分もあります、

ただ一緒に仕事をした限り、皆さん真面目ですし信用できると思いましたので。」

全然問題無し、超OKですよ、大体、完全なる信用なんて無理なん

ですから、
元々人間は他人の事を理解出来ることなく、理解した振りなんです
から。

流石に口には出しませんよ、こんな捻くれた私の思想は流石にね。

「ありがたい事です、まだ信用できない部分があってもかまいませんよ、
これから私達にお付き合いしていただけたら信用していただけま
すよ。」

張任さんの目を見つめながら笑顔で答えてあげました。

「これからよろしくお願いします、我が真名は水仙すいしえんです。」

水仙って中国語で発音させても日本語とあまり変わらないのね、初
めて知ったよ。

って、私は何の話をしているんだ。

それにしても、此処で場がかき回されることになるなんて思いもし
なかった。

「保君、水仙ちゃんにお付き合いをって、桃蓮ちゃん、嵐ちゃん二
人の奥さん、
あと翠という婚約者だけでなく、桜花ちゃんに続いて水仙ちゃんも
毒牙にかける気なんだ。」

琅？さん貴女は何を言っているんですか、キシシとか笑わない。

なんか嫌な予感がするので思いつき否定しましょう。

「毒牙って何です！？私は桃蓮さんと嵐さんという奥さん二人で満足しているんですから。」

ハーレムなんて体力と時間、金が消えるばかり、という石油王の愚痴がありますが、

そんなに何股もしたら体がもちませんよ、いや、そりやすごく魅力的ですよ。

綺麗、可愛い、知的、活発いろんな魅力的な女性がいるのはいいですが。

「妊娠中は男は浮気しやすいって聞いていたけど私の目の前で他の女を口説くなんて。」

桃蓮さん、何乗っかっているんですか！！！！

「桃蓮さん、明らかな嘘泣きして話に無駄に乗っからない！」

怒っておきましょう、まったくもう、話がこじれる前に。

「寝台で乗っかるのは保さんの方でしょ？」

司君、そんなアブラギッシュなオヤジ臭いセクハラ発言しない！！！！

「私を口説いてくるなんて保さんは年上でもいいのかしら？ 私にはちょっと年下過ぎるけど、でも、保さんは家柄も良いし、他の人よりも頭良いし、可愛らしい顔しているし、強いし、早く結婚しろって最近お母さんうるさいけど今まで相手がいなかったし、それに桃蓮さんから前に聞いたけどあっちの方も凄いつて……ポッ。」

おいおいおいおい、何を言っているんだ水仙さんや！！

打算働いているし、母親に結婚せかされているとかリアルな事言っているし、

それと、桃蓮さん、妻が夫婦の性生活をばらすなよ！！！！

「水仙さんそんな結婚とかで焦らないでも貴女はとても魅力的な女性ですから平気ですよ、

あと、桃蓮さん何んでもない事をバラしているんですか！！！！」

怒る時は怒るとかしっかりしておきましょうね、って、地雷踏んだか……？

「魅力的って、やはり保さんは私の事をなのね、ふつつか者ですが……。」

水仙が三つ指ついてきましたよ。

「三つ指をつかないで、勘違い、言葉のあや、気が早すぎるよ！！！」

なんか話が変な事になってきているよ、何故に？結婚に焦っている故の暴走なのか、

これが婚活女子の怖さなのか、暴走なのか、誰か止めてくれー！ー！！！！！！

そして、此処でもさらに話をかき回す人がいるんだよなあ。

「やっぱり保は浮気する気だね、私以外の女に魅力的なんて口説くなんて・・・。」

だから、嘘泣きはやめてくれえ、嘘泣きと分かっていても女の涙は見たくないの。

「お願いですから何でその妊娠しているから私が浮気するってそんな話に持っていくの！

嘘泣きでもやめて、女の涙は見たくないんですから！！！！」

アーーー、周りの皆がニヤニヤして楽しんでいるよ、海琳さんは呆れているが。

「嘘泣きッて、私を信用してくれないのね、愛していないのね！！」

どう見ても顔が笑っているじゃないですか、嘘泣きどころか、でも、分かっていても。

「何でそんな話が飛躍するの！！愛している！桃蓮さんを愛しているから！」

あー、俺は何を人前で言っているんだ、って、皆こっちを見てニヤケるな、

あと、お願いだから嵐さん、寂しそうな顔をしないでくれよおお。

「嵐さんも勿論ちゃんと愛しているよ！安心して。」

なんかついでも無理矢理言っただけみたいな感じだけど、まあ平気か笑顔になってくれた。

って、トラブルは、台風はまだ過ぎ去っていないのね……。

部屋を見渡してみると。

「保さんに毒牙って、まだそこまで、でも、長安で助けてくれた時良いなと思ったし、

さっそうと現れて格好良かったし変な蝶の仮面はいやだけど、毒牙にかかるっていずれ……。」

桜花さん、何、顔を赤らめて照れているんですか！！ないから奥さん二人を愛しているの！

あと、あの時かぶった蝶の仮面は許して、あれを用意したのは司君だから。

そういえば、最近成都の街で謎の蝶の仮面をした怪人が出ると噂だが、

うん、犯人は間違いなく司君だろうな、退治するしかないのか。

て、謎の怪人の事考えるのはいいや、って、はっ、殺気が！！！！

ビュン

殺気を感じて状態をそらして穂先を避けたが、今額のあたりを狙った槍の薙ぎ払い来たぞ。

「桜花お姉ちゃんは私の物だああ、桜花お姉ちゃんの命の恩人でも許さない、散れ！！！！」

来たあー！ー！ー、お姉ちゃんLOVEっ娘という危険人物が、危ない、槍はやめて、本当に刺さると死んじゃうから。

「梅花さん落ち着いて、お姉さんとは何も無いから安心して下さい。

槍はやめて、刺さったら死んじゃうから、危ないからお願いだから抑えてー！！！」

駄目だ、此処はまずい逃げないとヤバイ、三十六計逃げるにしかず！！

「保さん、姉妹丼にすれば桜花さんも、梅花さんとも上手くいくよ。」

おい、司、おまえは何を言っているんだ！！！！！！

「姉妹丼って、私にも変な事する気か、この色情狂めえええ！！！！

!!!!!!」

違う違う、あと色情狂は酷過ぎる、そんな色狂じゃない!!

「保さんに私と梅花ちゃんが二人揃って愛されるなんてそんな、でも、もし迫られたら。」

桜花さーーん、帰ってきてー、無いから、そんなひどい事しないから!!!!

「ああつ、桜花だけでなく梅花もだったなんて、祭だけならまだしも。」

桃蓮さん、何を言っているんだ、話を更に面倒臭くしないでくれえ!!!!!!

「堅殿、お主は何を言っておるんじゃ!!!」

祭さんが抗議開始しましたよ、良いぞ、将来の呉の突っ込み役として桃蓮さんを頼む。

「あら、祭に私は言ったでしょ、祭だったら保の奥さんに加わっても良いよと、祭だって興味が少しはあるみたいな事言ってたじゃない、素直になっってみなよ。」

貴女さっきまで、愛人作るのねとか抗議していたくせに、今度は進めるのかよ、乗っかって馬鹿ネタやるにしてもどっちな立ち位置は桃蓮さんの

!!

夫を困らせるのはやめなさい。

「保君、翠が将来了承したらか言っていたけど、妻としてすぐにも迎えてくれるよね!？」

じゃないと不公平だよね、嵐ちゃん、桃蓮ちゃんの二人の今いる奥さんだけでなく、

水仙ちゃん、桜花ちゃん、梅花ちゃん、祭ちゃんと4人も増えるなら翠を今すぐでも。」

あああああー！ー！、琅？さんが邪悪な笑みを浮かべて更にきたああ、

面倒臭くなるからやめてくれえええ。

「保君のお嫁さんに勝手に加わりとうとするなー！ー！！！！保君のお嫁さんは私なんだ！」

此処で母上が乱入してきたー！、って、まずい、母上まで斬馬刀振り回したら駄目だって。

おさえて、母上に梅花さんとかが暴れるとなると止めるの危険なんですから。

「とりあえず危ないから海琳さんは急いでこの部屋から逃げた方がいいと思うな、僕は。」

芍薬さん、貴女のお知恵で何とか出来ませんか？逃げないで。

ああああっ、目で伝えたら目線そらされたし。

「そ、そうだな、芍薬さん、それにしてもこの状態誰か止められないのか？」

クールビューティータイプの海琳さんが慌てている、とりあえず慌てているのも良いですが助けてください、って、海琳さんも目をそらした！

「こういう風になってしまいましたら誰も止めるなんて事は出来ないのではないかと、もしくは、当事者である董孟高様に頑張っていただくだけかと。」

やめて百合さん見捨てないで、本当に助けて、怖いので、お願いしますよ！！！！

「芍薬ちゃんも、百合ちゃんも、皆無理だね、空ちゃんでも無理か、見ない振りしかないか。」

芍薬ちゃん、百合ちゃん、海琳ちゃん、新しく出来た点心の美味しいお店に行きませんか？」

牡丹さん待ってー、僕が点心のお代全部払うから助けてええー！ー。

「「賛成!!」」

逃げられたああ、どうする、まずい止められないのか、こうなった
ら場外に逃げるしか。

ギギーーーーガチャン

ああーーーー、逃げる4人が被害を大きくしないように部屋に閉じ
込められた、

誰か助けてくれーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

第五十七話、周異さん、張任さん太守の席はいかが？（後書き）

どたばたコメディーとしてちゃんと出来ているでしょうか不安です。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております＜（＞

それにしても、またおっさんになったのか・・・。

第五十八話、孫尚香のお供は何に？（前書き）

まだ小蓮は産まれておりませんが、
今日は保の子供になるもうすぐ生まれる小蓮に関するお話を。

第五十八話、孫尚香のお供は何に？

—祭—

「堅殿は此処にいるんじゃないか？」

堅殿に用事があったって成都城の中を歩いて探しているが一向に見当たらない、

執務室にも、堅殿の部屋にもいないし擢殿の部屋にもいない。

「あつ、堅殿こんな所におったんじゃないな。」

何処にいるか分からないら調練場に行ってみると堅殿がいたから呼びかけたんじゃないが。

「祭、今大変な事になっているからごめん、ちょっとまって。」

そういつて堅殿の視線の先を見るといつものように二人が向かいあっていた。

ただ、いつもと違うのが儒殿と擢殿二人とも調練という感じではなく、

向かい合って二人とも殺し合うかのような殺気を飛ばしているのが。

「保さんは間違っている！なんで当たり前の事が分からないんだ！
！！」

抗議の度合いといい、殺気の飛び方といい儒殿は怒気を全開で発しているのが。

全開なのは儒殿だけでなく擢殿もじゃな、二人のあまりに凄い殺気が辺りを包む、

前にも感じた事があるが凄まじい覇気じゃ、戦慣れしている儂でもそばで見ているのが辛い。

自分の背中に冷たい汗がツーツと流れるのが分かる、まだまだ小童なはずが、

あいかわらずこんな桁違いな量の殺気を平然と放っているのが。

もし、自分がそのどちらかだったらあの殺気に気圧されて向かい合っているのか？

それにしても、見た限りじゃと色々やりあっているようじゃが、どうやらここで儒殿が勝負に出るようじゃな、だが襲いかかる前に擢殿に話しかける。

「保さん、痛いのは平気かい？」

何故わざわざ痛みについてなんて聞くのじゃ、何をする気なんじゃあやつは？

「苦手だよ……、痛いのは」

構えながら返答しているが何ができるのか？擢殿もかなりの警戒をしているようじゃが。

「それは気の毒なことになる、この攻撃は……痛いよ。」

そういつてあやつは全身が脱力しているようじゃがなにか準備が出来たようじゃな、

ブランと右腕をさせたとおもったら、体をひねり弛緩した右腕の一撃が。

ベシィーーン

凄まじい音をたてて擢殿の背中に一撃がきまる、その勢いすさまじく、

打ち込まれた個所の服だけでなく肉が裂け血を流し、あまりの痛みで悶絶している擢殿。

それで終わらず、更に体に何発も、そんな右手での一撃が何度も打ち込まれていく。

「これが使えるとは、凄いの儒殿は。」

まさか、此処でこの技を見られるとは。

「ねえ祭、あれは何なの？凄い音がするし保は相当な苦しみ方だけだ。」

堅殿は知らんのか、あの技を。

「鞭打じや堅殿、脱力し肩から先を水だと思い込むようにしなせ
た腕を高速で振りぬき、
その一撃は凄まじく、どんな達人も人体で鍛え上げる事が出来ない
皮膚への一撃、
その一撃は鞭のようで、喰らった人間は想像を絶する痛みに襲われ
る程の技じや。」

それにしてもあやつはあの若さであのような技を使いこなすとは・
・。

「痛いだろうねえ。」

儒殿が嫌な嘲るような勝者の見下すような笑みを浮かべながら喋る。

勝ったと思ったか余裕のある儒殿に対して擢殿が不敵に笑いながら。

「思い出した・・・・鞭打だな、これは・・・・。」

それに対し痛みに悶絶しながらも笑みを零す擢殿、
擢殿も鞭打を知っているというのか、普通の人間では知らないよう
な攻撃を。

「知っているのか・・・・。」

儒殿は向かい合う擢殿の発言に驚いたようじやの。

二人共こんな物を知っているのが儂からしたら驚きなんじやが。

「むかし、バキで読んで知ったのを思い出した。」

バキとはなんじゃ？読んでいた？とか言っているが、何なんじゃろうか？

「使えるというのか？」

儒殿の動きがとまった、どうやら使えるという事に驚いているようだが。

いや、儂も驚いているぞ、鞭打を使える人間が二人もいるのが、しかもどちらも小童。

「オーガが言っていたぞ所詮は女子供の使う護身技、大の男が使用うシロモノじゃねえ」

そう言いながら先程まであまりの痛みに苦しんでいた擢殿が動き始める。

「せっかく身に付けたものだし……、使ってみようかな久しぶりに、
たしか……こう……、全身の……液体であるように想像して。」

ベシーーン

先程とは真逆の状態になる、擢殿が鞭打を何発も儒殿に打ち込んで

いく、

今度は儒殿が、服、そして皮膚が裂け苦しんでいる。

さらに追い打ちが、儒殿の体に何発も鞭打が打ち込まれていく。

ベシーーーン

更になった腕が右頬に決まり儒殿の頬の皮膚が裂け血が飛び散る、痛みに頬をおさえ背中を見せてしまう、儒殿よ、そんな隙を見せたらまずい。

擢殿はその隙を逃がさず飛びかかり右腕を取り腕ひしぎ十字固めに。

「やっぱり手足が液体って、どんなに脱力をイメージしたところで、

人体ってやつはどうしようもなく関節が存在する、折るよ!」

そういつて擢殿が容赦なく右腕をへし折りにいく。

バキッ

嫌な音が辺り一面に響く

「あがああああああ。」

儒殿が腕をへし折られた苦痛で獣のような叫び声を上げている。

凄まじい、仲間同士の争いであるが、此処までやるとは。

だが、儒殿も半端ではない、腕をへし折られ苦しみ叫び、それで擢殿は油断をしてしまった、もういいだろうと腕ひしぎ十字固めをといた瞬間。

折れた右腕で相手の顔面に一撃を食らわせる、擢殿の口や鼻から血が飛び散る、そして、すぐに儒殿は擢殿の上に馬乗りになったかと思うと。

馬乗りになって上から滅多打ちが、殴る速度は早くないが、その分威力が落ちない重たいのを。

しかも、下が堅い石畳なのを利用して、頭を浮かせたところに一撃を、やることは石割をする時と同じで、あれはトドメを刺しにいつている。

ドゴッ

人体を殴っているとは思えないような恐ろしく低い音が響く、そして、頭を浮かせて石畳に叩きつけるようにした一撃が更に何発も。

「堅殿、止めるんじゃない！！幾ら化けものみたいに強くてもあれは擢殿が死んでしまうぞ。」

儂が急いで止めるように傍観者であった堅殿に話しかけると

「祭、やっぱりあなたはわかってない。董擢孟高という人物を。」

堅殿、何を言っているんじゃない。

いや、それほどなのか、擢殿とはそこまでなのか・・・？

堅殿の落ち着き具合から、止めるのをやめて戦いを見てみると。

擢殿が大口を開けたかと思うと前歯をへし折られようが構わんというのか、

口で拳を受けそのまま儒殿の拳を指を噛み千切らんとする。

「うぐああああ」

指を拳ごと喰い千切られんとする状態に儒殿は声を上げ苦しむ、ただ、勿論やられっぱなしではなく空いている左手で中指を突き出し喉に突き刺す。

儒殿の指が喉に突き刺さり呼吸を出来なくされた事でゆるんだ隙を見つけて、

噛まれていた右拳を引きぬき馬乗り状態を解いて一旦距離を開く。

この二人は何なんだ、片方は腕をへし折られ、指を拳ごと噛み千切られそうになり血まみれで、

もう片方は鞭打をくらい服も皮膚も裂け、殴られ頭を地面に叩きつけられ喉笛を潰されかけ。

「一体何があればこんな事になるんじゃない、堅殿二人に何があったんじゃない！」

幼馴染で親友である二人が此処まで殺りあえるのはどうしてなんじゃ！？

「……………よ……………」

堅殿何を言っているかまったく聞けんのじゃ、なんでそんな小声？
そして、そんな言い辛そうにするのは何があったんじゃ、公に出来ない事なのか？

「飼うのならば猫と犬どちらか、それでどっちが可愛いかで喧嘩になったのよ。」

はっ、堅殿何ふざけているんじゃ、そんなくだらない理由で人間は……………

堅殿が汗ダラダラ流している、まさか本当なのか、そんなくだらない事が。

そんな事がきっかけの争いで幼馴染が殺し合っているのか！？

「この子が産まれたら、この子の友達として一緒に動物を飼ってあげるべきだな、

という話をしていたら、なんだか、犬と猫どっちが可愛いという議論になって、

気づいた頃にはこの子の為に、出産に合わせて飼う動物は何にするかの話になって……………」

堅殿がそう言いながら最近少しずつだが大きくなってきているお腹を撫でながら話している。

あ、頭が痛い、益州、涼州連合で最も頭の良い軍師の二人がそんな事で、

全力を見せて殺し合いが始まるなんて。

猫でも犬でもいいじゃないか、しかも、出産はまだ先の事でこんなになるとは。

「それで、此処は益州なんだから保と一緒に飼うならば犬亜目で熊^{んだ}猫だ！と、司は、猫亜目から虎しかいないだろう！と言い合いになってしまつて。」

どちらも赤子と一緒に飼うのに適していないじゃろ！！！！

虎や熊猫なんか飼ったら赤子の友達だなんて教えても、気づいたら赤子がいなくなっていて、口の周りが真っ赤になっていたなんて事も。

本当に謎過ぎる、まだ生まれていない子供の為に、しかも、子供に適していない動物を飼おうとして、此処まで殺り合えるんだ？

「私は熊猫も虎もどちらでもいいいわねえ、といったら、二人とも酷いんだよ！！！」

どうしたんじゃ堅殿が怒っているなんて。

「どちらでもいいなんて日和見な答えは求めていない、と保が、それじゃ駄目なんだよなんで理解しないんだ！と司が言ってきて・・。」

堅殿、怒る所が違うじゃろ、子犬や子猫にすべきというべきなんじゃないのか？

「なんか、祭に説明していたら、私もまた頭にきた、二人とも懲らしめないと。」

堅殿、そこで乱入するのはいかんじゃろ、南海霸王は抜いたらいけない。

「堅殿、二人の事で頭に來たとしても身重な人間が加わってはいかんぞ！」

此処で三人が争ったら、更に泥沼の殺し合いになるぞ・・。

堅殿を羽交い絞めにして抑える。

「堅殿は自重しなされ、あの二人の殺し合いに加わろうとするんじゃない！！！」

大体、熊猫も虎もどちらも子供と一緒にしたらアカンじゃろうが、危ないじゃろ！

せめて、子猫や子犬を飼うようにすべきじゃろ。」

儂は何も間違った事は言っておらんじゃろ。

「むう、祭は大袈裟なんだから、大体子犬や子猫じゃ人と一緒に面白くないじゃない、

それに危なくないわよ保も司も虎くらいなら素手で退治出来るし、私でも南海霸王があれば。」

堅殿、人と違うのは知っていて愉快な事好きなの知っていたが、此処までぶっ飛んだ人間にいつなったんじゃ・・・。

あと、あの二人は素手で虎に勝てるのか儂と同じ人間なのか？

こうなったら仕方無い・・・。

「堅殿に用事があって探していたんじゃが、儂は頭が痛くなったので部屋で休む事にするぞ。」

「祭、頭痛いなんて大丈夫？昨日飲み過ぎて二日酔い？無理をしないでしっかり休んでね。」

なんで二日酔いだと思うのじゃ堅殿は。

涼州益州連合はこんな人間ばかりで大丈夫なんじゃろうか・・・。

はあっ、もう気にしないというか、見なかった事にするしか。

まさかこれほど派手な戦いしながら、翌日に普通に怪我が治っている二人を見る事になるとは。

儂と同じ人間なんじゃろうか、本当にこの二人は。

あと儂はこの時知らなかった、まさかこの半年後小蓮が産まれた時に、

三人の話し合いで妥協点で落ち着けようとなったのはいいが、そして周々、善々と名付けられた白虎と熊猫と一緒に飼うなんて。

第五十八話、孫尚香のお供は何に？（後書き）

保と司の戦いはやっている事は、バキでの花山VSスペック、バキVS柳の戦いです、うん、出来るわけじゃないですよ、死にますね。

皆様のご意見、ご感想お待ちしております

第五十九話、董卓の婚姻相手は？（前書き）

恋姫原作キャラを早く出さないと、と思いながらも
全く関係ないような話が出来てしまう・・・。

第五十九話、董卓の婚姻相手は？

一保一

今日は朝議が終わった後で私と司は軍事学校での授業です。

軍事学校開いてますが好評です、武将見習い軍師見習いの皆ものですし、

太守の皆さん達も成都に来た際に授業受けに来たりしていますし。

ちなみに今は司君の授業中です。

「戦争の基本は兵站と戦略です、戦術軽視ではないですが戦術よりも優先する物です。」

言っている事よく分かりますが、ただ司君が授業を進めると不安があるのが。

兵站の重要性に着いて教えるなんて司君の事だから焦土作戦とか教えそうだ。

焦土戦略となると歴史的にこの時代には既に存在しているが、中国では歴史上まだでかい焦土作戦やったことないはず。

まあ、あれは砂漠とか冬のキツイ所の方が効果あるもんだが、とはいえ、何処でも出来る手段ではありませんが。

問題は敵を倒した後に、残るのが荒れた土地だけになってしまいうから後々キツイが。

30分後

教えそうだなあと思ったら、やはり教えましたよ。

「領土防衛をする手段として有効な手段に焦土戦術があります、歴史上、

アケメネス朝ペルシアのスキタイ侵攻、ナポレオンのロシア遠征等で効果があったように。」

司君飛ばし過ぎです、軍事学校はこの前始めたばかりなのにもう焦土戦術ですか。

それにナポレオンとか未来の事とか普通に例をあげて教え始めていますよ、

まあ普段から未来知識で散々稼いでいる私が言うのも今さらなんですけどね。

まあ、私なんか前回の授業で教えた事が人類史上初の大量破壊兵器で、

アレキサンダー大王が投石機で疫病で死んだ兵の死体を籠城する城内に打ち込んだ事とか。

効率のよい嫌がらせで見習うべき事がと教えたら海琳さんとか明らかに引いていた、

司君とかと話していると当たり前なんです、どうやら世間とはだいぶ違うようです。

ろくでもない戦術とかも普通に教えていますし、実際やったら効果がありますからねえ、

将来、こういう手段を取らないといけなくなる可能性もありますし。

やり過ぎたかもね、まあいいや。

今いる軍師である芍薬さん、牡丹さん、百合さん、桜花さん、梅花さんとかだけでなく、

将来の大軍師になるであろう冥琳ちゃん、詠ちゃん、ねねちゃんと子供達にも参加させて、

早いうちから色々と教えて、戦場で色々考えられるようにしてあげたいですし。

戦争とはどんな手段を用いてもいいから勝てばいいと早いうちから教えこまないと、

出来れば本音としては軍師だけでなく武将達こそが学んでほしいんですよね。

そうでなくても、うちにいる将来の武将候補のちびっ子達に不安な逸材が。

。。
実際ちびっ子軍団と話をしてみてもわかったが大半の子供達がなあ。。

。。
華雄ちゃん、翠ちゃん、霞ちゃん、恋ちゃん、雪蓮ちゃんと。。。。

うん、子供軍団でたんぽぽちゃん、蓮華ちゃん以外全員が突撃特性有ったり、
籠城に向かない人間ばかりで、なんかばしばし計略に引っかかりそうだ。

目を瞑って考えてみるが普通に予想がついてしまう。

荊州とか広い所に攻めたりした時に、まあ、ロシアとかみたいに寒くはないから良いが、
焦土戦術やられているというのに撤退せず突き進んでいきそう。

例えばねねちゃんと恋ちゃんならば、戦線伸び過ぎていてまずいといっているのに。

「……………恋が急いで倒せばいい」

とか言い出しそうで、恋ちゃんだと兵站とか一切気にしないだろうし。

「恋殿に任せれば大丈夫なんです。」

ねねちゃんはねねちゃんですと止めないで、恋ちゃんを甘やかしてしまったり。

うん、それで戦線が伸びに伸びきって兵の士気が落ちた所をドカーンと奇襲受けてボロボロに。

何でこんな嫌な絵が普通に想像出来てしまうんだ…………。

他にも籠城とかもきついんだろうなあ、詠ちゃん、華雄ちゃん、翠ちゃんとかでだと。

「いい、今回の作戦は籠城なんだからね!!」

詠ちゃんが青筋立てて必死で怒りを押さえながら籠城を説明するが。

「籠城なんてまだるっこしいし出陣しよう!」

翠ちゃんが籠城に耐えられないと頭をかきむしって出撃しそうにな
って。

「翠、そうだ籠城なんか我らには似合わない、行くぞ華雄隊突撃だ
ー!!!」

と、止める詠ちゃんの苦労を無視して城門開けて出陣して。

いや、籠城だとか特殊な例で無くても、普通な状態でも予想がつい
てしまう。

「雪蓮、大将が前線で暴れるなー!!!!!!誰かアレを連れ戻せ!!」

冥琳ちゃんが頭を抱えている姿が思いついてしまう。

はあっ、皆一騎打ちとかでは強いんだろうが、なんと言いますか、

まともな戦線を維持できる明るい未来が一切見えないのは気のせいだろうか……。

「益州には自分の明るい未来が見えません」

「自分で見つけろ！」

これじゃ、札幌での猪木と鈴木健想だな、プロレス分らないと何の事だか全く分からないか。

うーん、まあ、とりあえずは少しずつだが実礼をあげて教え込んでいきましよう、

とりあえず、簡単に未来が駄目な方向に予想が出来るような将にならないように育てよう。

こんな考え事している場合じゃないですね、そろそろ司君の授業が終わりますので、

それが終わったら休憩、そして、私の授業ですからがんばりますか。

一司一

「司君、君に大事な話があるんだ。」

保さん達と酒を飲んでいたら真剣な顔して話してきた、なんでしようか。

「どうしましたか、保さん真剣な顔をして。」

酒飲んでいる最中に急に真面目な顔してきましたがどうしたのでしょうか？

急に真面目になるという事はそれなりにちゃんとした内容なんですよが。

「気が早いが、うちの子供が生まれた時に名付け親になってほしいんだ。」

ブッ！

飲んでた酒を噴き出してしまった、光栄だが光栄だがいいのか保さん。

ゴッドファーザーですよ、名付け親という事はゴッドファーザーですよ、

僕がマーロン・ブランドかアル・パチーノになるわけですね。

「司君、名付け親ではなく後見人だぞゴッドファーザーは訳すのならば。」

付き合い長いからとはいえ心をあつさりと読まれていましたねえ。

そういえば保さんは誰が好きだったんだっけなあ？

「私はロバート・デュヴァル演じるトム・ヘイゲンが好きだったぞ、司君はマーロン・ブランドよりもロバート・デ・ニーロじゃないか？」

いえーす、俺、演技派来たー、って、何で普通に心を読んでい
るんですか、保さんは。

桃蓮さんや紅さんが明らかに？って顔していますよ、

古代三国志の時代に横文字な名前は馴染まないですし、謎過ぎでし
ょう。

「それにしましても何でまた私をゴッドファーザーにしようとい
うんですか？」

僕を御指名してくれるのは嬉しいですよ、ただ、保さんの初めての
お子さんですから、
僕なんかよりも保さんが名付けるべきだと思うんですがねえ。

「そりゃ司君は義弟だからな、付き合いも長いし是非にと思ってね。
」

義弟ですか、そうですね前世で杯を交わした位の義兄弟ですからね
え、

死ぬ時も一緒という感じで杯交したから銀座で事故って死んじゃっ
たんですかね？

「保、司と仲が良いの分かるし名付け親は良いけど、義弟ってどう
いうこと？」

あっ、桃蓮さんは知らないのか、僕と保さんが義兄弟の杯交してい
るのを。

「ほら、月の旦那だから。」

グホッ！！！！

おい、今なんて言った保さん、なんか凄くあり得ない事を言われたような。

「保、司が月ちゃんの旦那さんになるの？私の聞き間違いでなければ。」

桃蓮さんもまさかという感じでいますねえ。

「聞き間違いじゃないですよ、月の旦那になってもらおうと司君は。」

まじで！？月ちゃん大好きな保さんですよ、

“月と結婚するのは私だ！”とか言っていた保さんらしくない。

「何を言っているんですか保さん、月ちゃんの旦那ってどういう事ですか？」

保さんの事だから思いつきでこんな事言うわけはないんでしょうが、何でまた急にこんな事を言うんでしょうか？

「いや、悩んでいたんですよ、月ちゃんの旦那に適しているのは誰かと思ったら、

やはりいい人ですよ大陸によさげな人間が、だから、変な人間ではなくとなるとね。」

あー、成る程、今の大陸の大物でフリーで良さそうなのはいいですからねえ、
髪の毛七分けにしたサラリーマンスタイルになった曹仁君位か将来性なら。

ただ、保さんが曹家を目の敵にしていますからねえ“月を殺そうとする酷い奴だ”と。

それはあくまでも正史での董卓と曹操の関係だというのに。

月ちゃんが結婚適齢期になると雷さんはおっさん過ぎるしなあ、本当にいないんですよねえ、劉弁も劉協も女の子ですからねえ。

「月は自由に恋愛結婚させてあげたいんだけど、どうしてもそうはいかないだろうし、

子供だけど司のこと嫌いでないみたいだし、ならば、今のうちからきちんとしておこうと、

やはり、お前さんなんだよ、何かあったら後を任せられるのは。」

そこまで僕の事をかってもらえますか、嬉しいですよ。

「まあ、司君や、将来月が嫌だ！と言ったら無しにするけどね、月の事だからお兄様が……。」

保さん妄想はやめよう、横にいる桃蓮さんと嵐さんが頬引くつかせているし。

まあ、月ちゃんとの結婚という話よりも、お二人の子供の名前ですか、

うーん、難しいですねえふざけたのなんか駄目でしょうし。

宇宙地球とかDQNネームなんて名付けたら、
多分、保さんの事だから笑顔で死ぬよりも辛い拷問してきそう。

それにしましても名前どうするか、男？女？どちらが産まれるかも
分からないですし、
機械があれば分かりますけどこの時代にあるわけなし、それに分
らない方が良いでしょうが

とりあえず男の子だった場合の名前と女の子だった場合の名前を考
えましょう。

よしっ、ひらめいた、5秒で閃いたぞ。

「先に言っておくね、孫家の子供だからって、“正義”とか“悟空”
”とかはやめろよ！

“悟空”が駄目ならば“悟飯”とか“悟天”も駄目だからな。」

ヤバイ、今の保さんの目付きはヤバイ、なんか、僕でも死ぬ恐れが
あるあの目つきだけで。

孫権さんの三人目の子供か、女の子だったらやはり孫尚香になるか、
男だったらどうでしょうねえ、正義いいと思うんですよ金持ちに
なれそうですし。

さてさて、保さんの計画あとはどうなっているんでしょうかねえ？

桃蓮さんの連れ子である雪蓮ちゃんが孫家を、保さんが翠ちゃんと結婚して子供が益州、

僕が月ちゃんと結婚して董家を残せということなのか？

「保さん、本当にいいんですか？そんな事を決めてしまつて。」

保さんは右手をけだるそうに構わんと振って終わりにする。

「いいよ、それに月だけでなく、いずれ劉弁は私が、劉協は司君が妻で迎えるんだから。」

ブーッ！！！！

今度は僕、桃蓮さん、嵐さん、紅さんがまとめて噴き出したよ。

「保さん野心的過ぎるだろう、それはいくらなんでも！」

好きか嫌いかなんて関係ない世界ですし、それに皇帝に嫁ぐわけではなく、

あくまでも漢王朝を消滅させて、益州、涼州連合を独立化させてからということですが。

元皇帝一族という血に価値を求めての政略結婚とはよくまあ思い付きますよ。

やはり保さんにはかないませんよ、悪巧みとかの規模が。

次は何をやらかそうとするのか、聞いているだけで笑えてしまう内

容だろうか。

はあ、保さん、酒飲んでいる時に、将来、劉協と董卓を嫁に迎えろ
というなんて、

普通にさらっとあり得ないような無茶な計画を持ち込むし、まいっ
たなあ。

さてさて、将来はどうなるのか、保さんとこの世界をもっと楽し
みますか。

第五十九話、董卓の婚姻相手は？（後書き）

皆さんのご意見、感想お待ちしております。

第六十話、恋姫の主役がモテる理由（前書き）

作者の独断と勝手な解釈ではありますが、
この話で主役の二人がモテる理由とかを考えてみました。

第六十話、恋姫の主役がモテる理由

―司―

部屋で夜遅くまで一人で仕事していて、仕事も終わったので、たまには一人酒を楽しんでいると、なんかどうでもいい事が急に気になってくる。

昔悩んだのだと、誰が日本で一番最初に犬にポチと名付けたのか？とか、大変生産性の無い考え事ですよ、生産性が無いから楽しいんでしょうが。

そうですねえ楽しく考える事が出来そうなのだと、保さんが人気な訳でも考えてみよう・・・。

保さんがモテているのは何故だろうか？

保さんがモテている、それは疑いようのない事実です。

保さんは前世ではいろんな女性と付き合ったり、それなりにはモテてはいたが、ただ、あくまでもそれなりだったはず、そんな今みたいに保さん好き好き女性だらけなんて。

考え事として実に下らないがその点を考えてみたら面白い、時間が

足りないくらいだ。

今の保さんは桃蓮さんこと孫堅、嵐さんこと？融、この二人を妻に迎えていて。

現在、保さんの事を良さそうに思うのが桜花さんこと司馬朗さんが確定で、

あと水仙さんこと張任さんがいて、紫苑さんこと黄忠さん、祭さんこと黄蓋さんも怪しい。

ちびっこ軍団だと保さんの婚約者になる翠ちゃんこと馬超に、あとは詠ちゃんこと賈馱、華雄ちゃんもらしい・・・。

なんでしょうか、このハーレム具合は。

「リア充めモゲろ！！！！」

なんか叫ばないといけない気がしたので、言っておきましょう。

ただまあ、ちびっこ軍団は結婚だなんだ、ではなく好きという漠然とした物ですが。

保さんが子供達に人気というのはわかります、簡単な事です。

戦争孤児やら色々訳ある子とか保育園で面倒見ている常によばにいるんですから、

刷り込みとかの世界ですな気づいたらずっとそばにいるのはでかい

ですよ。

実際、僕も霞ちゃんこと張遼、恋ちゃんこと呂布、ねねちゃんこと陳宮に好かれてますし。

凄いな、名だたる武将ばかりですよ、もし将来彼女達と恋愛関係でしくじったら、痴話喧嘩が三国無双になりますよ、光栄が新作のシナリオで作るんですかねえ？

董將軍の浮気がばれた、怒った馬超率いる妻連合が攻めて来たので鎮圧しろとか、うん、嫌過ぎる、そんなシナリオ、そして、そのシナリオクリア出来る自信が無い。

僕の事を恋ちゃんがと言いましたが、蓮ちゃんの場合は好き嫌いよりも餌付けに近いかな。

そう言う点でちょっと違うか、まあ、恋ちゃんだけは特殊な例と。

とりあえず保さんも僕も保育園ではちびっ子と遊んであげている優しいお兄さんですから、ちびっ子達に人気なのは当然かなと、だから好きとかよりも丁度いい遊び相手なんですよ。

そうそう、保育園でとにかく萌える物が二つあるんですよ、一つは

恋ちゃんのご飯食べている姿、
もきゅもきゅ、という感じで一心不乱にご飯を食べている姿が可愛
くて可愛くて。

ただご飯を食べているだけの姿ですが、それを見るだけで癒される
と益州名物です。

明らかに仕事で煮詰まっているのか不機嫌な海琳さんが保育園にや
って来たかと思うと、
恋ちゃんのご飯食べる姿を見て呆けた幸せそうな顔になって保育園
を後にするなんてありますし。

もう一つも可愛く萌えるんですが、ただ、こっちはちょっと不安も
あるんですよ。

何かと言いますと、月ちゃんなんですよ、しかも、やきもち妬いて
いる姿というのが。

保さんが保育園で恋ちゃんや翠ちゃんとかに遊んで、遊んでと振り
回されていると、
保さんの服の裾をちょこんと摘んで「お兄様は月のお兄様です、取
っちゃ駄目です。」

これがまた半端でなく可愛いんだ、僕はロリではないですからね言
っておきますが！

やきもち妬く月ちゃんの半端でなく可愛い姿を見て、保さん、僕、
詠ちゃん、華雄ちゃん、
とか皆、性別、歳とか一切関係なく興奮しすぎて鼻血出たし。

そんな月ちゃんに対しポトポトと鼻血を流しながら笑顔の保さんが頭を撫でてあげると。

うん、なんというか“変態さん”としか言えないというか、物凄く怖い絵面です。

月ちゃん保さんの鼻血に慌てているが、頭を撫でられると、

「へうつ、お兄様恥ずかしいです、でも頭撫でるお兄様が大好きです・・・。」

この発言聞いた保さんが月ちゃんを抱えて、何処かに連れ去ろうとしたのが・・・。

「保さん駄目え、それは人間として越えてはいけない心の38度線だー！！！！！」

僕とかが叫びながら瞬動を使って暴走する保さんの動きを止めに行きましたよ。

保さん、月ちゃんは僕が好きで、将来僕と結婚させる予定なんですよね？

ならば抑えてください、月ちゃん絡みの保さんは恐ろしすぎます。

明らかに部屋に連れ込もうとしていませんか？それはやばすぎます。

アグ〇スが出て来てしまいかねないのでやめてください。

あとは、翠ちゃんも真っ赤になって照れながらも保さんにくっついていたり可愛いですよ。

「翠ちゃんは婚約者とか一切関係なく、将来保さんのお嫁さんになるんだよね？」

なんてからかうと、グロンギ語みたいな謎の言葉発して顔真っ赤にしていなくなつて。

ただ、翠ちゃんはこちらからい過ぎると十文字槍で突いてくる可能性があるのは参りますが。

他の子供達よりも一番好き嫌いとか恋愛で考えているのは華雄ちゃんです、ただ、

「強い雄に雌は惹かれるものだ！」って、うん、なんだろう、野生の王国というのか。

華雄ちゃん可愛いし、いい子なんだよ、ただ猪武者だし、この思考。

大丈夫なのだろうか、益州涼州連合で結構でかい悩みですよ。

さて、保さんがそんな風にしてちびっこ軍団に好かれるのはいいんです、問題は大人達です。

あつ、桜花さんは大人達の中では別ですね、保さん好きな理由に打算が無いです、

打算というところが言葉が悪いですね、そこは気をつけましょう。

桜花さんはやはり、保さんが長安で颯爽と助けに現れたというのが。嵐さんの時と同じですね、あの時も嵐さんが自害しようとしたのを止めて、命を救ったというように、活躍したんですから。

ただまあ、僕からしたら人買いに売られたりとか異常な状態での救出劇で、本当に好きとかいうよりは、つり橋効果があるのではないか？と思います。

それと、あの救出劇は嵐さんや僕、日や光と色々頑張ったんですがねえ、

僕達は目に入っていなかったんですかね？

あれか？桜花さんを登用したいから説得しようとした際（第二十八話）の

「貴女が欲しい」と保さんが言ったあの口説き文句もあるのか。

確実に分かっているのは、桜花さんは保さんを憎からず思っている。

ただ保さんが桜花さんは口説く落とす事は出来ても、最大の障害である、

お姉ちゃん大好きっ娘の司馬懿こと梅花さんをどうにかしないと。

梅花さんキレた時強いんだ、殺していいなら勝てるでしょうが、怪我させないで、とかになると僕でもやられる可能性が。

まあ、桜花さんの話は置いておきましょう、では、残りの保さんの事いいなと思う、

打算もある大人達についてですが、なんと言いますか理由が生々しいのが。

一言で表現するのならば、

“年齢的に結婚に焦っている!!!”

リアルです、リアルすぎます理由が……。

焦る理由も分かりますよ、人の命がぺら紙一枚よりも軽い時代ですよ、

この世界は平均寿命や結婚適齢期が現代とは比べ物にならないですよ。

20代で死ぬなんて普通にありますし、10代の花嫁なんて当たり前ですよ、

だから、保さんの15歳で父親もこの世界では若すぎるほどではないんですよえ。

今、桃蓮さんが28歳で12歳の雪蓮ちゃん、9歳の蓮華ちゃんの母親で、

海琳さんこと周異さんが30歳で12歳の冥琳ちゃんの母親ですから。

僕が、母さんが24歳の時の子供で、長子としては世間的にかなり遅い子供ですし、

10代の母親が当たり前という世界ですよ、この外史の世界は。

現代の感覚からしたら25歳とかで結婚に焦るなんて焦り過ぎだろう、

という感じになってしまいうんでしょうが、こちらでは違います。

今現在、独身で20代前、中盤の紫苑さん、桔梗さん、水仙さん、祭さんが焦るのも仕方ないのか。

桔梗さんはまあ別かな？年齢的に焦っている部分は若干ありますが、まあ仕方ないという感じで割り切っている、そんな感じもありますね。

「御屋形様や司殿が婿に来てくれるんなら楽じゃ」とか笑いながら酒を飲んでいたりで。

水仙さんや紫苑さん、祭さんとかはなんといいますか、気をつけないと。

みんな結婚していて、ただ授かり物である赤ちゃんが出来ない、とかならいいんですが、

皆今現在の段階で結婚どころか相手がいらない、お一人様なのが・・・。

めっちゃいい女ですよ、僕も紅さんと結婚して今は落ち着いています、

フリーだったらガチで口説きにいてもいいと思います、今は女よりも仕事が面白いですけど。

お一人様でいるという事が悩みといいましようか不安なんですねえ、

そのせいですかね？彼女達が外食する際必ず誰かと一緒にいると。

店員さんの「お客様何名ですか？お一人様ですか？」って言葉にビクッとしているんですよ。

あの五虎將軍である黄忠や、張任、黄蓋がですよ、猛将ですよ、それが「お一人様」という単語に怯えびくつとするなんて。

話を聞いていて涙が出そうでしたよ。

街を歩いている時とかに度々見てしまうんですよ、昼になりお昼御飯食べに店に入ればいいのに、

店員さんの「お一人様ですか？」を聞かないようにする為にですよ、警邏中の兵とか周辺にいなような人間の誰かしらを無理矢理誘って食事に行ってる姿を見てしまうと。

一人で好きな物を食べれば良いじゃないですか、お一人様ですか？この言葉を聞きたくない為に警邏隊軍団引き連れて食事しているのが。

そんなに聞きたくないのか、お一人様という単語を。

駄目だあまりに悲しすぎて涙で前が見えないよ・・・。

紫苑さん、祭さん、水仙さんとか優秀すぎるのも問題なんでしょう。

現代でも仕事出来るすぎる女性が婚期遅れるなんてありますが、
しかも、現代よりも家柄や血筋とか遥かにうるさいこの時代ですよ。
恋愛結婚なんかまずなく基本がお見合いとか政略結婚ですからねえ。
街の八百屋とかなら気にしないでいいんでしょうが、それが太守と
かですと、
結婚相手となると、それなりの家とか地位が必要とか悩みは大きい
ようです。

そうなるときついですよ、圧倒的に女の方が優れているこの世界で
すよ。

女よりも優れた男なんてまずいない世界ですから、そうになると困っ
たことに、
太守や県令なんてエリートに釣り合う男なんて絶対数が不足してい
るのですから。

実際、この世界でそれなりの地位を持つ男なんて、空さん、雷さん、
日、光とか、
あとは何進とか、ほとんどいませんから、うん、涼州、益州連合に
優秀な男いすぎ。

まあ、うちは年齢性別問わず幅広く門戸開放して人材募集している
から見つけやすいんでしょう、
他では、優秀ではない者が多い男から人材募集するなら、最初から
女性だけ探すとかでしょうし。

太守をやっている水仙さんとかに見合うような、地位が合って交際相手がいない女性向けの、家柄が良いとか、実力あって将来有望なんて男性は奇跡な存在だそうで。

そう考えると、彼女達打算が働いていますが保さんが人気なのも分かりますよ。

保さんなんか奇跡どころではないこの世には存在しない組み合わせだそうで、保さんの何処がいいのと前に冗談で聞いたら、酔っぱらって目が座った皆さんが熱弁しましたよ。

「麒麟とかと同じで存在しないはずの奇跡がいるんだ！」とか語られるとは、

麒麟と同等ですよ、伝説の生き物と同じって、あの保さんがですよ。まあ奇跡というのは分かりますよ、ただ、僕や保さんが奇跡なのは、転生経験、更に神にもらったいかさまな能力多数とあり得ない本当の奇跡体験者ですが。

では、保さんとは、どんな人間か客観的に判断してみましよう。

産まれた時、親は涼州の太守で、今は益州牧ですよ、家柄は問題無しですよ、三公を四代にわたって輩出した袁家とかは別にしても、大したもんですよ。

それに涼州時代からの僕や保さんが始めたビジネスの成功で、袁家には及ばないが、今現在大陸有数という金持ちですよ。

家柄も金もあるなんて。

しかも、幼い頃から軍師や政治家としてやっているくらいで頭は良いですし、

軍人としての能力も優秀で、個人の武は天下無双という程の強さを誇り。

董家の血を引いたおかげで格好良いというよりは可愛らしい面構え、容姿とかで難点は、背が今現在165cmちょい程度なのが、まあ成長中ですが。

しかも、最近は桃蓮さんが身重で大変だからと家のことも率先してやるマメさ、

侍女の人がいるが保さんが掃除したり、料理作ったりと色々こなす姿を見せていて。

それのおかげで、前は蓮華ちゃん、保さんと桃蓮さんの結婚反対していたが、

最近は「お父さん」というのは無理にしても結婚を許してくれているように。

あそこは親子というよりも友達みたいな感じになってきているな。

話を元に戻しましょう。

まあ、活躍する男がほとんどいないというこの世界では、奇跡と言

われてもおかしくないなど。

酒の席で冗談半分で聞いた時に、酔っぱらって目が座っている、水仙さん達が如何に保さんが伴侶にするのが凄いか語られたのは参りましたよ、本当に。

保さんが褒められて照れ臭いとかなら分かりますよ、引いているんですから余程ですよ。

ちなみに同じ酒の席で酔っ払った祭さんが普段は酒飲んでいても変わらないはずなのに、

「今まで誰とも付き合った事無いからどうすればいいんじゃ」と呟いていたのにちよつと萌えた。

多分、保さんが口説いたら水仙さんとか、祭さんとか簡単に落とせるよ、

ただ、それは鴨がネギ背負ってどころか鍋とガスコンロ持ってくらしいになるでしょうな。

実は、保さんだけでなく僕も有望株と言われているですよねえ・・、

益州の知恵袋で、若く、強く、いい男、自画自賛ではなくこれらは他者の評価です。

とは言いましても、僕は保さんと違って悪ふざけが酷いから保さんほどはモテないと。

評価高いのは嬉しいです、ただ、保さんの方がやる時は悪ふざけ酷いんですけどね。

もしかしてだが、今、考えると、僕や保さんが袁家や、曹家から家庭教師で呼ばれたのって、娘達の将来の旦那候補としての品定めだったかとも思えてきましたよ。

まあ、知った当初の素直な賢い袁紹だったなら良かったでしょうが、今は見事ポンコツというくらい駄目お嬢様に廃改造しましたから無理です。

曹家のチンチクリンですか、あれは最初からないね、あれは駄目だな、

あーいったキャラはからかって振り回さないと面白くない。

面白い玩具、もしくはいいじって観察対象にするにはいいんでしょうが伴侶には無理です。

最後に、保さんがモテるとかこれに関する事で困った事があるんだよな、

どうすればいいのかな？頭を悩ませている問題が・・・。

司馬家登用した際に、司馬防さんの妹である水鏡先生こと司馬徽さんを、

涼州益州での人材教育の為にいずれは登用するという計画ですが、困った事が。

これ前々から計画されているんですが実行に移されていないんですよ、

荊州にいて今フリーだから、誘いに行けば登用出来そうなんですよ。実際、菊花さんこと司馬防さんや桜花さんから簡単に説明を書いた手紙を送ったら、返事を見る限り物凄い好感触で登用問題無さそうだったんですが。

こちらが書いた手紙の内容で、益州涼州連合の人間の説明で、僕と保さんが幼馴染で仲が良いとか書いていたら。

「どっちが攻めなの？まさか李儒さんが下剋上攻め？」「益州はそんな樂園なんて。」

「801が嫌いな女子はいません、生で801見れるならば董家に偽装結婚で嫁いでも。」

「って、この二人って、幼いころから抱き締めあって涙して会いたかったとか言うくらい、ちっちゃい頃から目覚めていたと伝説の二人じゃないですか、これに行くしかない！」

保さんと僕が転生した後の感動の再会の話を完全に腐った目でとらえているのが。

こんなの手紙に書いて送ってきた人間を採用していいのか？それで皆悩んでいます。

「妹は昔からこうで、教師として優秀なんです、いや、優秀どころではないんですが、

例えば私が家に男友達を連れて来ると“兄さん頑張れ”と妙な応援をしてきたり。」

そういつて菊花さんが冷や汗流していたのが。

水鏡先生を益州に呼んで学校で人材育成してもらうのはいいが、孫子とかよりもカップリングとかについて熱く教え出しそうなのが。

いや、僕は男でもいけますが、それと人材育成で皆腐らせていいとは別じゃないですか、
流石に僕が両刀使いな事とか隠しましたよ、話したら大惨事を迎えるでしょうから？

ないでしょうが、このままだと諸葛亮やら？統が801大好き腐女子になったりして、
うん？今なんかフラグが立ったような音がしたのは気のせいだろうか・・・？

はあ、どうしようかなあ、水鏡先生を登用すべきなんだろうが、大丈夫なのだろうか。

保さんがモテるといふ話からとんでもない方向にいったな、
まあいいや、夜中に酒飲みながら馬鹿な事考えるのはやめにして今日にはもう寝ましよう。

第六十話 恋姫の主役がモテる理由（後書き）

朱里、雛里、801好きはやはり水鏡女学院が原因という事で。

恋姫で一人がモテる理由はやはりこういう裏が少しはあるかな？
と書いて今日の話は書いてみました。

皆さんのご意見、感想お待ちしております

第六十一話、小蓮誕生（前書き）

タイトルそのまんまです。

ちなみに、前回までの話から半年くらいキンクリしております。

第六十一話、小蓮誕生

一司一

今、私の目の前にいる人があの保さんなのだろうか？

前世での付き合いが10年以上、こちらの世界に来ても10年以上、20年以上の付き合い、

でも、あんな姿を見た事が無かった、うん、見たくなかった・・・。

「産まれた、産まれた、私の娘が見えないの？私と桃蓮さんの可愛い娘が♪♪」

見事なバリトンボイスで妙な歌を歌っていますよ。

見事な位良い声ですよ、良くきいてみるとシューベルトの魔王ですね、曲は。

それにしても子供が産まれた喜びを表す歌の曲が魔王というのはどうなのよ！？と。

それにしてもそろそろ保さんを止めましょうか、多分今のまま放っておいたら、

今歌っている曲を国歌にするくらい言いかねないですから。

あり得ない？いや、今の保さんのテンションならあり得ますよ。

あつ、どうも、皆さん司こと李儒文優であります。

皆さん、今までの流れで分かると思いますが、先程、桃蓮さんこと孫堅さんが、三女である孫尚香ちゃんを産みまして。

保さんが成都の城の中を孫尚香ちゃんを抱きしめながら妙な自作ソングを最高の声で歌い、更に華麗に舞っておりますよ、なんでしょうか技術の無駄遣いという位見事な動きです。

抱き締めている孫尚香ちゃんが酔って吐きますよ、その状態が続きますと、そんなグルングルン回りながら宙を舞ったり動き回っていたら。

バチーン

「保さん、そんな動きまわったら懐の孫尚香ちゃんに悪影響だから落ち着け!!!」

とりあえず保さんの頭を鉄扇で引っぱたいて注意しました。

あう、強く引っ叩き過ぎた。

鉄扇で引っぱたかれた所の皮膚が切れたようで血がドクドク流れている。

そんな頭血を流している保さん怒るのかと思ったら。

「司君ありがとう、そうだな小蓮に良くないな、君の忠告痛み入りますよ！」

すげーいい笑顔、どんだけ子供生まれて嬉しいんだよ保さん、頭から血が出ているんだよ。

血が結構な量流れているんだよ、それってかなりまずい怪我だよ、僕達ならすぐ治るとはいえ。

もうちょっと勢いよく殴ったら虹が見えるのでは？ってくらい血が吹き出たかも。

「とりあえず桃蓮さんも心配しているから会って孫尚香ちゃん預けてきなさい。」

いくら保さんが父親でも、幾ら嬉しいとはいえ、産まれたばかりの赤ん坊を抱えて走り回ってはいけません。

お母さんと一緒にいさせなさい！！

主治医として出産を担当した僕としましては保さんに注意をしないと、

今の保さんの暴走具合が酷すぎます、明らかに暴走です。

はじめの自分の子供で、しかも可愛らしいから嬉しくて仕方が無いんでしょうが、

何で赤ん坊を抱きしめて城の中を歌いながら飛び跳ね舞う！？

貴方はいつから熊川哲也になったのだ！というすさまじい滞空時間ですよ宙に舞ったのが。

保さんの暴走具合を見て“これはいかん止めるべきだ！”となった皆が固まりましたよ。

でも、固まったの理由が、まさか祭さん、雪蓮ちゃん、蓮華ちゃんとかが見とれたからだとは、

保さんが宙に舞った時の姿の美しさに見とれるって、そんなのおかしいよ！！

とはいいまでも、華麗に宙を舞っていた姿は確かに美しかった。

妙なオリジナルな歌詞で歌を歌って宙を舞う、それだけならまだいいかも？

ただ産まれたばかりの赤ちゃんを腕に抱えながらとは、何をやってるんですか！！

あまりにもひどいので先程鉄扇で引っぱいたら冷静になってくれたのは良かった。

「司に言われたとおりだ、小蓮が可愛いが今の状態はまずいな、桃蓮さんに預けて来る。」

あつ、保さん待ってくれ、今、まだ傷口から血が出ているというのに行ったらアカン。

「ひいひいひいっ!!」

「きゃあああああああああああああ。」

「擢殿どうしたんじゃ、敵襲か!？」

「大丈夫か王子様!!!!」

「ふうう・・・パタッ」

おい、至る所から悲鳴が上がったりパニックだぞ城内が、急いで保さんを止めろ!!

「つて、百合さんが気絶したぞ、救護班救助を!!」

パニックです、保さんが喜び過ぎて暴走したおかげでパニックが更に悪化しております。

本当に不安だ、保さんの暴走具合が、大丈夫なのか。

話変わりました

子供が産まれる前に決めておいた名前でしたが、女の子だったので孫尚香でしたよ。

男だったらやはりこれだと提案した“正義”とか“悟空”だったんですが、

発表した時に保さんが無言で方天画戟で、右腕を刺されましたよ。

いやまあ、前にふざけたら殺すくらいに脅されていたとはいえ、名付け親になってくれといった親友を刺すってどういう事ですかと聞きたいですよ。

あと周りの皆、その時に私を心配してください刺されたんですよ、僕は。

「なんじゃ今のは、あまりに速過ぎて見えなかったぞ一撃が。」

祭さん、驚くのは分かるが僕の心配をして、腕にざっくり刺さっているのよ。

「祭も見えなかった？私もあまりの速さに気付けなかった。」

桃蓮さん驚くのは良いが、一撃に気付くよりも僕の傷に気付いて。

「すごい、神速、ううん、最速の一撃だわ。」

紫苑さんならばと思った僕が馬鹿でしたよ、血が出ているの助けて。

「ふざけたあなたが・・・。」

紅さん、奥さんとして注意は分かる、でもまずは傷の心配をしてよ。

こんな感じでしたよ、とりあえず孫尚香ちゃん生まれるまでも大変でしたが、

産まれた直後も保さんのあの暴走具合大変でしたよ。

それにしても保さんの子供だと思ったよ、こちらをいきなり驚かせるって。

生後すぐにドッキリをしてくる赤ん坊ってどうなのよ、まあ、僕は産まれた直後に

「天上天我唯我独尊」と言った為に、母さんとか家族をパニックにしましたが。

孫尚香ちゃんがやる事ですね、「ほぎゃーほぎゃー」泣いていたと思ったら、

ピタッと泣きやむどころか呼吸すらなくて、皆がまさかと心配して焦って近付くと笑いだす。

これをちよくちよくやるんですよ、お前そういうドッキリを狙ってやるな！！と、

こっちがまさかと思って驚くのを見て笑ってやがるって良い性格し過ぎ。

名付け親で後見人なんですから僕は、ゴッドファーザーをからかうなよ、この子は。

さて、子供の事も落ち着いたようですし、部屋に戻って考え事でもしましょう。

孫尚香ちゃんが産まりましたが、まあ今の益州は一本にまとまっています、

今後の事を考えるのならば董家の後継者とかの順位決めとかキチツとしておきましょう。

前に保さんに話をして決めておいてくれと言っておきましたが、ちゃんと考えておいてくれたんでしょうか、確認取っていないしちよつと不安。

益州とかで馬鹿が野心もった時に、まあ、保さんを殺せるような人間はいないですが、月ちゃんや孫尚香ちゃんを担ぎ出されるなんて事になるのはまずいですからね。

董家の後継者の順位で保さんで、その次が孫尚香ちゃんか、無難に考えるならば、

それで孫家の後継者が雪蓮ちゃん、これで問題ないと思いますが。

そうだな、念のため孫尚香ちゃんは益州ではなく涼州に預けてもらうよう提案するか、

董家と孫家の後継者でもあるとなると一族が益州にかたまっているのはまずいですし。

それに、涼州は益州に対し後継者という人質を取った、という形になるから、
十常侍共へのアピールになるな、涼州は十常侍の味方で益州を抑えられると思いこませ。

はあ、董家と孫家の為だが、保さんと桃蓮さんに恨まれる仕事か、まっ仕方ない、益州、涼州連合の汚れ仕事は僕が担当ですからねえ。

とりあえず、謀略だとかそういう話は別としても、
孫尚香ちゃんと桃蓮さんの体調が落ち着いたら涼州に戻りましょう。

僕は一応は涼州の州牧である馬騰の軍師という形になっているんですからねえ。

さて頑張りますか、軍師としてのお仕事を。

一祭一

「子供が産まれたら子犬を飼うがいい、子犬は子供より早く成長して、子供を守ってくれるだろう。

そして子供が成長すると良き友となる。青年となり多感な年頃に犬は年老いて、死ぬだろう。

犬は、青年に教えるのである、死の悲しみを。」

孫尚香様が産まれた直後の擢殿の暴走は激しかったが、数日もたつと流石に、

今日の擢殿が皆に話があるといって急に話し始めたんじゃが。

急にどうしたんじゃ擢殿は普段と違う口調で急に格言めいた事を言うなんて。

「ゴルゴ13の黄金の犬の回の最後で出てきた言葉ですね、元々何処の誰が最初に言ったか分かりませんが、良い教えですよね。」

「ごるごさーていーん？なんじゃそれは？ただ、儒殿の発言で分かったのは、とりあえず誰かがいった教えを口にしたということが。」

「保、どうしたの？急にそんな事言いだして、犬でも飼うの？」

堅殿が孫尚香様を抱き締めながら尋ねると。

「ええ、この教えである通り、小蓮の為に犬を飼おうと思ひまして、それで犬を飼うのに皆が反対しなければとおもひまして。」

犬を飼う位で皆誰も反対せんじやろう、とはいえ、この前（第五十八話）みたいに大喧嘩とかにならなければいいんじやがな。

「前も話しましたが、僕は犬ではなく猫が好きですし猫を飼う事を進めます、」

とはいえ、この前みたいにもめるのは僕も嫌ですし折衷案として、保さん、犬だけでなく猫も飼いましょう、犬の従順さ、猫の気まぐれさ、

どちらも成長する孫尚香ちゃんの良い友達となってくれるでしょうから。」

おつ、儒殿が前回の揉め事を反省し折衷案を出してきたか、まあ、これならば誰も反対なんかせんじやろう。

「司の言うようにどちらもいた方がいいかもね、私は賛成よ、それに子猫や子犬が城にいたら皆癒されたりするんじゃないの?」

堅殿、朝議の場とかにいたら締まらないじやろうが、それ以前にいさせないが。

いや、まあ、この益州ならばあり得てしまうのがなんともいえんのじやが。

ただ堅殿の言うように、いたら可愛らしいし、あと城だけでなく保育園に連れて行ってあげたら、

保育園にいる子供達も喜びそうじゃし、良い案ではないじやろうか。

「司君の言うように犬だけでなく猫も飼う事にしましょう、それでは皆さん子犬や子猫を飼ってもよろしいでしょうか?」

それにしてもわざわざ何故皆に許可を求めるんじやろうか? 孫尚香様の為に犬を飼うにしろ猫を飼うにしろ、我らに許可を取る必要性などないのに。

「皆さんに話をしたのはですね、今から手に入れに行こうと思いついて、

ちよっと一週間程ばかり司君と休暇を貰って“かって”きます。」

何を言っておるんじゃないや擢殿は、何故犬や猫を買うのに一週間の休暇が必要なんじゃ。

「なんで一週間も必要なんじゃ、猫とか犬なら野良になってしまおうが街に幾らでもいるじゃろ？」

買うという事はなんか凄い貴重な犬猫を誰かから譲り受けるんじゃないか？」

皆気にしているので儂がきく事にしたんじゃが、斜め上の答えが返ってくるとは。

「嫌ですねえ、祭さん忘れちゃったか虎と熊猫を飼うんですよ、山にこもって狩りに行くんです。」

多分聞き間違えなんじゃろう、そうでないならば理解できない答えが聞こえるはずは。

「何を言っておるんじゃないやお主らは！？子犬と子猫なんじゃろ。」

不思議そうな顔をする二人、儂が何か間違えた事を言ったか？

「祭さん、分類学上で犬亜目に所属する熊猫と、猫亜目に属する虎

ですよ、
そういう点では、それらの子供ならば子犬と子猫でも間違いないじゃないですか。」

おかしい、儂の言っている事がおかしいのか？
何で儂が間違った事を言っているみたいに、言われるんじや。

「保、司、どうせ虎にするならば白虎がいい、普通の虎じゃつまらないからお願いね。」

堅殿、お主まで何を言っておるんじや、それとも儂の聞き間違いか・
・・。

つまる、つまらないで虎を飼うものではないじやろう、危険なんじやぞ！

人食い虎なんて言う言葉があるくらいなんじやし。

「白虎ですか、朱雀や青龍、玄武は無理でも白虎なら実際いますしねえ、
了解しました、なんとか探して狩ってきます。」

おかしい、儒殿、何でそんな事を引きうけておるんじやお主は。
虎でも大変なのに、大体白虎なんかおらんじやろう、見たことないぞ。

それにしても、董家の他の人間は止めないのじやろうか？

「白虎がいるなんて、四聖獣に守られているみたいわね。」

「熊猫は色々芸も教え込めば出来るみたいだし、月も喜ぶだろ。」

「お兄様、虎さんと熊猫さんがくるのを私も良い子にして待っていますね。」

董家の一族は皆頭がおかしいのではないか？それとも、儂が異常なのか、

異常が正常なのか、もうわけがわからなくなってきた……。

董家が正常で無くて妹が産まれたんじゃ、策殿とか孫家の人間ならば。

「母さんは江東の虎なんて言われるくらいだから、やはり虎は飼わないと。」

「言っても無理よね、諦めました。」

孫家も手遅れだったか……。

「お主らと話をしていると頭が痛くなってきた、部屋に戻っておろぞ堅殿。」

細かい事から突っ込み始めたら終わらなくなりそうじゃ、突っ込むべき所があり過ぎて、

仕方が無い儂の理解の範疇を超えているので考える事をやめよう。

「あら、頭痛いなんて、祭さん風邪ですか、お大事に。」

「後で僕が調合した頭痛薬を部屋まで持っていけますね。」

「祭、頭痛いなら今日は仕事休んで良いわよ。」

より頭痛が悪化してきた、どうして董家、孫家には常識が通用せんのじゃろうか。

儂が今まで経験してきた常識が間違っているわけじゃないんだろ
うし、

郷に入りては郷に従えとは言うが、これはいくらなんでも……。

結局本当に一週間後に、本当に白虎と熊猫の子供を連れて来られる
とは、

また儂の頭痛が悪化したぞ……。

第六十一話、小蓮誕生（後書き）

董家の新たな仲間、小蓮とお供の周々、善々が加わりました。

それにしても私はなんで恋姫作品で人気な蓮華とかではなく、小蓮とかの話を書こうと思ってしまっただろうか。

蓮華が好きなのに、どうも書けないです。

皆さんのご意見感想お待ちしております。

第六十二話、益州の新兵器、武装について議論しよう（前書き）

とりあえず言えるのは銀河英雄伝説が大好きです。

何を言っているんでしょうか、私は一体・・・。

第六十二話、益州の新兵器、武装について議論しよう

一保一

今日は兵を引き連れて益州内を暴れている賊退治です、
賊退治、うん、間違いではないね。

ただ実際は、賊退治もですが火縄銃を装備した部隊のテスト運用と
いうのがメインです。

いちおう火縄銃の部隊を作る際に情報が漏れるとまずいので細心の
注意を払い、

極秘裏に人員選抜、部隊編成、他の部隊に気付かれないよう山奥と
かで練習やらせてましたが。

うん、秘密にし過ぎてはいけないというのがよく分かりましたよ。

益州兵の中でも極秘で知らない人間ばかりでしたから、
今回の遠征で最後の方で使ったくらいにして良かったですよ。

いやまあ、火薬なんかあと500年近くたたないと誕生しないので
すから、

火薬の破裂音なんか皆知らないんですから仕方ないといえは仕方な
いんですが。

予想していましたが、やはり、はじめて聞く火薬の破裂音に馬が怯
える事怯える事、

といいますか、馬だけでなく銃を知らない一般兵も怯えていましたし。

まあ、これは火薬に慣れてもらうしかないんでしょうが。

しょっぱなで火縄銃を使っていたら兵や馬が動揺して戦線乱れて、戦が目茶苦茶に、とかあり得たかと思うと最後にして良かったですが

ちなみに涼州時代から開発研究していた火薬を使った武器で、火縄銃、てつはう、大砲、どれも使わせてもらいましたが、威力は大したものですよ。

命中精度とか威力とかまあ問題も多いですが使っていて面白い武器だなと。

例えば火縄銃ならば速射性とか取り扱いやすさならば司君が作った元戎の方が良いんですが、音でもびびらせられるという点と、近距離での破壊力では火縄銃がよいなど。

長篠みたいに馬防策作って鉄砲三段構えとかもやってみたいですね。

大砲は命中精度は悪いですが一応車輪つけて牽引できるようにしましたので、戦場にも持ち込みやすくなりました、ただまあ命中精度は今の段階で

はかなり残念ですが。

野戦でというよりは敵が籠城している城攻めで活用という形になりましたよ。

曹仁の八門金鎖の陣を徐庶が破り方教えてとかありますが、

うん、向こうがどんな堅牢な陣を組んでも大砲でドカーンなんてやりにー。

、
アウトレンジからフルボッコとか楽しそう、曹操の金髪クルクルが驚きで取れるね。

てつはうは元寇で使われたとか言われていますが本当か謎の兵器ですが、

今の益州での使い方としては投石機で撃ちこむという形で検討されています。

官渡の戦いで曹操軍の秘密兵器であった投石機が相手にならない凶悪な兵器となっています。

火縄銃、大砲、てつはうがあるから必ず戦に勝つものとはいえませんが、

千年以上未来の兵器を持ってきたいるわけですから益州の強さがチート化するでしょう。

益州に配備された新兵器についての説明をなんで此处で今話をして

いるかですって、
それは答えが一つしかないですよ……。

現実逃避ですよ、ええっ。

「パッパラパーパ　パッパラパーパ　パッパラパーパ　パッパパーパ
ーーン♪」

ワグナーのワルキューレの騎行をでかい声で歌っている人間が……。

司君なんです、すぐ横で歌っていますよ。

いやまあ分かるよ、CDラジカセとか世界ですから大音量流せない
ですし、

これから敵をメタメタにしに行くからキルゴア中佐の真似は分か
りますよ。

ただ、賊達の拠点を襲撃しに行くんだから静かにしようよ、強襲だ
よ！奇襲なんですよ！

三国志の時代に地獄の黙示録ネタ通じるのは私しかいないんですよ、
しかも、わざわざサングラスから軍服から全部自作してキルゴア
中佐のコスプレですか？

しかも、わざわざ挟翼にサーフボードを乗つけて、本当に何をやっ
ているの君は、

地獄の黙示録知らない人には何の事だかまったく分からないよ。

「奇襲をする時は先程の曲ワルキューレの騎行を流して攻めるのが世界の常識です！」

気持ち良いくらい大嘘をつかないでください、どんな常識ですか!?

一緒に出陣している梅花さんとか今回の出陣での軍師ですよ、大将が僕ということは、

梅花さんは参謀とかになるですよ、なのに「同じ種類の人間と思われたくないから」

と言って、離れた所にいっちゃってますし、だめだろいくらなんでも。

参謀と一緒にいたくないって思われるような奇行を参謀長が行うって。

司君、戦争を楽しみ過ぎだよ、桃蓮さんのウォーモンガーとは別の意味で楽しみ過ぎ。

命懸けですよ、戦争なんですよ、遊び半分というのが。

「逃げる奴は山賊だ、逃げない奴はよく訓練された山賊だ！」

そういつて賊狩りをしてましたが、貴方はフルメタルジャケットのティム・コルセリですか！

先程はワルキューレの騎行歌っていましたよ、あれは地獄の黙示録ですよ、

今度はフルメタルジャケットってなんでもあり、ごちゃ混ぜですか、やめましょうよ。

司君が本当に自由すぎるのが頭が痛いですよ。

普段の兵隊の訓練の時のランニング時はミリタリーケイデンスを普通にやっていますし、

お願いですから映画フルメタルジャケット基準の行動をするのをやめてください。

ミリタリーケイデンス、ファミコンウォーズのcmとかでも歌われたアレです、

歌詞が大変素敵な歌詞で、放送禁止用語ばかりですね。

「エスキモーの・・・（以下略）」とか歌わないでください、皆エスキモーは分かりませんが下ネタばっちはいつてますし。

明らかに部隊にいる女性兵士が赤面しています。

この間、それで行軍演習とかで下品で迷惑だ、と梅花さんに怒られたじゃないですか、

ただ、そのあとも懲りていないでランニングの際歌わせていましたね。

やめてください、セクハラなんて概念が無い時代ですが、セクハラで女性兵士が辞めてしまったらどうするんですか、兵力を

大事に！

「保さん、なんか僕の事だけを悪者にしていませんか？」

司君の暴走に対して心の中で愚痴っていたら本人がやってきましたよ。

悪者になっているではなく事実を言っているだけで、なんか、私が陰口たたいているみたいにしたいんですか、司君は。

「山賊の根城に奇襲しに行くのにバレてもかまわないのかワルキューレの騎行を大声で歌ったり、それで地獄の黙示録かと思ったら、言う台詞がフルメタルジャケットだったりごちゃ混ぜだし。」

うん、注意する点がおかしいのは自分でも分かっていますが、真面目に注意しても気かなそうですから、乗っている時の司君は。

「保さんには言われたくないですよ、なんですか自分の騎馬部隊の装備を黒一色にして、

黒色槍騎兵艦隊とか勝手に作らないでください！」

いや、牙門旗だけでは目立たないなあと思って、どうせならばと部隊全体をね。

「黒色槍騎兵艦隊ならいいですよ、お願いですから三国志の時代に

シュワルツ・ランツエンレイターと横文字な名前はやめましょうよ、うちの部隊の人間とかも名前が覚え辛いし言い辛いと不評なんですから。」

正確には艦隊ではないよね単なる黒で統一した槍騎兵ですから、まあ、そこは銀河英雄伝説というかビッテンフェルトをリスペクトして。

シュワルツ・ランツエンレイターが言い辛くて不評だなんて嘘だあ、この時代だってイとエとかの発音あるんだから。

たとえば五斗米道の発音は“ごとべいどう”ではなく“ゴッドヴェイドオー”

じゃないですか、言えない奴は噛みやすい人間なだけですよ。

実際私の副官である桜花さんとかは平気だぞ。

「そうなのか？うちの軍師である桜花さんは平気だし、何も言わないぞ、

あと、桃蓮さんや嵐さんも格好良いといってくれているし。」

身近に味方が沢山いますよ、司君がわけのわからない事を言っているだけです。

「桜花さんのは諦めたっていうんです！！嵐さんと桃蓮さんは、旦那である保さん絡めば何でもありでしょうが！！」

ひ、酷い、うちの奥さんをそんな風に思っていたなんて、何でもOKなんてわけないじゃないです、面白ければOKなんです

桃蓮さんならば。

「あと、僕がワルキューレの騎行を口ずさむのを保さんが注意するのならば、

保さんが口ずさむドヴォルザークの新世界は良いんですか！？　ただ銀英伝好きなんだよ。」

むう、それを言われると弱い、でも、ビッテンフェルトが突撃ならやはり新世界でしょう。

「進め、進め！　勝利の女神はお前らに下着をちらつかせているんだぞ！」

“我が部隊の辞書には、後退とか、迂回とか、まどろっこしい言葉は載っておらん！”

とか言っていたでしょ、やめてくれえビッテンフェルトだけは。」

ギクギクギクツーー！！

よく知っているなあ、司君がいない時に言ったんだが、何処からか報告されたか？

普段は猪突猛進じゃないですよ、賊退治で突撃して一気に削る必要性があったからで・・・。

「ではビッテンフェルト以外でも色々聞きたい事が、銀英伝好きな保さんに確認ですが、

そのうち大砲をトールハンマーとか名付けたりしませんよねえ？」

いやいやいくらなんでもそんな名づけ方するわけないでしょうが。

まあ、撃つ時の掛け声を“ファイエル”と帝国みたいにしてはいませんが、

幾らなんでもたかが大砲ごときをトールハンマーとは言いませんよ。

「ガイエスハーケンも駄目ですよ。」

ちっ、こちらの発言をよんでやがったか、付き合いが長すぎるところという時不利なんだよなあ。

こちらの言いたい事を読んで先に釘をさしてくるからなあ、困った事です。

「でもさあ、虎牢関とかいたる関をコンクリで固めて大型砲台設置して、

イゼルローン要塞並みにしようって言った司君だって人の事言えないでしょ。」

うっ、それを言われると弱い、って感じの顔して焦っていますねえ。

それにしてもイゼルローン要塞ですか、作ってみたら面白そうではある、

ただ籠城ってなあ、歴史上籠城して勝ったためしなんてまずないしな。

とりあえず銀英伝とかについて言いあいするのはやめましょう、お

互い脛に傷を持つ、
というか、突かれると弱い点があるから不毛な戦いになる前に手打ちにしないと。

「司君、私も司君も同盟ではなく帝国が好きであるという点は同志なんだし、
そういう点からも仲良くやろうよ、お互いにいがみ合う事無く。」

「そうでしょうか、保さん。」

とりあえず、司君と若い出来ましたよ、これで益州の平和は守れましたよ。

「益州の平和を守れてねえよ、賊退治を真面目にやれ!!!!!!」

最後の最後で梅花さんに怒られるとは…………。

第六十二話、益州の新兵器、武装について議論しよう（後書き）

銀英伝が大好きです、特にビッテンフェルトが大好きです。

うん、本当に私は何を言っているのだろうか・・・。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第六十三話、荊州の最終兵器？水鏡先生（前書き）

今回はタイトルそのままか、やっと出てきました、水鏡先生のお話であります。

第六十三話、荊州の最終兵器？水鏡先生

―保―

「どうしよう……。」としか言えない事態です、本当にどうすりゃいいんだ。

私の目の前では泣き崩れて糾弾する女性。

その糾弾内容だって間違っていますよ、とはいえ、ヒステリー起こす女性にあんたがいけないんだ、とは言えませんかね。

感情論の人って自分が間違っているように自分の意に沿わないというだけ、

その一点突破で何とかしようとししますからねえ。

まあ、私が曹家、袁家が気に食わないというだけで敵視しカモにしているのも、

同じなんですけどねえ、うん、私って実に酷いなあ。

さてさて、この泣いている女性は誰なのか？何故この女性が泣いているのか？

いろいろ説明しないといけないことが多数ありますが。

まず泣いている女性ですがあの水鏡先生です、大丈夫なのか、まさかこんなだとは。

この人に見出だされるんだろ徐庶に諸葛亮に？統が、本当に大丈夫なのか？

理由と言いますか説明ですが。

分かってはいた、分かってはいたんだ水鏡先生が“腐っている”人だとは。

少し前にさかのぼりますが順を追って説明します。

ある日荊州に行ったんです、前々から計画していた益州、涼州の強化計画の一環として、
荊州にいる水鏡先生こと司馬徽をなんとか引っ張り込めないかと考えていましたよ。

調べた限りは今現在荊州にいて役人をしているわけでもなくフリーな状態だ、というので、
荊州の奥地までお誘いに行くことにしたんですよ、水鏡先生に是非来てほしいので。

ただ、荊州まで来たのでせっかくなので水鏡先生の所に寄るまえに、
まずは母上、父上の私塾時代の学友であり、
幼い頃の私を評価してくださった劉表殿に挨拶をしに行ってきました。

劉表殿は12年ぶりに会った私を手厚く歓迎してくれました。

酒席を楽しんだ後、劉表殿とは荊州と益州の貿易、各地で頻発する賊の問題、

荊州ならば山越、益州なら五胡や南蛮といった異民族問題について話をしてました。

はじめて会った時既に私は“涼州の神童”と呼ばれてはいましたが、まだ三歳でした、それが十五歳で今や益州の軍師になって政治を動かすのですから。

「あの子供がここまで見事に育つとは、惜しむらくは儂の手で育ててみたかった」

劉表殿の元でだと好き勝手やり過ぎて劉表殿の胃を痛めてしまいそうですね。

「儂の子達もお主の半分でいいから、その才能があれば荊州は今後も安泰なんだが。」

歴史上子供達は大変微妙でしたからねえ……。

「子供でなくてもいい荊州もお主のような優秀な人材がおればいいんだが。」

。荊州の人材だってそれなりに、うん、それなりでしかないねえ……。

それにしましても、なんでしょうか私の事をべた褒めですよ、これ

褒め殺し？

と思いましたよ、劉表殿にここまで褒められるとは思いませんでしたよ。

歴史上、荊州は広大過ぎる土地、魏、呉と周りは敵だらけ、家臣も一枚岩でない、異民族問題もある、問題だらけ胃が痛くなる組み合わせですよ。

そんな大変な荊州を政治力一本だけでまとめあげた天才政治家劉表に褒められる、御世辞も少しはあるでしょうが、史実の天才に褒められるのは嬉しくもありこそばゆくも。

話がだいぶそれてきましたねえ、話を元に戻しましょう。

劉表殿との話で、益州が会談したいにしても何故私が荊州に来たのか？という話になり、あとあといろいろ揉めるのは嫌なので早い段階でスパッと正直に話をしたんですよ。

益州の教育者の一人として、荊州に今はただいるだけの水鏡先生を引っ張りにきたと、私が言った瞬間劉表殿の表情が曇りました、いや、劉表殿だけでなく、蔡瑁、黄祖も。

水鏡先生は今、無職ですが荊州から連れていくという話に良い顔しません普通ならば、ただ、この時表情が曇ったのは怒りではなく、憐れみや同情という

感じだったんですよ。

なんでだろうか？という感じでちょっと首をひねりました。

たしか三国志では劉表は水鏡先生を凡人としか評価していなかったとありましたし、

やはりこちらの外史でも劉表殿は水鏡先生を過小評価しているのかと思いましたよ。

私の予想と全く違うような声が至る所からあがりました。

「本気なのか益州は！」と黄祖が「あれは疫病神だぞ」蔡瑁が、他にも「荊州がどんなになったか知らないからあんな事が言えるんだ。」

「悪い事はいわないすぐに益州に帰るべきだ」「自分から火の中に飛び込むとは。」

何これらの台詞？何があるの水鏡先生に、ヤバい人なの？

至る所から批難する声が上がります、水鏡先生と荊州で何があったのでしょうか？

評価していないとかではなく、忌み嫌う物のようです、どうしてまた、

生粋のトラブルメイカーどころではすまない、厄災という感じです。

この後劉表殿の説明を受けましたが、たしかにトラブルメイカーだとわかりましたよ。

「これを見ているがいい」そう言って劉表殿が部下に持ってこさせた物が、
なんだろうかと思って覗いてみると、大変意外な物でした。

この外史の世界で言う“八百一本”が大量に、BLですよホモですよ。

私はノンケですし興味無いですが、何故こんな物が出て来た？と思うので中を見ると、

「糞味噌技巧」という本でした、これ描いた奴誰だ俺らと同じ時代から来ただろ！

「よかったのかいホイホイついてきて俺は州牧だってかまわないで食っちゃもう人間なんだぜ」

うん、劉表殿と蔡瑁殿がキレるの分かるは、モデルにされたら、そりゃキレル。

これは酷い、褒め言葉でなく本当に酷い。

他にも蔡瑁×黄祖、蔡瑁×張允とか荊州の男達で多種多様なカップリングが。

このあと、劉表殿達の説明を聞けば聞くほど冷や汗が流れ、震えが止まらなくなる。

どうやら水鏡先生の實力をかっていた劉表殿は荊州で教師として仕官するよう誘い続け、

仕官後すぐに荊州の兵達の教育者として重用し最初は上手くいったと。

ただ、皆は油断してというわけではないが任せっきりにしていて、ある日気づいたら授業内容が孫子とかを教えるよりも八百一についてがメインに。

それはかなりひどく“蔡瑁將軍は普段と違って閨では受け”とか言われもない中傷を受けたり。

荊州の経費で八百一本を作成し展示即売会で販売する者が出てくるは。

カップリングで論争を起こし殺し合い寸前な戦いを起こす将達が出てくるは。

八百一本のせいで街を歩くと、自分達の顔を見るとひそひそ話する者、目線をあわせない者、こっちを見て頬を染める男がいたりと領民に明らかに勘違いされるようになったと。

授業を受けていた女性兵士達は「八百一が嫌いな女子なんかいません」とか公言し始め、仕事の話をしているだけでも愛を囁き合っているとかBL目線でしか物を見なくなると。

更に八百一本の即売会を荊州だけならまだしも、近隣の州でもはじめたせいで、しかも、モデルが劉表殿とかだったせいで、近隣の州から来た男達

の軍団に言い寄られ、
40過ぎたおっさんが己の尻を守る為に必死で逃げ回るなどといった事件が多発する。

聞いている頭が痛くなってきたところではないですよ、
荊州の疫病神とか言われるのも分かりましたよ、酷い、実に酷い。

それで水鏡先生の暴走があまりにも酷いので周りは処刑しろという案も強かったそうで、
ただ劉表殿は才能は惜しい、まして劉表殿が仕官してくれと口説いた人間だからと解雇に。

まさか荊州の人達に心配されるとは思わなかった、蔡瑁とか実はいい人なんだな、
三国志演義だと荊州乗っとり図るケチな小悪党という感じのポジシヨンだが。

水鏡先生が荊州の不便な場所にいるのも、実は軟禁という扱いだったとは、
腐女子に程があり過ぎてアウンサン・スー・チーみたいになるなんて・・・。

どうやら荊州の皆さんの意見は“益州が貰っていてくれるなら荊州は悩みが減りありがたいが、
ただ、人としてアレ（水鏡先生）を封印した方が人類の為に良くないか？”と。

存在としては、軟禁されたアウンサン・スー・チーよりも、羊達の沈黙で、

チェサピーク州立病院ボルティモア精神異常犯罪者診療所に入れられたレクター博士並みだ。

水鏡先生がハンニバル・レクターみたいな扱いということは、そうなると水鏡先生を益州に呼ぼうとする私がクラリス・スターリング捜査官？

クラリスか、映画版ならまだいいが小説版なら最後は私も脳味噌ソテー食べて、アルゼンチンの城でレクター博士と夫婦になって生活する事になるんだな。

貴腐人と結婚生活、頭がおかしくなりそうだ。

そういえばレクター博士で思い出したが、博士を演じたアンソニー・ホプキンスは、つきあっていた彼女にふられた理由が“貴方がレクター博士にしか見えなくなっただけ怖い”と役者としては最高なんだろうが、人として大変理不尽な理由で別れたんだよな。

はっはっ、思いつきり現実逃避をしたぜ、水鏡先生の危険さを知って。

いやあ一対一どころか相手が百、二百でも今の私ならば瞬殺出来ますよ、

でも、水鏡先生のせいでそちらの人と思われ、勘違いされて襲われたりしたら・・・。

イカン、私の尻が大ピンチです!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

益州、涼州連合の平和を守る為ならば呼ばない方が安全だ。

“よし決めた無かった事に！”と思い周りを見ると「益州が覚悟を決めたなら応援すべき！」

って、まずい益州が悪魔の毒毒モンスター、放射性廃棄物の引き取りが確定された。

此処で、やはり要りませんとは言えない雰囲気。

いやまあ、司馬家からの情報で前から知ってはいましたよ、水鏡先生が相当な腐女子、貴腐人だというのは知ってましたよ。

まさか、動く生物兵器とでもいいましようか、それほどの危険人物だったとは。

翌日、劉表殿達からの情報に怯えながら、尻を心配しながら水鏡先生宅に行ってきました。

まあ水鏡先生は女で俺の尻がーという事にはならないから心配しないでも平気でしょうが。

あと、もし水鏡先生を益州に呼んだあと私の尻に被害が出そうならば、

急いで洛陽にいる曹仁君でも拐って生け贄として捧げれば私の尻は無事だろう。

うん、それでいいや、曹家への復讐が出来るし、私は無事だし、追手はスツキリする、

曹仁君の尻が裂けようが俺は痛くないし平気ですから、それにうまいけば、

尻の穴ががばがばになった曹仁を見たちびっ子クルクルがどうなるか面白そうだし。

そんな事を考えながらやってきました、水鏡先生の家まで。

家を見てみましたが、なんか瘴気らしき物が家の周りを漂っていませんか？昼なのにうす暗く、

カラスが「ガーガー」と嫌な鳴き声をあげています、化け物屋敷みたいな雰囲気だ。

ちなみに水鏡先生本人が玄関まで出迎えに来てくれました。

水鏡先生は年の頃は35歳位？海琳さんこと周異さんより少し年上位みたいです。

左の目元の泣き黒子が特徴的な美人さんです、腰まで届くストレートな黒髪、

この時代に何故だか存在する着物姿です、見た目だけならば大和撫子です。

見た目が大和撫子とは言いまして漢民族なんですが水鏡先生。

まあ、それはどうでもいいや。

とりあえず着物姿とか一切関係無く、肝心の中身は腸まで腐っている貴腐人ですから、

気をつけないといけません、瘴気か何かにとりこまれてしまうかもしれません。

登用すべき人材の扱いが妖怪と同じ扱いというのは問題ですが。

簡単に雑談した後、水鏡先生に会いに益州から来た理由を伝えました、

是非、優秀な教師である水鏡先生に協力してほしいと頼みました。

水鏡先生の姪である司馬朗さんを助けた、その流れで司馬防さんとか一家全員を雇っている事実。

あと漢王朝が末期だとか、人材教育こそが国を作る上で大事と考えるも一致している。

八百一好きという爆弾を抱えているが益州が登用するのに問題は少ないと思いましたよ。

まあ八百一好き、たった一点が致命的な問題なんです。

益州に行ってもいいというので、後出しじゃんけんみたいな真似は

したくないので、
ただ採用するのではなく条件を出しました、当然八百一絡みですよ。

条件として“授業をキチンとやるカップリング論争とかを授業中にしない”

“八百一は水鏡先生の個人の趣味としてならば益州は目をつぶる”

“あと荊州でやったみたいに実在の人物で糞味噌技巧とか八百一本を描かない。”

うん、これらの条件でなら問題ないと思いましたよ、そしたら向こうも条件をだしてきましたよ、まあ、こちらだけ一方的なのはいいません。

ただ、それが理解の範疇を超えているのが、そんなとんでもない事を言ってきました。

「董將軍や李軍師とか本物の人ならいいですわよね？」

「カヲル君、君が何を言っているかわからないよ。」

あまりにもな発言に、思わず何処かの14歳になってしまった。

なんか私は同性愛者に思われているのが、危険すぎます、この人の思考は。

どうやら私が司君とこの世界ではじめてあった時の感動の再会の喜びを表す包容、

それを見たのが腐っている侍女で本になってしまったという勘違い

を間に受けていると。

私としてはその侍女を処刑したいですが、さすがに殺すのはやり過ぎですし我慢してます。

とりあえず、それは勘違いなんですよと具体的に理由を説明して否定すると、

「力一杯否定するなんて、無理に隠そうとしないでも理解ありますよ」と言われました。

全てがそう見えて思えてしまうなんて目や心が完全に腐りきっているんでしょう。

私が妻帯者である事伝えましたよ、「同性愛者同士の偽装結婚？」とききましたよ。

あのねえ、どこかの某俳優と某女優の夫婦生活じゃないんだから、だいたいこの時代にあるのか？偽装結婚なんて考えが。

妻との間に子供いますが、と伝えましたよ、「連れ子？もしくは人工受精？」

お前絶対に私と同じ転生者かなんかだろ、なんで人工受精知っているんだよ！

連れ子に関しては間違いではないですよ雪蓮ちゃんと蓮華ちゃんいますから、

ただ、小蓮は実子なんですが、と伝えましたよ。

私は妻帯者ですよ、しかも、妻二人に婚約者が一人と伝えてあげる。

そしたら、私が同性愛者でない事を遂に理解したようですね。

理解した瞬間しょっぱなの事態ですよ、30過ぎた大人がわんわん泣いていますよ。

「同性愛者でないなんて私を騙したのね!!!」 「私の純情を弄ぶなんて!」

「女の敵」 「なんで私が三十過ぎて結婚出来ないのに貴方は三人も結婚相手が。」

確実に違いますし、勝手な思い込みだろうとしか。

あと一番最後は酷すぎる、行き遅れたのは貴女の腐敗が酷すぎるからだろ。

ただ、流石に口に出しませんでしたよ、大惨事を迎えそうでしたから。

困りましたよ、嵐さんが涼州に来た時みたいに死んでやるなんてないかねないのが。

どうすればいいでしょうかねえ？

司君が前世では男も女も関係無く、更にネコでもタチでも、という最強生物でしたから、

益州に本物がいるよと教える、・・・わけにはいきませんねえ。

こっちに来て普通に生活して、自由な下半身は封印して真面目になっ
ていますから、

それに他人の私生活を勝手に話していい物ではないですからねえ。

どう説得しようか、とことん悩みましたよ。

とりあえず八百一で泣いたのならば、八百一で慰めるしかないなど。

益州、涼州連合に来るとメリットがある事を伝えましたよ。

一つ、益州、涼州は私達のもたらしした技術で紙が他州に比べ低価格
で手に入りやすい。

一つ、また私達の知識を活かして活版印刷やら印刷技術も優れてい
る。

一つ、益州、涼州では私が本を書いて成功したおかげで洛陽に負け
ない大型書店が多数ある

一つ、更に成都には大規模イベント開催出来る施設などもある

そうです、これらの条件を組み合わせるとわかりますが、益州、涼
州連合は、
どこよりも八百一本を手に入れやすいのです。

品揃え豊富な大型本屋、そして印刷コストが安いおかげで自費出版などしやすい、

そうです益州、涼州でこの時代にコミケを開催出来てしまうのです。

腐女子、貴腐人には堪らない条件が揃っていますよ、

まあ、こんなのでは無理でしょう、冗談で言っただけですが。

此処で出ましたよ、水鏡先生の口癖「好々」が、その口癖出ないで良かったのに。

無理に益州に来なくても良かったんですよ荊州にいていただいて、忠告無視で水鏡先生あっさり益州に来ると言っただけで契約することになりましたよ。

“水鏡先生、契約書とかキチンと読もうよ頭良いんだろ”と言いたくなるくらい、

ただ「好々」といってあっさりサインしてしまいましたよ、水鏡先生の加入が決まりました。

どうしよう、益州は軍事では優秀な人材が増えるでしょうが、

私生活で腐りきった腐女子だらけの国になってしまいかもしれない。

早まってしまったか、水鏡先生を信じるしかないのか、本当にどうしよう……。

あー臥龍や鳳雛、徐庶とか欲しいとはいえ、益州は悪魔と契約してしまっただけか。

リコールとかなんか出来ないか考えておきましょう、
はあ、私自身が望んだとはいえ、これほど嬉しくない人材登用は初
めですよ。

色々と疲れましたよ・・・。

第六十三話、荊州の最終兵器？水鏡先生（後書き）

水鏡先生まで手に入れた益州、涼州連合はどうなるのか？

はわわ、あわわだけでなく、冥琳や詠も腐ってしまうのか？

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第六十四話、恋姫世界でクリスマス益州編（前書き）

クリスマスをテーマに、本日は益州にいるメンバーのお話を。

第六十四話、恋姫世界でクリスマス益州編

―保―

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

本日は益州の主だった面々が集まったのクリスマスパーティーです、三国志の時代にクリスマス？疑問に思われるでしょうが。

何故クリスマスがあるのかと言いますと、まあ経営者として儲かりそうな、

また面白そうなイベントならばやらないといけないな、と司君と決めたもので。

涼州の頃からはじめたイベントで、大陸ではまだまだ知られていませんが、

涼州の新しい冬のイベントとして好評をいただいております。

涼州時代からやっているので、母上、父上、ちびっこ軍団とか、涼州を知っている人間は慣れたもので。

それに対し益州に移ってから新たに加わった、桃蓮さん親子、海琳さん親子、

紫苑さん、桔梗さん、水仙さんとかあたりはこれって何？と戸惑っているようです。

ただまあ、桔梗さんやら桃蓮さんとかノリがいい人は、いいでしょう、

酒があって騒げるならば幸せという面々は楽しんでいるようです。

それにしましても、私は一体誰に対して話をしているのでしょうか。

ちなみにこの大陸でのクリスマスは本来のと違い、キリスト教徒だからとかではなく、

年の瀬も近いし忘年会だ！プレゼントをあげるのは日頃お世話になっている人への感謝を！

と忘年会、お歳暮といった日本人的イベントをごちゃ混ぜにした感じであります。

キリスト教徒だからとかになると、この大陸にどれほど信者がいるのかとありますし、

教会に行ってミサをなんていっても、教会が大陸には無いような時代ですし。

夜に皆で集まって美味しい物を食べて、最後にサンタのコスプレをした私が、

子供達やら皆にプレゼントを渡すという風にあります。

夜に皆が寝た後に枕元にプレゼントを置かないの？

まあ、お歳暮の要素もありますし、ひっそり枕元に置くのはやりません、

といいますか、出来るわけですよ、だって、皆さん考えてみてくださいよ。

クリスマス知らない人間に例えば黄忠、嚴顔とか猛将と呼ぶべき

人がいるんですよ、
夜にそんな彼女達の部屋に忍び込んだりしたらどうなると思いますか？

死にます！！死にはしなくても、まず間違いなく、
「こんな時間に忍び込むとは曲者だな！」と賊と勘違いされてバトルがはじまります。

気付かないと思いますか？これが一流の武人達は皆気付きますよ、
部屋に忍び込むと。

実際、はじめてやったクリスマスでサンタを司君と二人でやりましたが、
恋ちゃんとかに泣かされましたから、大変でしたよ。

その時の事を簡単に説明しますね。

恋ちゃんや霞ちゃんとか保育園で寝泊まりしている子供達がパーティー後の夜中、
皆が寝ている今がチャンスだとしてプレゼントを皆の枕元に置きに行ったんですよ。

皆寝ているのは分かりましたが、念のためと気配を消して部屋に入っただですよ。

「…………誰か来た」喋りはスロウなのに、寝起きは一瞬で恋ちゃんに気付かれました。

恋ちゃんは三国志最強のあの呂布ですよ、とはいえこの当時まだ6歳とかですよ、

武道の武の字も無い、子供だったというのに野生の勘と言うか気付かれましたよ。

いちおうサンタのコスプレもしっかりしていて顔をまじまじ見ないと分からない、

ようにしてあったのに、「・・・保おにいだ。」瞬殺ですよ、一瞬でバレましたよ。

「はっはっはっ、保おにいは、誰かなサンタさんだよ、良い子に贈り物を。」

私の正体が一瞬でバレても必死でなんとかごまかそうとしましたよ、でも、恋ちゃんには通じなかったですよ、首をふるふると横に振って。

「・・・気配で分かる、保おにいだと。」

勝てるか！気配消して部屋に入って気付かれ、気配であっさり正体見破るって。

それで、あわわわとなっている所に霞ちゃんが目をさまして、

「擢ちゃんに儒ちゃん、こんな夜中に変な格好してバレバレだよ何しているん？」

私と司君の努力は一瞬で無に還りましたよ、気配断ちだって、相当自身があったのに。

あとですね、皆にプレゼントを渡す作業、これも大変なんですよ。

同じ年ですよ翠ちゃんがやらかしてくれましたよ、やらかしたのは私と司君ですが。

子供達皆欲しいプレゼントと言っても空気を読んでるんですよ、あつ、空気を読むといってもプレゼントの額面で気を使ってとかではないですよ。

子供達には細かい金の事を気にするなという風にしていますから、大体私は人気作家で司君は天才発明家ですから、その収入でかなりのお金持ちですし。

まあ、お金の面はいいんです、では、翠ちゃんが何をやらかしたのかって？

恋ちゃんの時みたいに枕元にプレゼント置くようにしようとしたんですが、

翠ちゃんは私や司君の気配で目覚めるとかは無かったんですね、ただプレゼントが。

例えば、その年のプレゼントですと月なら私の描いた絵本とか、詠ちゃんがお人形さんだとか、やはり子供だなど皆可愛らしかったんですよ。

ただ、翠ちゃんだけ希望プレゼントが一人違った。

“汗血馬”

だったんですよ、伝説の名馬ですよ、これは金でどうにかならない
だろ……。

いやまあ、どうにかしましたよ、羌族の元に汗血馬がいると調べま
したよ。

族長に土下座せんばかりに頼み込んで譲ってもらいましたよ、
まあ翠ちゃんが羌族の血を引く人間でもあるとかあって、譲っても
らいましたよ。

そこまではまだいいですよ、いや、かなり無茶であり良くないです
が。

馬をどうやって枕元に置くんだった！と私、司君、琅？さんとか皆で頭
を悩ませましたよ。

悩んでも仕方が無いとやりましたよ、翠ちゃんの部屋まで汗血馬を
連れて行くようになって、

とはいえ大問題になりましたよ、夜中に城の中を馬を連れて歩くん
ですから。

しかも、馬を連れているのはこの時代からしたら珍妙な格好の私達。
城内の衛兵達はパニックですよ、城の中を不審者が連れた馬が歩い
ている……と。

琅？さんとか、母上とか大人達が急いで周りに説明をしたりして、
なんとか城の衛兵達が騒ぎ出すとかを防ぐ事は出来ましたよ。

それで、やっとの思いで翠ちゃんの部屋に馬を連れていきましたよ、また馬が賢いんだ空気を読んでか騒がず静かに部屋の中で体を休めているんだ。

恋ちゃんとかすぐに気づいたが翠ちゃんがまた鈍いんだ起きやしない、

“これで大丈夫なのか錦馬超？”とちよっと思っしまいましたよ。

部屋に馬がいるんだよ、いくらおとなしくてもでかい馬ですよ、ブルルとか馬の呼吸音がまた夜中だから室内で響くんだ、これがまた。

それでだいぶたってから翠ちゃんが部屋の様子が変わったと気づいて目を覚ましたんです、

寝ぼけながら部屋を見渡す翠ちゃん、部屋を見ると巨大な馬と怪しい恰好の人間。

まあ、当然ながらパニックですよ。

本人が希望した馬だとはいえ、目を覚ましたら部屋に馬がいる、早朝バズーカとかと同じで結構な寝起きドッキリですよ、やっていることは。

パニックになった翠ちゃんを落ち着かせるのが大変だったんですよ、部屋に置いてあった十文字槍片手に無双乱舞しかねない暴れ具合で、抑え込むのが。

そんな風に色々と苦労したので、サンタは謎の人、夜中にこっそりプレゼント、

この二点については廃止になりまして、どうどうと皆の前で渡す事になりました。

そんな苦勞がありました、やはりクリスマスですのでプレゼント配る際はと、

一旦宴会場を出てサンタの格好に着替えてから行くことにしましたよ。

プレゼントを背中に背負う袋に詰めてと・・・。

今年はちびっこ達に武器ブームが来たの？

まあ格闘訓練がはじまったからなんです。望む物に武器がかなりありますよ。

袋が非常に重たい、尖った物が入っていて破れそう、あと袋を背中に背負うと刃が背中に。

ちなみに、どんな希望の武器があるのかと言いますと。

恋ちゃんの希望を聞いたら“保おにいと揃いの武器が”と言い出したから方天画戟を。

華雄ちゃんが“振り回したり出来る重たい大きい強い武器”ということで金剛爆斧を。

霞ちゃんが“前に街で見た娘が持っていた偃月刀が格好良かった”
というので飛龍偃月刀と。

私としましては霞ちゃんには是非槍を使ってほしかったですね、
私が今率いる黒色槍騎兵艦隊シュワルツ・ランツェンレイターを後々継いで欲しくて。

まあ黒色槍騎兵艦隊と言いながら、率いている私の武器が方天画戟
なんです。

またプレゼントを望んだ大人達もかなりの数が武器でしたよ。

紫苑さんが“使っている弓が古くなってきたので新しいのを”と言
ったから、颯鵬を。

桔梗さんのが実に難しかった、注文が漠然としているんですよ、
“お館様の火縄銃みたいな格好良い破壊力があるのを”と、難しい
注文なのが。

あまりにも難しい注文だから、知恵袋である司君にあの部屋で相談
したら用意したのが、
まさかパイルバンカーだとは、ボトムズかよ！実在しない武器持っ
て来ちゃったよ。

「あのさあ司君、ここが三国志の世界だと分かっているんですか？」
猛抗議をしましたよ、それに対し司君の答えが。

「保さん、候補だとパイルバンカー、レールガン、あとはM134
だよ、どれがいい？」

諦めよう、仕方ないと豪天砲と名付けられたパイルバンカーにしましたよ。

桔梗さんが「分の悪い賭けは嫌いじゃない」とか言いだしそうで怖いね。

とりあえず、プレゼントを配ろうとするサンタの格好ではないよ、戟やら斧やら弓やパイルバンカーとか全身武器だらけでいるなんて。

サンタではなくなんだろう？ 五条大橋に現れた弁慶のが近そうだな。

とりあえず準備OKと、さてさて会場に戻ってプレゼントを配りますか。

「皆、サンタさんからの贈り物だよー。」

会場に戻り皆に声をかけると子供達がワーッと寄ってきましたよ。

「うわーいサンタさんだー」「念願の武器がもらえる！」「サンタ
k t k r」

おいっ待て！、誰だ、一人現代人がいただろ！

それにしても武器に喜ぶ子供たちって問題だよなあ、配る死の商人状態の私もだが。

全身武器だらけな私と武器に喜ぶ子供を見て常識人な大人達が明らかに固まっている。

月が“馬に乗るための鞍と鐙が欲しい”と、やはり馬を愛する涼州の民ですね、

ええ、作りましたよ最高の馬具を、至高の馬具を作りましたよ。

お陰で馬具作りからの発展で、革製品のブランド会社まで作ってしまいましたよ、

馬具商から高級革製品という流れなので「得留雌」と名付けました。

はい、勿論モデルはHマークのあそこですよ何処とはいいいませんが。

詠ちゃんや冥琳ちゃんだけでなく大人の牡丹さん、百合さんとか、軍師や軍師見習いは、

“軍略書とか将来役に立つ本”という注文が多かったので用意しましたよ。

クラウゼヴィッツの「戦争論」とかを、私と司君の二人で必死に中国語に訳しましたよ。

芍薬さんは“今年こそは雷さんに思いを伝えたい、協力してほしい”ということなので、

雷さんに会えるように、ならばいつそと、休暇ではなく涼州に配置換えにしました。

雪蓮ちゃんは“品物はいいから戦い方を教えて、教えてくれないとお父さんと呼ばないもん！”

うーん、お父さんと呼ばれなくてもいいが、まあ、孫策に武を教えられるなんて名誉ですし、今後調練と一緒にしたりして、ただ勘で戦うのではなく色々な戦いを教えてあげましょう。

桜花さんは“今、司馬家は涼州や益州とかバラバラに散っているから、家族だと分かるように、司馬家全員で何かお揃いの物がいい”ということでした。

梅花さんは“桜花お姉ちゃんと一緒になんでもいいや。”
だから、司馬家の皆さんにはお揃いの細工の入った象牙のブレスレットを。

梅花さんの事だから「桜花お姉ちゃんが欲しい」と言いたさないか
内心不安でしたよ。

父上、母上は“保がくれるならなんでもいいわよ”と言われてしまったので、
それならばとたまには夫婦でゆっくり休んでくださいと、夫婦二人で行く温泉旅行を。

成都のそばに作りましたよ高級温泉旅館を、それで二人で安心して
いけるように、
日付を決めてその日は私達が益州の政治を動かすということにしま

したよ。

来年あたりに私、月に続いて新しく兄弟増えたりして・・・、ないよな。

さて、ここまでは良かった、問題はこれから発表する駄目な人達だ。

まずは桃蓮さんが“小蓮も産まれたし保とイチャコラしたい”と。

よし今夜は寝かせません！というか桃蓮さんが寝かせてくれなそう、とりあえず大量の精力剤を用意して燃え尽きるまで頑張ろうと。

嵐さんは“王子様との間に子供を、母親に早く孫を見せてあげたい。

”

よし嵐さんも今夜は寝かせません、まあ、子作りですから今夜だけでなくですが。

とりあえず、桃蓮さんと嵐さんの耳元で「先にお風呂入って部屋で待っていて」

と伝えましたよ、桃蓮さんが「それなら三人一緒にお風呂に入ろうと。」

うん、パーティ終わった後が楽しみになった、問題は、私のが、使い過ぎで取れちゃったりしないよな？あと、明日起きれるかな？

桃蓮さんや嵐さんは問題ではないですね、だって私と夫婦なんですから。

本当の問題児達は此処からです。

問題児その一、祭さんの希望“酒とツマミを山のように”

二十五歳と妙齡の女性の望む物ではないよ、彼女の望みのあまりの色気の無さに、

私や父上とか城内の男達が希望を知った瞬間に憐憫の涙を流したくらいで。

問題児その二、蓮華ちゃん、普段まともですよ、まさかここで名前があがるとは、

いや、まともだからこそその問題プレゼント希望だったのが。

蓮華ちゃんの望みが“桃蓮母様や雪蓮姉様に振り回されたいですむ生活”

あまりにも切実な願いにこれを見た瞬間に祭さんに続いて思わず涙が・・・・、

蓮華ちゃんの願いを知った桃蓮さんと雪蓮ちゃんが「少し自重する」と謝ってましたよ。

問題児その三、ねねちゃん、これも参った、なんというか色々、
“恋殿が毎日もう食べたくないと言い出し残す位のご飯を用意してほしい。”

なんかこれだと私達が恋ちゃんに毎日満足にご飯を食べさせていないみたいですが、
違いますよ、毎日沢山美味しいご飯を山のように食べさせてあげますよ。

ただ、食べる量がそれよりも遥かに多いのが、恋ちゃんが残すって、何百人前でしょうか？あの小さな体にどうやって入るのが謎です。

恋ちゃんにはキッチンとご飯を食べさせてますし、ご飯を残すのは良くない事です、

毎日だとその費用も馬鹿にならないので、これは却下しまして。

ねねちゃんは軍師見習いなのでこれから使う勉強道具とかをあげましたよ。

問題児その四、まさかまさかの水仙さんでしたよ、なんでまたと、大雑把な桔梗さんと違って細かい所にも気が利く益州の常識人なのに

“とにかく出会いが欲しい、一人酒はもう嫌だ・・・。”

なんだこの願い、切実過ぎるよ、結婚焦っているとはいえ大丈夫か、この人！

三国志演義だと忠義の人だが、その忠義って外史だと男関係なのか！？

桃蓮さん、嵐さん、海琳さんとか女性陣が「保君、祭と水仙を色々誘ってあげて」と、

そういう風に言う女性達の二人の目元には涙が。

祭さん、水仙さんとなんか可哀想な二人に対し哀れみの涙か？

問題児その五、言わずと知れた益州の新メンバー水鏡先生の希望ですよ、

皆さん予想ついたでしょうが、その予想大当たりですよ、当たって当たり前くらいですが。

“八百一本、出来れば董將軍がモデルで、しかも陵辱受けのを。”

この人に関しては皆フォローも何もしないのね、近付いたらヤバいと思っただけ寄らないの、

「水鏡先生これは無理です、契約の時にも駄目としたじゃないですか」と伝えましたよ。

「酷い、私だけ除者にするのね、私がいい歳して一人身だからそうするのね。」

「誰も私みたいな女の事なんか、誰も女として見ていないのね、悔しい死んでやる！」

水鏡先生の絶叫が響きましたよ、パーティ会場の皆さんドン引き、司馬家の皆さん青い顔しながら「おばが迷惑かけてすいません」と平謝りの地獄絵状態に。

この後一時間以上かけてなんとか水鏡先生を宥めすかしてきましたよ。

先程、後で一緒にお風呂入ろうとか、桃色雰囲気だった桃蓮さんと嵐さんが、

「保、部屋で横になるといいわよ」「王子様、疲れただろ、今日は休んでくれ。」

水鏡先生、本当にこの人がどうやって徐庶やら諸葛孔明を育てるんだろうか……。

ちなみに、この数日後涼州にいる司君から水鏡先生宛に何か大きな荷物が届いたようで、

その荷物を見た水鏡先生が「よし、次のコミケでいけるぞ、創作意欲がわいた!!」

と絶叫して八百一本を作っていたとか、何を届けたんだ司君……。

とりあえず益州のクリスマスは最後に地獄が待ちうけているとは……。

第六十四話、恋姫世界でクリスマス益州編（後書き）

益州の面々がクリスマスをやったらこうなりそうだなと。

とりあえず水鏡先生に手を出す勇者はいるのでしょうか・・・。

第六十五話、恋姫世界でクリスマス涼州編（前書き）

涼州のメンバーでクリスマスをやるとどうなるのか、
前回の益州に続いて涼州のクリスマスネタであります。

第六十五話、恋姫世界でクリスマス涼州編

司

「
「
「
「
「
「
メリークリスマス!
」
」
」
」
」

今日は涼州の主だった面々が集まっ
てのクリスマスパーティーですよ。

何故キリスト教のキの字も広まっていない三国志の時代にクリスマス？

そりゃ簡単ですよ、儲かりそうな面白いイベントですから、金が稼げて、

大騒ぎ出来るイベントですよ、実にすばらしいじゃないですかと保さんと広めましたよ。

まだ董家が涼州太守の時代からはじめましたが、クリスマスが流行するように、

阿蘇阿蘇やら涼州歩人とかで記事にさせたりしましたよ。

今やクリスマスは涼州の年末を彩る名物、一大イベントですから。

保さん達が益州に行ったので、益州でもこれから広まりますよ、実際、大陸中に広げた大谷商会経由で涼州のクリスマスと広めてますから。

まあ今頃、曹家のチンチクリンや袁家の脳内お花畑娘とかは、最近徐々に広まってブームになってきているクリスマスを知った方がいいが、

やりたいとなってもうちは儒教ですから、となつて、出来ないと悔しがつていそう。

まあクリスマスと言いましても、キリスト教徒がやるような教会のミサに行つて、讃美歌歌つてとかではなく、あつ、日本風のクリスマスとも全く異なつてますよ。

プレゼントを子供だけでなく大人達にもあげるようにしましたよ、クリスマスだけでなく年末の御歳暮を兼ねたイベントです。

子供達だけとかではなく、大人を巻き込む事によつて、玩具とかだけでなく服飾だとか宝飾品とかいたる産業を活気づかせようと。

實際利に敏い商人達は、これがチャンスだ！とクリスマスを後押ししていますよ、
とはいえ、馬商人や薬屋がクリスマスにどう絡むんだという感じもあります。

「クリスマスはクスリで盛り上がりよう！！」とかキャッチコピーにするのか？

さすがに、それは危ないからないか。

あつ、そうそうクスリに関する話で思い出しましたが、十常侍の張讓、趙忠は、
僕に渡された阿片が相当なお気に入りのもので、馬鹿だねえ。

靈藥なんて教えたらホイホイはまった阿片を煙管でパカパカ吸うなんて、

まあ阿片の危険性が知られるのは遙か後の事ですから仕方ないか。

さて、あの馬鹿二人をいつでも排除してもいいように、十常侍の中から、

一人ひっこ抜きましょう、奴等も一枚岩ではないし、あの二人のせいで出世がなんて。

もし私の工作がばれてもいいように身内で撃ち殺し合いするように仕組んであげましょう、

ふふふ、洛陽の馬鹿共を派手に僕の掌で踊らせてあげないと・・・。

たまには黒い陰謀を張り巡らす僕の姿を見せないと、ふふふ。

おおっと、クリスマスの話ではなくなりましたね、話を元に戻しましょう。

そうそう、この大陸のクリスマスが日本のとも違ってます、中国要素で特徴的な物を、

中国の祭りといったら忘れてはいけない大事な物を使っていますよ。

そうです皆さん横浜中華街とかで新年や旧正月迎えた事がある人ならお馴染み、

ここでクエスチョン、というと世界不思議発見の出題っぽくなりますね。

正解は中国の祭りの必需品“爆竹”です、涼州、益州にだけある火

薬を使った爆竹です。

派手だし、楽しいですよ！！

実際、前世では新年迎えるカウントダウンを、保さん達と中華街で爆竹の音を聞きながら、

なんて感じで毎年恒例のように楽しんでいたりしましたから。

ただ僕達みたいに楽しめる人ならばいいんですが、涼州の事とかを何も知らない人が、

クリスマスとか祭の時期にやってくると、街の至るところでババババババン、

といった爆竹の盛大な破裂音を聞いてしまうとパニックになる事が。

クリスマスを毎年やっている涼州の人間はもはや慣れた物なんです
が、

知らない人には爆竹の破裂音というのは相当怖いようです。

ちなみに、本当に怖いのか、この前わざわざ洛陽で実験してみましたよ。

真夜中に大量の爆竹に火をつけて曹家の庭に放り込んで見ましたよ。

闇にまぎれて見つからないように観察していると、破裂音が聞こえ
たと思ったら、

「春蘭、秋蘭何があったの！」と叫びながらあのちびっ子が飛び出して来ましたよ。

あの金髪クルンクルンが寝ぐせついて明後日の方向に曲がっていたのは笑った、あれ髪の毛だったのね、頭がい骨が変形した物だと思ったら違うなんて。

笑った、笑った、あまりに大声で笑い過ぎたから、覗いているのばれちゃって、

夏侯惇に「クセモノめ」と追いかけられちゃいましたよ。

何故か追っ掛けて来ている夏侯惇が左手に鍋蓋を持っていたのはなんでだろう？

多分、あのデコッパチも爆竹の音に驚いてパニックになったんでしよう。

逃げる時にこのままではまずいと袁家の屋敷に忍び込んで逃げきれたから、

勝手に勘違いして袁家と曹家の仲がまた悪くなったでしょう・・・ニヤリ。

阿片の話に続いてまたクリスマスの話からそれてしまいました、元に戻しましょう。

クリスマスと言いながら目茶苦茶なイベントで楽しいですよ、和洋中のミックスですから実に派手で楽しいですよ。

中国要素で長崎くんちみたいに龍踊りもやったりもしますし、クリスマスと名前を勝手に使っただけの完全に独自のイベントですね。

クリスマスと全く違うじゃないか？知ったこっちゃありません、
何で僕達生きている人間があゝの世にいる大工の息子に遠慮なんかないと。

言っておきますが、僕と保さんは神とも知り合いませんからね！
大工の息子について本当なのかとか聞くことだって出来るんですから。

実際、聞いたことがあるんですよ、神が何と言ったと思いますか？
『空気を讀もう、司。』これ以上触れると危険な何かがあるとなりましたよ。

クリスマスの話からとんでもない方向にまたも話がそれましたね、
クリスマスパーティーの話の続けましょう。

今、隴西城の宴会場を見渡すと涼州の色々な人がいて、
思い思いの人間と話をしたり、酒を飲んだり、食事をしたりと楽しんでますよ。

とりあえず涼州の主力メンバーが久しぶりに揃いましたよ。

州牧の馬騰こと琅？さん、州牧代理の李肅こと薊ようは母さんですね、
軍の責任者で韓遂こと雷さん、琅？さんの副官で僕の妻な淳于瓊こと紅さん。

雷さんの副官で馬鹿一、二号と皆が呼ぶ、郭？こと曰、李？こと光。

軍師や官僚では、司馬防こと菊花さん、それに益州から戻ってきた田豊こと芍薬さん、

それに涼州での筆頭軍師として僕となっていますね。

あとは琅？さんの娘で保さんの婚約者な馬超こと翠ちゃんに、僕の妻になってしまった馬岱ことたんぽぽちゃん、菊花さんに着いてきた司馬家の子供では、

司馬孚こと鳳仙花ちゃん、司馬馗こと金盞花ちゃんとかがいます。

それにしても翠ちゃんやたんぽぽちゃんには悪い事をしたなあと思いますよ、

前は月ちゃんとか保育園の皆と一緒にでしたが、董家が益州に馬家が涼州と別れるので、

どうしても、保育園の子供達も別れてしまうなんてことになるのが。

鳳仙花ちゃんや金盞花ちゃんと打ち解けていますが、出来れば月ちゃんや詠ちゃんとか、

保育園の子供達皆と一緒にだった方がよかったが、一つにまとめたいんですよ本音は。

涼州もやっていますが今は保育園メインは益州ですからねえ。

ちなみに保さんが校長でもある軍事学校も益州ですね、それに対しまして涼州は、

僕、そして五斗米道の張魯とかを教師にした医学校ですね力を入れているのは。

そうそう、その先生で呼んだ張魯なんです、張魯の後についていく赤毛の子供がいて、なんか妙に暑苦しい喋りする子供だなと思ったら、それがまさかあの華佗とは。

この時代の子供なのに“ゴッドヴェイドオー”と見事な発音が、暑苦しさといい、なんだろう「ゴルディオンハンマー」と叫ばしてみたくなったのは何故だろうか。

とりあえず、華佗には曹操と絡むと死ぬから気を付けな、と朝の占いで出ていたと、嘘ですが警告をしておきました、曹操にはもったいなさすぎる。

おっと、クリスマスから話が十分それてしまいましたね、涼州のクリスマスパーティーを楽しみましょう。

それにしても僕がサンタの格好すると凄く評判が悪いんですよ、ドイツの双子のサンタを見習ってやらせていただいているのですが。

ちなみに当然黒と茶色の弟のサンタの方ですよ、子供にプレゼントあげるのではなく、悪い子は袋に詰めて連れ去るとかお仕置きする方ですよ皆さんご存じでしょうが。

まあ、サンタと言っても世間一般のサンタの認識と違って立場がナマハゲに近いですが、その為か普段の僕はとても優しいんですが、僕が街を歩いていると

子供達が泣き出すのが。

さて地味な色合いのなまはげもどきサンタの話は置いておいて、
パーティーも盛り上がっていますし、メインのプレゼントにしまし
う。

前以て涼州の皆が何が欲しいかの確認をとってありますし、
保さんとあの部屋で何を皆にあげるべきか打ち合わせしましたし。

えーっと、まずは州牧である琅？さんの願いが“早く孫の顔が見た
い”

保さんと二人で苦笑いしましたね、翠ちゃん、たんぽぽちゃんまだ
子供だし。

初っぱなから僕達の意味だけではプレゼント出来ない物ですよ、
とりあえず琅？さんには、騎馬を率いる人間なので新しい馬具にし
ました。

母さんは希望が“司が元気でいてくれれば”母さんの優しさが心に
沁みます、
ただ、これだとプレゼントしようがないので僕がデザインした服や
調合した香水を。

雷さんは“保様や司様が結婚したし、儂もそろそろ結婚相手かの。”

当人は冗談半分で言っているんだろうが、芍薬さんは雷さんに片思

いなんだけど、
なんで気づかないんですかねえこの人は、まったくエロゲの主役か
！？

とりあえず、芍薬さんを誘いなさいと書いた手紙と一緒に高級酒家
のお食事券を。

まさか、それを渡した後「司様飯食いに行きましょう、タダで食
えるなんて驕ります」

あまりにもな発言を聞いて、驚いて壁に頭を打ってしまったよ、ま
ったく雷さんは。

紅さんの願いはと“保さん見て羨ましくなってしまうして、
欲しいと思ってどうにかなるものではないですが子供が欲しいです。
”

うーん、紅さん、琅？さんと同じで無理を言わないでくださいよ、
まあ、そこは色々と頑張りますか、やる事はやっているとはいえ。

えーっと、馬鹿一、二号の願いはと“出番が欲しい”うん、見なか
った事にしよう、
なんか適当に水羊羹の詰め合わせでもあげてごまかしましょう。

と言いますか、涼州にスポットが当たる回が無いと出番が無い事く
らい察してくれ、
主役は僕と保さんですが、保さんが主役で僕は準主役に近いんです
から。

おおっと、僕はなんでまたメタな発言をしているのでしょうか、まったく。

菊花さんは“別れて住んでいる家族達とお揃いの何かを、家族だよという証みたいなの。”

これ益州にいる桜花さんとか鳳仙花ちゃんとか他の司馬家の皆と被るんですよね、

保さんと相談して高いですが象牙細工のお揃いの腕輪にしてあげました。

「こんな高級品を良いんですか!?’」と司馬家の皆さん驚いていますね。

益州や、涼州というこちらの都合のせいで、家族まとめて一か所ではなく、

桜花さんや梅花さんは益州でとか、バラバラですから、これくらいのはあげないと。

芍薬さんは“今年こそ雷さんに思いを告白したい”でしたから、保さんがそれならばとやったのが益州から涼州に配置替えでしたね。

うん、それだけだと弱いから告白しやすいように雷と二人っきりにしましょう。

先程雷にあげた食事券があるから、二人で一緒にお酒飲んでその時にでもと、

でも、まさか食事券貰って雷が僕と飲み行こうなんて言い出すなん

てねえ。

とりあえず芍薬さんと雷さんが二人っきりで食事できるようにお膳立てしてあげましょう、

あとは芍薬さんに“雷さんの酒にこれを混ぜろ”と書いたメモと秘蔵のお菓を。

翠ちゃんは“保さんに会いたい”と、照れ屋な翠ちゃんが勇気を出しているが、

難しい、保さんは益州ですし、翠ちゃんだけを益州につてわけにはいかないですし。

というわけでやむを得ない手段として、保さん抱き枕で少しの間我慢してもらいましょう。

ちなみに、この保さん抱き枕当然ながら保さん非公認、というかバレたらやばいです、

表は笑顔な保さん、裏面はちよっぴりエッチなセクシーな保さんを。

男の姿が描かれた、しかも、セクシーなんてもらっても普通の人に迷惑でしょうが。

翠ちゃんにあげたら「ななななんだよ、こここれは！！！！このエロエロ魔神」

とか僕に文句を言っていました、会場で保さん抱き枕をニヤケながら抱き締めていたのが。

保さん全裸版を作ったら大変な事になっちゃうか？作ったのばれたら殺されるからやめよ。

たんぽぽちゃんは“旦那さんである司君がいてくれればいいよ”

六歳の子供が何を言っているんでしょうか、まったく!!

たんぽぽちゃんの願いを聞いてつつい照れてしまったじゃないか・
・・、

近いうちにまた益州に行くから、その時にたんぽぽちゃんを連れて
いってあげるか。

あとは、たんぽぽちゃんと手をつないで街にお買い物に行ったりし
てあげましょう。

そうそうクリスマスのプレゼントで思い出した事が、少し話変わ
りますが、

保さんが益州に遂に水鏡先生を招いたと言っていましたねえ。

どんな人だったか、この前話をしたら、

「とんでもない人間だった、腸まで腐っている人だった」

遠い目をして水鏡先生について語っている保さんがいるなんて。

“八百一本、出来れば董將軍がモデルで、しかも陵辱受け”を希望
と言われてまいったと、

凄いですねえ、保さんが荊州で疫病神と呼ばれるほどの腐女子で、
あまりにも危険で、扱いとしてはハンニバル・レクター博士並みと。

どうするんでしょねえ、そんな人物に育てられるんですかねえ、諸葛孔明とか。

怖いですね、天下三分の計よりも熱くカップリングについて語ることがなったりして。

腐女子にも程があり過ぎて凄い美人なのに、35にもなっていまだに独身、
というか永遠の処女がほぼ確定している、とか、凄い評価だな。

それで「八百一で自分を使うな!」「俺はノンケだ」とか否定したら、

「私を弄んだのね」「女の敵」とかあり得ない罵り方をされたと。

「どうすんだよ、あんな危険物、悪魔の毒毒モンスターの対処なんか分からないぞ!」

あの保さんが此処まで弱るとは、どれほど恐ろしい人間なんでしょうかねえ。

腐女子をこじらせ過ぎた残念な美人で永遠の処女というくらいなら、
「保さんが情を持って抱いてやればいいじゃん!」と言ったら、
「そんなこと出来るか!!!」とマジギレした位だしなあ。

保さんが何をプレゼントであれば良いんだろうか、なんて悩んでいたから、

保さんとは別で僕からもプレゼントを成都に送るようにしましょう。そうですねえ、水鏡先生には「一人寝が寂しいならこれを使ってくれ」と手紙を書いて、保さん抱き枕を保さんには内緒で水鏡先生に送る事に見ましよう。

はてさて、どうなるやら。

この時の僕は知る由もなかった、後に抱き枕をまさか受け取った瞬間に、

「こ、これはピーンと来た創作意欲がわいてきた〜！」と真夜中に叫び出して。

そして、保さんがモデルで描かれた八百一本が大量に作られるようになるなんて、大陸を席卷する伝説の八百一本が作られるとは、この時の僕は知るよしもなかった。

保さん抱き枕は簡単にバレる事は無いだろうと思って安心して油断してたが、

まさか、この後、保さんから「殺す」とだけ書かれた手紙が送られて来るとは……。

第六十五話、恋姫世界でクリスマス涼州編（後書き）

益州、涼州連合のクリスマスの話は以上となります、
とりあえず彼らだけでなく皆さんもクリスマスを楽しんでください。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第六十六話、二日酔いで目覚めてみると・・・（前書き）

今回はクリスマス益州編の若干続きのお話であります、
今回も相変わらずご都合主義満載なお話であります。

第六十六話、二日酔いで目覚めてみると・・・

一保一

「見知らぬ天井だ・・・。」

何処かの十四歳みたいな事を言っていますが、目を覚ましたら知らない部屋です。

目を覚ましたのも十分な睡眠を取った心地良い物ではなく気持ち悪さによる吐き気の為。

気持ち悪い、まずは上半身を起こし寝台から出て厠に吐きに行こう、何処にいるのか分からないが寝台で寝ているなら、この部屋のそばに厠があるはず。

駄目だ二日酔いだ、頭の中がぐわんぐわんする、とにかく気分が悪い。

まずは上半身を起こそう、・・・うん？起こせない、なんか体や布団が重たい、
何かに引っかかっているのか？なんだ、どうしたことか自分の体を見してみる。

此処で気付いたのは、私の首と胸に腕が左右から巻きついている、左側から首に褐色の腕が、右側からは透き通るような白い肌の腕が胸のあたりに。

しかも、私は両手を広げた姿勢のようで、その腕に何かしらの重みを感じる。

という事は、私の首筋に巻きつく褐色の腕も、胸板にある白い腕も、どうやらどちらも私の腕ではないようだな、私が阿修羅マンなら別か。

二日酔いで気分悪いのに、よくこんな馬鹿な事を考えられるな私も。

私の腕ではない、私の体にへばりつく腕、誰の腕だ・・・？

というか意識下では分かっている、左右を見ればすぐに分かる事なんだと、
でも、今、この絡みついている腕を確認するのはヤバイ！と脳が警報を出している。

二日酔いで気持ち悪い、頭が痛い、でも、そんなまでもない状態でも、
脳味噌が警報をあげている、私の物でない腕の正体を確認するのはまずい。

ここは現実逃避でもう一回寝てしまえばきなんだろう、いや、寝ても解決はしないが。

覚悟を決めよう、腹をくくれ、そうそう拙い事が簡単に起きるわけではないのだから。

左右を見てみると・・・・・・・・。。。

「ウオッ!!!!!!!!!!!!!!」

左側の褐色の腕の人って祭さん、右側の白い肌の人が水仙さんだよ、
ということは私が祭さんと水仙さんを腕枕していて、二人が抱きつ
いていると。

いやそれくらいならば、保育園の子供達とお昼寝する時にあったぞ、
孤児達が親恋しくて寂しいからと詠ちゃんや華雄ちゃんが抱きつい
て寝ていた事が。

そうだそうだ、二人が童心にかえってではないがおふさだけで抱きつ
いているに違いない。

じゃあ、なんで私だけでなく祭さんと水仙さんも裸なんだよ・・・。

あまりの驚きに吐き気とか頭痛が吹っ飛んだ、急に頭が冴えてきた、
冴えてきたのではなく、恐怖と驚きで酒が抜け、冷や汗をかきはじ
めた。

OK、OK、俺様こと董擢孟高よ、冷静になれ、今自分がどんな状
況なのか、

何でこうなったのか、考える事とか色々あるだろ、冷静になれ、や
る事は多いぞ！

とりあえず、こんな状況に何故なってしまったのか理由をよく考えてみよう。

もしかしてだが、私が二日酔いですから、昨晚べろんべろんになるまで飲んでいて、そんな酔っ払いの私が至る所で吐き続け、それでそのまま寝てしまったと。

あまりにも酷い私の姿を見た心優しい祭さんと水仙さんの二人が私の世話をしてくれて、まずは吐しゃ物で汚れた私の服を二人が脱がせて私を寝台に寝かせてくれて、それで二人とも私が汚した跡を片づけ、その際に服が汚れたから脱いで着替えようとしたが、二人とも酔っていたから途中で力尽きて私と一緒に寝台で寝てしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ネーヨ！」

自分でも分かる、この推測はいくらなんでも無理があり過ぎる、あまりの無理のある推測に自分自身で声出して否定してしまった。

じゃあ、こんなのか？

昨日は寒い冬の日、酔っ払って外で寝てしまっただけで危うく凍死寸前な

私を見つけた二人が、
このままでは私が凍死してしまう！となって、祭さんと水仙さんの二人が、
私の体を温めるにはやむを得ないと恥ずかしいながらも我慢して肌で私を温めてくれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・絶対になーよ！！！」

またしてもあり得ない推測だね、どんだけ都合の良い理由だよ、こんな事があるわけないよ、だとしたら、やはりだよなあ。

私が酔っぱらっていたとはいえ、女性二人と全員裸で寝台で抱きあって寝ている、

って、事は、なにがなにしてだよな・・・・・・・・。

いやいやいや、酔っぱらって3Pはないやろ、まして私は妻帯者ですよ、

嵐さんに、桃蓮さんという妻がいて、小蓮という娘もいるんですから、

酒飲んで酔っ払ったくらいで勢いで浮気なんてするわけないじゃないですか！

と、強く言えない自分が悲しい、でも、まさかな、まさかな、否定したいよな。

「二人ともすごく美人だし、綺麗とか見た目だけでなく気が利くし優しいし、
色々と話をするとなぁ楽しいし、女性として凄く魅力的だけど・・・。」

三人とも裸とはいえ未遂で終わっていることだってありえるよな・
・、
ええっ、寝ている二人を起こして事情聴取したわけでないし浮気し
たと断定できないですよ。

無理がある、朝、目を覚ましたら男が腕枕して女が抱きついていて
全員裸ですよ。

やってしまったという私の記憶も当人たちの証言が無くて、あくま
でも状況証拠のみ、
とはいえ、これだけの状況証拠があるとなると裁判はかなり不利で
すよ。

これで無罪になるなんていくらなんでも、いや、OJシン普森事
件みたいに、
ドリームチームみたいな有能な弁護士軍団がいれば無罪だってあり
得るよな。

無理がある、無理があり過ぎますよ、これで有罪か無罪かですか、
「ギルティ」とゴルゴ13に言われて愛用のS&Wで撃ち殺される
位の有罪だよ。

どうすればいいんだ？起こして二人に聞くのが良いんだろうが怖く
て起こせないよ。

じゃあ、二人共寝ているからなんとか絡んでいる腕をほどいて、腕
枕している腕を抜いて、
起こさないように寝台からそっと抜け出して自分の服だけ取って窓
から逃げると・・・。

いやいやいや、二人に記憶があったら駄目だし、もし二人とも記憶が無かったら、
祭さんと水仙さんが裸で一つの寝台で寝ていたって、妙な方向に話が転がってしまう。

駄目だ、逃げるという選択肢はどちらにしろ話が大変な事になってしまう。

じゃあ、それ以外の事について考えてみよう、多分私はやる事やっているんだろう、
そのことを嵐さんや桃蓮さん二人の妻にどう謝ればいいんだ？

「私は記憶が無いですが貴女達二人の知り合いと関係を持ってしまったようで。」

こう言って土下座して謝たとして、記憶が無いなんて嘘だと怒られるでしょう、
記憶が無いと私が言いはっているだけと言われてしまって、それ人として駄目だ。

桃蓮さんや嵐さんが怒っても殺されるとかはないだろうが奥さん二人を傷つけてしまう。

では、奥さん二人にはこの事を話さなければいいか？いや、下手に隠したりなんかしたら、
私の浮気がバレた時もっと二人を傷つけてしまうではないか、ゆるされるわけがない。

それに、セコイ真似をすると関係を持ってしまった祭さんや水仙さんをも傷つけてしまう、では妻達には素直に謝るとして、とりあえずまずは私の両脇にいる女性達をどうするかだ。

正直に話すべきか？「酔って記憶無いんだけど昨日もしかして二人と肉体関係もった？」

どちらも男性経験無いみたいだし初めての相手になったのにこれは酷い、言えない。

じゃあ一切聞かないで「あつ、おはよう、起きた、じゃあ朝御飯にしよう。」

とか、普通に会話したりしてすごすなんて出来るわけが無いですし。

かといって他の手段ないよなあ、私にギアスがあれば二人の記憶を消す事が出来るが、いや、それは間違った対処方法だよな、大体ギアスなんか存在しないし使えないし。

ここはやはり服を着て窓から逃げるべきか？左右の二人共寝ている今なら、

気をつけてやれば逃げられるはずだな、って、これは人として絶対に駄目だって。

色々やる事が何個があるが、昨日の記憶が無いから記憶を取り戻

さないといけない！

勢いで肉体関係を持ってしまった寝ている二人にどう謝るべきか考えて決め実行しないと！

あと、浮気をした事実を素直に二人の奥さんに話をして謝る事もだよな当然！

この三点をどうにかしないと、いや、どうにもしようがなく、やるべき事は決まりきっているんですが。

先程から考えている通り、どうしようもなく、逃げ道は無い、素直に謝って怒られるしかない、人として当然の事をしないといけない。

それにしても何でこんな事になったのだろうか？ 昨晚の記憶が全く無いのが困った。

頭を働かせろ、転生したから精神年齢は50歳近いが肉体年齢は15歳と若いんだ、

思い出せ、思い出せ、私なら思い出せる、昨晚何があったのかと・・。

そうだ、元々のきっかけがクリスマスをやる時に祭さんの希望プレゼントが“酒と肴”

水仙さんが“とにかく出会いが欲しい”と女性としてかなり悲しい物で皆が涙して。

そんな願い事をする二人に対して、桃蓮さんが「祭と水仙をたまには誘ってあげなさいよ」

と言ってきた、なんというか色々可哀想な二人の愚痴でも聞こう
と思つて。

昨晚、クリスマスの翌日の夜に、城ではなんだからと高級酒家兼飯店に三人で行つて、
色々な話を話そうという食事会を私が開催したんだつた。

最初は、「太守として仕事に慣れましたか？」「益州の面々とはうまくいっていますか？」

「苦手な人とかいますか？」とか仕事絡みの話をしていたんですよ、
思い出してきた。

それで「最近はどうな事に興味持っているんですか？」「趣味は？」
とか、

更に食事をしながら当たり障りの無い話をしたりしていたんですよ。

それで酒飲みながらいろいろな話をしていたが、祭さん、水仙さん
とどちらもお酒強く、
お二人と飲んでいたら最初に私が酔っ払ってきたんだよな、そうだ
そうだ。

益州・涼州連合の面子で、桃蓮さん、祭さん、紫苑さん、桔梗さん
とか、

仲の良いお酒仲間皆お酒がかなり強いのは知っていましたが、私
があっさり酔うとは。

そこから先が分からない何を話したんだっけなあ？

「お二人共綺麗で、魅力的で焦らないでも男性が放っておかないですよ普通なら、

二人の魅力が分からない男だらけとは馬鹿ばかりだ！こんな良い女を放っておくなんて！」

「二人共御世辞抜きで凄く魅力的です、見た目だけとかだけでなく、とても優しいですし、

一緒にいると心休まりますし、うん、二人と付き合えるなら男としてどれ程幸せか。」

うん！？なんだ、なんか凄い言葉が聞こえたんだけど、気のせいかな？

「擢殿、お主が今言った事を儂と任殿に言ったんじゃぞ。」

「そうですよ、私達の手を握りしめ、真剣な目で見つめながらそんな事言われると。」

まさか、まさか……、ああああああー、祭さんも水仙が起きている。

「さささささささ祭さん、水仙さん、今の台詞って何？聞き間違いだよね？」

私の心を読んでいるの？というか、いつから起きていたの？どういうこと？」

パニックです、間違いなくパニックです、どうすればいいんですか、何この事態、

えっ、なんなのこれはドッキリなんですか、わけがわからないんですが。

「ささささささ祭なんて名前じゃないぞ僕は、それにしてもお主質問が多いのう、

さっきの台詞は昨日酔っぱらったお主が酔いながらも僕ら二人に言った言葉じゃぞ。」

俺酔っ払いながら何を演説しているんだ、今まで酔ったとしても、一緒に飲んでいた女性の魅力とかで演説した事なんて一度も無いのに。

「他にも、年上なんて構いませんよ私はそんな事気にするようケチな人間じゃないです！

年齢だけで惚れたはれたなんて言う人間じゃないです私は！とか言ってきたり、

ちなみに“とりあえず、こんな状況に何故なってしまったのか理由を良く考えてみよう”

と独り言を言っていたあたりから目を覚ましていたんですがどうも声をかけ辛くて。」

ほぼ最初から起きていたのかよ・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！

あと、二人の発言聞いた限り言い訳出来ないですよ、私が口説きにいて、

浮気したんですから、あーー、やってもうた、いや、私の事は今

はい。

とりあえず急いで寝台から抜け出して、床の上で土下座ですよ。

「祭さん、水仙さん誠に申し訳ございませんでした、いくら私が酔っていたとはいえ、

お二人と関係を持ってしまったこと、しかも、その記憶が無いという無責任さ、

また、それをどう誤魔化そうかとセコイ真似をしようと考えていた事、

色々とお二人を傷つけてしましまして謝って済む事ではございませんが、

誠に申し訳ございませんでした、こういった事でもきちんと責任を取らせていただきます。」

二人が怒っていて今すぐこの場で切腹しろというならします、

ただ、私自身の意志ではしません、死ぬのが嫌なのではなく、いや、ちよつとは嫌だ。

た、だ死んでしまうのは責任取った事ではなく逃げる事ですから、それならば罵声を浴びようが殴られようが、いかなる責めだろうが、それを真正面からキチンと受けとめることこそが責任を取った事になるのですから。

「どういった事でも責任をとると言ったなお主。」

祭さん怒っていますね、いや、怒らない訳無いですよ、こんな無礼なことしたら。

「責任を取ってもらわないといけませんね。」

水仙さんも怒っていますね、どういった風になるのやら。

「では、女房にするんじゃない（妻にしてください）」

はひっ!? なんか二人の口からとんでもない台詞が聞こえて来たような。

「今、なんと言いましたかお二人? 聞き間違いがあったような。」

聞き間違いですよ、ええ、聞き間違いに違いありませんよ。

「お主若いのに耳が遠いんじゃない、女房にしろと言ったんじゃない。」

「責任とってくださいるんですよ、だから妻として迎えてほしいんですが。」

聞き間違えじゃないのか、こんな事あるのか? そんな都合よく丸く収まるような事が、

いや、二人との間は都合良いが、桃蓮さん達との間は何も解決していないが。

って、私は何を考えている、酔っていたとはいえ、自分の無責任な発言や行動、

私自身のだらしなさが原因なんだから、自身の尻は自身で拭かないと。

「本当にいいんですか？ 私なんかで、こんな酷いらくでもない人間ですよ。」

土下座はやめました、床の上に裸で正座したまんま話をする、知らない人が見たらそうとう間抜けな姿をしているでしょう、今の私は。

「お主は卑下するな、卑下するとお主と結婚する儂もということになるんじゃないぞ、堅殿に言われたりしているから知っているじゃろ、少しはお主に気があったと。」

確かに私と結婚となると、私が駄目だと、その伴侶もとなってしまうのは分かります、二人が私に少しは気があったというのも知っていますが、本当にいいんですか私で？

「保さんは家柄もいいし、私も年齢的に一人なのは、とか私も打算な部分ありますよ、でも、酔っていたとはいえ昨晚素敵とか口説かれてキュンときてしまいましたし。」

本当に私は酔っ払っていながら何をやっていたんでしょうか、昨晚の私に会えるのならば今すぐあって殴りつけて、それから説教をしないと。

「はじめてなのに記憶が無いとかについては今後色々言わせてもらうぞ。」

「折角の体験だったのに、仕方ないとはいえですよ・・・。」

本当にすいませんでしたお二人共、本来ならここは「御馳走様でした」

とでも言うべきなのか？ いや、それ絶対に違うね、うん、謝るしかないですよ。

「まあ過ぎてしまった事は仕方無いお主も謝っておるし、ただ聞きたい事があるんじゃない、
儂の希望と任殿の希望で“女性としてかなり悲しい物”と言っていたのはどういう事じゃ？」

あれ、先程までの祭さんと違って、なんか怖いオーラをまとっているような、
いや、祭さんだけでなく、水仙さんもなんか雰囲気はかなりヤバイような。

「望む物が“酒と肴”だった祭さんが女性としてなんというか終わっている感じが、
水仙さんの“出会いが欲しい”も焦り具合が痛々しいというか怖い、
・・・はっ！！」

私は今とんでもない地雷を踏んでしまいましたね、うんオーラがヤバイ、
殺気、怒気、ありとあらゆるヤバイ物ですよ、これはまずいね、土下座しても無理だね。

「任殿、こ奴は少し懲らしめないとイケない気がするんじゃないかかろう？」

「奇遇ですね祭さん、私も徹底的に懲らしめるべきだと思ったところなんですよ！」

Oh my God!! やってもうた、あきらかにやってもうた、地雷を踏んでもうた、もうおしまいです、神様にお祈りしましょう。

『呼んだか？ 久しぶりじゃな、まあ、自業自得じゃ耐えろ。』

久しぶりに神が出てきて念波で会話したよ、うん、助けてくれるわけないね、
とりあえず久しぶりの出番おめでとう、さて、私の現実逃避はいいや。

この直後に祭さんと水仙さんの二人からオラオラを喰らって、その衝撃で壁を突き破って裸のまま成都の街に吹き飛ばされましたよ。

城に帰った後に怒られましたよ、桃蓮さんと嵐さんに謝ったがやはり怒られました、
でもまあ、祭さんや水仙さんの二人がは私に気があったのを知っていたので、
かなり甘い御裁きで奥さん達には許してもらえました。

ちなみにこの件で一番怒ったのは、「もう浮気した不潔！」と怒った義娘の蓮華ちゃんではなく、
私の事大好きな母上でもなく、まさかの水鏡先生でした、いやっ、水鏡先生と皆納得か？

「私が未だに一人身なのに貴女はまた二人も新たに妻を娶って、私へのあてつけなの！！」

水鏡先生が独身なのは腐女子にも程があると自業自得なだけですよ・・・・、

水鏡先生は八百一好きさえなければ、大抵の男性は平気“なはず”ですよ、多分。

「董將軍、いっそ水鏡先生も妻にすれば」なんてふざけた事を言っている人間がいたが、その人物にはしっかり説教させていただきましたよ、怖すぎる！冗談でもやめてくれ。

水鏡先生をどうにかしないと、本当にこの人は優秀な教育者なのだろうか。

それにしても今日は二日酔いで、色々驚かされ、新たに妻を二人も迎えて、その二人にオラオラされたり、最後に水鏡先生に理不尽な理由で責められ。

なんなんでしょうか今日は厄日かなんかだったのでしょうかねえ？

とりあえず、色々と疲れましたよ・・・。

第六十六話、二日酔いで目覚めみると・・・（後書き）

水鏡先生をどうにか結婚させたいが、誰が結婚相手になるべきなのか？

今までの話の中で出てきた男性キャラ誰でも相手にならないのが。

皆さんのご意見、ご感想をお待ちしております。

第六十七話、待て慌てるなこれは孔明の罠だ・・・。(前書き)

相も変わらずご都合主義なお話でございます、
今回は前回の話の続きであります。

第六十七話、待て慌てるなこれは孔明の罠だ・・・。

―保―

なにかおかしい、うん、なにかおかしい、明らかにおかしい。

一昨日は色んな事がありすぎた、ありすぎである。

私が祭さんと水仙さんの二人を酔った勢いでとはいえ手をつけてしまっ

責任を取るということで二人を妻として迎える事になりましたが。

私が結婚一年目にして、いや、何年目だからいいとかではないが、浮気をしてしまい桃蓮さんに嵐さん、二人に謝ることになりましたよ。

でも、「いずれ皇帝になり後宮作る事になるし仕方ないわよ、許してあげる」

と、妙に寛大な処置で簡単なお説教で済んでしまいました。

まあその後、永遠の処女、究極の耳年増、腐女子の中の腐女子、益州のラフレシア、
最凶生物とか呼ばれる水鏡先生が「未婚の私へのあてつけか!」とキレていました。

うん、ここまではまだいい、いや、おかしい所だらけでよくないんですが。

まず桃蓮さんや嵐さん、妻二人が異常に寛大なのがおかしいなとい
いますか違和感が。

確かに将来私は帝国を作りますよ、本当は面倒だからやりたくない
が皇帝になります、

そうなると各国から人質やら貢ぎ物としてやらで必然的に後宮作る
事になりますよ。

それと私が浮気するかどうかはまったく別問題じゃないですか。

後宮の女性との関係はある意味皇帝の義務ですが、浮気は私の意思
が介入するわけで、

いやまあ今回は酔って前後不覚の状態で記憶が全く無く私の意思が
怪しいですが。

普通ならば「ダーリン浮気は駄目っちゃ！」と電撃の一つも喰らい
かねません、

まあ桃蓮さんも嵐さんもラムちゃんじゃないから流石に電撃はない
か。

ただ南海霸王ではなくても、ビンタとか一撃はあるはずですよ普通
ならば、

なのに説教だけで、それもやけに優しく、そこに猛烈な違和感を感
じているんですよ。

私が彼女等に怒られたいとかM要素があるとかではなくですよ、言
っておきますが。

怒られ方も、私が浮気したからでなく「簡単に引っ掛かって」「馬鹿なんだから」と、

この発言だと、酔っ払って口説いたのは私だが祭さんと水仙さんの罾だと分かっている？

私本人が全く気付かず、妻二人はそれがあっさり分かる物なんですかねえ？

祭さんは桃蓮さんの副官ポジションで、水仙さんは酒飲み仲間ですから、

二人が私をどうにかしようという企みが有るというのを知っていた？

でも、それが罾だと知っていたならば桃蓮さん達は私の事を止めるはずですよ。

私が酔って祭さんと水仙さんを口説いていたのは、口説かれた二人からしたら、

鴨が葱背負ってやってきた状態だったということですかね？

いや、祭さんも、水仙さんも少なからずいいなとは思っていましたよ、

それに、司君から、向こうも私を憎からず思っていると教えてもらっていたが。

でもまあ、だからと言って結婚だなんだとは違うと思いましたが、もし妻に迎えるにしてもまずはお付き合いから位に考えていた私が甘かったのか。

罨だったのか、と今ならわかりますよ、その後の準備が良過ぎるんですよ。

どういう風に準備が良過ぎるのかというと、一昨日の晩に関係を持ったばかりですが、

昨晚に祭さんの親に結婚の挨拶に行かされたというのが、それで今晩は水仙さんの親に結婚の挨拶に行く予定が組み込まれているのが。

まあ、祭さんは益州に来る際に親も一緒に益州に連れてきている、しかも、当人の今の勤務地は成都だから、親も成都にいる、私が祭さんの親に結婚について挨拶したのはわかるんですよ。

とはいえ、料理やらなんやらしっかり準備されていたのは仕組みれたか？と、

ただまあ当日朝の段階で結婚すると言いましたし急いで連絡すれば可能ですよ祭さんの家は。

ただ、水仙さんの場合は罨だと言いがたないです。

水仙さんは益州内の太守ですが担当地域は梓潼で、ここ数日は仕事で成都にきているだけで、

水仙さんはまだしもなんで全く関係無い梓潼にいる水仙さんの親御さんが成都にいるんだと。

最初から仕組まれていたんですね、結婚に焦っている女性のやる事怖すぎです。

ちょっと待て、まさかまさか、今、気づいてはいけない事に気づいてしまった。

「保君、祭と水仙を色々誘ってあげて」とこう言われたんですよ、ね、

桃蓮さんに、嵐さん、それに海琳さんとかいろんな女性にクリスマスのに。

それで成都にいる間に愚痴位なら聞いてあげようとなって二人を誘ったんです。

私に浮気されたのに、やけに甘く済んだ桃蓮さんと嵐さんのお説教。

そういう事かよ、点と点が繋がったよ、松本清張ではないが点と線だよ、

桃蓮さんに嵐さんもグルだったなんて、ハメラれた・・・。

私が二人にハマてしまった事がハマられていたんだ、最低なおっさん発言だが。

そりゃ、私が浮気したのに怒りはしないよ、多分主犯なんだろう、この二人が。

「簡単に引っ掛かって」「馬鹿なんだから」とか怒ったのは、桃蓮さんと嵐さん達も協力者だという事に気づかない私の鈍さへの説教か。

でも、こんな騒動が有ったがちょっとだけ嬉しかったな、桜花さん

がフォローしてくれて、
何となく分かったんだろぅね多分「待て慌てるなこれは孔明の罠だ」
という感じで。

梅花さんが言ったら本人なんだが、桜花さんとお姉さんののが惜しい、まあいいや。

いやっ、待てよ、皆がいる前で説教になった時に桜花さんが庇ってくれたけど、
桜花さんが庇ってくれたのは優しさではなく、まさかそれも罠だったのか！？

思い返せ、思い返せ、保よ、あの時の桜花さんの台詞を。

「ちゃんとそばで見張ってあげる人がいないから駄目なんですよ、私も含めて皆で見張っていくしかないでしょう、暴走しないように。」

桜花さんの言葉を思い出す度に自分の顔が見えないが青くなっているのが分かる。

桜花さんの言う見張っていくって妻としていうことか？桜花さんものなか・・・。

だとしたら、どれだけの人間が私を罠にはめようとしたのだ、勝てるわけがない孫堅、黄蓋、張任、司馬朗とかこんな面々に仕組まれたら。

これで私の妻が孫堅、？融、黄蓋、張任、それで将来司馬朗に馬超となるのか、皆、美人や可愛いとか器量良し、性格もいいし見事なハーレムですよ。

でも、嬉しくない、凄く良い奥さんになってくれるの分かりますよ、ただあまり嬉しくないねえ仕組みれて作られたハーレムって怖すぎるよ。

これじゃ皇帝の後宮とあまり変わらないような・・・。

はっ、ここで嫌な予感が・・・。

まさか、「私へのあてつけか！」と怒っていた水鏡先生、結婚で焦っているのに、何で私を混ぜてくれないんだという怒りもあるのか？違うよな、それは無いよな。

敢えて水鏡先生だけ村八分にするとか皆そこまで性格は悪くないだろう、でも、もしそうだというのならば、皆少しだけグッジョブ。

よかったよ、水鏡先生が中に入っていないくて、本能として怖いよ、あの人、八百一さえなければいい女なんだが、八百一が全てだからなあ。

いや、水鏡先生も根はいい人なんだろうけどねえ、無意識でやっていた、なんてなったらどんな大惨事を迎えていたのだろうか、怖すぎる。

あーあ、皆にはめられたか私の事を慕ってくれてなんだろうが、なんだかなあ。

でも、私が罨にかかっているのをニヤニヤしているなんて酷い人は流石にいないだろうな。

「待て慌てるな、これは孔明の罨だ」と忠告してくれる人が一人くらいいてもいいのになあ、私って人望無くなって、悪く解釈してはいけない、どんどんネガティブになるから。

はあ、涼州にいる司君にどう話をするかなあ、祭さんや、水仙さんと結婚する事になった、どうやら皆にはめられていたようで、なんて話をしたら笑われるだろうな・・・。

でも、司君だけだろうな、罨にかかったと落ち込む私を慰めてくれるとしたら、しょうがない、こんど司君を呼び出して愚痴を聞く相手になってもらおうと。

一司一

ふっふっふ、今頃、保さん成都で焦っているんだろうなあ・・・

ニヤニヤ。

保さんには悪いですけど見事に今回の策にハマっているでしょねえ、今回の計画者としては成都まで結果を知りに行きたいですよ。

ただ、用も無く僕が成都に行くと僕が企んだというのがばれてしまう可能性が、

ならば此処涼州で僕は知らないふりをしておいて成都からの連絡を待ちましょう。

策と言いましたが保さんを騙して笑おうとかそういう酷い理由ではなく、

ハーレムを作ってもらおうという深いちゃんとした訳が有るんですから。

今みたいに嫁さん少ない、お世継ぎも少ないままだと今は平気ですが、もしかしたら、

桃蓮さんや嵐さんとかの外戚が出しゃばってくるなんて可能性がありますし。

またこの時代ですとお世継ぎが突然死なんて事も十分あり得るのですから、

流石に孫尚香ちゃんだけしか後継者がいないなんて危険ですから、その対策も。

そういう意味では子作りというのは皇帝や王の立派な仕事ですから、保さんには次期皇帝として立派にお勤めをしていただきませんと。

あと、保さんは常識人なところがありますし女性問題とかは大丈夫でしょうが、
変な女に引っかけると困るので、防止策としてならば事前に身元調査しておいて、
問題の無い人で保さんの事良かれと思っている女性にくっつけてしまおうと。

当然奥さん連中からちゃんと了承を得ていますよ、女性陣も割り切った物ですよ、
いずれ後宮とか出来るのならば変な人間よりも知り合いの方がいいと。

でもまあ、僕も優しいですよ本当に、この時代は恋愛結婚なんてもってのほか、
基本がお家の為の政略結婚のみだというのに、保さんの事を少なからず思っている、
また、保さん自身もいいなと思っている女性だけを選んだんですから。

相思相愛みたいなものでくつつくのが少しだけ早くなったというだけですよ。

ちなみに紫苑さんは問題無かったんですが、さすがにこの計略はどうかとためらったので、
今回は除外させていただきました、まあ酔っ払って4P、5Pは話に無理があるし、
騙すのならば少しはリアリティーを出さないといけません。

こんなふざけた無茶な事やっておきながらリアリティーというものなんです。

あつ、事前調査の段階で水鏡先生はちょっと危険と判断し除外させていただきましたよ、

保さんでは水鏡先生の手綱をどうにかできるとは思えませんので。

保さんではと言いましたが、水鏡先生をどうにかできる人間が大陸にいるのだろうか？

ふっふっふ、それにしても保さんは本当にあの二人と寝たんですかねえ？

まあ、関係を持ってしまったと勘違いはしたでしょう。

どうせならばやけだと結局本当にやってしまったなんてなったりして、

それはないか、二日酔いと浮気をしてしまったという後悔でそれどころでないか。

まあ、夫婦になればいずれは肉体関係を持つ訳ですし、今回実際は寝ていなかったとしても平気でしょう。

僕の出した指示通り二人がやったなら保さんは酔い潰れて寝ているだけです。

最初の指示が、祭さん、水仙さんの二人に保さんと三人だけの食事

会を用意するから、

二人はとにかくその酒席で保さんをとにかく酔い潰してしまえと。

それで次の指示が、保さんを裸にひんむいて寝台に放り込んでおけと、

それで二人は恥ずかしいだろうが裸で保さんに抱きついて寝ていろと。

あとは酔っ払った保さんが起きてきたらそれっぽい事を言っていたというだけでOK、

保さん酔っ払うと人を褒める癖がありますから、やってしまったかと思ひこむでしょう。

嘘はついていないですからねえ、保さんが勝手に勘違いしているだけですから。

「本当に貴女と関係をもった？」とか女性を傷つけるような質問は出来ない性格ですし、

どうでもいいような女性ならば聞けるでしょうが、祭さんとかには無理でしょう。

責任取ると言った後に実は騙されていたと気付いても、元々悪くはないと思った相手、

ならば後から“やっぱりあれは無し”なんて言わないですし責任取ってくれますよ。

それであとは奥さん方のお説教という事になった時に、桜花さんが保さんをフォローしてあげればいいんですよ。

桜花さんは祭さんとか仕掛け人の二人どころではない、保さんの事好き好き人間ですから、
大好きならばとっとやってしまえば良いのにねえ。

助けてくれた憧れの人ならば、とっとくつついてしまえばいいのに、

まあいいや、人がくつついた、離れたなんて事に文句を言うのはやめましょう。

馬に蹴られて死にたくはないですからねえ。

保さんはこれでハメでもないのにハメてしまったと思って、
そして、その翌日にはハメたと思ったらハメられていたんだと気付くでしょう。

下品ですねえ、僕も発想が、気をつけないといけませんね、うん、
紳士でないと。

保さんの性格や行動パターンを知りつくしている僕だから出来る計略と、
荒い無茶な計画と思いますが、保さんなら見事に罠にかかったでしょうねえ。

今度あの部屋でまた保さんと会いますが、その時に「司笑いたきゃ笑えよ」
と僕に今回の話をしに来るでしょう僕が仕掛けた罠だったとは気付かず。

保さんごめんね、保さんの為でもあるんだから、勘弁してくれ、モテていることへの嫉妬なんか無いぞ、たぶんね……。

一司馬徽一

董擢様が新たに黄蓋様と張任様の二人を妻として迎えるとのこと。

たぶん二人は、董擢様の同性愛者である事をごまかす事の協力をしているのだろう、

私の八百一に関する勘が外れる事は無いんですから！

もし、決してあり得ない事です但董擢様がノンケだというのならば、私みたいなこない女を放っておく訳が無いんですから。

三十五歳にもなって、いまだに私が一人身なのはなんでなのかなあ。

自惚れではないが美人だと自分でも分かるのに、誰も近付いてこないのは、

この悔しさは来週に開かれる即売会で売る予定の八百一本作成にぶつけてやる。

董擢様×池陽君様でいくべきか今回の新作は、どうしようかねえ。

第六十七話、待て慌てるなこれは孔明の罠だ・・・。(後書き)

今日も水鏡先生は平常運航です。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第六十八話、此処は戦場なんだよ・・・。（前書き）

恋姫世界での“とある”戦場について書いてみました、
とりあえず今回、馬鹿な話になったと思います。

第六十八話、此処は戦場なんだよ・・・。

―保―

此処は益州の州都である成都のとある巨大な施設内部、兵達が一糸も乱れぬ見事な隊列を組んで並んでいる。

そんな兵達の前に表れ、壇上で今から演説をはじめる。

「此処に集まった益州の精鋭兵の諸君、朝早くから御苦労、私が今回の作戦指揮官の董將軍だ、今回の任務について既に聞いているだろう。」

ここで演説を一旦止めて兵達を見てみる、二種類の反応に分かれている、

益州の兵は正直顔にしまりが無い、逆に涼州時代からの古参兵は厳しい顔つきに。

「涼州では馬騰將軍、韓遂將軍に、益州では孫堅將軍に、黄蓋將軍に鍛えられ、

普段血の小便流さんばかりにしごかれている諸君等にはこのような任務は不満だろう、

だが、私や古参兵の諸君からしたら、舐めるな！としか言えない。」

私が叫んだ瞬間ヘラヘラしていた益州兵が驚いてビクツとなっている。

「此処は戦場なんだ！此処が最前線なんだ！戦場を舐めるな！戦場を舐めた貴様等間抜けが勝手にやられようが私はかまわない、だが、貴様等間抜けがやられる事で皆に被害が出る事を私は許さない！」

やられる、私の言葉にヘラヘラしていた益州の兵達も思い出し気付く。

「昨年、涼州で郭？將軍、李？將軍の部隊に何があったか知っているだろう！」

普段の諸君達からしたら不本意な物足りない任務だと思うだろう、だが、その油断が昨年の悲劇をもたらしたのを忘れたのか！」

伝え聞いた昨年の悲劇を思い出す、演説しているが涙が溢れそうになる、

そのあまり凄惨さを思い出した兵達、昨年起きた悲劇を知る者で涙を流していた者も。

「あの悲劇を防がないといけないのだ諸君、あんな悲劇は去年だけで十分だ、

諸君の周りにいる戦友達に、諸君の家族等に被害を出す前に、我々が此処で悲劇を食い止めるのだ！我々なら出来る！違うか？」

「「「「「応！！」「」「」「」

兵達皆が良い顔付きになった、これなら平気だろう、これから始まる地獄のような戦場でも背中を預けれるだろう。

「諸君等の任務は警備、そして御禁制品の徹底的な取締りだ、既に益州は徐々にだがアレに蝕まれてきている、此処で止めるのだ、

此処が最終防衛線なんだ、諸君等が此処で食い止めるのだ！
ただ、諸君等を激戦地に送り込む私が言う事ではないが、死ぬなよ。
」

最後に私が兵達の前で頭を深々と下げる、それにたいし。

「將軍、死ぬんじゃないよ、立派に死んでこいと言えよ、しまらねえな。」

「こっちは最初から死ぬ覚悟くらい出来ているんだよ、だからガキンちゃんな將軍は家にいな、足手まといなだけだぞ！」

古参兵達が笑顔で私に散々言ってくる、兵達皆が笑っている、この部隊ならばいける、彼等ならば勝てる、勝ってみせると思っていた。

――梅花――

今、私は成都の外れにあるとある飯店の一室にいます、私の目の前には性別、年齢、格好全てバラバラな人間がいます。

彼等は保君と司君が治安維持の為に作り出した役所、公安三課の捜査員。

公安の任務は警備、御禁制品の取締り、不平分子の監視等多岐にわたっている。

総責任者で、警備、御禁制品の取締り等治安担当の一課課長を保君

が兼任、

不平分子の監視等思想犯等を担当する二課の課長が牡丹さん、そして、私が率いるのが今、目の前にいる三課、任務は潜入捜査。

彼等、公安三課の人間は潜入捜査を行う為、公安の他の課にも知られず、

組織に潜り込む為に自らの手を汚すこともあり、仲間から追われることも。

任務の都合上彼等の正体は極秘であり長官である保君も捜査員の顔を知らず、

課長の私と副課長しか全員の正体を知らないという秘匿されきった部隊。

彼等は誰にも注目されることなく、もっとも報われない部署、だが、彼等は益州、涼州の平和の為にならばと喜んで己の両手を汚す。

私からしたら、この大陸でもっとも誇り高くもっとも格好良い人間ですよ。

今頃、保君が会場で一課の面々に熱く演説をしているのだろう。

聞いた限りでは昨年までは公安の頑張りもあり上手くいっていたらしい、

ただ昨年は保君や司君達公安の幹部が洛陽駐留になっていた為に、また、公安の人間達もここ数年上手くいっていた為油断があり。

その為、昨年、日、光の二人の率いる部隊に多大なる被害が出たのが、

もう二度とあんな失敗はしないと公安の人間達は燃えている。

正体不明の首領をなんとかしても捕まえないといけない、御禁制品の密売組織の首領である奴の組織の息の根を止めないと。

正体不明の謎の組織、その被害は益州、涼州だけでなく大陸全土であり、

女、子供だろうと一切関係無くありとあらゆる人間に被害が。

ただ、今の私達は楽観的で、密売組織壊滅も時間の問題とと思っている。

何故ならば今までは奴等は正体不明の存在で大陸中に被害を出していた、逮捕をしても皆何も知らない末端構成員ばかりで、元々は被害者であつた。

だが、三課の懸命の捜査で組織の拠点は荊州にあつたこと、そして謎の首領が今、此処成都に來ている事まで突き止めたのだから。

三課の課長である私と、副課長で現場指揮官である高順さん、そして、この場にいる三課の潜入捜査員達の表情は明るい。

今日この三課の手によって彼等の組織を根絶やしにするのだから・・・。

「うおーたーみらい、誰か分からないが覚悟している・・・。」

そう呟き、机の上にあつた渋く煎れ過ぎたお茶を一息で飲む私だつた。

「????」

昨年までいた荊州から益州に拠点を移したのは正解だったわね。

荊州の緩い取り締まりならばいつでも掻い潜って逃げれる自信はあるのだけれど。

此処、益州は取り締まりの厳しさは荊州どころではないのが難点よ、でも、荊州にいつづけたのならば組織はじり貧よ、ならば危険でも動かないと。

董家が治めるようになってからの益州の発展具合は私も目を見張ったは、涼州、益州が合わさることで増した人、物、金の流れは荊州等比較にならない規模で。

ふふふ、取り締まりが厳しいと言っても所詮は人のやる事必ず穴はあるのだから、私達が本気になればいくら取り締まろうが、昨年の涼州みたいになるのよ。

大体、私達の扱っている商品は御禁制品とかされているけど、

皆が望んでいる物を規制するなんて董家は愚かといか言えないは。

人間の本能が追い求めているのだから、それを規制しようなんて・・。

ふふふ、今日をきっかけに私達は更に大きな組織になるのよ、

荊州、益州、涼州と組織を広げ大陸を私達が制覇するのよ。

今、私の元にいる子達も今や私の扱う商品の魅力の虜になったように、

うふふふ、待っていないさい、大陸中の人間を虜にしてあげるから。

益州、涼州の皆に私の凄さを教えてあげるわよ、

さあ、捕まえられるなら捕まえてみなさい董擢孟高將軍・・。

「うおーちゃー、はわわ、噛んでしまいましたです。」

「あわわ、そんな所で噛むなんて恥ずかしいでひゅ。」

あらっ、噛み噛みの二人が来たという事は時間のようね、では、行きましょう私達の戦場へ。

「誰も、このうおーたーみらー様をとらえる事、止める事は出来ないのよ。」

「過去六回は涼州で開催していましたが、今年から此処成都に移しまして、より大規模になりました、今回はそんな記念すべき最初の一回目です、では、皆さん冬の風物詩となりました第7回^{コミケ}庫見家を只今より開催します。」

久しぶりの出番な池陽君こと保の父な空です、これで出番が楽しみです。

保と司君が涼州時代に始めた同人誌展示即売会、庫見家、これの開会宣言だけで出番が終わりなんてあまりに寂しいです。

よく分からないが出番寄越せと頑張って作者と交渉したら出番もらえました。

庫見家、今年で七回目です、回を増す毎に参加者が増え、今やクリスマスとらんで涼州が流行らせた冬の風物詩です。

ただ、保や司君が言うには、私からしたら凄いのですがこの程度では満足せず、せめてこの会場で三日連続開催、述べ参加者は最低でも50万人越え、

更に冬だけでなく夏にも開催したいと野心的な事を言っていました。

庫見家のお陰で益州、涼州の製紙、印刷といった製造業、会場に来る人間のお陰で飲食、宿泊といった接客業など、

いたる産業に莫大なお金が流れ込み繁栄しています。

例えば、保が庫見家の為だけに作った犬の模様が目印の運送会社、“足並運輸”など今や庫見家どころか大陸中に広がった巨大な運送組織に。

ただ、光があれば闇が必ずあるように、問題も多数あるのが。

徹夜は禁止というのに会場前にて徹夜をする人間がいたり。

人が集まるので簡易厠を多数作ったりしますがやはり衛生面の問題が。

また、保が言うには、禁止しているが厠でこすぷれ？とかいう衣装に着替える、

規則を平気で無視する人間がいたりすることです。

他にも、並んではいいが自分の前で同人誌が売り切れ自棄になり暴れるものがいたり。

一番の問題は女性向け同人誌販売区域で、庫見家職員に内緒で売られる、

本人未承諾の御禁制八百一本の取り締まり問題に皆、頭を悩ませているとのことでした。

会場内を見て回るが、相変わらず凄い人の数だ何処からこんな人が集まるんだ。

冬なのになんでこんな暑いんだ会場にいと汗が止まらない、これが人の発する熱なのか？

暑さと人がいすぎて人酔いしてしまい気分悪くなったので救護班の所で休もう。

救護所に着いたが患者が多すぎて私なんか医者に診てもらえなさそうだ、

とりあえず気分悪くなった程度だから此处で休んでおけばいいな。

暇だから色々観察してみましよう、色んな人が運び込まれてきます。

なんだろう？担架に乗せられて金髪の特徴的な髪型した小さな子が運ばれてきて、

その後を赤い服着た黒髪の事、青い服を着た青髪の子達が声をかけながらやってきたぞ。

「華琳さま、しっかりしてください！この仇は必ず討たせていただきます！」

「姉者、仇討ちを誓うのはいいが、原因である華琳様曹仁様禁断の愛、

と書かれた本を大事に抱きしめながら言っても説得力が無いぞ・・・」

「しゅ、しゅ、春蘭、仇討ちはいいからその本を描いた者に褒美を

あげるのよ。・・・パタッ」

「「華琳さまあああああー！！！！！！！！！！」」

何が有ったのだろうか？あの三人の子供達に、それにしてもあんな小さな子が、来てもしいような催しではないだろう、この庫見家は。

おっ、また人が運ばれてきた、緑の服を着た眼鏡の子が血を流している、

それを頭に変な物を乗つけた子が介護している何が有ったのかな？

「稟ちゃんはその歳で変態なおませさんなんですから、ほらトーントンしましょう。」

「風、治療もいいけど、私の買った本は何処ですか？」

眼鏡の子が介護されながらまた本を読んでいる、あっ、鼻血が吹き出して倒れた。

凄い、あまりの鼻血の量に虹が見えたよ、それにしても、あの子まだ10歳くらいだろうが、あんなに鼻血を出して大丈夫なのだろうか？

おっ、また担架で人が運ばれてきている、救護班の人がなんか叫んでいるぞ。

「危険だ、今すぐ隔離するんだ、その子は危険だ！！」

言われている当人は

「はあはあ、離してください、いろんな本が私を誘っているのに
！！！！！！！」

やけにゆっくりした口調で叫んでいるが緑の髪眼鏡の女の子が縄で嚴重に縛られている、

自棄に荒い息使いだし、隔離とか一体何が有ったのだろうか？

おっ、新たに人が運ばれてきた、うわっ、女性なのに顔中青あざだらけだよ。

「先程から申してますが貴女のその張讓×趙忠という趣味は華麗でなくて逢さん。」

「隗姉さんの進める張讓×何進という方が華麗さが無いのでは？」

なんか本の趣味について言い合いして殴り合いの喧嘩して怪我したようだが。

それにしてもあの二人、袁逢、袁隗の袁家姉妹に似ているのは気のせいかな？

まさか、あの名門袁家の人間がこんな所にいるわけ無いはずですから、

もしいたとしても、こんな所で殴り合いの大喧嘩なんかする訳が無いですよ。

救護室が戦場と化してきている、此処に私がいるのも邪魔だろう、人酔いと暑さで気持ち悪かった気分も落ち着いたし他に行く事にしよう。

えーっと、此処は看板を見ると男性向け同人誌即売区域と。

おっ、と アレは？

「冥琳、どんなの売っているか見に行かせてくれたって良いじゃない！」

「雪蓮、此処は成人男性向け区域で、お前は対象外だ！」

「雪蓮姉様はこんな所で何騒いでいるんですか！」

保の義理の娘になる雪蓮ちゃんと蓮華ちゃんに、海琳さんの娘のような。

とりあえず義理の孫になるから注意をして起きましょう。

「こんな所で何騒いでいるんだい？」

私が声をかけたらドキッとした表情したりいろんな反応しますね。

「あっ、空おじさまごめんなさい、雪蓮姉様が騒いで周りに迷惑かけてしまっただけ。」

蓮華ちゃんは本当に礼儀正しい真面目な良い娘ですよ、
ただまあ、保や司君とはまた違った歳に不釣り合いな堅さが心配です。

それにしても蓮華ちゃんに“空おじさま”と言われたのにはクラツときた、

保が「中年になったらクラリスにおじさまと呼ばれるのが理想だ!」
と言っていたなクラリスが分からないが、おじさまと呼ばれるのは
たまらない。

「保のお父さんだー、どうしたのニヤニヤしちゃって?」

雪蓮ちゃんに言われて気づいたがおじさまと呼ばれてニヤついて
いたか。

「空様も注意していただけますか、雪蓮が未成年なのに、
成人男性向け区域に行こうとわがままを言っているもので。」

話の内容はろくでもないが冥琳ちゃんは雪蓮ちゃんと良い組み合わせ
だな、
まあ冥琳ちゃんが一方的に振り回されていて苦労しているようでは
あるが。

「ぶーぶー、冥琳だって興味があるくせに真面目ぶっちゃって。」

「しえ、雪蓮、お前は何を言っているんだ!」

まだ12歳なのに興味があったりするのか、やはり女の子は男より
早熟だな。

まあ、子供は入っちゃ駄目だと簡単に注意だけはしておきましょう。

さて、この成人男性向け区域をもう少し見て回りましょう、うん、治安維持とかの為の見回りで、艶本に興味があるわけではないですよ。

えーっと、なんかやけに怪しい人間があそこにいるぞ何しているのか？

頭まですっぽりかぶった服を着て顔を隠した人間がいて、本を売っている人達に何か注文をつけているようだが。

「私はお主所が描いた作品を愛する」とある名も無い洛陽の將軍」
なんだが、

昨年売られていた、何進大將軍と皇甫嵩將軍の十八禁艶本、

【いけません大將軍様此処は宮中です】の続きを何故今年は売らないのだ！」

何進大將軍が出るような艶本に興味がある人間なんかいるなんて、あの本を何故出さないと追及しているのが皇甫嵩將軍だったら笑うが。

洛陽にいるはずの將軍が成都なんかにいるはずないか。

なんか向こうでも騒がしいな、何があったんだ。

「先程から言っているけど保の睦事はこんな淡白ではないわよ、

こっちが早く入れて！とおねだりしても聞こえないふりして、
触れるか触れないか位の触り方と甘咬みで散々焦らしてきて、
それで「オイッ！桃蓮お前は何飛んでもない事を口走っているんだ
！」

「あら、だって保って凄いいじゃない嵐、貴女だってよく知っている
でしょ、

この前は目隠しされたり、私と保に攻められて喜んでいたじゃない。
」

「王子様と桃蓮が意地悪してくるのが、でも、それが気持ち良くて・
・・。」

夫との睦事を何故こんなところでバラしているのだうちの息子の嫁
は、
あと、説明が具体的に生々しすぎる周りの男達皆中腰になっている
ぞ。

それにしてもうちの息子はそんな凄いのか、目隠しや三人でとか、
妻は和一人しかいないから三人でというのは流石に無理だが、
目隠しとか焦らすというのは検討してみようかな？冗談ですよ冗談・
・・。

あつ、先程救護室にいた眼鏡の緑な服の女の子だ。

「董將軍が幼い私を無理矢理おさえつけ、でも焦らされることで私
は・・・プハッ！」

おおっ、先程に続いてまた見事な噴射が、空には虹が出た、
って、あの娘死ぬような、あんな大量に出血していたら。

「本当に稟ちゃんはその若さでとんだ変態さんなんです、妄想だけでそこまでいけるなんて、はいトントンしましょう。」

頭に変な物に乗つけた娘が先程も見たが見事な応対である。

うん？　なんか先程の息子の嫁に続いて見てはいけない人がいるような。

「此処にある【母上もう我慢出来ません州牧と軍師親子の愛】十巻まで全部頂戴、あと幾ら払えば私専用の独自作作ってくれるのかしら？」

見なかった事、聞かなかった事にしよう、こんな所に和がいるわけがない、

あと、十巻まで出ているって結構な人気作なんかあるわけがない。

頭が痛くなってきた、うん、お腹が空きすぎて体調崩したんだね、時刻もお昼になったようだし食事をしに飲食店区域に行こう。

第六十八話、此処は戦場なんだよ・・・。（後書き）

謎のキャラうおーたーみらー、何者で、
どのような目的があるのでしょうか・・・。

恋姫キャラを無理矢理出し過ぎたか、まあいいや。

皆さんのご意見、感想お待ちしております

第六十九話、首領の正体は……。 (前書き)

謎の組織首領うおーたーみらー、一年前に涼州に起きた悲劇の復讐を誓う男、

祭りを楽しむ常識人、いつものように過ごす恋姫達、宴はまだまだ続きます。

第六十九話、首領の正体は・・・。

―空―

あつ、どうも二話連続でガッツリ出番をいただいた池陽君こと空です、只今、

保や司君が涼州時代にはじめた同人誌即売会【こみけ庫見家】を堪能中です。

とりあえず開会の挨拶だけしまして、どのような物か見て回ってます。

ちなみに会場は成都の外れに作りました巨大な屋内施設で開催します。

図面の上下を間違えて作ってしまったような不思議な建物、びっくりさいとう驚愕財塔全てを使った巨大な催しです。

驚愕財塔の中は子供向け区域、成人男性向け区域、成人女性向け区域、

特別催し区域、コスプレ娘守富麗区域、飲食区域、

更に救護室、簡易廁、足並運送等という風に分けてあります。

最初少し見て回っていたのですが、あまりにも人がいた為人酔いしてしまい、

救護室で休憩していましたが、袁家らしき人がいたり、鼻血吹きまくる人がいたり、

忙しい救護室で気分悪いくらいの私がいるのはお邪魔でしょうからと他に行く事にしました。

一番人気の区域である成人男性向け区域を見て回っていましたが、私の気のせいなのでしょうが、州牧というか我が妻という、いてはいけない人間、

あとは夫との睦事を赤裸々に語る息子の嫁達がいたような気がしたのですが。

気にしすぎてはいけません、だから他人の空似だろうということにしておきましょう。

時間もお昼時になりお腹が空いてきましたので飲食店区域に来ました、

決して現実逃避で逃げたというわけではございません。

何処の屋台も大変混んでおりますが、やけに一店だけ空いている店が。

【常山名物メンマの店 趙】という看板があります、どんな店だろうか？

「「いらっしやいませ！」」

男性には嬉しい、・・・もとい、目に毒な胸元が露わな白い服を着た水色な髪的女性、

そして、その女性の娘だろうと思われるお揃いの格好の女の子が挨

撈をしてくる。

メンマの店とはなんでしょう？あのメンマですか？ラーメンに乗っている、

メンマが常山名物というのをはじめて聞きました、ちょっと気になるります。

私が席に着くと私が何も頼んでいないのですが山盛りのメンマが出てきました、

どうやら先付けでメンマを出すのでメンマの店なんですね・・・。

じゃあ、先付けのメンマをツマミにお酒を飲む事にして、その後ラーメンなり炒飯を食べる事にしましょう。

シャクシャク

メンマだけで食べるのははじめてです、うん、美味しいです、とはいえメンマはメンマ、

脇役の中の脇役で主役になる物ではないですからこれだけを食べるのは辛いです。

「紹興酒を熱燗で。」

「はいっ。」

早いです、頼んだと思ったらいきなり出てきました、こちらが何を注文するのか読んでいたのでしょうか？

そういえば保に聞いた事が有ります、世の中には妖怪さとりという、人の心を読む妖怪がいるそうで、まあ、そんなわけはないですね。

シャクシャク、メンマをかじって、グイッと紹興酒を飲む、癒されます。

それにしましても昼から酒を飲むというのはたとえ休日でも背徳感がありますね、

保が言うには、背徳感があるからこそ美味いと感じると、背徳感のおかげだそうです。

禁忌だからこやっではいけない物だと分かっているからこそ盛り上がってしまうそうで、
実際、その背徳感のおかげで浮気だとか放火という公に出来ない物がより盛り上がると。

保は転生したと昔聞きましたが、私の子供にしては本当になんでも知っているようで、

だが、保に言わせればまだまだ知らない事ばかりだと言っていました。

保の事を色々考えながらメンマをかじっていたら、いつのまにか、山のようにあったメンマが無くなりました。

コトッ

また山盛のメンマと紹興酒が入った徳利が机の上に置かれました。

「お客さん、うちのメンマをそこまで真剣に味わってくれてありがとうございます、
とう、

このメンマと酒は私の驕りだ楽しんでくれ。」

考え事していると「気難しい顔している」とかよく人に言われますが、

どうやらその顔つきで無心でメンマを食べていたので味わっていると思われたようで。

「お客さんの様にメンマを心底愛してくれる人間がお客様としてきてくれて嬉しかった、

さっきなんか金髪のクリンクリン頭のチビが来て、メンマは割りばしを煮て作る、

なんてメンマの神が聞いたら八つ裂きにされるようなふざけた事を言うのがいてね。」

この店の女将さんが他の客の愚痴を勝手に語り始めました、

金髪のクリンクリン頭、先程救護室で見た女の子でしょうか？

それにしてもメンマは割りばしを煮て作るですか、そんな事を思っている人がいるとは、

まるで保や司君が冗談で教える嘘みたいですねえ、赤の他人にそんな事しないですが保は。

あと、メンマの神様どんな神様なんでしょうかねえ？

お店にいた女の子が、私の手元にある猪口の酒が無くなると酌をしてくれます。

将来自分が仕えるべき人間を探す為、そして、武者修行の為に旅に出るつもりだが、

メンマの良さを知る私のような人の元に仕えられれば、と言っていました。

メンマを基準で就職先を決めるのはやめた方がいいと思いますが・・。

メンマだけを食べながらお酒を飲むのも流石に飽きてきました、
とはいえお腹も膨れ他の料理を食べる気が無くなりましたのでお会計にする事にしました。

おかみさんと女の子が「メンマを心底愛する同志からはお金は頂けない。」

と言われて、更にお土産で小さな甕に入った秘蔵と書かれたメンマを貰いました。

メンマを愛しているわけではないのですが、あと見知らぬ人に驕られるのも気がひけます。

とりあえず一宿一飯の恩ではないですが、あと女の子がメンマで就職先を決める、

みたいな心配になる事を言っていたので、私も人の親としてそれはいけないと思いました。

前に保に作ってもらった名刺という自己紹介用の紙切れを渡して、
もし何処かに仕える事を考えているのならばこれを持って成都の城まで来なさいと伝えました。

女の子は感動したのでしょうか涙を流しながら私の前に跪き、

「貴方様こそわが主、我が名は趙雲子龍、そして我が真名星を預け

ます」と言ってきました。

なんだかよく分からない流れになってしまっています。

それにしても店の女将さん、星ちゃんの親であるのならば止めるべきなのに、

娘のやる事に良くやったという感じでうんうんとうなずいていました。

大丈夫なのでしょうか？

お腹が空いたから空いている屋台に入っただけで何故かタダ飯タダ酒にお土産、

そして、将来性のある子供に真名を預けられました、どういことなのでしょうか？

まあ、袖すり合うも他生の縁といいますし、もしかしたら、星と名乗ったこの女の子もいっぱしの人物となって何処かで会うかもしれません。

お土産にもらった秘蔵のメンマの入った壺を懐に入れ、
気持ちだけでもとお金を置いてとりあえずメンマ専門店を後にしました。

ゲフツ、ゲップをすると、息が酒とメンマの匂いしかなくて気持ち悪いです。

口直しに濃い目に入れた渋いお茶や何か甘い物でも食べて口直しを

したいです、
とりあえず、甘い物を売っている屋台がないか探してみしょう。

ドン

歩いていたら何かとぶつかりました、なんでしょうか？

小さな女の子でした、これはいけません、ごめんなさいと謝りましょう、

っと、謝る前に女の子は急に泣きだしてしまいました、これは困りました・・・。

この後色々宥めすかすのに苦戦しましたがなんとか泣きやんでくれました、どうやら、
ぶつかったから泣いたのではなく迷子になってしまっって心細くて泣いてしまったようです。

女の子の話聞く限り親御さんと一緒に庫見家に来たのはいいが、
親は本を買うのに必死で、
女の子はつまらないからと色々うろろしていたら迷子になってしまったそうです。

名前は呂蒙ちゃんというらしく、とりあえず一緒にお母さんを探してあげました。

お母さんを探している最中に先程探していた甘い物を売っている屋台を見つけたので、

呂蒙ちゃんは一度も食べた事が無いというので売られているゴマ団

子を買ってあげると、
美味しそうに食べていました、その呂蒙ちゃんの姿に心がほっこり
しました。

ゴマ団子を食べる呂蒙ちゃんの姿は保育園にいる恋ちゃんのもきゅ
もきゅ、

という小動物のような食事の姿に匹敵する可愛らしさがありました。

この後、無事呂蒙ちゃんの母親と会う事が出来ました、
同人誌を買うのに必死になるのは分かりますが同人誌満載で持って探
したと言っても説得力が。

とりあえずこの迷子騒動で分かったのはこれだけの大型企画です、
迷子も他にいるでしょう、
次回から子供を預かる場所とか迷子を集める場所を作るよう提案し
ておきましょう。

飲食店区域でいろいろなことがありましたがもう事件は起きないで
しょう。

この考えに対して、保が前に行っていたフラグがたつという奴です
か？あれが。

とある屋台から女性の泣き声が気になりまして、興味本位で見に行
きますと、
何故か此処に梓潼太守に任命した水仙さん、あと祭さんが泣きなが
ら酒を飲んでいました。

どうやら、数日前に保に婚約しましたが、あれに關する事らしく。

保を毘にはめたは良いがその後騙された事に気付いた保が怒っている、だから謝りたい、

今日謝ろうと思って会場にいた保に話かけたが無視された、これは婚約取り消しだと。

それは単に保が仕事に必死で声掛けられた事に気付いていないだけではないでしょうか？

今日はこの企画の警備等の責任者として仕事しているわけですから。

うーん、結婚に焦っているのは知っていますが、保に無視された事ではなく、

婚約取り消しだなんだで泣くのは、やるべき事は保への謝罪ではないのでしょうか？

まあ酔ってへこんでいる人間にそういう説教をするとどうなるか分かりませんので、

とりあえず保の嫁になる予定なので、慰めておきましょう。

この庫見家が終わったら保と話し合える場を作ってあげましょう、その場で素直に謝るように伝えてあげたら、泣いて感謝されました。

先程から泣いているので泣いて感謝というのもなんか変な感じなのですが。

それにしましても、水仙さんも祭さんも二人共普段と性格が全く違うのはなんででしょうか？

凹んでいる時に酒飲んで、酒が感情の変な所にでも入ったのでしょ

うか？

お酒はほどほどにして今日は帰りなさいと伝えて、二人の分のお会計も払っておきました、
屋台の親父さんも酔って泣く二人の扱いに困っていたようなのでいたく感謝されました。

それにしても何でか知りませんが今日はやけに厄介事に巻き込まれるのは何故でしょう。

とりあえずこの区域にいるとまた何かしら厄介事に巻き込まれそうなので、

それを避けるためにも何処か全く関係ない所にでも行きましょう。

どんな物か気になったので娘^{コスプレ}守富麗区域に行ってみましょう。

色取り取りの色々な可愛らしい衣装を着た女の子達があります。

「はいこっちに目線をくださいーい」

可愛らしい衣装を着た女の子を写真機とかいうからくりで撮影する人が沢山います、

写真機って保と司君がこの前発明したばかりの最新発明品なのに何故あるのでしょうか？

「庫見家の思い出作りとして記念撮影できる写真機はいかがですか

？」

写真機の売り子をしている司君が、何故司君が今成都にいるのですか？

今は涼州の軍師であり成都に来るのはだいぶ先ではないでしょうか。

クリスマスは涼州で過ごしているという事は一週間もかけないで成都まで来たんですか？

どれだけ無理な速度で飛ばして成都までやってきているんですか司君は。

司君が呆れている私に気付きました、しかも、私が何が言いたいのを理解したようで、

司君は親指でクイクイっと自分の後ろをさしました、誰かいるのでしょうか？

「ほらっ翠、こういうのは照れたりしないで堂々と恰好を決めないと逆に恥ずかしいよー、

そういう点で堂々とするたんぽぽを見習うべきだと思うな。」

「おばさまの言うとおりだよねえ、ほら翠お姉様も笑顔で。」

「あたしはこんな可愛らしい恰好はたんぽぽや母さんと違って似合わないから。」

ひざから崩れ落ちる、なんで貴女まで此処にいるんですか琅？！？

貴女は涼州の州牧ですよ？何で普通に娘の翠ちゃんやたんぽぽち

やんと一族揃っている。

しかも、普段の恰好と全く違って、保に前聞いたゴスロリとかいう、大変可愛らしい恰好をして庫見家に来ているお客様に写真機で撮影されているんですか？

「貴女少しは自分の歳を考えなさい！」と内心言いたくなります、それにしましても、38歳で翠ちゃんと一緒にいて違和感がないのが、彼女は老いないのでしょうか？

頭痛くなってきた、涼州に薊がいるんだろうから平気だと思うが、州牧と軍師が普通に遊びに来ているというのが何を考えているのでしょうか。

「司、写真機の在庫が少なくなってきたら追加を持って来たわよ。」

「ありがとうございます、母さんじゃあ時間になったから僕は休憩に入るね。」

聞こえない、聞こえない、涼州にいるはずの州牧代理である薊らしき声なんか聞こえない。

頭がまた痛くなってきました、何処か他に行って休もう、何処か人がいなさそうな場所は？ 廁の傍にある犬の記号の足並運輸に。

保が「コミケといったらフツ〇ワークだろ！」と演説していたが、それで作ったというのが足並運輸だそうで、なんか世界には色々き

まりが有るようで。

「おおっ、久しぶりだな空、手伝いに来てくれたんか？」

もう驚きはしないぞ、涼州の州牧に州牧代理、軍師が成都にいるんだ、

この会場に本来はいないはずの、涼州軍の責任者である雷がいても驚かないぞ。

「何故、お前が成都にいるんだ!？」

駄目でした、つつい大きな声で追及してしまいます。

「変な事を聞くな、足並運輸は涼州騎馬軍を使って迅速に安価で大陸中に荷物をお届けじゃぞ、

なんじゃから騎馬隊指揮官である儂や日、光が此処にいるのは当たり前前だろ。」

根本的に間違っている!まず商売で普通に涼州騎馬軍団を使っているというのが。

更にその業務の為に日と光の二人も連れてきて働かせているのは、涼州の防衛を考えていないのだろうか皆は?

それにしても涼州の面々で成都に来ていない人間を探した方が早いのではないか、

これだけ普通に涼州の面々にあっているのですから。

はあ、涼州を琅？や雷、司君達に任せたのは失敗だったのか？

此処にいても頭痛が酷くなる何処か他の所に行ってみましょう、
あと行っていないのは成人女性向け区域と特別催し物区域と廁です
ね。

用を足さないのに廁に行っても意味がないので、さて、どちらに行
きましようか？

そういえば保が成人向け女性区域は行かない方がいいと言っ
てまし
た。

「たしか、成人女性向け区域は魔界であり取り扱っている同人誌も
危険で、
まともな人間が行くと瘴氣に当てられ心がやられる危険な場所だ！
と。

どれ程危険なのでしょう？気にはなりますが、君子危うきに近寄
らずと言いますし、
安全そうな特別催し物区域とやらに行ってみる事にしましょう。

特別催し物区域は、大道芸やら色々な芸人が来ているようで、
ふと気になったのが黄色い服を着た三人の旅芸人と思われる女の子
が歌っていたのが。

彼女達が気になったのではなく、その三人に先程まで写真機を売っ
ていた司君が、

「君達今のままでいいのか？歌い手としてもっと売れる気はないか？もしその気があるのなら、この天才演出家の僕の元に来なさい！」

と三人の女の子に名刺を配っていました、司君は一体何をやっているのでしょうか？

旅芸人を売れるように鍛えるよりも政治家として涼州の政治に頑張ってもらわないと。

あと、彼女達を見る限りは単なる小さな女の子達ですが、それを売れるようにすると、

ピンと来ないのですが、司君は何か感じる物が有ったのでしょうか？

あと、去り際に司君が「これで黄巾党でヒャッハー出来る」と謎な独り言を、

普段の行動といい独り言の内容といい相変わらず司君の行動は謎だらけです。

大道芸を見ると凄いと思える者ばかりです、人体の神秘といいましようか、

私と同じ人間なはずなのにどうすればそんな事が出来るのかと驚く動きが有ったり。

口から火を吐いたりする道化師の芸を見ている人だかりの中に見慣れた子供達がいいます。

「詠ちゃん凄いよ口から火を吐いたりしていて、私も出来るかな？」

「月、危ないからそんな事やりたいとか思わないで！」

月、貴女は何に憧れているのですか、月は私に似て常識人だと思いますが、

詠ちゃん、月の事をまかせましたよ、董家で常識外な人間に育ったのは保だけで十分です。

庫見家会場を見て回っていますが色々あって楽しいですねえ。

それにしましてもこれだけ会場内に大陸中から人が来ているのに、益州、涼州の知り合いばかり見つかるのは何故でしょうか？

会場内を色々見て回っていましたが、先程お昼に飲み過ぎたせいでしょうか、

ちよつと尿意をもよおしてきたので厠に行く事にしましょう。

それにしましても何故でしょうか、厠周辺にやけに逞しい男性ばかり集まっています。

あと、何故かこちらの事をじろじろと見つめて来る人達があります、私の顔に何かついてるのでしょうか？

彼らは何故か私が厠に行こうとするとニヤニヤしながら皆ついてくるのはなんでしょうか？

何となくですが、凄く嫌な予感がするのは気のせいでしょうか？

一保一

公安一課を使って今回の庫見家の警備も上手くいっているこれならば今年は平気だろう。

昨年あった事件が、謎の組織に持ち込まれた八百一本という大量破壊兵器による精神汚染、

これで涼州の兵のどれだけが被害をおったというのか・・・。

「硯と墨ではやはり硯が受けに見せかけての攻めですよね？」

「日×光が今は優勢だが正しいのは光×日だよな!!」

「俺が今までモテなかったのは俺の顔が不細工だからとかではなく、おれは男だが男を愛するべきと心で分かっていたから女に真剣に向き合えなかったんだ、
だが、これからは違う男の俺が愛するのは男しかないんだ。」

数え切れないほどの精神汚染患者が出てしまい、しかも、中には女性だけでなく、
男性でも目覚めてしまった患者がいたと、おかげで部隊の士気がガタガタになったそうで。

一体何者なのだ？モデルとなった人間非公認の御禁制八百一本販売組織の首領とは？

梅花さんの三課が組織に潜入工作員を紛れ込ませることに成功したようで、

まだまだ謎だらけだが分かったことが、首領は女性で、うおーたーみらーという偽名だけ。

今年こそはなんとか被害を未然に防がないといけないが、一体誰なんだ？

って、八百一、で、うおーたーみらー、奴さんだよなあ、そのままだよ、

まったく、あの腸まで真っ黒に腐りきったあの腐女子は何をしているのか。

何で皆気づかないのでしょうか、偽名なんかそのまんまじゃないですか。

違うか、うおーたーみらー？なんで英語？と未来からの転生者だから分かったのか、

この時代英語は存在しないよな？映画パッションとかで出たみたいのアラム語とかだろ。

現代知識を持つ人間が大陸にいるのか、私や司君以外にも？

いないだろうなあ、勿論私達以外に転生者がいる可能性だってあります。

「あゝ、犯人わかつちやったんですけど・・・。」

今の子供達はこれの元ネタ分かるんだろうか？まあいい。

司君が犯人ですね、間違いなく彼が水鏡先生の後ろで糸を引いていきますよ、

多分、司君の事だから、面白いからとかそれだけで掻き回しているんですよ。

普段ならば私も笑って許しますよ、馬鹿騒ぎ大好きですし。

だが、私は私の尻を守る為ならば親友でも殺しますよ、まったくもう……。

第六十九話、首領の正体は・・・。（後書き）

仕事で大口案件受注したりで、正月何それ？状態なはずなのに、
何でまた私は普通に話を書いているんでしょうかねえ？

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第七十話 決着！益州八百一戦争（前書き）

先に皆さんに謝っておきます、本当にごめんなさい。

前回、前々回からの続きの恋姫達のコミケ完結編です、私は何を書いているんだと思ってしまった。

第七十話 決着！益州八百一戦争

一司一

「これで黄巾党でヒヤッハー出来る！」

おおっと、いけませんつついつい心に思っていた事が口に出ていたよう
うで、

ふっふっふ、笑いが止まりません、この嬉しさ、やったねたえちゃん
状態です。

あつ、どうも皆さん、三国志のいぶし銀的な悪役で有名な李儒こと
司です。

何を喜んでいるのかといいますと探していた張角達三姉妹を見つけ
たもので、つい。

いずれ僕達の野望の為にもこちらに引き込み利用させていただくつ
もりでしたが、
まさか今回の庫見家コミケに来てくれているとは思いませんでしたよ。

三国志では太平道の教祖でしたが、この外史では売れないアイドル
ですよ。

とりあえず今のままだと将来性皆無のどき回りの芸人一座の歌い手
で終わるでしょう、
それならこの天才プロデューサーである僕にかかれれば売れっ子スタ

ーに。

彼女達はダイヤの原石ですよ、ただ今のままではしょせん原石のまま、

それではよくて建設現場で使うダイヤモンドカッターの材料でおしまいですよ。

運が悪ければダイヤの価値を作りだす為に屑ダイヤとしてドーバー海峡に捨てられてと、

保さんではないですがこれらってゴルゴ13とか呼んでいないと分からないネタだな。

先程、彼女達に売りたいなら此処に来なさいと名刺を渡し挨拶だけしておきました、

胡散臭いと思ったんでしょね、僕をいぶかしんだ目で見てきましたよ。

まっ彼女達今は私を頼らないでしょう、ただいずれ来ますよ僕の元へ。

彼女達はいつ気付くかな？ “今のままでは駄目だ、未来が無い”と。

このまま日の光も当たらず世間に認められない歌手でいいのか、もっと売りたい、スポットライトを浴びたいと彼女達は渴望するでしょうね。

それで彼女達が僕のもとにきたら助けてあげましょう、僕がプロデュースして、

ダイヤモンドの原石を加工してあげますよ正五十八面体ブリリアントカットのダイヤに。

採算度外視で益州、涼州の金をたっぷりかけてスーパースターにしてあげますよ。

ふふふ、たまりませんね僕が張角達を育てあげるのですから、

彼女達は大陸中を騒がす一大勢力黄巾党を率いる御旗になっていた
だきましよう。

僕と保さんの計画通りに、彼女達には黄巾党で暴れまわってもらいますよ、

安心してください協力者として張曼成も波才もこちらで用意してあげますから。

それにしても辛いなあ、将来こうなるんだなと分かってしまうのは。

黄巾党が幾ら数が凄くても所詮は単なる賊徒集団、最後は各諸侯の軍に負けてしまい、

張三姉妹も張曼成も波才も漢王朝打倒という夢破れて無念の討死をするでしょう。

それで元黄巾党だった者達は各地に散らばり黄巾党になる前の生活に戻るんですよ、

絶妙のタイミングで死んだ彼女達の遺志を継ぐ者が現れて、

反董卓連合を作って洛陽に近づく袁家や曹家とか諸侯の領地を荒らすんでしよう。

ふふふ、未来が見えているなんて嘘ですよ、もしかしたらこうなるかなあ？

というちよつとした可愛い妄想ですよ、正直に答えるならば・・・。

おおっと、一人で考え事というか妄想に浸っていても意味無いですね、

会場内で警備している保さんに教えてあげましょう張三姉妹と出会えた事を。

何処にいるかな保さんは？僕と喜びを早く分かち合いましょう。

四半刻後

あつ、保さん達がいたけど、兵隊達と共に何処かに向かっていますね、

これはなんか面白そうな予感がしますし追いかけて、どうせならば乱入しよつと。

一保一

今回の庫見家思ったよりうまくはいっている、勿論、暴走する輩もいます。

先程見回り中に厠に行ったらいい男がやらないかと誘ってきやがったんですよ、

頭に來たのでゲイ掘る具とか名付けられた物をへし折ってあげました。ゲイホルグ

とりあえずへし折ってやったが、名付けた奴クー・フリーンに殺されるぞ！

なんだ芸掘る具って、嫌だよ、そんな大人のおもちゃみたいな名前
は。

私の尻を狙ってやらないか、とは道下じゃないんだぞ！私は妻帯者
だって！

どうやら調べた限り今年版の糞味噌技巧が売られたのが原因らしい、
しかも、私が道下で、父上が阿部高和という大変ふざけた物でした。

私はまだいいか？内心良くないが、今年は腐女子達から父上がロツ
クオンされているのが。

こんな事調べたくもないが今年の流行は父上が受けの作品が目立つ
と、

最悪だ、公安が必死に調べている内容が八百一本のカップリングと
は。

いろんなサークルが父上受けで描いていますが、明らかにきっかけ

作った犯人がいるよ、
水鏡先生め、益州の人間をモデルにしないという約束を無視しやが
って、あの行き遅れが。

ただ今年の水鏡先生は八百一のカップリングできっかけは作ってい
るようですが、
今年は自身の作品がないんですよ、水鏡先生自身現れているんです
が動きがまともなんですよ。

水鏡先生がまともな動きをしているというのがもつともあり得ない
異常です、
多分、禁止されているから表立って動かず、こっそりと裏で蠢いて
いるんでしょう。

それにしても“益州、涼州の敵が実は水鏡先生だった”
パブリックエネミー
私からそんな報告を聞いた梅花さんの驚き方が、親族だから信じて
いたんでしょう。

とはいえ一瞬で終わりましたね、八百一の犯人と言われても当然と
納得してました。

梅花さん可哀想だな親戚に八百一の問題児と認識される人間がいる
なんて。

って、待てよ、桜花さんは私の婚約者だった……。

桜花さんとの婚約を公表したら梅花さんに殺されるからまだ公表し
てませんが、

桜花さんと結婚したら水鏡先生が親戚になってしまうのが、嫌過ぎ

る。

三国志の時代ですから存在しないですが、もし、これが現代だった場合は、

お正月に親戚集まった時に親戚の子供達にお年玉として八百一本、皆がお屠蘇でほろ酔いのところでカップリングで熱弁する水鏡先生が予想出来る。

危険すぎる、とりあえず水鏡先生の監視とかもつときつくしないと
いけない。

私の大事な娘、小蓮が水鏡先生のせいで八百一に汚れてしまうのだけは防がないと。

って、こんな考え事をしている時間はないですね、暗躍する水鏡先生をどうにかしないと。

水鏡先生が先程まで子供向け作品区域やらを彷徨いていたが何もし
ていない、
調べた限りでは毎年やっているような八百一本によるテロ活動はな
しと。

水鏡先生ならば子供向け作品の表紙を入れ換えて中身を八百一本に
すり替える、
無差別テロを普通にやりかねないのが、あれだけ頭が言い人格破綻
者って。

実際、過去には子供向けの同人誌が、気付いたら中はヤマジュン作
品に、

といった無差別テロを実行し涼州の幼い子供達の未来を奪った大犯罪者ですから。

今年はそれらしい動きが無いというのが本当に不気味なんだよなあ、御禁制の八百一本売買はあるが水鏡先生とは関係無いサークルなのが。

と考え事をしながら見回りをしていたら、水鏡先生を見失ったという嫌な報告が。

彼女はこの会場で一体何をしたいのだろうか？

って、今気付いたが、私を誘ってくる馬鹿がいるならば、まずい、父上が！

父上は軍師で武はからっきしだ、もしかしたら父上をという馬鹿がいるかも、

もしかしたら父上の尻がガバガバになってしまいうなんて……。

全部隊を緊急招集かけろ、一課副課長の徐栄に確認をとれ！！

な、なんだと……、今、警備対象から父上を外しているだと。

「急いで父上を探し身柄を確保するんだ！！！！！！」

皆が集まって一斉に会場内を探し回っていますが見つかりません。

父上を廁の方で見た者がいる？不味い！父上の尻が大ピンチだ！

「急げ!!!!!!!!!!!!!!」

厠に急いで向かおうとするが水鏡先生の教え子と思われる三人のちびっこがおせんぼを。

「わわわ、きよきよやらしゃきはとおしましえん」

「はわわ、しえんしえいのけいきゃきゅのじゃまはしゃしえましえにゅ」

「あわわ、りゃきゅえんのちゃめえにゅも。」

こんな小さい娘なのに、八百一で毒されているとは酷すぎる、とりあえずこれ以上の被害を出さない為にもここは強行突破です。

とはいえ、彼女達も元々は水鏡先生の八百一本という劇物の被害者なんです、

あまり手荒にするわけにはいきません、そのバランスが実に難しい。

「糞餓鬼共がお前等噛みすぎと舌足らずで何言っているか分からねえ!

あと邪魔するなら生きたまま手足を引きちぎって熊の餌にするぞ、消えろ!!!!!!!!!!」

ほんのちよっぴり殺気を散らしながらかなりソフトにお願いをしました。

「わわわ、朱里ちゃん、雛里ちゃん、きよの人は殺ると言ったら殺るでしゅ。」

「はわわ、子供相手にも容赦がにやさすぎでしゅ。」

「あわわ、人殺しのめちゅきしてましゅ、どきやないとまずいでしゅ」

泣きそうになりながら三人娘は退いてくれました、私の後ろでは。

「子供相手にあれはないは・・・。」

梅花さん緊急事態じゃないですか、それに抑えましたよ。

「課長、子供なんだからおさえてください、怖すぎです。」

いやいや、子供でも敵じゃないですか徐栄さん。

「・・・フルフルフル」

無言で震えているよ、あの高順が。

えっ、緊急時ですよ、しかも相手は八百一本密売組織の人間なんですから、

やむを得ないはずではないですか？なんで、相手が悪いはずなのに何故皆私を批判？

さあ急いで父上を助けに厠に向かおうと思ったら、奴さんが現れやがった。

意味深な感じで含み笑いをした水鏡先生が、悪い、父上が心配でかまっている暇ない。

「あの娘達では足止めにならなかったけど、わた・・・ぐふっ。」

とりあえず邪魔なので有無を言わせぬドロップキックを食らわせてやりました、

こっちは家族を守る為に急いでいるんです、躊躇なんかしてられません。

「容赦無さすぎ、せめておばに台詞くらい満足に言わせてもいいよな。」

梅花さんにまたも駄目出しをくりましたよ、私達が正義側なはずなのに。

「わわわ、先生が一瞬でぼろ雑巾に。」

水鏡先生の教え子らしいが、先生をぼろ雑巾呼ばわりはどうなのと。

「はわわ、登場と変身の瞬間は攻撃禁止というお約束なのに。」

知るか！こっちは実の父親の尻が掘られるか、と必死なんじゃ、

大体、この時代の人間がなんで特撮作品の暗黙の了解を知っているんだ。

「あわわ、水鏡先生が見たことないような量の血をはいているです。」

まあ多分死なないだろ、それにそれで何かあっても自業自得です。

急いで父上を救いに厠に向かおうとしたら・・・。

「アーーーー！！！」

厠の方から男の叫び声が間に合わなかったのか・・・、水鏡先生の勝ちなのか！？

「わ、私の勝ちね、益州はこれで八百一の楽園に・・・ぐはっ。」

八百一の楽園で、歌舞伎町二丁目じゃないのか？もうどうだっていい、

父上を助けられなかったのならば、とりあえずこのラフレシアを刈り取るしかない。

倒れている所にとどめを刺しにいきますよ。

「保さん抑えて、いくらお婆の八百一愛の暴走が酷いとはいえ、殺したらいけない抑えて、それに使いやすいキャラがいなくなっちゃうよ。」

梅花さんが他の人と共に私を羽交い絞めをしている、
とりあえず、私を止める理由になんかとてもない理由があったよ
うな……。

うううう、父上の尻が……、ノンケなのにガチムチない男達
の手によって、
尻がガバガバになってしまったなんて、しかも、復讐も出来ないな
んて。

私が膝をつき悲しんでいると。

廁の方から父上がお揃いの白い服着た女性達に連れられてやって来
ました、
尻を押さえながらとかなく普通に歩いています、無事なのか？

父上を連れて来た、親と思われる白い服の女性が私に話しかけてき
ます。

「君は此処の責任者か？安心しろ彼の尻は無事だ、
先程の叫び声は彼を襲おうとした男達を私達親子が退治した際の犯
人達の悲鳴だ。」

良かった、本当に良かった、親がオカマ掘られる悲鳴を聞かないで
すんで。

あまりの喜びにちよつと泣いちゃったよ。

それにしても、父上を助けてくれたこの人達は一体誰なのでしょう
か？

「貴女達は一体誰なのですか？ 助けてもらったのはありがたいです
が何故。」

とりあえず分からない事は素直に聞きましょう。

「暴漢に襲われながらも懐に入ったメンマを命懸けで守ろうとする
漢の中の漢、
そんな漢の生き様に惚れ込んだ名も無きメンマ愛好家だ。」

「その名も無きメンマ愛好家の娘で、その御仁の未来の家来だ。」

り、り、理解が追い付かない。

父上暴漢に尻を襲われそうになりながらなんでメンマを守っていた
んですか？

父上が首をぶんぶんと左右に振っている、違うようですね、
どうやらメンマを守ったのではなく襲われた際に蹲っていただけか
よ。

あと、この霞ちゃん達とかとおない歳くらいと思われる小さな子は
何なの？

父上の未来の家来って、軍師や将ではなく職種はメンマ愛好家とか
になるのかい？

とりあえず私の脳味噌では理解が追いつかない、唯一わかったのは、父上が助かったのはメンマのおかげと。

「め、め、メンマ愛に負けたのか私の野望が……。」

カオス過ぎてついていけない状況で私に蹴られて気絶していた水鏡先生が蘇った。

無理に話に乗っかろうとしないでくれ水鏡先生、話が面倒臭くなるだろうから。

「ちっ、生きていたのかよ……。」

梅花さん、貴女のおばなのに結構容赦ないね。

「はっはっは、天知る、知知る、人ぞ知る、って、あれ？」

おい、この場を更に乱そうとするのが来たぞ！君は何をやっているんだ、

しかも、美味しい所を持っていかうとして出てくるタイミングを逃したなんて。

「そこの仮面の男、貴様は一体何者だ！！」

やめてくれ、既に当人は出番を間違えてグダグダで焦っているのに、徐栄さん、無理に乗っかろうとしないでくれ。

「保、あの恥ずかしい仮面しているのは司君だよな？」

父上言わないでくれ、あんな空気を読まないというか、出るタイミングを間違えて、
このカオスな状況にとどめ刺してにきているのが幼馴染と私は認めたくないんだ。

「僕の出番があああああゝ!!!!!!!!!!!!!!」

出番なんか知るか司！あとその恥ずかしい蝶の仮面を外せ。

「とりあえずお前は帰れ!!!!!!!!!!」

梅花さん、ありがとう私の心を代弁してくれて。

「嘆き悲しむその仮面の兄さんや、その素晴らしい品を何処で手に入れた？」

父上を救ってくれたと思われる女の子が蝶の仮面に食いついているよ。

もう嫌だ、この空間、誰でもいいから助けてください！！

「もしかしてですが、その仮面の姿の方、もしかして師匠ですか！？」

縄で縛られ連行される水鏡先生が司に話しかける。

「おっ、うおーたーみらーさんお久しぶり、今年の八百一本は売れた？」

お前は何普通に会話しているんだよ、やはり貴様が犯人の関係者だったか。

「七年前、はじめて先生の作品を見て感銘を受けて以来頑張っていますが、
まだまだ私の作品では先生の作品には遠く及びませんし、それに、
うおーたーみらーという名前を先生につけていただいたのにこんな
しくじりをするなんて。」

司君、第一回庫見家でそんな物を売っていたのかよ、
やはり、水鏡先生の偽名を名付けたの君だったのね。

「ペンネーム考えてくれと言われて“すいきょう”と言われたから、
適当に名付けてあげたんだよね、そうかそうか、水鏡先生だったのか。」

気付け！涼州時代から是非採用したいと計画していた人間だっただ
ろ水鏡先生は。

司君がいなければ単なる普通の八百一本好き程度だったのが、
司君の本を読んで感動して腐りに腐りきってしまったとは、司君の
被害者なのか。

もう嫌だ、この幼馴染の悪ふざけが。

「お婆の暴走の原因がコイツなのかよ。」

梅花さんも呆れ果てているよ。

「言っておきますがね、保さん、僕は洒落で八百一本書いたりしますが、

空さんの尻を無理矢理犯すようなひどい事しろなんて教えていませんよ。」

当たり前だ、そんな事を無二の親友にされてたまるか！！！！

「はわわ水鏡先生の八百一の先生がこの男の人ですか、格好良いでしゅ。」

とりあえずまだ蝶の仮面をしている変態仮面スタイルが格好いいのか？

わからん、幼くして腐女子になってしまった人間の価値観は。

「あわわ、先生の先生だから大先生と呼ばばいいでしゅか？」

大先生とか呼ばなくていい、この馬鹿が調子に乗るから呼ぶのやめろ糞餓鬼。

「わわわ、男の人なのに八百一の先生なんて・・・ごくり」

おい、生唾飲み込むな何を期待しているんだこの餓鬼も水鏡先生と

同じで、

もう一般人には戻れない隔離対象者かよ、とりあえず身柄拘束しろ！
とりあえず三人とも最後まで嘯み続けていたな、普通に喋れないのか？

「司君、とりあえず今日は色々ぶっ飛んだ事があり過ぎて私は凄く頭が痛い、
あまりの混沌具合に警備兵の皆もついていけない、色々君に聞いた
い事がある。」

梅花さんとか皆も呆れているよ、皆全てが嫌になったという感じになっ
っているし。

「保さん、大事な事を言いますね、僕は司君ではありません！！
謎の仮面の戦士、そう、この大陸に鮮やかに羽ばたく華蝶仮面です。
」

「うるさい黙れ司！」

梅花さんとハモって怒鳴ったよ。

「華蝶仮面ですか、私も将来華蝶仮面になれますか？」

おい、この白い服のガキもどうにかしろ、父上を助けてくれた恩人
だが、
ここで出て来るな、あと懂れるな、そんなものに。

「とりあえずもう全てが嫌になった、疲れたよ、君の描いた八百一本のために、この悪魔の毒毒モンスター育ったなら、君がこれの始末をつけろ、もうしらん。」

他の警備兵達も呆れて帰ってしまってますよ、心底疲れましたよ。

「わかった保さん、僕の責任も少しはあるようだし、水鏡先生に注意をするよ、

いきなり無理矢理な尻での行為は危険だという事を知ってもらおうよ。

「お前は何を言っているんだ、司君!!!!!!」

「尻でやる時は徐々に馴らしていくとかそういう調教的な事でなく、人として間違った事を「では、さらばだ諸君、また会おうぞ!!!!!!」

「話を最後まで聞け————!!!!!!」

司君、縄で縛られた水鏡先生をお姫様抱っこしてどっかに行っちゃったよ。

「保君、徐々に馴らしていくとか何で知っているの、……まさか?」

梅花さん、違うから後ずさらないで、僕はただ女性との関事で色々試ただけで、
って、説明を聞いて、って、警備兵の皆まで、待ってお願い、違う

から・・・。

嫌な余談その一

口癖がわわわなのが徐庶、はわわが諸葛亮、あわわが鳳統と翌日知って、
絶望のあまりこの外史の世界が減じないかなと望んでしまう自分がいた。

嫌な余談その二

私が男もOKな人と勘違いされたのは必死の説明でなんとかになりました、ただ、

「保、お尻について私には経験無いけど、誰にしたの?」「王子様が望むなら俺は我慢するよ」

「お主、俺は尻よりもまずは普通に頼む。」「私はどんな風にされてしまうんですか?」

奥さん達との間が少しの間かなり気まづくなりましたよ、ええっ。

最近上手くいってきていたのに蓮華ちゃんに汚い物を見られる目で見られていますよ。

嫌な余談その三

ちなみに、翌日司君に連れられ尻を抑えながら水鏡先生が謝って来
ました。

「男も女も関係なく無理矢理はいけないんですね、でも、癖に・・・
」

水鏡先生が八百一ではなく、駄目な方向に進化してしまったよう
で、

とりあえず三十五歳、行き遅れとか言われた水鏡先生に嫌な形で春
が来たようです。

司君、前世で君は男も女もいけるのは知っていたが、雑食過ぎるだ
ろ・・・。

第七十話 決着！益州八百一戦争（後書き）

年の瀬に私は何を書いているんでしょうか・・・。

最低な話で申し訳ない、正直すまんかった、としか言えません。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第七十一話、恋姫達のコミケ余談編（前書き）

三話続いた恋姫世界のコミケをやった場合、
前回までの主役にならなかった人とかで裏話とかを。

とりあえず、今回も酷いです、私は仕事中に何を書いているの
だろうか？

もしかしたらお正月無くなりそうなの、という忙しさなのに・・・。

第七十一話、恋姫達のコミケ余談編

益州は州都である成都、そんな成都の外れにある三国志時代に不釣り合いな建物、
びっくりさいとう

驚愕財塔此処で開かれた狂喜の宴「庫見家」
コミケ

保、梅花達が率いる公安の部隊が己の誇りと尻を守る為戦う、
そんな熱い戦いとは一切関係無い人達の行動を見てみましょう。

—嵐—

今日は王子様、いや、だ、だ、旦那様からお休みをいただいたぞ、
だ、だ、旦那様、駄目だ幾ら結婚したとはいえ言えない旦那様なんて。

やはり呼び慣れた王子様と呼ぶことにしよう、うん、それだ。

旦那様はうおーたーみらーって呼び名のふぐたいてんぷら、とかいうんだっけ？

そんな敵と今日こそ決着をつけるからと言って出陣していった。

そんな敵ならば俺もいったら、あいつとの決着は公安だけで蹴りをつけると言っていた。

格好良かった。

「でも、争っている内容は八百一本のネタにするなっただけだらない

ことだけど。」

「桃蓮、五月蠅い！」

そんな風に言われたら仕方ない、心配だが見送ってやるのが女房なんだろう。

見送ったのはいいが、心配だ見に行きたい、だが、行って迷惑かけたらと思ったら、悩んでたら桃蓮がいきなり部屋にやって来やがった。

「皆で庫見家に行くのになんで嵐は部屋にいるの、行かないの？」

王子様が戦いに行く場所に遊びに行っているのか！と思っていたら、桃蓮が。

「いいのよ、折角のお祭りなんだから楽しまないと、それに保が心配ならばこっそり陰ながら応援してあげればね。」

たしかに王子様にも陰ながら応援してはいけないとは言われていない、なんて頭が良いんだ桃蓮は、そんな法の抜け道があったなんて気付かなかった。

桃蓮に言われて集合場所に行くと馬車が何台も停まっていた、

こんなにか、産まれたばかりの孫尚香にセキトや善々に州々までも

か。

「セキトは恋の家族、セキトと善々、周々友達、仲間外れは駄目。」
恋に言われたら皆黙ってしまふ、恋の説得に勝てる人がいない。

「桃蓮さん、小蓮ちゃんは私が抱っこしますからくつろいでください。」

「お義母様、そんな悪いですよ小蓮は私が抱いていますから。」

「あらいいわよ、小蓮ちゃんは保の子供ですからお祖母ちゃんとしてね。」

なんで桃蓮と義母さんの何気ない会話が怖いんだ。

皆ザワザワ言っただの馬車に移動してるが、俺も逃げたい。

「お母様、祭に皆で行きたいというのは分かりますが、
小さな小蓮を連れて行こうとするなんて、何かあったらどうするんですか！」

おお、蓮華が他の話をしてくれた、なんか、馬車の中が落ち着いたら、怒鳴っているのに落ち着くって変なことだ。

「蓮華、平気よ、貴女はまだ若いのに頭が相変わらず固いんだから、
だいたい私が賊狩りに行った際に背中に赤ん坊だった貴女も雪蓮も

いたんだから。」

英才教育って奴なんだな、武将になる為に育てられているんだな。

「海琳母さん、なんか今信じられない事を聞いたような。」

「冥琳、私も聞いたは益州では常識は通じないのね。」

そうなのか、これが普通じゃないのか、俺も子供出来たら、
そうやって鍛えるつもりだったんだが。

—霞—

「華雄、此処は祭りの会場なんだよな、いつもの保育園じゃなくて
か？」

「霞、私も思ったぞ。」

周々、善々にセキトもいるからなんやろうが周りが子供だらけや。

なんか見知らぬ子供がめっちゃあつまっとるやん。

「はうう、お猫様です、もふもふですう。」

「黒い髪の嬢ちゃん、それ猫やないで虎やで。」

「はうつ、お猫様でなくてなんとお虎様ですか、お猫様と違ってふもふを楽しめるのも今のうちだけですか。」

ねねくらいの歳か？長い黒髪の子がもふもふですとか言いながら、撫でようとしているが、手軽くだが噛まれとるで。

「桔梗様此処はやめて他を見に行きましょう、い、犬がいますし。」

おっ、久しぶりに焰耶にあったが、なんか泣きそうやな、まあ訳は分かるが。

「……セキト嫌い？」

あっちゃー、あら焰耶の負けやな、うるうるされた恋に勝てるの大陸におらんで。

「恋殿を泣かそうとするならばちんきゅーきつくですぞ。」

ほら、恋の事になると出てくるちっこいやかましいのがやってきたで。

「焰耶、恋を悲しませるな、大体いつまでも犬を苦手にしてどうする、

それにお主は同い年の友達が周りにいないんだからもっと仲良くしろ。」

「犬に近寄られると……、れ恋泣くな、セ、セ、セキト好きだぞ……。」

焰耶地獄やな苦手な犬を嫌がると恋に泣かれねねに蹴られ桔梗に怒られ、
ここにいたらいたで苦手なセキトやら犬やら動物にからまれてなんて御愁傷様や。

―百合―

今日は特にする事が無かったので董孟高様への依頼を受けまして、董孟高様が描かれた同人誌を販売しておりますが、色々なお客様が来ますね。

「今日は“江賊王になる”の先生はいないんですか？」

やけに目付きがキツイ紫色の髪の女の子が尋ねてきました。

「ごめんなさい、董孟高先生は本日はこの庫見家の警備をやっているものでして。」

目付きのキツイ女の子は明らかに残念そうな顔していました。

後で此処に来る事は分かっているんですが、益州での地位がありますので、

何かあってもいけませんし、その事は隠しておきましょう。

こちらの会話をしているのに割り込んでくる文官服の人がいますね、

見た事無い顔ですから他州から来た人のようですね。

「この江賊王になる」という作品はいかな物かと犯罪者である江賊が主役で、

漢王朝率いる水軍が敵というのは作者が漢王朝に反意ありということにならないかと、

だいたい薄汚い犯罪者である江賊なんかが主役とは。」

多分因縁をつけたいんでしょうねえ、ニヤニヤしながら聞いてきていますし。

よろしいですわよ、相手をしてあげましょう。

ドゲシッゲシッ

あらっ、女の娘が空気を読まずにイチヤモンつけに来た人を殴りましたわね。

因縁つけてきてもいいんですけどね、この作品の愛好家に大物がいますのに。

ちなみに、丁度同じ時刻洛陽のとある場所では。

「弁皇子、江賊王になるの新刊が手に入られたとか？」

「二人の時は姉さんでいいわよ協、先程益州のあの方から何進伯

父さま經由で、
先程誰よりも早く最初に読んで下さいと届来ましたから一緒に読み
ましょう。」

成都に戻ると。

とりあえず、この蹴られて気絶している人はどうしましょうかしら
ねえ？

驚愕財塔の裏手とか何も無い山ですし、そこにでも埋めてしまいま
しょうか？

ふふふ、私もだいぶ益州の皆さんに影響受けてしまっているようで
すわね。

「独り言を言っているのを他の人に聞かれてしまったらまずいん
ですが、

董孟高様二刻後に此処にやって来る事は内緒にしておかないといけ
ませんね。」

女の子が喜んでいましたねえ、とりあえず目の前に転がるボロ雑巾
をどうにかしましょう。

それにしても、眼つきのきつかった女の子の応対している間も、
こちらで本の内容を確認している女の子の集団はまだおりますねえ。

「凧ちゃん、その本書いてある事はどう見たって怪しいよ、真似し

でも危険だよ。」

「だが、この明名書房から出ている本に書いてあることが本当なら私は更に強くなれる。」

「沙和あかん、あーなった風はテコでも動かん。」

なんかこの三人の中で一番常識人と思われる娘が迷っているようです、

多分、この娘が引っ張っている分、こうなったらどうしようもないんでしょうねえ。

—桃蓮—

成人向け男性区域に来てみたけど面白いはねえ、此処にはいろんなものがあつて。

あつ、これ保と私かな、似た感じで書かれているけど、うーん、周りにいる人達驚いているはねえ、そりゃそうよねえ。

ネタにしている本人が来ているんですからねえ、皆逃げ出そうとするなんて、

売り子の子なんか顔真っ蒼になっているはねえ、そんな事で怒ったりしないわよ。

「桃蓮、孫尚香預けて勝手に行くな、自分の子供だろ！」

今来た嵐ならば、勝手に自分で艶本描かれたら怒るでしょうけどね、面白そうだから嵐に見せてみよっと、色々言いたい事もあるし、

「嵐、面白い物見つけたんだけど、見て見てー。」

「なんだよ桃蓮、読めばいいのか・」

嵐が読み始めたわね、どれくらいで噴火するかしらねえ、あらあら、売り子の子達逃げだそうとしているけど、逃げないように視線で脅してと。

「なんだこれは桃蓮!!!!!!」

怒っちゃ駄目よ嵐、大体怒る内容が違うわよ。

「これって酷いと思わない嵐？ 閨での保がこんな淡白でなく情熱的で気持ちいいわよねえ？」

「桃蓮、おまえは何を言っているんだ!!」

あら、逃げ出そうとしている子たちも止まったわねえ、面白いからからかってみよっと。

「先程から言っているけど保の睦事はこんな淡白ではないわよ、こっちが早く入れて!とおねだりしても聞こえないふりして、触れるか触れないか位の触り方と甘咬みで散々焦らしてきて、それで「オイッ! 桃蓮お前は何飛んでもない事を口走っているんだ!」

「あら、だって保って凄いいじゃない嵐、貴女だってよく知っているでしょ、

この前は目隠しされたり、私と保に攻められて喜んでいたじゃない。」

「王子様と桃蓮が意地悪してくるのが、でも、それが気持ち良くて・・。」

嵐も単純なんだから、あっさり引つかかって自分からとんでもない事暴露しているんだから。

周りにいた男達皆中腰になったりして、皆色々元気なのねえ。

「桃蓮、俺に何を言わせるんだー!!」

あっ、今頃になって嵐が気付いた、鈍いんだから。

「きゃー、嵐が怒ったから逃げろー。」

とはいっても会場内を走り回っているんな人からかって遊ぼうと、だって、保がないからつまらないんだもん。

他にもいろんな艶本が売られているのねえ。

なんか騒いでいる娘がいるわねえ、なんだろう。

「なんなのこの本は、こんな本を描くなんて男なんて汚らわしい、頭の中で妄想だらけで、全身精液だらけで触れられるだけで妊娠し

ちゃうわよ。」

とか言いながらもしつかり目線は百合百合な艶本じゃないの、
なんだかんだ言いながらも買って大事そうに抱えて持ち帰るわよ、
あの猫耳女子。

あつ、猫耳な娘よりもからかったら更に面白そうな人発見しちゃった。

まさか、こんなところにいるなんてねえ。

「保さんに梅花ちゃんにはまだ内緒だけど結婚しようこの前言われちゃったけど、

梅花ちゃんに内緒にしくても喜んでくれるだろうから平気なのになあ？

それにしても結婚したら今はなくてもいずれは私だって保君とね・・

夫に恥をかかせるわけにはいかない妻として花嫁修行の教材で買うだけ。」

そう独り言を言いながら艶本を手にとったり戻したりしている桜花がいるなんてねえ。

理由をつけて艶本を買いたいけど恥ずかしいなんて、結婚の為の勉強だろうが、
興奮したいから買うにしても、艶本買う恥ずかしさはまったく変わらないのね。

「桜花ったら可愛いんだから、そんなに気になるなら私と保のを見

に来る？

それとも嵐と保の時、まさか私と嵐と三人の時……。」

「なななななななな。」

耳元で囁いてあげたら面白いくらい動揺するのね、面白はねえ、桜花も。

でも、桜花も大変よねえ難易度が高いから、本人は平気だと思うけど、

妹の梅花は桜花への思いは危険よねえ、桜花が保と結婚なんて言ったら、

梅花の事だから無理やりにも桜花に手を出そうとするかもね。

いっそ、保が梅花の面倒も見てあげればいいのに、って、こんな事言ったら、

また保が怒りそうね、祭と水仙の時に派手にやり過ぎたもんねえ。

「こんな所にいたな覚悟しろ桃蓮!!!!!!」

嵐、それは八つ当たりよって言っても通じないはね、逃げよつと、本当はもっと桜花をからかいたかったのになあ……。

一琅？ー

さっきまで娘守富麗^{コスプレ}区域で翠やたんぽぽとお揃いのゴスロリっていう衣装にして、

会場に來た皆に撮影されていたのも終わって休憩しているけど。

こんなに人気になるなんて、翠がお姉ちゃんで琅？が次女でたんぽぽが三女なんて、

自分が可愛いってわかっていたけど、翠よりも幼く見えるなんて。

若く見えるって嬉しいけど、幼いって言われているわけでもあるし、声掛けて来る人もなんか違うし、面白そうな子がいればいいのに。

そんな事を考えながら休んでいたら、黄やって休憩が必要なのが若くないんだろうなあ。

あら、たんぽぽが走ってやってきた、どうしたのかなあ？

「おば様聞いた？ご主人様が黄色い服着た三人組の女の子に、君達ならば大陸一の歌い手になれるだから僕の所に来てって、ナンパしてたー。」

えーなにそれ、司君には紅ちゃんとたんぽぽって可愛い奥さんいるのに、

もう浮気なんてねえ、って、司君の事だからなにか面白そうな事なんだろうな。

「たんぽぽ本当？だとしたら司君怒らないとね、まずは琅？達に言うべきだよね、

大陸一の歌い手でキャーキャー言われるのは琅？や翠とかたんぽぽだよねえ。」

「ななな何を行っているんだ母さん、私達が歌い手って無理がありすぎるよ、

それに母さんはもうすぐ40歳、初老なんだろう、無理が有るよ。」

翠、ちよつとO・H A・N A・S H Iしないといけないはねえ。

一冥琳一

益州に来てから知り合って最近仲良くなった雪蓮と一緒にいたけど、好き勝手やる雪蓮に頭が痛くなってきた。

「将来一緒に国を動かそうね冥琳」と言われたけど、多分国を動かすようになって、

今のように雪蓮は好き勝手やって私が後処理ばかりに泣かされそうだな。

まだ私は12歳なのに、雪蓮に振り回される未来しか思いつかないのが。

とりあえず将来を想像すると頭が痛くなってきた、救護室で休ませてもらおう。

なんか凄い事になっているはね、祭りの会場の救護室という事だが、まだ初陣は済ませていないから分らないが戦場みたいな忙しさのようね。

「患者が多過ぎる！医者が足りない！このままでは五斗米道といえども。」

なんかやけに暑苦しい喋りをする赤い髪と同じ年位の男が叫んでいる、

なんだろう、凄く暑苦しいのは。

「馬鹿弟子華佗よ、口を動かす前にはやく手伝え、患者は待ってくれんぞ！」

師匠と思われる人が言っている通りだな、絶望しようがなんだろうが、

愚痴る前に行動を起こさないと患者は待ってくれないんだから。

えらそうにこんな事を思う私なんか子供のくせに頭痛薬が欲しい患者に過ぎないんだが、

それにしても董將軍も李軍師も私の歳の頃には普通に政治を動かしていたって、

こういう人間なんだか、益州、涼州の人間は色々と常識が通じないのが。

「馬鹿弟子よ師の技を見て学ぶがいいこれこそが治療だ！我が身、我が鍼と一つとなり！

一鍼同体！全力全快！必察必治癒・・・「まてまてまて」なんだそこの娘っ子？」

な、なんて暑苦しい治療なんだ、弟子以上に暑苦しいのが、

それにしても医者なのに自棄に物騒な台詞が出ていたから止めてしまった

「待て！今、必殺必中と言っただろ、そんな治療あるのか！！！」

「ふ」

なんかむかつく感じの仕草と鼻で笑われたよ。

「では、馬鹿弟子だけでなく、その娘っ子も見ていろいろ、特にお主に話が有る

我が名は張魯、ゴッドヴエイドオーの指導者にして医師、その技をみるがよい、

我が身、我が鍼と一つとなり！一鍼同体！全力全快！必察必治癒・
・。」「

またそこから言わないといけないのか、暑苦しい叫び声だ、普通医者診療というのは静かな物ではないのか？あと私に話があるとはなんだ？

「病魔覆滅！げ・ん・き・になれえええええええええつ
」

針刺さったら刺さった所が光ったあ、なんなんだこれは見ていた頭が痛くなってきた。

「さすがしよおおおおお、見事な技で有りまするうううううう!!!」

赤毛の華佗とか呼ばれていた弟子が、また冬なのに暑苦しくなるくらい叫んでいる、

頭痛いから静かにしてくれ、叫ばれると頭痛が酷くなる。

「その娘っ子よ、お主に良くない病気の相が見えるぞ、更に頭痛いようだな、

まあ今のお主の状態程度なら馬鹿弟子でも可能だが、よし儂自らが治療してやるからな。」

頭痛いから頭痛薬程度でいいのだが、良くない病気の相って何だ？治療するというのが私はいらないぞ、頭痛薬だけでいいぞあんな治療は嫌だ。

「馬鹿弟子、逃げられないようにしろ。」

「すみません、師匠の命令ですから、ただ、ゴッドヴェイドオーの技を信じてくれ。」

羽交い絞めにされた、逃げられない助けてくれ。

「嫌だそんな必殺必中とか、どう見ても殺す気みたいな針は、頭痛薬でいいから。」

羽交い絞めから逃げようと思ったがこの赤毛の子の力が強い、逃げられない。

「金の事なら安心しろ今回の治療費とかは全て益州が払ってくれるから。」

そんな事は一言も言っていない!!! そういう事じゃないんだ辞めてくれ。

「さあ、お嬢さん覚悟は出来たかい、一瞬で終わるから早く楽になれるよ。」

その言い方だと私が殺されるとかだろ、治療ではなくて。

「お嬢さん覚悟は出来たかい、行くよ？我が身、我が鍼と一つとなり！一鍼同体！」

全力全快！必察必治癒・・・病魔覆滅！げ・ん・き・に・なれええええええつ」

「やめてくれー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

—雪蓮—

「むうっ!？」

さっきからいなくなった冥琳を探している途中に急にピーンと来た。

「どうしたの雪蓮姉様？」

「いつもの勘なんだけど今冥琳に面白そうな悲劇があったみたい。」

言葉では簡単には表現出来ない一言、「冥琳ガンバ！！」程度しか出来ないのが。

「面白そうな悲劇って酷い事言わないでください姉様、大体何が面白そうなんですか？」

「蓮華は分からないかあ、多分凄く冥琳には良い事なんだろうけど、多分これから生きていても生涯見る事が出来ない貴重な冥琳の姿が見れそうだなと。」

あらっ、蓮華がため息をついている、私の勘合っていると思うんだけどなあ。

— ??? —

先程、会場隅で会場に邪魔しないように筵を売っていたが、全然売れなかったとは、良い品なんです、元ネタからですから

「白蓮ちゃん、単なる筵ではもう売れない時代だと思うんだ、魯肅先生に言われたよう創意工夫をしないといけないよ、これからの流行は萌え筵だよ。」

「桃香、それは暴挙だ、筵に萌えとやらは必要ないだろう考え直すんだ、今ならまだ平気だ。」

白蓮ちゃんが私を止めようとしている、白蓮ちゃんは優しいから、私は無理をしないようにと止めてくれるんだと思う、でも、此处で頑張らないと。

今は単なる貧しい筵織りにしか過ぎないんだけど、皆が笑顔で過ごせる国を作りたいからお金とか必要だし。

「萌え筵を作ろうよ白蓮ちゃんも、人気作家の董擢さんが来ているみたいだし、どんな絵が萌えなのかとか、それよりも萌えて何か教えてもらおうよ。」

「さて、桃香、萌えとか分からないのにそれに手を出そうとするなんてやめるんだ、それは確実に失敗するものだ、そんな冒険はしてはいけない魯肅先生も止めるぞ。」

白蓮ちゃんは真面目なんだから、時には冒険も必要なんだよ。

後日、勿論失敗してしまい家が無くなりかける事をまだ知らない桃色の人であった。

此処から後日談

――空――

保に色々聞きたいことが好奇心には勝てない、だがどう聞けばいいんだ！

一体、どんな切り出し方をすれば肝心の話を出来るのだ。

親としてこんな事を息子に聞くべきではないのは分かっているが是非教えてもらわないと。

保の睦事での技を一人の男として是非教えて欲しいのだ、

成人向け男性区域での息子の嫁達の言葉に衝撃を受けたのからだ。

子はいずれ親を乗り越えていく物だが保はあの若さで乗り越えるどころか、

同じ男でありながら遥かなる先に行く性の探求者になっていたとは。

まさか保に悔しいと思わされる日が来るとは、感傷に浸っている場合ではない。

男が成長していくときには恥も外聞もなく泥まみれになり、
そうやって這い上がっていき一皮むけた存在になるものだから。

初老をもうすぐ迎える身だが今ここで保を師として学び更に成長しよう、

そして、保達の為にさらなる強力な壁として前に現れてやらないと。

人は私の努力を愚かだと笑うのだろうか、いや、男ならば理解してくれるはずだ。

夜にでも保に話をしよう。

――保――

父上が壊れた……。

今回の庫見家で父上は男に尻を掘られかけたり大変だったが。

何故だ、何があった、父上が土下座をして私に頼み込んでいるんだ！
そして、土下座の内容が私に睦事の技を教えてくれというのだ。

たぶん悪い夢に違いない、今回の庫見家で頑張り過ぎて疲れたからだ、

これは現実ではなく夢であり、多分、現実の私は寝ているに違いない。

「保様、出来れば空だけでなく儂にも教えてもらえませんか？
若い妻を迎える事になったので色々頑張る為にもお願いします。」

おいつ、雷さんまで来てしまったよ、何を教えればいいんだよ！

この時代ネットもDVDプレイヤーもAVも無いというのに、どう説明すればいいんだ。

まさか桃蓮さんや嵐さんとの実演を見せるわけにもいかないし、
当たり前だいくらなんでも、そんなのは狂っている、どうすればいいんだ。

というか、雷さんに父上、目を覚ましてくれーーーー！！！！

第七十一話、恋姫達のコミケ余談編（後書き）

保の父上、池陽君を壊してみました。

とうにか気付いたら壊れていた、何が有った・・・？
本当に仕事とかに私は何を書いているんでしょうか。

皆さんのご意見、感想お待ちしております。

第七十二話、副官の苦勞と臥龍の思い（前書き）

おかしい、七十話過ぎているのに未だに話が進まない、本来ならば南蛮制圧どころか黄巾党編が佳境を迎えているはずなのに。

まあ、水鏡先生やらコミケやら思い付きで話を進めていたら仕方無いですが。

何故、こんな話を書くかですか？自分でも分かりません・・・。

今回もまったく話が進まないです、ごめんなさい。

第七十二話、副官の苦勞と臥龍の思い

―守―

年の瀬の成都の街を我々公安一課、ようは警備隊が只今警備しております。

申し遅れました、私公安一課で副課長の地位にあります徐栄、真名は守しやおうと申します。

元々は涼州で当時の太守である和様の護衛部隊の隊員でした、数年前のことなんですが和様が天水への視察に行った際に、同行されました今の上司である保様の護衛を勤めさせていただきました。

当時の保様は私のような人間にも腰が低い礼儀正しい子供でしたが、太守の護衛から外された事で“なんでこのクソガキの護衛に”と腐っていました、
今考えたら私も若かったんだなあと反省してしまいます。

一応はキチンと護衛をしていたつもりだったのですが、保様に。

「私の護衛に配置替えされて不貞腐れるなら他行っていただいて結構ですよ、

真面目に仕事している人間に悪影響なだけですから、どうぞご自由に。」

確かに腐っていましたが事実を言われるとやはり頭に来る物で、しかも、

まだ保様が十歳にもなっていない頃でしたから。

実は既に和様の知恵袋として極秘裏に政治に携わっていたなんて知らなくて。

庶民上がりの当時の私からしたら、涼州の神童と呼ばれているとはいえ、

所詮は太守である和様のたんなる子供にすぎないと思っていましたし。

「あー、そうさせてもらうはクソガキ」

うん、殺されますね、太守の息子に喧嘩売っているんですから、ただ当時の保様は私を面白いと思ったんでしょうね。

罰を受ける事なくその日は無事に終わりましたよ、ただ、仲間達は巻き添え食らいたくないと言ったので話しかけてきませんでしたよ。

数日後隴西城に戻った翌日、和様の名前で朝議の席に出てこい呼び出し受けましたよ。

いくら頭に來ていたとはいえやってしまったおしまいだ、どんな罰を受けるのか？

軽くても棒打ち、最悪処刑されるか位思っていましたよ。

朝議の席に何故呼び出しを受けたのか、なんであの糞餓鬼がいるんだと思いましたよ。

それにしても和様の護衛だったが朝議の席に立ち会うなんてはじめての事で、

そこで驚かされましたよ、自分よりも遥かに年下なのに献策立案議論しているのが、

しかも、朝議をまとめるなど全体を仕切っている役割なんて。

朝議が一通り終わった後に、保様が皆に話があると笑顔で言ってきました。

「この前私に向かって臆せずクソガキなんて真正面から言ってきましたよ、呼び出し受けたが昨日の段階で逃げ出せばいいのに堂々と出てきましたよ。」

ねちねちいびるのかと思いましたよ、だが、違いました。

「これくらい胆力あれば平気でしょう、というわけで、皆さん、今日から私の副官になる徐栄さんですので、徐栄さん皆さんに挨拶を。」

あまりの事に理解が追いつかないというか。意味が分からずポカーンとしていましたよ。

「とりあえず私の事をろくに知らないとはいえ糞餓鬼なんて言えるんですから、

私が出す無茶な命令でも逃げ出さないでしょうし、期待しましょう。」

そう言いながらニヤニヤしていましたよ保様は、それを見た、

周りにいた空様や雷様は御愁傷様という感じでいましたよ。

それ以来いつも副官としてそばにいましたが滅茶苦茶でしたよ。

賊退治の際には保様が突撃していったから止めようとしたら、

「臆したか？楽しいぞ、ほら、いくよ守さん。」と突撃始めたり。

護衛隊員達の宿舎に来て皆が気を使って後どう応対すればいいか困っているのに、

空気を読まないで“よし、今から皆酒飲むぞ”と言い始めて、全員と飲み比べをはじめたり。

訓練だと言い始め、命綱も何も無い状態で垂直の壁みたいな山を素手だけで登り始めたり。

副官をずっとやっていて分かったのですが保様は人の形をした悪魔ですよ。

確かに普段は凄く良い上司ですよ、とても頼りになりますし、たまになんだそれはという無茶振りだとか無茶を強要するのが。

普段は本当に良い人なんですよ、私の実力を見てこれ位なら出来るという仕事量を計算して、その量より気持ち多くして挑ませて私に努力するよう促したりとか上手いのが。

ただ問題は、先程言ったとおり私では処理しきれないような無茶な事を言ってくるのが。

今、保様とかと見回りしていますが、これからの事を考えると頭が痛くなるばかりです、

先程、保様と司様に呼び出された際の打ち合わせが酷かった。

人が全くいない部屋に呼び出しを受けると保様と司様が座っていて。

「年末の警備などで忙しい中来ていただきましてありがとうございます、ます守さん、

今回は司君から話が有るという事で呼び出させていただきました、」

保様は丁寧な口調で挨拶してきましたが、二人から漂う空気がいつもと違うのが。

「ちなみに此処で会った会話の内容は決して公言しないでください、益州の警備に関する事、最重要機密がバレるといけませんので。」

警備に関する事で最重要機密、一体何のことだろうか？

ただ司様の口調からこれは大変な重要な事だと思いましたよ。

何かが入った袋を机にスーッと滑らせて私の前に出す司様、袋の中身はどうやら重要な機密に関する物体のようですが。

書類か何かかと思って開けて見てみると服と蝶の仮面が・・・、この前庫見家会場でみたあの仮面ですよ、あの恥ずかしい物体ですよ。

「これをつけて現れてほしいんですよ、今から一連の流れを説明するから。」

私の後ろに回って両肩をおさえつけながら言ってくる保様が恐ろしい。

「役者ですが大通りで盗人が出てきて、その盗人を捕まえよう保さん達が追いかけます、

そこで私、いや華蝶仮面が屋根の上から皆に聞こえる声で叫びます、
「天知る、神知る、我知る、子知る！悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」と。」

盗人役の役者とか皆の視線を華蝶仮面が独占した後に殺陣をやり捕えるんですか、

それならば事件解決で私が華蝶仮面の滑降する必要性が無いじゃないですか

それに合わせて保様率いる警備隊達が現れると、華蝶仮面对警備隊なのか？

「また出たな華蝶仮面、今日こそ貴様をお縄にしてやる！」

これはこれからの騒動を盛り上げる為の保様の前振りか、この先を聞きたくないです。

「これはこれは董擢將軍、捕えようとする相手が違うのではないか？正義の使者である私が盗人を成敗したのに、この私、華蝶仮面を捕らえると言うのですか？」

「やかましい！何が正義か、貴様みたいな怪しい人間を捕らえない

でどうする。」

まあ、華蝶仮面对警備隊という流れになるのならば、これはまあ当然でしょうねえ。

ここで私の後ろに回ったままの保様が私の右肩を左手でポンと叩く、此処で私の出番なのか、聞きたくない、断りたい、逃げ出したい。

台本を読む、どうやら華蝶仮面が現れたと思ったら私が物影に隠れて着替えて現れるのか。

「くっくくっ、正義の使者か、華蝶仮面お前が正義というのか。」

酒家の屋根の上に立って現れるのかよ……。

「何者だ!」

保様と司様がハモる、また息合いですぎだよ。

「私は闇華蝶、華蝶仮面貴様を倒す者だ。」

嫌だ、こんなキャラをやらないといけないなんてやりたくない!

「闇華蝶だと!」

「そうだ貴様華蝶仮面が人に望まれて誕生したように、人の心に悪があるから私も誕生した。」

華蝶仮面が望まれて誕生したなんて聞いた事がないぞ、絶対に司様がやりたくてやっているはずなのに。

「華蝶仮面貴様が正義を歌うのであれば私を止めてみせろ、私の悪を止めて見せろ、

燃えるごみの日に燃えないごみを出したり、コンビニのゴミ箱に家のゴミを捨てたり、

カラオケで歌う順番を無視し割り込みで曲を入れ、お一人様一パツクの卵を何パツクも買ったたり。」

地味だ、なんだその地味な悪は、やっている事が悪質なのは分かるが、

なんて細かいことばかりなんだ、あとカラオケとかってなんなんだ。

「こいつはくせえー！ー！！ゲロ以下のにおいがプンプンするぜ」

保様、何でそんなノリノリなんですか！！

「こういう感じにしたいんだ徐栄副課長、いや闇華蝶。」

保様がまた満面の笑みで言うのがいやすぎる。

「何を言っているんですか、保様！」

「徐栄副課長、私は貴方ならば出来ると思っているから話をしていくんだ。」

保様、闇華蝶なんて出来ないです、出来たとしてもやりたくないんです。

「そうです、徐栄さんでないと駄目なんですよ闇華蝶は、

それに華蝶仮面の正体を知ってしまったから逃げられませんかよ。」

司様、貴方が逃げられないと言いますが、地の果てまでも逃げますよ。

「大体保様がやればいいじゃないですか、さっきからノリノリで台本合わせやってますし。」

此処で負けるわけにはいきません、なんとかこれだけは回避しないと。

「あの時僕にクソガキとか言えたような人間がこんな所で逃げるんですか、

逃げはしませんよねえ、あと、これ業務命令ですから、よろしく。」

汚い、私の一番言われたくない事をいつてくるなんて、やるしかないのか……。

今回だけだということで嫌ですが、我慢して引き受けましたよ。

問題は台本に第一話と書いてあるのが、これからもやらされ続けるのか？

まさか……、はあ、いやだ。

「待ってえー、泥棒よー」

始まってしまった、逃げたいよ。

―朱里―

元々凄く美人なんです。水鏡先生が今日は一段と綺麗で輝いていると学校で話題です、

友達の雛里ちゃんや先輩の徐庶こと綾里先輩とか皆が騒いでいます。

授業中も授業そっちのけでついついひそひそ話でこの話題を。

「朱里ちゃん、先生がまた綺麗になった秘密は分かった？」

「ううん、分からなかった、綾里先輩は？」

「分からないよ、朱里ちゃん、雛里ちゃん。」

ひそひそ話をしていると水鏡先生が私の目の前に立っていました、先生はとても優しいけど、さすがにおしゃべりは怒られると思いました。

「先生はね恋をしたの、恋は女をより美しくしてくれるのよ。」

水鏡先生は遠くを見つめながら語ってくれました。

「はわわ、しよんな秘密が！」

「あわわ、恋でしゅか、うらやましいでしゅ」

「わわわ、でも、先生は八百一と結婚したのでえわ？」

そうでした、綾里先輩の言うように、水鏡先生は男性との結婚をあきらめ、

八百一本と結婚したというのが荊州時代からの水鏡学院での定説でした。

「八百一本、男同士だけの愛では間違いなんだと、あの人は私の心に、体に教えてくれたの、
そう、男同士だけではないの男も女もお尻が大事なのよ、お尻にこそ愛があるということを。」

先生が思い人に教えられたことを語っていますが、私達には刺激が強しゅぎましゅ。

「はわわわ、しゅ、しゅごいでしゅ、お尻に愛があるんでしゅね。」

「あわわわ、朱里ちゃん鼻血がしゅごい事になってましゅ。」

「わわわわ、雛里ちゃんも服が血まみれでしゅよ。」

私達だけでなく、教室にいる皆も先生が教えてくれた事があまりに凄くて、

その内容の深さに感動したのか、鼻血まみれでした。

そんな教室の空気が一変しました。

「お前等真面目に授業をやれー！！」

いきなり教室の扉が開いて、飛び込んできた男性がいました。

バシーン

はわわ、水鏡先生共々叩かれました、叩いた人が誰なのかよく見てみると、

水鏡女学院の経営者である董擢さんがハリセンという武器を片手に仁王立ちで。

董擢さんは怖いから私は正直嫌いですが、水鏡先生が言うには、

「強気な董擢様が部下から逆襲され攻められる下剋上受けがいいのよ。」

と言っていました、私からしたらどう見ても受けではなく攻めにしかみえません。

董擢さんは庫見家の時も女性である水鏡先生の出場の場面で、しかも台詞の途中で、

いきなりドロップキックという飛び蹴りを躊躇いなく喰らわせる怖い人でしゅ。

しかも、益州や涼州での八百一を規制するという、多分、人の形をした悪魔なんです。

「保さん、少しはおさえてあげて」

董擢さんの後から入って来た男性が宥めています、そんな男性をうっとりした顔で眺める水鏡先生。

この人が水鏡先生に愛を覚えてくれた男性なんですね。

後で聞きましたが董擢さんの幼馴染みで涼州で軍師をやっている李儒さんという方で、

李儒さんは大変苦勞されている型のようで、董擢さんの命令で普段は涼州にいる事になり、
愛する水鏡先生と離ればなれという悲しい生活をさせられているようです。

それにしてもすごい人です李儒さんは涼州では州牧の馬騰さんの片腕として、

私や雛里ちゃん、里先輩が目指すような優れた軍師であって。

しかも、軍師なのに服の上からでもわかるたくましい体つきをしていて、

顔だって凄く格好良くて、しかも、私達の八百一への愛も理解をしてくれるなんて。

理想がいます、綾里先輩、雛里ちゃん達皆の憧れる条件をすべてそろえた理想が、

「水鏡先生の未来の旦那様だけど、先生いいなあ理想の王子様が恋人なんて。」

とこの後もずっと話がもりあがっていました。

「司君の本当の邪悪さを知らないから、はあ、水鏡女学院は手遅れか。」

本当に董耀さんは酷い人です、自分が人気が無いからって、水鏡女学院にいる皆を悪く言うなんて・・・。

そうです、庫見家の時も先生の野望の為に頑張ろうとしている私達に向かつて、

「糞餓鬼共がお前等噛みすぎと舌足らずで何言っているか分からねえ！」

あと邪魔するなら生きたまま手足を引きちぎって熊の餌にするぞ、消えろ！！！！」

なんて言って脅してくる鬼のような人なんですから、この人嫌いです。

はあっ益州で今は学んでいます但勤めるならば、涼州で、李儒さんの下で働きたいな、それで八百一本について話したり、一緒にご飯食べたり、そして閨で・・・。

はわわ駄目でしゅ、私は授業中に何を妄想してしまっているんでしゅか、

自分の頭の中に浮かんだ妄想を否定する為頭を思い切り左右に振りました。

教室内を見してみると綾里先輩も雛里ちゃんも同じよう頭を振ってました、

皆、李儒さんに恋してしまっただけでしゅね、友達でも恋に関しては敵です！

ううん、雛里ちゃんとかだけでなく水鏡先生にも負けませんかね！

「お尻……ふふふふ、司様のあれで私のお尻が。」

うつとりしている水鏡先生が本当にうらやましいです、お尻に愛が有るなんて私はまだ小さいですが、もう数年もしたら私だって。

「水鏡女学院は本当に手遅れだ、どうするか廃校しかないのか……」

聞こえませんが、意地悪な人の声なんか。

第七十二話、副官の苦勞と臥龍の思い（後書き）

私の思い付きでいきなりはじまったこの話

毎回無駄に長文な拙い文章で、そんなどうしようもない話なのに、皆さんいつも読んでいただきありがとうございます。

2012年もどうしようもない話ばかりになるでしょうが、皆さん来年もよろしく願います。

それにしても私は大晦日に何を書いているのでしょうか、まったく。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

では、よいお年を。

第七十三話、益州涼州連合の新年会（前書き）

大晦日の夜中から司君、水鏡先生のモデルな友人達と真夜中の初もうでに行ってきたが、見事に風邪をひきまして昨日は頭痛と寒気に泣かされました。

おかげで今日の話は元日のお昼には上げるつもりだったのが今頃になっちゃいました。

風邪を引いたのは多分水鏡先生のモデルになった女性の呪いのせいかな？等と馬鹿な事を思ってしまった。

第七十三話、益州涼州連合の新年会

一保一

「「「「「「新年明けましておめでとうございます」「」「」「」

成都の城内で新年を祝う宴席がただいま開かれております。

益州の責任者である母上や父上といった政治家や軍人だけではなく、月や保育園の子供達とか関係者を皆呼んでの大規模なパーティにしてみました。

席が決まっている堅っ苦しい宴席ではなく立食パーティ形式にしています。

益州に昔からいる真面目なだけの堅い人とかには不評な形式の宴会ですが、初体験の人達にもおおむね好評となっております立食パーティ形式は。

そりゃそうでしょう、席が決まっていない分話をしたい人間だけで集まれるのが、席固定だと嫌な人が隣にあたって最後までなんて罰ゲームもいい所ですから。

まずは母上の挨拶があつてからの乾杯と・・・。

「昨年一年は色々な事がありました但皆さんのおかげで益州の州牧になり、また益州の統治も順調に進んで、今年も昨年のように協力お願いします。」

母上が皆に頭を下げました、州牧である母上が頭を下げた事に対し、皆州牧が頭を下げる事に驚き、いやいやいやという感じになります。

でも母上の言うように皆のおかげでここまでこれたのですから母上だけでなく、今はまだ通過地点に過ぎないとはいえ皆がいるからこそ順調に來れたのですから。

宴席始まりましたが、即無礼講状態ですかなり早い、様子見が有るかと思つたら。

「保、去年は本当に色々あったわよねえ、一番はやはり保に会えた事よ勿論、おかげで私も今や県丞から太守に、そして小蓮の母親に慣れたんですから。」

桃蓮さんが宴席始まった直後でほとんど酒が入っていない状況なのに、右腕に抱きついてきました皆がこちらを見てあらあらという表情をしています。

宴席という事と、桃蓮さんの普段の自由さとかもあるから注意をするでもなく、

若い人達は羨ましいはねえという感じで微笑んで見えています、凄く恥ずかしい。

古くからいるだけのような頭の固い人間ははしたないとちょっと不機嫌で、

訂正します、古くからの家臣とかだけでありませんね、この娘も。

「お母様、宴席始まったばかりで何をしているんですか、はしたないです!!」

相変わらず真面目な蓮華ちゃん、九歳にしてこんなに真面目なのは、やはりこれは普段フリーダムな桃蓮さん、雪蓮ちゃんが反面教師になったからか？

「蓮華は本当に頭が堅いんだからもっと肩の力を抜きなさい若い人だから、

一体誰に似たらそうなるのよ、あと、たもつゝ今私に対して何か失礼な事思っただでしょ？」

相変わらずの桃蓮さんの持つ野生の勘は良い勘しております、あっさり気付かれたよ、

まあ、適当にごまかしておきましょう、そんな怒られはしないでしようが。

蓮華ちゃんの真面目さが母親である桃蓮さんや姉の雪蓮ちゃんの反面教師でないのならば、

父親似という事になるんでしょうねえ、ただ、どうなんでしょうねえ？

どんな旦那さんだったんでしょうねえ、ちょっと気になります。

でも、なんか付き合っている女の昔の男を気にすなんて女々しいので、

変な、よくわからない私の意地ですが聞かない事にしましょう。

「堅殿、蓮華殿が言うように宴席始まってすぐにそれは、はしたないじゃろ。」

祭さんも注意にきましたね、苦勞をかけています祭さんに蓮華ちゃん孫家の常識人に。

「あらゝ、祭もそんな蓮華みたいに真面目な事言っていないで、空いている保の左腕に抱きつけばいいじゃない、奥さんになるんだから。」

それは嬉しい！両手にフラワーですね左右の腕が柔らかな人類の遺産というべき物に、

最高です、ただ、それはまずいです、宴席で興奮してはまずいですから。

それに両腕にしがみつかれますとまだ何も食べていないのでお腹が、もし食べようと思っても食べ辛いので困ってしまうんですが。

やめよう変な事を考えるのは桃蓮さんの事だから心を読んできて、「じゃあ、食べさせてあげるアーンして」なんて事を言いだしてきかねないのが。

二人っきりならまだしも此処ではまずいです。

「保、お酒飲む？それならば口移しで飲ませてあげるはね。」

私の予想よりも斜め上の答えが来たよ、やめてくれ恥ずかしいから、とはいえ二人つきりならばいいですよ、それに嵐さん交えて三人でとかあったので。

「堅殿！いい加減にするんじゃ、あと、お主も自分の女房くらい注意するんじゃ！」

「お義父様、貴方もお母様の夫なんだから注意しなさい！！」

あうっ、祭さんと蓮華ちゃんの怒りがこっちに飛び火してきた、これはまずい。

それにしても呼ばれ方がお義父様ですか、ちょっと嬉しいようなシヨクなような、蓮華ちゃん連れ子になるから義父は間違いないですが歳が6歳しか離れていないのに。

いや違いますよ、蓮華ちゃんにパパって呼ばれたとかそんなんじゃないんですからね。

ちょっと嬉しいのは怒ってきながらも祭さんが左腕に抱きついてくれた、

右腕が桃蓮さんの豊かな物が、左腕には祭さんの豊かな物が、これは天国だ・・・。

「桃蓮何やっているんだよ、祭も文句を言いながらも抱きつくなよ、二人に抱きつかれたら王子様がご飯食べにくいだろ・・・。」

はっ、全感覚神経が左右の腕に注がれていてボーっとしていた、嵐さんの一言で現実に取り戻されましたよ。

おかずを盛った皿を持って嵐さんがやってきました。

それにしても、嵐さん桃蓮さんへ注意する点がちよつと違うよな、嵐さんには出来れば「こっちの腕は俺のもんなんだから」とか言つてほしいなど。

って、ちがいますね、うん、嵐さんの注意が正しいんです。

「保、なにニヤニヤしているのかなあ？空いている腕に嵐に抱きついてもらって、

「こっちの腕は俺のもんなんだから」とか言つてほしかったとかかなあ？」

雪蓮ちゃんがやってきましたが、なんで桃蓮さんといい雪蓮ちゃんといい、

孫家の娘は心に思っている事が分かるような凄まじい勘をしているのよ。

とりあえずごまかしておきましょう。

「雪蓮ちゃん、そんな事思っているわけないでしょう。」

「「「嘘臭いなあ」」」

えっ、今度は孫親子三人に一齐に言われたよ、私そんなに信用ないのか？

私の信用は紙っぺら一枚よりも薄いとかですか、まさか。

こうなったら他の事に話を振ってごまかしましょう、この話だと、野生の勘を持つ二人に追及されたら確実にボロを出してしまいかねませんから。

「そうだそうだ蓮華ちゃんに、雪蓮ちゃんもいるし、ちょうどいいな、

おーい、月々、詠ちゃんとかあと冥琳ちゃんも、子供達用事が有るから皆来て〜。」

ちょっとでかい声を出して会場内にいる子供達を呼び寄せましょう、日本のお正月名物で子供達が一番喜ぶあれをあげましょう。

「ごまかそうとしたはね。」

聞こえませんが、雪蓮ちゃんとかの言葉なんか。

「お義父様、無理矢理話を変えようと・・・。」

蓮華ちゃんまでなんで心が読めるのよ・・・。

「お兄様、どうしました？」

月が詠ちゃんや霞ちゃんとか保育園の仲間と一緒にやってきました。

「急にこんな場所で大きな声なんか出して僕を呼ぶなんて。」

着飾った詠ちゃんがやってきましたが実に可愛らしいです、
保育園にいる子供達の為にお正月用にと服を仕立ててあげて正解でした。

「なんか擢ちゃん、なんか面白い事でもあるのか？」

「霞、服を引っ張るな私は向こうでご飯を食べていたかったのに。」

霞ちゃんがなかなか来ようとしない華雄ちゃんの服を引っ張って連れてきました。

「……………、保おにい、なに？」

「恋殿、口の周りが汚れています、今ふきますね。」

ねねちゃんはいかわらず恋ちゃんの世話を甲斐甲斐しくやっていますね、

歳でいうと蓮ちゃんの方がお姉さんなのですが、お母さんみたいだ。

「ちょっと待って皆、司、少し早いけどあれやるから来い！」

うつとりした眼つきの水鏡先生達と話をしている司君も呼びます、
司君は何をするのか知っているから水鏡女学院の子供達も連れてきました。

「はわわ董擢さんの所ですか、怖いからあまり行きたくないんでしゅが。」

「朱里ちゃん、でも、水鏡先生にも言われたし仕方ないよ。」

「わわわ、一体何のようなんでしょうか、水鏡先生と李儒さんを引き離すなんて。」

はあ、諸葛亮、鳳統、徐庶とか水鏡女学院の教え子には警戒された物です、腐っているのはいけないよと怒っただけで正しい事をしたのですが、和解には時間が。

「そんな事言わないの君達も、保さんに感謝するような事なんだから、

ほら朱里ちゃんほったふくらまさないの、可愛い顔が台無しだよ。

」

司君が優しく女学院の生徒達に語りかけています、生徒達も満更でないようで、

呼ばれた事による警戒していた感じや不機嫌さが少し収まりました。

それにしても司クン着々とロリに向かっていてないか？

まあいいや、司君がペドだろうが法律で規制されているわけではないのですから、

これが現代だったらアグ〇スが飛んできかねない危険性が有りますが。

「はい、じゃあ君達皆に正月の子供の楽しみ、お年玉を、大事に使うんだよ。」

正月の為にわざわざポチ袋を作り、それにお金を入れてお年玉を配る事にしました、

お年玉は中国では压岁钱と言いますが、この時代にはどうやらないようで。

「へう、今年もありがとうございますお兄様、でも、恥ずかしいです。」

月がお年玉をもらって嬉しそうにしている姿があまりに可愛らしいので、

つい頭を撫でてあげたら耳まで真っ赤にして照れていました。

「あ、ありがとう、この服だってくれたのに、今年もお年玉くれるなんて。」

詠ちゃんも照れ臭そうにしながらもお礼を言ってくれました可愛いもんです、

普段はツンなくせに照れる所が、将来は立派なツンデレ僕っ娘軍師になりますね。

「ありがとうな擢ちゃん、今年はいつ貰えるのか楽しみに待ってったんやで。」

霞ちゃんらしいなあ、まあ、でもそんなもんだよなあ、

子供達のお正月の楽しみといったらおせちとかではなくお年玉ですから。

「ありがとう、このお礼は我が命に代えても。」

いけません華雄ちゃん、気持ちであげたお年玉のお礼で命をかけられても、

そんなお返しをされる方が保護者として困ってしまいます。

「ありがとう、兄貴、いつもいつも世話になって。」

翠ちゃんも喜んでくれますね、ただ、いつもいつも世話なんてそんな大層な、

私は15歳と現代なら子供ですが、既に働いていますし子供は大人に甘える物です。

「ご主人様ありがとう、でも、たんぽぽは司君の物だからね。」

たんぽぽちゃんが小悪魔チックな笑みを浮かべながら言ってきます、平気です、女性には困っていませんから、いや、たんぽぽちゃんも可愛いですが。

「おにい、ありがとう、・・・・・・かわりにこれ食べる。」

恋ちゃんがお礼にと、迷いながらも右手に持っていた肉まんをくれました。

そんな渡すの躊躇するなら渡さないでもいいのに、それに肉まんならば、

料理で並んでいるんですから会場に有るのですから。

とはいえ気持ちは嬉しいです、こうやってお返しをくれるんですか

ら。

「毎年ありがとうございます、ただこんなに大盤振る舞いして破算しないんですか？」

ねねちゃん、子供はそんな余計な心配はしないで良いです、それにお年玉配ったくらいで破算するほどお金には困っていません。

涼州時代からの付き合いである子供達は受け取って喜んでいます、一方対照的に後から益州に加わった子達は驚いているようです。

「これなんですか？って、中身お金じゃないですか！」

蓮華ちゃんは驚いているようで、まあ、知らないのも当然でしょう。

「いきなりお小遣いを渡されても貰える物ではないですよ。」

冥琳ちゃんは堅いなあ、まあ、軍師になるよう教えていて、何故それが起きたのかとか物事を疑ってみると教えているからなんです。

「冥琳堅いんだから、保達がくれるというならば何も言わないでもらえばいいのに。」

お年玉を知らない雪蓮ちゃんは冥琳ちゃんとは逆に、お年玉の説明も聞いていないのにあっさりと受け取っていますよ。

蓮華ちゃんや冥琳ちゃんとか益州から新しく加わった子供達に簡単

に説明しましょう。

「今日の席の無いこの宴席とか蓬莱の宴会の様式で、お年玉も同じく蓬莱の行事で、まだ働いていない子供に大人があげる風習だから気にしないで受け取ってね。」

クリスマスやら海外の風習を取り込んで生かしているこの益州ですから、海外のお正月でのイベントの一環と説明すると皆理解して受け取ってくれます。

いや、一部受け取りを躊躇する子供達もいますが。

「あわわ、お小遣いは嬉しいでしゅがこれを受け取ってしまっても平気でしゅか？」

鳳統は受け取りを躊躇していますね、お年玉もらえるなら欲しいが、受け取って良いのか悩んでいる様ですねえ、気にしないで良いのに。

「はわわ、董擢さんは八百一本を弾圧したり怖い人でしゅし、これは私や雛里ちゃんとかを八百一から寝返れという買収のお金ですか？」

諸葛亮は本当に私を目の敵にしているというのか、水鏡先生の洗脳が強すぎるか、何でそんな捻くれた考えをしているんでしょうか。

八百一からはやく足を洗ってくれ若いのに冥府魔道を歩むような人生はどうかと、

いや、水鏡先生みたいにいい歳して腐女子なのも問題なんですが。

「わわわ、欲しいでしゅが、私は子供ではなくすでに立派な淑女ですから、

これを貰ってしまうと私は淑女という矜持が……。」

徐庶ちゃんは迷っているようですねえ、それにしても淑女（笑）ですか？

その年齢で言われましてもねえ、まあ、背伸びしたい年頃なんですよ。

「保、私にも頂戴」

はい、雪蓮ちゃん、何普通に貰っていない事にしようとしているんですか！？

「「雪蓮（姉さん）！！！！」」

あら、蓮華ちゃんと冥琳ちゃんにセットで怒られていますよ。

「痛い、痛い耳がちぎれる、お願い蓮華、冥琳、耳がちぎれちゃう。」

二人に左右から耳を引っ張られて怒られる雪蓮ちゃん。

「やらしい話だけどころかなり多めに入れたから、ただ、お小遣いだけで、

あまり無駄遣いしたら駄目ですよ、皆さん。」

「「「「はい。」」」」」

ちびっ子達がいい返事をしています、まあ、無駄遣いするなど注意をしましたが、

正直なところ心配するのは三名だけです、徐庶、諸葛亮、鳳統の。八百一本なんか買うなよ、そんなの為にあげたんじゃないんだから。

「保様、御苦労様です、それにしても蓬萊とかよく他の国の事を御存じですね。」

何があるのか見に来た海琳さんこと周異さんが聞いてきました。

「そうじゃのう、お主らが着ているその紋付羽織袴とかいうのも蓬萊の正装というし、

お主らはその歳で良く蓬萊だとか他国の事を知っているんじゃない。」

そりゃまあ祭さん、私も司君も前世でそこに三十年以上住んでいましたから、言えませんが。

「蓬萊の文化が独特なので面白いから好きなんですよ。」

適当に答えてごまかしておきましょう。

「ふーんそうなんだ、でも、保の部屋に行ってもそんな本とか見た事ないのに、

普段どうやって知っているのかな？と気になっちゃったり。」

桃蓮さん、普段私の本とか所持品を確認しないのに、何でこういう所だけ気付くんですか。

「僕も保さんも蓬萊に関して調べているんですが、資料が貴重で世の中にまず出回ってはなく、仕方ないので持ち主から借りて急いで読んで返すという事にしてますから部屋に無いんですよ。」

言い訳としては苦しいですが、ナイスアシスト司君。

ただ、誰から借りているのとか聞かれたらまずいので話を他の事にすり替えましょう。

「どんな風にかわっているんですか、よろしければ教えていただきたいのですが？」

よしっ！水仙さんも司君と同じくナイスアシスト、話を変えられる。

「蓬萊の文化って面白いんですよ、たとえばそうですね宗教がごっちゃなんです、信心深いとかではなくいろんな教えの面白そうなものは何でもありませんよ。」

日本神道、仏教、ケルト、キリスト教と一年間の間にいろんな宗教行事が有りますから。

「例えば年が明けると初詣といって神社というその土地古来の神様

が祭られた所に参拝しに、
八月になると今度は別の宗教の教えですが先祖様の霊が里帰りしにやってくるなんて、
十一月になると更に別の宗教行事で、お化けの仮装をしたりして騒ぐお祭りがあつて、
十二月になるとこの前やったクリスマスというまた別の宗教のお祭りをやるんです。」

本当に無茶苦茶だよなあ、これで中華街のある土地だと旧正月もあるし、

結婚式は教会で、葬式が仏教でなんて普通ですからねえ。

皆がへえーという感じで頷いて私の話を聞いています。

「なんや何でもありのチャンポンなんやな、擢ちゃんの女性関係みたいやな。」

ぐはっ、霞ちゃんそれは酷いです、結構ダメージでかいですよ。

私がたまたま愛した女性が一人で無いですし、祭さんや水仙さんに關しては、

私がではなく彼女達の毘にかかったとかでやむを得ないんです。

「はわわ、八百一本の弾圧だけでなく女は何でもありなんて、やはり敵でしゅ。」

この糞餓鬼、諸葛亮だが知らないが殴るぞ。

「あわわ、そうになると私達も貞操の危険が。」

よし、その魔女っ子帽子動くな、私のシャイニングウィザードを喰らえ！！

「わわわ、でも、どんな風にわたしゅが開発されてしまうのか興味ぎゃ。」

餓鬼がそんな期待をするな！司君と違ってペドの要素はないから安心しろ。

「保さん、今凄く僕に対して失礼な事を思ったでしょ！？」

司君、気にしないで良いよ、政略結婚とはいえ君は既にたんぽぽちゃんの夫、君は立派な、とても立派なペドなんですから、まあ手を出してないんでしょうが。

「孔明ちゃんだっけ？そんなに保に身構えないの、それにいずれ貴女も分かるわよ、保みたいなのの方がいいわよ、自分が女に生れて来た喜びを教えてくださいる名人なんだから。」

ブーーーーッ

私だけでなく、周りにいた嵐さん、祭さん、海琳さん、冥琳ちゃんとか皆噴き出したよ。

「お母様、何を言っているんですか！！！！！！！！」

蓮華ちゃんが烈火の如く怒っていますよ、
というか九歳にして分かってしまったのか、耳年増すぎますよ。

「保ってそんな凄いんだあ最初はそんな人のがいいかなあ。」

こら、そこっ義父との関係とか考えるな、親子丼の趣味は無いぞ・
・、たぶん。

「母さん、女の「冥琳はまだ気にしないでいいのよ。」」

海琳さん冥琳ちゃんを止めてくれてありがとう、もう知っているんだろうがまだ早いから。

「お兄様喜びって何で「月は気にしないでいいよ、ほら向こうにご飯取りに行こう。」」

月が尋ねようとしたところを詠ちゃんがごまかして他に連れて行ってくれた、

助かった、とはいえ、あとで怒った詠ちゃんに殴られそう。

「それはなんだ、戦って勝つ事よりも良い物なのか？」

華雄ちゃん、君はそのまま立派なピュアな猪武者でいてくれ、今の君には早すぎる。

「女の喜びかまだ経験していな、って、違う、堅殿お主は何を言っておるんじゃない！」

祭さんそれは今度じっくりねっとりと教えてあげる期待して待つて

いてくれ、
って、違う！！祭さん何食いついているんだ、途中から否定しても
説得力がないぞ。

「た、た、保様、わわわ私にもおおしええええていいいただけ
ますか。」

水仙さん動揺し過ぎ、まずは落ち着け！何言っているんだと怒りな
さい、

頬を赤らめるな、今周りに子供が沢山いるんだぞ・・・。

でも、桃蓮さんや祭さんに負けず劣らずな豊かな物が、私は夫なん
ですから、
それを揉んだり挟んでもらったりって、あかん、トリップする所や
った。

「・・・・・・・・女の喜び？」

恋ちゃん気にしないでくれ、君みたいな純粋な子が知るには早すぎ
る。

「恋殿は気にはいけません忘れてください、このチンコ軍師め。
」

ねねちゃん女の子がチンコとか言わない！あと、悪いのは私ではな
い！

お願いだからちんきゅーきゅーはやめてね、あれ本当に痛いんだから

「ななななにを言っているんだ、この変態エロエロ魔人は！」

翠ちゃん、動揺しているという事は知っているんですね、貴方もまだ知らなくていいのに。

「翠お姉様はまだ当分の間は平気でしょ、ニシシ。」

おいつ、その六歳児、お前はなんで普通に理解していて上から目線で笑っているんだ！

「はわわ、雛里ちゃん、綾里先輩、これは刺激が強しゅぎましゅ。」

鼻血流して手ぬぐいで鼻血を拭うこのガキンチョ、これがあの孔明かよ……、これが孔明なんて知ったら横山光輝が墓から蘇ってきて殴りに来るぞ。

まあ蘇る以前に横山先生産まれるまであと一七〇〇年以上必要だが。

「朱里ちゃんの言うように刺激が、でも水鏡先生も言っていたしお尻に愛がと。」

そっちは更に先の段階だ！！！！おまえはなんてことを言っているんだ、

とりあえず水鏡女学院の閉鎖を検討しなくちゃいけないな、このままでは本当に。

「わわわ、女の喜びという事は、閨で董擢さんの行為を受けて孫堅ちゃんは

“ おおおうっ ち、ちくしょうっ こ、こんなのってあるのオ!! ”
“ 悪魔!! 人殺しっああうっ ” と鳴かされるんでしゅね。 」

おいっ、その徐庶、改めクソガキ、改めマセガキ!!!!!!
お前絶対にゴルゴ13 読んでいるだろ、なんで見えない翼の回の台詞を知っているんだよ。

「 保さん、蓬萊の文化を教えるならば教えないの？ 姫はじめと姫おさめは？ 」

出来るか!!!!!! 司、こんな場所で睦事について語れるか!!

「 王子様、あとで部屋にいったいいか。 」

それはちょーOK!! って、違う!! 嵐さん耳打ちしないでくれ。

つい声出して返事しそうになってしまったじゃないか。

「 保さん、はっ、はじめてなので優しくしてください、お願いします。 」

桜花さん、何を言っているんだ常識人である貴女が乗っかっちゃ駄目なの!!!!!!!!!!

て、まずい、桜花さんがこんな事を言っていると嫌な予感が。

「 桜花お姉ちゃんは私の物だああ!!!!!! 」

やっぱり――――！！！！！！！！！！

梅花ちゃんやめて、落ち着いて！！！！天下の司馬懿が落ち着けえ、このままでは孔明の罠にやられるぞ、お願いだ武器をおさめてくれええ……。

「司様、今夜、司様の愛をこの愚かな雌豚のお尻にいただけですか。」

おいつ、その腐女子貴様は何を話しているんだ！！！！

「水鏡、いや、鈴蘭は本当にお尻でされるのが好きな変態雌豚だな、ふっ、いいよ後で部屋に來な雌豚、お前がやめてほしいと言っても夜通しいじめてやるよ。」

司ああああ、なんでお前はこんな場所でさら々と普通に言葉攻めしているんだよ！

あと水鏡先生も話を聞いて想像して身もだえるな！！！！

はわわ、あわわ、わわわ言いながらお前の教え子が鼻血噴き出してぶっ倒れているぞ！！

あと、今日初めて水鏡先生の真名を聞いたぞ、信頼の証でおいそれとは預けない物だが、雇い主でもあり、それなりに付き合い合って初めてって。

それにしても尻でって、こんどうさんとか無い時代なのに、衛生的でないぞ、

それ以上にローションとか無いのに尻は大丈夫なのか？

いかん、最凶生物水鏡先生に毒されすぎだ、私とした事が。

はあ、新年早々から、元旦でこれかよ、どうするんだ頭が痛いよま
ったく。

第七十三話、益州涼州連合の新年会（後書き）

新年一発目の話から下品ですいませんでした。

とりあえず、読者の皆さん明けましておめでとうございます、
本年も馬鹿な話を書いていきますのでよろしくお願いします。

皆さんのご意見、感想お待ちしております。

第七十四話、スポーツを流行らそう（前書き）

正月早々風邪を引きました、でも、世間は優しくなく連日飲み会でした。

気合いで風邪を治しましたが連日取引先の新年会のはしごで、連日一升は飲んで二日酔いおかげで今年に入って一斗以上飲んでいる駄目な生活です。

今日一緒にいた司君のモデルな友人に笑顔で

「今のままならアル中で死ぬよ」と良い笑顔で言われましたよ。

第七十四話、スポーツを流行らそう

一保一

ドギヤ

「ナイスショットー!!!」

私の声が良い感じに大自然の中で響いております、

今日は成都の外れに作ったゴルフ場で司君と二人でゴルフしてます。

なにに、ゴルフはおっさんの趣味？

おっさん趣味だとしても許してくださいなと、大体元がオッサンですから、

前世で二人とも30歳過ぎこっちでも15年以上と50近いんですから。

それに前世での私は若いが会社役員、司君は大病院の若き後継者、仕事の付き合いとしてゴルフは趣味として必須なんですよ。

まあ二人共肩書が有る人間ではあったのでゴルフでも接待ゴルフをでなく済みましたが、

まあ接待ゴルフをする必要もない下手っぴでしたから接待ゴルフになってましたが。

二人共ハンデ20とかでしたから、ハンデシングルのかだと絵になるんですが・・・。

それにしても私は誰に向かって話をしているんでしょうか？

まあ、これも一つのお約束という奴ですね。

それにしても司君のドライバーショットが良い音していましたねえ、球が飛ぶ時の音がギャンギャンギーンと鳴ったらプロゴルファー猿ですよ。

赤と緑の島の服を着させて、裸足でやらせますか、今日負けた方の人間は次回のゴルフの時に罰ゲームでやらせてみるか。

まあ今日1ラウンド目は買っているし調子が良いから罰ゲームを賭けてみるか。

あとは罰ゲームだったらなんだろうプロゴルファー猿ということで、旗つつみ、岩返し、もず落としに延々と挑戦させるというのも面白そうだな、

問題は成功するまでに何年かかるか分からないのがなあ。

閑話休題

なんでいきなりゴルフ？とか思うでしょうねえ、あとは道具は？とか。

道具は簡単です自作です、現代のゴルフボールとは違いますが作りましたよ、

初期のゴルフボールであるフェザリーボールを、革にガチヨウの羽毛を詰めてと。

ゴルフクラブは気合いの木削り出しやっている事はまさにプロゴルフアー猿の世界です。

現代の当てれば250とか簡単に飛ぶようなドライバーや、飛び過ぎるボール、

なんかと違いますから粗末ですよ、全然飛ばない飛ばない。

まあ本物を望むならばあの部屋に行って神に貰えばいいんですが、とりあえずゴルフはそれほど好きではないから遊び半分で自作ですよ。

ゴルフコースも先程作ったと言いましたが、じっさいは遊びですから、作ったと言ってもほとんど何もしていないんですよ。

何も無いだっ広い土地に適当に芝を植えて穴掘ってグリーンとか作ったくらいで、

基本は何もないような大自然の中での打ちっぱなしみたいなもんですよ。

池ポチャ？甘い、川にですからミスるとボールがドンブラコードンブラコ、

桃太郎での桃みたいに流されてしまいますから大変ですよ。

先程飛ばない飛ばないと言いましたが、実はそれ間違いいでもあるんですよ、

現代のゴルフの基準で言うと、さすが外史の世界、体力とか狂ってますし飛ぶ事飛ぶ事。

前にゴルフ経験の無い桃蓮さんにやらせてみましたよ、しかも、しよっぱい道具ですよ、

それで普通に300ヤード超えですから、何その飛距離と。

はい、私がやると軽く500ヤード超えます、プロであり得ない飛距離が。

すいません、こんな原始的な道具で初心者の桃蓮さんでウッズ並みの飛距離ですから、

現代の道具を使ったらどれくらい飛ぶ事やらヤードではなくkmとか出たりして。

飛距離だけですが、まさか私があっさりとウッズ超えちゃいましたよ、

ウッズも聞いたら泣くでしょうねえこんな原始時代みたいな道具で負けるなんてと。

ウッズに勝てる事なんて何一つないのに、こんな所で勝ってしまうとは。

「平氣平氣、女性關係で将来ウツズに勝ちますよ、保さんは。」

司君が何やら大変失礼な事を叫んできましたよ。

「いきなり出てきて心の声とかを読むな、あと、私はそんな女性關係は酷くないぞ!!!」

「またまたー、16歳で孫堅こと桃蓮さん、？融こと嵐さん、張任こと水仙さん、

黄蓋こと祭さんの4人の妻、更に馬超こと翠ちゃん、司馬朗こと桜花さんと二人の婚約者、

三国志の有名人を保さんが死ぬまでにどれくらいはべらかすんですか、女の敵なんだから。」

女の敵って、相思相愛になんだから良いじゃないか！

いやまあ、祭さんと水仙さんにはハメられましたよ。

酔った勢いでやってしまったと反省

←

責任をとるから結婚しよう、二人がニヤリ、気付かない私

←

後々に閨で初めてだったと、あの時実は罨でやる事やっていなかったと、

でも、此処でやっちゃったから返品ききません。

色々と反省して落ち込みましたよ、こんな一連の流れにええ……

「お前に言われたくないぞ！ 淳于瓊こと紅さん、馬騰ことたんぽぽちゃんを妻に、

水鏡先生も恋人だろ、その流れで徐庶、諸葛亮、鳳統もいずれはだろ！

その組み合わせは何？ 君はロリな王国でも作るの？」

「ふざけるな！ たんぽぽちゃんのあの結婚は無理矢理な政略結婚で籍を入れただけだって、

俺が水鏡女学院にいるあのちびっ子共に興味などない！！

あと、水鏡先生は恋人でも何でもなく、単に肉d「お前が女性の敵だ！！！！！！」

水鏡先生女の幸せとか言っていたが……不憫だ、

まあ司君のことだからなんとかいいながらも面倒見るんだろうな。

ふふ、あの邪悪な司君が何故かちっこい子供にやけに好かれるのが、司君がロリ王国を建国するとかいう野望があったならよかったんでしょうが。

徐庶とか水鏡女学院の教え子達の司への想いって憧れに過ぎないしな、

しかも、その憧れが格好良いとかではなく八百一への理解が有るとかなのが。

司君前世で男もいけたなんて話したら大変な事になるだろうな、あのガキンチョ共は、まっ転生しただとか前世なんて話せるわけないから知る事はないんでしょうが。

そんな下らない事とかを考えていると司君が私に話しかけてきました。

「保さん、それにしてもこの時代に始めるスポーツ、ゴルフにして正解でしたね？」

ゴルフが根付いてほしいですよ、いろいろと紆余曲折が有ったので。

「正解というか、これしか残らなかったとしか言えないよ……。」

私のコメントに対して、司君がしみじみと答えてきましたよ。

「野球、サッカーとか大惨事でしたからねえ……。」

本当に大惨事でしたよ野球といいサッカーといい、はじめた頃はいですが、あまりにもあまりにもな状態になったので禁止にしてみました

からねえ。

何が有ったのか説明しますと。

最初は自分達の率いている部隊の訓練の後のレクリエーションで、野球とサッカーを教えたんですよ、海外には野球や蹴球という競技が有るんだぞと。

野球を始める時にまあ木を削ってバットを作って適当に球を作って始めましたよ。

最初はよかったんだ、皆が楽しんでいたんだ・・・。

武将達が参加するようになってからひどくなってきたんだ。

桃蓮さん、祭さん、紫苑さん、桔梗さん、水仙さんとかが安打を打つ、

武将が走る、皆さん大変豊かな物をお持ちだ、走る度にバインバインバインと。

まだ女に飢えている兵達は皆守備をしないですからね立ち止まってガン見ですよ、

ハッと兵達が気付いた頃にはランニングホームランですから。

そのあとも大半の選手が中腰になったまままで試合が進まないなんて事も。

司君がその時にわざと言うんですよ。

「でも、幾ら魅力的な乳で憧れてもあの乳のほとんどが保さんの物だから」

いやまあ確かに私の妻が多いですよ、紫苑さんにも良いと思われているみたいですが、

でも「氏ねじゃなく死ね!」「モゲロ」「月のない晩は気をつけろよ」とか

敵味方とか関係なく一斉に言われましたよ、俺だけ明らかにビーンボールきますし。

ビーンボールくらい避けるの簡単ですが、楽しい野球なはずが、グラウンドが瘴気と言いまししょうかモテないオーラに包まれて楽しくない。

あとは、桃蓮、雪蓮の孫親娘は存在が反則過ぎる、分かっちゃいるが何あの凄まじい勘は!!

こっちは綿密に押さえる為に考えて投球しているんですよ。

野村監督に解説して貰える程の配球ですよ、最後は外角に逃げるスライダーで三振だ!

くらい考えて投げますよ、でも、桃蓮さんや雪蓮さんにはそんなの関係無いですからね。

外角低めパカーン、内角高めパカーン、ど真ん中パカーン、何処でも打たれる。

「此処かな？」 たったそれだけの勘だけで、こちらの配球とか一切関係無し。

打率8割超えてなに！？ タイ・カップ、シューレスジョー、イチローどころでないのが。

野村監督が聞いたら泣くぞ、といったくなる持ち前の勘が。

あと皆化け物過ぎ、ホームランが200m以上が普通にですよ、場外弾が当たり前な野球って球無くしやすいから大変ですよ・・・。

野球が一気に廃れた事件が。

ピッチャー私で保育園の子供達と試合した時ですよ。

オーガ超えの体力の私が全力で投げましたよ160km？ 大したことないね

多分ですが190、いや200いったか？ みたいな速球ですよ、対する打者は焰耶ちゃんですよ、子供相手に全力投球大人げないですが。

焰耶ちゃんが全力で鈍砕骨を振りぬく

グワラゴラガッキーーーン

岩鬼のフルスイングみたいな音がしましたよ、

球は弾丸ライナーでセンターへ、センターを守っていたのは光ですよ、

ピッチャーマウンドに立っている私の耳に離れているセンターの音が聞こえましたよ。

ドグシャアアー！！！！！

光の顔面、しかも、人体の急所である人中に凄い音を立てめり込む球、

センターの光の鼻が、というか顔面骨折やら前歯が何本もへし折れる瞬間の音が聞こえるとは。

懸命の治療で一命を取り留めましたが、危うく試合で死者を出すところでしたよ。

死んでもおかしくないどころの怪我でしたよ。

あれ以来野球を禁止にするまでもなく試合を控えよう、さすがにあれは危険どころの話ではないという感じになってしまつて。

じゃあ野球が無理ならばサッカーだ！と最初は思いましたよ、悲劇は続くね。

三国志の時代にサッカーボールはないですが、毬でいいやとそれだけで簡単だ、

最初はよかったんですよ、野球よりもすごい早さで広まって盛り上がっていたんですよ。

ただ部隊の兵達だけでやっていて盛り上がるのは良かったんですよ。

問題は盛り上がり過ぎたのと広まり過ぎたのが武将達の参加するようになると・・・・・・。

野球と同じですよ悲劇は待っていましたよ。

最初は私や司君の部隊くらいだけで和気あいあいでしたよ、いろんな部隊に広まりましたよ、どうせなら対抗戦だと。

最初はよかった、だんだん部隊の意地がかかってきました。

馬騰さんこと琅？、韓遂こと雷さんの部隊とか元々ライバル関係の部隊の試合、

紅さんと李肅こと薊さんの嫁姑対決とか、ギスギスしてくる試合が。

ギスギスどころじゃないですね、私は嘘をつきました。

一触即発、地雷原でタップダンス、火薬庫で花火大会状態でしたよ、そこでラフプレーなんかあったら試合が即少林サッカー状態に。

しかも、参加しているのがそこの一般兵だけなら良いですよ、私を含めて三国志時代の猛将達が参加するんですから。

そんな猛将達が蹴った球が砲弾みたいになって飛んでくるんですよ。

ハッキリ言います石崎君の顔面ブロックなんか意味ないです、真似してやった日には首から上が吹き飛びかねません。

ちなみに保育園にいたちびっ子チームなんか凶悪どころじゃなかったですよ、

最年長が12歳の雪蓮ちゃんで平均年齢が10歳いかないですよ。

でも、メンバーが三国志の呂布、張遼、華雄、馬超、孫策とかがいるんですから、

保育園の警備兵達との試合をやらせたんですよ武将はいないチームでしたよ。

酷かった、試合という名の虐殺。

いくら三国志最強の呂布だとはいえ恋ちゃんだってまだ10歳にもならない子供ですよ、

恋ちゃんの蹴った球に大人達が吹き飛ばされピクピクして救護室送りとか。

ねねちゃんは「レッドカード何それ？食べられるの？」とでも言わ

んばかりに、
平気で対戦相手にちんきゅーきつくを普通にしていたり。

「毬は友達痛くはないよ!」と某サッカー漫画のキャラのような事を言う、
詠ちゃんが「じゃあなんで友達を蹴るのよ!!!!!!」と突っ込んできたり、
冥琳ちゃんに「毬を友達と言わないといけない程ぼっちなんて」と心配されたり。

最後はPKになったが酷かった、あれはリンチですよ。

前に言いましたが顔面ブロックしたら首が吹き飛びかねない、
そんなのを5回も相手しないといけないオーガ超える力が有るとはいえさすがに怖い。

蹴られたボールをキャッチしようとしたらボールごとゴールネットに突き刺さる、
じゃあパンチングだ!、気をつけないと手首からゴキリと嫌な音が聞こえる。

あと野球の時と同じく、桃蓮さんやら祭さんとかが試合に出ると、
ドリブルをする度にバインバインバインと大変ご立派な物がお揺れになって、
それを見ている観客や選手達が中腰になっている、そして野球と同じく、

何故だか私が部下達から呪詛の言葉を浴びる事になる。

結局サッカーも駄目だとなりましたよ、それでみんなで色々考えましたよ。

ドッジボール、熱血高校ドッジボール部みたいになって重傷患者続出、却下

ラグビー、野球やサッカーでこうなるのならば普通になるわけがない、

男塾名物『羅惧美偉』並みの危険な競技に、却下。

アイスホッケー、氷が無い時期は無理だし道具の準備が大変だと、あと、あの装備がないとなると相当激しいスポーツだから死ぬとなり、却下。

相撲、うん、色々と却下。

プロレス、これも際限なくなりそうで駄目、凶器攻撃も本当に凶器になるのが、
タイガー・ジェット・シンがサーベル持ってもグリップで殴るが、

この世界の人間ならば確実に空気を読まずに切っ先で刺してくるか、却下。

ハンマー投げ、回転が凄過ぎて人間がちよつと空飛んだ……、却下。

水泳、烈海王も出来たのならばオーガ超えのチートスペックを持つ私ならば、頑張ったら水の上を走れた泳ぐよりも走った方が早いとなってしまう。って却下。

SASUKE、部下達に説明して作らせたらコースがなんか地獄みたいに、落ちると下が針の山とか沸騰したお湯とか命の危険が有り過ぎる。で却下。

ちなみに地獄みたいなコースにしたのは司君ですね、危ない過ぎるのでボコりました。

フィギュアスケート、冬にやってみたがスピしたら氷を削るどころか、埋まっていた、人間ドリルになってしまったのでこれも却下。

結局、この外史の世界で残ったのはゴルフになったが、ただゴルフ

もまた。

司君が呉竜府と名乗り始めるとか男塾的な事を言っていたようなのはきのせいだろうか・・・。

あと、このあと賭けで負けて次回のラウンドでプロゴルファー猿の真似やらされる事になるとは。

第七十四話、スポーツを流行らそう（後書き）

司君のモデルとなった人物と今日ゴルフに行ったので、書いた訳じゃないですよ今日の話は・・・。

いやまあ、たんに恋姫の世界に現代スポーツあったら、どうなるかなあ？と思ったただけなんですよ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5697x/>

恋姫世界で二人旅

2012年1月13日01時46分発行